



大南北全集

第五巻

文學博士坪内逍遙
渥美清太郎　共編

大南北全集

第五卷

東京　春陽堂刊行

大南北全集 第五巻 目次

解説及年表……

口絵解説……

秋狂言 當穐八幡祭（できあきやはにまつり）……自一頁至二四六頁

風鈴蕎麥屋の娘殺し

鴻野家騷動と双蝶々

顔見世狂言 四天王櫓礎（してんわうやぐらのいしずゑ）……自二四七頁自六四五頁

三日月お仙の切見世

良門伊賀壽と新山姥

彌生狂言 監話水滸傳（じだいせわすゐこでん）……自六四六頁至七九五頁

日本駄右衛門の謀叛

玉島庄兵衛と奴小萬

挿繪目次

◎四天王櫓礎（切見世の場錦繪。木版色刷り。初代豐國筆）……卷頭
◎當穐八幡祭（駐春亭の場錦繪。コロタイプ。歌川國貞筆）……一一三頁の前
◎當穐八幡祭（小塚原の場錦繪。コロタイプ。歌川國貞筆）……一七七頁の前
◎當穐八幡祭（駕籠屋の場錦繪。コロタイプ。初代豐國筆）……二七三頁の前
◎當穐八幡祭（駕籠屋の場錦繪。コロタイプ。初代豐國筆）……三〇五頁の前
◎四天王櫓礎（三人賊の場錦繪。コロタイプ。初代豐國筆）……三五三頁の前
◎四天王櫓礎（切見世の場錦繪。コロタイプ。歌川國貞筆）……四三三頁の前
◎盬話水滸傳（阿波獄の場錦繪。コロタイプ。初代豐國筆）……六〇三頁の前
◎當穐八幡祭（再演繪番附全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎盬話水滸傳（初演繪番附全部。亞鉛凸版）……本文挿入

挿繪解説

■巻頭に挿入した木版は、「四天王櫓礎」初演の折發行された三枚續き、初代豐國筆の錦繪で、四建目、「香堂前切り見世の場」である。道具も役者も、衣裳も、舞臺其まゝのスケッチであると同時に、その頃盛つた切り見世の風俗其まゝを直寫したやうなものである。芝居と風俗、どちらから見ても、面白い錦繪である。

■「當穐八幡祭」の繪のうち、「駐春亭」と「小塚原」の二種は、天保度の再演の時の發行で、五渡亭國貞が描いたもの。「駕籠屋」の二種は、初演の折ので、初代豐國の筆である。

■「四天王櫓礎」の、初めの方へ入れた、三人の泥坊の錦繪は、この狂言が開場になる前に發行されたもので、本筋とは全然違つてゐる。解説にも記して置いた通り、この時の顔見世興行は、經濟的關係から開場がおくれたので、狂言も、最初の豫定とは大分狂つたらしい。恐らくこの三人泥坊の趣向が最初立案されて、錦繪にまでなつた時分に、事故が起つて開場が遅れ、たうとうこの錦繪も廢止されてしまつたものらしい。初代の筆である。

■同じく「切り見世の場」の錦繪は、天保八年中村座の顔見世に演じた時の發行で、岩井粂若のお仙と、四世坂東三津五郎の源六である。筆者は五渡亭國貞。

■「殿話水滸傳」の幸四郎の錦繪は、序幕へ現はれる二本駄右衞門で、初代豐國筆の一人立ち。

■繪番附は、「四天王櫓礎」は發見されなかつたので收錄出來なかつた。「當穐八幡祭」のは再演の折ので、「殿話水滸傳」は初演のである。共にその幕々へ挿入して置いた。


火の用心


火の用心
火之用心
火のようじん
坂東三津五郎
坂東大吉



解說及年表

當穐八幡祭

文化七年のこと、江戸の或る町で、夜商ひの風鈴蕎麥屋が、良家の娘を駕籠屋へ連れ込んで、金を奪つた上に慘殺したといふ、血なまぐさい事件が起つて、評判になつた。この狂言は、それを骨子にした際物式のお家世話狂言で、同じ文化七年の八月、市村座で通し狂言に上演された。南北がまだ勝俵藏の時代、五十六歳の折の作である。

南北は、この三面記事を脚色するに際して、作者道の慣例に依り、書替への法を用ひた。世界を「双蝶々曲輪日記」にしたのは、駕籠屋が使へるからである。さうして、甚兵衛だのお照だのといふ役名に隱れて、巧みに事件を暗示した。南北の際物當込みの狂言は、大抵成功してゐる。幸四郎三津五郎半四郎の三頭目に、松助田之助團十郎といふ、若手揃ひの大一座だつた爲でもあらうが、この當込みも又利いて、當時としては記錄を破る大入りを占めた。大入りの芝居は、狂言の全部を演じないのが例である。この時も、最初は「駕籠屋」の場までしか演らず、九月十五日になつてから、「道行」と「捕り物」の場

とを出した。少し客足の落ちかける時分には、この新幕で又客を呼んで、十月まで打ち續けた。「道行」に出る女夫團子も、當時市中に流行した行商の當込みで、これが頗る客の氣に入つたのであつた。

通し狂言だけに、全部を生世話にせず、序と終りにお家を附けて、結構を大きくした手法に、南北式の巧みさがある。序の毒藥事件は、越後騷動を匂はせたものらしい。「侍塚の場」では三津五郎が兄弟の早替りを演じ分けて、先づこれが第一の評判になつた。幸四郎が、丈左衞門のお家の敵役と、甚兵衞の世話の敵役を仕分けたのも、例の如き喝采を得た。二幕目は時候がら、吉原の俄を見せ、「駐春亭の場」に役者の濡れ事を添へたのは、女の見物客の弱點を摑んだ趣向である。「小塚ッ原」のだんまりの凄味、「山崎屋」で與次兵衞の實事、いづれも役者を實に巧く使ひこなしてゐる。「駕籠屋の場」は全幕中の山で、爰では半四郎が娘と年增の早替りに、見物の目を驚かした。大詰の「捕り物」も、短かい幕たが、なかなかに凄味のある場である。

初演の折の役割は、左の通りであつた。

山崎屋與次兵衞（助高屋高助）倉岡丈左衞門。橋本次部右衞門。駕籠の甚兵衞（三ヤク五世松本幸四郎）南與兵衞。南方十次兵衞、月見の三五郎（三ヤク三世坂東三津五郎）次部右衞門娘、お照。奥女中關屋實ハ甚兵衞妹お早。三五郎女房お石。（三ヤク五世岩井半四郎）角力年寄り、幻竹右衞門（尾上松緑）山崎屋與五郎。野手の三

（二ヤク二世尾上松助）下駄の市實ハ三原傳蔵（七世市川團十郎）藤屋吾妻（二世澤村田之助）鴻野後室、繼橋御前。藝者、都實ハ甚兵衞女房お賤（二ヤク市川團之助）山崎屋浄閑。鷲の森の長吉（二ヤク澤村四郎五郎）荒川左近。米屋仁右衞門（二ヤク市川門三郎）倉岡新三郎。富蔦佐渡七（二ヤク花井才三郎）三原有右衞門（嵐新平）山崎屋手代、權九郎（市川宗三郎）嫩巫女、小松（岩井松之助）孝法印、錢坊（坂東簑助）

第二回目の上演は、天保五年七月の森田座で、名題は初演通り。

與五郎、十次兵衞、與兵衞（三ヤク澤村訥升）繼橋御前、お賤（二ヤク小佐川常世）浄閑、長吉（二ヤク大谷友右衞門）權九郎（惣領甚六）有右衞門（市川市女）彦助、佐渡七（二ヤク關歌助）新三郎、下駄の市（二ヤク市川清十郎）吾妻（坂東玉三郎）左近、野手の三、次部右衞門（三ヤク嵐冠十郎）お照、お早、お石（三ヤク六世岩井半四郎）丈左衞門、甚兵衞、與次兵衞、三五郎（四ヤク四世坂東三津五郎）孝法印（森田勘彌）嫩巫子（坂東簑助）

第三回目の上演は、弘化二年五月の河原崎座で、名題は「菖蒲戀山崎（はなあやめこひのやまざき）」と直した。

與次兵衞、甚兵衞（二ヤク三世尾上菊五郎）丈左衞門、次部右衞門、幻長五郎、（三ヤク嵐吉三郎）繼橋御前、お賤（二ヤク小佐川常世）新三郎（尾上松助）權九郎（大谷廣右衞門）佐渡七、次兵衞（二ヤク澤村宇十郎）十次兵衞、與兵衞、下駄の市、三五郎（四ヤク澤村宗十郎）有右衞門（成田屋七右衞門）仁右衞門（坂東鶴十郎）吾妻

（市川新車）淨閑、長吉（二ヤク大谷友右衞門）お早、お照、お石（三ヤク尾上榮三郎）左近、野手の三、與五郎（三ヤク八世市川團十郎）

第四囘目の上演は、嘉永六年九月の中村座で、名題は初演通り。

與次兵衞、甚兵衞、丈左衞門（三ヤク市川小團次）左近、下駄の市（二ヤク市川高麗藏）淨閑（中山市藏）おくめ、お賤（二ヤク吾妻市之丞）長吉（中村鶴藏）仁右衞門（成田屋宗兵衞）權九郎（嵐音八）妙貞、有右衞門（二ヤク關歌助）吾妻（中村歌女之丞）新三郎、與五郎（二ヤク市川猿藏）繼橋御前（中村歌六）お早、お照、お石（三ヤク尾上梅幸）十次兵衞、與兵衞、次部右衞門、三五郎（四ヤク八世市川團十郎）

第五囘目は、明治二年七月、大阪筑後の芝居で、「豐穐戀山崎（とよあきこひのやまざき）」といふ名題で演じた。大阪で、しかも明治になつてから上演したのは珍らしい。

十次兵衞、與兵衞（二ヤク中村宗十郎）甚兵衞（實川延若）おくめ、お賤（二ヤク實川若之丞）與次兵衞（中村芝藏）權九郎（市川團次）吾妻、お照（二ヤク嵐三右衞門）長吉、次部右衞門（二ヤク中村七賀助）與五郎、新三郎、野手の三（三ヤク中村翫雀）下駄の市（實川愛之助）左近（中村宇多之助）有右衞門（實川鴈若）丈左衞門（大谷廣右衞門）淨閑（嵐義三郎）お早（中村慶女）繼橋御前（大谷友三郎）

四天王櫓礎

文化七年、市村座の顏見世狂言である。この年、市村座は立派な役者を澤山抱へて置きながら、金の問題で顏見世の興行が出來ず、困つてゐた所へ急に金主が附いたので、十一月も半になつてから、やうやく開場する事が出來た。その時の狂言なのである。さうした急な場合だつたので、新作とても全部は間に合はず、以前からある「三日月お仙」と「山姥」とを持つて來て、それへ新作を附けたのである。尤も、「三日月お仙」とて、舊來の脚本を其まゝ使用したのではなく、その時の役者と世界とに應じて、南北が筆を加へ、新らしいものにしたのである。「山姥」も、詞章は可成り訂正されてゐるし、その前曲は全く新作である。つまり、新作の狂言の中へ、三日月お仙を使つたといつてもいゝのである。

「三日月お仙」は、寛政四年、河原崎座の顏見世狂言「大船盛鰕顏見世」の五建目、稻荷堂切り見世の場へ出たのが初めてゞある。吉原や、その外の岡場所は、舞臺へ使つた事は度々あるが、まだ局女郎の切り見世を、芝居に見せた事はなかつた。この時、初めての試みが、大成功をしたのであつた。作者は切り見世へ度々行つて、すつかりその風俗景況を活寫した。切り見世の一幕は、昔の芝居には珍らしい、ろくに筋らしい筋は無く、たゞスケッチ劇として、面白い場に出來てゐる。「三日月お仙に半四郎、部屋

頭磯右衛門に和田右衛門にて、いろ〳〵とをかしき事あつて、鰕蔵、ゐびざこの十といふきほひにて、お仙と濡れ事あつて、次にお仙を駕籠に乘せて連れて行かれ、義貞の館へ追ひかけ來り、親の由緒あればとて、侍ひに取立てられ、亘新左衛門と名乘り、夫婦喜び歸る仕打、外に眞似手はないと評判なり」と歌舞伎年代記に出てゐる通りで、「四天王楠礎」と大して變りのない事が解る。太平記の世界が、前太平記になり、ゐびざこの十が三田の源六と變つたまでゞある。半四郎の「内侍でござる」といふセリフは有名なものであるが、初演の時はお仙が勾當の内侍に化けて行くので、「内侍でござる」のセリフも出來たのである。この時、お仙を勤めた四世岩井半四郎は」まだ切り見世を見た事がないといふので、作者や表方の者と一緒に、巧みに假裝して三田三角の切り見世へ紛れこみ、すつかり見學して、歸らうとしたところ、既に路地番に見顯はされてゐて、金を請求されたといふ話しがある。」切り見世といへば勿論可成り下等な花柳界だつた。半四郎などが行く場所ではなく、見學の事までも、表沙汰には出來ない程だつたので、うまく金を使つて口止めをして置いた。半四郎はこの僅かな時間の見學で、すつかり局女郎の風俗姿態を覺えこみ、その通りを舞臺に見せたので、非常に珍らしく、岩井家の藝となるまでの喝采を得たのである。このとき、路地番の次郎を演じたのは坂東善次であつたが、これが又非常な好評だつたので、後に、いつも三日月お仙が出る時は、路地番は善次の持ち役となり、その子の善次まで傳

はつて、親子二代で度々路地番を勤めた。その四代目の當り藝を、息子の五代目半四郎に勤めさせたところ、四代目以上の賞賛を得て、お仙の役は、いよ〳〵岩井の家で重要な役になつてしまつたのである。

同じ年の「當穐八幡祭」に、わづか下駄の市一役を勤めてゐた七世市川團十郎が、この狂言では座頭に匹敵するやうな大役を演じてゐるのは、この時に初めて名題に上つたからである。役々いづれも評よろしくて、後年出世の礎を築いたのである。

この時の役割は左の通りであつた。

虛無僧、當山實ハ相馬六郎公連。平井保昌（二ヤク助高屋高助）室津權之頭時純實ハ伊賀壽太郎成信。栗の木又次。相馬太郎良門。山樵、峯藏實ハ碓氷貞光（四ヤク五世松本幸四郎）源の賴光。魚賣り、三田の源六後ニ鋳田源太廣綱。二の瀨の源六。渡邊源次綱。足柄山の山姥（五ヤク三世坂東三津五郎）切り見世女郎、三日月お仙。粧姫實ハ葵由甚娘、桝花女。怪童丸後ニ坂田公時（三ヤク五世岩井半四郎）女馬士、小芳實ハ粧姫（山下八尾藏）市原野の鬼同丸後ニ櫻町中納言行長實ハ源賴信。源賴信實ハ今張蔭行。卜部の季武（三ヤク七世市川團十郎）傾城、若松實ハ純友娘、玉琴（中村里好）奴郡平後ニ物部平太有風。旅籠屋の主、血煙お熊實ハ良門乳人七瀨（二ヤク澤村四郎五郎）和泉式部。源六女房、お峯（二ヤク市川團之助）部屋頭、伴右衛門。馬士、皮肉の仁藏（二ヤク市川宗三郎）源六姉、阜枝（三條浪江）路地番、次郎。願人、善好（二ヤク坂東善次）保昌妹、伏屋（岩井梅藏、

大宅太郎光遠（嵐新平）敦賀郡司僞時（荒木與次兵衛）泥龜の洞九郎（中村次郎三）堤の彌三（市川辨藏）小姓主水（岩井松之助）同、左門之助（坂東簑助）奴、國平（花井才三郎）奴、伊與助實ハ藤原十太丸（助高屋金五郎）

三日月お仙の件は、この後、文化十四年市村座の顔見世「戻橋背御攝」（本集收錄）に、岩井粂三郎（六世半四郎）が勤め、鰕ざこの十は七世團十郎であつた。天保三年河原崎座の顔見世「賴有御攝綱」では、岩井杜若のお仙に、鰕ざこの十が市川海老藏、部屋頭は大谷友右衛門が勤めた。天保八年中村座の顔見世「勸善懲惡四天王顔鏡」では、岩井紫若（後七世半四郎）のお仙、四世阪東三津五郎の三田の源、中村芝十郎の部屋頭で出した。弘化四年中村座の顔見世「源家八代恵剛者」に、阪東しうかのお仙に、八世團十郎が鰕ざこの十、關歌助の部屋頭で勤めたのが、三日月お仙の最終であつた。

盬話水滸傳

文化八年三月、市村座に上演したお家狂言で、南北としては毛色の變つた、大阪式の筋立てになつてゐる。

二本駄右衛門は、日本左衛門といふ盜賊の事を脚色したものである。日本左衛門は延享頃に實在した

盜賊で、本名を濱島庄兵衛といひ、もと京都の公卿に勤めてゐた侍ひであつたが、浪人しての活計に迫つて賊を働らき、手下も大勢持つてゐた。東海道の各地を隨分荒したので、詮議が嚴しくなり、身の置き所が無くなつたので、京都町奉行の永井丹波守へ自首して出た。丹波守から江戸町奉行能勢肥後守に引渡され、延享四年三月十一日、遠州見附宿で獄門に行はれたのである。手下には、中村左膳、赤地法印、なぞといふのもあつた。この狂言には、この二人の名も使はれてゐる。

「實事譚」には、「世にその名を傳ふる奴の小萬は、嘗て日本左衛門と馴れ染めし事あり、小萬は大阪の産にて、氏は三好、本名をゆきと呼びしが、年まだ若き十六七の頃、思ふ男に添はれぬ事ありしより、自ら男嫌ひと稱して他に嫁するを欲せず、尼となり、正慶と號して難波村に住めり。常に大阪市中を通行する時、顏に墨を塗りし上に、白粧を粧ひ、ことさらに不思議の風體をなして人に嫁するを避けたり。何ゆゑにや時の人は奴の小萬と呼べり。程經て日本左衛門浪人となり、大阪に來り、流落依る所なきを見て小萬は深くこれを憐れみ、扶助して、難波新地の邊に住ましめて、人知れず折々通ひ居たりしうち、日本左衛門不義不道の行ひ多かりしかば、小萬大いに怒り、遂にこれを追ひ拂ひ、これより又再び男に馴れず」云々と出てゐる。「實事譚」が果して事實かどうかは知らぬが、この狂言に出てくる倉野屋小萬は、これらの傳説から生れた役であらう。

日本左衛門の事を最も早く脚色した狂言は、寶暦十二年一月、大阪三桝大五郎座で演じた「秋葉権現廻船話」である。初代中村歌右衛門が扮した盗賊日本駄右衛門は、非常な當り役で、後世長く傳はつたが、これを又やゝ脚色を改めて出した「遠江洲戀賊」といふ狂言もあつて、この二つが、上方に於る日本駄右衛門の二幅對であつた。江戸では本篇が初めてゞ、その後はいろ／＼な書替へも出來た。その中で默阿彌の「青砥稿花紅彩畫」(辨天小僧)が殘つて、日本駄右衛門の名を膾炙させてゐる。

本篇を收錄するに際しては、可成りに手を盡して探したにも係らず、完備した臺本が得られなかつた。やうやくにして見當つたものには、眞中の二幕が缺けてゐた。止むなくそれを底本としたので、肝腎の駄右衛門が、最も活動する幕を見る事が出來ないのは甚だ殘念である。いま、その缺けた幕の略筋を左に記して置く。幕は、「濱名湖の場」「濱名館の場」「日の岡峠の場」である。

倉野屋の娘小萬は、濱名家に暇をとつてから、母と共に大阪へ歸らうとする途中で、淡路法印の僞に難儀をする。それを二本駄右衛門が救つたのが緣で、二人は濱名湖の船中に契を結ぶ。駄右衛門は足利家よりの上使と僞つて濱名の館へ入込み、既に自分が盜んで持つてゐる。尊像の詮議をして、濱名家に仇せんと企てたが、荒井女審の養女になつた八重町は、實は駄右衛門の女房おれんで、その口から露顯して、左門之頭に見出され、日の岡峠へ逃げて、玉島庄兵衛と渡り合つて双方手疵を負つたが、庄兵衛は谷底へ落ちて、左門之頭に救はれる。

役割は左の通りであつた。

玉島庄兵衛實ハ中川多膳（三世坂東三津五郎）應塔の君の靈。濱名左門之頭。若黨、五郎八（三ヤク七世市川團十郎）養女、八重町實ハ駄右衛門女房おれん（市川團之助）中川隼人。淡路法印（二ヤク澤村四郎五郎）濱名主税之助（花井才三郎）傾城、東路（吾妻藤藏）東路母、お虎。手下、仁藏（二ヤク大谷門藏）手下、鬼殺し官八（嵐新平）後家、お幸（三條浪江）荒井玄蕃（市川宗三郎）堀江彌惣次（松本虎藏）奥女中、竹川（岩井梅藏）判人、蟲除喜兵衛（坂東熊平）足輕、瀬平（市川辨藏）神崎屋嘉七（荒木與次兵衛）硏屋善助（坂東大吉）下女、お瀧（岩井瀧次郎）倉野屋小萬（五世岩井半四郎）二本駄右衛門實ハ石見太郎景純（五世松本幸四郎）

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

當穐八幡祭（できあきやはたまつり）

當穐八幡祭

序　幕

鴻野館の場
八幡侍塚の場

役名――南方十次兵衛。同弟、南與兵衛。鴻野後室、織橋御前。三原有右衛門。佐倉郡八。松戸作藏。關宿兵馬。香取文次。若黨、丹平。倉岡新三郎。荒川左近。南方中間、市助。和泉新田のおくめ。腰元、かへで。同、小萩。同、絲萩。山崎屋浄閑。倉岡丈左衛門。

本舞臺、三間の間、中足の二重舞臺、一面の綟子障子、左右柴垣植込みなどよろしく、所々に飛び石、すべて鴻野本國館の體。爰に兵馬、文次、麻上下の肩を脱ぎかけ、摑み股立ちにて、兩人、竹刀を持ち、かけ聲して立合つて居る。有右衛門、麻上下大小にて煙草盆をさげ、煙管を持ち、立ちかゝつて指圖して居る。白囃子にて幕明く。

トよろしく立廻りあつて、兵馬、竹刀を打落される。

有右　見えた〱。
伴藏　イヤ〱、香取氏には、きつい御上達でござる。
文次　これは〱。
有右　すべて試合ひは一眼二さそく、目を第一に致さねばならぬ。
兵馬　その儀は兼ねて心得をるゆゑ、鍋のうしほと承れば、目は人先へ心掛けまする。
有右　エヽ、何をお云やる。サア、松戸氏、お立ちなされ〱。身共お相手仕らう。
伴藏　これは〱、三原氏のお相手とは、ぶたれぬ内から痛み入ります。
兵文　ドレ〱、我れ〱は拜見いたさう。

ト兩人は扣へる。有右衞門ちよつと股立を取る。伴藏いかめしく襷をかけ股立を取つて、兩人眞中へ出で、竹刀を取つて、ヤツと立合ふ。また白囃子に成り、兩人立廻り。この白囃子をかり、新三郎先に、郡八、麻上下にて三方へ神酒の瓶子をのせて出で來り、舞臺へ來るまでに有右衞門、伴藏よろしくあつて、伴藏したゝかぶちすゑらるゝ。

伴藏　アヽ、見え過ぎました〱。
郡八　これは〱、いづれもには御稽古でござるな。

伴兵　倉岡氏、佐倉氏、只今御下向でござるか。

新三　左樣にござる。例年の通り、當所八幡の八幡にて放生會、則ち神前に捧げし神酒、八幡臨降の時刻違へず、頂戴あるが當家の舊例。それゆゑ持參し、只今下向。

有右　誠にお役目、御兩所とも御苦勞。とは申すものゝ又、御用もない後室樣の、この御殿に日がな一日、しやに構へ居るも退屈。それゆゑ慰み半分に、いづれもへ試合ひの指圖。

伴藏　イヤモウ、有右衛門どのゝ達者な竹刀。

兵馬　女や若衆は悅びませうが、我れ〳〵は大辟易。

文次　併し稽古の勵みには、お手强ほどが相成るものだ。

三人　千萬忝う存じまする。

有右　それ〳〵、脊骨にとつくり覺えねば、身共がやうな上手にはなられぬと申すもの。御兩所、左樣ではござらぬか。

郡八　左やう〳〵。ちと又身共も折々は、いづれも方へ稽古いたして進ぜう程に、非番の節はお出でなされい。

新三　イヤモ、何によらず、稽古の功積らねば至らぬもの。武藝を勵むもこれ全く、その身〳〵の爲な

らず、皆御主人への御奉公。御奉公と申せば今日の役目、首尾よく勤め下向のよし、後室樣へ申し上げん。郡八どのには、これにて休息。

ト立上がる。

郡八　然らばよしなに、新三郎どの。

有右　倉岡氏。

新三　いづれも、後刻。

ト唄になり、新三郎下座へ入る。

有右　まづ堅藏の新三郎めが立つたからは、御神酒でも引ずり出し、これで一獻たべようではござらぬか。

郡八　それは何より。身共もひよんな相役で、今日はまだ杯の顏さへも見ませぬ。成る程、同じ兄弟でありながら、兄の倉岡丈左衞門には、似ても似付かぬ新三郎。

有右　誠に盜跖、柳下惠も、そこのけでござらうて。

ト向うにて

よび　豐島樣よりのお使者。

郡八　ナニ、豐島家よりのお使者とは。
有右　定めし姫君輿入れの、その催促の使ひならん。いづれもにも出迎ひ召されい。
トまた向うにて
よび　お使者。
ト呼び、太鼓謠になり、有右衛門先に、みな〳〵出迎へる。向うより左近、麻上下、大小にて、三方へ掛け物の箱をのせ、これを持ち出で來り、花道にてとまり
左近　豐島家よりの使者として、荒川左近罷り越す。誰そお取次下されい。
有右　これは〳〵、遠路のお使者、御苦勞千萬。
皆々　まづ〳〵これへ。
左近　然らばいづれも、お許し下され。
トまた太鼓の切れにて左近舞臺へ來り、上の方へ通る。
有右　先づ以て武州より、鴻野の本國八幡まで、遠路のお使ひ嘸かしお勞れ。間違ひまして未だ知る人にござらぬ。手前は三原有右衛門。
郡八　則ち拙者は佐倉郡八。

伴藏　松戸伴藏。
文次　香取文次。
兵馬　關宿兵馬。
皆々　以後はお見知り下されい。
左近　兼ね〴〵お名前は承知いたす。以來御別懇に申し談じませう。
有右　して、今日お使者の趣きはな。
左近　罷り越したは餘の儀にござらぬ。先達て當家の殿、千島の正さまへ、手前姬君御婚姻の取結び。卽ち賴みの印しとして、互ひに家の重器を取替へ、めでたく申し納めんところ、折惡しき千島の正さまには御不例ゆゑ、これまで延引。その儀について何事も、御母君の計らひと聞き、江戸お館の當主をさし置き、この御本國下總まで、わざ〴〵今日使者の役目。この儀後室様へ、よしなに御披露賴み入りまする。
有右　すりや、結納がはりの胡蝶の香合。
郡八　延引ゆゑのお使者とな。
有右　何はともあれこの趣き。

四人　後室様へ申し上げん。

繼橋　イヤ、披露に及ばぬ。豐島のお使者へ繼橋が逢ひませう。腰元ども、障子を開きや。

絲萩　畏まりました。

ト琴唄になり、靜かに障子一面に開くと、眞中の褥に坐し、繼橋御前、襠裲切髮、後室の拵へにて、左右にかへて、小萩、絲萩、腰元の形にて扣へる。かへて、手飼の狆を抱いて居る。舞臺の皆々もよろしく住ひ、辭儀して居る。

有右　後室樣には端近のお入り。卽ちこれに豐島家のお使者。

繼橋　荒川左近、はる〴〵大儀。

左近　ハッ、先づは繼橋御前さまにも、御機嫌よう入らせられ、恐悅至極に存じまする。

繼橋　其方も無事で、めでたい〳〵。さうしてお使者の趣きは、千島の正へ婚姻の、結納を急ぐ使ひとな。

左近　仰せの通り、その砌り千島の正さま御不例にて、結納の一條延引。高いも低いも親心、一旦申しかはせし緣邊、若しや異變もあらんかと日夜の案じ、それゆゑ今日お館へ使者の仔細は、卽ち豐島の重寶たる、唐土の呉道元が蝶の掛け物、御契約の通り送り奉るの間、當家の重器胡蝶の香

合、直ぐ樣拙者にお渡し下され、めでたう印しを互ひに納め、御婚姻首尾ようあるやう、取計らへよと使者の役目、何卒御許容下さりませう。

纎橋　成る程、そりや此方も同じ事、豐島のお家に聞き傳ふ蝶の掛け物、當家の重器胡蝶の香合、二つ蝶々睦まじう、比翼の袖を重ぬるやう、互ひに取替へ婚姻の印しと、約せし上からは、女ながらも鴻野の後室、異變有るべきやうはなけれど、折惡しき千島の正が、病氣ゆゑ思はぬ延引、何とも氣の毒。

有右　アヽ、イヤ〳〵、後室樣、そりや何を仰せられまする。江戸屋敷に御安泰で、お出で遊ばす殿をとらへて。

纎橋　アヽ、コリヤ〳〵、そりや何云ふのぢや。千島の正はいつぞやより、病によつて出仕もとどめ、病架に籠ると日毎の便り、再々なれば婚姻の、賴みの印しを豐島家へ。

郡八　イヤ、送られぬのは肝腎の、胡蝶の香合紛失ゆゑ。

纎橋　コリヤ郡八、そりや何事。大事の寶紛失とは、家の守の疎かゆゑと、他家へ謗らせ笑はすのか。元より顯然有る寶を、紛失なぞとは麁相な事を。

ト左近へ思ひ入れ。郡八しよげる。

楓　ほんに常からつかつかと、よう何事にも出過ぎなお方。

小萩　よそのお使者の前といひ

綵萩　後室樣の思し召し。

文次　それ〳〵、こりや腰元衆の云はるゝ通り、何事にも出過ぎなお方、ちとお嗜みなさるが。

有右　イヤ、文次どの、默らつしやい。いま郡八の申されたは、僞かざらぬ武士氣質、みな正道といふものだ。

伴藏　いかにも左樣、御息才な殿を病氣といひ立て。

兵馬　無い寶を有るにして、事を左右におよせあるは。

繼橋　すりや、有右衞門をはじめ、其方たちまで。

有右　虚言は申さぬ武士の一徹、論より證據はその盜賊、只今拙者がこの所へ。

繼橋　ナニ香合の盜賊を。

ト思ひ入れ。左近も思ひ入れ。

左近　ムウ、後室樣には、殿の御病氣、それゆゑ印し延引と有るに引かへ、胡蝶の香合紛失なりと、我を立て、その盜賊をアノこれへ。

有右　引ずり出すが何より潔白。

ト立上がる。

足輕中、盜賊めをこれへ。

ト向うにて

足輕　ハアヽ。

ト時の太鼓に成り、向うよりおくめ　田舍女の拵へにて繩をかゝり、足輕兩人繩を取りて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

下に居らう。

トおくめを引すゑる。繼橋御前見て

繼橋　アノ、この女が。

皆々　寶の盜賊。

左近　金銀衣類に事かはり、重器の香合、よもや女が。

有右　イヽヤ、現在女が盜みしと、自身の口から訴人の白狀。

繼橋　すりや胡蝶の香合を。

左近　盗み取りしと我れと我が。

有右　いかにも左様……サア、女め、重器の香合盗み取り、いづれへやつた、それを吐かせ。

くめ　サア、その大事の香合とやら、盗む事は盗みましたが、天道様の憎しみにや、直ぐに何所へか取失ひ、この身にあたはぬ寶の行くへ、露聊かも存じませぬ。承ればその香合、お預かりの十次兵衛さまとやら、お咎めゆゑ御閉門と、ほのかに聞いて、この身ゆゑ、人に難儀をかける事、空恐しく覺悟の繩目、その代りに、お咎めの十次兵衛さまの御閉門、お赦し下さるやう、モシ、お願ひでござりまする。

ト思ひ入れ。

左近　すりや女、何と申す、寶の香合盗みしかど、直ぐにその場で取落し、行くへは知らぬと申すのか

繼橋　それゆゑ其方が科を訴へ、命を捨てゝ十次兵衛が、閉門赦免を願ふのぢやな。

くめ　どうぞお慈悲をもちまして。

ト繼橋御前、左近思ひ入れ。

繼橋　ハテナア。

有右　ヤア、まじ〳〵とした僞り事、水くらはせて拷問いたさう。

郡八　ソレ、責め道具の用意おしやれ。

ト向うにて

仲間　ハア、。

トまた時の太鼓になり、仲間二人、水手桶階子を持ち、跡より丹平、足軽の形、割竹を持ち出で来り

仲間　ハツ、責め道具持参いたしてござりまする。

丹平　お責めなさるゝ科人は、何者でござりまする。

郡八　外でもない、胡蝶の香合、盗み取りし科人めを。

丹平　アヽイヤ、その香合の盗人は。

有右　アヽこれサ、彼の香合の盗賊と、自分に名乗つて出た女、寳の行くへ責め苛なみ、若しくたばつたら香合の、詮議はそれからそれまでとナ……致さにやならぬ重器ゆゑ。

ト呑み込ます。丹平思ひ入れ。

丹平　成る程〳〵……して、お家の寳を盗みし盗賊、只の奴ぢやアござりますまい、定めし一癖

郡八　イヤ、即ちこの女が盗賊。

ト丹平、おくめを見て

丹平 ヤア、わりやァおらが在所の。
くめ ほんにこなたは。

ト思ひ入れ。

纖橋 コリヤ〳〵下部、そちや、その女、存じて居るか。
丹平 存じた段ぢやござりませぬ。こりや十次兵衞さまをお育て申した乳母の娘、和泉新田のおくめと申しまして。
くめ アヽコレ、わたしやそんな者では。
丹平 ハテ、隱す事はない。どういふ事でおぬしやァマア、これにはなんぞ。
有右 仔細は知れた。こりやァてつきり十次兵衞が、預かりの香合は質入れ。せう事なしに女を騙し、盗賊にして、その身の罪を。
くめ なんの左樣な。
有右 云ふな、女め……後室樣へ申し上げまする。御閉門の十次兵衞これへ召しよせ、とくと御詮議。
丹平 其うち女を拷問なし、寶の行くへ申すなら、十次兵衞さまは僞るとても、遁れぬ罪科。
纖橋 そんなら咎めの十次兵衞を。

ト思案の思ひ入れ。

郡八 身共が參つて直ぐに同道。

ト立上がる。

くめ イヽヤ、十次兵衛さまは御存じない。科は私し。

有右 さうは云はさぬ寶の同類。

郡八 急ぎ御前へ召連れん。兩人お來やれ。

伴兵 心得た。

ト三人行かうとする。おくめ心意氣。有右衛門引付ける。バタ〳〵にて三人向うへ入る。

左近 これにて様子承るに、何か分らぬ香合の。

有右 在所か但し盗賊に、頼まれての僞りか。

丹平 責める役目はこの丹平、在所に居るうち口說いても、得心しない意趣ばらし、詮議の割竹、容赦はない。サア、盗んだ寶の行くへを吐かせ。

ト打つ。

くめ ハテ、今も云ふ通り、盗みし事は盗んでも、落して行くへは知らぬわいの。

有右　そんなら寶の盗賊とは、十次兵衛か。

丹平　嘘僞りと白狀しろ。

ト また打つ。

吐かせ〳〵……吐かさぬか……サア、きり〳〵と吐かしやアがれ。

ト さん〴〵に打ちすゑる。おくめ苦しき思ひ入れあつて

くめ　イヤ、どの樣な責苦に逢ふとても、賴まれもせぬ、寶も知らぬ、知らぬ〳〵、知らぬわいなう。

有右　ハテ、イケしぶとい女めだ。

丹平　水くらはせて泡ふかせう。

ト 階子と手桶を出し

覺悟ひろいで、そこへ直れ。

ト おくめが襟髪を取つて階子の上へ引倒す。此うち左近始終思ひ入れ。繼橋御前も思ひ入れあつて

繼橋　コリヤ〳〵、待ちや。

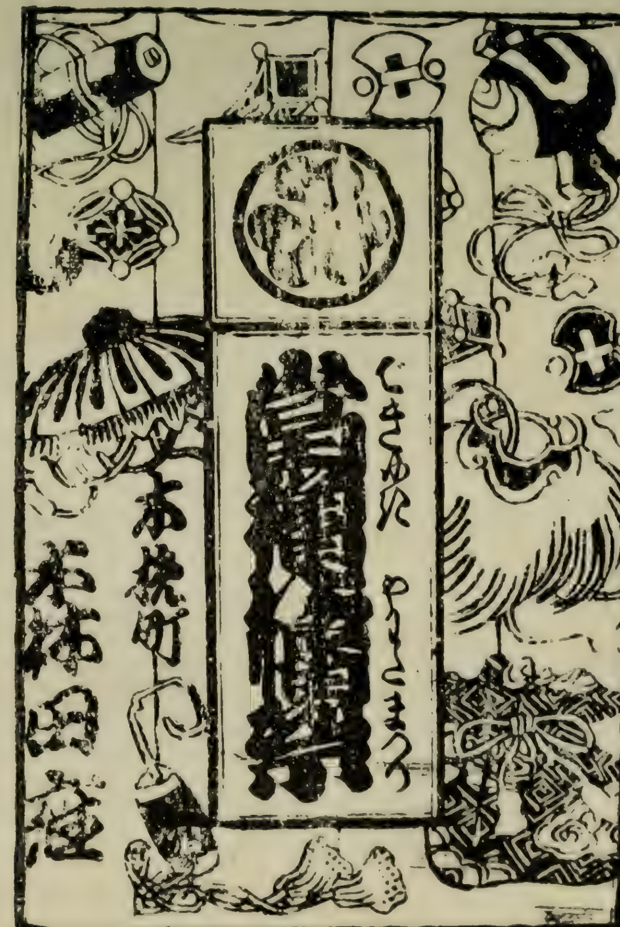
丹平　へイ。

ト 扣へる。

繼橋　その盜賊、自らが詮議せう。
有丹　アノ、御前樣が。
繼橋　家の寶といひながら、豐島へ送る大事の香合、盜み取つたるその女子、人手に掛けず自らが、自身に嚴しい拷問せん。女子ども、あの盜賊、これへ引きや。
女三　畏まりました。
ト合ひ方。女形三人、おくめが側へ來り
かへ　サア、女子の盜賊どの。
小萩　後室樣が御詮議遊ばす。
絲萩　ちやうとあそこへ。
三人　おぢやいなう。
くめ　すりや、いまはしい盜賊を
有右　後室樣が自身の御詮議。
文次　女、御前へ。
三人　早うおぢや。

三立目





くめ　ハイ。

　　　　トおづ〳〵するおくめを、女形三人伴ひ、二重舞臺へ上がる。

かへ　仰せに任せその盜賊。

女三　召連れましてござりまする。

繼橋　サア、女子、盜みしとある胡蝶の香合、取落したに相違ないか。但し行くへを知つてなら、この繼橋に有りやうに云うて聞かしや。サヽ、どうぢや。

くめ　勿體ない、あなた樣に、何の僞り申しませう。盜みは致せどその場所で、取落したにさらさら相違は。

繼橋　イヤ、さうではあるまい。盜みもせねば賴まれず、元より知らぬ胡蝶の香合、十次兵衛が難儀と聞き、その身に犯さぬ罪を着て、わざと繩目に逢ふのぢやな。

くめ　イヤ〳〵全く。

　　　　ト思ひ入れ。繼橋御前きつとなつて

繼橋　イヤ、知るまいと思ふか。十次兵衛が乳母の娘と、あの足輕が云つたからは、古主の科を身に負うて、難儀を救はん心から、命を捨てに盜賊と、名乘つて來たに違ひはあるまい。

くめ　サア。

繼橋　手飼ひの狆も此やうに、主をば知つて馴れなつみ、尾をふり側へ親しむもの、まして人なら主家來、恩義に命を捨てるは道、健氣な女子……と云ひたいが、節を僞はる不屆き者、この繼橋が手を下ろして。

ト立上がり、手づからおくめが繩目を解く。おくめ悄り、皆々思ひ入れ。

くめ　これは。

繼橋　今日は八月の半ば、當國八幡の放生會、生けるを放すが所の報恩。

くめ　それでは折角。

女三　ても、後室樣のお心ざし。

繼橋　コレ……ではない、今日は國の習ひぢや。

左近　イカサマ、罪の疑はしきは、輕う行ふ後室の、天晴れな御賢察、荒川左近め、甚だ感心。

有右　イヤ、なんぼお使者は感心でも、自身に訴へ出たる女、ろく／＼事も解らぬ內、お赦し遊ばす後室樣。

繼橋　イヽヤ、此まゝ赦しやるではない。氣儘育ちの藪雀、放して矢ッ張り自らが、側で遣ふがこれ糺

明。これでは誤りあるまいがや。

　　トこれにて有右衛門行詰まる。繼橋御前思ひ入れ。

サア、囚人の奉公人、目見得は濟んだ。奥へ一緒に。

くめ　否と云はれぬお慈悲のお捌き。

　　ト思ひ入れ。

丹平　ハテ、仕合せな女めだ。

左近　して、この印の一軸と、お引替への御返答はな。

繼橋　十次兵衛が來るを待ち、いづれ、お使者はマアそれまで。

左近　奥にて有無を。

文次　御案内。

女三　後室樣には、先づ奥へ。

有丹　アヽコレ、女め。

左近　後室樣、いづれも後刻。

繼橋　休息しや。

ト左近へ思ひ入れ。唄になり、繼橋御前付いて、おくめ皆々思ひ入れあつて一緒に入る。左近、一軸の三方を持つて文次付き下座へ入る。足輕仲間は下へ入る。

有右　何の事だ。あの女めを盜賊と責め殺し、彼の香合の詮議の道を絶つてしまへば、丈左衞門どの盜んでござる、寶の事はそれなりと、思ひの外にあの女。

丹平　併し胡蝶の香合は、おらが旦那の倉岡さまが、御所持なされてござらつしやれば、氣遣ひはござりませぬて。

ト唄になり、向うより丈左衞門、麻上下大小にて、草履取り付き、跡より淨閑、附け鬢、やつし、おしよぼからげ、脚絆三尺帶の形、籐柄の脇差し一本差し、古き網代の笠を持ち、付いて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

有右　倉岡氏には只今お上がり。ホウ、誰れかと思へば、跡のは山崎屋の淨閑。こりや、いかゞ致して頭の樣子が。

丈左　出仕の道にて出合ひし與次兵衞。三原どのにはまだ彼れが。

有右　野郎頭に還俗した、仔細はさつぱり……如何の譯で。

淨閑　譯というたら絲瓜の皮、表を張ると屋敷勤めが隙かきゆゑ、身上は讓らねど、與次兵衞といふ名

お伜に譲り、頭を剃つて金の事、一三昧と思ひの外、どういふ事にか子の方から、親を勘當しくさつて、いつぞやから家出いたす。弟の與五郎めは、箸にもかゝらぬのらくら者、名前も譲られず、據ろなく淨閑を、また改めて山崎屋與次兵衛、附け髮ゆふに面倒と、廻りの髪結ひに百づつ、餘計な損をさせをりました。

丹平　でもそれは勿怪の幸ひ、以前の白髪が黒ぶと變り、年の二十も若く見えます。

淨閑　オット若いと譽められても、一合も買やしませぬぞ。朝飯腹で鳥越から、この下總の八幡まで、二八一杯喰はずに來たは、爰で思ひ入れしてやる料簡。なんでなりと三原さま、茶漬食はして下さりませ。

ト懐中より煙管を出し、莨入れを探し、膽をつぶし

南無三、十六文で買うた莨入れ、たつた七年持つて落してしまうた。ケチいま〳〵しい。

ト思ひ入れ。

丹平　成る程、しわい親仁どのだぞ。

丈左　して、與次兵衛には、郡八より、書状を以て申した品を。

淨閑　サヽ、その事でござります。お聞きなされませ、どこの國にマア、これ〳〵。

ト懐の紙入れより手紙を出し、開いて

大事の事を此やうに……「蠻國射罔の毒藥の一種班赤の蜘蛛、急ぎ御越し給はりたく候ふ……與次兵衞どのへ、佐倉郡八」……手ぶしに任せて、こんなに書き散らすのみか、名宛もべつたり、急ぎ御越し給はれませうか。滯りの利金をせびりがてら、わざ〳〵持つて來ました。ソレ、見さつしやりませ。

ト手紙を有右衞門の方へ投げてやる。有右衞門取つて見て

有右 成る程、こりや郡八が麁忽。流石は老功、お心付かれた。イヤナニ丹平、大事の密書、人目にかからぬやう、火中いたせ。

丹平 畏りました。

有右 して、お願ひ申した彼の一品、御持參ならば倉岡どのへ。

ト淨閑懐中より袱紗包みの一角の茶入れを出し

淨閑 蠻國の射罔に用ゆる毒藥の蜘蛛の一種、お受取り下されい。

ト丈左衞門へ渡す。

丈左 すりやアノ、これが班赤の蜘蛛とな。

淨閑　左樣。

ト此あたりより新三郎、何心なく襖を明け、出ようとして、これを見て窺ふ。

丹平　モシ、旦那、その班赤とやら、痰咳とやらは、一角のやうな物でござりまするが、それが毒でござりまするか。

淨閑　何を云はつしやる。ありや矢ッ張り一角ぢやわいの。

丹平　ウム、そんなら班赤といふは、一角の俳名だな。

淨閑　エヽ、馬鹿な事を。班赤の蜘蛛を懐中してさへ、忽ちその身に當るゆゑ、毒氣をよけるその爲に有合せし一角の、茶入れの中へ入れて來たのぢや。

丹平　ハヽア、さうかえ。

ト此うち丈左衞門、茶入れの蓋を取り、中を改め見て

丈左　誠に正物、射罔の毒は草烏頭、番椒、この二種は調うたれど、何卒交趾の班赤の蜘蛛の一種調へたしと思ふ折から、淨閑が所持と聞いたるゆゑ、先達て申し談ぜしところ、郡八の書状によつて早速の持參、幸ひ今日こそ當家の吉例、後方後室八幡の神酒、頂戴あれば、その折から。

有右　その神酒丁度この所に。

ト神酒を持つて來る。

丹平　コレ、この中へ仕込み、後室さへ毒害すれば、あの江戸屋敷の殿は若年、おッ殺すにどうなりとこんな時の邪魔になる、あの橋本治部右衞門は、先達てしくじらせ。

丹平　跡に一人の氣ぶつさいな、十次兵衞どのは閉門ゆゑ、手足も出にやァお旦那の、思し召しには好い折から。

丈左　鴻野の家さへ身共が取つたら、與次兵衞、望みは何なりと。

淨閑　サア、その時は約束通り、この下總の山を殘らず。

丈左　そりやモウ何より。

淨閑　有り難い。吹流されの船頭めが、持つて歸つた交趾の蜘蛛、二百で買つたも擔ぎものと、年久しう悔んで居たが、下總の山殘らずになるといふは、一分で百兩取つたよりも、ちつと割がよからうかえ。

ト手を組んで思ひ入れ。

丹平　そりやこなさん、與次兵衞ぢやァない慾兵衞だ。

ト顏見合せ

淨閑　ハヽヽヽ。

丈左　三原氏、兼ね〴〵調ふ二種に、この斑赤の蜘蛛を交へ、急いであれなる神酒の内へ。

ト懷中より紙包みを出し、茶入れと一緒に渡す。

有右　呑み込みました。

ト丈左衞門、淨閑、丹平思ひ入れ。

丈左　あたりへ心を。

ト管絃になり、淨閑、丹平、あたりを窺ふ。これにて新三郎、襖を立て切る。有右衞門、紙包みの藥を出し、茶入れの蜘蛛と一緒にして、兩方の神酒德利へ仕込み

有右　して、この茶入れや包み紙は、いかゞ致さう。

丈左　人の目につまにかゝらぬやう、あの飛石の下へ埋めて。

淨閑　あつたら物を、勿體ない。

ト思ひ入れ。此うち有右衞門、包み紙茶入れを飛石の下に埋める。

丈左　よし〳〵。神酒頂戴は未の上刻。いつもの如く後室が、一口咽喉を通すのが、我れ〳〵が開運時

有右　倉岡どのは當家の殿、我れ〳〵が知行は十倍。

丹平　この丹平も足輕から、一足飛びに千石取り。

淨閑　わしは國中山々の、諸木を伐つて黄金の山。

　　ト三人思ひ入れあつて

三人　ても日の長い事ではあるぞ。

丈左　ハテ、せはしない。たつた一時待ちさへすれば。

　　ト此うち新三郎後ろへ來り、この時

新三　竹鋸の罪科は遁れぬ。

　　トずつと前へ出る。皆々驚き

三人　ヤアヽ。

　　ト丈左衞門、新三郎を見て

丈左　そちや弟新三郎、最前よりの樣子殘らず。

新三　承つた、兄者人……エヽ、こなたはなア。

　　ト思ひ入れ。合ひ方。

君、君たらずとも臣、臣たり、たとへ非道な主君でも、忠義を盡すは家來の役。それになんぞや

勿體ない、後室樣を毒害なし、殿をも失ひ、此お家を横領せんと、恐ろしい惡事の段々。血を分けた弟が、聞いて嬉しからうか。兄のこなたへ御意見も憚りながら、倉岡の苗字を無事に立てたさと、淺ましい死を見るが悲しさ。コレ、どうぞ聞き分け、さつぱりと、思ひとゞまり下されい。

トいろ〳〵思ひ入れ。

丈左 ヤア、聞きたくもないその意見、先へ産れた兄の事、知つて居ること長々と、口費やしな、止めにしろ。

新三 イヽヤ申さにや相ならぬ。これまで主の家國に、心をかけて一人も、榮えた例しはござらぬわいの

丈左 例しがあらうが、あるまいが、望みをかけた鴻野の家、治めて見せう。

有右 野暮を云はずと新三どの、兄御の船へとも〳〵乘り、榮耀をするがこれ當世。

丹平 時代違ひの御意見は、さらりと柳にやらしやんせ、柳々にやりばなし、お日和次第と待つてござれサ。

淨閑 それ〳〵、まだお若いゆゑ慾がない。年寄りのわしが、惡い事は云ひませぬ。主であらうが、親であらうが、突きころばしても身を立てるが、ハテ、めん〳〵の德といふもの。

新三 ヤア、おてまへ方の心にくらべ、某までも惡事の道へ、誘引せんとはそりや何事。餘人はともあ

れ兄者人、是非とも心を改めて。

丈左　まだ〳〵吐かすか。慮外な奴。きり〳〵そこを立つてうせい。

新三　イヤ、聞き届けない内は、新三郎は立ちませぬ。

丈左　おのれが立たずば、身共が立つ。三人ともに、奥へ一緒に。

　ト奥へ行かうとするを、新三郎引留めて

新三　さう仰しやれば毒の次第を、後室さまへ。

　ト立上がる。三人思ひ入れ。

丈左　現在兄が悪事を告げ

有右　主殺しにさつしやるか。

　ト新三郎思ひ入れ。

新三　すりや、云へば現在兄の身の上、云はねばお主のお身の上……ムウ。

　ト新三郎ヂツとなる。

丈左　彼れめに構はず、有右どの。與次兵衛には直さま歸宅。江戸にて吉左右。

淨閑　畏まりました。左様なれば私しは、好い夢でも見て待つて居ります。

ト新三郎思ひ入れ。丈左衛門見て

丈左　うつけ者めが。

ト唄になり、丈左衛門先に、有右衛門、神酒を持ち、丹平付いて奧へ入る。淨閑は向うへ入る。新三郎この時立上がり、跡見送り

新三　ホイ。

ト撓と下に居て思案の思ひ入れ。

十次　尾籠な各々、なんと召さるゝ。

ト早舞になり、向うより十次兵衛、五十日かづら、上下大小にて、伴藏、兵馬が腕を取つて、つかつかと出で來る。跡より郡八、引添うて出で來る。伴藏兵馬、振りほどいて十次兵衛が大小へかゝる。十次兵衛、これを手早く左右へ突きのけて思ひ入れ。

郡八　ヤア、お咎めの身を以て、帶劍叶はぬ南方氏。

伴兵　その大小を渡し召されい。

十次　イヤ、相ならぬ。お咎めは蒙むれど、罪極らぬ其うちは、鴻野の家來十次兵衛、無刀は却つて失禮至極。

ト立廻り。

矢張り此まゝ同伴召されい。

ト袴の塵を拂つて思ひ入れ。靜かな舞になる。三人これに氣を呑まれ、跡へ下がる。十次兵衛見向きもやらず、しづ〳〵と舞臺へ來る。三人も舞臺へ來る。

郡八　イヤ、待たれい南方氏、御前へ披露のその間。

十次　サヽ、拙者は扣へ罷りある。

ト眞中に住ふ。此うち新三郎、思案の思ひ入れあつて

新三　こりや南方十次兵衛どの。

十次　新三郎どの。

新三　まづはその後は。して今日御出仕なされしは。

郡八　豐島の使者へ相渡す、結納がはりのお家の重器。

新三　すりや紛失の。

郡八　胡蝶の香合、有無の返答、しかと其許召さるぢやまで。

十次　御念に及ばぬ。十次兵衛申し開きは……これにござる。

ト扇子にて胸を叩く。

伴藏　そんなら御前へ。

兵馬　右の樣子を。

郡八　申し上げよう。南方氏、腹をさすつて待つてお居やれ。

ト唄になり、郡八先に伴藏、兵馬奧へ入る。この唄のうち、向うより市介、年輩なる仲間の形にて、手紙を持ち出で來り、直ぐに舞臺へ來り、十次兵衛を見て

市介　お旦那、これにお出でなされますか。ヤレ〳〵、もう御前へかと存じまして。

十次　そりや何ぞ用事あつて。

市介　イエ、外でもございませぬ。御閉門のうち外へは出られず、只今御門の明いたを幸ひ、一杯たべに御城下へ、出ましたところ、思ひも寄らぬアノ弟御の與兵衛さま。

十次　コリヤ〳〵市介、これに新三郎どのも御出であるに、陪臣のツカ〳〵と、扣へて居れ。

市介　へイ〳〵。

ト下の方に扣へる。

新三　イヤ〳〵、苦しうござらぬ。嘸かしこの程は、何かと御心痛。ちよつとお見舞ひとは存ずれど、

御閉門ゆゑそれなりに。して、少しなりとも香合の、お心當りはござらぬかな。

ト此うち十次兵衞、向うを見て、いろ／＼思案の思ひ入れあつて、新三郎がせりふに心付き

十次　ハ、、、、左樣にござる。御大切なる御家の重器、日夜油斷は仕らねど、人に不時の禍ひありと、その夜は雨の庚申待、酒も長じて夜半まで、お出での衆中は、貴殿の御舍兄丈左衞門どのを始めとして、皆同家中の方々ばかり、外より來りし者もなきに、夜明けて見れば預かりの、胡蝶の香合紛失ゆゑ、南無三ぼうと、隅々くま／＼探せど、さしてこれぞといふ證據もござらぬ身の災難……心中お察し下されい。

新三　爾餘の品とは事かはり、お家の重器へ心をかけしは、貴殿へ仇ある者の仕業か。但し鴻野の家國を……奧には使者の入來といひ

十次　今日に迫りし寶の返答。

新三　斯樣な折に、先達てお暇出でし、橋本次部右衞門どの勤め居られば、又外によき料簡もござらうもの、跡には誰れかとさし當る、我が兄ながら丈左衞門、心よからぬのみならず、慾に上なき最前の

十次　ヤ。

新三　云ふに云はれぬ血筋の兄弟、主と兄とへ……十次兵衞どの、早う仰せ開かれませい。

ト唄になり、新三郎ツイと下座へ入る。十次兵衛、合點行かぬ思ひ入れあつて

十次　新三郎が今の素振り。何とも合點が。

市介　左樣でござりまする。腹でもお立てなされたか、ツイと奥へでござりまするな。

十次　して、市介、與兵衛とは。

市介　へイ、御城下で與兵衛さまに御目にかゝると、此お手紙をあなたへお上げ申してくれと。

ト手紙を出す。

十次　ナニ手紙。

ト取つて開き讀む。

市介　途中で一ぱい樂しまうと、伊勢屋へ參る後の方で、見れば與兵衛さま、お屋敷へ行きたいが、聞けば兄貴は閉門とやら、それゆゑこれをとそのお手紙。成る程また御兄弟とて、あのやうにも似るものか。殊に成田へ願ほどきと、御病後の長髮ゆゑ、どう見ましてもあなた樣。

ト此うち十次兵衛、手紙を讀み、思ひ入れあつて

十次　コリヤ〳〵、さうして與兵衛は城下に居るか。

市介　左樣でござりまする。銚子屋と申す旅籠屋に。

十次　ムウ。

ト懐中硯を出し、鼻紙へ何やら書く。

市介　イエサ、餘程の大病さうにござりましたが、隔つた所と申すものは。

ト此うち十次兵衛思ひ入れあり、書きかけて引破り

十次　コリヤ〱市介。

市介　ヘイ〱。

ト十次兵衛これへといふ思ひ入れ。市介呑み込み、側へ來る。十次兵衛市介に囁く。市介は「ヘイ〱イ〱と呑み込み、驚く思ひ入れ。

アノ與兵衛

十次　コレ……心得たか。

市介　畏まりました。

十次　ドレ、身共はお次まで。

ト立上がる。

市介　左樣なら旦那樣。

ト下座にて物音する。

ト思ひ入れ、唄になり、十次兵衛奥へ入る。市介殘る、下座よりおくめ出で來て、市介は行かうとする

十次　口外いたすな。

くめ　モシ〳〵、こなさん、いま爰へ後室樣の狆が來はせなんだかえ。

市介　イヽエ、御門に地犬が……ヤ、こなさんは和泉新田のばゝアどのゝ娘。

くめ　ほんに、お前は市介どのぢやないかえ。

市介　おくめどのかえ、ヤレ〳〵。さうして、いつお屋敷へ。

くめ　サア、わたしが來たのは、十次兵衛さま、香合ゆゑに御閉門、殊によつたら何とやらと、悲しい噂を聞くとその儘、死なしやんした母さんが、お育て申した旦那の御難儀、どうぞお救ひ申さうと、泣き手のない身を幸ひに、盜賊となり、命を捨てに來ましたところが、お館の後室樣のお情で、直ぐに今日からお屋敷勤め。斯うして居ても旦那の事、お案じ申して居るわいな。

市介　ハテサテ、そりや機轉な事。わしも朝晩旦那の事が、氣になつて〳〵、聞いて下さい、一昨日もあんまり旦那の事ばかり思つて、草鞋を作つたら、草鞋の長さが三尺六寸。

くめ　さうして、旦那を御殿へ呼びよせ、どうなさるゝ事であらうぞいの。

市介　サア、そこはどう行くものであらうか、さつぱりわしには……これはしたり、急な御用があつたつけ。

ト思ひ出して向うへ駈けて入る。おくめ跡を見て

くめ　ほんに、あの人とした事が、何事ぢや知らん。

ト思ひ入れ、合ひ方になる。下座より以前の狆、開きし手紙を咬へ走り出る。おくめ、これを見て

オヽ、慥かこの狆であつた……何やら咬へて來たわいの……コイ〳〵。

ト狆、側へ來る。

よう來たな〳〵。

ト狆をとらへ、何心なくこの手紙を見て

「右の毒にて後室始め千島の正どのを首尾よく失ひ候ふに於ては」……ヤア〳〵、こりや大膽な手紙の文言、誰が名宛やら。

ト上書の所を見て

佐倉郡八……コレ、先の宛名を咬へて居るゆゑ、知れぬわいの。わしにくりや。放せやい。

ト狆をとらへ、いろ〳〵する。狆くはへ引ツ張る。

コレ、それでは破れるわいの。大事の手紙、放さぬか〳〵。

　　ト手紙をとらへ、いろ〳〵引ツ張る内、先の所引裂け、手紙はおくめが手に殘る。

エヽコレ、上の一字が破れたゆゑ、誰れやら知らねど、下の名に佐倉郡八とあるこの手紙、十次兵衞さまの科を償ふには、こりや好いものが手に入つたわいの。

　　ト思ひ入れ。この時下座にて物音、これにておくめ、ちやつと手紙を懐へ入れる。狆は此うち下へ入る。下座より丹平、うろ〳〵と何やら尋れて出て來る。

丹平　どこへ持つてうせたか知らん。

　　トおくめを見て

オヽ、誰れかと思やアおくめ坊、いま爰へ狆が、何ぞ咬へては來なんだか。

くめ　アイ……イヽエ。

丹平　イヽエだ……帶を締める間、下へ置いた内ださうだが、畜生といふものは

　　トこの内おくめ思ひ入れあつて奥へ行かうとする。丹平見付け

アヽ、これ〳〵、おくめ坊〳〵。

　　トとらへる。

さりとはおぬしは仕合せ者、殺される命を助かり、後室様のお側勤め、その仕合せにあやかるやうに。

ト抱きつくを突のけ

くめ　エヽ、嫌らしい丹平どの、在所に居る内も付けつ廻しつ、こなさんのやうな意地悪に。

丹平　オヽ、こりやァ尤も。併し先刻むごくしたのは、奉公ぶりと料簡してコレ、畜類め、どうだ〳〵

ト手を持つて思ひ入れ。

くめ　エヽコレ、放して下さんせ。そんなどころぢやないわいな。

丹平　そんなどころでないならば、こんな所を。

ト懐へ手を入れる。おくめうるさがり、手をもぎ放す。丹平、今の手紙を掴み出し、ちよつと見て

コレ、この手紙が今尋ねる。

くめ　そんならこれを知つてかえ。

丹平　ヤ。

ト思ひ入れ。

くめ　讀むさへ怖い中の文言。

くめ　イヤ、ならぬ。

丹平　此方へくれろ。

くめ　ドレマア早う。

丹平　それ見られちやア。

トこれより三味線入りの鳴り物になり、おくめ丹平、世話のタテ、手紙を爭ひ、トヾ兩人、二重舞臺へ上がり、よろしく見得。序の舞に變り、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、高足の御殿　一面の金襖、爰に繼橋御前、褥に坐し、下の方に左近、舞臺眞中に十次兵衞、上手丈左衞門、下の方有右衞門、刀を持つて立ちかゝり、これを十次兵衞よろしく支へ居る。道具とまると、下座より郡八先に、伴藏兵馬文次出で來る。

十次　こりや倉岡氏、十次兵衞が紛失させし香合を、拷問なして行くへとは。

丈左　イヤ、盜まれしとはそりや僞り、まことの寶は人手へ渡し

有右　金子に替へたで

伴兵　ござらうがな。

十次 ハテ、いづれもには異なお詞。元より寶は拙者が預かり、人手へ渡しその罪の、來るを知りつゝ左樣な事を。

丈左 全くせぬとも云はれまい。いつぞや鹿島詣での折、潮來の遊里に全盛盡し、それのみならず日頃のおごり、榮耀の金子に香合は、質入れしたであらうがな。

十次 イヤ、その噂はみな虛說。この身に取ていさゝかも。

有右 覺えの有無しお使者の面前、後室樣の御前に於て。

郡八 いま我れ〳〵が拷問して。

トみな〳〵立ちかゝる。

織橋 皆ひかや。

皆々 ぢやと申して。

織橋 ハテ、扣へいと云はば扣へぬか。

ト押へる。皆々これにてしづまる。

左近 フム、他家の拙者が見聞いたすに、いづれをいづれといふ内に、詞をもつて鑑とやら。

織橋 誠はそれと……知れねども、日頃を見るに十次兵衞、まさか主家の大事の寶、人手へ預け、身の榮

耀極める者でも……守りての隙を窺ひ、盗賊の業に違ひない。

文左　然らば紛失なしたる香合、在所は知れしか。その行くへは。

十次　相知れませぬ。

皆々　なんと。

文次　アモシ、左樣に仰せござりましては、

有右　ハテ、文次どの、默り召されい。申さば香合紛失より、今日まで日數立つ内に

郡八　これぞと云ふべき事もなく、ましてや行くへも夢さんぼう

伴藏　それでも婚姻猶々延引。

兵馬　結納がはりの胡蝶の香合、相知れませぬで

皆々　濟みますかな、

十次　そも紛失の砌りより、倉岡どの、執成しにて、直に閉門仰せつけられ、守り嚴しき門戸の内、禁足いたした十次兵衞、鼠が申してくれうは格別、香合はどこそこにと、云うて聞かする者がござらぬ。

左近　ムウ、何樣これは尤も至極、閉門いたせし身の上では、尋ね詮議もならぬも尤も。

丈左　さうしてお使者、後室樣へ、南方氏の申し譯は。
十次　サ、その云ひ譯は……斯樣いたして。
　　　ト腹切らうとする。みな〳〵思ひ入れ。
織橋　それ留めい。
文次　ハッ……御意でござるぞ〳〵。
　　　ト抱きとめる。
織橋　自らがまだ云ひ付けもせぬ内に、氣儘に切腹とは、女子の主と侮つて、さしつけ業な十次兵衞、アノ叓な不屆き者めが。
　　　トきつと思ひ入れ。
十次　ハッ。
　　　ト平伏する。
織橋　切腹はならぬ程に、必ず……イヤサ、叶はぬ事ぢや、扣へて居い。
　　　ト思ひ入れにて云ふ。敵役みな〳〵思ひ入れ。
丈左　アイヤ、後室樣、寶の香合云ひ譯に、切腹いたす十次兵衞、おとゞめあつて豐島のお使者へ

皆々　御返答はいかゞ遊ばす。

織橋　サ、それはの。

ト當惑の體。左近此うち思ひ入れあつて

左近　その返答承つた。

丈左　とは又どうして。

左近　ハテ、千鳥の正さまは未だ御病氣。

織橋　ヤ。

左近　御病氣なれば、詮方なう、御全快までいつまでも、お取交しの印しは延引。

有右　それも、香合紛失ゆゑ。

左近　サア、紛失せうが、ござらうが、他家の身共は存ぜぬ事。一旦殿には御病氣と、後室さまのお詞が、卽ち使者への御返答。それとも主人の後室樣、僞り者と流布召さるか。

有右　サ、そりやア。

左近　結んだ御緣はどこまでも、ほどけぬやうに一軸は、後室樣へお預け申す。御全快さへ遊ばさば、その節お家の香合受取り、直ぐにめでたく。

ト掛け物の三方を出す。

繼橋　それで互ひに、武士の、詞も立つて何ほどか。

十次　我が誤りの香合を、それと云はずに御病氣と、後室樣の憐愍ある、お詞といひ、荒川どの、禮は何とも。

左近　これはしたり、禮を受くべき覺えはござらぬ。

丈左　ハヽヽヽ。いつ出やうやら知れぬ香合、それまで婚禮延引とは、ても氣の長い使者のお捌き。

左近　それゆゑ短かうこの席を、使者は御暇……後室樣。

繼橋　そんならよきに。

左近　萬事拙者が……いづれも方。

皆々　お役目御苦勞。

左近　お別れ申す。

ト唄になり、左近、十次兵衛へ思ひ入れあつて、向うへ入る。

丈左　後室樣、使者はあれでも濟みもいたさう。十次兵衛が身の上は。

繼橋　香合詮議申しつくる。

十次　すりや拙者めに御詮議を。

繼橋　紛失させた科により、暇をくれた十次兵衞、早う寶を手に入れて、首尾よう……婚姻整ふやう。

十次　そりやモウ、粉骨碎身いたし、日ならず求め立歸り、その時お禮を、後室樣。

丈左　それが肝腎、せめての事、命がはりに駈けめぐり

有右　早う尋ねて御婚禮。

郡八　遲いと不忠を重ねる道理。

伴藏　神佛でもせつちやうして

兵馬　素手でおめ〳〵歸らぬやう。

文次　十次兵衞どの、御歸國を、必ずともに相待ちまする。

十次　その儀は氣遣ひおしやるな。日本の内にさへあらば、早速身共が尋ね出し、いづれも方へもその節面談。先づさし當る江戸表、これより直ぐに……後室樣。

ト立上がる。

繼橋　早う出立。

丈左　へゝゝゝゝ。口では立派にお云やれど、何を當途に香合詮議、日數の立つに隨つて、尾羽打から

す浪人者、破れ編笠古扇で、合力受けぬ手段をしやれ。

十次　へヽヽヽ、イヤモ、倉岡氏の御深切、失念いたさず不日に香合……いづれも、その内」

ト唄になり、十次兵衛花道へかゝり、向うを見て、思ひ入れあつてツイと入る。丈左衛門思ひ入れ、八ツの時計鳴る。

織橋　あの時計は

皆々　未の上刻。

丈左　お家の舊例八幡の神酒、急ぎ頂戴遊ばされませう。

織橋　腰元ども、その神酒土器持參しや。

かへ　畏りました。

ト合ひ方になり、奥よりかへで、以前の神酒、小萩三方へ土器、絲萩、のしの三方を持ち出て來る。

仰せに任せ八幡の神酒

女三　持參いたしてござりまする。

織橋　武運を祈る八幡の神酒、時刻違へず頂戴せん。

ト土器を取上げる。かへで、小萩、兩方よりつぐ。敵役みな／＼丈左衛門と顏見合せ思ひ入れ。丈左衛

門につたりと笑をふくむ。繼橋御前、土器を取上げる。この時揚げ幕にて、新三郎

新三　暫らく／＼。

　　ト云ひ／＼出で來り、花道にて

アイヤ後室樣、その神酒暫く。

　　ト繼橋御前土器を下に置き、合點の行かぬ思ひ入れ。敵役みな／＼思ひ入れ。新三郎舞臺へ來る。

丈左　ヤイ／＼、弟め、當家の吉例八幡の神酒、頂戴遊ばす土器を

有右　止め召さるは

皆々　慮外でござらう。

新三　イヽヤ、慮外でござらぬ。すべて貴人へ奉る膳部は元より、神酒にもいたせ、鬼役なうては叶はぬもの。それゆゑ暫しとお止め申した。

丈左　默り居らう。それ式の事わきまへぬ、丈左衞門ではなけれども、八幡の神酒は、八幡より、直ぐに主人が頂戴の、心を以つて鬼役用ひず、きこし召すのがこれ舊例。譜代の家來でありながら、それをも知らぬ愚鈍な弟、御前に叶はぬ、下がりおらう……イザ／＼頂戴。

　　ト繼橋御前これにて又土器を取上げる。

新三　ヤレ後室様、その古例はざる事ながら、いつはともあれ、今日の代參、勤めし倉岡新三郎、異變もござらば拙者が誤まり、是非ともその神酒鬼役を。

有右　これサ〳〵、新三郎どの、今日代參は貴殿と郡八、その相役が扣へて居るに

郡八　其許ばかりが支へ召さるは、近頃身共を押付け業。

新三　ウム、お云やらばこの神酒を、貴殿もとも〴〵鬼役めされい。

郡八　ヤ。

トぎよつと思ひ入れ。繼橋御前、合點の行かぬ思ひ入れ。

新三　飲まれぬ神酒の入譯も……割つて云はれぬ、瓶子の中は。

ト丈左衛門へ思ひ入れ。

丈左　古例の時刻を遲滯さす無禮な弟、遠ざけ召されい。

伴藏　心得ました。

ト伴藏兵馬、新三郎を引立てようとする。文次これをさゝへる。有右衛門引付けて居る。新三郎兩人を左右へ投げのけ

新三　まづあの神酒を。

ト二重舞臺へ駈け上がり、瓶子を取る。

郡八　イヽヤ、その神酒。

ト續いて上るを新三郎、手早く取つて押ふせ、土器の神酒をぐつと飲み

新三　お身も相役、相伴いたせ。

ト瓶子の口より郡八が口へつぎこみ突き放す。皆々「ヤア」と思ひ入れ。

郡八　こりや身共にまで無理やりに、ヤア……アヽヽヽ。

ト血を吐き、苦しみ倒れて死ぬ。繼橋御前、かへで、小萩、絲萩、文次恟りして

これは。

ト此うち新三郎苦しき思ひ入れあつて

新三　忠義と恩に毒酒の鬼役、死ぬる弟が心を察し、不便と思うて兄者人。

ト刀を杖に立上がり、丈左衛門が側へ寄らうとする。丈左衛門、刀の鐺にて新三郎が胸を突く。新三郎これにてタヂ〳〵となり、アッと血を吐き、その儘死ぬ。皆々思ひ入れ。

繼橋　ヤヽ、郡八といひ新三郎、ても恐ろしい非業の死は。

文次　こりや何者の業ならん。

丈左　ソレ、腰元に縄かけ召されい。

伴兵　ハツ。

ト立上がる。

女三　アヽモシ、何ゆゑ。

丈左　吐かすまい。代参勤めし二人の外、神酒へ手ぶしをかけたは其方達。サア、何者に頼まれて、瓶子へ毒は入れ置いた。

かへ　イエ〳〵、私しどもはお床の間より、これまで持參いたしたばかり。

小萩　どうしてそんな勿體ない。元より誰れにも頼まれた

絲萩　覺えはさら〳〵ござりませぬ。お赦しなされて

三人　下さりませ。

有右　イヤ、赦されぬ、のぶとい女め。

伴兵　縄かゝれ。

ト此うち下座にて

くめ　イヤ、その毒の證據は爰に。

ト ばた／＼になり、おくめ、以前の手紙を持ち、丹平と爭ひながら出で來る。

皆々 ヤア、わりやア先刻の。

くめ 後室樣、これ御覽遊はしませい。

ト手紙を繼橋御前へ渡さうとする。丹平やるまいと立廻り。上より繼橋御前これを引取る。丹平思ひ入れ。

繼橋 慮外な下部、下がらぬか。

丹平 へイ。

ト扣へる。繼橋御前、手紙を讀み

繼橋 その下部に繩をかけや。

文次 ハツ。動くな。

ト立ちかゝる。丹平思ひ入れ。

丹平 マア／＼お待ち下さりませ。こりや私しには何の科でな。

繼橋 惡事の一々毒藥を、牒し合する手紙の文體、名宛は佐倉郡八より、上の宛名は切れ、次兵衞と殘りし一字の詮議。

有右　ヤ、そりやア最前與次兵衛が。

ト云はうとするを、丈左衞門、顏で押へる。

丹平　アヽモシ、モシ、後室樣、一字知れない御詮議に、私しが縛られても、どうしてそれを

纖橋　知らぬ者ならなぜに又、この手紙を爭うたぞ。

丹平　サア、それはな。

ト行詰まる。

纖橋　ハテ、もうよい。たとへ知らぬと云ふとても、嚴しく責めてその宛名。

くめ　モシ、よう存じて居られます筈、アノ、その手紙を。

丹平　エヽ。

ト思ひ入れ。此うち丈左衞門思ひ入れあつて

丈左　イヤ後室樣、彼れめを吟味に及びませぬ。そりや知れて居ります。

纖橋　ムウ、知れぬ一字のその名宛が。

丈左　憚りながらその一札。

ト受取り見て

コレ、上の一字は切れ散つて、次兵衛と残るは、出立いたした十次兵衛めでござりまする。

くめ　エヽ……そりや又なんで。

丈左　丈左衛門が思ふには、胡蝶の香合紛失させ、閉門なしたをおのれが罪と、その身は悔まずお上を恨み、あの郡八と云ひ合せ、毒酒をもつて後室様、殿をも失ふ所存と見えた。いづれも、さうではないか。

有右　いかにも貴殿の仰せの通り、さすれば香合紛失も

作藏　最前これにて申せし如く

兵馬　日頃ほたへの鐺が詰まり

丹平　榮耀遣ひに質物と、やらしつたのに極まつた。

織橋　そんなら手紙は十次兵衛とな。

ト思ひ入れ。

有右　なんぼ御贔屓強からうが、大罪犯した十次兵衛、これなりには相成りますまい。

織橋　分明ならぬ手紙の宛名、何は兎もあれ出立した。十次兵衛を、一まづ屋敷へ。

くめ　アノ、お跡を追ひ駈けて。

丈左　早速召連れ立歸らん。
くめ　すりや、香合紛失の、科を償ふ端にもと、思うた手紙が、却つてあなたの
丹平　科は遁れぬ惡事の密書。
くめ　エヽ情ない、引破つて。
　　ト丈左衛門が持つたる手紙を引取る。丈左衛門、直さまおくめを引廻してポンと切る。落ち散る手紙
　　は有右衛門取る。
女文　これは。
丈左　主の惡事を訴人も同然。
纖橋　それゆゑ女を
丈左　不忠の成敗。
　　ト刀を納める。
纖橋　とはいへどうやら。
　　ト丹平へ思ひ入れ。
丈左　最早程經し

ト つか〳〵と下の方へ行く。

皆々 十次兵衛。

ト丈左衛門向うを見て

丈左 いづれも用意。

皆々 ハツ。

ト立上がる。繼橋御前「コレ」と思ひ入れ。丈左衛門股立を取り、きつとなる。カケリにて、よろしく

ひやうし 幕

ト幕の内、禪のツトメにてつなぎ、引返す。

本舞臺、三間の間、松並木、少し上へ寄せて地藏堂の樣なる道具、兩扉格子、これに大小を畫きし繪馬澤山に懸けならべ、前に線香立て、樒の花など立てあり、日覆より松の吊り枝、下の方葭簀圍ひ出茶屋。茶屋男、茶道具を片付けゐる。すべて下總の國侍塚の飾りつけ、テンツヽにて幕明く。

ト下座と向うより百姓町人の仕出し出で來り、捨ぜりふにて双方へ別れ入る。

茶屋 もう追付け入相であらう。ドレ、一荷、内へ運んで來ようか。

ト行列三重になり、茶屋男、素麺櫃の内へ茶釜手桶などを載せ、これを一荷にて下座へ擔ぎ入ると、向うより、旅乘り物一挺、陸尺二人、若黨二人、兩がけ挾み箱、草履取り、いづれも旅形にて出で來り、直ぐに舞臺へ來る。此うち花道より市介、以前の形にて草鞋を持ち、大汗になり出で來り

市介　オヽイ〳〵。お駕籠を暫く〳〵。

若黨　市介どのか〳〵。

市介　オヽサ、旦那にちよつと〳〵。

ト息の切れし思ひ入れ。乘り物の内にて

十次　ナニ市介。

ト乘り物の戸を明け

けたゝましい。何事ぢや。

市介　イエ、何事か存じませぬが、御出立のその跡を、取片づけて居りますうち、お屋敷は大騷動。毒とやら茶粥とやらで、新三郎さま郡八さまは、その座でお死になされましたを、十次兵衛が業だとあつて、あなたを跡から追手の衆が、大勢見えますると申す事ゆゑ、葛籠を半分片付けて、宙を走つて參りました。マア、早くお隱れなされませい〳〵。

ト思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

十次　すりや市介、何と申す。毒藥にて兩人が、卽死なせしを我が業と、これへ追手の參るとな。

市介　左樣でござります〳〵。

十次　ムウ、こりや全く某を、失はんとする佞人どもの、企み事と思はるゝ。此まゝにして立退かば、いよ〳〵我れに決定せん。急ぎ屋敷へ乘り物返せ。

皆々　イヤ、左樣ではござりませうが。

十次　ハテ、其方達が存ぜぬ事。

ト刀を取つて、

市介、この刀は親重代、死後の筐は弟與兵衞に。

市介　すりや、お屋敷へお歸りあつて。

十次　コリヤ。最前申した香合の、詮議を與兵衞へとつくりと、

皆々　それでは。

十次　ハテ、乘り物を返せと申すに。

ト內より戶をさす。

皆々　ハアヽ。

市介　こりやどうしたらよからう知らん。

皆々　どうと云つても、旦那の仰せ。

市介　屋敷へお歸りなされたら、これ〳〵のお心か。

ト腹を切る思ひ入れ。

皆々　ひよんな事になりました。

ト乘り物の内にて、ばた〳〵。

市介　ハッ……せう事がない、いづれも屋敷へ。

トまた行列三重になり、皆々駕籠を舁上げろと、向う、ばた〳〵にて南輿兵衞、矢張り五十日かづら、一本差しにて出で來り、乘り物を見やり、市介を見て

輿兵　そちや市介、乘り物返してこりやどこへ。

市介　お旦那の御意にお屋敷へ。

輿兵　イヽヤ、そりや惡い。まづ〳〵下に。

ト乘り物を下へ据ゑさせる。乘り物の内より戸を明けようとするを、輿兵衞ちやつと押へて

ア、モシ、戸を明けまい兄者人、城下で只今承れば

卜駕籠の内にて物云ふ心。

すりや市介に委細お聞きなされ、それゆゑ屋敷へ……イヤ、そりや悪い。たとへ事を明るうせんと、只今屋敷へお歸りあるとも、佞人どもがどのやうな……斯う云ふ内も心遣ひ。マア〳〵、あれなる葭簀の内へ、早う〳〵。

卜駕籠の戸を押へ、無理やりに乗り物に附添ふ。時の鐘、日ぐらしの聲にて、皆々と一緒に與兵衛、葭簀の内へ入る。また在郷唄になり、向うより仕出しの百姓、旅人、下座と揚幕より出で來る。これと一緒に茶屋男も出で來り

百姓　せなア、どこへ行くえ。

同　行徳の町まで行て來るわえ。

旅人　なんと鎌がへまで、暮れぬうち行かれませうか。

百姓　もう、七ツがとうに過ぎましたから、どうしても暮れませうて。

茶屋　お前、鹿島へ御參詣かな。

旅人　イエ、佐原の方まで行きますのサ。

百姓　あそこまでござるなら、次手に參詣なされませ。

旅人　わたし共は成田の歸りでござりまするが、御利生はあると見えました。いつでも籠りがござりますて。

百姓　利生といへば、この侍塚が、近年は流行りますてな。

旅人　へイ、そんならこれが侍塚かな。

百姓　さやうサ。おんぢい、明日逢ひませう。

茶屋　おらも見世を片付くべい。

皆々　ドレ、わしらも急ぎませう。

ト矢張り在鄕唄にて雙方へ別れ入る。茶屋男殘る。葭簀の內より、以前の人數、乘り物を舁き、急ぎ下座へ入る。引つゞいて南輿兵衞、野袴、紫縮緬のしごき、大小の形に改め、市介付いて出て來る。

こりや、お茶もあがりませいで。

輿兵　イヤ〳〵、大きに見世の邪魔を致した。

茶屋　なんのお前。

ト云ひながら葭簀を卷き

ドレ、歸つて夜食にしべいか。

ト莨簀をかたげ、下座へ入る。與兵衞跡見送り

與兵　市介。

市介　與兵衞さま。

與兵　コリヤ……兄弟顔の似たるを幸ひ、十次兵衞どのに成り濟まし、追手の者を欺きて、事に臨まば身共は切腹。

市介　アノ、十次兵衞さまに成り代つて。

與兵　サア、紛失の香合知るゝまでは、兄者人はこの南與兵衞……身共は爰で兎も角も、相成るならば、兄の身に、マア氣遣ひはないといふもの。

市介　成る程、あなたを追手の者に、いよ〳〵兄御の十次兵衞さまと思はせるには、譜代親仁のこの市介が附き添ふて。

與兵　イカサマ。併し與兵衞に附き添ふは。

市介　ハテ、生き延びた命、惜みはちつともござりませぬ。

與兵　出かした市介。

市介　與兵衛さま。
與兵　コリヤ。どこまでも十次兵衛ぢやぞ。
市介　へイ。
ト思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより伴藏、兵馬、以前の形、肩衣を脱ぎかけ、股立にて走り出で來り、兩人を見て
伴藏　ヤア十次兵衞。
兩人　動き召さるな。
市介　すりやあなた方。
ト思ひ入れ。
與兵　この十次……兵衞に御用あつてか。
伴藏　お上の上意で
兵馬　貴殿の追手。
與兵　とは又なぜ。
伴藏　貴殿が出立めされし跡、八幡の神酒にて倉岡新三。

兵馬　佐倉郡八二人は卽死。

市介　それを旦那が

兵馬　默りをらう。遁れぬ證據は毒の一札。

伴藏　それお見やれ。

ト以前の手紙を出す。與兵衞取つて

與兵　ナニ……「兼ねて申し談じ候ふ貴殿所持いたされ候ふ蠻國射罔毒藥の一種班赤の蜘蛛、急ぎ御越し給はるべく候ふ。右の毒にて後室始め千島の正どのを、首尾よく失ひ候ふに於ては、契約の通り貴殿お望みの儀本望たるべく候ふ」……上の一字は切れ散つて、次兵衞どのへ、佐倉郡八。

伴藏　十の一字は散り失せても、慥かな女が訴へゆゑ、十次兵衞と事極まり。

兵馬　後室樣の甚だお怒り。かゝる惡事を企むからは、彼の香合とても人手へ渡し、金子に替へたに相違なければ、急ぎ追かけ討つて取り、首は武州の豐島家へ。

伴藏　香合がはりに渡すとあつて

兵馬　我れ〱へ追手の役目。

伴藏　サア尋常に

兩人　覺悟しやれ。

與兵　イヽヤ手紙は拵へ事、斯樣な惡事を企つる、十次兵衛……にはあらねども、申し掠めし上からはたとへ屋敷へ立歸り、云ひ開くとも御許容あるまじ。丁度所も侍塚、死後の面目切腹なす。十次兵衛が冥途の道連れ。お身たち、とも〴〵覺悟おしやれ。

伴藏　ヤア、追手に刃向ふ十次兵衛。

兵馬　市介もろとも、そりや。

ト兩人拔連れかゝる。これより烈しき禪のツトメになり、與兵衛拔き合せ、二人を相手に立廻りのうち、市介もちよつとあつて殺される。トヾ與兵衛、伴藏兵馬を當てる。この時向うより丈左衛門走り出で來り、この體を見て、有無を云はずに與兵衛を後より切り下げる。與兵衛「アツ」と思ひ入れ。

蟲の聲、かすめたる忍び三重。

丈左　もう悶躁いても十次兵衛、叶はぬ事だ、覺悟をしやれ。

與兵　チエヽ、口惜しい、無實の罪に命を捨つるか。

ト思ひ入れ。

人手にやみ〳〵死なんより、武士の覺悟に切腹せん。

三立目



四立目



丈左　どの道殺す御身が命。そりやどうなりと勝手次第。

ト白刃を納める。この時チョンと月出る。丈左衛門、與兵衛が顔を見て思ひ入れ。

ハテ、十次兵衛には高頬に黒子が。

ト與兵衛思ひ入れ。

與兵　イヤ、黒子は疾くに抜き捨てても、劍難遁れず。

丈左　この場で切腹。

與兵　今ぞ南方十次兵衛、生年積つて三十七歳。

トこの時、伴蔵、兵馬、心付き、與兵衛へかゝる。立廻りよろしく引据ゑ、白刃を取り直し、腹へ突き立てる。

丈左　見届けた……首は武州の豊島家へ、丈左衛門が介錯して。

ト抜きかける肱を、與兵衛しやんと留めて

與兵　聲かけるまで

介錯無用。

ト突き放す。これにて丈左衛門しやんと納まる、木の頭。

ト諸手をかけて引廻す。きざみにてよろしく。

跡シヤギリ。

ひやうし　　幕

二幕目

吉原仲之町の場

駐春亭座敷の場

吉原田圃の場

役名——山崎屋與次兵衛。吾妻の兄、鷲の森の長吉。三原有右衛門。男藝者、北石。同、小猿勘次。講中、川瀧屋市兵衛。茶屋廻り、山谷の鐵。中間、杢助。藤屋の若い者、藤助。船橋丹下。藝者、お梅。同、お花。同、お岩。同、米吉。山崎屋番頭、權九郎。畫鳶、佐渡七。藤屋娘、お常。藝者、藤屋の吾妻。山崎屋與五郎。相撲年寄り、幻竹右衛門。奥女中、關屋。

本舞臺、三間の間茶屋場、軒暖簾、青すだれ懸け、長暖簾、懸け行燈、藤屋と記し、正面枡組みの障子、立派なる神棚、眞鍮の燈籠など極彩色の張り壁屋體、前は揚げ縁、青簾下がり、雪洞付きの燭

臺三挺灯し、毛氈懸けたる長床几三脚直し、下の方丸太の籬を結ひ、全盛遊と書きし高札を建て、揚幕の際へ大門を取付け、清掻、屋體囃子にて幕明く。

ト舞臺に藤屋の若者藤助、そこら片付けて居る、ト下座と花道より侍ひ町人の仕出し、いろいろ行ちがひ入る。この中へ交り向うより、講中川瀧屋市兵衛、町人の形、風呂敷包みを持ち出で來る。下ゆ座より山谷の鐵、茶屋廻りにて、提灯を持ち、鐵棒を引いて出で來り

藤助　鐵さん、御苦勞だね。

鐵　藤公、太夫衆の盆踊りと、法印の俄は、揚屋町へ行つたか。

藤助　アイ、今ちつとぎれサ。

鐵　今夜は剛氣な人で、ゐじろぎがならない。イヤモシ、市兵衛さんではござりませぬか。俄見物かえ。

市兵　そんな事ではない。ちつと尋ねる者があつて來たが、あの鳥越の山崎屋の、與次兵衛どのゝ居る所は知らつしやらぬか。

藤助　アヽ、そのお人は、見番の親方の所に遊んでござる人だらう。

鐵　さうサ。

市兵　イヤモシ、わしは少つと逢はねばならぬ用がある。これから大音寺前の湯治へ行つて待つて居る

ほどに、若し逢つたらあれまで。

藤助　お出でなさるやうに。

鐵　わしもさう申しませう。

市兵　そんなら頼みましたぞ。

ト矢張り右の鳴り物打續きにて、市兵衛は下座・山谷の鐵は向うへ入る。此うち摺れ違つて向うより鶯の長吉、提灯を提げ、跡より三原有右衛門、侍ひの形、權九郎、手代にて、王子みやげを頭へ差し出て來り、花道にて

權九　モシ、三原さま、この頃のお洒落は、どこでござります。

長吉　どこといつたら、五丁町中お馴染み、もう大概ふさがつたには、この長吉もこまり名古屋サ。

有右　そこで此ごろは、しやに片向ひで大色事、なんとおぬしも。

長吉　おつと、うら山吹は古し。時に山吹で思ひ出した。わしが妹の藤屋の吾妻、いよ〳〵表向きはお前の名前で、お國許の丈左衛門さまが、身請けなさる御相談でござりますか。

有右　サア、表向きは身共、内證で身請けして、密かに國へ送らせてくれと、手附け金百兩寄越されたを、ツイ身共が

長吉　サア、わしも妹を玉に樂がしたいから、昨日相談した通り、彼の奴に云ひ付けてやつたら、コレこの通り承知の手紙。

ト手紙を出し、見せる。

權九　ムウ……この間賴みの與五郎が紙入れ、取つてやらうといふ文言……「長吉どのへ、佐渡七」……これでは慥かだ。この手紙は、おれが預かつて置かう。

ト懐へ入れる。ばた〳〵にて向うより佐渡七、巾着切りにて出で

佐渡　オヽ、長吉さんか。

長吉　佐渡七、首尾はどうだ。

佐渡　どうだの斯うだのと、わしが呑み込んだら、どんな物でもやりやアしない。五十間で摺れちがひしなに……なつたり〳〵といふと、直ぐにこの紙入れ。とんだ品玉だ。

ト出す。

權九　成る程、覺えのある與五郎が紙入れ。

佐渡　わしを賴んで淩はしたは、どういふ理屈だえ。

權九　サア、このお侍ひが金の入用、おいらも半口乘つて、思ひ付いた與五郎がこの紙入れには、この

　間お渡しなされた、お拂ひ米の金の受取。

有右　この間右の玄米三百俵相渡したといふ受取、此方へ取置いたを、金子濟んでその節引替へに致す筈を、折よく持參せぬを幸ひ、明日と云うて身共が所持して居る、この書付けに、物を云はせう爲。

長吉　受取つた金も、受取がなければ闇。おれは又妹めが所から遣つた起請が入用。

ト紙入れより出し、莨入れへ仕舞ひ、受取も出し

　これを卷き上げうばかりに、佐渡七、おぬしを

三人　頼んだのだ。

佐渡　したり、又おれが上を行く、極上々のふと印め。時に約束の金はえ。

有右　ハテ、そりやアこの受取を、百兩にした上の事。

佐渡　ハテ、そりやアちつと中位な話しだね。

長吉　成る程、さう思ふも尤も。それなら受取の入つて居るこの紙入れ、金を遣るまでの形に預けて置かう。

佐渡　そいつは少つと、働くには邪魔だが、せう事がない。そんなら早く紙入れの身請けを頼みますよ

ト懐へ入れる。

權九　それは承知だ。これから藤屋の見世で

有右　俄を見てやらざアなるまい。

長吉　七ぼうも今夜らは錢だっ

佐渡　それサ、今夜はべらぼうに賑かな晩サ。

ト淸掻になり、かすめたる祇園囃子にて、みな〳〵本舞臺へ來る。佐渡七は、うろ〳〵あちこち歩き居る。藤助、捨ぜりふにて挨拶して居る。此うち向うより、この鳴り物にて、お常、茶屋娘、跡より關屋、屋敷女中。杢助、供にて、革文箱と御用箱を割がけにして出で來る。

つね　關屋さま、ちつとの内俄を御覽じてもよいぢやござりませぬか。

關屋　御用先ぢやによつて、どうあらうか。ナウ、杢助。

杢助　ハイ、明日の朝、七ツ上がりになされたら大事ござりますまい。

ト此うち向うにて

竹右　野郎め、引摺つて行く。うしやァがれ。

ト右の鳴り物になり、竹右衞門、角力年寄の形にて、いさみの若い衆を引摺りながら出る。山谷の鐵

これなとりさへながら出で

鐵　モシ〳〵關取、間違ひでござりませう、料簡しておやんなさいまし。

若者　それサ、ツイ喰ひ醉つて麁相申しやした。御免なされまし〳〵。

竹右　何もおれが構つた事ぢやアないが、どこのか女中に毒を吐かすから、見て居る事のならないおれの氣性だ。會所へ連れて行く。うしやアがれ。

關屋　ヤ、お前は、幻し竹右衞門さんぢやござんせぬか。

竹右　オヽ、おぬしはお早、ではない。今はお屋敷へ行つて關屋どのとやら。今日はどこへ。

關屋　アイ、ちとお上の御用で、……それはさうと、ついにない

つね　お前の腹立てさんすは餘程の事。

竹右　イヤサ、この關屋どのゝ事を、此奴らが毒を云ふが、頻りに癪にさはつて來たのよ。

若者　モシ〳〵、間違ひでござります〳〵。

鐵　お常さん、どうぞお詫びを。

竹右　イヽヤ、屆ける所へ屆けねばならぬ。マア、こなさん達は、あれへ。

關屋　サア、參りませうか。

ト右の鳴り物にて、みな〳〵本舞臺へ來る。佐渡七この人數を見て下座へ入る。若い者ふり切つて逃げて入る。山谷の鐵つゞいて入る。

竹右　エヽ、ひでえ目に逢はさうと思つたに、つん逃がしたか、いま〳〵しい。

關屋　ハテモウ、ようござんすわいなア。

有右　イヤ、これは關屋どの、今日は朝日の如來へ御代參と承つたゆゑ、途中でお出合ひ申さうと、お待ち受け申した。サア〳〵、これへお出でなさい〳〵。

ト床几へかけさせ、その次へ手前もかけて居る。

つね　これは有さん始め權九さん、ようお出でなされました。

藤助　お常さん長吉さん、今夜は有さんは、どこへお連れ申さうね。方々で色が出來て、さしを突かれるには。

有右　コレサ、身共がナニ女郎買ひ……目端を開けて物を云へ。

長吉　それサ、たゞ俄を御見物のお客、お杯の支度でもさつしやいな。氣のきかない。

有右　イヤコレ藤助、俄といへば、ちつと頼みたい、行つて來てくりやれ。

藤助　そんならアノ吾妻さんの口を。

權九　これサ、口をきかずと行つて來やれ。

藤助　合點でござります。

ト清掻にて向うへ入る。

關屋　コレ〳〵李助、その御用箱にある御佛へ參拜の金子、この紙入れへ入れてたも。

李助　ハイ〳〵。

ト關屋が紙入れを取り、箱の中の金子を出して入れる。此うちに佐渡七これを見て、いろ〳〵うろ付き居る。關屋紙入れを取り

關屋　先達て奥樣御不例の折柄、御願込め遊ばし、その御利生やら御全快、それに付き佛前のお道具一式御寄附、お出入りの山崎屋へ申し付けしが、出來いたしたかな。

權九　イヤモウ、お誂へより出來榮え致しました。御參詣の節、とくと御覽下さりませう。

長吉　イヤ、月々の御代參も外々と違ひ、賑やかなこの吉原。

關屋　その繁華な土地ゆゑ、一しほ途中の心づかひ。

有右　ナニ心遣ひに及びませう。色と酒とで夜を明かす身共なぞは、折々參つても、とんと心は移りませぬ。お屋敷内に、ちと存じ寄りな女子がござつて、心中立てに堅い身持ち。なんと關屋どの、

よそ外には、氣強い女子もあるものでござる。ツイ、オツと得心すれば、手前もよし、跡のへる物ではなし、鼈甲細工より正じん正銘、上がる氣はないかいな／＼。

ト手を取り、だん／＼側へ寄る。關屋逃げながら立つ。これにて床几はれ返り、有右衞門ころげる。

關屋　アヽ、危ない事、有右衞門さまには、きつう御酒上がりましたさうな。

ト外の床几へ腰かける。此うちに佐渡七、關屋が紙入れを盗む。關屋ちよつと見て佐渡七が腰を取つて、簪にて佐渡七が手を床几へ突き立てる。佐渡七、痛むこなし。有右衞門起上がり

有右　オヽ、痛い／＼。

關屋　痛む筈でござります。お嗜なみなされませ、有右衞門さま、御代參の私し、佛の罰でもこの位な事はある筈。不義を致せば人が赦しませぬ。

ト佐渡七、簪をゆすられ、痛むこなし。

得心もない者に心を寄するは、盗みをするも同然。必ず愼みや……とサア、先の女子は此やうに、申すでござりませう程に、愼みや。この上お嗜みなされませいなア。

ト兩方へ掛けて云ふ。

有右　アヽ、これサ、今のは酒興、其許もお心にかけられな。爰で御意見聞かうより、俄でも見物仕

りませう。

權九　それ〳〵、關屋さまには後程。サア、長吉どん、お連れ申しな。

長吉　サア、わしは大音寺前へ行つて參ります。マア、藤屋へお出でなされませ。

ト淸搔になり、有右衞門權九郎、藤屋へ、長吉は向うへ入る。

關屋　サア、若い者、取りやつた紙入れ、爰へ出しや。

ト簪を拔き、竹右衞門方へ突きやる。竹右衞門、佐渡七を捕へる。

つね　先刻にから、怪しいと見て居りましたが、お前さんが默つてお出でなされますによつて。

竹右　それ〳〵、おれも容赦して置いた。サア、イケ泥坊め、盜んだ紙入れを出さないか。

ト締め上げる。

佐渡　オヽ、痛い〳〵。出すわな〳〵。女だと油斷して、とんだ目に逢うた。せう事がない、紙入れを返すから、爰を放さつせい。

竹右　サア、出しやアがれ。

佐渡　ソレ、紙入れ。

ト投げ出す。竹右衞門取上げるうち振り切つて

泥ばう〳〵。

ト逃げて下座へ入る。

竹右　ハテ、逃げ足の早い奴だ。併しこれさへ取ればよい。

ト關屋に渡す。關屋見て

關屋　ヤ、こりや男の紙入れ、わしがのとは違うてある。ソレ、杢助早う。

杢助　ハツ。

ト佐渡七が跡追ひかけ、下座へ入る。

竹右　ハテ、どうして間違つたか。よい〳〵、おれが又、探しやうがある。

關屋　何は兎もあれ、先づ朝日の彌陀へ參詣して

つね　町の内では人目あれば、大音寺前の駐春亭で、お支度なされませいなア。

竹右　その湯治風呂へは、おれも用があれば、先へ行つて待つて居よう。

關屋　そんなら竹右衛門さま。

つね　かねてのお話しは道々。

關屋　コレ……サア、參りませうわいなア。

ト清搔になり、關屋、竹右衛門、お常、下座へ入る。ト向うより藤助駈けて出る。奥より權九郎、有右衛門出で

權九　藤助、吾妻が事は、どうだ〳〵。

藤助　サア、丁度獅子の俄は今仕舞つて、先口をかけて、吾妻さまも來なさいます。

有右　そりや妙だ。まだ一二番殘つて居る。俄も見ながら

藤助　も一つお上がりなされませ。

ト揚幕にて拍子木打つ。

權九　コレ、そこへ來る俄は誰れだ。

藤助　米吉と仙吉でござります。

有右　こりやよからう。酒を持てこい〳〵。

ト下り葉になり、米吉、師直の拵へ、仙吉、判官にて文箱を持ち出で、舞臺へ來り

米吉　判官どの、遲い〳〵。内にばかり粘り付いてござるによつて、御前の事はお構ひないぢやまで。

仙吉　ハヽヽヽ、これは〳〵師直どのには、御酒機嫌か、御酒參つたか。

米吉　イヤ、いつ盛らしやつた。御酒下されても、勸めるところはきつと勸めるこの師直。

ト此せりふにて兩人詰合ひありて

鮒やい、鮒侍ひやい。

仙吉　すりや師直、今の惡口、本性でお云やつたか。

米吉　オヽ、本性、本所で云つたらどうする。

仙吉　オヽ、本所ならば本所五ツ目。

米吉　五百

仙吉　やくわん。

ト藥罐を出す。チヨン／＼と拍子木。

お茶上がらんかお茶。

米吉　饅頭やおこし。

ト兩人駈けて下座へ入る。皆々譽める。清搔になり、花道より與五郎、羽織、一本差しにて出で、花道にて

與五　さて／＼、今度の俄のやうな人の出る俄もない。それはさうと、吾妻が俄は、もう果てたか。どこへ出て居るか知らん。仲の町中歩いたら、どこのか見世に居るでもあらう。

ト思案して取つて返さうとする。此うち大太鼓入り獅子の鳴り物になり、向うより吾妻、手古舞の形、俄の扇を持ち、若い者、留守居提灯を持ち、送り出て來る。與五郎、頬かぶりして、ちよつと留る。吾妻心得、立ちどまつて、若い者に囁く。若い者呑みこんで舞臺へ來り

若者　ハイ、吾妻さんの箱。

ト二重へ突出し、下座へ入る。此うち兩人花道にて

あづ　與五郎さんかいな。

與五　吾妻、今夜の座敷はどこぢや。

あづ　内の座敷ぢやわいな。

與五　藤屋なら、又あの屋敷の有侍ひぢやないか。

あづ　さう思ふゆゑ、わたしも氣障でならぬわいなア。

與五　ナニ、お樂みであらう、早く行きや〳〵。

あづ　又かいなア、お前に話しもあり、焦らさずと聞いて下さんせいなア。

與五　サア、おれも話しがあるが、爰に立つても。

あづ　それいなア、江戸町を廻つて、話しながら行かうかいなア。

與五　それでは座敷が遅うならうぞや。
あづ　なんの、否な客には待たすがよいわいなア。
與五　手古舞ぢやと思うて、氣が強うなつたなア。
あづ　諸事太ッ腹サ。
與五　おれも、この形では、茶屋で目を付ける。地廻りの振りで。
　　　ト羽織を脱ぎ、頰かぶりして尻をからげる。
あづ　請取り憎い地廻りぢやわいなア。
　　　ト三味線入りの神樂になり、兩人向うの歩みへかゝりながら
與五　時に吾妻、あの有右衛門が、いよ〳〵其方の身請けすると相談するかいなう。
あづ　サア、あの身請けにも、譯のある事と思うては居るけれど、なんの、身請けしたとて、どうしたとて、行かうぢやなし。
與五　身請けされても行かぬとは。
あづ　サア、互ひに取交した起請の通り、つまらぬ時は駈落ちしても。
與五　女房になるか。

あづ　ならいでかいな。たとへ二人が手鍋提げ……新内ぶしで暮らすのが、樂しみぢやわいなア。

ト此うち下座より按摩出で來り、何心なく兩人が側にて笛吹く。兩人恟り飛のく。按摩は向うへ入る。

エヽモ、恟りしたわいな。

與五　時に吾妻や、わが身も慥か五ツ月ぢやな。

あづ　サア、それぢやによつて、人さんの目に立たうかと思うて、大抵心遣ひな事ぢやないわいな。

與五　さうであらうよ。丁度正月が産み月ぢやの。

あづ　アイナア。

與五　コレ、あんまり酒を過しやんな。ひよつと身にでも障らうかと。併し、誰れが子やら知れもせぬに。

あづ　モシ、そりやお前、何の事ぢやいな。

與五　大方、ゑなは紋盡しの、若い者中であらうぞえ。

あづ　コレ、あんまりな事云はしやんす。吉原の藝者は、お客と色事するはきつい法度、それを知りつつ云ひかはし、深い印しはお腹のやゝ。モウ〳〵、わたしや嬉しうて、お前に似た好い子をと、樂しんで居るものを。

與五　エヽ、眞面目になつた奴サ。
あづ　そんなら矢ッ張り焦らしかいなア……エヽ、面白うもない。
與五　コレ、吾妻、慥かアノ左り孕みは男の子、右ならは女とやら。ドレ、ちよつと見てやらう。
ト側へ寄る。
あづ　エヽモ、よして下さんせ。
トぴんとする。
與五　コレ、そんなにつんとする事はない、ちつと見せて。
ト引寄せ、懷へ手を入れる。此うち東の花道より折助の生醉出で、これを見て
折助　エヽ、畜生め、うまくするな。腹が立つぞ。はッつけめ。
トよろ〳〵する。二人はこれと摺れちがふ。折助、花道へ入る。
あづ　ほんに、いろ〳〵な奴が來て。
與五　さうよな。そしてマア、男の子なら、何と名を付けような、
あづ　サア、お前の名が與五郎ぢやによつて、與三郎か、與之松か。
與五　與次郎、與吉、與勘平。

あづ　それでは奴のやうなわいなア。
與五　もし又ひよつと女の子なら、吾妻は江戸の事、お江戸でもあるまいし。
　　ト此うち下座より鮨賣り出で、東の歩みへかゝり、入る。
あづ　紫の縁もあれば、お村かお崎、もしどうぞ成らうなら、わたしや男の子が欲しいわいな。
與五　吾妻、男の子が欲しいなら、男を産む呪ひがある。
あづ　アノ、呪ひがあるかいな。
與五　サア、その呪ひはの。
　　トあたりを見廻し、側へ寄る、ト藤助、吾妻を見て
藤助　サア〳〵、吾妻さまが、お出でござります〳〵。
有右　ヤア、吾妻、きつう待たしたな〳〵。
權九　吾妻さん、待ち兼ねました〳〵。
あづ　これは有さん、權九さん、今日は伏見町の一番ぢやによつて、いつち早いのでござんすわいなア。
權九　さうサ〳〵、待たうがどうせうが、お顔さへ見りや堪能するわいなう。

あつ　ほんに、お禮から先へ申しやせう。
藤助　そこが獨り勤めの吾妻さん。一つ〆めませう。
三人　ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。與五郎、思ひ入れあつて小隱れする。直ぐに時の鐘、唄になり、向うより北石、箔置き釋迦の形。勘次、天人の形、回向院の番傘を差し、道中姿にて出で來り

北石　天人か。
勘次　お釋迦さん。
北石　コレ……戀といふのも、菩提の道、回向院のこの寢釋迦も、本堂の合天井の其方に逢ひ
勘次　夜な〳〵通ふ其うちに、賽錢の遣ひ過し。
北石　心中して死なねばならぬ身になつたか。ハアヽ……同じ釋迦でも嵯峨の釋迦は、開帳にござつての繁昌、それに引替へ淺ましい。
勘次　モシ、お前の遣ひ過しを、嵯峨のお釋迦さんに、無心いうてはどうぢやえ。
北石　あのやうに見えても、金づくの事。
勘次　吝いお方かえ。

北石　さうではないが、出來まいよ。
勘次　そりやなぜかえ。
北石　ハテ、體中、がしやくせんだんぢやわい。
皆々　イヨ〳〵。

ト褒める。兩人床几へかけて酒飮む。また拍子木を打つ。時の鐘、大拍子、神樂になり、お梅、お岩、お花、鹿島踊にて出で、花道にて振りあつて三人舞臺へ來る。渡り拍子。

有吉　成る程、妙だ〳〵。
あづ　鹿島踊もようござんす。
權九　何もかもよい内にも、一番といふは、吾妻さんの獅子の音頭。
藤助　ぶッ淩ひでござります。
有右　さればこそ、この有右衛門が心を懸けて口說き、得心さへすれば直ぐに身請け。コレ、色よい返事は有馬の松よ、藤屋にまかれて寢とござる。
あづ　モシ、わたしは藝者、女郎衆に何ぼも美しいのがござんす。身請けなりと、店請けなりとしなさんせいなア。

有右　ハテ、さうピンシヤンしないものだ。

ト引張り、しなだれる。下座より與五郎、若い者が連れ出で、囁く。

若者　ハイ、吾妻さんのお迎ひ。

權九　ハテ、とんだ早い迎ひだ。まだ三味をぺんとも云はさぬ内に

有右　直し〳〵。

權九　イヤ、まだ湯治風呂に用もあれば、後の事〳〵。

あづ　左樣ならばお近いうち。

若者　庄八玉屋に跡口が懸つて居ります。

あづ　嬉しいの。

ト淸搔になり、吾妻、先に、若い者、箱を持ち、付いて入る。

有右　何の事だ。俄を見せに呼んだやうなものぢや。

ト此うち與五郎、吾妻が跡を見て下座へ行くを

ア丶、コレ〳〵、そこへ行くは山崎屋與五郎ではないか。

與五　ヤ、あなたはお出入り屋敷の三原有右衛門さま……權九郎か。

權九　私しも今日は王子へ參りましたところ、有右衛門さまにお目にかゝり、あなたに御用と仰しやるゆゑ、これでお待ち申しましたが、モシ旦那、よい所でお目にかゝりました。

藤助　よい所といへば、モシ、與五郎さま、親方は江戸へ參りましたが、もし、あなたがお出でなら、今日までのお約束、吾妻さんの手附けの百兩、是非々々今日。

與五　アヽコレ、その金の事も、いろ／＼にしたれど、都合合ひは惡し、五十兩持つて來たほどに、どうぞこれで。

有右　イヤ、その吾妻は身共も執心で、身請けの相談いたしかけてある。與五郎、身請けする金があるなら、此方の金子返しやれな。

與五　此方の金子と仰しやるは。

有右　ハテ、先達て藏屋敷のお拂ひ米三百俵、渡し置いた代金。

與五　エヽ。

權九　物覺えの惡い。私しさへ覺えて居る。先月廿五日お渡しなされた、ソレ、三百俵サ。

與五　コレ、わが身まで其やうに。その代金百兩は、この間お渡し申したわいの。

有右　ヤヽ、何を云ふ。この有右衛門、受取つた覺えはないぞ。

與五　モシ〳〵、そりやマアどういふ事でござります。
權九　どういふ事はござりませぬ。受取らないから、受取らぬと仰しやるでござりませうワ。
與五　何を其やうな……いうても百兩。しかも當月二日、お渡し申した受取もござりますぞえ。
權九　受取があるなら、サア、早くお出しなされませ。
與五　サア、それはの。

トうぢ〳〵する。

有右　無いか。
與五　サア、その受取を入れ置きました紙入れ、落しましたか、取られましたか。
權九　モシ、若旦那、そんなにふががにふを云つて濟まさうとは、アヽ、こりやァ何でござりますな、吾妻どのゝ手附けに困り、渡さぬ金を渡したと、云ひかけを仰しやるのだな。
與五　コレ權九郎、大切なお屋敷へ上げる金、吾妻でも色でも、そんな事せうかいの。
有右　イヤ、さうであらう。コレ、身共が方には……右お拂ひ米三百俵受取つたといふ、受取が有るが

ト一札を出す。この時紙入れより以前の長吉が取つたる佐渡七が手紙を落す。

サア、此方でその金子、受取つたといふ受取が有るか。

與五　サア、それは。
兩人　サア〳〵〳〵、どうだ。
與五　エヽ、コレ、見す〳〵渡した金の受取を失くしたばかり。
有右　身共に云ひかけひろぐ泥坊め。
權九　盗人根性さげさつしやると、旦那とは云はさぬぞ。この權九郎が折檻して。
有右　權九郎、藤助、ぶちのめして、金を吐き出させろ。
權藤　合點でございます。
ト兩人して與五郎をぶつ。下座より吾妻出で來り、これをさゝへる。
イヤア、吾妻さん。
權九　番頭の折檻を女の身で、なぜ
皆々　邪魔をするのだ。
あづ　イヽヤ、わたしや女ぢやないぞえ。
三人　なんと。
あづ　サア、俄の趣向といへど、これ見やさんせ、男の姿

三人　ヤ。
あづ　男も男、心に角の角繫ぎ、堅木の棒ぢやなけれども、中の字きめた、ちよつと邪魔しに……イヤ、
さしやくを付けに來やんしたわいなア。
ト男の身振り、誂らへの鳴り物になる。
有右　ムウ、そんならわれが俄の手古舞。
權九　俠になつて。
あづ　サア、こなさん方の喧嘩の起りは、屋敷の米三百俵、與五郎さん……イヤ、この若いのに渡し、
その代金を渡した、受取らぬといふのが、いざこざの序開きかえ。
權九　いかにも、御屋敷からお渡しなされた三百俵、賣り拂つて、その金を上げぬから起つた事。
有右　此方には、コレ、右の米渡したと有る一札握つて居る。
與五　コレ、吾妻……ではない頭、聞いて下され。その金は屹度渡したれど、受取を落したに付け込み
あづ　ハテマア、ようごんす。わしも中に入つたからは、たとへ向うに角が生へ、恐れ入谷の鬼子母
神、剛力稻荷を云はうとも、此方も黑助苦勞人、互ひに料簡聖天川岸、大さん橋の船ぢやアない
が、じゆんわりとくんなんしな。

有右　おきやアがれ。鳶の者の聲色で

權九　この場をちやアふうにしようと思つても

有右　此方には慥かな一札。

あづ　ハヽヽヽ、一札々々と、貸本屋の一作が聞いて呆れる。どりやマア、その書付けを。

有右　とつくりと見て物を云へ。

ト吾妻取つて

あづ　成る程、こりや與五郎さんが惡い……此やうな慥かな物が有つては、お前の云ひ譯は立たぬぞえ。

ト一札を燭臺の火にて燒く。

有右　ヤア〳〵、ヤア、コレヤイ、なぜ大事の一札を燒いた。

あづ　イヤ、この書付けは紙屑同然。

三人　なんと。

ト吾妻、懷より關屋が持つて居た與五郎が紙入れを出し、中より書付けを出し

あづ　「覺え……一つ金百兩、右はお拂米賣り拂ひ申し候代金相渡され、慥かに受取り申し候。」

皆々　ヤアヽ。

あづ　「山崎屋與五郎どのへ、三原有右衛門」

皆々　それがどうして。

あづ　手に入る所で手に入つたこの受取。なんとこれでも、與五郎さんが盜人か。

皆々　サア、そりやア。

あづ　サア〳〵〳〵……誰れだと思ふ、水道の水で鯱鉾と膝組みの兄さん、おどけた奴等ぢやないか。

皆々　ムウ。

ト思ひ入れ。

あづ　これからは與五郎さんを苛めた仕返し。オイ〳〵、みんな、早く來てもらはう。

三人　合點でごんす。

ト下座よりお花、お梅、お岩出で來る。

與五　ヤ、そんならわしが仕返しを。

はな　憎い人は、叩くより、抓つたり

女三　擽ぐるがようござんす。

ト三人、有右衛門權九郎藤助を抓つたり、擽ぐつたり、いろ〳〵する。敵役せつながる。下座より

お常出で

つね　こりやまア、どうしたのでござんすえ。

うめ　與五郎さんを苛めた代り、わしらが

女皆　とゞめの擽ぐり。

權九　アヽ、ぶたれるより叩かれるより切ない。

敵皆　もう赦せ〳〵。

ト三人こけつ轉びつ逃げて下座へ入る。

女皆　ホヽヽヽ。オヽをかし。

あづ　お常さん、お前のお庇で、お屋敷のお女中樣から貰うた、紙入れの書付けが有つたばかり。

與五　この與五郎が無實を遁れ、忝うござりますが、この中へ入れて置いた起請が。

つね　そりや又聞いて上げうわいな。時にその關屋さまが、今宵は駐春亭へ。吾妻さん、お前も支度して來て下さんせいなア。

おづ　さうしてアノ三朝さんも、どこやらのお客でござんすぢやないかえ。

與五　コレ、吾妻、三朝とは役者の三朝か。おぬしやアあの座敷へ行くのか。

はな　アレ野暮な。その三朝さんはナ、日本橋のお客で外の座敷、たとへ又一座ぢやというて、何を其やうに。

うめ　それいなア、その三朝さんに似て居さんす與五郎さん、燒餅は通らぬぞえ。

あづ　お前が行くなら行くまいわいなア。

與五　イヤサ、さうぢやないが、どうか怪しく思ふから。

つね　オツト、これから舞臺を二人にして、口舌をさせたいが、お前方の濡れは、皆樣が見飽きて居なさんすといなア。

はな　それぢやによつて與五郎さん、お前は今夜は歸らしやんして、吾妻さんをやらしやんせいなア。

與五　さういふ事なら、歸りは歸らうが、

いは　大門まで送つて上げうわいなア。

あづ　そんならわたしも、髮結ひ直して行く程に、道寄りせずに歸らしやんせえ。

與五　そんなら吾妻、明日の晩、

あづ　待つて居るぞえ、

女皆　サア、ござんせ。

ト流行り唄になり、お常、吾妻は下座へ、與五郎と女形三人は向うへ入る、ト下座より與次兵衛、羽織町人の形、下駄がけにて出で、花道の方へ行かうとして、ふつと有右衛門が落したる手紙を拾ひ、明りにてちよつと見て

與次　合點のゆかぬこの手紙、取つて置いたら何ぞの役に。

ト懐へ入れる。この唄の内、向うより丹下、胡麻鹽、羽織袴の侍ひにて、家來付いて出る。

丹下　それにお居やるは、山崎屋與次兵衛どのではないか。

與次　ヤ、あなたは親どもお出入りの、鴻野の御家中、船橋丹下さま。

丹下　一別以來堅固で

與次　あなたも御機嫌よう。マヽ、これへ。

ト床几に腰かけさせて

さて今日は、思ひもよらぬ當所へお出では。

丹下　サア、其許に、ちと御相談申したい儀ござつて、山崎屋へ申し遣はしたら、何とやら味なお噂、只今は當所にと聞き。

與次　それは遠方。私しも商賣の世話が嫌さ、と申すも我まゝ、家出いたして居ります。

丹下　さてこそ〳〵。時に其許へ……イヤナニ、コレ家來、其方は大音寺前の、申し付けた料理屋へ參り、待つて居れ。

家來　畏まりました。

ト下座へ入る。

與次　して、私しへの御用の筋はな。

丹下　お出入りならでは明さぬ儀なれど、お家には佞人多く、種々の騷動あるが中にも、大切な殿を毒殺。

與次　エ。

丹下　サア、御運强き加護にや、企みし者仕損じ、御身に恙もなく、十次兵衞と申す者に疑ひかゝり、落着して事は濟めども、分明ならず思ふ折から、この程お庭掃除の者、飛び石の下より取出したる一つの手掛り。

ト袱紗包みを出し

彼の毒藥を祕め置く器が、一角をもつて拵へたる器物、上包みの書付けが手掛り。

與次　ドレ。

ト取つて、燈臺の灯にちよつと透し見て

丹下　サヽ、正しく蠻國に用ひる

ヤヽ、こりや慥かに親淨閑が。

與次　射罔の毒藥。

丹下　包み紙に山輿の所持と書きつけあり。

與次　アヽ、これがどうして。

丹下　覺えがあるか。

與次　サ、それは。

丹下　覺えあらば引ッ縛つて、お國許へ引かねばならぬ。

與次　イヤ、全く覺えはござりませねど、お出入りと申し、拙者めへ御內談、何卒この詮議は。

丹下　申し付けてくれいか。

與次　御恩を送る拙者が働き、尋ね出して差上げませう。

丹下　オヽ、さうあらうと、これまで參つた。併し大切な科人。

與次　たとへ一門一家たりとも、容赦いたさず。

〽丹下　糺明なすか。
與次　お家へ忠義を。
丹下　一筋に。

ト捕り繩を出す。

與次　搦めて出すが
丹下　男の魂ひ。
與次　磨き上げて、お目にかけませう。

ト繩さばきする。唄になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上の方、九尺の障子屋體、內に床の間、駐春亭の額、下の方一間の離れ座敷、向う障子、この間柴垣植込み手水鉢など、いつもの所に門口、爰に關屋、お常、北石、勘次、太鼓持ち、賑やかなる鳴り物にて道具とまる。吾妻も藝者の形に着替へ、とも〴〵關屋を執持ち居る。向うより四つ手駕籠かつぎ出で來り

駕舁　アイ、ちとお賴み申します。

つね　アイ〳〵……アレ、お光さん、お客樣が。

　ト云ひながら此方へ來り

よう入らしやりました。サア、マアこちらへ。

　ト駕籠の内にて

三朝　アヽモシ、お常さん、お客ぢやござりませぬ。三朝でござります。

つね　オヤ、三朝さん、ようマア。お前お一人かえ。

三朝　イエ、今日は日本橋のお客がお約束ゆゑ、早く參らうと存じましたが、ちと樂屋に用があつて。

　ト此うち關屋、三朝が來たと聞き、前を合す振りにて立上がり、覗いて見たり何かして、吾妻に囁く。

あづ　そりやモウ隨分、マア、わたしが

　ト此方へ來て

三朝さん、この間は。

三朝　オヽ、吾妻さんか。お前に聞かせたい親仁の新物があるよ。

あづ　ほんにかいなア。お前知つてならどうぞ。

三朝　イエモウ、わたしもまだ本當には。

北勘　音羽屋の親方、よう。

三朝　オヽ、これはどなたも。

あづ　モ　、お常さん、ちよつと耳を。

ト囁く。

つね　アイ〳〵……モシ、三朝さん、お前のお出を聞いて、お屋敷のお方が、お近付きになりたいと仰しやるが、どうぞ少つとの間、此方へ付合うて上げて下さんせぬか。

あづ　わたし等がお賴みぢやわいな。

三朝　それは、マア、有り難うござります。併し柳枝さまの方がどうも。

つね　エヽ、柳枝さんなら、わたしがよいやうに云ふわいな。

三朝　そんならちよつと參りませうか。

あづ　嬉しいね、サア〳〵。

駕舁　お常さん、お宿からお包みが。

つね　ほんにお世話でござんした。

ト此うち彼方は酒盛りしてゐる。吾妻、お常。三朝を此方へ連れて來り

關屋さま。

あづ　三朝さんが見えましたわいな。

三朝　ヘイ、御免なされませ。

北勘　サアモシ親方、此方へ。

三朝　あなた、よう今日は。

關屋　ハイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

あづ　サア、關屋さま、其お杯を三朝さんへ。

三朝　戴きませう。

關屋　憚りながら。

トさす。

三朝　どうぞ又相變りませず……吾妻さん、憚り。

ト飲んで

左様なら、これは献じませう。

ト關屋へ杯を戻す。關屋心のうちにて返事して杯を取る。お常つぐ。

あなた、少と御見物に入らつしやりませ。

關屋　どうもお屋敷がむづかしうて。それでもこの春は、やう〳〵の事で。

三朝　入らつしやりましたか。

關屋　二番目がいつそ好うございました。

つね　お前が左七の折、お出でぢやさうなわいな。

關屋　いつそ田之助が殺される所が、可哀さうでございました。

北石　親方、あの中の字はきついお出來ね。

關屋　中の字とは、何の事ぢやえ。

あづ　アノ中の字とは、俠の事を申しますわいな。

關屋　わたしは又、やいとの事かと思うて。

勘次　こりやアよい。ハヽヽヽ。

北石　モシ親方、中の字で一つ話しがございませう。

勘次 大かた宗叔の燒き直しであらう。

つね これいなア、その話しは日待ちの晩にして、あなたも先刻から、惡い洒落もたんと受けてお出でなされたによつて。

あづ それ〳〵、これからお杯をぐる〳〵廻しにして、お開きはどうでござんせう。

つね それがよいわいな。併し、わたしやお歸りの支度や何やかや。吾妻さん、お前、跡を好いやうに頼むぞえ。

あづ そりや合點ぢやわいな。

北石 左樣ならあなた樣、これにお懲りなされずと又近日。

關屋 アイ、また近日ゆるりと。

勘次 三朝さん、この間に參つて、大飲みに致しませう。

三朝 ちと又內へ來なさい。

北石 そんならあなた。モシ、親方。

勘次 重ねて逢はう。

トりきむ。

つね　エヽ、措かしやんせ。

ト流行り唄になり、おつれ、北石勘次奥へ入る。關屋、吾妻、三朝殘る。

三朝　左樣なら私しも……吾妻さん、ちと二丁町へも來なさい。

ト立たうとする。此うち關屋、三朝を留めたき思ひ入れ。

あづ　アモシ、三朝さん、マアよいぢやないかいな。

三朝　それでも又あちらが。

あづ　ハテ、彼方は、お常さんがよいやうに云ふと云はしやんしたわいな。

關屋　吾妻さん、それでも折角お留め申して、お樂しみの邪魔をしては。

三朝　なにサヽ、そんな事ぢやござりませぬ。彼方のお客は男ばかり、皆私しを御贔屓の。

あづ　三朝さん、彼方ばかりが御贔屓ではないわいな。あなたもきつい御贔屓で、お前の錦繪ばかりが、お文庫に三つ有るといな。

三朝　それは有り難うござります。

あづ　それぢやが、女房さんの有る事をこの間お聞きで、ちつと憎いさうなわいな。

三朝　なんのお前、女房は女房サ。

關屋　吾妻さん、ありやみんな嘘ぢやぞえ。
三朝　ナニお前、嘘を云ふものでござります。
關屋　ほんにかえ。
ト三朝を見て思ひ入れ。
三朝　大誓文、親の頭に松三本。
關屋　ホヽヽヽ。
ト笑ひ、吾妻立たうとするを
關屋　アヽコレお前。
あづ　イエ、直ぐに參りますわいな。
三朝　コレ〳〵、吾妻さん、そんな事は惡いによ。
あづ　何がいな。同なじやうに。
ト合ひ方になり、吾妻、此方の座敷へ來り、屏風を立てる。三朝、こなしあつて
三朝　なんでござりませうね、お屋敷がむづかしうござりますなら、どう致しても芝居なぞは。
關屋　ハイ〳〵、せつ〳〵は參られませぬ。どうぞわたしも嫁づくなら、お前方の御近所へ。

三朝　イエ、どこぞ好い所がござりましたら、お世話いたしませう。

ト關屋が顔を見て、こなし。

關屋　有り難うござります。

三朝　ほんに、あなたのお屋敷にも、お狂言がござりませうね。

關屋　ハイ、お客様でも入らつしやります節は。

三朝　へイ、稽古なぞは、誰れが致します。

關屋　藤間のお紋がお出入りでござります。

三朝　大方、あなた方もなされませうな。

關屋　なんの、私しのやうな無器用者が。

三朝　イエ〳〵、立役か、女形か、取分け濡れ事なぞは、常からお稽古なされて、お上手らしう見えます。

關屋　どう致しまして、其やうな事は、誰れも教へてくれる者はござりませぬわいな。

三朝　嘘々。いま時お屋敷の女中方に、滅多に油斷はなりませぬて。

關屋　イエ、そりやアノ、ほんの事。

ト杯のやり取りしながら、この模様よろしく、此うち吾妻

吾妻　關屋さん〳〵。

ト此方へ呼ぶ。

關屋　アイ〳〵、何ぢやいな。

ト此方へ來る。吾妻、腮にて、次の間へ行けと思ひ入れ。關屋。恥かしがる。吾妻、手を引いて連れて來る。此うち三朝、見ぬやうに見る事なぞある。

吾妻　三朝さん。

三朝　吾妻さん、お前、どこへ入つてゐた。

吾妻　モシ。

ト囁く。

三朝　そんな事、よいかえ。

吾妻　なんの大事あるものかいなア。

三朝　しよける奴サ。

ト三朝も次の間へ來る。

吾妻　關屋さん、……三朝さん、よく敎へて上げなさんせ。

ト合ひ方になり、吾妻思ひ入れあつて奥へ入る。三朝、我が煙管にて關屋へ煙草をつけてやる。關屋、これを戴きのむ。

三朝　どうかこんな所は、春狂言の左七のやうで。

關屋　ほんにあの折、田之助と……わたしや田之助になりたいわいなア。

三朝　モシ。

トこなしあつて障子をしめる。唄になり、此うち有右衞門、權九郎出で來り

權九　有右衞門さま、今の樣子御覽じましたか。

有右　さればサ、身が惚れて居る奥女中の關屋め。

權九　朝日の彌陀へ御代參の途中、この湯治風呂へ立寄つて今の放埓。

有右　なんと權九郎、どうして腹が癒やうな。

權九　どうといつたら、あの關屋が假親と聞いた船橋丹下が、奥へ來て居るこそ幸ひ。

有右　引摺り出して恥づらかゝせ、腹を癒よう。

權九　有右衞門さま。

有右　合點だ。

ト障子を明ける。内に屏風立て廻し、この合せ目より關屋の守の紐長く出て居る。有右衛門この紐の端を探り見て引ッ張る拍子、屏風の内にて

關屋　誰れぢや／＼。

ト此うち權九郎、手燭を袖に隱し、思ひ入れにて窺ふ。有右衛門は守の紐を引ッ張る。屏風の内より出で

關屋　何者ぢや。關屋が守を引出すは盜賊か。

有右　イヽヤ、三原有右衛門、關屋が放埒見屆けた。

關屋　エヽ。

有右　丹下どの、放埒者ぢや、横道者ぢや。出合はつしやい／＼。

トこれにて奥より丹下、長吉、お常出で來り

丹下　有右衛門どの、聲高に騷ぎ召さるは

長吉　どんな騷動が出來ました。

權九　どうといつたら、奥勤めの關屋どのが男狂ひ。

有右　爰の座敷で乳繰り合つても事が濟むかな。

つね　ヤア、そんなら關屋さまは。
丹下　何とお云やる。身が娘同然の。
ト關屋が側へ、つか〳〵と行く。
コリヤ關屋、そちは放埒の覺えあるか。
關屋　サア。
丹下　覺え無くば無いと云へ。女中預りの身ども、殊にはそちと緣あれば猶更濟まぬ。サヽ、云ひ譯せい〳〵。
ト急く。
關屋　サア。
長吉　イヤ、こりやァ云ひ譯はござりますまい。なぜと仰しやりませ。此お女中が出たあの屛風に、男の帶が懸けてあるからは、寢て居たに違ひござりませぬ。
つね　コレ、長吉さん、ありやわたしが平括け、そんなお方の帶ではござんせぬわいな。
有右　何を〳〵。好い所へ長吉、その男を引摺り出せ。
長吉　合點でござります。

ト行かうとするを、お常さゝへるを突きのけ、明きかゝつた障子を明け、入らうとするを、内よりこの手をしつかり握る。長吉ぎよつとして

ヤイ〳〵、いま放埒の合摺りめを、引出さうとするおれが腕首を、摑まへた奴は誰れだ。

ト云ふ。内にて

與次　オヽ、山崎屋の總領、今は無宿の與次兵衞だワ。

ト合ひ方になり、障子を明け、與次兵衞、浴衣置き手拭、湯上がりの見得にて、長吉が手を取つた儘、に出て來る。

有右　こりやア。

與次　俄の世話もほつとして、この大音寺前の湯治上がり、汗を入れるお座敷へ、臑腰をふん込む、うぬは何といふ猿松だ。

ト突き放す。

長吉　口に地代が出ないと思つて、大きな熱を吹くが、コレエヽ、おれを知らないか。われが恥だが知らないか。

與次　イヤ、夢に見た事もない。



岩井半四郎

長吉　恐らく女郎の一つ買ひもする吉原通ひは、長吉船の乘り心を知らぬは野暮と唱へる、鷲の森の長吉といふ、三谷堀の土地ッ子だワ。

與次　その鷲の森の長吉が、なぜおれが酒を飲む座敷へ、泥濘を踏みこむのだ。

長吉　サア、そりやア、有右衛門さまといふお侍ひ、おれがお客の云ひつけゆゑ。

與次　侍ひならば無禮といふ事を知つて居やう。それを知りつゝ慮外ひろげば眞暗闇。勘當の一德、親もなければ兄弟もないこの與次兵衛、それでも濘を踏ん込むか。オヽ、ちつと古いが、江戸ッ子だワ。

長吉　サ、それは。

與次　サア〳〵。どうだ。

長吉　ムウ。

有右　イヽヤ、たとへ證據なくとも、この所へ立寄つたが放埒の證據。

丹下　コリヤ關屋、この所へ立寄つたは、外に何ぞ御用あつてか。さうか〳〵。假親なれど親は親、明白に云はにや武士が立たぬぞ。

關屋　義理あるあなたへ、どうも申し譯はござりませねど、いかにも有右衛門どのゝ仰しやる通り、こ

の身の放埒。

つね　イヤモシ、關屋さま、私しは何にも存じませぬが、さう云はずとも、どうか云ひ譯。

有右　何を／＼、關屋、違ひはあるまいが。

丹下　ハテ、是非に及ばぬ。

　ト思案する。

權九　イヤ、呆れたものだ。さう聞いては、早々受取るものも受納せねばなりませぬ……モシ、朝日の彌陀の厨子佛具一式、奥樣の御寄附、御用仰せ付けられた五十兩、お渡しなされて下さりませ。

關屋　いかにも越度は越度、御用は御用……ナニ、李助は居らぬか、居らぬか。

　ト李助出て

李助　ヘイ／＼、關屋さま、御用でござりまするか。

關屋　御用箱に入れ置きし五十金、これへ持ちや。

李助　アヽモシ、其お金は、最前あなたのお紙入れへ入れて上げました。

關屋　エ……紙入れへ入れさせたは、お側衆その外より、銀包みの御さんもつ。

李助　イエ／＼、彌陀へ上げる金と仰しやつたゆゑ、五十兩を入れました。

ト御用箱より銀色包みを五つ六つ出し

關屋　コレ〳〵、御さんもつは爰にございます。

關屋　ヤ、すりや、いよ〳〵五十金は紙入れ。

ト驚く。

丹下　その紙入れ、如何いたした。

關屋　サア。

丹下　サアでは濟まぬワ。

關屋　ぢやと申しまして。

トうろ〳〵する。

丹下　樣子はどうぢや。

關屋　盜人に取られました。

丹有　ヤア〳〵。なんと。

杢助　最前の巾着きりめ、どこへうせたか、何でも尋ねて。こりや斯うしてはゐられねえ。

トうろたへ、向うへあわて走り入る。

權九　ハテ、重ね〴〵の御愁傷、察し入ります。

ト嘲弄する。丹下、關屋を引付け

丹下　エヽ、爰な不所存者めが。身が方へ出入りの竹右衞門が頼みゆゑ、奧方のお側仕へに差出すには町人では叶はぬゆゑ、身が養女分にして差出し、僅かのうちに立身、今は重役の御奉公を勤めながら、いかなる天魔が見入つてか、かゝる場所へ立寄るゆゑ、大切な御寄附金まで盜み取らるゝとは、見下げ果てたる不所存者、依怙贔屓なき身が成敗、局中へは身が届け、この所より永の御暇。

有右　こりや、さうなけりや叶はぬ。

權九　イヤ、お暇が出ましては、私しへ受取る五十兩は。

丹下　この丹下が返濟までお待ちやれサ。

權九　イヽヤ、さうは成りませぬ。しわん坊の親方淨閑が手前。

與次　イヽヤ、親仁どのゝ吝嗇は兎も角も、悴のこの與次兵衞が待つて上げませう。

權九　イヤコレ、悴とは誰れが事。尤もこなたは、淨閑さまの本の子なれど、我まゝ氣まゝ、親に暇をくれと願つて勘當うけたれば、山崎屋のやの字も、こなたの自由には成りますまい。

與次　サ、それは。

權九　サア〳〵……關屋さま、丹下さま、たつた今、片付けてもらひませう。

與次　待て……いま〳〵しい。せう事がない。ほんの親でも、心意氣を惡く金を溜め、それを、ともども人喰ひ馬に、胸が惡さに見限つて勘當受け、風來者ゆゑ云ふ事が立たない。この場の押しのきくやうに、今日唯今、勘當ゆるされてくれるワ。

權九　なんと〳〵

與次　モシ、講中の市兵衞どの、ちよつと來て下さいまし。

市兵　オイ〳〵。

ト合ひ方になり、市兵衞、風呂敷包みを持ち出て來り

與次兵衞どの、わしを呼ばつしやるは、奥で段々云つた通り、親淨閑どのゝ頼み、講中一統世話をやくを聞き屆け、勘當ゆりて、内へ歸る心にならしやつたか。

與次　サア、これまで段々、親仁が手を下げる樣子、お前方の話しで聞けど、斷りを云ひましたが、急に少つと山崎屋の、旦那にならねば理屈の惡い事があつて。

市兵　得心して内へ歸る氣になれば、皆の喜び。コレ〳〵、よく〳〵なればこそ、爪へ火をともす淨閑

どのが、身形も悪からうと、羽織着物まで心付けて寄越された。

ト風呂敷を明ける。與次兵衛見て思ひ入れ。

有右　着物といへば、お暇の出た不首尾の關屋が着て居るは、お屋敷の御紋付き。

長吉　仰せつけなら引剝ぎませう、

ト立ちかゝる。

つね　アヽモシ、そりやあんまりな。

長吉　何があんまりだ。よい事をした跡は、いつでも赤恥をかくが見せしめ。容赦なく引ッ攌むが、鷲の森の長吉だ。

ト關屋を剝ぐ。關屋、長襦袢一つになる。

有右　我れ辛からば人にも辛し。

長吉　みじめな態だ。

關屋　ハアヽ。

ト締泣きに思ひ入れ。

つね　エヽ、憎々しい。關屋さん、サアノヽ、最前のわたしが着物が爰にござんす。これなと着なさんせ。

ト そこにある着物を着せ、帯を締める。

市兵 サア、與次兵衛どの、こなたも着替へさつしやれ。

與次 こりや御慮外でござります。

トやつし羽織になる。

長吉 與五郎の兄御なら、與次兵衛どの、鷲の長吉が、ちよつと逢ひたい。

與次 アノ、おれに。

長吉 いかにも。

與次 ムウ、

ト肩で笑ふ。合ひ方になり、兩人中腰になり

鷲の長吉、この與次兵衛に用といふは。

長吉 外でもない、養ひ金が貰ひたい。

與次 なんと、

長吉 おれが妹の吾妻が蟲、與五郎に云つても、部屋住みの一文なし。兄は弟を憐れめと御條目の通り弟に代つて養ひ金くりやれ。

與次　ハヽヽヽヽ、吾妻は遊所の藝者、色戀は掛け放し、それに養ひ金取らうとは、夫婦とでもいふ堅い證據が

長吉　無くつて云はうか。そん所、そこのお侍ひ、よい身になるを、かぶり振らせるこの起請。

　　　ト出して

　其許樣と夫婦の契約いたせし上は……跡は讀むに及ばぬ。與五郎さまへ吾妻……なんと證據であらうが。

　　　ト差出す。與次兵衞、最前の手紙を出し

與次　ドレ。

　　　ト取つて

　成る程、屹度した

長吉　證據であらうが。

與次　成る程……これが役に立つものか。

　　　ト折つて懐ろへ入れる。

長吉　ヤイ、與次兵衞、なぜその起請巻上げた。

與次　役に立たぬ反古の爲に。

長吉　イヽヤ、おぬしは反古とも、無駄書とも、役に立つ所で立てゝ見せるワ。

ト與次兵衛が懐ろへ手を突込むを、ちよつと立廻りに長吉、起請と思ひ、手紙を引き出す。

與次　それ程欲しくばやらうが、その一札讀んで見やれ。

ト長吉ひろげて見て

長吉　「先刻お頼みなされ候ふ彼の者の紙入れ、屹度盗みとり差上げ申すべく候ふ。」

與次　鷲の長吉さまへ佐渡七。

長吉　サ、こりやア。

ト思ひ入れ。有右衛門懐を尋ね、「なむさん」ト思ひ入れ。

與次　養ひ金、しつかりと受取れ。

ト持つたる煙管にて長吉が眉間をぶち割る。

長吉　ヤ、男の生づらを。

與次　男とは盗人根性、人の廢りもの、紙入れの詮議仕抜かうか。

長吉　なんと。

與次　云ひ分あらば與次兵衛が聞かうか。

長吉　長吉が云はうか。

ト兩人立ちかゝらうとする。關屋思ひ入れにて中を引分け

關屋　アヽモシ、わたしが事から、爰へ來なさんした與次兵衛さまとやら、紙入れの詮議も、すればする程この身の恥、思し召して下さりますなら、兎角この場を事ゆゑなう。

與長　でも。

關屋　ハテ、長吉どのとやらも、詮議されぬが、爲めであらうが。

つね　與次兵衛さま、お前も今までとは違ふ、今日からは山崎屋の子息ぢやござんせぬかいなア。

與次　成る程、こりやわしが誤まつた。勘當ゆりて、まじめな商人を忘れて、傳法か何ぞのやうに、長吉どの、氣に障つたら免して下さい。

長吉　ハテ、免せとあるに、角付合ひもなるまいかね。

與次　心が折れたら、つい向う見ずに額の疵、膏藥代ではない、持ち古しのこの煙管。

ト投げてやる。

長吉　こりやア。

與次　四十五匁、ちと重くとも持つて下さい。

ト長吉思ひ入れにて納める。

丹下　其方が濟めば關屋の身の上、奥方の手前、不便ながらも、頼まれた元へ引渡さにやならぬ。ナニ、竹右衛門々々々々。

ト合ひ方になり、障子の内より竹右衛門出で

竹右　丹下さま、委細はあれにて殘らず承りました。關屋どの、ではない、お暇が出ればお早が身の上御尤も。幻しの竹右衛門め、慥かに引取りましてござります。

權九　この場の一件は、これで濟みましたやうぢやが、濟みませぬのは五十兩。

與次　そりや、この與次兵衛が丹下さまと相對。

丹下　彼れが諸道具賣り代なして、追つて返進。最早身共立歸るが、有右衛門どのには

有右　イヤ、身共は跡に用事がござる。まづお先へ。

與次　コレ、お常さん、もし與五郎に逢つたなら、この紙屑も小判の端、身を持つ起請になりをれと、屆けて下さい。

つね　畏まりました。

ト起請を受取る。

權九　王子歸りに、こりや化かされたか知らん。

與次　權九郎、王子には相應な、一つ穴の野良狐、きよろ〳〵せずと供をしろ。

市兵　サア〳〵、早くござれ。

ト丹下、關屋が着物を抱へ、與次兵衞、市兵衞、權九郎、花道へかゝる。關屋あと見送り

關屋　アモシ、丹下さま、これまでの御恩を無下に、この身の不所存、御免なされて下さりませ。

ト殘り多き思ひ入れ。

竹右　心がらとはいひながら

有右　お羽利きの奥女中が

關屋　見すぼらしいこの姿。

權九　勘當の極樂とんびが

與次　分限の旦那と早がはり

つね　悟れば佛。

長吉　迷へば修羅。

關屋　夢と思うて。

　　　　　トほろり。丹下、有右衞門、關屋思ひ入れあつて

與長　サア、ござりませ。

　　　　　ト唄になり、丹下、與次兵衞、市兵衞、權九郎向うへ入る。有右衞門、長吉奥へ入る。屏風の内より

　　　　　吾妻、與五郎、そつと出で來り

與五　お早さま、まんまと首尾よう

あづ　お暇を。

關屋　モシ。

　　　　　ト時の鐘、合ひ方。

御首尾がようて、モウ取り憎いお暇も、お前方の世話で望みも叶ひ、嬉しうござんす。

竹右　ヤアヽヽ。コレお早、お暇の出るその身持ち、意見云はうとも思ふところに、こりやどうだ。

あづ　サア、お早さまの不身持ちは、お暇のぞむ拵らへ事。

竹右　なんだと。

關屋　譯を云はねば、御合點が參りますまい。竹右衞門さま、堪忍して下さりませ。お前が賴んで鴻野の

お屋敷へ、御奉公に上がりましたも、云ひかはした男が有るゆゑ。

與五　折角上がりなすつても、其お人はお國詰めとやらで、顏を見る事さへならず、名ばかり聞くを樂しみに、勤めてお出での其ところが

あづ　不慮の事で其お方は、他國なされたさうなゆゑ、たとへいづくの果までゝも、跡を慕うて行かしやんすお心で

つね　御恩のあるあの丹下さまとやら、幻しさん、お早さんが御屋敷の、お首尾がよいさうにござんすゆゑ、お暇も願はれず、それで彼方からお暇の出るやうにと、今日の趣向も

關屋　みんなわたしが此お方々に、譯を云うて頼んだゆゑ。

竹右　それでもアノ三朝と

與五　サア、その三朝はこの與五郎、お常さんが呑みこんで、音羽屋へ人をやつたところが、今日は二番目の稽古とやらで、よんどころない斷りとやら。

あづ　わたしに相談をしなさんすゆゑ、幸ひわたしが云ひかはして居る與五郎さん、色の慾目ぢやないが、三朝さんに生寫し。いつそ與五郎さんを三朝さんに仕立てゝ、斯う／＼してはどうであらうと、作者はわたし。

つね　それから音羽屋へ人をやつて、三朝さんの羽織や着物を借り寄せ、急に役者衆を拵らへて、お早さんの望みの通り

與五　お暇の出るやうに、三朝氣どりで、どうか斯うかやツつけ、お早さんの望みも叶つたといふもの。樣子といふは

女三　この通りでござんすわいなア。

竹右　したが、云ひかはした男の他國、行くへを尋ねて逢ひたいばかり、結構な身の上を、拵へ事して暇を取るとは、男の意氣地も女の操も、そこらだ〳〵。お早ぼう、出かした〳〵。

關屋　お前に話したら、叱らさんせうと思ひの外、喜んで下さんして、モウ日本晴れがしたやうに、嬉しうござんすわいなア。

竹右　時に、改め云ふには及ばねど、おぬしが親甚五兵衞とは呑み友達、死ぬ枕頭へおれを呼んで、兄の甚兵衞めは、あのやうな惡者、親のない後は、どのやうな見苦しい奉公にも出し兼ねない奴、わしが死んだら、あまめを世話してくれと賴んで往生。それからおれが引取つて置くうちに、兄めは江戸を帆をかけて、上州あたりへ行つたと聞いたが、今は千住の先の、竹の塚に居るとの噂。心が直つたら、これにも尋ねて逢はせようと思つて居るが

關屋　イヤモウ、兄さんの事は後へ廻して

竹右　その男の行くへを尋ねる、といつたところが長の旅。

與五　路銀の用意は

あづ　ございますかいなア。

ト奥より

佐渡　その金はわしが持つて居ります。

ト合ひ方になり、佐渡七出で來る。皆々思ひ入れ。

與五　ヤ、こなたは先刻の

佐渡　佐渡七といふ巾着切りサ。

あづ　エヽ。

佐渡　わしがこんな態で、書鳶と聞いたら、怖い者とも思ひなさる筈。成る程これまでは、兇状さる度遠島へも、七度行くところを、どういふ廻り合せか遁れたゆゑ、人が佐渡七々々と、仇名を呼ぶ程に悪い者であつたが、今日奥山の茶屋で、あのお女中樣が片陰へ呼ばしつて、斯う〳〵した入り譯云ひ交した男の行くへを尋ねに出ねばならぬが、御奉公の身分なれば、着類諸道具も賣り代なさ

れぬ。それゆゑお上の御金なれども、こなたの盗んだ分にして、戻して下さい。お屋敷への濟み方は、右の品々が引あて。男と見かけて頼むと一言。

竹右　そんならお早が、おぬしを頼んで。

佐渡　サア、女でさへ一旦云ひ交した男を變ぜぬ深切。これを思へばアヽ、おれは淺ましい根性、もと盜人は不義理からと、ふつと思つて惡念發起、呑み込みましたと請合ふ矢先、長吉どのゝ又ぞろ頼み。

關屋　様子を聞いて、最前の紙入れも、皆この人と云ひ合せ。

與五　すりや、この與五郎が難儀も、佐渡七どのが

佐渡　根性を直す手始めの立役。摺かへて駈出した、お前の紙入れは爰に。サア、よく金を改めて、受取つて下さいまし。

ト以前の紙入れと金を渡す。

あづ　ほんに、見たところは怖いが

つね　優しい心ざしぢやわいなう。

竹右　惡に強いは善にも強し、これからおれが無盡でもして、商ひでもさせてやらう。

佐渡　關取、お頼み申しませう。

つね　イヤモウ、何もかも首尾よういた、お早さんの身の上。これからそのお方にも、ツイ逢はしやんして。

あづ　それいなア、相惚れ同士、仲のよいのが見たいわなア。

關屋　さう云うて下されますと、どうやらモウ其お人に、逢うたやうな心がして

與五　イヨ、嬉しがり樣め。

關屋　アレモウ、弄つておくれなされます。それはさうと、其お人に逢うたら、眉も落し

竹右　女房風にやらにやアならない。

關屋　形も高等にせにや成るまいし

佐渡　飯も朝夕取り膳で

三人　エヽ、羨ましい事ぢやなア。

竹右　時に肝腎の事を聞かなんだ。お早や、おぬしが云ひ交してゐるといふ人の名は。

關屋　鴻野の御家中、南方十次兵衛さまといふお方。

佐渡　待ちなさい。その南方十次兵衛といふ人は、八幡の侍塚で腹を切つて、その首が千住で獄門に懸

つて居ますぞえ。

關屋　エヽ。

竹右　成る程、先刻丹下さまの話し、上の空で聞いて居たが、その十次兵衛といふ人は、獄門に懸つたとの噂。

關屋　エヽ、そりやマア、ほんの事でござんすかいなア。

竹右　ナニ嘘を云ふものか。

關屋　モシ、お前もほんの事でござんすかいなア。

佐渡　なに僞りを云ふものかな。

關屋　そんならアノ

竹右　死んだよ。

關屋　そんなら、いよ〳〵

佐渡　首になつてるよ。

關屋　ヤア〳〵、昨日までも今までも、行くへを尋ねて、逢はう〳〵と、樂しみに暮らして居たが、こりやマアどうせう、何とせうぞいな。ハア。

ト狂氣の如く、うろ〳〵して泣き落す。與五郎吾妻お常も、あちこち付まとひ

あづ　モシ、お早さん、そりや尤もでござんすが、其やうに氣を揉んでは、煩ふわいなア。

與五　それ〳〵、何事も約束事と、諦めるがよいわいなう。

つね　こりやマア、氣の毒な事になつたわいなア。

ト皆々氣の毒なる思ひ入れ。

竹右　コレ、お早、どうするものか。と云つたとて死んだ子の年。マア〳〵、さうして居て、癪でも起れば惡い。コレ、佐渡七、これをおれが内へ送り屆けてくりやれ。

佐渡　合點でごんす。サア、お早さんとやら、わたしと一緒に歩びなさい。

ト關屋物云はずに、背負守りの紐にて腹帶して、茫然と思案して居る。此うち向うより藤助出で

藤助　モシ、モシ與五郎さま、親方才兵衛が歸りまして、吾妻さんの手附け、今日までのお約束、埒が明かねば此方のお侍ひ、有右衛門さまの手附け受取る。たつた今返事聞いて來いと、云ひ立てゝの催促でござります。

與五　サア、その手附けに五十兩は、用意して持つて居るが、マア、半金受取つて。

藤助　イエ〳〵、百兩でなくば受取るなと、此お常さんには似ない兄御の氣質。

あづ　與五郎さん、手附けが濟まいで、ひよつと侍ひの手附が濟めば、わたしや生きては居ぬぞえ。

與五　サア、そりやわしも同じ事。どうぞお常さん、仕樣は

つね　サア、兄さんでも、愛想の盡きた無得心。

與五　こりやマアどうしたら

あづ　よからうぞいな。

ト此うち關屋、いろ〳〵思案して

關屋　それ。

ト以前の五十金を投げる。

與五　これは。

關屋　申し、與五郎さん、今日のお世話も他生の緣、手附けの高は百兩とやら、足らぬ五十兩は、わたしが貸して上げませう。

あづ　ヤ、そんならアノお前が

佐渡　わしが持つて來たこの金を

竹右　貸しておぬしは

關屋　サア、云ひ交した男が、生きて居るといふではなし、どうでこの身は

　ト思ひ入れありて

いらぬ金、せめて役に立てるが、あの世の爲。

　ト金を與五郎が前へ突きやる、

與五　そんなら貸して下さるか。

竹右　あゝ云ひ出しては挺でもいかねえ。

與五　忝ない。コレ、爰に五十兩。

　ト懐ろの内がひより出して

これで丁度百兩。

あづ　お常さん、きつと渡して下さんせえ。

藤助　わしは有右衛門さまに、この事をお届け申さねばならぬ。

　ト下座へ入る。

つね　イヤモウ、この金さへ有れば、兄さんに無理は云はさぬ。受取はわしがきつと……イヤ、受取といへば、最前兄御の與次兵衛さんが、お前に上げてくれいと、コレ

ト起請を渡す。

與五　こりや、吾妻が起請。

あづ　失うたと思うたに、戻るといひ、手附けも濟んで此やうな

與五　嬉しいか。

あづ　これが嬉しうなうてかいなア。

竹右　二人の喜びに引替へ、お早が身の上。早く内へ行つて、酒でも飮みやれ。

あづ　お早さん、御恩は忘れぬ。

與五　佐渡七どのとやら、賴みましたぞ。

づね　わたしは手附けの事を、兄樣へ早う。

竹右　おれも一緒に、コレ、お早、もう、奥へ行くぞよ。

ト關屋、いろ〳〵思ひ入れあつて

關屋　モシ、その千住へは、爰からどう行きますぞいな。

佐渡　小塚ッ原へは、山谷を下りて田中を拔け

竹右　左へ附いて眞直ぐに行けば

關屋　お仕置の場所とやらかえ。

竹右　さうサ。

關屋　忝なうござんす。

ト時の鐘、流行り唄にて、ツイと向うへ走り入る。竹右衞門、お常思ひ入れあつて奥へ入る。ト奥より有右衞門、山谷の鐵、藤助、頰かむり、尻からげにて窺ひ出で、與五郎へかゝるを、吾妻さゝへ

あづ　ヤア、こりや與五郎さまを、どうするのぢや。

有右　手附けが濟んだら破れかぶれ。

鐵　與五郎、われに意趣がへし。

藤助　たゝんでくれろと頼まれた。

三人　うしやアがれ。

ト揉み合ふ。吾妻「アヽコレ」とさゝへる。下の方より長吉、頰かむりにて出で、この體を見て、枝折り門の笠木にて、この三人を毆りすゑる。三人、はう／＼下座へ逃げ込む。

與五　ヤア、どなたか知らぬがこの場の難儀。

あづ　救うて下さんして、有り難うござんす。

長吉　禮に及ばぬ、妹、おれだ。

　　ト頬かむりを取る。

與五　ヤ、長吉どのか。

あづ　兄さん、日頃お前が送る侍ひづらを、叩かしやんしたは。

長吉　氣遣ひせまい。今日からおれも與五郎さん方。

あづ　そりやマアどうも。

長吉　疑がふは尤もだが、最前兄御の與次兵衛さんに逢ひ、頼むとの一言、呑み込んだ證據は、貰つたこの煙管。

　　ト與次兵衛に貰ひし煙管を見せる。

與五　成る程、こりや兄貴の好み、覺えがある。

あづ　そんならお前も共々に。

長吉　世話をするのも侍ひへは內證、コレ、手附けが濟んだやら腹立ち、與五郎さんに、どんな仇をせまいものでもない。ちつとも早くこの所を

　　ト連れて行かうとして

イヤ、歩いては不用心、駕籠の衆や〳〵。

ト下座より以前の駕籠屋出で

駕籠　ハイ、お召しなされませ。

長吉　サア〳〵、これへ乘つて、少つとも早く。

與五　そんならおれは歸るほどに。

ト駕籠に乘る。

あづ　明日の朝は早う便りを、

長吉　ハテ、おれが送つて、歸りに返事は……駕籠を急いでもらはう。

ト三重、時の鐘にて、與五郎の乘つた駕籠に長吉付き、向うへ入る。吾妻跡見送り居る。奥よりお常出で來り

つね　モシ〳〵、吾妻さん、いま侍ひと勘治北石が話し、與五郎さんを騙して連れ出し、存分にすると、三人連れだつて、土手の方へ行つたわいなア。

あづ　ヤ、そんなら矢ッ張り兄さんも

つね　侍ひと一つ、與五郎さんが氣遣ひな。

あづ　こりや斯うしては居られぬわいの。

ト帶引締め行かうとする後へ、藤助、山谷の鐵出で

兩人　さうはさせまい。

トかゝる。竹右衞門出で、兩人を兩手にて捕へ

竹右　久し振りで揉んでやらうか……ヨンヤサ。

ト山谷の鐵を見事に投げる。

あづ　これは。

つね　構はずとござんせ。

あづ　さうぢや。

ト屋體囃子に時の鐘にて、吾妻いつさんに向うへ走り入る。竹右衞門は藤助を引付ける。山谷の鐵、起上がるところを、お常押へる見得にて、よろしく、ひやうし

幕

ト幕の内、聖天囃子にてつなぎ、直ぐに引返す。

本舞臺、三間の間、高足の土手、なだれに棕櫚の葉にてしたる草生ひ茂り、尤もこの土手廣くして能き

所に前へ出し、後ろ黒塀に白壁の土藏二つ、田町の裏を見せたる道具。爰に北石、勘次、鉢巻き尻からげ、息杖を持ち、駕籠の傍に立ちかゝり、長吉、有右衛門は與五郎を引付け居る。屋體囃子にて幕明く。

與五　すりやこの與五郎を、こなた衆は、騙して爰へ連れて來たのか。

有右　知れた事だ。吾妻に身共が惚れたといふは嘘、誠はお國許の重役、倉岡丈左衛門どのが執心で、頼まれて身請けの相談。

北石　得心して行けば仕合せ、藝者仲間の、とも〴〵吾妻へ勸めても、おぬしといふ蟲が有るゆゑ不得心

勘次　内は名代の分限でも、自由にならぬひつてん客、そこでおいらが有右衛門さまに附いて、おぬしに思ひ切らせるのだ。

長吉　妹が出世を妨げるのみならず、最前うぬが兄の與次兵衛に、眉間を割られた意趣がへし、苛なんで腹をいるのだ。妹と退いたと吐かしてしまへ。

與五　ムウ、兄貴の煙管を證據に實らしく見せ、人を騙す人でなし。どのやうに云はうと、吾妻と退いたと云ふものか。

有右　何を小癪な。云はねば有右衛門が斷うするワ。

ト握り拳にて打つ。

勘次　それ〳〵、退かねば小猿勘次が斯う引拔くワ。

北石　頭は丸いが、氣は角の有る石井北石。

有右　話しの種だ。この野郎を存分にしろ。

皆々　合點だ。

ト皆々して與五郎を苛なむところへ、屋體囃子にて向うより吾妻走り出で來り、與五郎を圍ふ。

長吉　わりやア妹

三人　吾妻、どうして。

あづ　どうというたらこの樣子、聞く所で聞いて來た。サア、有右衛門さん、その外どなたも男のやうにもない、たつた一人の與五郎さんを大勢して、ほんにお手柄な事でござんすなア。

三人　サ、それは。

あづ　サア、わたしが來るからは、指でもさゝす事は……と云うたところが女子の事、殺すなりと突くなりと、存分にしなさんせ……わたしに疵が附いたなら、お前方も、頼まれてござんした、丈左衛門さんとやらへ濟まうわいなア。

三人　サア、それは。

あづ　知つて居やんす。お前は表向き、内證は丈左衞門といふ田舍のお侍ひ、玉屋で一度出たお客の指し金といふ事は、知つて居るわいなア。

有右　ア、コレ、與五郎こそ存分にすれ、おぬしにちつとでも、手出しをしては、重役の丈左衞門どのへ。

あづ　サア、濟まぬによつて切らしやんせ。ぶたしやんせ。

ト有右衞門へ身を摺り付ける。有右衞門小さくなる。

サア、勘次さん、お前も猿智慧な。與五郎さんをするやうに、わたしを叩かしやんせぬかいな。

ト勘次へ右の通りする。勘次うしろ向く。

サア、北石さん、お前もかみ新と云はれた時分の力瘤を出して、どうぞしなさんせぬかいな。

ト北石に右の通りする。北石こまる。吾妻思ひ入れあつて

ホヽヽ、女子のわたしが、それほどにも怖いかえ。與五郎さんと一緒に殺さるれば本望ぢや。吉原の藝者にも、少つとは蟲があるわいなア。

三人　こりやア挺でも行かねえワ。

長吉　ようごんす〱。この料理方はわしがするほどに、お前方はこの長吉に任して、八百善へでも行つて、上つてござりまし。

勘次　そんなら親分、八百善を叩き起して。

北右　有さまと一緒に待つて居るほどに。

有右　必ず吾妻が得心するやう、長吉ぬかるな。

ト脇差を長吉へ渡す。

北勘　サア、ござりませ。

ト時の鐘にて三人奥へ入る。吾妻思ひ入れあつて、長吉が胸づくしを取る。合ひ方になる。

長吉　こりや何をしやァがる。

あづ　何をするとは兄さん、エヽ、お前はナア。改め云ふではござんせぬが、元お前は、ほんの兄さんぢやござんせんぞえ。わたしが少さい時、二親に死別れ、田舎の伯父さんが引取つて行かしやんすところを誘拐したとやら……江戸に身寄りのなさに、其まゝいつともなしに妹というて置いたも、この身を二枚證文の、藝者に賣らう爲め。わたしや餘所で聞いて知つて居るぞえ。でも、兄といふ名があればこそ、ぬしに云ひ交しても、これまでの貢、マア何ぼぢやと思はしやんす。そ

れにマア、あのやうな悪者と一つになり、ようも與五郎さんを。

長吉　やかましいわえ。昔はどんな事を仕やうと、今は妹のうぬ。部屋住みのしみつたれに、くッ附けては置かれない。サア、與五郎め、思ひ切つたと吐かせ。

與五　それほど云ふなら思ひ切らうが、コレ、此やうに起請まで寄越した吾妻、あれが得心する心なれば、その上に返事しよう。

長吉　サア、あまめ、與五郎と切れてしまへ。

あづ　否ぢや〳〵。

長吉　否だと吐かせば斯うだ。

　ト縫ひぐるみにてぶつ。

與五　こりや又あんまり。

長吉　寄りやアがるな。おれが妹をおれが折檻、うぬも邪魔をすれば斯うだワ。

　ト與五郎をぶつ。

あづ　こりや與五郎さんまでを。

長吉　ぶつてもよい。おれは小舅、われが爲にも兄だぞよ……コレ。

引返し大立図



ト與五郎が持つて居る起請を引たくり、讀む。

「夫婦の契約いたし候ふ」……女房の兄なら、うぬが爲めにも目上だ。弟め、妹め。

ト兩人を打すゑ

手出しをして、磔刑にかゝりたいか。

あづ　すりや兄を枷に。

與五　舅を云ひ立て、手出しもならぬか。

兩人　エヽ。

ト口惜しがる。

長吉　その面はなんだ。口惜しくば、サア、これで切れ〳〵。

ト與五郎が脇差を抜き、與五郎に持たせ、我が體へ摺り付け

おれを切るとも、縁を切るとも、二つに一つの返事をしやアがれ、

あづ　否ぢや〳〵、どのやうに云うても、起請に書いた神おろし、夫婦の縁は切らぬわいなう。

長吉　エヽ、いま〳〵しい。さう吐かせばこの起請、斯うして仕まふワ。

ト引裂き

斯うして、おのれが縁を切つてくれるワ。

與五　縁が切るれば、他人の長吉、覺えたか。

ト長吉が突付けた脇差を取つて、ぐつと突込む。これにて立廻りあつて、長吉聲立て

長吉　ヤ、切つたな〳〵。

トしがみつく。立廻りよき切かけに、誂への鳴り物になり、三人、草土手の上にて摑み合ふ模様の眞の面白きタテ。此うち長吉、與五郎が小指をくひ切る。トゞ吾妻も手傳ひ、思ひのまゝに仕とめる。時の鐘、忍び三重にて、とゞめをさし、これより兩人震へ出し、こはげ立つて腰の立たぬ思ひ入れにて、起請の破れしを拾ひ、よきほどに兩人花道へかゝる。

ト奥より土手の上へ與次兵衛、小提灯を灯し、何心なく出で來り、長吉の死骸につまづき、明りにて見て

與次　こりや人が

與五　エ。

ト驚く拍子に、與次兵衛、手提灯をとり落す。ト拍子木のかしら、チョンと打つ。與次兵衛、こなしあつて

輿次　ハア、、生醉ださうな。

トこれをキザミにして、よろしく、ひやうし幕の內、時の鐘、三重にて、與五郎吾妻向うへ入る。

幕

三幕目

千住札の辻の場
仕置き場の場

役名――甚兵衛女房、お賤。入間彦助。質屋、善六。輿女中、關屋實ハ甚兵衛妹お早。輿兵衛實ハ南方十次兵衛。駕籠の甚兵衛。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて高札場、下の方葭簀張りの掛け茶屋、後ろ黒幕、茶見世の床几に仕出し三人、善六、質屋にて腰をかけ、銀平、茶屋の亭主にて茶を汲み居る。在郷唄にて幕明く、

銀平　サア〱、どなたもお茶をお上がりなされませ。

仕一　時に御亭主、今日はこの千住の札の辻に、追放者があると聞いたが、ほんの事でござるか。

銀平　左様でござります。どんな惡い事をした奴か知りませぬが、以後の見せしめ、この御條目の下で

拂はれるとの御沙汰がござります。

仕二　この有り難い世の中で、強請りをしたか、巾着を切つたか。

仕三　但し、親の腹の上でも乗つたか。何でも惡い奴でござらうて。

善六　イヤ、今日爰で拂はれる奴は、駕籠舁きを商賣にする、甚兵衛といふ者。わしやア懇ろだが、牢へ入る科を仕出すとは、人の心は知れないものサ。

仕三　どんな奴か見て行きたうござるが、日脚も七ツ下がり。

仕二　拂ひ者より腹の用心、麥飯でも喰ひませう。

仕一　サア／＼、ござれ。

トまた在郷唄になり、仕出しは向うへかゝる。此うち花道よりお賤、やつし世話女房にて、前垂れに着物を包み抱へ出で來り、仕出しは摺れ違うて揚幕へ入る。お賤舞臺へ來る。

善六　オヽ、こりやお賤どの、何をしてござる、埒の明かぬ。

うづ　オヽ、善六さん、そんならモウこちの人は、見えられましたかいな。

善六　イヤ、まだ來はしないが、甚兵衛の來ぬうちに、何かよく極引きをしようと、わしは先刻から來て待つてゐるわな。

しづ　サア、わたしも早う來ようと氣は急けど、五十日餘りも牢舍して居る甚兵衛どの、内へ連れて行かぬまでも、着るものや何やかや、見苦しうないやうに、その支度やら、お家主への屆けやら、嬉しいと忙しいで、爰へ來るにも道を違へ、ほんに、急けば廻り道して來たわいなア。

善六　そりやア尤もでごんすが、甚兵衛どのが赦免するも、この善六が庇でござるぞや。

しづ　そりやモウ、云はいでも知れて居りますわいなア。

善六　そればかりではない、五十日餘りの内の暮し。

しづ　それも存じて居りますわいなア。

善六　まだ／＼、牢見舞から町役人の附け屆け。

しづ　きつと忘れは致しませぬわいなア。

善六　サア、そのつゞまるところを相談して置いたが、それはよいかえ。

しづ　ハテ、女子でこそあれ、わたしも甚兵衛が女房しづ、御對談申した事を、間違うてよいものでござんすかいなア。

善六　それさへ極めれば……アヽ、しやべつて咽喉がかわく。御亭主、茶を一杯下さい。

銀平　ハイ／＼、ぬるくして上げます。

ト善六、茶を呑み

善六　時に御亭主、科人はもう來ようかの。

銀平　さればでござります。御代官様の事、私しどもにも知れませぬ。

善六　程の知れない事、殊に亭主が追放に逢ふを、側で見ても居られまい。ナウ、お賤どの。

しづ　左様でござります。ちつとの間なら、主の心も直る爲め、天王様へでもお參り申して參りませうわいなア。

善六　そんなら、牛に曳かれて善六も一緒に……御亭主、天王様はどつちだの。

銀平　私しも水を一下げ汲みながら、敎へて上げませう。

善六　そんならお賤どの。

しづ　御一緒に參りませう。何ぢややら、足も地に付かぬほど嬉しうござります。

善六　あのやうな恐ろしい者でも其やうに。

しづ　ハテ、亭主と思へば、可愛うござりますわいなア。

ト唄になり、銀平、手桶を提げ先に、善六お賤付いて下座へ入る。ト直ぐに時の太鼓になり、向うより菖蒲革股立の侍ひ二人、棒を持ち、跡より甚兵衞、お仕着を着たる科人にて縛られ出る。この繩を菖蒲

革股立の侍ひ扣へ、跡より彦助、股引、ぶッ裂き羽織の侍ひにて、警固して出て來り、直ぐに舞臺へ來て

侍皆　下に居らう。

甚兵　ヘエイ。

トよろしく下に居る。此うち彦助上へ通り

彦助　コレヤイ、甚兵衛、其方こと、此方領分竹の塚にて、辻駕籠を渡世に致し、商賣は出精せず、喧嘩博奕を心がけ、無法の舊惡。殊に此方領分草加宿にて金百七十兩、騙り同然の掠め金、殘らず酒食諸勝負に遣ひ捨て、死罪にも仰せ付けらるべきところ、妻しづ、右の金子先かたへ相濟まし、雙方より度々のお慈悲願ひといひ、この度鴻野家のおめでたに付き、命を助け、この所より追放仰せ付けらるゝ。お慈悲有り難う存じ奉れ。

甚兵　有り難うござります。

彦助　向後性根を改め、おのれ眞人間にならぬと、聊かな惡事でも、今度科を犯し入牢なすと、命がないぞ。

甚兵　イヤモウ、血の氣の多い向う見ず、人の意見も空吹く風、喧嘩かうじてぶつたくり、強請り騙りの詞質、とつても〳〵燒け石に、水責め火責めはなんの事、二言めには大それた、暗い所で御扶持

の飯が喰ひたいと、口から出次第無法が高じて、これで丁度三度目なりや、今度は赦免はあるまいと、身にしみ〴〵と後悔いたして居りました。慈悲は上から御追放とは、有り難いやら冥加ないやら、イヤモウ、これに懲りぬ儀はござりませぬ。

ト空泣きする。

彦助　後悔し居つたとはまだしも。以後をきつと愼め。……ソレ、彼奴が縛め解け。

侍皆　畏つてござります。

ト甚兵衛が繩を解く。

サア、いづれへないとも立退きをらう。

ト甚兵衛立たうとして立たれぬ思ひ入れ。

甚兵　ハイ、久しく牢に居りましたせゐか、どうも急に足腰が立ちませぬ。

侍皆　のぶとい事を。早く立ちをらう。

彦助　コリヤ〳〵、荒氣に致すな……そりやその筈、しばし猶豫は致してくれう。氣を休めて早く立退け。

甚兵　有り難うござります。

彦助　身は當所の庄屋へ、外御用に立寄れば、其方ども、直さま役所へ。

侍皆　畏まつてござります。

彦助　コリヤ甚兵衛、必ず領分へ足踏みは叶はぬぞ。

ト合ひ方、時の鐘にて、彦助は下座へ、侍ひは向うへ入る。甚兵衛跡見送り、立上がつて舌を出し

甚兵　兇狀を着る時、弱い音を出すは科人の付け目。臑腰立たぬと云つたら、ほんの事だと思やァがつて、荒氣にするなとは大笑ひだ。苧殼で拵らへた體ではあるまいし、こんな事で弱つてお堪りがあるものか。大べら坊め……時に、赦免して出は出たが、ちやんころ無しでもつまらない。これから千住の權が所へ、いたぶりに行かうか……但しは騙りを思ひ付かうか。なんでも金の蔓を工夫せねばならない。

ト手を組み思案、この時うしろへ彦助取つて返し

彦助　甚兵衛、おのれ、まだ心が直らぬからな。

甚兵　ヤ。

彦助　斯程の糺明にも、魂ひを入れ替へぬからは。

甚兵　また繩かけて曳かつしやるか。

彦助　イヽヤ、目をかけて贔屓する。

甚兵　どうしましたとえ。

彦助　サ、身共は入間彦助というて、鴻野の重役、倉岡丈左衛門どのと同腹中の者。即ち丈左衛門どのの密事。

甚兵　モシ。

ト合ひ方になり、甚兵衛あたりを見廻し、摺り寄つて

して、その仔細は。

彦助　兼ねて其方も存じをると承り及ぶ、丈左衛門どの、主家を窺ふ手始めに、南方十次兵衛めが預かりの胡蝶の香合、先達て盗み取り、まんまと科を十次兵衛に塗り付け、八幡侍塚に於て自滅させ、首は即ち、昨日領地千住に於て、獄門に掛けさせ、事は濟めども、なほ詮議きびしい右の香合。密かに其方に預け置けよと、今日の赦免も達ての執成し。

甚兵　成る程、その丈左衛門さまに、前かた若黨を勤めをつた私し、その緣を以て、度々御用も勤めたこの甚兵衛、さほど主従の事を思はつしやるなら、騙りの金百七十兩、償のはいでも、御赦免の執成しはありさうなもの。

彦助　ハテ、愚かな事を。たとへ金を償はうが、いはゞ大金、命助かつたは、全く丈左衞門どのゝ執成し。

甚兵　成る程、今々思へば、わしもどういふ事で、赦免したかと思つて居ました。

彦助　命の恩を重いと思はゞ

甚兵　その胡蝶の香合とやらを

彦助　暫しが内、大切に預かつて居やれサ。

ト懐ろより香合の箱を出す。甚兵衛取つて明けて見て

甚兵　すりや、これが大切の……鴻野の重寶、胡蝶の香合。

ト思ひ入れ。

しつかりと預かつた。

彦助　必ず人手に。

甚兵　ハテ、馬鹿念おさずと、落ち付いてござりませ。

彦助　我れ〱はじめ丈左衞門どのゝ望み叶はゞ。

甚兵　わしも駕籠舁きをやめて

彦助　息杖も槍にかへるワ。
甚兵　こいつは野暮でない相談だわえ。
　　ト香合の箱を懐ろへ入れる。合ひ方になり、下座よりお賤善六出で來り
しづ　ヤア、こちの人、甚兵衞どのかいなア。
甚兵　オヽ、わりやァ女房……質屋の善六どん。
しづ　ようまめで居て下さんした。逢ひたかつた〳〵わいなア。
　　ト取り縋り、嬉し泣きに泣く。
甚兵　エヽ、べら坊め、外聞が惡いワ。
　　ト突のける。
しづ　ぢやというて、これが逢ひたうあるまいか。なんぼ邪慳なお前でも、夫ぢやと思や、牢屋といふ所は、きつう怖い所ぢやと、悲しくあるまいか、案じまいか。
甚兵　やかましいわえ。よまい事なら內へ行つて吠えやアがれ。
彦助　イヤ〳〵、女房の身では尤も。堪能するほど聞いてやりやれサ。
しづ　申し、こちの人、あなたは、どこのお侍ひ樣ぢやえ。

甚兵　サア、あなたは今日おれを追放の
彦助　入間彦助といふ鴻野の役人。
しづ　ムウ、そのお役人様と、科人のこちの人と、念頃な今の挨拶、
彦助　ヤア。
甚兵　イヤナニ、念頃な事があるものか。悪事を犯したこの甚兵衛、御領分に叶はぬ、爰に又何か嗅ぎ出して御意見……サア、行け、早く歸れと、仰せ付けられて居るところだ。
ト彦助に呑こます。
彦助　成る程〳〵、爰に長居は叶はぬ。身共も立歸るほどに、必ず今の儀を。
甚兵　サア、いま仰せ渡された儀は、きつと相守りまする。
彦助　然らば甚兵衛。
甚兵　お役人樣。
彦助　必ず領分へ立歸るな。
ト唄になり、彦助向うへ入る。
善六　さて甚兵衛どの、無事に赦免してめでたうござる。喜びやら何やかに。

甚兵　善六どん、面目次第もない。五十日ぶりで娑婆の人に逢ひます。

しづ　エヽ、縁起の悪い。死んだ者か何ぞのやうに。サア〳〵、その着物脱いで、これと早う着替へさんせ。

ト前垂れより着物、鼻紙、莨入れを出し

サア〳〵、鼻紙も莨入れも持つて來たわいなア。

甚兵　こりや御臺所お出かし。なんだ、着物は結城木綿、鼻紙は半紙の四つ折、莨入れは、せいしつのあぶみ。

しづ　ほんに、それで昨夜から、忙がしい目をしたわいなア。

善六　イヤモウ、鬼の女房に鬼神ではない、佛といはうか、神といはうか、結構なお内儀、必ず仇に思はつしやるな。

甚兵　とんと合點が行かない。おれが内濟の尻金が百七十兩、牢見舞ひも三日にあけず、今日の支度や何やかや、〆めて見れば餘ッほどの金高、この金の出所は。

しづ　サア、その金の事も、案じさんすは尤もぢやが、マア〳〵、めでたい、無事で赦免されしやんした祝ひに、ナ、善六さん。

善六　それ〳〵、ちよつと杯をささうと、あそこへ買うて來た、こなからと中かさ。

ト袂より貧乏德利と中がさを出す。

甚兵　こりやアよく氣が付いた。牢内へ行つてから據ろなく禁酒。ドレ、久しぶりで、やつつけばゝ
アに茶ぢやアない、酒にせう。

ト善六つぐ。甚兵衞飲んで、お賤思ひ入れにてこの酒を飲むうち

善六　さらばお肴を進上いたさう。

ト腰より證文を出して甚兵衞にやる。甚兵衞取つて開き

甚兵　「遊女奉公人請狀之事……一、此しづと申す女、三年季二百兩に相定め、遊女奉公に召抱へ候ふ
處實正也」……ヤ、そんならわりやア、身を賣る氣か。

しづ　こちの人、堪忍して下さんせ。これが別れでござんすわいなア。

甚兵　べら坊づらめ。駕籠舁きこそすれ、おれも甚兵衞さまだ。女房賣つて濟まうと思ふか。なぜこん
な事をしやアがつた。

しづ　これもみんな、お前の心がらぢやわいなア。

ト胸ぐらを取る。合ひ方。

コレ、こちの人、これが否さに、平常わたしが云はぬ事か。知らぬ呉服より知つた小糠、商ひとやら、細い儲けも、正道に精出して下さんせ、夫婦共挊ぎにしたならば、過ぎられぬ事はあるまいほどに、惡氣をやめて下さんせと、意見いふのも糠に釘、まだしも慰み惡酒、揚句の果に、

ト思ひ入れ。

此やうに牢屋へ入ろ科を仕出かし、償ひ金何やかや、力づくにも、器量にも、つばめたところが二百兩、なんのわたしが手仕事の、女髮結ひ位して、大枚が調ひませうか。飽かぬ別れも不埓ゆゑと、心を入れ替へて下さんせえ、……苦界といへど現在の、お前の命がはりと思や、わたしや笑うて。勤めに行きますわいなァ。

ト縋り泣く。

甚兵　べら坊め、どんな事があらうとも、われをふんばりに賣つて濟むものかえ。

善六　イヤ、甚兵衞どの、お詞のちうだが、知つての通り、わしやァ質屋の手代、ぜけん中次ではあるまいし、こんな世話をする筈もござらぬが、心安くするお賤どの、さて斯う／＼いふ金の要る道どうしたらよからうと、ぶつけて相談されたが因果の始まり。そこで思案を付けて、心やすい判人に約束し、こなたが出てさへ來れば直ぐにの約束で、親方の金を二百兩、證文書いて間に合せ

女房の勤めがさせられぬと云へば、こなたが、この二百兩濟まして出るか。

甚兵 サ、それは。

善六 命がはりの恩金、甚兵衛どのだけに踏まれまいが。

甚兵 サア。

善六 サア〳〵、この金の筋道は。

甚兵 ハテ、やかましい事はない。質をやらう。

善六 エ。

甚兵 おれが大事の預かり物だが、寶は身のさし合せ。ソレ、二百兩の抵當。

ト以前の香合の箱を出して渡す。

善六 これを二百兩の質とは。

甚兵 それこそ下総鴻野の寶、胡蝶の香合。

ト善六あけて見て

善六 成る程、聞き及んで居るこの香合、いかにも二百兩の質に取らうが、道具質は十日切り。

しづ モシ、何ぢややら譯も知らぬが、また咎めの來るものぢやないかえ。

甚兵　ハテ、まだお仕着せも脫がないうち、尻の來る事をするものか。

しづ　ぢやというて、最前の侍ひの素振りといひ、勤めせぬのは嬉しいけれど。

甚兵　ハテ、底の底まで念を押す女だ。

しづ　して、マア十日が内に。

甚兵　十日が内には、また面白い風も吹くわえ。

善六　この香合が二百兩の質と極れば、こんな物には取かはせの一札が要る。ちよつと爰で

　ト矢立にて鼻紙へ二枚書き

こなさん方からも、間違ひないといふ一札。又わしが方からは質物を、質に取つたといふ。

　ト判を捺して甚兵衞に見せる。甚兵衞取つて

甚兵　「一、金二百兩、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也、十日切に受戾させ候對談に御座候甚兵衞殿へ、質や手代善六……」成る程、こりやアよいが、わしが方からやる一札には、いま印形が。

善六　ないも承知、跡から捺して寄越さつしやい。

甚兵　そんならさうよ。嗅ア、預かつておきや。

善六　時に、そんならわしは、もう歸りませう。
しづ　これは何かと、大きにお世話樣でござんした。
善六　甚兵衛どの、十日切りを忘れさつしやるな。

ト合ひ方、時の鐘にて、善六、香合の箱を懷へ入れ、向うへ入る。あと合ひ方。

甚兵　ハテ、よく馬鹿念を押す野郎めだ。
しづ　其やうに云はしやんすな。あの人が世話したりやこそ、金も出來たといふもの。
甚兵　べら坊め、それも利足や分一を取る慾づらだワ。
しづ　それはさうと、お前も歸らしやんせぬかいなァ。
甚兵　イヤモウ、ちくらになつて來たよごれ、歸つた面を友達に見られるも氣障だ。とつぷり暮れてから。
しづ　そんなら着物を着替へさんせいなァ。
甚兵　どうか夕だちが來さうだ。仕立て卸しを濡らさうよりは、お仕着で歸るべい。
しづ　エヽ、ほんに人の苦勞を無にして……さうしてマァ、暮れてからでは髪結床も仕舞はうぞえ。
甚兵　仕舞つたら明日の事よ。

しづ　ぢやというて、ちつとの内もむさくろしい。

甚兵　むさくつても穢なくつても、濡髪のお賤と名を取つた、おぬしといふ美しい女房を持つて居るわえ。

ト引寄せる。

しづ　エヽモウ面白さうに、置かしやんせいなア。

ト振り切り、此方へ寄るとたん大雷。お賤悄りして

オヽ怖。

ト甚兵衛に寄りそふ。

甚兵　ハテ、野暮でない雷だ。

トお賤を引寄せる。時の鐘のだら、雷の音にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて石の地藏、正面獄門臺、切り首、側に誂らへの捨て札、地藏の前に花立、水向け茶碗などあり、うしろ黒幕、薄原、よき所に据ゑ物の松。上の方、流れ灌頂、誂らへの通り。爰に關屋、茶屋場の形、手拭にて顏を隱し、立ちかゝり居るを、野伏り三人、關屋が小腕を

取つて居る見得、右の鳴り物にて道具とまる。

野一　サア／＼、みんな、この女を、薄の中へ擔ぎこめ。

二人　合點だ。

ト引立てるを

關屋　マア／＼、待つて下され。こなさん方に見付けられたら、せう事がない。いかにもわしや、あの首を盗みに來た者。

三人　そりやこそな。

ト首に向ひ

關屋　モシ、十次兵衛さま、淺ましいお姿になりなさんしたなア。わたしや云ひ交した早でござんす……この場の様子を聞くよりも、恐ろしいやら口惜しいやら、おのれやれ、女子でこそあれ夫の死恥、いつまで人に晒させうぞ。人知れず取り隱し、いかなる寺へも葬らんと、此やうな恐ろしい氣苦勞をしますわいなア。

ト三人に心遣ひして泣く。

野一　聞けは聞くほど氣の惡い話しだ。

野二　大聲立てゝもこの繩手。

野三　誰れも外に來る者はない。

野一　夜の明けるまでにおッ放せ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト關屋にかゝる。關屋突きのける。よろしく立廻り。此うち時の鐘、合ひ方にて、向うより南與兵衞、牛合羽、股引、脚絆、一本差しにて、紙合羽を肩へかけ、三度笠をかざし、つか〳〵と出て來り、花道にて獄門臺を見て思ひ入れあつて、舞臺へ來かゝり、この體を見て與兵衞、三人を取つて投げる。三人起き上がつて與兵衞にかゝる。與兵衞有合ふ割木を取つて打ち散らす。三人これにて、ばら〳〵と下座へ逃げて入る。關屋息切れして茫然として居る。

與兵　ヤ、コレ、見れば女中さうなが、今のは慥かに乞食めら。こりや物取りか理不盡か。コレ、お女中。

トあたり見廻し、地藏の前の水向茶碗にたまりし水を飲ませ

コレ、女中、氣を慥かに持たつしやい。

ト關屋、人心地付きし思ひ入れ。

關屋　ハイ〳〵、どなたか存じませぬが、今の難儀をお救ひ下さりまして、有り難うござります。

與兵　なにサ、わしは往來の旅人、來かゝる矢先に今のしだら、高が乞食めら、追ひ散らして進ぜたが

ト關屋をよく見て

併し、合點の行かぬは夜更けて一人、この繩手、女の身で、どうして爰へござつたのぢや。

關屋　サア、それはな。

與兵　道に迷うてか、但しは駈落ち。連れにはぐれた、といふやうな事で爰へ。

關屋　成る程、仰しやる通り、道に迷ひまして。

與兵　して、町所はどこでござる。

關屋　江戸の淺草……並木でなし、藏前でなし。

與兵　淺草というても廣い事。アヽコレ、送つて進ぜたけれど、わしもちつと叶はぬ用で、奥筋へ急ぎの旅。道も違ふといひ、氣の毒ながら、一人早うござるがよい。サア〳〵、また今のやうな惡者に出合はぬうち。

ト首へ目を付け、關屋をせり立てる。

關屋　サア、參りは參りますが、少つとわたしも。

ト首を見て思ひ入れ。

與兵　どうさつしやれた。

關屋　今の難儀に足を痛めましたによつて

與兵　ムウ、疵所とあらば藥を進ぜう。

ト出しさうにするを

關屋　アヽモシ、藥はわたしも所持して居りまする。お急ぎならば、あなたマアお早う、私しにお構ひなく、お出でなされませいな。

與兵　アヽ、參りは參らうが……アヽコレ女儀、其許が歸らつしやるを、見屆けねば不安心。

關屋　御深切が却つて……イヤ、それ程に仰しやる事なら、私しもそろ〳〵參ります程に、あなたもお出でなされませいなア。

與兵　其許も行かつしやるなら、拙者も參るでござらう。

關屋　左樣なればお旅人樣。

與兵　お女中。

關屋　いかいお世話樣。

與兵　お別れ申す。

ト合ひ方になり、與兵衛は東のあゆみ、關屋は花道へかゝり、雙方思ひ入れあつて、取つてかへし、拔け道して獄門臺へ兩方一緒にかゝり、行きあたり、悄りして

ヤア、こなたは今の女中。

關屋　お旅人樣。

與兵　まだ行かつしやらぬか。

關屋　あなたも、まだお出でなされませぬか。

ト慄へる。

與兵　サア、身共は、こなたの事が案じられて、ツイ爰へ。

關屋　お戻りなされたは

與兵　サ、袖ふり合ふも。

關屋　他生の緣と

與兵　女中へ深切。

關屋　ハテナア……御深切とあるなら、あなたにちつと折入つて、お願ひ申したい儀がござりますが、

お聞き届け下さりませうか。

與兵　そりやハヤ、身に叶うた事なら何なりと、早く云はつしやれ〳〵。

關屋　サ、そのお願ひと申しますは。

與兵　願ひとは。

關屋　爰にかゝつてあるあの首を

與兵　ヤ。

關屋　どうぞ盗んで下さりませ。

與兵　なんと。

關屋　サ、斯うばかり申しては、御合點が參りますまい。私しはあの首にゆかりの者、いかに御成敗ちやというて、あのやうに晒され、死恥が悲しさ。夜半に紛れ。盗み取らうと參りましたが、どういふ事にやあなたも、爰に長うお出でなさるゝうち、見咎められては水の泡と、是非なう様子を

與兵　ムウ、この首にゆかりとは……してマア、こなたは、どういふ縁ぢや。

關屋　サア、わたしやあの首の、女房でござります。

與兵　ヤ。

關屋　南方十次兵衞と記しあるあの首は、わたしが夫。
與兵　コレ、合點が行かぬ、その十次兵衞といふは卽ち
　　ト云はうとして思ひ入れ。
關屋　エ。
與兵　ハテ、こなたが、その十次兵衞の女房でござるよなア。
關屋　サア、それぢやによつて。
與兵　取隱したいといふも尤も、去りながら、女の身でそれ程に、思ふは慥かに。
關屋　云ひ號けといふでもなし、祝言はせず、お顏も知らず、恥かしながら、ふとした御緣。
與兵　ついした轉び合ひといふやうな事か。
關屋　思ひ出せば去年の秋、友達衆に誘はれて
與兵　鹿島へでも參らしやつたか。
關屋　妹背を願ふ常陸帶、浮きたつ旅の木おろしに
與兵　頃しも月の入江潟、闇はあやなき夜船のうち。
關屋　乘合ひ同士の手がさはり、蘆間の風も戀風に……變る姿の

ト獄門の首へ思ひ入れ。

與兵　死顏も、思へばはかない。

トこれも首へ思ひ入れ。

關屋　サア、夢に夢見る人の身の

與兵　水の流れと定めなき。

關屋　戀は無常の

與兵　始めの嘘も

關屋　後の誠と

與兵　その馴染めが

關屋　二世の約束

與兵　一生の

關屋　かためも

與兵　かたい

關屋　わが夫。

與兵　女房。
關屋　舟玉かけて
與兵　かたらひし
關屋　その時の
與兵　女子は
關屋　男といふは。
與兵　南方十次兵衛といふ、あの獄門の首ではないか。
關屋　サア……その時の荒ましを、よう御存じのお前は。
與兵　イヤ、今の話しも、ありや身共が當て推サ。
關屋　ハテナア。
與兵　云ふに云はれぬこの場の仕儀……唯一言の云ひかはせを、死去の跡までよく守り、首を葬りたいとあらば、いかにも盗み遣はすまいものでもないが、なんと女中、こなた、身が女房にならぬか。
關屋　エ。

與兵　サア、いはゞ盗賊盗人の荷擔人、他人では致し憎い。

關屋　成る程、御尤もではござりますけれど、望み叶へた上からは、千筋と撫でし黒髪を、剃つてわたしは尼法師と、

與兵　ハテ、愚癡な。尼になれば別れた夫が浮むといふ、きつとした事もあるまい。

關屋　ぢやというて。

與兵　サア、身共も氣が急く。あの首級、あゝしておけば取捨てられ、鳶や烏の餌食となるが、何とも不便。

關屋　それぢやによつて

與兵　女房になるか。

關屋　サア。

與兵　否なら此方もこの事を、あからさまに訴人せうか。

關屋　アヽモシ、それでは。

與兵　これが誠に首と釣りがへ。女中、返事はどうでござるな。

關屋　是非に及ばぬ。そんならお前の。

與兵　詞に任すか。
關屋　サア、それも年切つて三年がうち。
與兵　ムウ、三年切りとは夫の年忌。
關屋　それが過ぎたら三下り半。
與兵　半座を急ぐ法の道、年切りの女房、承知いたした。
關屋　して、お前の所、名は何と。
與兵　サア、名も云はれねばそれぞとも、行くへ定めぬ浪人同然。
關屋　わたしも丁度その通り。
與兵　ハテ、似たもの夫婦。
關屋　してマアこの末、何を當てに。
與兵　ハテ、互ひの心はこの石ごき。
ト合ひ方になり、最前の水向け茶碗へ、流れの水を汲んで、關屋の前へ置く。
關屋　これは。
與兵　茶碗へ斯う水を汲んだところは、とりも直さず月の形、縁と月日を待つ心で

關屋　水杯も祝言も
與兵　ほどは雲井に隔つとも
關屋　空行く月の
與兵　めぐり逢ふまで。
關屋　割符の筐。

ト此うち兩人、茶碗の水を互ひに飲み、與兵衞、茶碗を二つに打割り、片々を關屋にやる。

與兵　割れた茶碗も
關屋　繼ぎ合はせ
關屋　夫婦も圓き
關屋　縁にまかせて
與兵　女中。
關屋　お旅人樣。
與兵　必らず詞を
兩人　つがひましたぞ。



ト四ツの鐘鳴る。

關屋　ありや夜中。

與兵　更けぬうち……ソレ。

ト合ひ方、時の鐘にて、與兵衞探り當り、切り首を取りにかゝる、關屋あたりを窺ふうち、與兵衞、首を持ち來り、思ひ入れあつて。

關屋　エヽ。出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛。アヽ、持つべきものは。

與兵　女房……夫の首級ぢや、少しも早う。

ト與兵衞關屋に囁く。關屋、探り廻り、下の方流れ灌頂を引切り、與兵衞の首をこれに包む。

關屋　忝ない。

與兵　コレ。

ト押へる、忍び三重にて、上の方の薄原を押しわけ、甚兵衞、以前の形にて、この體を見て居て、よき程に出る。此うち與兵衞、關屋に早く行けと思ひ入れ。關屋、首を持ち行かうとするを、甚兵衞引留める。與兵衞甚兵衞を探り見て悔り、甚兵衞は兩人の顏見たき思ひ入れ。與兵衞、白刃を拔きかける。甚

兵衛、兩手にて頭を押へる。兩人思ひ入れ。甚兵衛尻餅をつく。これを木の頭、三人烈しき立廻り。

よろしく、ひやうし　　幕

跡シャギリ

四幕目

鳥越山崎屋の場

役名――山崎屋與次兵衛。山崎屋淨閑。若黨、丹平。小揚げ、百介。同、九郎八。川瀨屋市兵衛。丁稚、善太。肴屋、ぶえんの七。藤屋次兵衛。鬼あこや孫六。米屋仁右衛門。講中、妙貞尼。山崎屋番頭、權九郎。藝者、みやこ實ハ甚兵衛女房お賤。下駄の市實ハ三原傳藏。山崎屋與五郎。次部右衛門娘、お照。橋本次部右衛門。

本舞臺、三間の間、上の方障子屋體、正面戸棚のれん、下手に土藏引戸の門口、出入りの番屋、すべて鳥越米問屋のかゝり。權九郎、番頭にて帳合ひしてゐる。善太、丁稚にして莨盆の掃除して居る。百介、九郎八、小揚げの形にて土藏へ俵を運び居る。次兵衛、藝者の親方にて下の方に扣へ、淨閑、魚の値をして居る。ぶえんの七、魚荷をおろし居る。この見え、テンツヽにて幕明く。ト捨ぜりふにて

百介、九郎八、米を藏へ運ぶ。

淨閑　モシ〳〵、旦那、その松魚は、四百五十では、ぢぎりが切れますわいの。

七　これはしたり、おぬしもマア滅相な。ぢぎりの切れる商賣を、商人の身でなぜするのぢや。

淨閑　ハテ、そこが商賣でござりまする。

七　損をするも商賣なら、とてもの事に、もう五十損して四百にしやれ。

淨閑　イヤ、呆れた旦那だ。モシ、拵へませうかえ。

七　イヤ〳〵、その代り手は賴まぬ。おれがせにや魚に無駄が出る。まづ片身を刺身にして、片身は鹽にして、あらは煮つけ、頭は叩いて鹽辛ぢや。

淨閑　モシ〳〵、頭をあがりますか。

百介　松魚の頭が喰はれいでかいの。この男は商人のやうにもない。

九郎　コレ〳〵、旦那は松魚の頭どころではない、毎日出入りのおいらには、水瓜の皮の香の物を食はせるワ。

百介　汁といつてはかゞみ汁、鬢に白髮の何本あるといふ事が

　　　　　　ありありと映る。

善太　コレ、魚屋さん、額でもぬかば、此方の内へ來て、おつけを鏡にぬきなさい。イヤ、奇妙だよ。

淨閑　默りをらう。また内の噂しをるか。コレ、權九郎、あの餓鬼め、今日一日喰はすな。われに云ひつけたぞ。

權九　ハイ／＼、御料簡なされませ。善太めは餓鬼とも思ふが、コレ／＼、こなた衆まで同じやうに、お出入りをとめられぬ用心さつしやいよ。

百九　それでもお前、あんまり吝い内だから。

權九　これはしたり、その噂は云はずとも知れて居るわな。

次兵　モシ／＼、權九郎さまえ。若旦那の與五郎さまは、まだお歸りではござりませぬかな。

權九　サ、昨日から出られて、まだお歸りはないのよ。

淨閑　コレ／＼、權九郎、ありやどこの人ぢや。

權九　ヘイ、あの男は。

トうぢ／＼する。

淨閑　コレサ權九郎、何の用で見世へ來てゐらるゝのぢや。間には茶の一杯も飲ませにやならぬ。これも勘定の内、身代へかゝるわい。モシ、こなさん、聞けば與五郎を尋ねさんすが、何の用ぢや。

次兵　儲け口なら、わしに云はんせ〳〵。

次兵　イエ〳〵、別して左樣な儀でもござりませぬが、私しは吉原の藤屋と申す茶屋でござりまするが、先達て內の抱への吾妻と申す藝者を、爰の與五郎さまから、身請け金のうち百兩受取り、跡金二百兩參りますれば、早速吾妻をお渡し申しまするが、今以て御沙汰がないゆゑ、それゆゑ參つたのでござりまする。

淨閑　何ぢや、吾妻とやらを身請けするとて、三百兩にきめて、跡金二百兩を取りにござつたのか。

次兵　左樣でござります。

淨閑　默らつしやい。

次兵　ハイ〳〵。

淨閑　この身代は、あの與五郎に讓りくれいと、死なれた旦那の遺言ゆゑ、おれが實の子の與次兵衞にも家をやらず、養子嫁まで貰うて置けど、不埒者の與五郎。その上實子の與次兵衞も、親の氣に違うて家出して居たゆゑに、隱居のわしが附け髪して、元へ歸つてお屋敷の勤め。講中の衆が挨拶で、やう〳〵內へ呼び戻した悴め。實の子でさへ容赦はせぬに、家附きなれど他人同然の與五郞、なんで二分も出すものぢや。さう心得てござれ。

次兵　へイ／＼、左様なら、いづれとも仕りませうが、それでは手附けの百兩が流れに相成りまするが。

ト淨閑これを聞き

淨閑　コレ／＼、待たつしやい／＼。百兩の手附けが流れる。アノ百兩が

ト思ひ入れあつて

流れるなら相談ものぢや。その手附けを取こんで、跡金やつて、わしが身請けせう。

次兵　エヽ、アノおまへ様が

權九　吾妻の身請けをなされるか。

淨閑　コレ權九郎、聞けば吾妻には、あの倉岡どのが惚れてござるといふ噂。

權九　成る程さやう。大金出して身請けをなされ、丈左衞門さまへ遣はしたら、まだ此うへに、あなたのお願ひ。

淨閑　サ、そこがあるゆゑ、つないで置くは

權九　與五郎さまの手附けの百兩、散らさぬ勘定。

次兵　イヤモウ、外のお内へやるではなし。お内へならば、その證文で遣はしませう。

淨閑　そんなら、何かはゆるりと相談。

權九　小揚げの衆も萓にさんせ。

九郎　一服やらうか。

七　モシ、旦那、松魚は爰へ置きますろぞえ。

淨閑　錢は晦日に取りにごんせ。コレ善太、鉢を持つて來い。

善太　アイ〳〵。

次兵　左樣なら御勝手で、ドリヤお待ち申しませう。

ト唄になり、次兵衞、百介、九郎八、七、のれん口へ入る。善太、大鉢を持つて來る。淨閑、松魚をこしらへる。この唄をかり、向うより仁右衞門、町人、門徒肩衣を着たる形、市兵衞、孫六、町人にて、門徒肩衣を着て、珠數をつまぐり出る。跡より與次兵衞、羽織、一本ざし。供の男、袱紗包みを持ち、お寄り講の歸り。妙貞、後家のこしらへ、黑絽のお角隱しをかむり、珠數をつまぐり出で來り、花道にて

與次　これはどなたも、御苦勞でござりました。

仁右　イヤモウ、世話いたした甲斐がござつて、めでたうござります。

妙貞　今日のお寄りに、與次兵衛さまのお顏が出たので、講中も安堵いたしましたわいの。

市兵　この後とも與次兵衛どの、親御に氣を揉ませぬやう。

孫六　氣を附けさつしやりませ。

與次　御講中のお執成し、何かと忝なうござります。

仁右　親仁どのも待かねてゞござらう。サア、參りませう。

與次　左樣ならば。

ト唄の切れにて皆々本舞臺へ來る。

權九　モシ旦那え。御講中がお出でゞござります。

淨閑　これは〱仁右衛門どの、イヤ、妙貞どのも、どなたも、マア〱、あちらへ〱。

ト手を拭きながら出迎へる。

皆々　お許しなされませ。

ト内へ入る。

權九　これはどなたも、ようお出でなされました。與次兵衛さま、お歸りなされましたか。

與次　オヽ、權九郎か。段々と仁右衛門さまのお世話をもつて、宿老どのにもお目にかゝり、

權九　相違なく讓りうけ、家相續いたすやうにと、町内の連印相濟み、禮云うて歸り申したて。
それはおめでたうござりまする。

仁右　これと申すも與次兵衞どのが、一體町内の衆に惡う思はれぬゆゑ、先祖與次兵衞どのゝ讓り狀と、相違いたしてあれど、そこを兎やかう申す者もござらぬて。して、二男の與五郎どのは、どれへぞ行かれましたかな。

浄閑　イヤモウ、あの與五郎には困り果てまする。云はゞ死なれたる親旦那の實子、わしはその節番頭上がり、のれん貰うて小見世を出し、女房持つて、それに出來たはこの與次兵衞。その時の名は三之助。產後に嚊めは病死して、親子二人で暮らすうち、爰のお家の御新造も御病死。その時乳のみのあの與五郎、殊に旦那は御病身、枕の許へわしを招き、どうで今度は助かるまい。おれが死んだら、われが身代片づけて、この家の跡を踏まへ、山崎屋を立てゝくれい、代々鴻野の屋敷へお出入り、有り金は十萬兩、他人のわれに遣るほどに、忰の與五郎我が子にして、其方が忰は兄に立て、主家來ぢやとて、分け隔ては決して無用。併し末々この家を與五郎めに、やつてくれと賴みはあれど、この頃のあの不身持ちを。

與次　サ、その御先祖の御遺言を、小耳に覺えし私しゆゑ、兄とはいへど末々は、弟に山崎の家つがせ

んと思ふうち、親仁さまの氣に違ひ、暫く內を遠ざかり罷り在るうち、弟が不身持ち、屋敷の勤め、彼れこれに、御隱居なされた淨閑さま、附け鬢なされて以前の與次兵衞、男形にて屋敷の手前、御苦勞なさるが氣の毒さ、仁右衞門さまのお世話にて立歸つた私し、御町內の披露目も濟めば、直ぐに今日只今より、家の跡目は卽ち私し、弟が事はまた追つて、惡いやうにも致しますまい。

仁右　さやう〳〵、何をいふのも家の爲め。あの與五郎どのも、藝者狂ひの惡心やんだなら、ハテ、身代は二つ分け、出見世出しても世間は濟みます。殊に在り金は十萬兩、嫁御も貰うてあるといひ、この上の事はござらぬて。

淨閑　サ、その貰うて置いた嫁の照は、鴻野の家中、橋本次部右衞門といふお方の娘、これも實の娘でもないとの事。

權九　その次部衞さまも、今ではお屋敷をお暇、浪人なされて、橋場の邊にお出での樣子、マア何事もさて置きまして、仁右衞門御宿老御町內にも、御總領に跡式をお讓りなさるな、御承知でござりまするかな。

妙貞　ハテ、そりやモウ、女でこそあれ、この妙貞が證人でござんす。なう、皆さん、さうぢやござんせ、

ぬか。

市兵　さやう〳〵、御子息與次兵衛さまに山崎屋を讓られても、町内に一人でも不承知なものはござらぬて。

孫六　斯う物が極まつたからは、早う跡式の讓り引、與次兵衛どのにも、早う落ちつかせるがようござるわいの。

淨閑　左樣ござらば仁右衛門どの、この親仁が身代を、與次兵衛に讓るといふ慥かな證據は、印形より書ものより、コレ、これが慥かな證據でござるわいの。

ト附け髷、附け鬢を取り、坊主頭になり、

ソレ、仁右衛門どの、この髪お前に渡しまするぞ。

ト附け鬢を仁右衛門へ投げてやる。

仁右　イヤモウ、これでわしも安堵しました。コレ、コレ與次兵衛どの、親仁どのは、この通り、今日からは在り金の十萬兩、家屋敷も大切に、必ず親御の恩を忘れさつしやるなよ。

ト附け鬢を渡す。與次兵衛取つて

與次　何から何まであなた方のお世話。大身代の山崎屋、私しが踏まへまする上からは、萬事に心をつ

けましても、家の榮えが先祖へ孝道。いづれも樣、親仁樣、有り難う存じまする。

ト口け盞を戴き

仁右　ハテ、何事も又わしが、よい思案がござるて。別家なりとも。

この上ながら與九郎が身の納まり。

妙貞　イヤモウ、これで安堵しました。仁右衞門さんもお前方も、跡へ殘つて讓り引の立合ひ。わたしや女の事、居たというて役には立たぬ。もうお暇しませうわいなア。

與次　ハテマア、わざと御酒なりと。

妙貞　イエ〳〵、わたしや大の下戸、お杯ならお預けおや。追つて何なとねだりませう。

淨閑　それ〳〵、人にもの振舞ふは、頭數の少ないが勝手ぢやて。

市孫　ハテ、金持ちはあの通りぢや。

淨閑　然らば仁右衞門どの、御苦勞ながら。

仁右　ドリヤ、御相談仕らうか。

權九　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、仁右衞門、市兵衞、孫六、淨閑、權九郎、奧へ入る。與次兵衞殘る。妙貞向うへかゝる。

揚げ幕より與五郎出で來る。跡より下駄の市、やつしの形、夜番にて、與五郎に付き出で來り、花道にて妙貞は摺れ違うて向うへ入る。

市　モシ〳〵、與五郎さんえ。又お前俄かえ。モシ、いゝ加減になされませ。しはん坊の大旦那が、大抵な事ぢやアあるまいに、ちつと內にござりませな。

與五　なにサ、おらア昨夜から友達の所に、謠ひ講があつて、そこへ泊つて今歸りがけよ。

市　エヽ、謠ひ講かえ。謠ひ講やら、念佛講やら、御精が出ますね。與次兵衞さんも、今日は町の衆と宿老へござつたが、大方跡目は與次兵衞さんが

與五　アヽ、戾つて居らるゝか。それは重疊、逢うてこの身の

ト思ひ入れあり

サ、市ばう、來やれ。

ト唄になり、兩人門口へ來て內へ入る。

市　モシ、お見世の衆え、若旦那がお歸りだよ。

與次　オヽ、與五郎か、いま戾つてか。

與五　ハイ、友達どもに誘はれまして

與次　俄はどうぢやな。
與五　イエ、謠ひ講へ參りました。
與次　それは珍らしいの……コリヤ、誰れも居らぬか。女子どもは居らぬか。與五郎が戻つた。ふだん着を持つて來やいの。
てる　ハイ、畏まりました。

ト合ひ方になり、振り袖のお照、與五郎が着替へを持ち、のれん口より出で來り

只今お戻りなされましたか。サ、御ふだん召しを。
與五　オヽ、お照どの、下女のりくが居やうに、これは手づから、戴きます。マア〳〵、そこへ置いて下さりませ。
市　アヽ、お照さんかえ。モシ、わつちやア今、道でお目にかゝつたから、お連れ申しやした。晝のうちはいゝが、夜に入ると物騒でござりやす。必ず一人で出し申しなさるなよ。
てる　サ、わたしも左樣思つてゐれど、いつの間にやら與五郎さまのお一人歩き、いかうお案じ申しまするわいなア。
與五　なんの案じる事があつて。其やうに科もない者を、誰れが滅多に

市　イエ〳〵、さうでござりやせぬよ。お話しは長い事だが、わつちが親仁も、人に切られやした。
與五　アヽ、てまへの親は人に切られたか。
與次　して、そりやアいつの事だ。
市　なにサ、そりやアわしが餓鬼の時のお話しサ。お聞きなされませ。譯は存じませぬが、わしの親仁は、足駄の齒入れでござりました。
與次　アヽ、親仁は足駄の齒入れか。
市　ハイ、左樣でござります。足駄の齒入れで、岩淵の權助と申しました。足駄の齒入れの御子息ゆゑ、そこでわしが異名が下駄の市サ。
與五　エヽ、そこでおぬしが下駄の市。
市　左樣サ、親仁が切られたその時分は、まだ跡先わきまへもなき水子同然。併し餘ツほど小胸が惡い、わしが親仁といふ噂。向うの相手は關取株、白藤といふ角力取りに、割下水で切られました。その權助が實の息子。併し町人の悲しさには、敵討に出られもせず、いづれも樣のお取立でどうぞ一度は足駄の齒入れになりたいが願ひ。薄ぎたない商賣でも、親仁の職ならその筈の事でもあり、與次兵衛さまのお世話にて、川岸の土藏の寐ずの番。アヽコレ、話すうちにも、流石は

親子だ、親仁が非道に死んだと思やア、心細くなるやつサ。

てる　エヽ、そんならこなさんの父さんは、アノ、人に切られて。

市　アイ、それだによつてお氣をお附けなされませ。昨夜も吉原田圃にて、鷲の長吉といふ者か、切られて死んだといふ噂。

與次　ヤア、田圃でか。

市　アイ、相手は誰れか知らねえが、その長吉が死骸の側に、切れた小指が落ちてあつたで、小指の切れた其ものが、人殺しの科人と、町中はきびしい詮議サ。

トこれにて與五郎思ひ入れあつて

與五　すりやアノ、鷲の長吉が、切られた場所に小指が落ちて。小指がなければ人殺しの

トはつと思ひ入れ。與次兵衞何心なく與五郎が小指の切れしなフト見つけ、悔りして顔見合せ

與次　アノ、小指のないが人殺し。

與五　エ。

トこなし。

與次　ハテ、物騒な事ぢやなう。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより次部右衛門、羽織袴大小にて、老けたる拵へ、中間一人連れ出で來り、直ぐに門口へ來り

次部　橋本次部右衛門でござる。主には御在宿かな。

與次　これは次部右衛門さま、マア〳〵これへ。

次部　免さつしやりませ。

ト上へ通る。

てる　父さん、ようお出でなされました。

次部　オヽ、これは娘照か。與五郎もこれにお居やるし、見ますれば、總領の與次兵衛どの、この程は他行いたし居られしと承つたが、アヽ、いつお歸りでござるな。

與次　へイ、昨日講中の世話をもちまして

次部　歸りめされたか。それは重疊……コリヤ娘、お茶一つ所望いたさう。

てる　アイ〳〵、私しが

與五　アヽコレ、氣の附かぬ。お茶を持たぬかえ、

ト奥より善太、茶を汲み出で來り

善太　ヘイ、お茶を上がりませ。

ト差出し、お照を見て

オヽ、お照さま、とんと忘れて居りましたが、先ほど小間物屋の清七どのが、この間中お誂への七寶つなぎの櫛が出來ましたと申して、私しへ預けて參りましたが、サア、御覧じませ、なんと好く出來たではござりませぬか。

ト蒔繪七寶つなぎの黒の木櫛、紙に包みたるを出す。お照取つて差し、善太見て

善太　こりや、ようお似合ひなされました。

與五　サア、七寶つなぎとは。

ト見て

そりや慥か、わしが替へ紋を

トお照と顔見合せ、ちよつとこなしあつて

これはハヤ、次部右衞門さま、あなた樣には御用ばしござりまして、お出でゞござりまするかな。

次部　いかにも、身共參つたるは別儀でもござらぬ。知らるゝ通り、實子なき身共、女房めが存生の間十次兵衞の末の妹、この照めを養女に致したところ、母めは病死。その後身共はお暇たまはり、

浪人仕り、最早二君に仕へまする所存なきゆゑ、照めを與五郎へ養子嫁、次部右衛門一代にて朽ち果てんと存じ居つたところ、又ぞろ古主よりお尋ねござつて、召歸されて以前の如く、劍術御師範仕れと、役人中より支度の金子、二百金拜借仕つてござる。即ちこれへ金子持參仕つたは、拙者貯へあつて益なき金子、娘照めが何なりと、望みの品がござるなら、調のへて遣はされませ。その儀を賴まん爲ばかり。サ、この金子、お預かりなされて下されい。

ト財布入りの封金の二百兩を懷中より出し、差置く。

與次　左樣ならば、この金子を申しうけ、アノお照に

次部　頭の道具、何なりと、よろしう賴み存じまする。

ト思ひ入れ。この時奧より次兵衛出で來り

次兵　與五郎さま、お歸りでござりまするか。早速申しませうが、吾妻が跡金二百兩の儀を

ト云はうとする。與五郎せいて

與五　これはしたり〳〵、爰では惡い。サア、何事もナ、後方までにナ、エヽコレ、氣轉のきかぬ。

トいろ〳〵思ひ入れ。お照もさてはとこなし。

市　コレサ、藤屋の親方、こなさんも粹な商賣する程にもない。吾妻々々と、吾妻とは、ア、何か、

おれを東ッ子といふ事か。東ッ子どころか、おらア交りなしの江戸ッ子よ。

與次　いかさまナウ、吾妻とやら何とやら、その金高も二百兩。次部右衛門さまの御持參ありしも二百兩。ハテ、割符を合す。

ト金を仕舞はうとする。

次部　アイヤ、總領どの、待ちめされい。承れば、貴公には別宅おしやり、與五郎ことは未だお屋敷お目見えなき部屋住み、それゆゑにこそ淨閑どのが、附け髷して、お上の御用聞きめさると承つたが、すりや、與次兵衛どのには立歸つて

與次　山崎屋の跡式は、今日只今私しめが讓りうけ、親仁樣はこれまでの通り隱居、卽ち山崎屋與次兵衛と、町内へも披露いたしまして。

ト與五郎お照思ひ入れ。

次部　すりや、跡式は其許が踏まへ、娘を進上いたしたるあの與五郎は、現在家つぎ、紛れなき親身でござれど。

與次　サ、その儀は存じて居りまする。御先祖の血のあまり、跡式踏まへる御身分でも、ハテ、山崎屋の家には易へられませぬ。

與五 家に易へぬと兄貴の詞。この身の不埒が募りては、親身たりとも遠慮なう。

與次 イヤ、勘當は仕らぬ。

與五 アノ私しをえ。

トこなし。

てる 何ぢややら與五郎さんの身に取つて、もし間違うた事あらば

ト思ひ入れ。

市 エヽ、小焦れつてえ、もつれた身代。これを思へば金持ちより、貧乏人が、はるかましかえ。

次兵 身請けの跡金出來ませずば、大旦那のお世話にて、吾妻はお屋敷倉岡さまへ。

次部 ナニ倉岡とは、御家中にて、底意の知れぬと噂ある。

與五 丈左衛門へ御隱居が、身請けのお世話を。

ト思ひ入れ。よき時分より淨閑出かゝり居て

淨閑 イヽヤ、跡金二百兩、わしが渡して身請けする。

ト合ひ方。

次部 こりや主には以前の如く、法體あつて淨閑どの。こりや斯うなけりや叶ふまい。

淨閑　一別以來次部右さま、お恥かしいが只今の、吾妻が身請けは則ち我れら。ハテ、手かけ妾もござらねば、この淨閑が請け出して、朝夕寐間の上げ下ろし、腰膝揉まする。コレ、與五郎、その時兎やかう云ふまいぞ。

與五　親仁樣のなさる事、ナニ部屋住みの私しが。

ト思ひ入れ。

市　併しこれまで若旦那も、多くの金を……アイヤ、先約なれば與五郎さんに、親方は義理があるといふもの。マア、何事も、二三日待つて進ぜさつしやい。

次兵　お馴染みだけに、明後日まで。御隱居樣もその通り、明後日急度御返事。

市　わしも番屋の古行燈、油の掃除にかゝらうか。

次兵　左樣ならば若旦那、何分よろしう。

ト思ひ入れ。與五郎氣の毒なるこなし。

市　ハテマア、ござれな。

次兵　ハイ、お暇申しませう。

市　ドリヤ、行燈掃除にかゝらうか。

ト合ひ方になり、次兵衛は向うへ、下駄の市、門口の番屋へ入る。淨閑、二百兩の金を見て

淨閑　コレ、與次兵衛、財布入りの、その金は。

與次　ハイ、この金は次部右衛門さまより、此お照どのへ、櫛簪など求めよと、お心ざしのこの金子

淨閑　ハテ、それはお照は仕合せな。ドレ、わしが預かりませう。

ト取らうとする。與次兵衛さゝへて

與次　アイヤ、この金子は其まゝに、コレ、お照どの、其方の手箱の内へなりと。

てる　イエ／＼、それではどうやら我もの顔な致し方。矢張りお内の金箪笥へ、お仕舞ひなされて下さりませ。

與次　成る程、用心も悪からう。小間物屋の見えるまで、わしが預かりませう。今にもいらば、あの戸棚の内へ。コレ、其方、仕舞うてござれサ。

てる　アイ。

ト戸棚を明け、金箪笥へ仕舞ふ。淨閑、ぢろ／＼見て

淨閑　ハテ、惜しい金を、小間物屋に取らるゝとは、エヽ、世は様々なものぢやなア。

次部　淨閑どの、ちとお目にかゝりたうござる。

淨閑　アノ、わしに。

次部　いかにも。

トよろしく住ふ。與次兵衛見て

與次　コレ、お照どの、親御樣が何やらお話しもある樣子。其方は奧へ。

てる　アイ。

トうぢ〳〵して

何ぢややら、心がゝりな父さんの御樣子。殊に大枚二百兩、わざ〳〵お持ち遊ばして

ト思はず與五郎と顏見合せる。

與五　ハテマア、奧へ。

てる　アイ。

ト合ひ方になり、お照、心を殘し、奧へ入る。

淨閑　次部右衛門さま、して、御用の筋はな。

次部　イヤ、別儀でもござらぬが、貴公御實子の、これに居らるゝ與次兵衛どのが、跡式を納め召さるれば、誠に與五郎は無うても濟みまする。して、身共が娘と與五郎は、いかゞ致さるゝ存じ寄り

でござるな。
淨閑　別して存じ寄りもござらぬが、お聞きの通り、藝者狂ひに大金を費す與五郎、親方筋でござらうが、家に易へぬが年寄りの片意地、事と品とによりますれば

トあと云ひかれる思ひ入れ。

次郎　そりやモウ、親といふ字のついた其許、よしや勘當いたされても
與五　エ。
次部　サ、與五郎方に申し分はござりますまいが、貴殿へ養女に遣はした、娘照めが身分は、どこで立ちまする。サ、そこがとつくり御思案どころ、親子の衆、何と思し召さるゝ、
與次　こりやハヤ、御尤ものお尋ねでござりますが、何を申すも、爰に聞いて居りまするが、吾妻と申す藝者に迷うて
次部　アイヤ、そりや若い時には、誰れしも有る儀でござる。いはゞ娘を進ぜた拙者、此方より何とやら申す筈なれど、そこを申さぬが當世とやら承る。與五郎ばかりか、まだ外に、藝者狂ひを致さるゝ人もござるサ。それ式ならば何事も

ト思ひ入れ。

與次　こりや改まつた次部右さま。外に藝者に狂ひ居るものがござると、仰しやらぬばかりのお詞。この與次兵衛も、物堅き親仁樣への氣がねして、女房氣のない男ゆゑ、圍ひ女房隱し妻、致したとてもそれ程に。

ト少しむつとする。與五郎立寄つて

與五　サ、御尤もでござります。何を申すも、みな與五郎が身持ちが惡さに……私しが惡うござります。斯樣な事が云ひつのり、ひよつと間違ひ出來ましては、私しが迷惑仕ります。サ、何事もお構ひなう、次部右衛門さま、奥にてお禮に粗酒一つ。兄貴よろしく御馳走たのみまする。

淨閑　イカサマ、折角お出での次部右さま、云ひつのつては跡の後悔。そんならわしが、隱居家〳〵

次部　御馳走になりませうか。何を申すも娘が可愛さ。

與次　サ、其お心は與次兵衛が、よう汲みわけて居ります。

次部　與次兵衛どの

與次　次部右衛門さま

淨閑　斯うござりませ。

ト唄になり、淨閑先に次部右衛門、與次兵衛ついて奥へ入る。與五郎殘る。

與五　日頃から、かたましい親仁様。それに引かへ、次部右衛門さまのお心ざし。お照が髪の飾りなと買うてもらへと、二包み御持參ありしも、與五郎が金に詰まりし二百兩。情のほどは詞にも、云ふに云はれぬあのしだら。吾妻が兄の長吉を、殺した科は、今の間に召捕らるれば、云ひ譯ないは小指。

ト思ひ入れ。よき時分よりお照出かゝり居て

てる　エヽ。

ト驚く。與五郎もこなしあつて

與五　こりやお照どの。こなたは爰に。

てる　アイ、與五郎さま、そりやお前、聞えませぬわいな。

與五　そりやァなんで與五郎が。

てる　サア、お前とわたしは云ひ號けゆゑ、まだ杯はせぬけれど、貰はれて來て養子嫁、今に女夫とならぬのも、かたましい淨閑さま、御實子の與次兵衛さまに家をつがせ、もしもの事がある時は、お前さんを此お家に、お置き申さぬ相談も、あの權九郎と度々の事ぢやわいな。親御樣に其お心がござりましては、お前のお身が立ちますまい。幸ひ先刻に父さんが、お持ちなされた二百兩、

あの金で吾妻さんの身請けして、どうぞお前は爰にお出でなさんすやうに、與次兵衛さまへ譯云うて、山崎屋の跡を納め、お内儀さんは吾妻さん。その時わたしや物縫ひとも、針妙とも思し召して、どうぞお内に置いて下さりませ。もし父さんがその節に、去り狀取らうと仰しやつても、どうぞ書いて下さんすなえ。お前と緣を切る事は、否でござります〳〵わいな。

ト縋りついて思ひ入れ。

與五　コレ〳〵、お照どの、その心ざしは忝なうござる。一生この身に恩に着る。併し不身持ちな與五郎、所詮山崎屋の跡式は思ひもよらぬ。勘當うけて流浪する、科は遁れぬ事ながら、科ないこなたに苦勞をかけては、次部右衛門さまへ、どうも申し譯がない程に、ふッつりおれが事、思ひ切つてはくれまいか。

てる　すりや、どのやうに申しても、吾妻さんに心が殘り、わたしを緣切るお心かいな。與五郎さん、そりや聞えませぬ〳〵。

與五　コレ〳〵〳〵、なんの吾妻に心が殘らう。モウ〳〵、モウ〳〵身請けもせぬ。ハテ、今聞く通り、親仁樣が身請けして、妾手かけになさる吾妻。忰のこの身で、どうして親の

てる　サア、あゝ仰しやれどなか〳〵に、御隱居樣が、どうして大金右左り、出して身請けをなされま

せう。ありや決して、嘘ぢやわいな〳〵。

トこの時與次兵衛出かゝりゐる。

與五　サ、さは思へども、みす〳〵親の心にたがはゞ不孝の上塗り。

與次　ヤ、お前は兄貴、與次兵衛どの。

與五　てる與五郎さまを御不孝とは。

與次　ハテ、みす〳〵僞はり事ながら、親の手かけに抱へる吾妻、子としてよもや身請けもなるまい。その身のもや〳〵思ふなら、モウこの内を

與五　エ。

與次　家出をしやれ。ハテ、うか〳〵この家に居やつては、惡い噂の弟與五郎、この跡式も何もかも、隱居の自由にさせぬが與次兵衛。この程俄の歸りがけ、土手で頓死か急病か、ぶち殺しても死にそもない、あの長吉が

與五　エ。すりやあの場所へ。

ト思ひ入れ。

與次　サ、それぢやによつて遠ざかり、暫く影を隱すのが、よささうなものぢやぞよ。

與五　すりや、私しは暫くこの身を

與次　隱れ忍ぶは、其方の乳母が娘のお賤は、髮結ひの世渡り、爰を頼んで少しの間。

てる　そんならわたしも御一緒に

與五　アコレ、どうしてこなたを連れられやう。

てる　イエ〳〵、わたしやお前と共に

ト左の手を取る。

與五　アイタヽヽヽ

ト指の痛む思ひ入れ。

てる　これやコレ左の

與五　指は吾妻へ

てる　アノ、心中に。

ト思ひ入れ。

與次　サ、それゆゑ影を隱すがよからう。

與五　情のお詞、爰から直ぐに

與次　氣遣はずとも

與五　兄貴。

與次　與五郎、早う。

てる　どうぞわたしも。

與次　行きやれ。

ト行かうとするを、與次兵衛へだてゝ、與五郎を突き出し、門の戸をしやんとさす。唄、七ツの鐘與五郎向うへ走り入る。引ちがへ揚げ幕より四ツ手駕籠の垂れを下ろし、妙貞附いて、すた〳〵と出で來り、駕籠は門口へ下ろし、妙貞囁く。駕籠舁き呑みこんで下手へ入る。跡合ひ方。

てる　コレイナア、與五郎さん、どうぞわたしも、ござんす所へ。

與次　これはしたり、其方は他家より貰うた娘、與五郎が家出したとて、どうして一緒にやられうぞ。
マア〳〵、わし次第に。

てる　して、與五郎さんは、ありやマア、どこへ行かんしたのぢやえ。

與次　ハテ、内に置けば親御の心に違ふといひ、殊に家附きの與五郎、勘當しては世間の手前、與次兵

衛が立たぬ。そこで首尾よう目論んで家出さすれば、親を捨て家出の悴、どうでお帳につけねばならぬ。

てる　エヽ、アノ、與五郎さんをお帳とやらに、お附けなされますのかえ。

與次　ハテ、我れと我が身を自滅の與五郎、毛蟲親仁も隱居させ、この跡式は枕を高う與次兵衛が

ある　アノ、この山崎屋の身代は、

與次　總領ぢやもの、納めいで。弟與五郎日蔭者、嫁に貰うた其方をば、コレ、この兄が女房に持つ。

てる　エヽ、そりやマアお前、眞實かえ。

與次　杯もせぬ弟嫁、殊に世間へ廣めはせず、兄が女房に持つたとて、なんの大事が

てる　イエ〳〵、わたしも武家の娘、左樣な約束いたしませぬ。杯せねど云ひ號け、與五郎さんがござんせにや、わたしやお内に居りませぬ。

與次　イヤ〳〵、さうは云はれまい。たつた今もこの内を出る事は、否でござると云うたぢやないか。弟は身より出たる銹、其方に何の科はない。料簡し替へてわしが女房に

てる　イエ〳〵〳〵、道に背きし夫は、どうしても持ちませぬ。

與次　そこを我れらが持たせて見せう。

てる　どうしてあなたに
ト逃げんとする。立廻りあつて、見世にあつたる魚を拵へる出刃を取上げ、手早く我が手に左の小指を切る。お照悔りする。合ひ方。この時門口の駕籠の垂れを上げる。内に都、藝者の形にて窺ひ居る。上の障子を明けかけ、次部右衛門窺ひゐる。與次兵衛思ひ入れあつて

與次　コレ、お照、あの與五郎は吾妻への心中なりと、左の小指切つてゐるを、いま爰で其方は、あれほど見たではないか。わしは其方へ心中の、指を切つたが固めの印し。返事さつしやれ。

てる　エ。

與次　心中見せても男に持たぬか。

てる　サアそれは。

與次　女房になるか。

てる　サア。

てる　サア〳〵。

與次　お照、切つたこの指、必ず無駄には。
ト振りかへる拍子に次部右衛門と顔見合す。次部右衛門、障子ぴつしやり閉す。與次兵衛思ひ入れ。外

より都と妙貞、ツカ／＼と入り、與次兵衞が胸づくしを取つて思ひ入れ。權九郎出かゝつて窺ふ。

みや　コレ、惡性男の與次兵衞さん。

與次　ヤ、わりや都、なめらさんぼう。

妙貞　外からしつかり見屆けました。エヽ、こなさんは

與次　これは阿母、尤も／＼。

みや　イエ、イエその尤もは、もう／＼聞きたうござんせぬ。其方についた身の代の金は、如何ほどあるとても、立金はわしがして、女房にするゆゑ、今日爰へ同道せいとのお賴みに、母さんと相談して、門には親子が居るとも知らず

妙貞　與五郎さんの云ひ號けのお照さんに、指を切つての惡口說き。コレ、與次兵衞さん、お前アノわたしが娘、都が事はどうさんす。お前を爰の代取りにせうと、宿老どのまで駈けあるき、骨を折つたも娘を爰の、御新造樣にしたいが山。向うの見えぬにうか／＼と、世話やくやうな妙貞ぢやござんせぬ。サ、山崎屋の御新造樣は、娘の都ぢや。さう思つてもらひませう。エヽ、アタ阿房らしい。

てる　ほんにお前は慥か講中

妙貞　アイ、妙貞でござんす。わしが娘は藝者の都、とうから主の圍ひ者、今日改めて山崎屋の御新造、わしや姑御さんぢや。アイ、大身代の阿母様ぢや。さう思うて下さんせ。

てる　そんなら都さんは、與次兵衛さんの

與次　アヽ、コレ〳〵、もう〳〵何も云うてくれな。立派顔したこの與次兵衛、面目次第も

權九　イヤ、無いとは云はさぬ。堅い顔する兄御様、イヤハヤ呆れた身持ちだわえ。與五郎どのは吾妻へ打こみ、手附けは濟んでも、跡金の二百兩に行きつまり、身請けの出來ぬを附けこんで、御隱居様が、百兩安いと聞くと其まゝ、拂ひ物なら買ふべしと、吾妻を手かけに抱へる心。兄貴は都を引摺りこみ、それが足らいでお照さまに足をつけ、指を切るとは言語道斷。有やうは與五郎どのをほいまくり、お照さまを申しうけ、別家と成つて見世でも出してもらはうと、樂んで居ることの權九郎が手前も恥ぢず、あまり不埒な與次兵衛どの。イヤハヤ、爰の内に、ろくな奴は一人もない。モシ、お照さま、只今から、私しへ〳〵。

トしなだれ寄る。

てる　エヽ、何ぢやぞいな。其方までが同じやうに。こゝ放しやいなう。

トふり切り、ツイと奥へ入る。

妙貞　サア〳〵、娘、聞けば聞くほど油斷のならぬ爰の內。モウ〳〵、ちよつとも待たれぬ。われも早う與次兵衛さんから、身の代の百兩いま取つて、わしに寄越しや。サア、早うしや〳〵。サア、立て金して、女房にさんせ〳〵。

與次　これはしたり、マア〳〵、靜かに云うてくれい。

權九　コレ〳〵、都さん、おまへ藝者の身で、生娘に見かへられては立ちやすまい。お前も面あてに指を切りなさい。心中しなさい。コレ〳〵、〳〵

ト出刃を取つて來り

サ、この出刃で、指を切りねえ〳〵。

みや　エヽ、滅相な。どうしてわたしが。

妙貞　さうぢや〳〵。滅多に娘を疵物にはさせませぬ。

權九　エヽ、卑怯な事を云ふ阿母だ。指の切りやう知らずば、わしが敎へて進ぜう。マア、この出刃を斯う持つて、コレ、ちよつきりちよつと出刃を斯う持つて、左の小指と見たならば、右に持つた庖丁で、まツこの通り

ト思はず我が手に指を切り、「ワツ」と倒るゝ。皆々驚く。

みや　ソレ、いつそ血が流れるわいな。
妙貞　どうでも今が汐時であらう。
權九　アヽ、痛い〳〵。コレ、お照さま、血留を下さりませ。血留はどこにある。どこだ。堀留は近所だが、汐留は遠いワ。
　　ト「痛い〳〵」と手を抱へ、奥へ入る。
みや　コレ、與次兵衞さん、あのお照さんへ切らしやんした心中は、ありや、ほんまでござんすかいな。
與次　何をマア、わけもない。身請けせうと呼び寄せた、其方は女房、ありや正眞の座輿といふもの。コレ、この切り指はわがみへ心中。
　　ト小指を取つてやる。
みや　すりや、わたしへお前が心中。
與次　切つた小指が夫婦の固め。
妙貞　そんなら娘と、いよ〳〵祝言。
　　トこの時奥より
仁右　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

市孫　アヽ、めでたい〳〵。

ト肩衣のまゝ仁右衛門、銚子杯を持ち、市兵衛、孫六出で來り

仁右　サ、お二人の固めの杯、都さまから與次兵衛さまへ。幸ひ我れら講中の、この肩衣の役に立つたる仲人役、跡式何かの讓り引、親御が得心いたされて、又ぞろ二度の法體で

市兵　もの事丸う頭の如く、事納めた上からは、わしが勘定呉服代、都どのゝ身のまはり、積つたところが五十五兩の三分二朱。

孫六　さて小間物屋〆め高が、四十三兩二分あまり。

妙貞　娘が立て金百兩と

與次　合せて僅か二百兩には足らず。ドレ、勘定して

ト戸棚を明け、金箱を取出し、明けようとする。此うち淨閑、障子屋體に出かゝり、この體を見て膽をつぶし、この時つか〳〵と出で、明けんとする金箱を押へ

淨閑　どつこい〳〵、さうはさせぬぞ。マア〳〵〳〵〳〵、どこの國にか、この親が爪へ火ともしたといはうか、旨い物を食ふや食はず、十萬兩の在り金の、まだ其上へ貯めた金、湯水のやうに遣ふとは、さうはさせぬぞ。與五郎めはあの不埒、實の子の偏屈者、われが斯うした心とは、今の今

まで知らぬわい。ヤイ〳〵、此マア同行の仁右衛門どの、こなた衆まで同じやうに、藝者を引込み、親にも沙汰なし祝言沙汰、呉服代も小間物の金も、やること親がならぬ。一文きなかも、ならぬぞ〳〵。

ト千兩箱へ跨り、押へて居る。

仁右　これはしたり淨閑どの、こなた、老耄さしつたか。

淨閑　なんで淨閑、老耄いたさぬ。

仁右　ハテ、それでもこなたは身代を、あの與次兵衛へ讓つたではござらぬか。

與次　その上お前は、元へ戻つて樂隱居、この山崎屋はわしがもの。十萬兩の金のうち、二箱三箱違うたとて、別して痛まぬこの身代。お前は御隱居、かくれる文字の通りに、どこぞへ隱れてござりませ。

淨閑　エヽマア、おのれは

與次　ハテ、わしが物でござります。

ト淨閑を突きのけ、箱の内よりみだけ二包み出し

ソレ、よいやうに分け取〳〵。

妙貞　エヽ、忝い。

　　ト金を取つて

コレ〳〵、跡は差詰めお前がた、よいやうに、分けさんせ。わたしや百兩取つたその上に、山崎屋の姑御樣ぢや。ホヽヽヽヽ……ソレ、お前方、よいやうに。

　　ト百兩渡す。

市兵　オット、此方の勘定も……二口〆めて百兩あまり。

孫六　二人は慥かに受取りました。

仁右　コレ〳〵、都どの、あなたは爰の御隱居ぢや。行く末の事、賴まつしやれ〳〵。

みや　そんならあなたは舅御樣。この上ともに嫁のわたし、お氣に入らずと御隱居樣、實の娘と思しめし。

　　ト思ひ入れ。

淨閑　エヽ、知らぬわい。

　　ト腹立てる。

妙貞　内祝言は奧座敷。わしや開いてから跡の片付け。ナウ、與次兵衛さん……アイヤ、さんぢやない

仁右 與次兵衞どの、わしや姑御ぢや。孝行しなさんせえ。

然らば講中、宵のほど、日暮れぬ内に開きませうか。

ト皆々門口へ出かゝる。

與次 これはどなたも、何かと御苦勞。明日お禮に

市孫 イヤモウ、それには及びませぬ。

與次 さて金箱も不用心。ドリヤ、錠前をぴんとおろして。

トゑび錠おろす。

淨閑 ドレ、その鍵を

ト與次兵衞が腰の鍵を取りにかゝる。

與次 オット、最前この鍵も、お讓りなされし上からは、御隱居樣でも、滅多にこれは

淨閑 エヽ、腹の立つ。勝手にしをれ。

妙貞 そんなら道まで仁右衞門さま。

仁右 同道しませう。淨閑どの、今日からお樂ぢや。

淨閑 知らぬわい。

與次　サ、女房は居間へ。
みや　御隱居樣。
淨閑　知らぬわい。
仁右　與次兵衞どの、ゆるりとおしげり。
與次　講中方
妙市　開きませうか。
淨閑　知らぬわい。

ト唄になり、與次兵衞、都が手を引き。奥へ入る。仁右衞門先に、妙貞、花道にて百兩をちよつと仁右衞門に渡し、市兵衞、孫六も、めい〳〵心いきあつて向うへ入る。淨閑一人うつとりとしてゐる。入相の鐘、合ひ方。

淨閑　何の事ぢや。家附きの與五郎め、不孝者ぢやと思うたが、どうでもまた眞實親身の與次兵衞は、その上を行く覆輪かけた不孝もの。イヤ又、悴は違うたものぢや

ト横手を打ち

ハテ、惡い夢を見た事ぢや。

トうつとりとしてゐる。矢張り入相の鐘、唄にて、向うより丹平、若黨の形にて出で來り、門口より窺ひ

丹平　アヽ、爰ぢや〳〵。鳥越の米問屋、山崎屋は爰ぢや〳〵。コレ、賴まう〳〵〳〵。

淨閑　エヽ、やかましい、知らぬわえ。

丹平　これはしたり、山崎屋は爰か。

淨閑　知らぬわえ。

丹平　これは無作法、倉岡力よりお使ひに參つた。コレ、丹平でござる。

淨閑　知らぬわえ。

丹平　コレサ、氣をしつかりと持たつしやれ。知らぬ事はあるまい。丹平でござる。丹平でござるワ。

トこれにて淨閑、思ひ入れあつて

淨閑　アヽ、丹平どのか。

ト見る。

丹平　さやう〳〵、丹平どのは三十になるかならぬに、主人のお使ひ。アヽ、草臥れました。

淨閑　左樣でござらう。辻駕籠にでも乘られいで

丹平　定めて足が
淨閑　あいたかつたでござらうに、なぜ
丹平　ツン／＼。
淨閑　駕籠にでも乘らつしやらぬぞ。

ト淨瑠璃にて語る。

丹平　エヽ、何を仰しやります。コレ、與次兵衛さま、密事の御用もござれども、書いたる物は、もし落ちるの大事を存じ、拙者すぐさま御口上にて申すでござらう。
淨閑　それは御苦勞。此方もよん所なき取込みござつて、只今の不挨拶。して、倉岡氏より御用の趣き承りたい。
丹平　イヤモウ、丈左衛門どのと同腹中のあなた樣、先達て十次兵衛が越度と成つたる胡蝶の香合、屋敷へ置くも氣遣はしく、幸ひ主人の以前の家來、今は駕籠屋の甚兵衛と申す者、大丈夫を見こみしゆゑ、彼れに暫く預け置いた。まだ／＼御口上がござる。彼の藝者吾妻が事、身請け金三百兩と承る。何卒貴公方にて右の金子を調達あつて

ト淨閑が頭を見て

イヤ、與次兵衞さまには、こりや又ぞろ、御元服でござるな。

淨閑　さやう／＼。今日より致して又ぞろ淨閑。

丹平　それはおめでたう存じまする。時に只今申しかけたる、三百金の御返事はな。

淨閑　ア、コレ／＼／＼、丹平どの／＼、お詞のうちでござるが、今日よん所なう身代を悴に讓つて、跡の後悔。御覽の通り、又ぞろ頭は隱居淨閑、金簞笥の鍵までも取りあげられ、イヤモウ、一朱の工面も致し憎い。その儀よろしうお斷りを頼み存じまする。

トよき時分より下駄の市、番屋の外にて、火の用心の行燈の掃除してゐたりしが、ふつと二人が相談を聞き、門口にて聞耳立てる。

丹平　それは近ごろ氣の毒千萬。まだござる／＼。イヤ、別儀でもござらぬが、家中橋本次部右衞門娘お照こと、丈左衞門どの至つて御懇望のところ、貴公の御子息與五郎どのへ養子嫁、只今もつてお照こととも

淨閑　サヽ、お待ちなさい／＼。其お照が事は、ちと御相談ものでござる。それと申すも、與五郎めをほいまくる手段。さすればお照に構ひはござらぬ。こりや斯うなされ、貴公には後ほど夜に入りお照が迎ひ。その節そつとお渡し申さう。ふん縛つてお連れなさい。

丹平　然らば後ほど、お照を盜みに參るほどに、屹度お渡しなされいよ。

淨閑　何がさて〳〵。コレ〳〵、丹平どの、かね〳〵認め置き申した、倉岡どのへ遣はす御狀、屆けておくりやれ。

丹平　承知いたした。早速身どもへ

淨閑　お渡し申さう。

ト見世の欄間に釣りし神棚の箱守りより、封じたる狀を出し

この狀慥かに倉岡どのへ。

丹平　心得てござる

ト懷中する。下駄の市、門にて思ひ入れ。

淨閑　御大儀ながら丹平どの。

然らば後夜の鳴るを相圖に、お照をあげに

丹平　後方參らう。淨閑さま

淨閑　何かと御苦勞。

丹平　ドリヤ、出直して。

ト合ひ方、暮れ六ッの鐘、丹平向うへ入る。下駄の市、跡を見送り、この跡をつけ向うへ走り入る。

淨閑、門口を締めて

淨閑 こりや日が暮れたに、見世へ灯をともさぬかえ。神棚へ御燈火あげぬか。コリヤヤイ、善太め、男どもは居らぬか。

ト呟やきながらのれん口へ入る。矢張り合ひ方、時の鐘、障子屋體よりお照、硯箱と書置の書きしまひしを持添へ、窺ひ〳〵出で來り、奥の方へ思ひ入れあつて

てる 先刻に父さんが、わたしが方へ持つてござんしたあの金は、心あつての二百兩、吾妻さんの身請けの跡金、先へ渡した其あとは、どうでこの身を

ト書置へ思ひ入れあり、帶へ挾み、そろ〳〵と戸棚へ窺ひより、そつと戸を明け、箪笥の引出しより財布入りの二百兩を取り出し、財布へ書置を結びつける、矢張り合ひ方捨て鐘、この時向うより下駄の市、丹平、狀を奪ひやひ、立廻りながら出で來り、門口へ來て狀をばひ取る。此とたんにお照、窺ひ〳〵門口を明けんとする。下駄の市、丹平を當てる。うんと悶絶して、たち〳〵と番屋の内へ倒るゝ。下駄の市、しやんと戸をさす。この物音にお照驚き、戸に縋つて外を窺ふ。この音を聞き權九郎、行燈をさげて窺ひ出で

權九　誰れだ〳〵。門口で今の音は何だ。

ト行燈あげ見る。外にて下駄の市、思ひ入れ。お照はつと當惑の體。權九郎よく見て

ヤ、そこにござるは、お照さんではござらぬか。コレ、お前はマア、何をしてござります。

ト手を取る、

てる　アヽコレ、わしやちつと。

權九　モシ〳〵、どうかお前は味な素振りだわえ。サア、奥へござりませ。

てる　サア、わしや少つとナ。

權九　エヽ、來なさいといふに。

トお照が持つたる財布を見つけ

ヤ、こりやお前、そりやア金だが。

てる　アヽコレ、それを。

九　ヤ、こいつは油斷が。

トお照を無理に奥へ連れ行かうとする。この時下駄の市、つか〳〵と入り、お照を外へ突き出し、權九郎を引つける。この間に嬉しきこなしにて、財布を持ち向うへ走り入る。權九郎、振りほどいて下駄

の市へかゝる。立廻りにて權九郎が左の手を屹度ねぢあげる。

アイタヽヽヽヽ。

ト小指の跡いたむ思ひ入れ。下駄の市、よく〱見て

市　左の小指の切れたるは、此奴も詮議の。

權九　ヤ、うぬは夜番の。

ト云はうとするを取つて押へる。

アイタヽヽヽ。どうする、どうする。

市　まさかの時は。

ト土藏の明いてあるを見つけ、思ひ入れあつて、權九郎を引立て、土藏へ打ちこみ、ぐわら〱と戸をさす。奥にて

次部　與次兵衞どの〱。

ト聲するゆゑ、下駄の市こなしあつて、門口へ出で、番屋へ入る。合ひ方になり、奥より次部右衞門、與次兵衞出で來り

與次　次部右衞門さま、もう御歸りでござりまするか。

次部　日暮れましたれば、最早お暇仕らうが、與次兵衛どの、先刻と申し、御家内の樣子、一々身が心に會得仕らぬ。おてまへの家督となれば、部屋住みの與五郎に、女房はいらぬもの。娘照めを受取つて罷り歸る。さう心得て下されい。

與次　すりや、與次兵衛めが家督とござれば、弟嫁のあの照を。

次部　ハテ、添はせる男がござるまいが。

與次　イヤ、品によつては私しが。

次部　アヽ、お云やるな。弟嫁が兄の女房になりませうか。殊にこなたは都といふ、藝者とやらを引入れて、身持ち惰弱がしたらいで、娘の照めを弄さみ物に致さるゝ。そりやこの親が罷り成らぬ。イケ馬鹿々々しい。サ、娘を爰へ連れてござれ。

與次　左樣ござれば是非がない……コリヤ、女子ども、お照をこれへ、連れて參れ〳〵。

ト奥の方へ云ひつけ

次部右衛門さま、お照をお渡し申すからは、先程あなたの御持參なされし二百兩、お持ちなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、戸棚の内にある簞笥の引出しを明け、金なきゆゑ思ひ入れあつて

次部　ヤヽヽヽヽ。最前お照が仕舞ひ置きし、財布のまゝの二包み。
與次　如何いたしたな。
次部　もし强慾の親人が。
與次　ヤ。

ト思ひ入れ。奥ばた〳〵にて善太、あわたゞしく出で來り

善太　モシ旦那樣、お照さまが、お居間にお見えなされませぬ。
與次　ナニ、あのお照が見えぬと申すか。
善太　どこを尋ね申しても、さつぱりお見えなされませぬ。
與次　すりや、この金の行き道も。
次部　どう仕つた。
與次　アイヤ、夜道いとはず心願に、また觀音へ。

ト思ひ入れ。

それ、提灯付けて迎ひに行きやれ。

善太　畏まりました。

ト奥にて

七　オツト合點だ。

ト のれん口より、ぶえんの七、山崎屋といふ弓張り提灯をともして出で來り

サア、どうで歸りだ。おれが一緒に行つてやらう……コレ、あのお照さんは、慥か駈落ちおちやないかえ。

善太　ア丶、これサ……役にも立たぬ事を、ハイ、行つて參りませう。

ト 五ツの鐘、拍子木にて、三人とも向うへ急ぎ入る。

次部　娘へ遣はす二百兩、大金持ちのお内ゆゑ、そこらあたりへ紛れこみ……金の行くへが知れたなら、娘が在所も。

與次　歸り次第にお跡から。どうござつても、お照が緣を。

次部　これまで長々お世話の段、氣の毒ながら取り戻し。

與次　其お心ならお照が諸道具、云ひつけ置いたを其まゝ爰へ。

百九　畏まりました。

ト のれん口より、重ね簞笥、挾み箱を、若い者手傳うてよき所へ並べ

九介　お照さまの三荷のお荷物。
百九　殘らず爰へ。
與次　持ち來れ。
百九　ハイ。
ト奥へ入る。
與次　次部右衛門さま、お照どのをお戻し申す上、お附けなされしこの荷物、コレ、あなたへ。
次部　受取りませう。諸道具よりは照めを去り狀、三くだり半が貰ひたい。
與次　御尤も。左樣あらんと與次兵衛が、聟與五郎の名代に、認め置いた數通の去り狀、お氣に入つたをどれなりと、次部右衛門さま、御覽なされて下さりませ。
ト次部右衛門思ひ入れあつて、書ものを、よく〳〵見て
次部　ヤ、こりや去り狀と思ひの外、諸所へ貸しつけ置かれたる、或ひは估券貸し金の。
與次　サ、その證文を暫らくあなたへ。
次部　預かり置いた納まりは。
與次　我れなき跡は弟が家督、その節めでたく與五郎へ、その去り狀をお歸しあり、お照どのとも末長

う。それゆゑ新たに去り狀を、書かぬ心をお察しあつて。

次部　身が預かりの數通の去り狀、樣子あらんず心ざし。さほど實義のお手まへが、最前みだらなあの振舞ひ、定めてあれにも。

與次　サ、それと云はれぬ實の親、淨閑どのゝ無得心、血を分けたりし我れさへも、つらく當れば猶更に、義理あるお主の血のあまり、子で子にあらぬ與五郎に、家も讓らずあまつさへ、大恩うけし鴻野のお家、佞人ばらに一味して、この山崎のお家にも、かゝるがどうも御先祖へ。

次部　さてこそ讒者の倉岡に。

ト思ひ入れ。

與次　サ、それゆゑ又も無理隱居、弟に難儀もかけまい爲め。

次部　心望みのお手まへが、藝者ぐるひにあの都。

トよき時分より都、世話女房の形に着替へ、仁右衞門、年季證文を持ち、出かゝり居て

みや　身の代の百兩ねだり取り、女房約束しやんした都といふは、與五郎さんに乳を上げたる乳母が娘今は駕籠屋の甚兵衞が、夫婦拵ぎの女わざ、お賤と申す女髮結ひ。與次兵衞さんのお賴みゆゑ、似付かぬ藝者の拵らへもの、與五郎さまはこの賤が、お預かり申しました。とはいふものゝ、

常々から、心よからぬこちの人。ア、、又ぬしの心も。

ト思ひ入れ。

仁右 都へやつた立て金百兩、殊に呉服屋小間物屋へ、渡した金を取り集め、都合合せて二百兩、吾妻どのへ跡金に、持つて行つたは、講頭、この仁右衛門が頼まれて、受取つて來た年季證文。

ト見せる。

次部 さうとは知らず早まつて、娘が家出、財布の金の行くへ知れぬも、正しく吾妻が身請けをと。

與次 貞女のお照もこの家に、置かれぬ義理に持ち返す、荷物の内を改ためて。

ト簞笥の引出しを明ける。内は殘らず包み金詰め置く。こなしあつて

次部 受取り歸るは次部右衛門……こりや引出しに包み金。

與次 荷物の内は在り金の、十萬兩をお照に附けて。

次部 すりや與五郎が家督とならば。

與次 その節めでたく。それまでは、橋本氏へ預ける荷物。

次部 娘が品は受取らんが、故なき多くのあの金は。

トよき時分下駄の市、對の上下、大小に改ため、門口に窺ひ居て

市　代々つゞく山崎屋、役目に是非なく封印いたす。

ト　つか／＼と内へ通る。

次部　ヤ、すりやこの家へ封印の。

市　役目は則ち三原傳藏、鴻野の大恩うけながら、底巧みある丈左衞門、身が別家たる有右衞門、それに組みするこの家の主。

與次　サ、その親人を助けたく、講中方と連れだちて、宿老どのにて何かの樣子。

仁右　所詮お上のお疑ひ。

與次　晴れるまで牢舍のこの身。

ト　肌を脫ぐ。下着の上へ繩をかけある。

みや　ヤ、、與次兵衞さまはあの繩目。

與次　小手をゆるめて羽がひ締め。

市　それも誰れゆゑ、強慾の、親の難儀に義理ある弟、憂き目を見せじとその身に引請け。

次部　たとへ牢舍を致すとも、云ひ譯立たば直ぐに赦免の。

與次　濟まぬは人を殺せし科人。

市　惡もの鷲の長吉を、殺せしものは證據の小指。

仁右　與五郎どのにも疑ひが。

與次　イヽヤ、弟ばかりでない、この與次兵衞も小指がござらぬ、

みや　そりやソレ先刻にお照さんに。

與次　コリヤ。いらざる女の、扣へてゐやれ。

市　小指のないはまだ外に、打ちこみ置きし權九郎。

　　トつか〳〵と土藏を明け、權九郎を引立て

　彼奴も左の小指がござらぬ。

次部　すりや、人殺しは權九郎。

權九　アコレ、どうして私し。

　　トうづくまる。淨閑、つか〳〵と出て

淨閑　毛頭知らぬ權九郎、その人殺しはあの與五郎。して又何でこの家へ封印。

市　科はその身に覺えはあらうが。

淨閑　してその證據は。

ト番屋より丹平出で

丹平　其お使ひはこの丹平。旦那の悪事を見限つて、傳藏さまへ歸り忠、歸り仕事のこなたのこの狀。

ト密書を見せる。

淨閑　ヤ、その狀までもうまく〳〵と。

ト立ちかゝるを、與次兵衞引ッ捕へ、屹度なつて、

與次　コレ、お年寄りの老耄が、何であらうとお前は御隱居。狀の名宛は矢張り與次兵衞、おなたは淨閑、すりやその返書はこの與次兵衞、こなたに科は懸けませぬ。うろたへずとも、ナ、モシ。

ト思ひ入れあつて

イザ、傳藏さま。

市　緣の切れたるお照が諸道具。構ひござらぬ、引取りめされい。

與次　ア、重々厚き。

淨閑　どうやら荷物に。

權九　正しく、在り金。

ト兩人かゝるを、次部右衞門、淨閑を引附ける。傳藏、權九郎に早繩かけ、ぐつと引附け

皆々　これは。

市　お上のお咎め、いちまきは、是非なくかゝる山崎屋、外に決して咎めはござらぬ。

與次　でもこの小指の疑ひが。

市　イヽヤ、彼奴にも指はござらぬ。その人殺しは權九郎、あまり横合ひ出ぬうちに。

與次　御苦勞ながら

次部　引取る諸道具。

市　引取る囚人。

ト權九郎を突きやる。丹平繩を扣へる。

丹平　科人立たう。

仁右　やがて赦免の

みや　その時めでたう。

與次　命ござらば。

ト顔見合せ、思ひ入れ、

市　次部右衛門どの。

次部　傳藏どの。

與次　お役目御苦勞。

淨閑　多くの金を。

トつか／＼と行くを、與次兵衛、淨閑を引附け

與次　親仁様。

淨閑　ヤ。

トきつとなる。

與次　これがこの世の。

トほろりとして次部右衛門と顔見合せ、思ひ入れあつて、

市　武士にもまさる。

次部　男一疋。

與次　アモシ。

ト淨閑を下へ引廻して引据ゑる。木の頭。

サ、お引きなされませ。

ト兩手を廻す。めい／＼思ひ入れよろしく　ひやうし　幕

五幕目　大川橋の場

役名──夜蕎麥賣り、與兵衞實ハ南方十次兵衞、駕籠舁き、土手の又。質屋、善六。小揚げ、百介。同、九郎八。魚屋、ぶえんの七。山崎屋娘、お照。惡者、野手の三。駕籠の甚兵衞。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、千部開帳札澤山に建て、橋の袂に番屋あり、すべて大川橋夜の體、水茶屋の葭簀床几、片寄せある。この上に單物をすつぼりかぶりし男寐て居る。四ツの鐘、拍子木の音にて幕明く。

トよき所に四ツ手駕籠を置き、又、客を引きゐる。仕出し、捨ぜりふにて出て入る。

又　ハイ旦那、お廉く參りやせう。ハイ、駕籠々々。アヽ、今夜は歸りがねえわえ。コレ、甚兵衞どの、一服のまつしやいな。

トこれにて駕籠の內より甚兵衞出て

甚兵　又や、今夜はきついものだな。

又　さればサ、通りはあるが、みんな俄をひやかす、むく鳥同然サ。

ト莨すひつけて居る。矢張り時の鐘にて、向うより善六、質屋の手代にて、小提灯を提げ、すた〳〵出で來る。

甚兵　モシ、歸り駕籠でござりやす。酒手で參りやせう。ハイ駕籠、お廉く參りやせう。

ト善六に附く。思ひ入れあつて

善六　ヤア、こなたは甚兵衞どのぢやアねえか。

甚兵　アヽ、善六どのか。

善六　見附けたぞ〳〵。コレ、内へ行つても留主ゆゑ、大方爰へ出てゐやうと思つて來たが、勿怪の調法。コレ、彼の品はどうしてくれるな。

甚兵　コレサ、こなたも大概知れたものだ。二朱や三朱の質ではなし、さうこれが急に。

善六　ハテ、大金だゆゑ、此方も催促せにやアならぬ……約束は十日切り、親方はわしばかりせがむわな。して、ありやア、いよ〳〵屋敷の

甚兵　知れた事だわな。駕籠舁きが、あんな香合を持つて何にするものだ。斯うさつしやい、明日、お

が内へ來さつし。

善六　行きませう。おどけは退け、どうぞ片を付けて下さい。時にわしが方から遣つた書物は有るかえ

甚兵　無くつては。コレ、

ト大叺の紙莨入れより、提灯の灯にて以前の質札を出し

これであらう。

善六　見せさつし。

ト提灯の灯にて

「一札の事、一金二百兩也、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也」……よし〳〵、おれが書いた預かりに違ひない。併し、紙莨入れへ引ッ挾んで落すまいよ。

甚兵　ナニ落すものか。相談があるワ。明日來さつし。

善六　必ず頼むよ。これから向う河岸まで行つて來ねばならぬ。

甚兵　夜更けだよ。氣を付けて行かつしやい。

又　剛的に精出すな。

善六　ドレ、早く行つて來ようか。

ト捨て鐘にて善六、橋へかゝつて入る。甚兵衛跡を見送り

甚兵　べら坊め、ナニ金が有るものか。

又　して、こなたは請けないのか。

甚兵　先づあゝ云つたのが今晩の茶番サ。ハヽヽヽヽ。

又　大笑ひだ。ハイ駕籠々々。

ト呼びかけて居る。揚げ幕と東の口にて、

九百　迷子やアイ、お照さまア。

七　迷子のお照さまア。

ト揚げ幕より百介、山崎屋の弓張と棒を突き、九郎八、若い者、鉦太鼓を打ち、東の口より、ぶえんの七、同じ弓張と棒を突き、善太、首へ鉦太鼓をかけ、叩きながら出で來り、本舞臺にて落合ひ

百九　誰れだ〳〵、善太に七ぢやアねえか。

七　イヤア、百助どんも九郎八どのも來たのか。

九郎　まだお照さんの居所は知れねえか。

百介　コレエ、鉦と太鼓を首へかけて、うぬは又いたづら、好い機嫌な奴だなア。

大立目



二番目序幕



善太　コレサ、無駄どころぢやァねえ。手が足りぬから、鉦と太鼓を二役勤めまする。即ち八人藝が裸足で逃げる。

九郎　大べら坊め。もう一人賴むがいゝわえ。

善太　それでも、助けてくれ手がねえわえ。

ト思ひ入れ。駕籠の者を見て

コレ〳〵、駕籠の衆や、なんと、駄賃はいくらでもやるから、一役助けてくれまいか。

又　物は相談だ、駄賃がよくば行つて進ぜう。コレ、甚兵衛どん、行つてもよからうか。

甚兵　隨分行つて進ぜろ。したが行がけに、番所に虎か糸が居やうから、寄越してくれろ。

又　合點でごんす。

甚兵　して、お前方はどこからござつた。

九郎　アイ、わしらは鳥越の山崎屋でござるが、娘御が家出をしましたよ。

甚兵　エヽ、アノ山崎屋の娘御が見えねえのか。

皆々　さうサ。

甚兵　ハテ、そりや氣の毒な……コレ、又や、早く棒組を寄越せよ。

又　合點でごんす。サア、行きませう。
百介　これから本所の方を尋ねませう。
七　おいらは江戸の方へ行かうわえ。
皆々　迷子のお照さま〳〵。

ト土手の又は此うちへ交じり、鉦を叩き、向うと橋へ別れて入る。

甚兵　アヽ、そんなら米問屋の山崎屋の内の娘が、駈落ちと見えたわえ。

ト捨て鐘になり、向うより與兵衞、やつし形にて、八わたやと書いたる行燈を付けたる風鈴蕎麥の荷をかつぎ出で來り、直ぐに本舞臺へ來り、甚兵衞を見て

與兵　ヤ、甚兵衞どんか。この頃は逢ひませぬの。
甚兵　オヽ、蕎麥屋の與兵衞どのか。どうだ、商ひがごんせう。
與兵　アイ、もう十四五ありやす。今に賣つて仕舞ひやす。
甚兵　そいつはいゝの、一杯つけてくんねえ。
與兵　アイ、熱もりか。
甚兵　オイ、辛味をしつかり入れて下さい。

與兵　承知サ。

ト荷の内より蕎麥笊へ蕎麥を入れ、思ひ入れよろしく、捨ぜりふにて盛つて出し

サア、出來やした。唐辛子はしつかり入れたよ。

甚兵　その事サ。

トさら〳〵とかつこむ。

もう一杯下さい。

與兵　オイ、お代りかな。

ト皿を取ろ、

甚兵　コレ、皿が移の香がするによ。ちつと洗ひねえ。

與兵　アヽ、どうしたの。洗つて盛りやせう。

ト片荷にある手桶にて洗はうとする。この時、箍の切れたる音して桶の水こぼれる。

甚兵　アヽ、何の音だ〳〵。

與兵　サア〳〵、大變だ〳〵。

甚兵　どうした〳〵。

與兵　桶の箍が切れて、水がみんな溢れたワく。こいつは大變々々。

甚兵　そいつはとんだ事だ。蕎麥屋に水がないとは、河童が皿を割つたやうなものだ。

與兵　アヽコレ、どのみち水がなくてはならねえが……アヽ、好い事があるわえ。コレ、甚兵衛どん、お前にちつと御無心がある。

甚兵　なんだな。

與兵　わしは向う河岸の番所で、米かし桶に水を一ぱい貰つて來るから、其うちこの荷をこなた、ちつとのうち見て居て下さいな。

甚兵　オイ、よしく、見て居て進ぜう。早く行つて來さつし……エヽコレ、棒組の衆野郎でも來さうなものだが。

與兵　そんなら頼みますよ。この桶も番太が所へ預けて置かう。

ト箍の刎れた桶を取つて、

ちよつと行つて來ますよ、頼むよ。

甚兵　早く歸らつしやいよ。

與兵　直に行つて來ます。

ト捨て鐘になり、桶を持つて捨ぜりふにて橋の方へ入る。

甚兵　ハテ、あの野郎どもは、もう來さうなものだが。

ト呼びかけて居る。向うばた〳〵にて、お照、裸足にて、襟へ財布をかけ、いつさんに走り出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。

甚兵　ハイ、駕籠々々、お駕籠參りやせう。お廉く參りますぞえ。

ト呼びかける。お照窺ひ見て

てる　モシ〳〵、駕籠屋さん。

甚兵　アヽ、女中だね。お召しなさるのかえ。

てる　アイ、どうぞ乘せて下さんせ。早う乘せて下さんせいな。

甚兵　畏まりました。アヽコレ、マア、野郎めら、何をしてうせるやら。あの又野郎めも、あの位に云つてやつたに……モシ〳〵、お急ぎなら、マア、お召しなされませ。

てる　どうぞ早う連れて行て下さんせいな。

甚兵　ようござりやす。サア、お乘りなされませ。

ト介抱して駕籠へ乘せようとする。お照とつかはして爪づき、爪を蹴かへす。此はずみに懐の金財布

ぶらりと下がる。

てる　アイタヽヽ〳〵。

甚兵　どうなされました〳〵。

てる　爰の石に爪ついて、爪を怪我しました。アイタヽヽヽヽ。

甚兵　アヽ、そりやお危なうござりました。ドレ、莨入れに治丹坊があつたかしらぬ。

ト紙莨入れの内を尋ね、思ひ入れあつて、

アヽ、また折悪くみんなにした。待ちなさい、結へてあげやせう。紙があつた。

ト莨入れの半紙を出し、引裂いて足の指の血を拭き、捨ぜりふにて介抱する。この時襟に掛けたる財布、甚兵衛が頭へさはる。思はず甚兵衛これを見つけ、思ひ入れあつて

甚兵　モシ、こりや何でござりますえ。

てる　金でござんす。

甚兵　アヽ、金かえ。

ト思ひ入れ。捨て鐘、烈しく打つ。

てる　モシ、草履を買うて下さんせいな。

甚兵　なにサお前、お駕籠でござりやす。草履はいりやせぬが、して、お前はお一人かえ。
てる　アイ、一人ぢやゆゑに、犬が怖うてならぬわいな、
甚兵　モシ、そしてお前、どこまでござりますえ。
てる　エ。
甚兵　イヽエサ、先きはどこまで行きなさるのだえ。
てる　アイ、與五郎さんの居さんす所まで、連れて行て下さんせ。
甚兵　エヽ、與五郎、そりやどこに居られます。
てる　サア、その居なさんす先は知れぬわいな。
甚兵　そいつは空な尋ねものだ。いま懐から出かゝつた、高もしつかり、娘の身で、徒歩や裸足の駈
落ちは、てつきりお前は山崎屋の。
てる　よう知つて居なさんすの。
甚兵　モシ、向うから爰へ追手の衆が。
てる　エヽ。

ト恟りする。向う揚げ幕にて大勢の聲して

皆々　迷子のお照さまア。

ト呼ぶ。お照悔りして

てる　早う連れて行て下さんせ〳〵。

ト甚兵衞が後に縋り、慄へて居る。

甚兵　ようござりやす。こんな事がわしらの商賣。お前を尋ねる人が來やうが、滅多に渡す事ぢやアござりませぬ。落ちついてござりませ。

てる　それでも　どうも、心が急いてならぬわいな。

甚兵　よし〳〵、今連れて行つて、ト云つたところがおれ一人。エヽ、コレ、棒組めらは焦らしやアがる。といつて一人でも舁けまいし。

トまた向うにて

皆々　迷子やアイヽヽヽ。

ト聲する。

てる　アレ、爰へ來るわいな〳〵。

ト思ひ入れ。

甚兵　アヽコレ、困つたものだ。

ト蕎麥の荷を見付け、思ひ入れあつて

モシ、お孃さん、駕籠でお前をやりたいが、棒組が居ないから、あの大勢に見らるゝが否ならば斯うしなさい、ちつとの内、この蕎麥荷の中へ隱れなさい。さうして、わし一人で擔いで行き、わしが、内から送らせてやりやせう。さうなされませ〳〵。

てる　どうなりと、好いやうにお頼み申します。

甚兵　そんなら爰へ入りなさい〳〵、ドレ〳〵、片荷ずらねえやうに、此方の道具を此方へぶツこんで

ト とつかはと片荷を明ける。この拍子に紙頁入れを落す。

てる　サア、早う隱して下さんせ。

甚兵　ようござりやす。わしが附いてゐちやア、指でも付けさせる事ぢやアござりませぬ……ソレ、こごみなさい。頭が危ないよ。

ト介抱してお照を、蕎麥荷の内へ入れる、また財布ぶらりと下がる。甚兵衞思ひ入れ。向うにて

皆々　迷子やアイ。

トまた呼ぶ。甚兵衞ふつと氣をかへ、手早く荷の内へお照を隱す。矢張り捨鐘て、向うを見て居る。

若い者大勢、弓張り六尺棒を持ち、鉦太皷を叩き、向う揚げ幕より出て、下の間の歩みを通り、東の口へ入る。甚兵衞きつと見送り、

甚兵　この間に內へ。

ト行燈の火を吹き消す。九ツの鐘鳴る。思ひ入れあつて甚兵衞、荷を擔ぎ、向うへ入る。矢張り捨て鐘。橋の方より與兵衞、小桶に水を汲み、捨ぜりふにて出で來る。

與兵　ヤレ〳〵、甚兵衞さん、待ち遠でごんせう。やう〳〵水の工面をして來ました。大きにお世話でござりやした。

トあちこち見廻し

こりやアどうだ。甚兵衞どのも、おれが荷もねえワ。こいつはどうだ。サア〳〵〳〵、大變だ。荷が見えないワ〳〵。

トいろ〳〵尋ねる。駕籠を見附けて、

イヤア、、こりや慥か甚兵衞どのの駕籠だが、この、駕籠が有るからは、爰らに甚公も居るであらうが、イヤハヤ、焦らすワ〳〵、大事の一身代だ。尋ねて來にやアならねえ。ドレ一走り。

ト行かうとして又立戻り

イヤ〳〵、おれが荷ばかり探しても、あの駕籠を爰へ捨てゝも行かれまい。何にしろ、甚兵衛が内へ、この駕籠を持つて行つたら、おれが荷の行道がわからう。アヽコレ、とんだ話しだ。あの駕籠甚が内は、慥か田中であつたわえ。

ト四つ手駕籠を一人して擔ぎ、行かうとして、落ちて有る莨入れにつまづく。此とたんに時の鐘烈しく、床几の上に寢て居る男、手足を伸ばし、ぐつと伸びをして起上がる。野手の三、月代、古ひとへ物を振るつて着る。與兵衛莨入れを取上げ

與兵 なんだ、莨入れが、落ちて居たワ。アヽ、中に何だか書いた物があるわえ。なんだ。

ト思ひ入れあつて、莨入れの中より書付を出す。この聲に野手の三思ひ入れ。手拭を帶にしめ、そろ〳〵出て來る。空へ月出る。與兵衛、書き物を月にすかし見て

アヽ、なんだ、一札の事、一金二百兩也。

ト讀む。野手の三そつと前へまはり、書き物を下から取る。與兵衛こなしあつて野手の三をとらまへる。野手の三ふり切り逃げんとする。與兵衛野手の三をとらへ、面白き立廻りあつて、ドヽ與兵衛野手の三、書き物を爭ふ。書き物ちぎれ、初のかた與兵衛の手に殘り、名宛のかた、野手の三の手に殘る、これより兩人くらがりの思ひ入れ、駕籠を枷によろしく立廻りあつて、駕籠を横に倒す。與兵衛駕籠

へ入り、両手にて駕籠を横に持ち、思ひ入れあつて

泥坊め。

ト云ふを木の頭、野手の三思ひ入れあつて、書き物をすかし見る。與兵衛思ひ入れあつて

とんだ奴だ。

ト云ふ。キザミにてよろしく、　拍子幕

六幕目

田中駕籠屋の場

役名――夜蕎麥賣り、與兵衛實ハ南方十次兵衛。三原有右衛門。質屋、善六。駕籠舁き、土手の又。同、田中の辰。同、入谷の金。下女、おなべ。藝者、お光。甚兵衛女房、お賤。入間彦助。惡者、野手の三。山崎屋與九郎。山崎屋娘、お照。甚兵衛妹、お早。駕籠屋甚兵衛。

本舞臺、三間の間、茅屋根の二階作り、小屋根に引窓あり、反古貼り障子を建て、よき所に丸太階子をかけたる上り口。下家は反古貼りの壁。のれん口一枚びらきの押入れ、上の方塞竹の藪の外、隣りの二階を見せ、四ツ目垣に葉鶏頭、紫苑、萩、秋草の盛り、よき所に井戸、繩釣瓶おろしあり、門口にか

ご甚と書いたる掛け行燈、路地口、すべて田中駕籠屋の内の體、外に前幕の蕎麥荷を下ろしある。隣り二階の琴唄にて幕明く。

トお賤、前だれがけ女房、女髪結ひにて、お光、藝者の形、ふだん着にて鏡臺に向ひ、お賤、お光が髪を結うて居る。おなべ下女の形、團子を丸めて居る。この見得にて幕明く。花道へ入谷の金、田中の辰、駕籠舁きにて土手の又を駕籠に乘せ、花道の内を捨ぜりふにて駕籠の稽古して居て、

なべ　サア／＼、お賤さんえ、月見の團子も、わたしがみんな丸めてしまうたぞえ。

しづ　そりや大儀でござんした。サア、お光さん、もうようござりますぞ。ヤレ／＼、お前もさぞ待ち遠でござりました。今日はどうでも月見ゆゑ、大分仕事がござんしたわいなア。

みつ　わたしも昨夜結ふてもらはうと思うたに、お屋敷がござんして、結ふ間もなう撫で付けて、今日また下谷のお客と、根岸のお下屋敷ぢやわいな。

しづ　そりや大方夜が更けませう。今日はマアこれで堪忍しなさんせ。また明日は結ひ直してあげようわいな。

みつ　なんのいなア。隨分ようござんす。外の手と違うて、お賤さんの結はしやんしたは、また違ふわいなア。

なべ　イヤモウ、そりや世間で評判のある、濡れ髪のお賤さん、わつちもお前の弟子になつて、濡れ髪が弟子の塵紙のおなべといふ、きつとした女髪結ひになる氣ぢやわいな。

しづ　ア丶モウ、あんまり習はいでもよいものぢやわいな。

ト手を拭いて居る。門口の三人稽古をやめて

又　ヤレ〳〵、駕籠の中でおらア龜の尾が痛かつた。

辰　どうでも龜井戸だけに、かめとひねるやつサ。

金　又は乘りざまが惡い。ぴく〳〵として舁けるものぢやアねえ。

又　よしてもくれろ。この五月からおらア乘りづめに乘るやつサ。

辰　時にお賤さん、頭はどこへぞ行かれたかえ。

しづ　なんのいな、昨夜遲う戾らしやんして、眠いというて二階に寐てぢやわいなア。

又　モシ、ちよつと起して來ようかえ。

ト行かうとする

しづ　ア丶コレ、起すと跡で機嫌が惡い。構うて下さんすな。

金　モシ、お賤さんえ。あの蕎麥荷はどこから來て居るえ。

しづ　さればいな。昨夜ぬしが、あの荷を預かつたといふて、擔いでござんして、ぬしの駕籠は先へ預けてござんしたわいな。

なべ　ほんに、道理で門に風鈴の荷があると思つた。そんならわたしやア、明日結うておくれえ。

しづ　アイ〳〵、どうぞ今日は免して下さんせ。

みつ　そんならわたしも行きやんせう。

ト行かうとして、

みつ　ほんに、お早さんは、どこへござんしたえ。

三人　成る程、お早さんが見えねえの。

しづ　あの子は月見の買ひ物に行てぢやわいな。お前、歸りがけに逢ひなさんしたら、戻らんすやうに云うておくれえ。

みつ　アイ〳〵。合點ぢやわいな。

又　お光さん、送つてあげやうか。

みつ　アイ、おかたじけ。

辰金　エヽ、附合ひなさるの。

なべ　わつちを送つておくれぬか。

三人　狼に頼みな。

なべ　オヤ、好かねえナウ。

みつ　お賤さん、明日え。

しづ　ようお出でたえ。

ト隣り二階の唄になり、お光おなべ向うへ入る。

又　アレ〳〵、あの唄はどこだ。

辰　ありやア隣の下屋敷よ。

金　ア丶、今夜の月見に洒落るのか。ほんに今日は、今戸の八幡様も影祭だな。

又　さうサ、いざり屋體を拵へたな。ちつと囃しに行かうか……アイヤ、そりやアさうと、月見の支度はい丶かえ。

しづ　今おなべどのが、いし〳〵を拵らへて居てぢやわいな。

三人　ドレ、見せなさい。

ト桶の中の團子を見て

辰　コレ、見なさい。斯うあらうと思つた。うぬが面を見るやうに丸めやアがつた、
しづ　よいやうに直して下さんせ、
三人　おつと合點だ。ドレ、丸めべいか、

ト捨ぜりふにて團子を丸める。お賤、七輪を引寄せ、土瓶をかけ、煮花を仕掛ける。聖天の鳴り物になり、向うより善六、質屋にて、すた／＼と出で來り、門口へ來り

善六　お賤さん、お急がしいの、
しづ　善六さんかえ、
善六　アイ、昨夜の約束、甚兵衛どのはお内かえ、
又　なにサ、頭は二階に

ト云はうとする。

しづ　コレ、……イエ、留守ぢやわいな、
善六　アヽ、また留守かえ。さうあらうと思つた。毎日々々、留守だ／＼も久しいものだ。若い手合ひは二階と云へば、お内儀は留守だと云はれる。どうするものだ、留守ならよしサ。コレ、お賤さんいつぞや千住で、忘れはしまい、十日限りだといふゆゑに、香合一つが二百兩。あいつもこの頃

惡い噂。マア、無駄な事は跡へ廻して、コレ、かみさん、請けらるゝなら請けなさい。あの時わしが達引で、質に取つたばつかりで、こなさんは勤めをしねえぢやアねえか。すんでの事に賣れるところを、善六が料簡一つで、勤め奉公に行かねえよ。サ、請けて下さい、と云つたところが二百兩の金は有るまい。お賤さん、サア、來なさい。

ト お賤が手を取つて引立てる。

しづ　善六さん、わたしをどうしなさんす。

善六　ハテ、香合とお前と入替へにして、二百兩埋め方をするわな。サア、來なさいな、

しづ　エヽ、放しなさんせ。

ト 振り切る。三人の者これを見て、

又　なんだ、この質屋の唐變木め、頭が留守だといふに、かみさんを捕まへて、どうしやアがるのだ。

辰　さうだ〳〵、なんだ、入替へ物にかみさんを連れて行く。コレエヽ、うぬが内ぢやア、人間で質の出し入れをするか。面白いワ。コレ、盆前にぶッ殺した結城木綿の單物と、黑七子の帶の代りにこの金野郎をやるから、入れ替へて貸してくりや。カツ、金公、ちよつと行つてくりや。

金　行かねえでどうするものだ。コレ、てつか質屋のさぼてん野郎め、うぬが内へおれをお連れ申してな、この辰が雜物を入れ替へて貸してくりや。コレ、代物が米を喰ふよ。三度づゝ据ゑ膳で、菜肴を付けやアがれ。御酒もあがるぞ。とつけもねえ猿唐人めだ、

善六　なんだ、この極樂蜻蛉めら。うぬらが知つた事ぢやアねえ。死んだやうにしてうしやアがれ。

又　おきやアがれ、大きなあごたをつくと、番頭に引渡して、吠え面をかゝせるぞ。

辰金　この野郎を連れて行くべい。

三人　うしやアがれ。

善六　どうしやアがる〱。

しづ　ハテマア〱、ようござんすわいな。

三人　退きなさい、連れて行くわい。

善六　否だわえ。

三人　うしやアがれ〱。

ト屋體囃子になり、捨ぜりふにて三人、善六を引立て行く。お賤さゝゆるを振りきり、爭うて向うへ入る。お賤跡を見送り

しづ　アヽコレ、手荒うしなさんすな。ほんに若い衆といふ者は、騙さんしてもよい事を、アヽ、氣の揉めた。

ト思ひ入れあり、向うを見やるうちに、七輪の土瓶煮えかへりて、ぱつと灰立つ。お賤かけ寄つて土瓶を取上げ

これはしたり、そこら中が灰だらけになつたわいな、ドレ、出花をちよつと、

ト茶碗へつぎ、二階へ行かうとして

イヤ〳〵、また起したとて、いつもの小言。目の覺めるまで。

トよき所へ置き、また茶碗を取つて茶をつぎ、盆へのせて、二階の方に心遣ひあつて、押入れ方へ差より、思ひ入れ。合ひ方になり

モシ〳〵、與五郎さま、嘸お氣づまりでござりませうが、さま〴〵と惡いお噂。ぬしにも譯を打明けて、云はうと思へど、その間もなう。目が覺めたなら間を見合せ、あなたの事を……モシ、お茶一つ上げませう。

ト開きを明けかける。内より與五郎、手を出し茶碗を取る。この時揚げ幕にて

三人　うつちやつておきやァな〳〵。

三　ハテ、好い加減に料簡しやれな。

トこの聲を聞きお賤、聞きをたてる。屋體囃子になり、向うより野手の三、下駄がけ、柄樽をさげ、三人をなだめながら捨ぜりふにて出で來り

三人　兄イや、打つちやつて置きやな〳〵。

三人　ハテ、もういゝわえ。向うは一人、てまへ達は三人、一つづゝぶつても堪らないワ。質屋には又用もあるものだ。好い加減にしやな〳〵。

又　サ、用があるから頼めばの、くらひそばへた事を云ふから、始まつたいさくさサ。

三　おれも今日は、てまへ達の親方といふ、駕籠甚がところへ、ちつと用があつて、一升提げて來たのよ。亭主は內か。

三人　まだ寢て居られるわな、

三　起きた時分なら行つて逢はうか。

三人　サア、來さつし。

ト鳴り物の切れにて本舞臺へ來て

三　ハイ、おかみさん、御免なさい〳〵。

三人　サア、入らつしやい〳〵。
　　ト皆々内へ入る。
しづ　いつに見馴れぬ若いお方、ぬしはどこからござんしたえ。
三人　アイ、この男はね。
三　道行はわしが話しやせう。モシ、お前がおかみさんのお賤さんかえ。こりやァお初にお目にかゝりやした。わつちやァ野手の三といふ、無商賣で暮らすづるけ者サ。友達手合ひが云ふには、遊んでゐずと、ちつと夜駕籠にでも出るがよいと申しやすから、何も商賣と、差詰め此方の頭を頼んで、この手合ひ同然に、辻駕籠の弟子入りに、わざつと一升提げて來やした。おかみさん、今からお世話をお頼み申しやす。
　　ト柄樽を出す。
しづ　これはマア改まつた。いらぬ事を、よしになさんせいで。甚兵衛どのも昨夜遊う歸りまして、自由ながらまだ寢て居られまする。目が覺めたら話しやんせう。遊んで行きなさんせえ。
三　アイ〳〵、お忝うござりやす。モシ、おかみさん、ちつと外に聞きたい事がござりやすが、爰の妹御のお早さんとやらは、何かえ、まだ御亭主はねえかえ。

しづ　アイ、あの子は、まだ獨り身ぢやわいな。
三　人の世話にでもなつて居なさるかえ。
しづ　イヽエ。
三　おもしろ狸。
しづ　エ。
三　とんだ化け物だ。

　　トまじめになり、お賤思ひ入れ。

しづ　モシ、三さんとやらえ。どうでもぬしの目の覺めるのは間がござんせう。ならう事なら後方に。
三　アイ、併し又と云つても億劫だ。起きなさるまで待ちやせうよ。
しづ　でも昨今なお前とわたし、馴染のないので、何の話しも。

　　ト押入れの内へ心遣ひあつて、歸したき思ひ入れ。

又　カウ／＼、三公や、おらが内へ來さつし。
三　アヽ、又が内はこの裏か。
金　下齒が剛的だア。あよんで見や。

三　嬶アがあるか。

又　三公、ソレ千住の彼のよ。

三　久し振りでとんだ一座だ。一升取るべい。

又　そいつは話せるの。

三　そんならおかみさん、又が所に居やすよ、起きさしつたら、必ずわつちを。

しづ　アイ、知らせやせう。

三　お賤さん、待つて居やすよ。

三人　サア來さつし。

ト合ひ方になり、野手の三、三人に交り、捨ぜりふにて門口路地の内へ入る。この内二階の障子を明け、甚兵衞、引窓より覗き居る。

しづ　何ぢややら、つひに見た事もないあの男、見かけから、どうやら一癖ありさうな。殊に隠まふ押人れの。

甚兵　嬶アや〳〵。

ト寄らうとする。引窓より

ト覗いて呼ぶ。お賤悧りして

しづ　エヽ、お前、目が覺めたかえ。

甚兵　今の若い者は何だ。

しづ　野手の三とやらいふ男がな、駕籠の弟子になりたいと、お前の起きなさんすを、あの又どのゝ所で

甚兵　待つて居るか。

しづ　アイ。

ト甚兵衞、思ひ入れあつて

甚兵　野手の三、聞いた名だが……オヽ、其奴は慥か胸氣な奴だが。コレ、嗅アや、質屋の善六が來たら留守だと云へよ。

しづ　サア、その善六どのがな、今も來て、あの香合を流すか、但し二百兩金を拵へるか、勤め奉公にアノわたしを。

甚兵　エヽ、打つちやつて置け。出來るときにやア出來やうわえ。

ト聖天の鳴り物になり、向うよりおなべ、足早に出て來り

なべ　モシ〳〵、お賤さん〳〵、おかみさんが急にお前を呼んで來いとの事。ちよつとお出で〳〵。

　ト お賤が手を取つて引ッ張る。

しづ　アヽモシ。先刻も云ふ通り、わたしは今日はどうも。

なべ　ハテ、ちよつと來ておくれな。

　ト 引ッ張る。

甚兵　コレ〳〵嬶アや、外の所ぢやアない。ツイ行つてあげやな。

しつ　それぢやといふて、わたしやアノ押入れに。

甚兵　ナニ。

　ト 思ひ入れ。

しづ　追付け行かう程に、マアお前は先へ。

なべ　サア、一緒にお出でな。

甚兵　ハテ、ちよつと行きやれな。

　ト 唄になり、びんしやんとして押入れへ心を殘し、お賤をおなべ、捨ぜりふにてせり立て、向うへ入る。甚兵衞二階より跡を見送り

妹も嬶アも居ないから、心置きなくあの子の素性。

ト合ひ方になり、二階の障子を明ける。お照、前幕の形にて、財布へ入れたる二百兩の金と、書置を持つて居る。

てる　イエ〳〵、まだ欲しうはござんせぬが、昨夜から深切に、いたはつて下さんすお前、お禮は詞に述べられませぬ。有り難うござりまする。

コレ〳〵、娘御さん、お前、ひもじくはないかえ。

甚兵　なんの禮に及ぶものかな。聞けばお前も、大身代のあの山崎屋の娘御とあれば、まんざら先の知れない人でもなし、定めて聟どのが、お前の氣に入らぬのか、また舅がむづかしく、よん所なく淵川へ、身を沈めるといふやうな事と見たゆゑ、それで蕎麥荷へ入れて連れて來たは、お前の心意氣を聞いて、内へ歸して上げようと思つて、昨夜から二階へ隱し、妹にも嬶アにも沙汰をせぬのは、惡く氣取ると小むづかしいから。コレ、大概な事なら、わしと一緒に、晩には歸りなさいよ。

てる　成る程、深切なお詞、嬉しうござりまするが、わたしやその聟さんが氣に入らぬの、舅御に飽いたのと、申すやうな事ぢやござりませぬ。一旦家出したからは、もう内へは歸られませぬ。

甚兵　ア、内へ歸られぬとは、外に色でも。

てる　エヽ、なんのマア、さういふ事ぢやござんせぬ。わしたが殿御は與五郎さん、大身代とはいふものの、まだ部屋住みの心に任せず、苦勞さしやんす二百兩、どうぞ心を休めうと、何をお隱し申しませう。親御さんの目を忍びて、持つて參つた二百兩、與五郎さんに渡したうござりまする。この金渡したその跡は、所詮わたしは。

ト財布入りの金を出し、思ひ入れ。甚兵衞見て

甚兵　そりやアノ、ほんの金か。

てる　アイ、二百兩ござりまする。

甚兵　ハテ、有る所には。

トぢろ〳〵見て

その書いた物は何だ。

てる　アイ、こりや少つと私しが。

ト思ひ入れ。

モシ、そこらに、私しが櫛は落ちてはござんせぬかえ。

甚兵　ナニ櫛が。

てる　アイ、七寶つなぎの蒔繪の櫛が。

甚兵　アヽ、そりやア昨夜落しはしねえかの……マア、その書き物をちよつと。

ト寄るを、ちやつと懐中して

てる　イヽエ、こりやどうも。

ト思ひ入れ。

甚兵　ハテ、大まい二百兩、娘の身分で。

ト屹度目を附ける。向う揚げ幕にて

しづ　お早さん、わたしが持つてあげようわいなア。

トこれにて甚兵衞、障子をピッシヤリと閉す。テンツヽになり、向うよりお賤、枝豆を持つて出で來る。跡よりお早、提げ籠に入れし蛤を持ち、片手に薄二三把持つて出で來る。花道にて

はや　モシ、お賤さん、わたしが持つて行きやんせう。サ、爰へ寄越しなさんせ。

しづ　これはしたり、お前ばかり持つ役でもござんすまい。わたしが持つて上げようわいなア。

はや　して、兄さんは目が覺めてかえ。

しつ　アイ、慥か起きてゞござんした。月見の買ひ物も、其やうに忙しなうせいでもすむ事を、朝から

お前を使ひに出して、わたしや氣の毒ぢやわいな。

はや　イエモウ、兄さんの忙しいは、いま始まつた事ぢやござんせぬ。嘸お前、うるさうござんせう。

しづ　イエモウ、あの氣性を知らいでは、どうで一日も女房になつて居られぬわいなア。ホヽヽヽ。サア、來なさんせ。

ト矢張りテンツヽにて、兩人本舞臺へ來り

はや　兄さん、いま戻りましたぞえ。

ト上の方の井戸端にある手桶の中へ薄を入れる。二階より甚兵衞下りて來り

甚兵　大分使ひが遲かつたの。お賤はもう歸つたか。

しづ　ハイ、早い筈ぢやわいな。ツイ撫でつけるばかりぢやわいな。

甚兵　道理で早かつたな。コレ、蛤を買つたか。

はや　アイ、買うて戻りました。

甚兵　よく洗つて、砂を吐かして置かつし。

はや　アイ、洗うて置きやせう。

ト立たうとするを甚兵衞留めて

甚兵　コレ〳〵、嬶アにさせやな。

はや　なんのいな、ちよつとわたしが。

甚兵　ハテ、てまへにやア話しもあり。ドレ、寝ころんで。

ト思ひ入れ。

嬶アや、枕はないか。

しづ　アイ、二階にござんした。ドレ、取つて來て。

ト行かうとする。甚兵衞うろたへ

甚兵　ア丶コレ、二階なら行くにやア及ばぬ。そんなら寝ころぶにも及ばぬ。サアコレ、お早、ちよつと來さつし。話しがあるよ。

はや　アイ。

ト合ひ方になる。

甚兵　妹や、今てまへに蛤を洮はさず、水仕業をさせねえも、手足を太くしまい爲に、この間から云ふ事だが、おぬしはどうでも、てかけ妾の口があつても、その奉公は不承知か。

はや　アイ、いま此やうに兄さんのお世話になる身を以て、不承知のなんのと、其やうな我まゝな事も

申しませぬが。

甚兵　サ、我まゝな事を云はねば、コレ、爰に嬶アも聞いてゐるが、まさかの時に力になるは同胞の役だワ。おぬしは知るまいが、いつぞや牢へ入つたも、元は金から起つた事。その時はまだ竹の塚に居た時よ。あの土地にも住居がならず、この頃田中へ引ッ越したが、その砌りは既に嬶アも賣らうとしたが、その借金が今におれが骨がらみ、質屋にはせがまれる、屋敷からは催促。イヤモウ、どうにもなるものぢやアねえ。

はや　サア。それも大概お賤さんの、噂に聞いて知つて居やんす。よし又お前が、事わけ云うて頼まんせいでも、親のない跡は兄さんは親も同然、お前の爲になる事なら、わたしがやうな女でも、妾奉公、月圍ひ、勤め奉公に賣られても

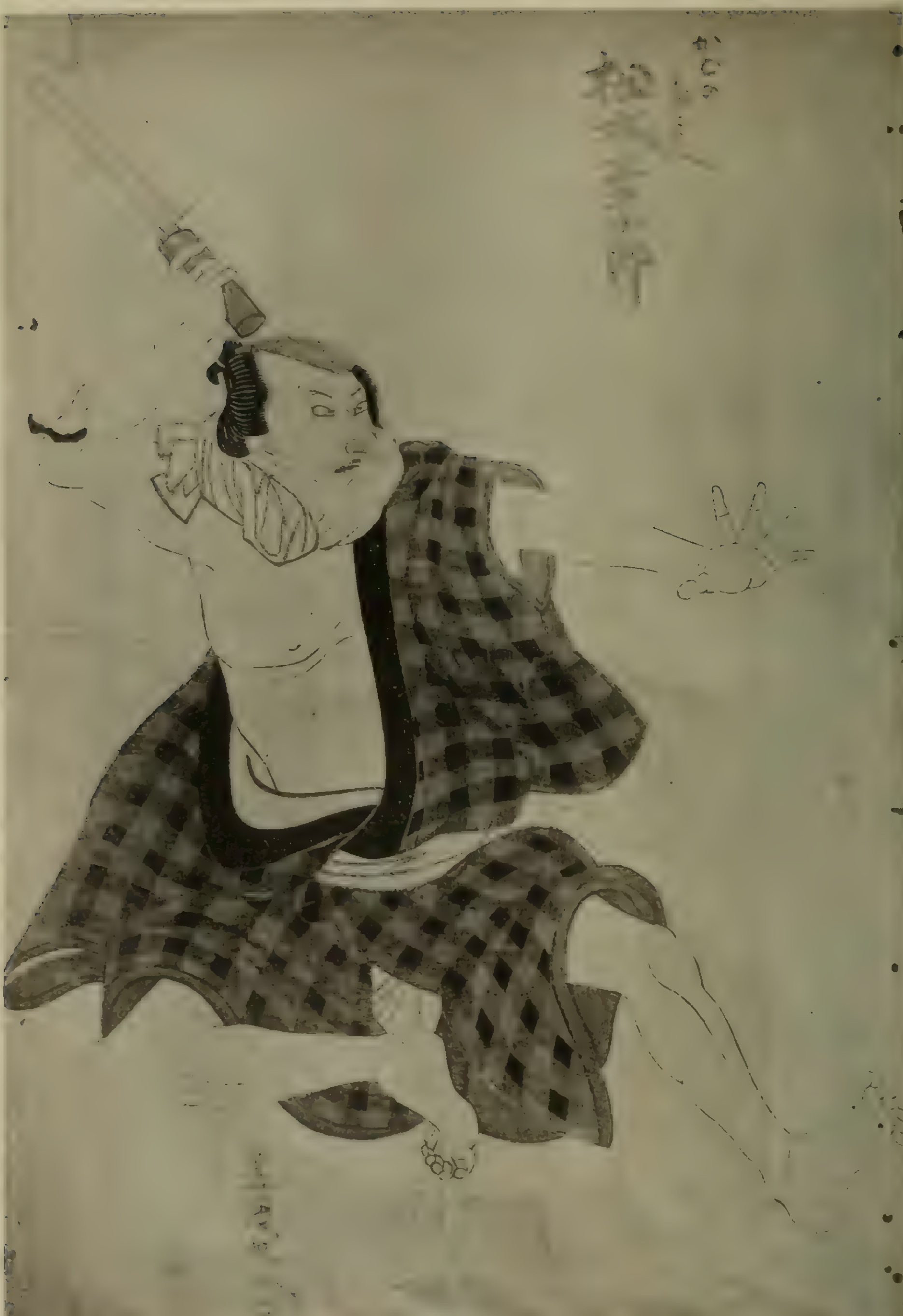
甚兵　大事がなくば、相談して

はや　サア、あけたいものぢやが、どうもわたしは。

甚兵　亭主があるか。

はや　アイ。

甚兵　亭主は何だ。



しづ　ハテ、それまで顯に訊かいでも。
甚兵　コレサ、兄が訊くのに誰れに遠慮。妹が亭主は。
はや　アイ、侍ひでござります。
甚兵　ア、、武士か。名は何といふ。
はや　それはどうも。
　　ト思ひ入れ。
甚兵　云はれねえと。ハア、あんまり碌な者でもあるまい。
はや　サア、身狀が良いか惡いかは、親兄弟の許しなき、相對づくのころび合ひでも、きつとした夫は侍ひ。今にも尋ねてござんすりや、女夫にならにやならぬ約束。それゆゑどうも兄さんの、手詰めも知つても儘ならぬ、我が身ながらも主あるわたし、聞分けあつて、めぐり逢ふまで。
甚兵　兄が所の居候ふ、妹ながら愛嬌も、色氣も持つた生れ付き、いま金になる最中に、向うの知れぬ男を待つは。
しづ　分明ならぬ事ながら、先のお方も侍ひの、今にもござんすその時は、いはゞお前は兄の事。
はや　武家の小舅不足なう、左團扇の樂隱居、孝行盡すは妹の役。

甚兵　駕籠の蒲團も綾錦の、あんぺらで張る四つ手駕籠、さて息杖は紫檀か黑檀。

はや　なんなとお前の好き次第。

甚兵　矢張り駕籠を舁かせるか。コレ妹、おぬしは一人呑みこんだが、いよ〳〵尋ねて來るといふ、證據があるか。

はや　ござりまする。互ひにめぐり逢ふといふ、證據は爰に。

ト合ひ方になり、片脇の針箱の内より、袱紗に包みし片割れの茶碗を出し

モシ、兄さん、この茶碗の片割れを、持つてござるがわたしが夫、つぎ合すれば夫婦一對。

甚兵　割れた茶碗が證據なら、おぬしが亭主は武士ぢやァあるまい。てつきりそりやァ

はや　エ。

甚兵　燒つぎ屋であらう。

しづ　何をマア阿房らしい。コレ、お早さん、云はゞ茶碗のその缺けは、お前の爲には殿御ぢやぞえ。

はや　アイナア。云はしやんすりや男も同然。わざと今日は祝ひ日の、それを敬まふこの神棚、茶碗の片々を。

ト袱紗のまゝ神棚へ茶碗の片々をあげる。

しづ　ほんに今もらうたこの酒、お神酒に上げて置かうわいな。

ト柄樽を出す。甚兵衞見て

甚兵　成る程、酒があるなら、こいつは幸ひ。鼠入らずに鮭の燒いたが。ドレ、一杯やらうか。

トずつと立つて押入れへかゝる。お賤うろたへ、開きを押へ

しづ　アヽ滅相な。どうして爰に。

はや　でも今朝までもあの膳棚に。

しづ　アヽコレ、それは先刻に、あの猫が。

甚兵　引いて行つたか。

しづ　アイ。

はや　それでも今まで。

しづ　アヽ申し、粗相な事をしやんしたわいな。

ト思ひ入れ。お早、甚兵衞、合點の行かぬこなし。唄になり、向うより有右衞門、彦助、羽織大小にて出で來り、跡より以前の善六付いて來り、花道にて三人耳打ちして、善六は路地の内へ入ろ。兩人門口に立つて

有右　駕籠の甚兵衛、宿に居るか。

甚兵　これは有右衛門さま、ようお出でなされやした。

ト思ひ入れ。

有右　サ、彦助どの、貴公にも。

兩人　心得ました。

ト兩人上へ通る。

甚兵　こりや、彦助さまも御同道でござりまするか。

彦助　今日は內々用事あつて參つた。

有右　ちと密々に。

甚兵　承りませう。コレ嬶アや、てまへは妹を連れて、わざと團子でも拵へねえ。

しづ　アイ、もう蒸かすばかりでござんす。

はや　蒸かすといへば、あの蛤も洗つて置かうわいな。

しづ　さうしやんせう。

甚兵　コレ、次手に酒も燗をつけさつし。

しづ　合點ぢやわいな。

はや　ハイ。あなた方、ゆるりとお話しなされませ。

ト唄になり、お賤、蛤と團子を持ち、お早、樽をさげて奥へ入る。有右衛門は始終お早に見惚れ居る思ひ入れ。甚兵衛思ひ入れあつて

甚兵　モシ、旦那方。して今日のお出では、アノお預かり申した

有右　イヤ、その儀もあれど、內々頼みと申すは、コレ、この人相書ぢやて。

ト懐より繪姿を出す。

甚兵　エヽ、その繪姿を。

彥助　甚兵衛へ頼みとは、即ちあれなる人相書。其方も聞いたであらう、先達て切腹なし、獄門にかけ置きたる、寶の盜賊南方十次兵衛、彼奴が死首、紛らはしくは存ずれども、もしや身寄りの者どもが尋ね參つて、誠か噓か、實正紏さん其ために、倉岡どのゝ計らひにて、獄門にかけ置くところ、案にたがはぬ首の紛失。跡にて樣子を聞くところ、十次兵衛には高頰に一つの黑子あり、彼の死首に黑子のないのは、合點行かずと、面體とくと評議の上にて。

ト此あたりよりお早、銚子杯臺を持ち、何心なう出で來り、後に窺ふ。

甚兵　エヽ、その南方十次兵衛といふ奴は、この閻獄門にかゝりましたを、アノ、盗んだ奴が。

ト後にてお早思ひ入れ。

有右　サ、もしや身寄りの者なるか、又は十次兵衛めが生き残り、隠れうせるも計られずと、認め參つた人相書。風來者の入込むこの家、もしや似寄りの者あらば。

ト人相書を渡す。甚兵衛取つて

甚兵　畏まりました。幸ひ爰へ貼り置いて、入込む奴等を一々吟味は。

ト鏡臺の鬢付油をつけ、給姿な傍の六枚屏風へ貼り置き

斯樣に致して貼り置けば、町々小路の建て札同然。

彦助　十次兵衛めは高頬に黒子、彼奴が詮議と。

有右　首を盗んだ紛れ者。

甚兵　詮議しぬいて甚兵衛が

はや　エ。

ト悧りして銚子杯を取落す。三人も思ひ入れあり。

甚兵　コリヤ、妹、何をうろたへて。

はや　ハイ〳〵、これはマア不調法な。御免なされませ〳〵、あなた方、お赦されませいな。

ト　あちこちとする。有右衛門思ひ入れあつて

有右　コレ、コレ〳〵、關屋どのではないか。

はや　有右衛門さま、お久しうござります。

有右　てもさても、一別以來でござる。

甚兵　コレ〳〵お早。誰れも呼びもしねえに、なぜ爰へ來たよ。

はや　アイ、御酒の燗が出來たによつて、サア、一つ飲みなさんせ。

ト　側へ差寄り思ひ入れ。

甚兵　コレサ、あなた方のお出でといひ、不作法な。あなた方へ御馳走には、そんな鬼殺しは上げられない。何も用はない、奥へ行けよ、行けよ。

はや　アイ〳〵、左樣なら有右衛門さま、ゆるりとお話しなされませ。

ト　行かうとするを、有右衛門引留め

有右　アヽ、コレ關屋どの、ちと爰で、話して行きやれ〳〵。

彥助　酒なら身共もお相手いたさうか。

ト兩人お早へしなだれる。

甚兵　モシ〳〵、お前さん方は、滅多に妹に足をお付けなされますな。これにやアお前、亭主がござりますよ。

兩人　ヤヽ、アノ、亭主があるか。

甚兵　ある段か、しかもお侍ひでござりやす。

兩人　イヤア。なんだ、侍ひだ。

彦助　同じ武士とは、ちと氣がもめの吉祥寺。

有右　して、その武士の家名は、なんと申すな。

トこれにてお早、當惑の思ひ入れにて

はや　サア、その名はどうも。

兩人　申されぬとは、あやかり者ぢやな〳〵。

甚兵　モシ〳〵〳〵、いかにわしがやうな者でも、側に兄が居りまするわな。ちつとマア……コレ、コレ妹、われも爰に居る事はねえ。勝手へ行つて、團子の手傳ひでもしやれな。

はや　アイ〳〵、參りまするが、今お前が屏風に貼りなさんした物を。

ト云ひ寄るを隔てゝ

甚兵　これサ、何も女の見る物ぢやアねえ。勝手へ行けよ。

はや　でも、何やら屏風に。

甚兵　ハテ、行けといふに。

はや　アイ、參りまするわいな。

ト屏風へ心を殘し、奥へ入る。

有右　コレ〳〵、甚兵衞、この間中から、妹のお早が事を頼んで置くが、どうでもおぬしは不承知か。

甚兵　私しは不承知ぢやアござりませぬが、妹めが女房約束した、先の男が侍ひと、それもたつた今聞きました。男まさりな妹め、こりやアおまへ樣のお頼みは。

有右　斷わると申すのか。

甚兵　左樣なものサ。

彦助　有右衞門どの、この者が斷わるとあれば、此方も亦ちよつとも待ちませぬぞ。

有右　さやう〳〵、妹が事が出來ぬなら、丈左衞門どのより、おぬしが方へ。

彦助　この彦助が預け置いた胡蝶の香合、いま渡しやれ。

甚兵　へイ、お跡から持つて參りませう。

彥助　イヤ〳〵、跡も先もいらぬ。身共が手から渡した品、身が受取るに誰れに遠慮。サ、甚兵衞渡しやれよ。

甚兵　ハテ、丈左衞門さまへ私しが持參いたせば、いゝぢやアござりませぬか。

有右　イヽヤ、身共兩人が受取らう。甚兵衞、渡されぬか。よもや渡されまい。どうして〳〵、二百兩といふ金がなくては渡されまい。

甚兵　どうしましたと。

有右　知つて居るわえ。善六、來やれ。

善六　畏まりました。

ト路地より出て來り

コレ、甚兵衞どの。今日あなた方が、わしへのお尋ねで、成るたけは隱したが、もう叶はねえ。こなたが香合を二百兩に、わしが內へ預けた事も、みんな申し上げてしまつたワ。

彥助　あの通りだ。主人の大事な道具を預かり、二百兩の質に入れ置き

有右　いはゞおのれは引負ひ同然。使ひを寄越せば嘲弄し、相も變らぬ挨拶いたし

善六　質屋も毎日催促に、足を運べば、ぶち打擲。イヤハヤ、おへない代物でございます。
有右　只今渡すか、返答ぶて。
彦助　甚兵衛、どうだ。
甚兵　返答しませう。
有彦　すりや、今戻すか。
甚兵　否だ。
三人　ヤ。
甚兵　返す事はならねえ、否だ。
有彦　そりや又なぜ。
甚兵　盗み物だワ。
三人　ヤアヽ。
甚兵　鴻野の家のあの寶、盗みは盗めど、置き所がないゆゑに、おれを頼んだ胡蝶の香合、此方に金が入用ゆゑ、質に置いたが何とした。金の工面の出來るまで、待たつしやりませ。否なら直ぐに代官所へ、其方から持出しやれ。盗み物ゆゑ、つうくつに、置いたがどうした。賣つたら大事か。

待たぬといへば命づくサ。

ト のれん口より出刃庖丁を引ッ下げ出で、疊へ突き立て

歸られざァ死ッくら。高で金なら二百兩、出來さへすりやァ請けてやる。キリ〳〵ぷさ達、歸らつしやい。

ト 屹度云ふ。三人ぶる〳〵慄へ出し

彦助　有右衛門どの〳〵、サヽ、歸らつしやりませ〳〵。

有右　さやう仕らう。身も最前より罷り歸らうと存じ居つた。ヤイ〳〵質屋、われは何しに來た。

善六　お前方がお頼みゆゑに參りました。

彦助　ヤイ〳〵、たわけめ、此奴、よく嘘をつく奴だ。我れ〳〵は歸る、われも歸れ。

善六　歸るのをお前方に教はるものか。併し親方の前へ、此まゝにはどうも歸られまい。

ト 門口へ出る。

甚兵　歸り憎くば出刃庖丁の、劍の舞を。

ト 立ちかゝる。皆々花道へ逃げる。

三人　アヽ、コレ〳〵、歸り申す〳〵。

ト三人花道へとまり、思ひ入れあつて

善六　斯うもあらうか。

有彦　なんと〱。

善六　運つきじ

有右　嵐が誘ふ惡企み

彦助　切つてしまつた金の鶴十、

有右　お早どのには亭主が出來る。

彦助　香合は手に入らず。

有彦　これぢやァ築地へ歸られめえ。

善六　ハクショ。

ト合ひ方になり、三人捨ぜりふにて向うへ入る。甚兵衞、出刃を持ち、跡を見送り

甚兵　二本ぼうだといつて怖いものか、此方が太けりやァ其方も太いワ。質を請ける二百兩がナニ有るものか。よし有つたとて二百兩ナニやるものか。大まいの二百兩。

トよき時分二階よりお照出かゝり、引窓より下を窺ふ。甚兵衞、お照が金の事を、ふと心づきたる途

端に、鏡臺にかけて有る鏡に、引窓よりお照の影うつるを見付けし思ひ入れにて、きつて見て、持つたる出刃を口にくはへ、きつと思ひ入れ。これをキッカケに時の鐘、隣り二階の唄になり、蟲の音して、お照思ひ入れ。甚兵衞、井戸端の石を持つて來り、奧の方へ思ひ入れしあつて、薄を入れし手桶を引ッ下げ出で、石の上にて出刃を磨ぐ事。思ひ入れあり、始終合ひ方、唄きれる。甚兵衞、手拭へ出刃を包み後へ挾み、跡を片付け、合ひ方、捨て鐘にて、そろり〳〵と二階へ上がり

姐さん〳〵、ひもじからうぞえ。

ト障子を明ける。

てる　イエ〳〵、お構ひなさんすな。モシ、どうぞお前アノ、與五郎さんに逢はせて下さんせいな。

甚兵　きつとわしが逢はせて進ぜるヮ。姐さん、お前、先刻見せた物は有るかえ。

てる　先刻見せた物とは、何でござんすえ。

甚兵　ハテ、二百兩の金は、持つてござるかといふ事よ。

てる　アイ、そりや持つて居りまするわいな。

甚兵　サ、その金の事サ。與五郎さんに渡さうから、わしに預けな。

てる　アノ、この金をかえ。

ト財布へ書き物を巻きつけ出す。

甚兵　サ、おれに渡しな。

ト取らうとする。

てる　アヽモシ、こりやお前に渡す程に、アノ與五郎さんに、どうぞ今逢はせて下さんせえ。

甚兵　逢はせてやるよ。その金を見せな。

てる　これかえ。

ト出す。甚兵衛財布を摑み、思ひ入れあつて

甚兵　サア、連れて行く。わしと一緒に。

てる　アイ、いま行くのかえ。サア、參りませう〳〵。

ト二階の上り口の方へ行くを、後より出刃にて切り下げる。お照苦しみ

アヽコレ、與五郎さんに、逢はせて下さんせ〳〵。

甚兵　やかましい。聲を立てるな〳〵。

ト金をもぎ取り、また切りつける。

てる　アヽコレ、わたしを切るのかいなう。コレ、どうぞ與五郎さんに逢うて、この金渡したうござん

す。コレ、どうぞ與五郎さんに。

甚兵　エヽ、やかましい。逢はせるワ。聲を立てるな〱。

ト滅多切りにする。この時隣二階にて何か太鼓入り所作の鳴り物になり、この音に紛らし、二階にて甚兵衞、お照と立廻りのうち、財布を奪ひ合ひ、お照、表の方へ投げる。この財布、書き物もろとも引窓の引戸の間へ入る。程よく繩へまとひつく。甚兵衞お照をしとめ、思ひ入れあつて、死骸を二階の壁際へ押付け、上へ寢莫蓙をかぶせ、手に血のついたる思ひ入れにて、小屋根へ出、引窓の間へ手を差込み

金は慥かに引窓の間に。

ト手を差込み、尋ねる思ひ入れ。この時向うにて

與兵　エヽ、向うの内かえ。忝うござりやす。

ト、テンツヽになり、與兵衞、前幕の形、夜蕎麥賣、絲立てへ腰を包み、これを四つ手駕籠の棒へ結び付け、息杖を腰に差し出て來り、花道にて門口を見て

アヽ、向うの門口にあるは、おれが蕎麥の荷だわえ。そんなら、あすこが甚兵衞が内たらう。やうやう尋ねつけた。

ト矢張りテンツ、にて本舞臺へ來る。此うち甚兵衞は二階より下りて、井戸端にて出刃と手を洗ひ居る。

與兵　モシ、甚兵衞どのは内かえ。

甚兵　オイ、誰れだ〳〵。

　　ト出刃を疊の下へ隱し

甚兵衞は内に居るが、誰れだ。

　　ト門口を見て

ア丶、蕎麥屋の與兵衞どのか。

與兵　コレ、甚兵衞どん、こなさんマア、昨夜ちよつと預けたわしが荷を、先へ持つて歸つて、こなさんの駕籠を打つちやつて置いたゆゑ、捨てちやア歸られず、コレ〳〵、あの駕籠も、コレ、息杖も持つてよ。慥かに渡しましたよ。

甚兵　イヤモウ、昨夜なにサ、こなたの行つた跡へ、生酔ひが大勢來てノ、何か蕎麥を食ふ〳〵と云ふから、こいつはウツカリとはならねえ、此奴等は、てつきり丼や大平を、性悪すると思つたから、わしが駕籠を打つちやつてノ、あの荷を擔いで、一目散に駈け出したのよ。そこで、こなさんの

荷を、わしが内へ持つて來たのよ。

與兵　エヽ、なにかえ、生醉ひの客が來たのかえ。そりやア大きにお世話でござりました。さうとは知らず今朝から、こなさんは、とつけもねえ人だと、正直は恨んだのよ。甚兵衞どん、昨夜からのお世話、荷を一荷拾ひました、エヽ、忝うござりやす〳〵。

ト無性に手を突いて禮を云ふ。

甚兵　これはしたり、お禮で痛み入ります。ハヽヽヽ、コレ、與兵衞どの、そりやアさうと、道具は揃つてゐるか、よく荷を改めて持つてござりまし。

與兵　なにサ、それにやア及びませぬよ。

甚兵　ハテ、わしが念だ、改めて持つて行かつしやれよ。

與兵　さう云はつしやるなら、こなさんの氣休めにドレ、ちよつと見て行きませうよ。

ト捨ぜりふにて荷の中の膳皿などを改めゐるうち、お照の櫛、荷の中にあるを、不思議さうに取上げ見て

なんだ、こりやア風鈴蕎麥が荷の中に、思ひがけないこの木櫛。しかも模樣は磨出しに、こりやコレ慥か七寶つなぎ。

甚兵　エ。

與兵　サ、しつぽこ煮かけ南蠻の、皿も小鉢も違ひなし、割れたが一枚ござらぬが、昨夜ちぎれたこの書き物、詮議の蔓と思ふうち、思ひがけねえこの櫛の

トちぎれし質札と拾ひし木櫛とを、一緒に持つて思ひ入れ。

甚兵　どうしました。

與兵　アイヤ、道具は揃つて居ますよ。

ト懐へ入れる。

甚兵　それでわしも安堵したの。

與兵　ドレ、一服のんで行きませう。

ト合ひ方になり、内へ入り、莨を吸ひつける。この時奥よりお賤、酒徳利を盆に載せて、これを持つて來り

しづ　モシ、お前、ちよつと神棚へ上げて下さんせ。

甚兵　なんの事だ。えてゞなくば、上げてもいゝわえ。

しづ　そのお役は疾に濟んだわいな。

ト神酒を上げるとて、お早が上げ置きたる袱紗包みの茶碗の片々を取り落し、吻りして

しづ　アヽ、鼠が居たわいな。

甚兵　べら坊め、いま落したは鼠ぢやねえわえ。

しづ　それ〳〵、茶碗の割れぢやわいな。ほんにマアうろたへた、わたしとした事が

ト茶碗の片々を袱紗へ包むを、與兵衞、よく〳〵見て、さてはこの女と思ひ入れあつて

與兵　モシ〳〵、その茶碗の缺けを、ちよつと見せなんし。

しづ　アイ、これかえ。

ト出す。與兵衞、取つて見て

與兵　ヤヽヽヽヽ、これだ〳〵。コレ〳〵女中、お前は爰の甚兵衞どのゝ爲には、何だえ〳〵。

ト思ひ入れ。

しづ　エヽ、わたしかえ。わたしや主の女房ぢやわいなア。

與兵　ナニ女房だ。ハテ、その筈ぢやアあるまいがの〳〵。

ト腹の立つこなし。お賤、合點のゆかぬ思ひ入れにて

しづ　何の事でござんすぞいな。モシ、わたしや爰の甚兵衞の女房に、違ひはござんせぬわいな。

與兵　そんなら、三年添ふと云つたも嘘で
しづ　何ぢややら、根から合點がゆかぬわいな。
與兵　この缺け茶碗を持つて居ても
しづ　エヽ、その茶碗の片々は、主の妹御のお早さんの
與兵　エヽ、そんなら割れた茶碗の主は、甚兵衞どのゝ妹の、アノ、お早といふか。
ト思ひ入れ。この時奥よりお早、ツカ〳〵と出て、與兵衞が持つたる割れ茶碗を取つて
はや　この片割れは、わたしが大切の
與兵　こなたがお早か。
はや　アイ、割れた茶碗のこの持ち主。
與兵　成る程、物ごし、思へばその夜の
はや　エ。
ト四人顏見合せ、思ひ入れ。
甚兵　嗅アや、肩を揉め。
しづ　アイ。

　ト合ひ方になり、甚兵衞の肩を揉む。與兵衞思ひ入れあつて

與兵　その持ち主がこなたなら、この片割れを合せて見やれ。

　ト懷より茶碗の片割れを出して見せる。

はや　同じ模樣の茶碗の片割れ。そんならいつぞや行きあひし

與兵　月も朧の雨あがり、夜道も嫌な小塚ツ原、犬をいとはぬ大膽は、男まさりか眞實か、頼むに是非なく掛けてある

甚兵　ヤ。

　ト振り返る。お早、心遣ひあつて

はや　アヽモシ、それを顯に今爰で、云はしやんしては、どうもわたしが

與兵　サ、身が術なくば、わしが女房に

はや　でも、現在の夫はあの體。

與兵　サ、亭主に恥をかゝせしと、思へど女の手一つに、成就しまいと手傳うた、わしも年季は三年の日限りを切つた亭主だぞよ。

はや　サ、それも男の死恥を、世上の人に見せまいと、女のあるまい大膽は、跡で思へば恐ろしい

與兵　そのあらましをこれ程も、口外せぬは此方も男、男思ひに頼まれた、男の魂ひ見抜いたら、割れた茶碗の繼ぎ合せ

はや　夫思うて持つ夫、土より出でゝ土となり、人の成行き水向けの

與兵　茶碗も同じ土くれと、ならで逢うたが

はや　夫婦の結び。

與兵　亭主にしやるか。

はや　サ、あの大恩には約束の

與兵　三回忌まで

はや　夫婦仲よう

與兵　年が明くれば

はや　この身は尼に

與兵　それも合點。

はや　茶碗と

與兵　茶碗が

はや　互ひの固め。

ト割れた茶碗を重ね合す。甚兵衛見て

甚兵　そんなら妹が約束の

しづ　御亭主さんは蕎麦賣りの

與兵　小びんながらこの與兵衞。

しづ　アノ武家方と今までも、云はしやんしたが急にこの

はや　サ、町人の與兵衞さんに、云ふに云はれぬ義理あつて

ト思ひ入れ。

與兵　これサ、あらましを、こなたの口から、云はずばわしが代つて

ト云はうとする。

はや　アヽモシ、これ程云はぬあの譯を、今さら主に話しては。モシ、わたしに免じて

ト術なき思ひ入れ。

與兵　女房にさへなるならば、別して云ふにも及ばぬの。

はや　成る程、お前と約束通り、佛を誓ひに添ひまする。

甚兵 イヽヤ、兄貴がならねえの。
はや エ、そんならお前が
甚兵 ならない譯は、今までも、亭主は武士だと云ひちらし、わが身も出世、この兄も、大金に成る先を變替へ。駕籠舁きの妹に、夜蕎麥賣りは當り前。左團扇はどこで遣はせる。渋團扇も遣へまいわえ。

ト お早、術なき思ひ入れ。與兵衛ムツとして

與兵 コレ〳〵、甚兵衛どん、そんならこなさん不承知かえ。コレナ、駕籠舁きを小舅に持つからは、聟の與兵衛が商賣は、晝は見えても、夜ばかり。風來者か風鈴の
甚兵 蕎麥荷を擔ぐこなさんに、この妹は遣り憎い。
しづ ハテ、さう云はいでも好いた事なら。
甚兵 いらざる事を、退いて居ろ。

ト 突きのけて立上がるを、與兵衛きつとなつて

與兵 妹をくれねば云ひがかり、女房約束した時の
はや アヽモシ、その事ばかりは、どうぞ爰では

ト切なき思ひ入れ。

甚兵　妹、われもよしにしろ。その日暮らしの聟ならば、幾人なりと取つて見せる。われにはしつかり持參の附く

與兵　甚兵衞どの、持參の附くが望みなら、わしにも持參が附きますの。

甚兵　ナニ、こなさんに持參が附くか。

與兵　望みとあらばわしが持參、ドレ、見せませうか。

ト合ひ方になり、以前薺麥荷の内に有りし蒔繪の櫛と、書き物のちぎれた出し

與兵衞が持參はこれでごんす。

ト三人目を付ける。路地より野手の三出かゝり居て門口を窺ふ。

甚兵　反古にくるんだ蒔繪の櫛。

しづ　磨出し蒔繪の七寶つなぎ

はや　頭の道具は女子の嗜なみ、それをお前が持參にかえ。

與兵　心覺えのない櫛が、わしが薺麥荷にあつたから

甚兵　ヤ。

ト ぎつくりする。

與兵　サ、出所云はぬが舅御へ、聟が寸志のこの持參、殊に破れた質屋の預かり、その金高も二百兩。大金持ちの山崎屋の、娘が家出も二百兩。割符の合うた

早瀨　エ、。

ト皆々思ひ入れ。

甚兵　聟に取らう。

與兵　ヤ。

甚兵　持參の道具が氣に入つた。妹を進ぜる、聟に取らう。

はや　すりやアノわたしを、ぬしの女房に

しづ　それで物事納まる形。

與兵　併し初めて持つ女房、頭の道具を遣る時は、緣が切れると世の譬へ。今更どうか

ト思ひ入れ。

はや　求めませう。

與兵　ヤ、アノ、おぬしがこれを。

はや　賣上げの附く、その櫛を、求めて差せば、お前から、別して貰うた品でもなし、氣にかゝるなら賣らしやんせ。わたしが買うて差しませう。

與兵　女房に賣るは異なものと、思へど與兵衛は夜商人、商賣違ひの拂ひ物、お氣に入つたら賣りませう。して、その價は

はや　サ、求める價のその金も

三　貸して進ぜう。

はや　エ。

三　御昨今だが野手の三、その挨拶はわしがしよう。

トずつと入る。お賤見て

しづ　お前は先刻弟子入りに、來なさんしたお若いの。

甚兵　ア丶、そんならこなたが、噂アが話した

三　弟子入りかこつけ有やうは、この妹御のお早さん、下齒に貰ふ算段で、來たその先へ、夜蕎麥賣り、與兵衛が方へ落札の、此方は後手と諦めて、お早さんなら差し櫛の、價を貸してやらうと思つて。

はや　そんならお前が、わたしへ價を

三　サ、金の代りはちぎれた書き物。

はや　櫛に卷いたる賣上げと、引合せたら

ト與兵衞が持つたるちぎれと、野手の三が持つたるちぎれを合せ、思ひ入れあつて

「一札之事、一金二百兩也、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也、尤十日限りに請戻させ候對談に御座候、月日」……ヤヽヽ、こりやコレ尋ねる

與兵　宛名は駕籠の甚兵衞どのへ、質屋善六。

はや　手跡も同筆。

與兵　さては昨夜の大川橋、胡散な奴は

三　わしでござんすよ。ちぎれが揃つて安堵でごんせう。

しづ　その書き物は、いつぞや千住で

與兵　覺えがござるか。

しづ　アイ、ぬしが難儀の

甚兵　コリヤ、役にも立たぬ口出しするな。

與兵　さてこそ手がかり。

三　コレ、なんと反古でも破れても、つぎ合すれば二百兩、その香合の道行きの、わかる書き物、お早さん、野手がこなたへ心ざし、これでその櫛買つて置きねえ。

はや　この書き物で濟む事ならば

與兵　賣つて進ぜう、その差し櫛。

ト書き物を取る。

はや　きつと渡して求めませう。

三　それで其方が納まらば、其うち櫛は預からう。

トちよいと櫛を取つて懷へ入れる。

はや　アノ、こなさんが

三　この櫛わしが預かれば、無理に搦んだ緣組みの、その緣類になるべいと、搦みこんだるわしが仲人。

甚兵　駕籠屋は小舅。

與兵　蕎麥屋は花聟。

はや　わたしは花嫁。
しづ　女髪結ひの待ち女郎。
甚兵　仲むつまじく四ッ辻の
與兵　三々九度も石ごきで
はや　割れた茶碗をつぎ合す
しづ　酌はわたしと
三　この野手が

ト銚子を持つて立ちかゝる。お賤、割れた茶碗の缺け二つ丸盆へのせて、お早が前へ持つて行き

しづ　サ、お前が飲んで

ト　お早取あげ

はや　憚りながら

ト差出す。野手の三酒をつぐ。この時正面の壁へ二階より傳はる死骸の血汐、本蘇芳にて、たら／＼と流れ落ちて、壁は一面に赤くなる。與兵衛屹度目をつけ、誂への凄き合ひ方になり

與兵　二階の樣子は知らぬども、壁へ滴るこの生血。

はや　エ、何か仔細の。

ト立ちかゝる二人を甚兵衛引退け、押入れの開きをしやんと引かへし、壁を隠す。この時押入れの内に與五郎の吹替へ、顏を隠し居る。

甚兵　こりや祝言の色直し。

三　ヤ、正しく與五郎。

ト押入れへかゝる。

しづ　エ。

トつか〳〵と寄つて押入れの戸を元へ立てる。また壁へ血流れる。

與兵　又も血汐の

ト寄るを、甚兵衛有あふ六枚屏風を、さら〳〵と立て、壁を隠す。人相書見える。

甚兵　爰で二人が床入りの

しづ　屏風に貼りし觸れ状は

甚兵　これぞ南方十次兵衛。

はや　エ。



ト與兵衛も思ひ入れ。

甚兵　人相しるす觸れ書の

三　高頰に一つの黒子あり。

しづ　アノ、聟さんの高頰に慥か。

トこれにてお早思ひ入れあつて、茶碗の缺けを與兵衛が黒子へ打つける。血汐ながれて黒子消える。

與兵　さそくな女房、詮議は二階の。

ト行かうとする。甚兵衛へだてる。

三　小屋根を傳うて。

ト引窓の綱へかゝるを、お早、引退け、立廻つて綱を引く。戸は、ぐわら〳〵とたつ。この時、綱に搦みし財布と書置ほぐれかゝり出る。皆々これを知らず

與兵　コリヤ女房、なぜ窓さした。

はや　サ、これは。

與兵　なんで俄に引窓を

はや　サ、雨もほろつく秋の空、定めがたなき男の心根。

甚兵　そこで妹は引窓の

三　さしてこの場を暗闇に

しづくるめて事を納めても

與兵　時は日高の西日さす、あの引窓の引綱に、まとひ付いたる金財布、血の附く書き物、女の手跡、
定かならねど、アレ〳〵、アレ、親次部右衛門とある文言。さてはお照が

皆々　ヤ。

ト目を附ける。お早驚ろき、綱を引く。又、ぐわら〳〵と戸は明き、財布と書き物、戸の間へ隠るゝ。

はや　ア、心づかざる引綱に、しがらむ縁のお照さん。

與兵　もしや二階にアノお照。

はや　ア、モシ、まだ照る日影を、うか〳〵と。

與兵　麁相な女房。

三　高頬の疵は

與兵　壁の生血と

甚兵　合せて五分々々。

しづ　晝の枕は氣を替へて
與兵　二階でなりと。
甚兵　イヽヤ、夫婦は矢ッ張り爰で。
三　あの押入れと
しづ　引窓の
三　明けて云はれぬ
しづ　二階の障子。
甚兵　障子二つは小塚ッ原。
與兵　かゝりし首と。
甚兵　來かゝる旅人。
はや　月は一つに……影二つ。夫は二人。
甚兵　よく似た面體。
與兵　思へばその時。
トお早思ひ入れ。

はや　ア、モシ。

ト立廻り。

甚兵　開きませう。

ト唄になり、各自こなしあつて、甚兵衞、お賤が手を引き、野手の三、二階と引窓押入れ三方へ目を附け、奥へ入る。跡合ひ方、與兵衞思ひ入れあつて、絲立ての内より一腰を出し、これを帶して、つかつかと奥へ行かうとする。

はや　コレ、待つた。

與兵　エヽ、放せ。

ト立廻りあつて兩人屹度なり

はや　氣色を變へて與兵衞さん、殊に用意のその一腰、すりやこなさんは腹からの

與兵　町人ならぬ身が素性、家名は即ち。

ト屛風に貼りし人相書をめくり、お早に見せる。

はや　人相書を家名とは、さてはお前は。

與兵　コレ、鹿島參りの乘合ひに、夜船の内の楫枕、苫を敷寐のわざくれに。

はや　そんならその夜の云ひ約束、お顔知らねど御家名を、聞いたばかりの鴻野の御家中、南方十次兵衛さまといふお方は、寶紛失それゆゑに、御切腹。

與兵　殊に死骸は野晒しに、淺草野邊に身の科を

はや　晒してあるが悲しさに、夜半に紛れて恐ろしい、盜みする場へござんした

與兵　即ち與兵衛、實名は、首になつたる十次兵衛。

はや　ヤヽヽ、すりや船中にて夫婦の約束、其のち大事を打明かし、三年連れ添ひその跡は、尼になされて下さんせと、云ひ約束のお方も矢ッ張り。

與兵　サ、月は一つの日蔭者、船の約束、茶碗の結び、その節斯うとは思へども、首になつたる十次兵衛、その首盜むも南方氏、みす／＼貞女と知りながら、包むも大事を抱へしこの身、恨んでくれゐるな、コレお早。

はや　二度まで結びし女夫のきづな、切つても切れぬ重縁に、儚く切れし。して又首級は。

與兵　それこそ弟南與兵衛は、面體似たるを幸ひに、兄に代つて生害なし、我れは、與兵衛と變名して、油斷を見すます寶の詮議。正しくこの家の甚兵衛が、丈左衛門より預かりある、證據は即ちこの質札。殊にあれなる引窓に、隱し置いたる金といひ、正しく不通の妹お照、認め置いたるあ

の書き物、殊に滴る血汐といひ、詮議はこの家の。

ト行かうとする。立廻つてお早屹度とめて

はや　お顔を覺えぬお前の科、寶を失ひ閉門と、聞くと其まゝ、樣々と、金拵へて、寶の在所、手掛り求むる其うちに、死なしやんしたと聞いたもの、悲しうなうて何とせう。貯へ僅かの金ながら、與五郎さんの手詰めと見て、用立てましたも、あつて益なき五十兩。それに引替へ兄さんの、慾に目がくれ、いとほしなげに、ようマア、やみ／＼。

與兵　サ、その人殺しの詮議して

ト行かうとする。

はや　アヽモシ、惡人ながらも血筋の兄さん、どうぞ一旦。

與兵　イヤ、蕎麥賣りの與兵衛なら、見遁してくれん事あらんが、寶の行くへ知れたる上は、我れは南方十次兵衛、助け置いては刀の手前、武士道立たぬワ。

トよき時分より駕籠舁き三人、門口に窺ひ居て

又　與兵衛といふは十次兵衛、倉岡さまへ。

ト行かうとするを、與兵衛やらじと立廻り。後より田中の辰、入谷の金組つく。その間に土手の又、

向うへ走り入る。與兵衛、田中の辰を門口にて切り倒し、お早立廻つて、入谷の金を草井戸へ突きこむ。兩人ほつと思ひ入れあつて

與兵　身が實名を知つたる下郎め、跡追ひかけて

はや　早うござんせ。

與兵　合點ぢや。

トごん〳〵にて向うへ走り入る。お早殘る。よき時分より生垣の外より小屋根を傳ひ、野手の三窺ひ寄り、引窓へ手を差こみ、財布を引出す。

はや　あの二階には正しく死骸、兄へ難儀のかゝらぬ内に

ト上らうとする。野手の三、財布と書置を持ち、二階の樣子を見て

三　さてこそお照があの死骸、證據の櫛で人殺しの、訴人の上に、隱まふ與五郎。

はや　ヤ、お前は先刻の

三　直ぐに訴人に

トよき所より飛び下り、行かうとするをお早屹度留めて

はや　コリヤ、こなさんは兄さんの、訴人の上に、その金まで

三　オヽ、持つて行くのだ。コレ、お早、兄の命が助けたくば、この三さんの女房になれ。

はや　イヽエ、わたしはこなさんも、今見る前で女夫の杯。

三　彼奴も慥か十次兵衛、残らず嗅いだ野手の三、これから段々順ぐりに、仕事にかゝつて金にする
それでもわりやァ靡かぬか。

はや　なんのこなたに返事しよう。殊に書き物添へたるその金。

ト手をかける。立廻りあつて

三　金が欲しくば。

トお早を引附ける。立廻り見得になり、これより鳴り物になり、財布を枷に立廻りよろしく、野手の三、お早を引敷く。この時甚兵衛、後へつか〱と出で、呉座の下より出刃を出し、野手の三を切り倒す。お賤走り出でこれを留める。お早もさゝへるを、二人を突きのけ、野手の三を、ずた〱に切り殺し、畳を蹴上げ死骸を打込む。両人すがつて

しづ　コレ、こちの人、早まつてこなさんは

はや　悪者ながらも人を殺めて。

甚兵　サ、どうで此方は行がけの、駄賃いらずと二百両、悪念きざしてあのお照……その云ひ訳は

ト出刃を腹へ突き立てる。兩人すがつて

しづ　ヤア、甚兵衞どの、こなさんは、

はや　取のぼせてか、コレ、兄さん。

甚兵　イヽヤのぼせぬ、氣も違はぬ。不便や花のお照どの、殺したる上からは、幾人切つても殺しても、命は定まるおれ一人、惡の報ひは刃の錆に、毒くはゞ皿。

ト引廻す。お早お賤すがつて

しづ　惡人ながらもこの深手、お早さん

はや　お賤さん、心がらとは云ひながら

兩人　エヽ、あさましい。

ト泣き落す。向う、ばた〳〵にて、與兵衞かけ戻り、跡より有右衞門、彦助、身構へして出で來り、窺ひ〳〵附けて來り門口に居る。與兵衞、内の方を見て

與兵　ヤヽヽ、妹が敵の甚兵衞は

はや　我れと我が手にこの生害。只この上のお願ひは

しづ　娘心のお照さま、御持參ありしこの金にて、吾妻さんの身請けを首尾よう。

與兵　イヽヤ、吾妻は兄與次兵衛、身請けはすれど、情なや、お上の疑ひかゝりしゆゑ、山崎屋の家は封印、親に難儀をかけまじと、又は義理ある弟與五郎、彼れに代つて與次兵衛が、繩目の上に牢舍なし。

早瀨　ヤヽヽヽ、すりや與次兵衛さんは牢舍とや。

甚兵　それも大方長吉を、殺せし科の、身に代る、弟思ひの與次兵衛どの。せめてこれなる二百兩、寳の質請け、あなたのお手から。

與兵　妹が一念とゞまるこの金。

ト二百兩を取りあげる。

しづ　與五郎さんへ死顔なりと。

ト押入れを明けようとする。

有右　寳の盜賊

彦助　十次兵衛。

トかゝるを與兵衛立廻りあつて

與兵　この間に與五郎。

早瀬　心得ました。

ト押入れを明ける。內より與五郎、つか〳〵と出で

兩人　與五郎さま、何かの樣子を。

ト與五郎二人を見て

與五　ヤヽヽヽ、其方衆二人は藤屋の吾妻か。戀しい吾妻が、オヽ〳〵、二人ぢや〳〵。

トきよろ〳〵する。

はや　コレイナア、なんで其よなあどない事。すりや、お內の樣子、兄御の實義を聞かしやんして

しづ　氣がとりのぼつて其やうな。コレ、心を慥かに與五郎さん。

與兵　さては心が亂れたか。

與五　オヽ、亂れ心ぢや秋草の、尾花が招く。今そこへ。

ト行かうとする。皆々取附く。

有彥　十次兵衞、うぬを。

トかけりになり、與五郎、扇を開き、狂ひ〳〵行かうとする。與兵衞二人を相手に立廻りあり、與五郎この中へ交り、突きのけ〳〵花道へ行き、振り返つて

与五　さばえ。

ト かけりにて向うへ走り入る。

しづ　あの与五郎さんは

有彦　所をうぬが。

ト かゝるを与兵衛引附け、二人を當てる。甚兵衛、目を開き

甚兵　女房、妹、必ずはへるな。

ト 引まはす。

はや　最早知死期の

しづ　甚兵衛どの。

ト 縋る。

与兵　妹が敵は現在小舅。

甚兵　身をずたずたに。

ト 与兵衛方へ這ひより、出刃を抜かうとする。与兵衛この手を捕へ

与兵　お早が事を案じずとも。

甚兵　お頼み申す。

ト出刃を抜き、思ひ入れ。

早賤　南無阿彌陀佛。

彥有　うぬを。

トかゝる。與兵衞屹度とめる。この間に甚兵衞ばつたり落入る。木の頭、お早、お賤すがつて泣き落す。與兵衞二人を引敷き、甚兵衞と與五郎が跡を屹度見やり

與兵　ハテ、是非もなき

ト雙方見やつて思ひ入れよろしく、ひやうし

先づ今日はこれ切り。これより大切淨瑠璃幕、近日御覽に入れまする。さやう。

幕

ドコドン／＼／＼。

大詰

淨瑠璃の場

倉岡閑居の場

淨瑠璃　千種の花色世盛　常磐津連中

役名——大和團子、月見の三五郎。三五郎女房、お石。山崎屋與五郎。藝者、藤屋吾妻。三原有

右衛門。入間彦助。孝法印、簑坊。嫩巫女、小松。南方十次兵衛。倉岡丈左衛門。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕。一めんに柾木の垣、下の方に普賢菩薩と赤く記せし石の傍示杭、爰に有右衛門、彦助、着流し、尻からげ、大小にて、有右衛門、彦助を引とめてゐる。寺鐘にて、幕明く。

ト直ぐに木魚の音。兩人立廻つて

有右　待たつしやい。すりや彦助にはアノ、いよ〳〵。

彦助　ハテ、先刻よりも申す通り、紛失の香爐を、十次兵衛が手より差上げて、返上したゆゑ、倉岡どの〻これまでの、惡事もどうやら露顯の樣子。さすれば我れ〳〵いつまでも、敵役で居つたなら、終ひの程もと存ずるゆゑ、これから心を改めて、次部右衛門どの十次兵衛へ、詫び致して勤める料簡。貴殿も身共と御一緒に。

有右　イヤ、この三原有右衛門は、神文までも取りかはした丈左衛門と、どこまでも同腹中と悟道を定め、初手から荷擔の今になり、何しに心を變じ申さう。貴殿も武士の意地を立て、兎も角も倉岡どのと。

彦助 イヤ〳〵、その武士氣質は昔の事。今の世界を御存じない、有右どのなら、たつては勸めぬ。拙者一人身の納まりを。

ト振り切つて行かうとする。有右衛門、又これを支へて

有右 待ちやれ。さう聞いては此まゝに、お身をやつては、有ること無いこと云ひあげられ、一時も身のたゝずみの、ならぬ我れ〳〵。この場に於て武士の共喰ひ。入間彦助、覺悟おしやれ。

彦助 そりや身共より、貴殿覺悟を。

有右 イヤ〳〵、御身まづ覺悟おしやれ。

彦助 ハテサテ、辭宜には及び申さぬ、まづ〳〵其許。

有右 イヤ〳〵、御身、まづ。

ト互ひに爭ひ、顏見合せ

彦助 然らば

有右 互ひに

兩人 覺悟いたさう。

ト思ひ入れ。此とき木魚の音けはしく、下座より四人の百姓、てんでに鋤鍬を持ち、走り出で、兩人

を取りまき

四人　動かつしやるな。

有彦　こりや百姓ども、如何いたす。

百一　百姓どもゝすさまじい。十次兵衛さまから密かに仰せ附けられて

百二　三原有右衛門、入間彦助、若しこのあたりへ見えたなら

百三　引ツ縛つて連れて來いと、いま庄屋どのから云ひつけられ

百四　その戻り足、見つけた二人。サア、覺悟して

四人　繩かゝらつしやい。

彦助　ア丶、コレ〳〵、逸まるな〳〵。身共は最早十次兵衛がた。惡人はその有右衛門一人。

有右　ヤア、卑怯な彦助、百姓ぐるめ、お身も、とも〴〵。

彦助　それ、皆ぬかるな。

四人　遁しはしないぞ。

ト禪のツトメになり、皆々鋤鍬を持つて立ちかゝる。有右衛門、其まゝ彦助へ抜いてかゝるを、彦助身をかはす。四人、有右衛門へ打つてかゝる。この間に彦助は向うへ遁れて走り入る。有右衛門四





人を相手にして、よろしくありて、トゞ四人は向うへ逃げて入る。有右衛門、跡を追はうとして、思ひ入れあつて刀を納め、「それ」と下座へ逸散に入る。矢張り禪のツトメにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う草土手、こゝに常磐津連中ゐならび、舞臺は一面に萩すゝきの土手板、花道へかけて見事に飾りつけ、日覆より染め葉の紅葉の吊り枝、下座の口、奥深に吾妻權現の幟を大分建てならべ、この道具納まる。

ト頭取出て、淨瑠璃の名題役人觸れありて「其ため口上さやう」とありて、前彈きにかゝる。

〽栴檀の實を結ぶてふ暮れの秋、月の友どちいたづらと、わやく盛りが後や先、見るを見眞似の錫杖に、鈴もふりよき神いさめ。

ト大太鼓をおろし、宮神樂になりて、向うより小松、びらり帽子、千早ゆふだすき、巫女の形にて、鈿女の面を後へかけ、鈴と扇を持ち出で來り、花道にとまる。

〽まだ所譯さへ白絹や、千早ふるふる袖ふる巫女の、梓の弓も張り強き、お江戸生れの目の張りも、鈴ふる手もと可愛らし、やがて色師と三つ扇。

ト摺り鉦入りの浮いた合ひ方になり、跡より簑坊、きめ頭巾、すゞかけ、法印の形にて、錫杖と扇

な持ち、出で來り

〽それと三ツ大こゝらで大山、大聖不動はこちらがお旦那、朝からお神酒でのたまくさわぐだ、ばあさんぢいさん、晩にや庚申茶めしで甲子、福德延命家内は三方、荒神の、お前を見れば松之助。

〽こちはみの助さん、親は無いかとゆふだすき、かけてぞ願ふ御贔屓の、惠みに育つ二葉巫女、みばへ法印うち連れて、中よきどうし來りける。

トよろしくありて舞臺へ來り

簑坊　カウ〳〵、松さん、淨瑠璃の初めから、おいら達ばかりこんなに出ちやア、あなた方に叱られやアしまいかなう。

小松　サア、それでわたしも怖うてならぬが、簑さん、どうぞ仕樣はないかいなア。

みの　待ちたまへよ。

ト手を組んで思案の思ひ入れ。

斯うせうわな。もし皆さんに叱られたら、お父さんと太夫さんに、詫び事をしてもらはうぢやアないか。

小松　ほんに、それがよいわいな。

トこの時、向う揚げ幕にて、「きちがひよ、ほうさいよ」と大勢にてはやす。簑坊、小松、向うを見て

みの　アレ〳〵、氣ちがひだ〳〵。爰へ來たらば弄つてやらう。

小松　こりや面白からうわいなア。

みの　そんなら爰で、ドレ、松助と洒落ようか。

〽萩のうは風荻の露、菊にも野路の亂れ咲き。

トかけりになり、向うより與五郎、絲毛の垂れ、紫の病ひ鉢まき、着流し、片肌脱ぎかけ、しどけなき形にて、萩の枝をかつぎ、扇を持ち、狂亂にて出で來り、花道にて

〽亂れそめにし初めより、吾妻請け出せ山崎と、うき名に立ちし戀中も、任せぬ事の數々にこの身ひとつの物狂ひ、狂ふ心は我れのみか、蝶も千種ともつれあひ、ひらり〳〵、ひらりひら〳〵〳〵。

トこの文句にて與五郎狂ふうち、ばた〳〵にて向うより吾妻、對の形、着流し、かゝへ帶にて走り出で來り、

〽そこよこゝよとその人の、行くへを尋ね、やう〳〵と、それと見るより走りつき、變る姿の淺ましと、云はで涙の露しぐれ、わしぢや吾妻ぢや與五郎さん、氣を鎭めて下さんせ、これなア申し、蟲さへも、番ひ離れぬ揚羽の蝶、我れ〳〵とても二人連れ、未來までもの仲々を仇にはせじと取りつけば、いや思ふ人はあれ〳〵〳〵、吾妻の森とうつゝなく、駈けゆく袂扣ゆる袖、しどけなりふりとも〴〵に、人の見る目も憂やつらや。

トよろしくあつて、舞臺へ來る。簑坊小松見て

兩人　そりや〳〵……氣ちがひよ、ほうさいよ〳〵。

ト手を叩いて囃す。吾妻、與五郎を圍つて

あづ　ア、、コレ〳〵、見ればマア、可愛らしい巫女さんに、法印さん、其やうに氣のちがうた者を弄らずと、どうぞ正氣になるやうに、お前方の御祈禱で……併し、頑是のない子供衆に、こんな事云うたとて。

みの　カウ〳〵、姐さん、なんぼ形は小さくつても、山椒は小粒で辛いといふによ。

小松　それ〳〵、なんぼわたしらが子供でも、その御祈禱はよう習うて、覺えて居るわいなア。

あづ　なんぢやえ。アノお前方お二人が。

みの 頼むといふなら今こゝで
小松 神すゞしめを。
あづ そんならどうぞ頼むわいなア。
〽おつと合點と云ふまゝに。
〽さんげ〳〵の法印さまに、神おろし奇妙頂來と、錫杖を振り立てまいかいな。コレナ、錫杖を振らしやんせんかいな、エヽ、辛氣な人さんぢや、面白や。
〽やんれ面白や庭火たく、天の鈿女の流れとて、お釜の前のお德女郎。あつちの鍋ではちよこ〳〵、こつちの鍋ではちよこ〳〵、誰れに見しよとて紅鐵漿つけて、品やるふりも親讓りおちやつぴいではないかいな。
〽月夜烏をナア、夜明けと思ひ、てんてつてんとおきの石、かはく間もなき水仕業、飯も炊たり、しらじもごろごろと、ほんに勤めのやるせなや。
〽ませた世帶も習はうより、七つか八つかむつまじと、見えても流石頑是なし、忽まち何か爭ひの、中へ狂人分け入つて。
〽これ〳〵これはどういふ悶着か、譯は知らねど指つきり、仲よしこよし、ホツホ法螺の貝

めでたく一つ打つておけ、しやん／＼、庄屋狩人、狐の嫁入り、臺がさ立てがさ伊達道具、振りやれお振りやれ日でり雨。

〽その雨よりもしつぽりと、濡れて戀路のおどもりを、抱いて眺めてねん／＼ころろんころ、／＼よ、いとしねんねに何やろぞ、でん／＼太鼓にふり鼓、鈴やつぽ／＼手に持ちそへて、愛し育て、樂しみと、思ひし事もいたづらに、泡となしたる腹立ちと、萩の笞をちやう／＼ちやう。

〽打たれて悔り巫女法印、おいらにやいかぬ氣ちがひどの、笑へ／＼と振り捨てゝ、もと來し道へ逃げてゆく。

トこの文句のうち、吾妻、始終與五郎を介抱しながら、よろしく振りありて、トヾ、みの坊小松「わいわい」と囃しながら、向うへ逃げて入る。引つゞいて淨瑠璃。

〽吾妻はさゝへ引きとゞめ、情なや誰れあらう、山崎與五郎さまとては、人におくれぬ亂れ髪、吾妻が顏も見忘れてか、うつゝなやと制すれど。

〽風に尾花の誘はれて、ちり／＼ぱつと散る風情、せん方なくぞ見えにける。

ト狂ふ與五郎を、やう／＼引とめ介抱する。直ぐに淨瑠璃。

〽ありふれし世のすぎはひを又こゝに。

ト祇園囃子になり、向うより月見三五郎、やつし、片襷にて、手拭を鉢巻にして、蝶花形と丁子車の紋つきたる團扇をもち、女房おいし、同じく對の形にて、誂への、やまと團子の荷を、さし荷ひ擔ぎ出で來り、花道にとまる。

〽今度仕出しぢやなつけんけれども、雪か花かの上白米を、癡話と手管で晒してひいて、情でこねてしつぽりと、色で丸めて二人して、よなべ仕事に搗いてや投げし、名物を召しませ召しませ家土産に、買はうなら今ぢや〳〵、今を盛りの花道を、荷ふ女夫の大和團子え。

トよろしくありて舞臺へ來り、荷を下ろし

三五　サア〳〵、買はつしやい、買はつしやい。

いし　お土産に召しませ、搗き賣りの

兩人　大和團子の評判々々。

トこれを聞き與五郎見て

與五　ヤア、吉原の俄が爰へ來た。サア〳〵、大和團子が所望々々。

あづ　アレ、せうどもない。其やうな。

三五　アヽモシ、おかみさん、旦那が所望と仰しやるに、お前が兎やかう仰しやるは、エヽ、さては左がきゝますな。

いし　モシ〳〵、私しどものいし〳〵は、どんな上戸のお方さまでも、酒の肴になされますぞえ。

三五　まづお目通りで夫婦が搗き賣り。

いし　古からうとも、ナア申し。

ト此うち三五郎、荷の中より臼と杵を出す。

三五　ソレ〳〵、嬶ア、こゝらで

兩人　しつかとせい。

〽今の世の中、仲人いらぬ、しつちくはつちく〳〵つぎ煙管、ヤレモサウヤ、ヤレ〳〵サテナ、刻み莨がヤレ仲人する。

しやうねめ〳〵。

〽ウヤヤレ〳〵サテヤレサテナ、落ちよ〳〵と落しておいて、壁に蔦の葉のきごころ。

〽イヤ〳〵團子にかこつけて、亭主をのろく性悪め、コレ何もかも知つてゐる、この頃となりの居候ふと、あぢな目つきで愛想に、煮花の茶から袖口の、ほころびかゝる色事と、へ

へ、見れば違ひはござんすまい。

〽コレ、そりやお前なんぢやいな、其方を戀にわしが身は、三味線の絲よりも、細くやつれてなんよえ、臼ひく唄がとりもつて、引木の手に手しめられし、惡性男に惚れたのが、わたしが不請、女房に、なりふりさへもいとひなう、ほんに男猫も抱いて見ぬ、まじな心を知りながら、どうしてそんなとまくしかけ、云はれてそれは團子屋の、やきもち喧嘩と見ゆるうち。

〽また狂亂の心づき、立ちあがるより。

〽鎭まる此方、吾妻は其まゝ抱きとめ。

あづ　コレ、申し與五郎さん、心をつけて下さんせ。アレ、餘所のお方はあのやうに、お内儀さんを思うてぢやに、お前はわたしが露ほども、可愛うはないかいなア。

ト與五郎、吾妻を見て

與五　ムウ、さうして其方は。

あづ　吾妻ぢやわいなア〳〵。

與五　成る程、其方は藤屋の吾妻、爰も矢ツ張り吾妻……の森、其方は藝子、こなたは名所、どちらも

どちらも……オヽ、吾妻ぢや〳〵。

〽吾妻といふ名はその昔、たけき尊のおかもじさん、お船遊山にすいとなる、そのすいさまのしたはしく、戀を信濃の碓氷にて、わが妻やいのとのたまふより、吾妻とこそは名けたり、我れも尊にあらねども、我がつま戀し吾妻はと、そゞろ涙にいとゞ猶。

あづ　マ、それ程までに。

〽わたしをば、思うて下んすお心は、嬉しいながら憎らしい、お前のくせで逢ふたびに、藝子々々で內證は、三味線枕に客さんと、ねからないこと無理な事、云うてじらして、口舌して、女子を泣かす程でマア、氣ちがひとは野暮らしい、正氣になつてと取すがり、淚ぞ戀の誠なれ。

ト此うち三五郎、おいし思ひ入れあつて

三五　道理こそ先刻から、をかしい素振りと思つたが、ヘエ、そんならあなたは、おきちかえ。

いし　さうして與五郎さまと仰しやるからは、もしやアノ山崎屋の。

あづ　アイ、その與五郎さんぢやわいなア。

三五　それなれば先刻から、致しやうもあらうもの。私しは兄御の與次兵衛さまに、御恩になつた、月

見の三五郎といふ者。これは卽ち女房おいし。

いし　承はれば十次兵衞さまとやら、香合がお手に入つて、お屋敷へ御歸參遊ばし、それゆゑ殿樣の御婚禮も近々。そのおめでたに與次兵衞さまも御赦免なされ

三五　山崎屋の家は與五郎さまで、新たにお立て下さるよし。それゆゑ諸所を手分けして、與五郎さまのお行くへを。

ト此うち吾妻、いそ〳〵として

あづ　そりやマアほんの事かいなア……モシ〳〵、與五郎さん、アレ、今のをお前、聞いてかいなア。

與五　なんぢや聞いたか。聞いたかとは、時鳥か……但しは辛子か、意見の事か。

ト吾妻思ひ入れ。

あづ　何を云うてもあのやうに。

三五　サア〳〵、ようござります。どんな事を仰しやらうと、オイ〳〵と御意次第。

いし　それ〳〵、お氣に逆らはぬやうにさへなされば、自然と狂氣は直るとやら。

三五　マア〳〵、云ふなりさんぼうがようござります。

ト此せりふのうち

與五　アレ〱〱、あそこへ行くのは、隨徳寺の角蓮坊め、さては彼奴も、エヽエ、色の浮世ぢやなア。

〽坊さんが〱、醫者の眞似して小脇差し、それえ〱、それ〱羽織着て、伽羅で襟の香を隱し、世の中はこはやの酒に揉まれて粋となり、粋が身をくふ蛸坊主、お足の不足はなぜでんす、乙姫さんへの心中に、てもそれは不躾せんばんな。

與五　ハヽヽヽ、蛸といへば、コレ〱、田町が二の替りの俄の趣向、どうぢや、聞きたい。サア、皆も話して聞かしや〱。

ト三人顏見合せ思ひ入れ。

三五　ハヽア、さては先生、吉原きどりと見えるな。

いし　あのやうに仰しやるもの、なんなと話さずばなるまいぞえ。

あづ　ソレ〱、どうなりと間を合せて、あの狂氣の靜まるやうに。

三五　サア、お前は町の藝者ゆゑ、俄は知つてゐなさらうが、こちらは俄を見に行く隙さへ。

あづ　さうではあらうが、わたしも話さうほどに、マア、お前方よいやうに。

三五　嬶アや、酒や牡丹餅が出たら用心しやれ。こりやアおきつに、化かされたも知れないぞえ。

いし　なんのいな。マア、なんなりと好い加減に。

與五　サア〳〵、俄の話しはどうぢや、早う聞きたい〳〵。

三五　よいワ、てんほの皮とやらかさうか。

いし　それがよいわいな。

〽まづ吉原の全盛遊び、幸頭末社もうちむれて、女藝者は我れ一と、綾羅をまとひ錦繍の、飾りをなして趣向なす、あるが中にも取りわけて、椋鳥踊りの拍子とり。

〽しげさ〳〵と戀にしやる、しげさ〳〵の御勸化、山里越えても參りたや〳〵、しげさ〳〵の御勸化、山里越えても參りたや。

〽高い山から谷見れは、おまん、おまんは可哀や染分け襷で布晒す〳〵、おまん、おまんは可哀や染分け襷で布晒す。

〽佐渡で咲く花、いやさのさつさ、新潟で開くえ、とかく新潟は、いやさのさつさ色所え、さつてもおもしろ雁つばめ。

ト直ぐにあとの唄のかゝりになり、浮かぬ吾妻を兩人して無理に踊らせる。吾妻、是非なく振りになる。

〽忍ぶ夜はそちら向かんせお月さん、色の世界ぢやに。

〽辛氣らし。

〽逢うた夜は、撞いておくれな明けの鐘、色の世界ぢやにな、辛氣らし、エヽ、辛氣らし。

與五 面白い〳〵。今の俄を見るにつけ、後の月見は藤屋の二階で、底意くまなき夜と共に、飲みあかした大騷ぎ。ソレ、その時の總踊り。サア〳〵、音頭々々。

〽音頭々々に不狂人、狂はかされてひと踊り、これも迷惑かしのえ。

トこれより四人揩り鉦入りの手踊りになる。

〽色の千種のなんなか〳〵に、萩の下露濡りよとて萩の、浮氣な〳〵うは風に、割れ木瓜のいたづらな、桔梗と知らぬおとこめし、葛の恨みを苅萱に、ほんにこぼるゝ藍の花、可愛らしさの女郎花。

いし こりやどうしても直らぬわいなア。

三五 それ〳〵、思ひ出した事がある。コレ〳〵、爰に法性寺の聖人より戴いた、妙見さまの祕符のお守り、利生は速か。與五郎さまに。

ト懐より錦の守り袋を出す。

いし　ほんに、それではお氣も直らうかいな。

あづ　サア〳〵、ちやつとお守りを。

三五　オツト承知……こんなざいせぜこう良藥病卽消滅不老不死南無柳島妙見大士。

ト守りを與五郎へ戴かせる。こんト時の鐘、薄ドロ〳〵にて、與五郎、つと起上がり、本性になりし思ひ入れ。

あづ　モシ、心を慥かに持たしやんせ。

三人　與五郎さま〳〵。

ト與五郎あたり見廻し、吾妻を見て

與五　ヤ、吾妻ぢやないか。

三人　心が附きましたかえ。

與五　さうして其方はいつの間に。

あづ　サア、お前に別れしその後に、兄御さまのお情で、わたしは身儘になつたれど、山崎屋はお咎めゆゑ、其方はどこへも出されぬと、矢ツ張り藤屋に居るうちに、お前が狂氣の噂を聞くと、あるにもあられず、やう〳〵と、めぐり逢うてもしどないお身。

與五　ムウ、そんなら田中に忍ぶうち、甚兵衛はじめお照が身の上、兄者人の難儀の樣子、其方の事も苦になつて、ハッと思ふとそれから夢。さうして、あのお二人は。

三五　私しどもはお兄御さまの、大抵御恩になつた者。

いし　マアく、お心がついて此やうな。

あづ　もうく、わたしが嬉しさ、お二人さん、推量して下さんせ。

三五　イヤモウ、その筈。お氣の附いた上からは、何もかもめでたいづくし。詳しい事は道々お話し。

マアく、早う私し方まで……併しそのお姿では……コレく嬶ア、おれはちよつと小梅へ行つて、駕籠を雇つて來る間、おぬしは此お二人に。

いし　アイく、しつかりとお附き申して居るほどに、お前はちつとも。

三五　オヽサ、直ぐさま。

あつ　そんなら早う。

三五　ドレ、行つて參りませうか。

〽心も直ぐな土手つゞき、小梅の方へと。

トこれにて三五郎、向うへ急いで入ると、直ぐにバタくになり、下座より有右衞門、走り出で來

り、向うを見送つてゐる吾妻に行きあたり、互ひに驚き、顏を見て

有右 ヤ、わりやア吾妻だな。

あづ さういふお前は。

與五 有右衞門。

有右 與五郎、うぬも爰にうせたな。十次兵衞が歸參より、身に火のついて來た我れ〳〵。倉岡どのもこれから勸めて、高飛びをする有右衞門。吾妻に丁度逢つたも幸ひ、丈左衞門どのへ連れてゆくその上、權九郎が指の身代り、本人なれば與五郎、われを引ッ立てゝゆく。二人とも、きり〳〵うせろ。

ト吾妻與五郎を引立てようとする。おいし、これを支へて二人を圍ひ

いし イヤ、わたしが預かるお二人さん、滅多にさうはならぬわいな。

有右 小癪な女め。ならぬと吐かせば

いし どうさんすえ。

有右 身共が斯うして。

トおいしを掻きのけ、兩人へかゝる。おいし、有右衞門が帶をとらへて引戻す。吾妻與五郎、有りあ

ふ臼を二人して引摺り、隔てにする。此うち淨瑠璃。

〽しや面倒なと立ちかゝるを、有りあふ臼にてさそくの隔て、振りきり又も向うづら、眉間を杵の撞木づき、打たれてどつさり尻もちつき。

〽めでたく〳〵の若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや。

ト三人にて有右衛門とをかしみの立廻りよろしくありて、トヾ、落ちゝる襷にて、立廻りのうちに罠を拵へ、有右衛門を打倒す。有右衛門、はずみに倒れると淨瑠璃。おいし身を枷に押へろ。與五郎吾妻、臼をころがし、有右衛門が脊中へおしを置く。有右衛門もがく。

兩人　この間に、とも〴〵。

いし　サア、お出でなされませ。

〽千秋萬歳萬々歳と、手を打ちつれてぞ。

ト與五郎さきに、吾妻が手を引き、向うへ入る。おいし、有右衛門を押へつけたる見得。三重にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、九尺の屋體、大和葺き、誂らへ打ぬき障子三枚、左右建仁寺垣、石燈籠、

植ごみ寒竹の藪、誂らへの門口、四ツ目垣、秋草手水鉢、すべて鴻野家下屋敷、倉岡丈左衛門閑居の庭先。爰に丈左衛門、着流し、一本差し、庭下駄を履きて、手燭を持ち、屋體に腰かけ、藪に目をつけ、竹の下に雀、大ぶん群がりゐる見得。時の捨て鐘、雀の聲にて道具とまる。

ト直ぐに誂への合ひ方、四方にて拍子木の音を限りなく亂調に打つ。丈左衛門思ひ入れありて

丈左　ハテ、いぶかしき、庭前に、夜陰に群がる小鳥の鳴く音は心得ぬ……野に伏勢あるときは、飛鴈つらを亂すの譬へ。殊さら四方に打ち立つる殺伐の音聲、時を告げゆく柝にあらず。爰は鴻野の下館、丈左衛門が閑居といひ、この身の云ひ譯立たずして、身共を召捕る手くばりなるか。ハテ、心ならざる今宵の振舞ひ。ハテ、何とやら。

トあたりへ心を附け、小鳥に目を附け、小雀飛び去る。矢張り時の鐘、向うより彦助、以前の形にて、すた／＼と出で來り、門口より窺ひ

彦助　丈左衛門どの、彦助でござる。密かに小門を。

トほと／＼と訪づるゝ。

丈左　入間氏、夜更けてござるは心得ぬ。

トつか／＼と行き、門を明ける。彦助内へ入り、外へ思ひ入れありて

彦助　丈左衞門どの、最早この所に住居は無用。サ、とく〳〵爰を。

丈左　すりや、某が企みのあらまし。

彦助　十次兵衞めが言上なし、殊に胡蝶の香合を、彼奴が手より差上げて、貴殿や我れらが身の上遁れず、有右衞門めも裏切りなし、明朝未明に上屋敷より、お召しと云ひ立て、何氣なう貴殿を呼びよせ、詰め腹切らせん企てござれば、當所の住居も只今限り、身共も逐電仕る。サ、貴殿も早早お立退きなされい。サヽ、お立退き〳〵。

トせり立てる。丈左衞門思ひ入れあつて

丈左　すりや、隱し置いたる胡蝶の香合、十次兵衞が手に渡り、彼奴は立身、丈左衞門云ひ譯なく、命にかゝはる時節到來。ハテ、是非もなき。

彦助　サ、それゆゑ爰を。

丈左　暫らくこの身を隱すには、故郷でござれば、本國河内へ。

彦助　遠路と申し、本海道は人目ござらん。

丈左　晝は忍びて夜毎の旅。それも間道山越えに。

彦助　片時も早く。

丈左　承知いたした。貴殿も早く。

彦助　心得ました。

ト捨て鐘、合ひ方にて彦助、向うへかゝる。丈左衛門は門口をさし、障子の内より亂れ箱を取り出し、内より數通の書き物を取り出し、見る事。彦助、花道にて、向うへ礫を合ひ圖する。揚げ幕より中間、弓張りをともし、跡より丹下、次郎、黒具、捕り手の形、大小にて、窺ひ出で來り、兩方、行きあひ

兩人　彦助どの。

彦助　御兩所。

丹平　して、丈左衛門が落ちゆく先は。

彦助　彼れが本國、まさしく河内へ。

次郎　身を隱さんとの彼れが白狀よな。

彦助　御兩所には、コレ。

ト二人へ囁く。

兩人　心得た。庵の左右を。

ト思ひ入れ。中間、提灯を消す。兩人門口より內を窺ひ、竹藪へ忍ぶと、彥助、中間に囁き、そろ〳〵と門口へ來る。此うち丈左衞門、密書をよく〳〵改め見て

丈左　身共へ一味の家中の諸武士、取りおく神文、內意の密書、殘し置いては、可哀や彼れらが。

ト思ひ入れあり、書き物を、だん〳〵と手燭の火にて燒き棄てる。此とき兩人門を窺ふ。捨て鐘、合ひ方、向うより捕手頭、鉢卷、陣笠、たすき野袴大小、重ね草鞋にて、十手を構へ、跡より黑具の捕り手大勢、草鞋にて、十手を構へ、ひそ〳〵と窺ひ、出で來り、彥助、捕手頭に囁き、門口に手配りして窺ふ。

家名を記せし數通の書き物、燒き失なへば後の憂ひも。

ト思ひ入れ。此とき彥助、門を訪れ

彥助　丈左衞門どの〳〵。

ト丈左衞門思ひ入れあり

丈左　彥助どのか。

彥助　お明けなされい〳〵。御安堵でござる。吉事でござる〳〵。

トこれにて丈左衞門、門口をそつと明け

丈左　又お來やつたか。

彦助　御安堵なされい。おめでたう存ずる〳〵。

中間　丈左衞門さま、御安堵なさるゝめでたきお知らせ。宙を飛んで參りました。

丈左　彦助どの、下部を召しつれ、丈左衞門が吉事とは。

彦助　お喜びなされい。貴公のお身に恙はござらぬ。

丈左　ヤヽヽヽ、そりや、どういたして〳〵。

中間　御安堵なされませ。十次兵衞めが持參の寶は、眞赤な似せ物。

丈左　ヤ、なんと申す。アノ寶が。

彦助　サヽ、寶は似せ物。上を僞はるお咎めにて、又ぞろや十次兵衞、御前の表は不首尾の樣子。下部が只今もの語り。

丈左　アノ十次兵衞めが。

彦助　サ、この上ともに其許に氣遣ひござらぬ。最早御安堵。

中間　只今これへ、殿より赦免のお使者の入來。

彦助　氣遣ひ召さるな、丈左衞門どの。

丈左　さうお云やるが、實說でござるか。

彥助　何しに僞りを申さうや。身共も誠に安堵いたした。

中間　お喜びなされませ〲。

　ト捨ぜりふにて兩人左右より近づき、油斷を窺ひ

兩人　捕つた。

　ト兩人胸づくしを取る。丈左衛門心得、脇差を取らうとする。彥助手早く取つて門の方へ投げやる。丈左衛門「ハツ」と驚き、二人を投げのけ、つか〲と行かうとする。外より捕手「捕つた」と驅けこむ。丈左衛門へかゝる。このとき奥より中間、或ひは着ながしの若黨二三人、つか〲と出で

皆々　何者ぢや。

　ト見て

ヤヽヽヽ。

　ト驚き逃げて入る。三人立廻りにて、丈左衛門、屋體の内に掛けたる刀を手早く取り、組つく三人を見事に切る。門口に窺ふ捕手頭、一々下知する思ひ入れ。捕り手、だん〲とかゝり、見事に切らるる。此うち物凄き鳴り物、奥より丹下、次郎走り出で、丈左衛門へかゝり、立廻りよろしく、丈左衛

門兩人を切つて捨て、手水鉢の柄杓を取り、水を汲み、一口飲んで思ひ入れあり、悠々と門口へ出ようとする。外に窺ふ捕手頭、身ごしらへして「捕つた」とかゝるを、丈左衛門拔打ちに袈裟に切り倒し、血刀をひつさげ向うへかゝる。此うち始終捨て鐘、早拍子木、物凄き合ひ方。揚げ幕より十次兵衛、鎖鉢卷、大小、四天の形、十手捕り繩をもち、つか〳〵と出で、丈左衛門をさゝへ、本舞臺まで押し戻し、立廻つてきつと留る。丈左衛門見て

丈左　ヤヽヽヽ。其方は南方十次兵衛、すりや鴻野家へ歸參なし。

十次　汝を召捕る役目を乞ひうけ、二番手遲しと扣へしに、組子をなやめて逃げゆくとも、最早叶はぬ天の網。身が越度たるお家の重寶、尋ね出して差上げたれば、以前に變らぬ十次兵衛、弟與兵衛が切腹も、みな其方がなすところ、弟の敵丈左衛門、腕を廻すか、但し又、この場で踏みつけ繩かけうか。サ、サヽヽヽ、サアなんと。

丈左　小癪な南方十次兵衛、丈左衛門が死者狂ひ。切つて〳〵切り拔ける。道明けて通すまじきや。

十次　お家に仇する國賊め、腕まはせ。

丈左　刀の切れ味、覺悟なせ。

十次　小癪な……捕つた。

ト草鞋を打ちつける。丈左衛門、切つて落す。十次兵衛、十手にてかゝる。立廻りよろしく、これより誂らへの鳴り物にて、兩人花やかなる捕り物のタテよろしくあつて、「ドッコイ」ととまる。後へ捕り手大勢、弓張り、十手にて、バラ〳〵と取卷き

捕手　動くな。

兩人　どつこい。

先づ今日はこれぎり。

めでたく

とゝんが〳〵。

打出し

四天王櫓礎

（してんわうやぐらのいしずゑ）

四天王櫓礎

第一番目　三建目

石山寺の場
櫟の森の場

役名――伊賀壽太郎成信。源の頼光。市原野の鬼同丸。大宅太郎光遠。泥龜の洞九郎。鰐鮫の沖六。木鼠の利助。柳生七郎。庄屋、與茂八 實ハ 獺の闇藏。狸のぽん八。足輕、轟郡平。後ニ物部平太有風。廻國修行者、當山 實ハ 相馬六郎公連。頼忠息女、粧姫 實ハ 桝花女。保昌妻、和泉式部。二の瀬源六妹、御手洗。腰元、冬野。同、置霜。同宿、西念。同、慾念。

本舞臺、三間の間、高足の御簾屋體、上下、櫻の立ち樹、日覆より絲櫻の吊り枝、すべて石山寺源氏の間の飾りつけ。爰に洞九郎、肉色の中親仁、藁苞を脊負ひ、立ちかゝりゐる。柳生七郎、上下侍ひの形にて支へ居る。下に與茂八、ふんごみ、庄屋の拵へにて扣へゐる見得、音樂にて幕明く。

柳生　コリヤ、其方どもはいづれへ參る。

洞九　イヤ、どこへも行きやしませぬ。この石山へ、保昌さまのかみさんがござるといふ事ゆゑ。
與茂　ちと用事があつて參りました。
柳生　その保昌さまは身が御主人。奥方へ用事とは合點が行かぬ。賤しい者ども、罷りならぬ。
洞九　イヽヤ、逢はにや成りませぬ。
ト向うにて
光遠　サア、女郎ども、式部が居間へ案内いたせ。
ト管絃になり、大宅光遠、上下にて、腰元冬野の襟髪を取り、引摺つて來る。置霜附きそひ出で來り
花道にて
置霜　モシ／＼、光遠さま、そりやあなた。
冬野　御無體と申すものでござります。
光遠　何が無體。サア／＼、早く源氏の間へ案内しをらう。
ト舞臺へ來る。
洞九　お侍ひ、和泉式部に逢はせてもらはう。
柳生　ヤア、下郎の分際として、奥方に何の用事。

冬野　それ〳〵、光遠さまも理不盡な、奥樣のお通夜の間へ
置霜　踏み込まうとは、お侍ひにお似合ひなされぬ。お側仕への我れ〳〵が
兩人　相成りませぬ。
光遠　成らぬと申して、對面いたさずに置かうか。保昌が妻の和泉式部、心願あつて、この石山に通夜とは合點がゆかぬ。かねて賴信預かりの、太政官の御正印、紛失との風聞。その眞僞を糺し參れと、髭黑公のお指圖。案内がならずば、式部をこれへ引摺り出せ。
洞九　オヽ、さうぢや〳〵。和泉式部が爰へ出れば、この親仁も調ふる事を調ふと、はる〴〵あの矢橋から、足も腰も堪るものかえ。サア、逢はせにや奥へ踏ん込んでも逢ふぞよ。
與茂　これサ、洞九郎、その式部とやら、しきみとやらに、逢ひさへすれば、金が出來ると云ふから、濱年貢のたゝまり、この庄屋の與茂八も附いて來たが、向うはお歷々さうなが、滅多な事云うて、おれまで難儀をかけまいぞよ。
洞九　ハテ、當の無い事に連れてくるおれではないワ。それとも氣味が惡くば、觀音へでも參つてござれ。其うちに埒明けて置かう。
與茂　そんなら、さうしてもらはう。おれは生れ附いて、理屈と喧嘩はきつい嫌ひ。好きな物は酒と女

洞九　行かつしやいよ。

與藏　まだ好きなのは錢と金……その金の出來るまで、本堂で待たうか。

ト下座へ入る。

柳生　いかなる筋か知らねども、御祈念のうちは、お物忌も同然。

置霜　光遠さまにも今日は、お歸りあつて追つての御沙汰に

兩人　遊ばしませい。

光遠　それをわい等に習はうか。物忌に吐かすが猶怪しい。たつて妨げなさば容赦はせぬ。

洞九　オヽ、さうぢや。あの座敷へ踏ん込んでも逢つて見せるぞ。

柳生　さう云や猶罷りならぬ。

光遠　小癪な。そこ退け。

ト立廻つて

洞光　退くまいか。

ト留める。御簾の内にて

和泉　ヤア、希人へ對面。皆、慮外せまいぞ。

ト唄になり、御簾上がる。内に和泉式部、袿衣裳、机に向ひ、短冊に歌を書いて居る。側に三方の上に結構なる蒔繪の刀箱を載せてある。

柳生 奥方、最前よりの仔細

女雨 お聞きあられましたか。

和泉 自らは、上東門院に宮仕へせし身も、今は保昌が妻となれば、何卒秀歌を世に殘したく、紫式部が物語りに習ひ、この源氏の間に通夜なして、浮みし一首。『あらざらん。この世の外の思ひ出に、いま一度の逢ふよしもがな』。皆の者、なんと、どうあらうぞ。

ト三方を持ち、下りる。

柳生 その儀は不鍛練な拙者なぞも

女雨 御名歌と存じますわいなア。

光遠 これサ、式部どの、歌どころではござるまい。こなたの夫保昌が育て君、あの頼信は身持ち放埒預かりの御正印、先達てより關白家にて御催促、差上げぬは源家の者ども、野心を構へて動亂の基。

和泉 イヤ、全く以て。

光遠　無いとは云はれぬ。亂れのしるしは、時ならぬ櫻の返り咲。
和泉　イヤ、冬のうちより一陽の時來れば、花も開くは、めでたい吉左右。
光遠　イヽヤ、不吉の前表サ。
洞九　アヽ、コレ〳〵、其方ばかり理屈を云はずと、おれにもちつと云はせてもらはう……コレ、その和泉式部といふは、この洞九郎が娘だ。ヤレ娘、大きくなつたなア。

ト寄らうとする。和泉式部、心得ぬこなし。柳生、腰元、立ふさがり

柳生　待て。さま〴〵な事を吐かすが、奧方に向ひ、娘とは
女兩　滅相な人ぢやわいなア。
洞九　滅相も何もない。おらが娘だと云ふのだ。

トわめく。

光遠　やかましい。老ぼれめ。此方の邪魔になる……ヤア〳〵、小者足輕は。
郡平　畏つてござります。

ト向うより郡平、剃立て、足輕にて、六尺棒を持ち、ツカ〳〵と出て舞臺へ來り

ハツ、御用とござりまするゆゑ、轟郡平、早速これまで……いかなる御用か存ぜねど、堪忍五



松本幸四郎
豊国画

兩三人扶持、三人前は御容赦なく、仰せつけられ下さりませう。

ト平伏する。

光遠　その老ぼれめを叩き歸せ。

郡平　サア、親仁め、立たう。

洞九　ハテ、立たうと云はないでも立つてゐる。和泉式部は、おれが娘だから逢ひに來たを、ぼい歸せとは、不孝者めが。

柳生　まだ吐かすか。奧樣の親御は、大江の雅宗さま、お果てなされてこの世にない。

置霜　又ぞろ親と申すのは。

郡平　紛れ者めが。下がれ〳〵。

ト棒にて追ひ歸さうとする。

和泉　郡平とやら、待ちや。

郡平　でも、橫道者のこの親仁め。

和泉　イヤ、此方も、心覺えのある、あの者の詞、仔細聞いての上の事……コリヤ老人、自らが親と云ふは、樣子があらう、仔細を申しや。

洞九　云はないでどうするものか。有たけこたけ、まくしかけて

ト和泉式部が側へ行き

イヤ、口で云はうより、式部、これ覺えがあるか。

ト珠數袋と、色紙の片割れを出す。和泉式部、不思議さうに取つて見て

和泉　『子を思ふ、親の心のわりなさは』……この珠數入れにも覺えがある。

ト懷より同じ裂れの守り袋と、色紙の片々を出し

自らが持つてゐる、錦襴の裂れと同じ珠數袋。殊に歌の上の句……『唐も大和も變らざりけり』。

洞九　なんと、どうぢや〳〵。

和泉　お過ぎなされた父上、雅宗さまの自らは、藁の上よりこの守りに、色紙の下の句を添へて捨子。我れなき跡もこれを證據に、めぐり逢うたら不孝にすなと、末期の教訓……この上の句を持つてゐる老人。そんならわしが。

洞九　親ぢやわい。

和泉　すりや、お前の娘でござんしたか。

洞九　なつかしかつたわやい〳〵。

ト空泣きする。

郡平　そんなら、鹿小屋の番見るやうなこの親仁が、奥樣の實の親か。

光遠　ハテ、人の素性は知れぬものぢやなア。

洞九　サア、名乘り合うた上からは……娘、保昌と緣切つて、髭黑公へ行つてくれ。

和泉　エ。

洞九　サア、われはそんな結構な形をして居れど、實の親は矢橋の船頭、食ふや食はずで濱年貢のたまり。アレ、本堂へは庄屋まで連れで來た。髭黑さまへ行つてたも。

和泉　イエ〳〵、なんぼ實の父上でも、今は保昌といふ定まる夫ある身。

柳生　金銀の望みなれば、いか程なりとも。

和泉　緣切る事は成りませぬ。

洞九　イヤ〳〵、安請合ひに金銀の事云うても、髭黑まと保昌とは、身分の貫目が違ふ。四の五といへば、マア金になりさうな、この箱から取上げてこまそ。

ト蒔繪の箱を取らうとする。

和泉　アヽ、コレ〳〵、こりや大切な和歌三神の掛け地。

ト隠す。

洞九　無理云はるゝが否なら、髭黒さまへ行くか。

和泉　サ、それは。

洞九　保昌と縁切るか。

和泉　サア。

洞九　サア〳〵。こゝな不孝者めが。

和泉　ハイ。

ト思ひ入れ。

洞九　いつその事に、親が折檻。

ト立ちかゝるを郡平、ありあふ縫ひぐるみにて、洞九郎をしたゝかに打ち据ゑる。

ヤイ〳〵、この二本棒め。なぜ奥方の親御様を。

郡平　親御もすさまじい。こゝな大騙りめ。

洞九　なんと。

郡平　互ひに名乘る證據の品玉、どこでちよろまかして來て、今のやうな御託をほざく。

洞九　此奴、さま〴〵な事を吐かす。この珠數袋と證據の色紙は、おれがあれに遣つた片割れ。わりや又、なんでおれを

光遠　騙りと申すに證據があるか。

ト郡平、懷ろより一通の破れを出し

郡平　奥樣、これ御覽下さりませう。

ト和泉式部取つて

和泉　「ちよつと申し入れ候ふ、髭黒公御執心の和泉式部は、敦賀の群司爲時が實子、水子のうち捨てたるよし、證據はこの珠數袋、色紙の片割れ」

洞九　ヤア、それを。

ト引ッたくるを郡平もぎ取り、引据ゑて片手にひろげ

郡平　「今日この儀嗅ぎ出し、卽ちその證據を持たせ、親と僞はり、保昌と緣切らせ、左大臣のお望み叶ひ候ふ手段いたし候ふ間、御安堵なさるべく候ふ」

和泉　すりや、自らの實の親は、敦賀の郡司爲時で

光遠　その老ぼれめは

女雨　騙りであつたか。

洞九　モウこりや堪らぬ。

ト逃げ出すを、郡平取つて押へ、下げ緒にて縛しあげ

郡平　おのれ、かゝる企みを仕出す奴、叩いて見たら又外に、いかなる舊惡。拷問かける、動くまいぞ

ト引据ゑる。この時下座より與茂八出かゝり、ツカ〳〵と出て

與茂　アヽ、モシ〳〵、その御立腹は、御尤もでござります。コレ、洞九郎、その面は何だ。大方こんな事であらうと思つた。平常酒ばかり飲んで、稼業を疎かにするゆゑ、ツイこんな惡い氣も出る……ヘイ〳〵、申しあげまする。私しは矢橋浦の庄屋、この者は私しが支配、平常は猫のやうな惡氣のない親仁でござりまする。ツイ惡者に騙され、出來心でござりまする。舊惡の惡い事は私しが證人。どうぞお慈悲をお願ひ申しあげまする。

郡平　イヤ〳〵、庄屋、なんぼ其方が願ひでも、この老ぼれは

和泉　イヤ待ちや。郡平とやら、彼れが願ひといひ、事を糺さばこの身の素性、世間へ流布して夫まで名の出る事、慈悲は上からとやら、穩便に取計らや。

郡平　ハツ。エヽコレ、この場で拷問したい奴だが、奥方の仰せつけ、命は助けて叩き拂ひ。それまで繩つき、庄屋に預ける。

與茂　エヽ、有り難うござりまする。

和泉　柳生七郎、暫し彼れらは、庫裡の供部屋へ。

柳生　押籠め置くでござりませう。

置霜　わたし等も、奥樣のお支度

冬野　お臺所で何かの用意。

柳生　庄屋、彼れめを引ッ立てい。

與茂　サア、洞九郎、惡い事をすると、いつでも斯うだ。アレ、天道樣が見てござるワ。

洞九　すりや、あの罰で。

與茂　縛られたワ。

ト洞九郎、上をキット見て

洞九　天道、覺えてうせろ。

ト管絃になり、洞九郎が繩を與茂八取り、置露冬野に柳生七郎附いて下座へ入る。和泉式部二品を纒

め

和泉　これを證據に騙りに來るとは、油斷のならぬ世の中ぢやなア。

光遠　それも無難に濟みましたは、足輕、そちや、いよ〳〵平井家の。

郡平　保昌さまのお足輕、轟郡平、一昨夜逐電いたした、人代りに雇はれて參りました、二代目の郡平でござります。

和泉　すりや、人代りに參つた新參者にしては、只今の働らき、取立て使うたら、天晴れな骨柄。

郡平　イヤ、さのみ御用には立ちますまいが、長らくお屋敷に足を留め、御奉公がなりませうか。

和泉　ならいでかいなう。賴光公の御家臣、貞光どのは碓井の山賤も、今は歷々。其方も今の樣子では……イヤ、樣子と云へば今の狀、今一度、跡の方を聞かしてたも。

郡平　ハイ。今の狀ナ

ト また出して

「左大臣のお望み叶ひ候ふ手段いたし候ふ間、御安堵なさるべく候ふ」……殘念ながら、宛名は破れてござりません。

和泉　ほんに、よい手蹟ぢやに惜しい事。取らんと企むお家流、憂き目に大橋流ではないかいの。

郡平　イエ〳〵、これは些細ないろは假名、お名にかゝはる大師樣ではござりませぬ。

和泉　イヽヤ、この身の上田流……これを手本に習うたかいの。

ト千切れし文を出す。

郡平　「光遠どのへ、正盛」

光遠　なんと。

トぎよつと思ひ入れ。

和泉　引裂く片しのこの名宛。

郡平　さては昨夜、粟田口で。

和泉　そぼふる雨の暗まぎれ

郡平　迎ひの小者が手ざはりの

和泉　桐油も赤き、その場の血汐。

郡平　すりや、その時の

和泉　曲者は

郡平　イヽヤ、わしではござりませぬ。この一通は拾ひ物。

光遠　胡亂な宛名。

和泉　宛名が揃へば、その一通。

ト光遠は和泉式部が宛名の所を取らうとする。立廻りよろしく、狀を奪ふ。よき程に風の音になり、この狀を空へ巻きあげる。

光遠　ヤヽ、大事の密書を

三人　辻風に。

ト向うをキツト見る。六部の合ひ方、時の鐘の拍子にて、向うより當山、剃立て、世話六部、今の密書を讀みながら出てくる。光遠、これを見て、郡平にキツと目くばせする。此うち當山、花道中ほどまで來る。郡平、ツカ〳〵と當山が側へ行き、一通へ手をかける。當山突き廻し、ちよつと立廻りあつて

當山　こりや、何となさるゝ。

郡平　イヤサ、その一通を

當山　イヤ、こりや只今御門前で、拾うた書き物。

和泉　大事の密書。修行者、此方へ。

郡平　イヽヤ、身共へ。

トまた手をかけるを突きのけ

當山　爭ふ物は六部めが、天から授かる拾ひ物。どちらへどうとの御返事は、それへ參つて申し上げう

ト右の合ひ方にて、當山、舞臺へ來る。

光遠　修行者、その書き物、身共へ渡しやれ。

當山　ハヽヽヽ、愚僧が持つては、反古同然のこの書き物。三方から爭ふは、よく〳〵欲しいと見えたこの狀。

郡平　路用の足しならいくらでも。

和泉　褒美をやらうが

光遠　くれまいか。

ト當山、笈を下ろし

當山　褒美とあるからは、はした錢ではござりますまい。ドレ、お三人へ上げませうか。

トずた〳〵に引裂く。

和泉　ヤア、科を糺すその密書を

當山　ハテ、どこの奥様か存じませぬが、そりやお心の狹い。好事門を出でず、惡事千里。天の咎めの來るを待つて、お糺しなさい。

和泉　流石は修行者。

光遠　慾を離れしこの場の納まり。

郡平　よく佛法の染みこんだ、廻國とは頼もしい。

當山　イヤモシ、その佛法大嫌ひ。抹香臭いは、否な事〳〵。

郡平　イヤモシ、然らば、何か、武術を試す、武者修行といふやうな事か。

當山　二才の時に、その武者修行にも二三度出たが、怖い目にあはねば、あんまり面白いものでもござりませぬ。

和泉　して又、何が望みでその姿に。

當山　百姓は知らず、匹夫は否。主取りせうにもはした知行。名馬あつても伯樂なければ、世を見限つて、せう事なしの、でも六部サ。

郡平　ムウ、先刻からの詞の端、人もなげなる廣言。わりや大分味噌をあげるが、小身ながらも身も侍ひ、なりや耳にさはる。それは格別、先づ聞かうは、その自慢の武術の流儀は。

當山　一口に云へば、八宗兼學サ。
郡平　面白い。斯う差しこむ、柔術は何流。
　　トかゝる。
當山　子供も知つた竹の內サ。
　　ト振りほどく。郡平急いて
郡平　斯う打ちこめば。
　　ト縫ひぐるみにて打つてかゝる。當山油扇にて請けとめ
當山　一刀流の合打ち。
　　ト立廻りに當山、扇にて縫ひぐるみを叩き落す。これを見て光遠も急きこみ
光遠　郡平手ぬるい。眞劍で勝負せい。
郡平　眞劍なれば
　　ト刀を拔かうとするを和泉式部、中へ入つてその手を留め
和泉　イヤ、眞劍でなうても、手並は見えた、郡平の不覺。
郡平　ナニ、身共の不覺とは、

和泉　サア、いま武術を試すうち、あの修行者が打出す手裡劍、郡平、其方が胸許を

郡平　エ。

光遠　イカサマ、衣紋を縫ひ合せしは

當山　旅の用意の、なまくら刺刀サ。

和泉　誠に打つたら鈍くとも、其方が命はあるまいがや。

郡平　サ、それは。

和泉　サア〱〱、不覺の郡平、暇をくれたぞ。

郡平　すりや、拙者めに

和泉　氣の許されぬ家來なら、早う見切るが主の習ひ。

光遠　暇の出た奉公人、正盛どのへ推擧いたさう。

郡平　アノ拙者を。

光遠　いかにも。今までつれない古主へ面あて。槍一本の主は請合ひ。

當山　とんだ事から怪我の高名。ハテ、人の果報は知れぬものだ。

和泉　イヤ、その身も望みあらば

當山　お目鏡次第で仕官の望み。
和泉　それも返事は後までに
光遠　身共は一まづ方丈へ
郡平　主取りしかへた喜び酒。
和泉　肴を取らせう。
　　　ト書き物を拋る。
郡平　こりや密書の名宛。
和泉　請け狀を戻したぞ。
當山　ハテ、寬仁大度。
和泉　修行者
當山　奧樣。
郡平　ムウ。
　　　ト和泉式部にかゝるを、當山、隔てながら
當山　ドリヤ、本堂へ詣つて來ようか。

ト唄になり、光遠、郡平、當山、思ひ入れあつて下座へ入る。和泉式部見送り、思ひ入れ。直ぐにバタバタにて、向うより御手洗、白き腰帶を締めて來り、舞臺へ來る。

和泉 其方は二の瀬が妹、御手洗ではないか、

御手 和泉式部さま。

和泉 どうして爰へ。

御手 サア、昨日祇園の御社へ、神事の役にて參りしところ、不思議に手に入るこの一品。

ト旗を出す。和泉式部取つて

和泉 こりやコレ、先年東にて、謀叛を起せし將門が、家に傳はる繋き馬の旗。

御手 サア、御内意ありし御正印、紛失の、その盜賊の手がゝりもと、あなたにお渡し申したさ、人目を忍びこの所まで

和泉 オヽ、出かしやつた。この石山の詠歌の間に、一七日の通夜といふも、誠は紛失の御正印、その手がゝりにもと、夜になればいろ／＼と、姿をやつすも詮議の爲、一つには、早う在所の知れるやうに、コレ、この箱は、和歌三神の掛け地とは僞り、源家の重寶蜘蛛切の一腰、賴信公の形代となし、祈念の爲に持參なせば、爭はれぬ寶の威德。劍は陽を司れば、その氣發してあの如く

櫻の返り咲き。人の目角を防がんと、あらざらんこの世の外の思ひ出に、いま一度の逢ふ事もがな……この詠歌の德と流布させ、心のうちでは御正印の祈願、あらざらんこの世の外とは、この身をかけてその品を、いま一度返させ給へと、千々に心を砕きるる、式部が心の苦しさを、推量してたもひなう。

御手　お道理でござりまする〳〵。して、その持參いたしました品は、

和泉　御正印の盜賊、殘黨ばらが業も知れねば、この旗を鎭守の社におさめ、呪詛なさば、それと聞き出す便りもあらん。

御手　左樣なれば私しは

和泉　暫しの間、蜘蛛切を預くれば、源氏の間にて守護してたも。

御手　して、あなた樣は。

和泉　鎭守の社へこの旗を納め、盜賊呪詛の祈誓をなさん。

御手　左樣なれば式部さま

和泉　必ずその品、大切に。

ト唄、暮れ六つの鐘にて、和泉式部、旗を持ち、下座へ入る。

御手　式部さまの仰せつけられ、大切なこの一品、あの源氏の間で……さうぢや。

ト二重へ上がらうとする。下座より光遠出で來り、後より抱きつく。

ア、コレ、誰れぢや、惡い事。

光遠　イヤ、おれぢや、大宅ぢや。

御手　こりや太郎さま、なんとなされまする。

光遠　なんとするとは御手洗、酷いぞよ。日頃惚れて口說けども、ぴんしやんして刎ねつける。幸ひの今日の首尾、殊にちくらで黑白も知れぬワ。戀の叶ふ瑞相ぢや。

トしなだれる。

御手　ア、コレ、滅相な。わたしや式部さまに、大切な御用仰せつけられ、そんなどころぢやござんせぬ。

ト振り切る。此うち郡平出で、蜘蛛切の一腰をソツと取り、中の刀の身を出し、我が刀と入れ替へる光遠、これを知らせまいとして

光遠　コレ、さう酷く云はぬものだ。おぬしだといつて、木竹ではあるまいし。少しは情を知らぬかえ

ト此うち郡平、刀を入れ替へ、箱を元の所へ直す。

御手　エヽモウ、そんな事は存じませぬわいな。
光遠　これサ、さう酷くは云はぬものぢや。
　　ト また抱きつく。郡平、中を押分け
郡平　こりや光遠さま。
光遠　そちや郡平。
御手　アタ嫌らしい。お嗜みなされませいなア。
　　ト 管絃になり、御手洗、刀の箱を持ち、下座へ入る。
光遠　郡平。御手洗めを口説くうち
郡平　まんまと太刀の身を入れかへ、拙者が刀へ。
光遠　出かした。この上は本堂にて、申せし如く
郡平　いよ／＼正盛公へ
光遠　推擧は身共。詠歌の爲に通夜なすといふ式部が所存、合點がゆかぬ。
郡平　其許樣に成り代り、跡に殘つて實否は拙者が。
光遠　幸ひ當寺は身共が菩提所。某が名代と、一宿なして何かの儀を

郡平　嗅ぎ出して、早速注進。

光遠　然らば身共は

郡平　拙者に任せて

光遠　罷り歸る。

郡平　光遠さま

光遠　必ず、ぬかるな。

トごん〳〵にて光遠向うへ、郡平下座へ入る。上の方より洞九郎、以前の旗を盗み持ち、下手より與茂八、泥坊の形になり、窺ひ出て來り、双方に行き當り、顏見合せ

洞九　獺の闇藏。

與茂　泥龜の洞九郎

洞九　お頭伊賀壽どの、この石山によい仕事があるゆゑ、案内せいと指圖に幸ひ、祇園で頼まれた今日の仕事。手目上げられても、これからが又一仕事。

與茂　門々締めて寢入り端、忍び込まする手筈はな。

洞九　裏門の大門、海老錠を燒き切るが、盗人一式の道具。

ト以前の藁苞より、大鋸、金梃、釘拔きなど出してやる。

與茂　すりや、これで門をこぢあけ

洞九　いつもの通り、合圖を定め

與茂　お頭はじめ引入れん。

洞九　この洞九郎は跡に殘り、又なんぞ小仕事を

與茂　必ず覺られぬやうに

洞九　合ひ詞は

與茂　雨

洞九　雪。

與茂　それよ。

ト向うへ走り入る。洞九郎殘り、以前の旗を出し

洞九　和泉式部めが、鎭守の宮へ、隱して置いた繋ぎ馬の旗、人知れずひん盜んで來たも金の蔓。

ト そこにある藁苞へ押しこみ、持つて行かうとする。後へ御手洗出で來り、洞九郎を捕へ

御手　待つた。今その中へ隱したは、何か怪しい。爰へ出しや。

洞九　イヽヤ、何も女の咎める物ではない。どかつしやれ。
御手　改めぬうちは動かせぬ。
洞九　エヽ、面倒な。
　トちよつと立廻り。早めたる双盤になり、洞九郎、御手洗を當て、藁苞を持つて一散に向うへ走り入る。御手洗起上がり、同じく跡を追うて走り入る。御簾の中にて
郡平　式部、その詞、無禮であらう。
式部　なんと。
　ト管絃にて、御簾上がる。内に郡平。和泉式部、詰め寄り居る。左右に燭臺ともしある。
郡平　最前暇の出るや否、光遠どのゝ推擧にて、正盛公へ仕官にありつく上からは、今までの足輕郡平ではない。身を賤しめるは、失禮ではあるまいか。
式部　すりや、光遠さまのお執持ちで、正盛公へ
郡平　卽ち今宵殘り居るも、光遠どのゝ内意あつて、源氏の間へ伺候いたした。式部どの、いよ〳〵こなたの七日の通夜は
式部　最前も申す通り

郡平　詠歌の祈願か。
和泉　いかにも左やう。
郡平　ハテナア。
ト思ひ入れ。バタ〳〵にて、下座より西念、慾念、同宿の形にて、兩人とも縛られ、うろたへ、あちこち引かれながら出で來る。
慾念　西念坊
西念　慾念坊
兩人　こりやマア、どうせう〳〵。
トうろ〳〵する。
郡平　ヤア〳〵、坊主ども。何を騒ぐ。
慾念　ヤア、式部さま、これにお出でなされまするか。
西念　大變でござりまする。とんちきでござりまする。一大事でござりまする。
和泉　一大事とは。
慾念　夜に入りまするると、兩方の門を締め、嚴しく用心いたしますところに、いかなる事にや裏門を開

き、大勢の盗人が込み入り

西念　方丈はじめ長老納所、私しどもまで縛りあげ、只今本堂に屯ろいたして居りまする。

愁念　私しども両人は、やう／＼逃げて参りました。

西念　どうぞお師匠様を助けたうござります。まづ、私しどもから先へ、助かりたうござります。

ト引ッ張る。

愁念　ヤイ／＼、臆病坊主め、見下げ果てた。愚僧はそんな弱い音は出さぬ。裏門へ逃げるワ。

ト西念を引ッ張る。

西念　ハテ、逃げ勝手は表門がよいワ。

ト此方へ引ッ張る。

愁念　イヤ／＼、坊主は裏門が當り前、愚図々々せずと此方へ逃げろ。

ト両人引ッ張り合ひながら、向うへ逃げて入る。

和泉　ハテ、思ひもよらぬ今宵の盗賊、大勢を以て入り込みしは、安からぬ一大事。かゝる事もあらんかと、和歌三神の像と名け、申し下ろして持参なせし、源家の重代蜘蛛切丸。

ト箱の中より一腰を出して身づくろふ。

郡平　すりや、それが源氏の重寶、蜘蛛切とな。
和泉　いかにも。
郡平　ハテナア。

ト舌を出してせゝら笑ふ。

和泉　元は大内の官女なれど、今は保昌といふ武官の妻。本堂に屯ろするとは、人も無げなる盗賊ども自らが行き向つて

ト行かうとする。此うち下座より當山、出かゝり居て

當山　アイヤ、奥方しばらく。
和泉　そちや最前の修行者。
當山　聖人は危ふきに近寄らず、女儀として、たとへ搦め捕つたりとも、人でなしの盗賊ども、さのみお手柄にもなりますまい。この儀は餘人に。
和泉　尤も正盛に仕官といひ、光遠さまの菩提所、いづれ遁れぬ郡平どの、お手柄拜見いたしたい。
郡平　ヤア、すりやアノ、盗賊の討手に
當山　武術鍛錬のこなた。こりや二の足は踏まれまい。

郡平　アヽコレ、尻込みするではないが、まだ主人へ目見得さへ濟まぬうちに
和泉　盜賊の討手は成りませぬか。ハテ、是非に及ばぬ。アヽ、この討手は誰れをがな。
當山　拙者が仰せを蒙むりませう。
和泉　すりや、其方が
當山　最前の約束通り、爰ぞ拙者が一つの功。
和泉　ムウ、最前の手柄は見て置いた。手柄次第で望みの立身。
當山　もし手に餘らば
和泉　勝手次第に切り捨てゝ
當山　修行者の悲しさ、切るべき刃物が
和泉　成る程、尤も。郡平どの、其許の刀、暫し彼れめに
光遠　エヽ。
ト悧り。
成る程、この刀を貸してやれとか。
當山　その一腰拜借いたせば、あなたも捕り手に向ふも同然。

郡平　イヤサ、これには大切な
和泉　サア、大切な捕り物。然らばこなたがお向ひなさるか。
郡平　サヽ、それは。
和泉　サア〳〵〳〵、惜しまず刀をお貸しなされい。
ト郡平の刀を無理に取り、當山へ渡す。
當山　エヽ、忝ない。この一腰ある上は
和泉　ちつとも早く
當山　盗賊めを
郡平　仕損ずると免さぬぞ。
當山　御念に及ばぬ。
和泉　お行きやれ。
當山　ハツ。
郡平　ムウ。
ト當山にかゝらうとする。和泉式部隔てる。双盤にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、本堂、向う佛前の飾り付け、前面へ打敷、花立、香爐、佛器、うしろ戸張り。この二重に伊賀壽太郎、誂らへの盜賊の拵らへ、經机に腰をかけ、護摩の火鉢に護摩木を焚き、二升德利の尻をくべながら、沖六、利助、ぼん八、及び前の與茂八の闇藏、いづれも手下にて、車座に取卷きあたりゐる。時の鐘にて道具とまる。

四人　お頭、サア〳〵、あたらつしやりませ〳〵。

壽太　顏見世の出づらに、當れとは耳寄り。わい等もゆつくり暖まつて、働らけ〳〵。

沖六　暖まるはよいが、頭、あんまり

四人　落ちつき過ぎませうぞえ。

壽太　べら坊め、さうビク〳〵怖がつて、盜人がなるものか。坊主めらは、殘らず縛しあげて猿繫ぎ。氣遣ひせずと、燗がよいか、見ろ。

闇藏　合點でごんす。

ト探つて見て

オヽ、丁度ようごんす。茶碗の代りに、佛器で始めなさい〳〵。

ト佛器を取つて來て、壽太郎についでやる。

利助　こんな事もあらうかと、宵に瀨田の居酒屋で、燒かして來た蛸の足。

ト袂から竹の皮包みを出す。

ほん　こりやア出來た、お頭、肴はえ。

壽太　木鼠めが、摑みちらした物が、食へるものか。

沖六　ソレ、水ツ洟が落ちるワ。穢ない。

利助　イヤ、これで鹽あんばいをするのだ。

ほん　おきやアがれ。時に頭、お前も、わし等も船の上の働らき、ところに、この頃、この都近くで陸働らき。

四人　どういふ心でごんすえ。

壽太　ハテ、役にも立たぬ根問ひ。人の物を我が物に、船の陸のがあるものか。目にかゝつたが百年目だ。

四人　有りツたけに掻ツ渫ツて

壽太　イヤ、今宵ばかりは、金銀雜物を目がけるな。

四人　して、何を盗むのでごんす。

壽太　さればよ。保昌が妻の和泉式部、この石山に通夜するは、源家重代蜘蛛切の一腰を持參なし、賴信が形代として、祈念するといふ事、嗅ぎ出したは、時ならぬ櫻の返り咲き。

ぼん　すりや、その名劍を

壽太　式部がうせるは源氏の間。同宿めらに案內させ、奪ひ取つて女めは

四人　いつもの通り弄みもの。

壽太　ドレ、もう一杯氣を附けて。

トこれにて皆々酒を飮み

闇藏　それはさうと、おいらを手引きした、あの洞九郎は、どうしたしらん。

利助　彼奴が居たら、何ぞ工面ささうもの。

四人　精進物も無い酒盛り。

壽太　アヽコレ、何ぞ好い者が。

トまた一つ受ける。この時、バツタリと音して、前づらの打敷の下より、壽太郎が鼻の先へ、足たつつと突き出す。皆々悧り。壽太郎、思ひ入れあつて、平舞臺へ下りる。皆々も下りる。

沖六　ヤア、お頭が肴といふ、鼻の先へ
四人　足を出したは。
壽太　引摺り出せ。

ト四人一度にツカ〳〵と行き、打敷の下より當山を引摺り出す。當山、細く疊んだ紙帳を抱へ、伸びをしながら出で來り

當山　旅疲れにグツスリやつて、うまい夢を見るどうぶくら、こりやア何とさつしやる。
沖六　イヤ、何ともしないが、われはマア
四人　何者だ。
當山　わしかえ、わしやア六部でござりますが……斯う見たところがお前方ば、お寺の衆とも見えぬが、ハヽア、これは觀音樣へお籠りの信者衆か……さうでござりませう〳〵。わしもこの本堂へ籠つて、野宿ならこの紙帳を吊つて寢ますが、打敷の下は風も通さず、ツイとろ〳〵したが、見れば結構な焚火、先刻からわしも、暖らせて下さればよいに。
壽太　ムウ、すりや、いよ〳〵この所に通夜して
當山　枯れたる木にも花咲くと

壽太　大慈の誓ひを願はんと
當山　慾にも耽る現當二世。
壽太　救ひ取らるゝ
當山　天の網サ。
壽太　なんと。
當山　降魔の利劍、奥の緣、この修行者が搦め捕る。盗賊めら、腕廻せ。

ト繩さばきする。

四人　さう云や、おのれを

ト四人打つてかゝる。當山、紙帳の中より以前の一腰を出し、見事に四人を切り倒す。壽太郎いらつて拔いて切りかける。兩人よろしく見得。ドロ〳〵にて當山の劍へ、誂らへの蜘蛛現はれて這ひまとふ。兩人これに目をつけ、キツとなる。誂らへの合ひ方、ドロ〳〵。

當山　ハテ、心得ぬ。今この一腰拔き放せば、いづくともなく數多の蜘蛛、刀を渡つて守護する風情。
壽太　傳へ聞く、源家の重寶、蜘蛛切の一腰は、その以前髭切と云ひしを、賴光土蜘蛛を切つて、障化を除く時より、精魂刃にとゞまつて

當山　蜘蛛現はるゝを以て
壽太　髭切を蜘蛛切と呼ぶとかや。
當山　さては我が預かりしこの一腰は
壽太　正しく源家の
當山　蜘蛛切なるか。
壽太　何にもせよ
當山　希代な劍も
兩人　あるものぢやなア。
ト當山、白刃を納める。蜘蛛消え、ドロ〳〵やむ。
當山　この不思議を見る上は、この一腰こそ源家の重寶、名も無き劍に隱し置きしか、不思議にも我が手に入るは、我が望み叶ふしるし。忝い。
ト行きにかゝる。
壽太　待て、修行者。コリヤ、盜賊を搦めぬか。
當山　ヤ。

壽太　イヤサ、手下の者を打放した手の内、なかく、只の六部ではあるまい。殊に蜘蛛切の一腰と聞いては、只は遣られぬ。行きたくば冥土へ行けサ。

當山　ムウ。尤も。

ト誂らへの合ひ方。當山思ひ入れあつて、壽太郎が側へにじり寄り

成る程、其方が推量の通り、仔細ある修行者。いさゝか望みある故に、今宵の盜賊搦め役を乞ひ請け、それを功に源家へ便らんと思ひしが、この劍手に入つて、望み足んぬる上からは、見かけて頼む、なんと見遁してはくれまいか。

壽太　ムヽヽ、ハヽヽヽヽ。盜賊に見遁してくれとは、あちらこちらで面白い。いかにも目を眠つてやるまいものでもないが、して、世を忍ぶその實名は。

ト當山、壽太郎をキッと見て

當山　盜賊ながら天晴れの骨柄、義を破るべき器ならねば、包まずこの身を明かし申さん。まこと某は關八州に威を振ひし、將門が長臣、六郎公連が成れの果。

壽太　さては聞き及ぶ、六郎公連であつたか。

當山　斯く世を忍ぶも主君の公達、良門どのゝ行くへを尋ね、世に立てんには屈竟なるこの劍。約束通

り、見遁し賴む。

ト行かうとするを引とめ、壽太郎、懷より、錦の袋に入れし立て文を出し、當山を打ち据ゑる。

壽太　こりや某を、何ゆゑに。

當山　六郎公連の不忠者め。

壽太　なんと。

當山　將門公は忝くも、桓武の後胤として、王位を望む相馬の旗揚げ。軍議の折柄、人も伏せぬ其方が諫言、不吉となつて一門滅亡。

壽太　サ、それは。

當山　不忠の折檻、カウ〳〵。

ト打ち据ゑる。その手をしかと取つて

壽太　幸先を挫きし公連が諫言、忠に似て忠にあらずと、一言半句云ひ譯なけれど……合點のゆかぬはその荒まし、よつく知つたる其方は。

當山　伊豫の椽純友が、股肱と賴みし伊賀壽太郎。

壽太　すりや、成信であつたか。

壽太　意見の筈は、平親王の綸旨。

當山　すりや、御主君將門公の

壽太　包みし錦は

當山　大内裂れ。

壽太　取りも直さず吾妻の内裡。

當山　ドレ。

ト誂らへの鳴り物になり、綸旨をキッと見て

思ひ出せば承平の初め、御主君小次郎將門公、その身桓武の正統にて、王位を踏まざる無念とあつて

壽太　謀叛の與力は伊豫の純友、合體なして四國へ下る。將門は東國にて、吾妻内裡のその結構。

當山　平の國香を初めとして、關八州を打靡かせ、既に都を襲はんと、東國西國切り從へ

壽太　その勢、破竹の勢ひも

當山　官軍の計策に

壽太　相馬の内裡も

當山　四國の一揆も

壽太　亡びて殘るは

當山　公連がた。

壽太　我れ盜賊の業を爲すも、軍用金を集め、再び古主を立てん爲め、奪ひ取つたる御正印。

當山　我れも一つの功を立て、良門公へ詫びせん存念。

ト此うち後へ柳生七郎、股立ち、袴の形にて、十手を持ち、窺ひゐて

柳生　さては修行者といつたは、六郎公連。腕廻せ。

ト當山にかゝる。ちよつと立廻り。柳生七郎、十手を半鐘へ打ちつける。ゴンと鐘鳴る。これを合圖に早太鼓、拍子木、方々にて打ち立てる。

壽太　ヤア、あの物音は

ト綸旨を懐中する。

柳生　時刻うつるに心得ず、まツかうあらば告げ知らせと、合圖の鐘ともろともに、當寺を取卷く組子の手配り。

當山　すりや、落ち行く事も叶はぬか。

柳生　公連、覺悟。

ト切つてかゝる。その刀を引ツたくり、柳生を引敷き、直ぐにその刀を、腹へ突立てる。合ひ方。

壽太　ヤア、こりや何ゆゑに。

當山　ハテ、計り事は密なるをよしとする。貴殿、某、一方を切り拔け、立退かんは易けれど、さすれば實名悟り知れて、用意なさば大義の妨け……今宵の盗賊まッこの如く手疵負はせ、一腰奪ひ立去りしと、源氏方を欺むかん。成信どのにはこの名劍、良門どのにめぐり逢ひ、手渡しなして合體なし、大義の荷擔人、死後の賴み。

ト以前の劍を壽太郎へ渡す。

壽太　その計略さる事ながら、惜しき武士、早まつて。

當山　イヤ、さに非ず、この生害もこの身の越度。善惡ともに主君に從ふ臣下の習ひ、その辨まへなく我れ一人、いらざる意見に御不興うけ、他國のうちにお家の滅亡。よく〳〵思へば旗揚けの、不吉を申せしこの身の後悔。この生害も冥土なる、將門公へ申し譯。

壽太　事を分けたるその詞、云ひ置く一々、承知いたした。

當山　一刻も早くこの所を

壽太　かねて聞いたる拔け井戸より、遁れ去つて良門に
常山　對面なさば
壽太　蜘蛛切丸は手渡しせん。
柳生　その劍を
　　ト刎ね返してかゝる。壽太郎、襟を捕へ
壽太　六郎公連。
常山　大義の吉左右。
　　ト柳生またかゝるを、壽太郎、ポンと切り倒し
壽太　未來で待ちやれ。
　　ト兩人よろしき見得、時の鐘にて道具まはる。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、正面黑木の鳥居、杉並木、所々に石燈籠、稻村。下の方に誂らへの掛け稻。日覆より杉の吊り枝。眞中に結構なる御所車。前に誂らへの牛、寢て居る。土手板、誂らへあり、櫟の森と記した石の傍示杙。爰に御手洗、洞九郎を引留めて居る。山颪しにて道具とまる。

洞九　女め、執念深く、どこまで附きまとうて邪魔をする。
御手　邪魔せいでならうか。その藁苞へ隠したは、奥様へ差上げた相馬の旗、此方へ戻しや。
洞九　さう知られたら隠すに及ばぬ。成る程、これは相馬の旗だ。
御手　さてこそな。
洞九　かねて聞くこの旗には、亂軍の砌り、將門最期の血汐染まり、雨夜には必ず陰火燃ゆると聞きしが、どうしてわれが手に入つた。
御手　その仔細聞かうより、キリ／＼此方へ渡すまいか。
洞九　たつて吐かせば、踏み殺すが、退くまいか。
御手　渡しや。
兩人　どつこい。

トこれより誂らへの鳴り物にて、藁苞の中より以前の旗を出し、爭つて、此うち御手洗が扱帶解けて旗と間違ふ仕組みよろしく、トヾ誠の旗は土手板の上にかゝり、兩人は扱帶を引合ひ、中より引裂き互ひに取つたる心にて、兩花道へツカ／＼と行き、ホッと吐息。ゴン／＼にて兩人は走り入る。鳴り物シヤンとやむ。雨車、薄ドロ／＼にて、この旗の上へ陰火燃える。正面の牛を持ちあげ、中より鬼

同丸出てキツと見得。誂らへの鳴り物になり、バツタリと音して下手の稲村より、頼光、百姓の形、鍬を持ち出る。御所車より粧姫、扇を持ち、陰火に目を附ける。これにて鬼同丸、また牛をかむり、手を出して旗を引込む。陰火消え、ドロ〳〵やむ。頼光怪しみ、ツカ〳〵と來て牛へかゝる。牛を剝れのけ、鬼同丸、誂らへの形にて、拔刀を持ち、頼光へ切つてかゝる。三人面白き闇の立廻り、よき程に鳴り物になり、この立廻りに頼光、懐中より誂らへの袱紗を落す。粧姫、これを拾ひ、取上げる。鬼同丸、頼光へ切りかけ、既に危ふくなる。粧姫、中を押分ける事。ドロ〳〵にて鬼同丸を見事に下へ打ちつける。鬼同丸、粧姫が落したる扇を拾ふ。粧姫が身内より光さす。頼光、粧姫、顏見合せ。ひつたりと寄添ふ。鬼同丸、粧姫を見上げ、ギヨツと思ひ入れ。この仕組み、よろしく、ひやうし

幕

第一番目　四建目

香堂前切り見世の場

役名――切り見世女郎、お粂。同、お松。部屋頭、作右衛門。路地番、次郎。上総兵太。地廻り。八。同、鐵。同、龜。肴賣り、三田の源六。切り見世女郎、三日月お仙。

本舞臺、三間の間。一間々口の見世三間、三尺の引戸。軒毎に火の用心の行燈。上の見世にお兼、女郎の拵らへ、莨盆を扣へてゐる。下の見世にお松、同じく女郎にて、髮を直してゐる。中の見世は引戸閉つてあり、すべて京町香室前の切り見世。さんげ〳〵の合ひ方にて幕明く。この中へ次郎、下馬の上へ下下座と花道より仕出し大勢、口々にそゝり節を唄ひ、擢れ違つて入る。この中へ次郎、下馬の上へ絆纒、股引、路地番の捨ぜりふにて、鐵棒を曳き、下座より出て花道へ入る。

かね　カウ〳〵、町人さん、寄んねえヨウ。

まつ　カウ〳〵、侍ひさん、寄んねえ。見たやうだによ。

ト呼びこむ。仕出しは別れて入る。右の合ひ方にて花道より、八、龜、鐵、地廻り、ひとへ帶の形、下駄がけ、頰かむりにて出て來り、見世へ寄り

八　どうだ、お兼ばう。

かね　カウ、八さん、いゝ加減に廻んねえ。下駄の齒が減らうと氣の毒だよ。

鐵　下駄が減つたら、誰れぞが買つてくれやう。ナア、お松ばう。

まつ　お前には、お勝さんが買つてやらうと云つたよ。

八　打つちやつて置いてくんねえ。ナア鐵公。

まつ　なんだ、鐵さん、下駄の工面も出來やァしめえ。おへねえ猿唐人だ。
龜　工面が出來にやァ、日濟しを借りるワ。
まつ　アイ、わつちやァ猿唐人サ。
かね　コレナ、この子は又口舌か。八さんが聞いてゐるよ。
まつ　氣紛れの鞘當が見たいよ。
八　なんだ、どうした。おつりきな事を云ふな。お松ばう、おれがどうした。
かね　ハテ、覺まさずと喰ひねえ。茶かす奴サ。お前、さう隱しても、十露盤絞りの手拭を、あの子に遣つたらう。
八　エヽ、おいてもくりやァ。鐵か龜野郎がのを引ツたくつて遣つたのだ。
龜　いろ〳〵な事を云ふ。この野郎、とつけもない嘘をつくぜ。
かね　それ見なせえ。嘘はあるめえ。
ト流行り唄になり、花道より伴右衞門、木綿やつし布子、二本差し、頰かむり、藁草履にて、部屋頭の形にて、鼻唄を唄ひながら出て來り、直ぐに舞臺へ來る。
三人　どうした、頭、この頃はお出でがないの。

伴右　若い衆か。早くそゝりかけるの。姐さん達、どうだ、寒いの。
八　コレ、伴右衞門、この頃は根ツから逢はねえが、長屋へ來ないか。
伴右　ナニ長屋へ來ねえ事があるものか。おらア來るが、こんた衆が來ねえのであらう。綱打でも妛宅でも、我れどもが廻らないといふ日はおりない……時に、どうだ、長屋へ好い子が出たの。
三人　出りやアどうする。
伴右　どうするとは、身共も買ひに來るのだ。ほんにヤレ、烏の啼かぬ日はあれど、我れどもが屋敷から、そゝりに來ぬ日は無い。取分けこの長屋の三ケ月お仙か、小町の生れ代りか、辨天の幽靈か、あの子を買ふべいと毎晩來るが、いつ來ても門の戸が閉つて、ちらりとも身共には拜ませぬ。どうした事だ。
かね　ハテ、それだによつて、三ケ月お仙だわな。コレ、伴さん、なんとお前、わつちと河岸を變へねえか。手もたんとある女。達引に駈落ちは極まつたものよ。
まつ　それサ、お仙さんだつても、わつちらと變つた事はごぜえすまい。あの子が半四郎に似てるればわつちもづぶ栗臧だ。マア、一服のんで行きねえ。コレナア。
ト吸ひつけてやろ。伴右衞門、煙管を取つて

作右　ナニサ、さう腹をお立て召さる事はねえ。併し、お仙とこなた衆と、一口には云はれぬ。お仙は天人か辨天……コレ〳〵、また戸が閉つてあるは小腹の立つ。もう先へぶッ込む奴があると見える。

ト戸を叩く。

かね　なにサ、あの子は湯へ行つたわな。

作右　ナニ湯へ行つた。有り難いよ。湯上がりをぶッこむべい。その湯屋は、どこだえ。

八　その横町。この中もあの湯屋の格子に、二時立つてゐたといふは、頭だらう。

作右　うさアねえ。それも矢ッ張りお仙ゆゑだ。

鐵　成る程、いま流行る物は、麻の葉絞りと、三日月お仙だ。

龜　爰の前を探して見や。愛嬌が溢れてゐる。

作右　それに違ひない。江戸中での流行り神。てめえ達も、ちつと愛嬌を煎じて服めばよい。

かね　持藥にしやせう。時に、お前は口明けをしたか。

まつ　わつちは三人サ。その中に、この中の隱居が來てノ、うまく綾なしたら、一本置いたわな。

かね　そりやア野暮でない。もう夜見世になる。性を附けろヨウ。

ト鹽花を振り、戸を叩き、鼠啼きをする。

伴右　エヽ、あやまるなア。

かね　まだ玉錢も取らないよ。

ト小指を出し

これ〳〵が面附きをするわな。

三人　謝るの。

伴右　廻つて來ようか。

かね　さうしねえ。

まつ　其うちには、お仙さんも歸るよ。

伴右　有り難いな。

三人　ドレ、ひやかさうか。

ト四つ竹の入つたる合ひ方になり、伴右衞門先に、八、鐵、龜、捨ぜりふにて下座へ入る。お粂、お松、見世へ上がると、此とき向うにて

源六　お仙ばう、湯上がりだの。

せん　源さん、買出しか。

ト流行り唄になり、右の合ひ方にて、お仙、やつし、誂らへの形にて、下駄がけ、笄に垢すりを附け濡れ手拭に浴衣を抱へ、出て來る。跡より源六、やつし、股引、藤倉草履、魚賣りの形、鍵を差し魚の入りたる提げ籠を持つて出てくる。これに次郎、鐵棒を曳き、附いて出て、花道にて

源六　コレエ、、てめえ、强勢に早足だ。韋駄天の娘ぢやアあるまいし。心待ちでもあるか。とんだ早い足だ。飛脚の女房になればいゝ。

せん　久しいものサ。今日は錢湯へ行くのが遲れて、行くと早くどこがどう、早く上がつて歸らうと思ふのに、あの湯屋の番頭さんが、店頭のかみさんと話しを仕掛けて、それで遲くなつたから、早く歸らないと、又これ〳〵が氣障だわな。

ト小指を出して見せる。

源六　打ッちやつて置きやアな。あの小指が事を一々取上げ立てをすると、病持ちにならにやアならない。あの又、山の神は、變痴奇な面で、いゝ年をして、田原町の長野郎と逃げたぢやアないか。厚かましい、又この長屋へ歸りやアがつて、いゝ面の皮な。其方の宿六も、おえねえ大藏だア。

次郎　サア、それといふも親方が、結構人だからサ。

源六　紂棑人か知らねえが、おへねえ唐人だ。

次郎　マア聞きねえ。宿六があれだから濟むが、内はひつてんで、櫃も箪笥も叩き上げて、みんな伊勢七へぶツくらはせたわな。

源六　そいつは剛敵な事をした。

せん　それだによつて、内か揉め返るわな。お前、知らねえ振りをしてゐなよ。

源六　そいつは、おいらが知つては、内でも天井であらう。

次郎　そんなものサ。

せん　マア、見世へ來て、一服のんで行きねえな。

源六　さうすべいか。次郎、來やな。

ト鳴り物の切れに、三人、本舞臺へ來る。

兼松　オヤ、お仙さん、今お歸りか。

せん　聞きねえな。あの湯屋の番頭さんから、彼の話しを聞きかけられて、ツイ近くなつたわな。達ねはしねえか。

ト小指を出す。


豊國画

かね　イヽエ、今日も又、何處へか行つたよ。

まつ　いつそまだ浮世が拔けねえよ。

かね　聞きねえ、昨日堀の内へ、裸足參りに行つたよ。否だなう。

せん　氣紛れがまだ立去らねえなう。

ト莨吸ひつけて源六にやる。

源六　次郎や、てめえ大分、薄ッぺらだな。又えてか。久しい病だ。

次郎　なにサ、兄貴、聞いて下さい。とんだ災難に會ふものだ。横町の湯屋で、身ぐるみすつかりと板の間に稼がれた。ソレ、あの廣棧の口綿、三野郎が前から買つた茶微塵のがソレ、絞りの單物に二本通川の博多帶が、ぐつすりとやりやアがつた。腹が立つてならねえが、と云つてどうも詰らねえから、角の伯母御を口說いて引ッ張つて居るが、えて吉に借りたのよ。コレ、お仙さん、昨日云つた、彼の事を呑み込んでくんねえ。二朱一本の廣袖でも出して着にやア、外聞が惡いわな。

せん　ハテ、いゝわな。どうかして晩にやア通してやるよ。

源六　お坊さん御成人といふ態だ。

せん　よしねえ、ぢらしなさんな。それでも憎まれねえお庇にやア、あたじけねえ伯母御が貸して置くやつサ。

次郎　おかつしやいな。コレ兄貴、いま路地の入り口で、紙入れを拾つた。何ぞあるか、見なんし。

ト紙入れを出して源六に渡す。源六、捨ぜりふにて中を改める。

源六　何だかゴテ〳〵とあるワ。ハア、源水の齒磨に、馬道の反魂丹。コレ、七色唐辛子もあるワ。何だかくされの文があるわえ。

ト文を出し、ひろげて見る。

「先日はゆる〳〵御目もじなし、山々嬉しく存じ〳〵、近きうち御はこび、神かけて念じ祈り〳〵」も凄まじい。こいつは四六玉の文だわえ……イヤア、しつかりあるわえ。四文錢で二十七文と。この藥は何だ。四つ目の附いたのは、長命丸だ。コレ、次郎や、この紙入れを落した奴は、剛敵と好きな奴と見えるわえ。

次郎　そりやアお國ッぱうが落したのでごんせう。お仙の見世で長命丸とは、緣起がいゝねえ。

せん　氣障な事を云ひなさんな。好かねえなう。

かね　オヤ〳〵、もう日が暮れたよ。

まつ　斯うも短かいものかなう。
次郎　兄貴、今の四文錢で、八公の所で、牡丹の吸ひ物で、一杯いかうぢやねえか。
源六　否な事〳〵。おらア金毘羅樣へ四つ足は一生斷つた。
次郎　そんなら池田屋で、ぶッかけ豆腐と洒落よう。
せん　源さん、廻つて來なんし。
源六　サア、次郎、來や。
トさんげ〳〵の合ひ方になり、源六先に、次郎、鐵棒を曳き、下座へ入る。お仙、お兼、お松、てんでに見世へ上がり、附木にて行燈へ火を灯す。ト下座よりも花道よりも、仕出しの若い者、大勢出てくる。
若一　サア〳〵、いゝ次手だ。評判の三日月お仙を見て行かうぢやアねえか。
若二　それ〳〵、とんだ美しいものだ。杜若に其まゝだ。
若三　吉原の花魁にも、あんな玉は無い。
若四　アレ〳〵、あの中の見世が評判のお仙サ。
若一　とんだ美しいもんぢやアないか。

かね　カウ〳〵、町人さん、寄んねえな。
まつ　カウ、寄んねえな。用があるわな。
ト仕出し捨ぜりふにて兩方へ別れ入る。下座より伴右衛門出で來り
伴右　イヤ、灯がとぼつたら、みんな美しく見えるわえ。どうだ、お仙ばう、身共にもとほさせる事は
どうか〳〵。
せん　伴さん、お出でか。
かね　お前、どこへ行つて來たのだ。
伴右　おらアぐつときめつけて來た。今夜は宵にも泊つた。コレ、お仙ばう、吸ひつけてくれぬか。
せん　お前、莨は嫌ひぢやアねえか。
伴右　なにサ、のむのよ。常は嫌ひでも、お仙ばうなら吸ひつけ煙草を、いくらでものむのサ。たとへ脂に醉つても、のむから吸ひつけてくれ申さぬか。今夜は一昨夜の晩のやうに、横さア突ッ張つては否だよ。嫌味なしに、ナウ。
せん　エヽ、氣の強い。
伴右　何が氣が強い。

せん 今夜はお前が泊らうと云つても、約束があるから泊りは取らねえよ。
作右 泊りが出來ずば、四つまで遊んでゆくべい。
せん 四つまでも心待ちがあるから、どうもし悄い。
作右 そりやア、なぜ〳〵。
せん なぜでもサ。
ト茛のみゐる。
作右 てまへ、そんなに惡しくしねえものだ。おれも碓氷さまの屋敷では、部屋頭の伴右衞門だ。てめえをおらが馴染みにすべい。おらが屋敷の組子どもにやア、一々申し聞せて、てめえの所へは上がるめえといふ、連判に爪判のう取つて置いたワ……イヤ、また惚れるも無理はない。武士の飯を食ふ我れども、否でも應でも逢うてもらはにや侍ひが立たぬ。コレ、武士が手を合せて拜み申す。これぢや〳〵。
ト拜む。
せん コレ、そんなに拜んでくんなさんな。わつちやアまだ佛にやアならねえよ。さしがあつて逢はれねえ筋だから逢はねえといふに、お前でもあるめえ、自烈てえよ。

作右　コレ〱、貴公は解らぬものだ。自烈たい恥を云はねば理は解らぬ。フツとこの長屋へ来て、そもじに惚れて〱、御奉公も疎かになつて、切り米も扶持も約束も、みな打込んで、椀久ではないが、こんな形になられたが、其許との心中なら、たとへ火の中水の底、来いといへば野の末山の奥、虎臥す野邊の果までも……イヤ待て。その虎臥す野邊はお斷わりぢや。ハテ、道の程が知れぬゆゑ、路金の貯へがない。その外の儀は何なりと、お斷わりは申さぬ。コレ、斯う云ふうちも堪へられぬ。

トお仙に縋りつくを突きとばし

せん　お前より、わつちがどうも堪へられねえわな。

伴右　これはどうぢや。此やうに割ッつ口説いつ申すのに、聞き分けせぬのか。オヽ、おれも武士の端くれ、切り見世の女に突き出されては、傍輩どもの手前、殿様のお名の出る事だぞ。モウ〱、何も云はれぬほど惚れたによつて、口説くものゝ、御大層らしい、わればかり切り見世の女郎衆か、この長屋にも恐らく女郎の七八十人もあらうが、また武士の威光で色にして見せるワ。コレ、さう云はれては、てめえも立つまいが、立たずばおれが色になれ。おれも又、云ひかゝつたからは、色にならうといへば跡へは引かぬ。たとへ色にならずとも、お仙を自由にしないうちは、こ

の長屋を五分五厘五毛も外へは出やアしねえぞ。イケ太々しい女だ。
せん なんだ、女呼はり、よしてくんな。そんなにお前が熱くなつて云ふほど、わつちやア何ともない
よ。
伴右 エヽ、このふんばりめ。逢はねえといつて、その分にして置くべいか。身共、劍術の奥儀の手を
出して、逦さずに置かうか。
ト立ちかゝる。お兼、お松、これを留める。下座より源六と次郎出で來り、伴右衛門を抱きとめる。
兼松 コレ、伴さん、待ちなさい〳〵。
源六 アタ、イケ騷々しい。どんな出入りか知らねえが、悪くはしめえ。待たつしやい〳〵。
伴右 否だぞ〳〵。武士が立たぬ〳〵。
次郎 なんだな、立たない〳〵と、立つて居るぢやアねえか。マア下に居て云ひなさいな。
伴右 オヽ、おぬしやア次郎ぢやアないか。立たぬぞ〳〵。
次郎 ハテ、いゝわえ。親方、築地が來たよ。譯を云はつしやい。
源六 コレサ、屋敷の客人、騷ぎなさんな、間違ひだ。高が女の事だ、打ッちやつて歸りなよ。
伴右 イヤ、歸り申さぬ。歸られねえぞ。コレ、おてまへ、誰れだ、

源六　アイ、わしやア魚賣りの、三田の源といふ者だ。
作右　なんだ、魚屋の源でも、板屋の勘でも、お身達の知つた事ぢやアねえぞ。退いて居やれ〳〵。
次郎　サア、いゝわな〳〵。ぬしやア餘所の人だ。この長屋の番をしてゐる次郎、まんざらお身さん達を悶まして歸すものかな。ハテ、跡々の商賣の邪魔になるわな。靜かに云つても解る事だ。コレお仙さん、こりやマア、どういふ入譯だの。
せん　なにか小むづかしい話しあひのあるやうに云ふのよ。譯はねえわな。
作右　いんにや、むづかしい話しあひの事だ。高が四六屋體の切り見世で、阿房にするから腹が立つのだ。コレ、マア斷つてござる。この長屋の者に、そんならそれと云はれるにも、元手のいる事だ。毎晩來るもコレ、お仙を……買ひたいからの事だわサ。
次郎　サア〳〵、よしサ〳〵。譯道は聞いたよ〳〵。
作右　サ、聞えたなら、おれが無理ぢやアあるまい。おぬしも知つてゐるが、爰へ來るが最後、ほんに助六ぢやアねえが、長屋中から貰で煙管の雨が降るやうであらうが。ソレ、それ程に大切がられるお客を、なぜ安くするのだ。安くするから腹が立つ。
源六　サア〳〵、みんなお前が尤もだよ。この子といつたつて、お前を安くする出入りもあるめえが、

作右 そりやアほんの間違ひといふものだ。堪忍しねえ〳〵。間違ひか輪違ひか知り申さぬが、この長屋へ毎晩來るも、恥かしい事だが、あのお仙に逢ひたいからの事よ。聞かつしやいよ。一昨日の晩も、久しい約束で、お切り米が渡ると、御門番へ酒の一升も袖の下を使ひ、コレ、勤めばかりではねえよ、屋敷の內へもそれ〴〵に、物を遣はなければ、御門たつても度々出憎くつして見れば、甘い出入りぢやアござらぬ。四つからの勤めが、一本に二百五十の、酒が一片。百の鍋燒ばかりでも淋しいから、蕎麥を取りにやるにも氣を附けてしつぽく花卷、兩隣へ一つ宛。これぢやア濟まぬと、また內の嚊ア衆にも、沙汰無しにしては置かれず、假染に蕎麥ばかりでも、百五十は要ります。その蕎麥を一つ食はぬかと云へば、否だと云ふから、コレ、折角買つたものを、心を無足にするといふものだ。まだその上に茶瓶も取つたにたふ。二朱やそこらは、ちび〳〵となくなるのよ。よしか。コレ、その煑花を飲んでから、寐たと思はつしやい。そこで、嬉しやと思つたら、癪が起つたといふから、脊中を撫るやら、揉むやら、おれもその時、腹が立つたが、イヤ〳〵、玆が武士ぢやと辛抱して、揉んでやつたのサ、其うちに烏がカア〳〵と啼く。納豆賣りの聲はする。サア、詰まらぬではござらぬか。屋敷へ歸らねば、御門番の衆の前が惡し、そこ〳〵にして歸りがけに、また晩に來ようと云つたれば、

なに食はぬ顔で、晩に來てくんねえと迯り出しおつた。昨日も昨夜も頻りに來て、附いて居るやうにするに、知らぬ顔ぢや。これが腹が立たいでならうか。今夜も泊らうと云へば、さしがあるの障りがあるのと云つて、莨一服吸ひつけてはくれぬ。コレ、若い人、これがマア腹が立たいで居られるか。この伴右衛門が云ふのが無理か、無理でないか、聞き分けて下さい。情知らずの、ふんばりめ。

源六　ようごんすわな。さう聞いては、お前の無理は一つも無い。が、そこサ、變つたもので、なんぼしがない勤めをするこの子達でも、否な客には、逢ふ氣はあるまいのサ。

伴右　アヽ、そんなら我れどもは否な客か。ハテ、あんまり捨てた男でもないぞえ。

せん　さう拾ふ男でもないのサ。

伴右　アレ、あんな事を云ふわサ。

源六　サア〳〵、いゝわサ。お前が其やうに腹を立つのも、根がこの子に氣があるからの事であらう。

伴右　さうサ。

源六　そんなら、おいらが一番仲人に入つて、丸くなるやうに、お仙ばうをお前に執持つたらよからう

伴右　そりやア何より忝ない。

せん　これサ、源さん、ひよんな事を云つて、跡でわづちを手こづらせる事は御免だよ。

源六　ハテ、そりやア主の心にある事だ。ナウ、次郎。

次郎　ハテ、そりやアそれサ。主達のやうに、長屋へ足近い衆に、いさくさがあつては、跡の爲になりやせぬ。そこを又お前も苦界だと諦めて、ちつと附合へばいゝワ。何であらうと、わつさりと機嫌を直して、ナア兄貴。

源六　それよ、そゝりに來て腹を立つ者は野暮、白癡のやうで薄ツぺらに見えるから、お仙、吸ひつけて進ぜさつしやい。

せん　きつい附合ひだの。

ト吸ひつけて出す。伴右衞門、嬉しさうに取つてのみ

伴右　コレ〳〵、斯うされちやア、何も腹の立つ事もおりない。どうかコレ、貰ばかりぢやア物に極まりがない。コレ、一片取らうか。

ト懐より錢を一本出し、次郎へ渡す。

次郎　エヽ、又お前、跡で醉つて、いさくさは御免だよ。

伴右　イヤモウ、これきりに何も申さぬ。次手に肴も頼むよ。

次郎　呑み込んだ。御用めが居ればいゝが。

　　ト錢を持つて下座へ入る。

せん　カウ、お松さん、聞きねえ、作さんが一片取りにやつたよ。

まつ　大分はずんで來たの。

源六　うさアねえ。

　　ト次郎、白鳥の徳利と、丼に肴を入れて持つて出る。

次郎　サア／＼、作さん、取つて來たよ。

　　ト茶碗を出す。

作右　こりやアいかいお世話。爰へ出さつしやい。サア、先生、始めさつしやい。

源六　マア／＼、お前から始めなさい。

作右　ドレ、酌を參らう。

粂松　わつち等もお相としやせう。

　　ト次郎ついでやる。作右衛門のんで源六へさす。これより杯の取やりになり、作右衛門は丼の蛸の足を嚙りながら、咽喉へつまり、せき／＼するこなし。これにて皆々驚き

源次　こりやアどうだ〳〵。

粂松　伴さんえ〳〵。

ト脊中を叩いてやる。伴右衞門、キョロ〳〵する。

源六　どうした〳〵。

次郎　こりやアなんだ、蛸の足が咽喉へ引ツかゝつたのだ。これなりに長屋で頓死でもされちやア亂騷ぎだ。藥は無いか〳〵。

源六　待ちやれよ。先刻おぬしが拾つた紙入れに、藥が慥かあつたさうだ。

ト源六、以前の紙入れより、紙包みの藥を出し、その中の蛤貝を明け、丸藥を出して伴右衞門に服ませ

どうだ、部屋頭、藥だよ。氣を附けさつし。

トこれにて伴右衞門、思ひ入れあつて段々としやきばる。木のやうに手をひろげる。

皆々　これサ、どうしたものだ〳〵。

女三　伴さん、心持ちはよいかえ。

伴右　イヤ、いま我れどもが、蛸の足を咽喉へ引ツかけ、ギチカバするうちに、藥を服ましてくれたな

源六　オヽサ、藥を進ぜたが、どうだえ。

伴右　イヤモウ、心持ちか、もぐらもちか、體ぢうが炎々と熱くなつて、コレ、筋骨も節くれ立つて來たが、體が棒を呑んだやうで動かれねえ。こりやマア、どこの藥だ。

源六　慥か馬道の反魂丹だと思つたが、間違やアしないか。

ト云ひながら、紙入れを出して

待てよ。反魂丹は爰にある。今の蛤にあつたは。次郎や、部屋頭に、とんだ藥を服ましたわえ

次郎　どんな藥を服ませた。

源六　反魂丹だと思つたが、長命丸を服ませたか。

次郎　こいつは、死にはしまいかの。

源六　なにサ、打ッちやつて置け、長生の藥よ。

伴右　アヽ、コレ／＼、なんだ、長命丸を服ませた。そりやア大方おれが、兩國で買つて來たのであらう。なんでもお仙に用ゐようと、紙入れへ入れて置いたを、カラ打落した、その長命丸が、廻り廻つておれの腹へ入つて、身内が此やうに、しやッきり張つて苦しむも、アヽコレ長命丸の報ひ。アヽコレ、水でも飮ましてくれ。咽喉がひッつくやうだ。

源六　アヽ、そんなら次郎が拾つた紙入れは、貴様のか。念が屆いて長命丸は用ゐたが、こなさんの體に藥が廻つたのだな。

次郎　コレ、兄貴、水でも飮ませてやらうではないか。

源六　そこらに水があらう。取つて來や。

次郎　合點だ。

トかけてある貧乏樽と柄杓を取つてくる。

源六　サア〳〵、水を飮まつしやい〳〵。

ト口許へ樽を押しつける。伴右衞門、一息に樽の水を飮んで、ぶる〳〵としてこけ倒れる。皆々寄つて

次郎　部屋頭、コレ、氣を確かに持たつしやい。どうだ〳〵。

伴右　アヽ〳〵〳〵、今の水を飮んだら、身共の體がグニャ〳〵と、一向に體がきかぬワ。

源六　こいつはとんだ事だ。そんな病人を長屋へ置いちやア面倒だ。次郎や、若い者を呼んで、送らせてやらねえか。

次郎　さうしやせう。コレ、若い衆や、來てくんねえ〳〵。

ト呼び立てる。これにて八、鐵、龜、捨ぜりふにて出で來り

八　次郎や、なんだ、また長屋にいさくさでも始まつたか。

鐵　どこの野郎だ。くらはせてやるべい。

龜　その野郎はどこに居る。

次郎　これサ〳〵、喧嘩ぢやアねえわな。とんだ病人が取れた。その病人を送つてもらはうと、それで呼んだのよ。

八　おきやアがれ。病人を送れか。コレエヽ、風の神は送つた例しがあるが、病人を送つた例しはない。とんだ癡言を吐くぜえ。

次郎　これサ、腹を立てる事はない。てめえ達も友達同然の、伴さんが急病だわな。

龜　ナニ伴公か。そいつはとんだ事だ。ドレ、どこに居る。

ト三人、伴右衞門がクニヤついて居るを見て

三人　コレ、伴公さん、どうしたのだ〳〵。

伴右　オヽ、若い衆か。俄に身共珍事ちうよう、惡事災難。恥かしながら、奇妙な藥を服んで、體がおへたりおへなんだり、おへねえ目にあひ申す。

八　そりやア大方、中氣であらう。
鐵　よいくになつたのかも知れねえ。
龜　慥かにそりやア、疝氣だく。
伴右　何でもいゝから貴公達、屋敷まで送つてくれぬか。
八　まんざら知らねえ顏でもねえ。送つて進ぜう。
三人　マア、立たつしやいく。
ト無理に引立てる。伴右衞門、グニヤくとして居る。八と龜、腋の下へ入り、鐵、後を押へて花道へかゝる。
伴右　ア、コレ、若い衆、いかいお世話になる事だ。よいくとやらであらうか。古いやつだが引込みは、お定まりの狂歌、斯うもあらうか。
三人　どうだく。
伴右「たてようと思ふ藥をかゝらのみ、なんて宗三は綿に成田屋」
三人　何を云はつしやる。
伴右　それでは、やらうぞえ。

三人　よい〳〵。

ト四つ竹の合ひ方にて、介抱しながら伴右衞門を押して向うへ入る。

源六　イヤハヤ、とんだ藥だ。

次郎　あの唐變木を送り出した喜びに、一つやりやせうか。

せん　ほんに、あんな仁もないものだなう。

かね　伴さんがやかましく云ふところを、源さんが口をきゝなすつたから、お仙さん、嬉しからうの。

せん　わつちやア眞に嬉しいよ。

ト次郎、酒を飮みながら

次郎　嬉しがるやつサ。畜生め。

せん　打ッちやつて置いてくんねえ。

源六　イカサマ、あんな氣紛れが來た時は、ぬし達も手こずるであらう。

せん　それサ、挨拶するも否でならねえのに、あゝうるさく云はれては、しみ眞實小腹が立つて、惡しくすりやア今のやうに、向うも熱くなつてやかましく云ふのを、源さん、よく世話をしてくんなすつた。眞に嬉しいよ。

かね　お仙さん、眞に嬉しくば、きつと禮があらうの。
まつ　禮を云はれちやァ、源さんも引かれやァしめえ。なう、お兼さん。
かね　さうサ。
源六　なんだ、この子達は、味な事を云ふの。禮を云はれては何が引かれねえ。
まつ　お仙さんがお前に
源六　お仙ばうが、おれにどうした。
次郎　兄貴に氣があるとよ。

トこれにてお仙思ひ入れ。

源六　おきやァがれ、好い機嫌な。
次郎　ハテ、きまつてやらつしやいよ。
源六　馬鹿を云へ。爰ら界隈をほつき歩いても、びりにかゝつた事のねえ源さんだ。そんな嫌味な事があつて歩かれるものか。この長屋へ遊びにも來られねえわな。
次郎　サア、何かさう物を凄ぐ云ふ事はござんしねえ。お身さんが、どの子供衆とも心安いだけに、お仙さんも云ひ兼ねて居ることは、又わしも氣取つて居る。こなさんの氣性を、あの子が知つてる

るから、今日まで云はねえでゐたわな。きまつてやりねえ。あの子は地廻りの手合ひが、何の彼のと云つても、五分でも傾ぶきやアしねえ。その上に、地廻りなり下りの金の出來るつゝくつもおれが知つてゐる事があるから、下齒に持つてやらつしやいな。

せん　わつちもこんな節がなくつちやァ、云ふもをかしらしいぢやァねえかえ。わつちが身にかゝつた事を、世話をしてくんなすつたお前だから、心安くしてもいゝぢやァねえかえ。

兼松　源さん、來て進ぜなせえな。

源六　エヽ、おきねえ。おらァ生れついて、女にあんな事を云はれるのがきつい嫌ひ。そんな事にいちやつきの無い男だから、この土地へ來ても、附合ひが成るといふものだよ。

せん　サア、附合ひに來なんすから、心安くしておくんなんしな。

源六　とんだ事を云つたものだ、おらァそんな事は知らねえわな。

せん　ぬしやァ堅いよ。お屋敷ださうだ。

次郎　こりや斯うしよう。お仙さんの見世のいざこざを、兄貴が譯を附けたものだから、その禮に一杯進ぜなさいな。お松さん、お兼さん、なんとさうぢやァないか。

かね　アイ、わつちらも賴まれてゐるから、源さん、お仙さんの禮を

まつ　受けねえな〳〵。
次郎　これサ、お仙さん、兄貴へ禮に、一つ飲んで献しねえな。
せん　わつちが飲んで献しても、源さんが受けなんせうか。
源六　禮なら受けねえ理屈もねえのサ。
せん　ついでくんねえ。

ト茶碗を取り、お銚ついでやる。お仙飲んで

源さん、お禮だよ。
源六　お禮なら、一杯氣を附けようか。
次郎　煽ツ切らつしやいな。
源六　ついでくりやア。

ト次郎ついでやる。源六受けて飲む。

かね　そりやア、祝言が極まつたよ。
源六　なんだ、祝言が極まつた。
まつ　次郎さん、めでたく一つ謠ひねえな。

次郎　謠か……高砂や、この裏店に祝言は、源の嬶アが極まりけり。

源六　おきやアがれ、何の癡言だ。

次郎　ハテ、祝言だから、思ひ附きの謠を謠つたのだ。時に、仲人は宵のうちの事だ。わしらアもう開かう。

粂松　わつち等も開きやせう。

次郎　ア、、寒くなつた。鴨蕎麥を當て身と出かけよう。

源六　そいつは剛敵だ。一つ行きたいな。

次郎　兄貴は爰で、うまく喰はつしやいな。

源六　何を。

次郎　ぶつかけをよ。

かね　お仙さん。

せん　エ。

まつ　源さん。

源六　なんだ。

兼松　おしけりなんし。
次郎　廻りなんし〳〵。
　　ト四つ竹の合ひ方になり、次郎は下座へ入る。お兼、お松は見世へ入り、戸を閉める。兩人殘り
源六　コレナ〳〵、さう情なくする事はねえ。お松ばうや、お兼さん、附合はツし。コレ、次郎や、もう一杯飲んで行かぬか。
せん　これサ〳〵、捨てゝ置きねえな。
源六　どれも〳〵、おれ一人捨てゝうしやァがつた。
せん　ハテ、捨てゝもお前は、わつちが拾ふわな。
源六　そいつは有り難いな。
せん　有り難いと思ふ氣なら、今から心安くしてくんねえな。合點か。
源六　合點かとは、何の事だ。
せん　ソレ、わつちを女房にと、思つてくんねえな。
　　ト思ひ入れ。
源六　なんの事だな。おらァそんな事は小ッ恥かしくつて、嫌ひだといふのに。

せん　ナニ、嫌ひだえ。
源六　きつい嫌ひサ。
せん　ぬしやァ男ぢやァねえか。
源六　男サ。男がどうした。
せん　サア、平常から男氣を見込んで居るから、わつちが口からこんな事を云ふからは、お前、男なら男らしく、達引をしてくれたがいゝわな。
源六　男づくの達引なら、五分でも凹むのぢやァねえ。おれも三田の源と呼ばれちやァ、相應にけちな子分の四五人もあつて、ほんの事だが根岸金杉、下谷切つて瘤を出す若い奴等に附合ひ、どこの仲直りに出ても、階子の上がり口に坐つて、中腰で酒を飲むのぢやァねえ。そんじよそこの某と、人に立てられるせうがには、頼まれた事を、ついぞぶん流した事のねえ男だ。
せん　サア、その頼もしいお前だによつて、源さん、頼んだによ。
源六　何をよ。
せん　女房に持つてくんねえな。頼んだからは、もう引かせはしねえ。わたしが飲んで献した杯を飲みなすつたからは、祝言は極まつてある。女の方から献す杯は、一生に一度。男を立てるお前ゆゑ

源さん、頼んだからは引かれはしまいの。

源六 よくきめつけるたぼぢやァねえか。そんならいゝわな。男と見かけて頼まれたが因果だ。達引づくに、男にならうわサ。

せん 女房に持つてくんなさるか。

源六 エヽ、しちくどい。

ト合ひ方、お仙飲んで源へ献す。

せん もう一つ飲みねえ。

源六 また飲むのか。

せん これが、きつとした固めだよ。

源六 なんだ、固めかよ……とんだ片目だァ。生姜を賣らせればよい。いつそのくされ、固めやせう。

サア、つぎやな。

ト お仙つぎ、源受けて

南氣かして熱くなつて來たわえ。コレ、お仙ばう。ほんに、女房に持つからは、お仙ばうと云つては悪いなう。今からは、下歯と云はうか、嬶ァと云はうか、云つて見るから、必ず笑ふめえよの

　ソレ、云ふぞよう……コレ、嬶ア。

せん　エ。

源六　氣が違つたさうだ。女房の固めといふものは、大分熱いものだ。

　ト手拭で汗を拭きながら眞面目になる。

せん　お前、寒くならうによ。もう四つでもあらうか。源さん、寢ようかえ。

　ト思ひ入れ。

源六　なんだ寢よう……なんだかおらア熱いやうで、寒いやうで、小ッ恥かしくつて、味な氣持ちになつて

せん　サア、見世へ來なさい。

　ト手を取る。

源六　見世へ行つてどうするのだ。

せん　もう寢るのだわな。

源六　もう寢るのか。この夜の長いのに。

　トお仙、源六の手を引き、見世へ入り、顏見合せ、思ひ入れあつて

かゝ嬶ア。

せん　旦那どの。

ト思ひ入れ。

源六　氣が違つたさうだ。

ト唄になり、戸を閉てる。四つの鐘。所々にて拍子木打つ。向うより兵太、大小。紺看板の奴兩人に、四つ手賀籠を擔がせて出で來る。下座より次郎出て

次郎　締まりやす。

ト云ひながら、兵太と顏見合せ

あなたは上條兵太さまではござりませぬか。

兵太　其方は路地番の次郎、よい所で逢つた。かねて頼み置いたる彼のお仙が事は、なんと致した。

次郎　そこに如才はござりませぬ。私しも金になる事。お頼みゆゑに、お仙にも申し聞かせ、あの女も隨分承知でござりまする。

兵太　それは滿足。然らばお仙を呼び出してくりやれ。

次郎　畏まりました。

ト眞中の戸をたゝく。内にて

せん　誰れだ〳〵。

次郎　コレ、お仙さん、ちよつと明けてくんねえ〳〵。

ト これにて戸を明け、お仙出て來り

せん　次郎さん、何の用だ。

兵太　イヤ、別儀でもない、契約の通り迎ひに參つた。

ト この時、戸を明け、源六顏を出して見、合點のゆかぬ思ひ入れ。お仙、思ひ入れあつて

せん　お屋敷さん、ようお出でなさんしたなア。

兵太　約束の通り、金子五十兩、相渡す上からは、身共と共に同道しやれ。ソレ、五十兩。

ト 財布の五十兩をお仙に渡す。

せん　アイ、こりやア申し、お金かえ。有り難いね。

ト この時、源六、ツカ〳〵と出て

源六　アイヤ、憚りながらお侍ひ樣、お仙をどこへ連れてお出でなされますな。

兵太　其方は何者だ。

源六　ハイ、私はこの女に、ちつとかゝり合ひの者でござりまする。コレ、お仙、こりやマアどうい
　ふ理屈だ。
せん　サア、譯といふは、この侍ひさんが、この間中度々お出でなすつて、屋敷へ一日雇はれてくれい
　その代金を五十兩やらうと仰しやるから、あんまりおつりきな事ゆゑに、譯を聞けば、奥様とや
　ら、お姫様とやらの、酒の相手にしたいとのお頼み。ハテ、何をするも勤めのこの身、参りやせ
　うと云つたから、それで迎ひにお出でなさんしたのサ。
源六　ウム、五十兩といふ金で、お仙を一日雇ふとは、どうもこいつは、おつりきな話しだ。お仙や、
　てめえ又、とんだ目にあふなよ。
次郎　これサ兄貴、あの子だつても、子供ではあるまいし、如才は無いわな。
せん　わつちが屋敷へ行つた跡で、親方の前をこの金で、源さん、お前いゝやうに頼んだよ。
源六　案じる事はねえ。おれが呑み込んだ。
兵太　サア、夜の更けぬうち、ちつとも早く……家來ども、その駕籠へ。
　ト四つ手駕籠へお仙を乘せ、花道へ行かうとする。源六、心得ぬこなしにて
源六　モシ〳〵、お侍ひ樣。して、お仙をお連れなされまするその先は、何と申すお屋敷でござります

兵太　そのお屋敷は忝くも、河内守頼信さまのお屋敷だワ。

源仙　エ。

　ト兩人顏見合せて思ひ入れ。

源六　賴信さまのお館へ、アノこの金で

次郎　その金を

　ト財布を取りにかゝる。立廻りに源六、側にある手桶をかぶせる。

　嬶ア、行つて來や。

　トしやんと手を打つ。木の頭、この途端に次郎、桶を被りながら見事に返つて下に居り眞面目になる

　あの面を見や。

　トよろしくキザミ、ひやうし

幕

第一番目　五建目

賴信館の場

役名――河内守源の賴信實ハ今張六郎蔭行。市原野の鬼同丸實ハ源の賴信。源家の臣、平井保

昌。敦賀郡司爲時。堤の彌三。奴、國平實ハ常陸之助國春。同、里平。大宅太郎光遠。奴、伊輿助實ハ純友ニ子十太丸。物部平太有風實ハ長尾新六景道。船頭、洞九郎。魚賣り、三田の源六後ニ三田源太廣綱。室津權の頭時純實ハ伊賀壽太郎成信、保昌妻、和泉式部。同妹、伏屋。傾城、若松實ハ純友娘玉琴。小姓、主水。同、左門之助。周防の内侍實ハ三日月お仙。

本舞臺、三間の間、高足の屋體、升組みの揚げ障子。上の方、白梅の盛り、下の方、紅葉の大樹、左右萩垣、すべて賴信館の體。爰に爲時、上下衣裳。彌三、麻上下、股立ち。光遠、上下、大小にて、菖蒲革の侍ひ二人、黒塗り金物打ちたる細長き長持を舁き、これを光遠、警固してゐる。伏屋、振り袖衣裳、梅の花を活けし竹筒を持ち、立ちかゝりゐる。琴唄にて幕明く。

ト彌三、長持へ思ひ入れあつて

彌三　見ますれば、賴信公の奧殿間近く、警固おしやるこの長持。光遠どの、勤番いたす堤の彌三、吟味いたさぬ其うちは、滅多に奧へは通されませぬぞ。

光遠　ナニ小ざかしきその一言。大宅の太郎光遠が、賴信公の仰せを請け、廓遊びの手道具を、持參いたしたこの長持。わいらに見せるに及ばぬ事、キリ／＼奧へ通すまいか。

爲時　イヤ、太郎どの、扣へ召されい。頼信公には御正印を、失せさせ給ふお咎めにて、蟄居同然。その附き人は平井の保昌。兄君頼光公には、上總の國へ任にお下り遊ばされ、いまだ御歸館なきといひ

伏屋　殊には只今繼仲公より、內意のお使ひ、物部の平太どの、兄保昌が歸りを待つて、奥の間にお入りといひ、廓遊びの手道具と、聞いては猶々奥殿へ

彌三　迂濶にやアやられぬこの長持、身が改めて

光遠　ほてぶしかけなば光遠が

ト長持を圍ふ。彌三、立廻りにて引下ろす。侍ひうろたへ、光遠圍ふを、彌三改めんとする立廻りに、長持の蓋を明ける。中より洞九郎、三建目の形にて飛んで出で、伏屋を突きのけ逃げんとするを、爲時キツと止めて

爲時　さてこそ怪しい下素親仁、なんでおのれはこの中に、隱れ忍んでうせたのだ。

洞九　アヽ、モシ〱、わしは矢橋の渡し守、洞九郎といふ正直親仁、この中にかゞんでゐたは

彌三　云ひ譯あらば、キリ〱吐かせ。

洞九　そんなに嚇かさつしやるな。なんでござる。オヽ、それ〱、今日この屋敷へござらしつた、物


三田の源
岩井紫若
五渡亭国貞画

部の平太さまに、急にお目にかゝらねばならぬ用事、と云つたところがこの態では、奥御殿へは叶ふまいと、太郎さまの長持の中へ、幸ひとお願ひ申して、ちつとのうちかゞんで居つたは、わしが誤まり。これより外に云ひ譯はござらぬ。太郎さま、左樣ではござりませぬか。

光遠 成る程〳〵、おのれが申すに相違ない。その證人はこの光遠、疑がはしくば身が預かる。この者太郎が預かりませう。

篤時 光遠どのゝ仰せなれど、承れば彼奴は、洞九郎と申す舟乘りとやら。その洞九郎と申す奴は、いつぞや江州石山にて、娘式部が親なりと、僞り騙りの正しく老ぼれ。

洞九 アヽ、モシ〳〵、どうして、そりやア私しではござりませぬ。

光遠 ハテ、よし又其方であらうとも、身が預かつた上からは

彌三 すりや、どうあつてもその者を

光遠 身共がきつと預かつた。

彌三 ハテ、太郎どのには、肩持ち顏が呑みこめぬ。

ト思ひ入れ。向うにて

呼び 御歸館。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れ。

爲時　ありやア頼信公の御歸館の知らせ。拙者も待ちうけ保昌に、申し談ずる仔細もあれば、奥へ參つて

光遠　洞九郎は身が預かる。氣遣ひなしに。

洞九　へイ、それで私しも、落ちつきました。

伏屋　郡司さまには、然らば一間へ。

爲時　光遠どの

光遠　爲時どの

兩人　同道いたさう。

彌三　怪しき舟長。

トかゝるを光遠、洞九郎を圍ひ

光遠　ござりませう。

呼び　御歸館。

ト呼ぶ。太鼓、摺り鉦入り、傾城の出の鳴り物になり、爲時光遠、侍ひ長持を擔ぎ、洞九郎附いて奥へ

入る。彌三、伏屋殘ると、向うより里平、奴の形にて、青目の草苅り籠へ紅葉を澤山に打込み、鎌の柄にて大提灯のやうに持ち、若松、襠裲、傾城の拵らへ、駒下駄にて出る。次に賴信、羽織衣裳、紫の置き頭巾、小さ刀、庭下駄、醉つたる模樣にて、若松にもたれかゝり、長き煙管を持ち、出てくる。國平、奴の拵へ、重れ草履にて、紅葉にて葺きたる長柄をさしかけ、主水、振り袖、袴、小姓の形にて、結構なる莨盆を持ち、左門之助、同じく小姓の形にて、結構なる女郎の煙管、莨入れを持ち、禿の見得。和泉式部、やつし赤前垂れ、仲居の拵らへにて、銚子杯を持ち、草履下駄にて、跡に附いて出で來り、花道に並ぶ。摺り鉦入り。

若松　見渡せば、錦に紛ふ照り紅葉、その紅葉にこき交ぜて、眞咲きかける花咲きの、梅の顏見世みな樣の、お顏拜みに又爰へ、お召しに應じて廓から、來つれてつれし八文字。

賴信　梅も紅葉も投げ入れの、水際淸き花魁の、根曳きの松や若松の、松の位は太夫職、木振りに焦れ賴信が、人目關の戶やう〳〵と、越えて願ひのお目見得は、また改まる初舞臺。

國平　初々しいと見たゆゑに、機轉きかして奴めが、ちよつと差出てさしかけた、紅葉色づく毛氈の、赤きは一陽來復の、陽氣凝つたる色一座。

里平　若い者やら廻しやら、大提灯に草籠を、見立てたところはまんざらでも、內證身分の一千里、丁

主水　度その名も虎藏と、改名したる云ひ譯も、爰に祝ひし祝ひ事。

左門　祝ふ千歳の松一木、實生えの松の緑とは、禿の名にし大寄せに

和泉　對の小姓が間に合ひの、禿めいたるとりなりは、睦まし同士の小大和屋。

　色の所譯ももつれたる、口舌の中の仲々も、解けて結びし替へ紋の、結び柏も若葉して、色に出

　かゝり紅ゐの、赤前垂れの仲居役、仲睦まじき重年に

賴信　新参古参打交り、不調法なる我れ〳〵が、願ひも風の葺屋町。

國平　花立つ春の歌舞伎の正月。

和泉　太夫さん

若松　そんなら皆さん、ござんせいなア。

　ト鳴り物の切れにて、この人數殘らず本舞臺へ來り、賴信は眞中の二疊臺の上に坐る。皆々並よく住ふ。

彌三　我が君賴信公には、只今御歸館遊ばされましたか。

伏屋　いつ〳〵よりも今日は、御寵愛の若松どの、御同道遊ばされ、また一層の、お慰みでござりませう。

國平　イヤモウ、お庭の紅葉の御趣向、たべつけぬ下郎なぞが、廓めかした若い者。

賴信　二人禿も間に合ひの、小姓どもを見立てたは、なんと大將も、まんざらではあるまいぞよ。

里平　左やう〳〵、油斷のならぬ賴信さま、この下郎めも、一番落を取るべいと、御覽じませ、紅葉の籠を提灯とは、なんと近年の思ひつき。この間の茶番の趣向とは、また違うたものでござります。

左門　それも大方餘人の指圖、其方が案じではあるまい。なう、主水どの。

主水　左門どの〳〵仰せの通り、よもや里平が思ひつきではあるまい。外に作者があると見えます。

里平　これはしたり、小姓方、毛頭外から指圖はござらぬ、と云ひたいが、二人の衆が云ふに違ひなく、身共が腹から思ひつきといふては、五文の智慧も無い。それを有ると見せかけても、明るく見抜くは、流石は二軒の大和屋め、栴檀は二葉、三葉は浸しぢやなア。

國平　これサ、何を云ふのだ。イヤ、さう云つても、一の趣向は和泉式部さま、紅ゐの袴を召されるあなたが、赤前垂れの仲居姿は、流石は保昌さまの奧樣ほどあつて、イヤ、感心な儀でござります。

和泉　自らがあられもない、此やうな姿で參りましたは、仔細がござります。夫保昌の心に違ひ、離緣いたされ、館を遠ざけ、目通りとても叶ひませず、逢うて何かのお詫びをと、思ひ附いたるこの出立ち。あられもないと、お下げしみの程も、おはもじう存じまする。

頼信　イヤモウ、常から物堅い保昌が、この度の越度を悔み、石山寺にて祈念と聞きしが、その節失ふ蜘蛛切の太刀、式部が難儀と聞きつるが、ハテ、頼信とても、太政官の御正印、失うたその科にて、日限りのうちに手に入らねば、どうで世になきこの頼信、明日の命も知れぬと思ひ、我まゝ氣まゝの阿房狂ひ。若松太夫を根曳きして、館へ引取り閨の伽。して、保昌は、他行いたしたか。

伏屋　ハイ、兄保昌ことは、奥庭の氏神へ、御武運祈りのその爲に、參詣仕つてござりまする。

彌二　殊更今日繼仲公より、物部の平太有風どの、保昌どのに面談なさんと、先刻よりの入來。もしや我が君、お云ひ號け遊ばされたる、周防の內侍の輿入れを急ぐお使者なるかと、心を痛め居りまする。

頼信　なんの／＼、內侍は勅命による緣談、予が戀人はこの太夫。これはしたり、何やら浮かぬその顏つき、コリヤ、なんぞ又ふさぐ事が、出來たのか／＼。

若松　サ、心にかゝるは今聞いた、あなたの緣談遊ばさるゝ、周防の內侍とやらが

頼信　アヽコレ、周防も大紋も、內侍の事はサラリサツと、西の海へ、流して置きや／＼。

和泉　でも禁庭の勅命といひ、殊には御身の越度たる、太政官の御正印、日延べの日限りも今日限り。殊に劍の行くへも今に

頼信　ハテ、滅入つたる式部が詞。若松といひ兩人とも、浮かぬ顔色。コリヤ、席を變へて酒にせう。
サ、女子ども、奥殿に用意しや。

伏屋　畏りました。

頼信　サヽ、酒宴の催ふし。太夫もおぢや。

ト手を取る。向うにて

呼び　上使。

ト呼ぶ。頼信キッと見て

頼信　ヤヽ、上使とは、ハテ、酒宴の妨げ。悪い所へ。

ト思ひ入れ。

和泉　御上使入來とあれば、この姿にては恐れあり、私しは奥御殿へ

主水　お入りあらば、主水も共に

左門　左門之助はお側にて、

兩人　何かの御用を

和泉　ハテ、しほらしい二人の衆。

ト思ひ入れ。

國平　この國平も、あなたのお供を

和泉　國平、連合ひによいやうに。

國平　心得ました。

里平　下郎も部屋へ

和泉　我が君さま、後ほどお目見得仕りませう。

ト管絃になり、和泉式部、主水、左門之助、國平、里平附添ひ、奥へ入る。また向うにて

呼び　上使。

ト呼ぶ。三味線入り、亂れのやうなる鳴り物になり、彌三、伏屋出迎ふ。揚げ幕より時純、鉢かつら、長上下。跡より保昌、羽織、大小、庭下駄。伊豫助、奴の拵らへにて、鶯の鳥籠を持ち、附添ひ出で來り、花道に住ふ。

時純　關白殿下の上使でござる。誰ぞお取次ぎ頼み存ずる。

保昌　これは思ひよらざる俄の御上使、拙者卽ち賴信が附き人、平井の保昌と申す者。思ひよらざる主君の疑ひ、殊に重寶蜘蛛切の御太刀、行くへ詮議の心願に、步行を運ぶ庭前の氏神、只今下向の

折に臨んで、上使の御入來、直さまお跡に引添ひて、服改めぬ無禮の段、恐れ入り奉つてござりまする。

伊與　お供は卽ち若年の、お側去らずの奴の伊與助、いつもお庭の梅ケ枝に、お放しなさるゝ放生會の鶯、持參仕りました。

時純　跡より我れを見送りの……すりや、其許が源家の忠臣、武功のほまれ世に高き、保昌どのでござつたよな。關白よりの內意の趣き、申し聞かさんが、爰は庭先。

保昌　お請け申すは卽ち拙者。イザ、まづあれへ。

時純　然らば同道仕らう。

ト管絃になり、兩人思ひ入れあつて本舞臺へ來り、時純、上へ通る。保昌、よき所へ平伏する。鶯の籠、よき所へ直し置く。

賴信　平井の保昌、參つたか。

保昌　ハツ、賴信公には、これにお渡り遊ばされまするか。君の御武運開くる心願、社參の度にいつとても、放ち遣はす鶯は、心ばかりの放生會。下向の道より御上使の御供、仕つてござりまする。

賴信　關白家よりの御上使とな。卽ち我れらが館の主、源賴信。

保昌　執權平井の保昌、何事によらず、仰せ聞けられ下さりませう。

時純　いかにも、主人賴信どの、上使に立つたる某こそ、關白家の今參り、室津權の頭時純と申す者、以後お見知り下されませう。罷り越したる上使の一條、謹んで承られよ。

賴信　ハツ。

時純　先達て賴信へ、預け置かれし太政官の御正印、失せたりと奏聞なせしが、詮議の日限りも今日限り。その上源家の重寶たる、蜘蛛切の一刀、紛失との事。彼れこれ越度重なるところ、上をも恐れず賴信には、浮れ女遊女を召しよせられ、日夜酒興に現をぬかし、惰弱の振舞ひ上聞に達し、何かは措いて紛失の御正印、劍の行くへ、相解らぬその時は、賴信の命の瀨戶、氣の毒ながら性根を据ゑ、お請けをおしやれ。返答聞かぬ其うちは、上使に立つたる權の頭、退屈ながらいつまでも、罷り歸らぬ。主從ともに、返答おしやれ。何とでござる。

保昌　御尤もなる御上使の趣き、天下に二つと掛けがへの無き、御正印を失ひし科、遁れがたなき主君賴信。

賴信　詮議の日限りも、今日限り。さすれば命は風前の灯火。

若松　すりや我が君にはその御寶、在所知れざるその時は、あなたのお身を

賴信　散らすも咲くも花筒に、生けしこれなる白梅同然。水際清き源の、水の助けに支へるか。讒者の風に散り行くか。
時純　して、讒者とは源を、拒む輩があるぢやまで。
賴信　いかにもござる。讒者ばかりか殘黨餘類、その寶の紛失も
保昌　天慶の戰ひに、亡び失せたる相馬の將門。又は藤原の純友が
若松　エ。
ト こなし。時純も思ひ入れ。保昌、キッとなつて
保昌　サ、その殘黨の良門、伊賀壽、辛き命を打遁れ、及ばぬ大義の企て事。都の透間を窺ふ輩がござる。この殘黨を召捕らずば、なか〳〵失せし御正印、行くへはよもや
ト 時純へ目を附ける。
まだこの上に、日延べの願ひ。
時純　拙者に致してくれいとな。
保昌　いかにも。
時純　氣の毒ながら日延べの儀は

保昌　叶ひませぬか。
時純　ハテサテ、笑止
保昌　ヤ。

ト思ひ入れ。

時純　千萬に存ずる。

トあざ笑ふ。保昌、頼信は時純へ思ひ入れ。管絃になり、奥パタ〳〵にて、洞九郎走り出てくる。跡より爲時、追ひかけ出て、立廻り。伊與助、立廻つて

伊與　ヤア、尾籠千萬。頼信公の御前、殊に上使のお目通り、立はだかる慮外者、無禮があると、伊與助が赦さぬぞ。
洞九　アヽ、モシ〳〵、私しは何にも、慮外するやうな親仁ぢやござりませぬ。わしは物部の平太さまに、用事があつて參つた者。それをお侍ひ様
保昌　ヤイ〳〵、下郎め、賤しき身にて御前間近く、殊には今申せし物部の平太とやらは、何者ぢや。
爲時　アイヤ、保昌どの、この者が申したる、物部の平太とは、先程おてまへに面談せんと、繼仲公より罷り越したる、御使者と承りしが、何とも以て。

保昌　これは郡司爲時どの、すりやアノ保昌の他行の間

爲時　貴公の歸りを相待ち居つたて。

洞九　モシ〳〵、殿樣、お前それで解りませう。今云ふ通り、その平太さまに、ちつとお目にかゝりたくつて、跡を追つて來ましたのサ。ナニ年寄りが嘘を吐きませう。ちよつと平太さまに逢はせて下さりませ。ハテ、あの人は、どこにござるやら。

トきよろ〳〵尋れる。

爲時　コリヤヤイ、おのれ、合點のゆかぬ奴。承ればこの程も、娘式部が親なりと僞り、騙りに參りし不敵な奴。堤の彌三、引立て召されい。

彌三　心得てござる。老ぼれめ、下がり居らぬか。

ト引附ける。

洞九　エヽ、放さつしやれ。

ト振り切る。彌三、爲時支へる。洞九郎、捨ぜりふにて逃げ歩き、思はず時純が方へ駈けより

エヽ、うるさい手合ひだ。何も怪しい者ぢやアないといふに。

ト思はず時純を見て、膽をつぶし

ヤ、こなさん、爰にござつたか。

ト近寄らうとする。時純思ひ入れ。洞九郎、これに心附かず

モシ〳〵、なぜ見ない顔をさつしやるな。コレ、あの手合ひが、わしを爰には置かぬと云ひまするわな。こなさん、あの手合ひに、い〻やうに云つて下さいな。コレ親方

ト云はうとする。時純、刀を抜いて、洞九郎に立ちか〻る。これにてうろたへ、逃げんとして、鳥籠に突きあたり、踏みかへす。この時、鶯飛んで、上の梅の枝へ飛びゆく。時純、抜いて切りつける洞九郎、花筒の梅の枝を取つて打ちつける。誤まつて前の枠火鉢へ入り、パッと煙り立つ。時純、洞九郎を見事に切り倒す。薄ドロ〳〵にて、抜いたる白刃へ、誂らへの蜘蛛出て這ひか〻る。上の梅の花散りか〻る。鶯、囀る。保昌、時純が白刃、蜘蛛に目を附ける。時純は、梅ケ枝の鶯に目を附ける。頼信、左右へ思ひ入れあつて、皆々キッとなる。これより三味線入り、小太鼓の楽、薄ドロ〳〵にて、梅の花散る。

時純　ハテ面白き鶯の囀り。筒に生けたる一枝の、火中なしたる煙りと共に、梅の香四方に芬々たり。

頼信　これぞ世に云ふ軒端の梅、名木の薫り。

保昌　抜き放ちたる切尖に、絲くりかけて蜘蛛の、白刃の表へ、アレ〳〵〳〵

時純　初春の朝毎には來つれども、逢はずに歸る元の古巣へ。

保昌　我が背子が來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞ひかねて知るしも。

頼信　梅の梢に囀る黄鳥。

保昌　白刃にあり〳〵蜘蛛の振舞ひ。

ト振りかへる。保昌、時純が刀をキツと捕へ

保昌　無禮の下郎が

時純　即座の手討ち。

保昌　血汐に穢れし

時純　刀を清むる

保昌　この花筒の

時純　ヤ。

ト思ひ入れ。兩人キツとなる。鳴り物變つて、保昌、花筒を持つて、時純が白刃へ水をかける。矢張り薄ドロ〳〵。手洗ひの手拭を取つて刀を拭ふ。此うち矢張り蜘蛛はあたりへ這ひまとふ。保昌、思

ひ入れあつて

保昌　燒刃、金色、劍の鍛え、天晴れ業物。

賴信　正しく蜘蛛切。

時純　ヤ。

ト思ひ入れ。振り切つてシャンと鞘に納める。ドロ〳〵打切る。蜘蛛消える。皆々、思ひ入れ。

案内おしやれ。

保昌　ハツ。

ト唄になり、時純、賴信、若松附いて、二重舞臺へ上がり、奥へ入ると、障子下りる。伏屋、彌三、伊與助、下座へ入る。爲時、保昌殘る。

保昌　上使に立つたる室津時純、何とも以て

ト怪しむ思ひ入れ。爲時、側へ寄つて

爲時　保昌どの、娘式部は、何ゆゑ不緣おしやつた。

保昌　こは爲時どのゝ詞とも覺えませぬ。彼れが越度は安からず、蜘蛛切丸を失ひし、その科ゆゑに拙者が離緣、それとも手がゝりござるかな。

爲時　サ、石山寺にて祈念の御劒、失ひしは彼れが越度。さりながら、もし手がゝりござるなら

保昌　そりやその時は呼び迎へ、變らぬ夫婦。

爲時　その手がゝりはコレ、この繪姿。

ト伊賀壽の繪姿を保昌へ渡す。保昌取って

保昌　ドレ。

トよく〳〵見る。この時、和泉式部出かゝり、窺ふ。

こりやコレ先年高島城にて、落城の節の戰大將、伊賀壽太郎成信、面體しるせし人相書………
只今來りし上使の面が

ト思ひ入れ。爲時さし寄り

爲時　今の上使が、繪圖面に似寄りたれば、さすれば室津と變名せしか。

保昌　コレ。

ト思ひ入れ。和泉式部、ツカ〳〵とさし寄り

和泉　この身の云ひ譯立つ便りの、手がゝりなれば、直ぐにわたしが

ト奥へ行かうとする。保昌へだて

保昌　そちや離縁なせし和泉式部、夫の目通り、誰れが許してこれへ參つた。

和泉　エ。

保昌　頼信公を祈念の形代、源家の重寶蜘蛛切丸、失つた不所存者、誰れが許してこれへ參つた。

和泉　サ、去られたゆゑにこの館へ、以前の式部に事かはり、姿も派手な廓の仲居。賤しい姿で參りましたも、この身に誤まりあるゆゑに、恥かしい下々の取りなり。生さぬながらも娘の小式部、妾が事を聞きやつたら、さぞや苦勞に

ト思ひ入れ。

保昌どの、女子のよしない云ひ事ながら、十太丸といふ者、幼少の時よりあなた樣が

爲時　隱まひ育つと巷の取り沙汰。

和泉　もしやお前が純友の

保昌　コレ、去られた女房のいらぬ口出し、扣へて居らうぞ。

トきつと思ひ入れ。揚げ障子の内にて

平太　保昌どの、歸られたか。平太有風、面談いたさう。

ト管絃になり、障子上がる。有風、上下衣裳にて立ち身の出。平舞臺へ下りる。

保昌　すりや其許が繼仲公より、發向ありし

平太　物部の平太と申す者。保昌どのには、初めて御意得申せしが、ちと其許に折入つての頼みがござつて、わざ〳〵と罷り越し、先刻より相待ち居つたて。

保昌　未だ貴殿と某は、知る人にもなりませぬに、拙者への御用とはな。

平太　別儀でござらぬ。離縁なされし式部どのを、身共が挨拶仕る間、なんであらうとこれまでの通り、一對揃ふ御夫婦合ひ。なんと、聞き屆けては下さるまいか。

保昌　ハテ、變つた事に、わざ〳〵其許が

和泉　妾が事を、どうしてあなたが

ト平太を見て

ヤ、其方はいつぞや石山にて、逢うたる下部の

平太　郡平でござる。以前は保昌どのゝ雇ひ足輕、今は平の正盛公のお見出しにあづかり、御覽の通りの立身出世、名も改めて物部の平太有風、只今にては繼仲公に、この身の仕官。それにつけても石山にて、折角手に入るあの一刀。

和泉　エ。

平太　アイヤ、いつ出世立身いたさうやら、誠に下世話に申す通り、水と流れと人の行く末。保昌どのとお連合ひ、式部どのをこれまでの通り。

保昌　婦妻にせよとお云やるのか。

平太　左樣でござる。お氣に入らずと、身共が挨拶。

和泉　妾が事をそれほどまで、心にかける下部の郡平……ア、イヤ、今のお名は物部の平太さま、御深切なる御挨拶、この身の越度は無理ならねど

爲時　身寄りと申すは異なものなれど、折角平太有風さまの、只今のお賴みなれば

保昌　承知いたした。初めて逢うた平太どの、離縁の仲を結ぶ仔細はなけれども、貴殿のお詞に付いて

平太　御承知ござらば滿足千萬。拙者の詞も立ちまして、忝う存ずる。

爲時　御深切の段、拙者も喜び。

和泉　これと申すもあなたのお庇。夫の心變らぬうち、ア、コレ、誰れぞ着替へを

ト思ひ入れ。奥にて

主水　奥樣のお召替へ。

左門　我れ〳〵持參

兩人　仕りませう。

ト管絃になり、廣蓋へ和泉式部の裲襠を戴せ、持ち出てくる。

和泉　こりや、其方達は兩人の小姓、

主水　御用の趣き承り、持参いたしたお召替へ。

和泉　コレ、其方衆も、喜んでたもいなう。

左門　さぞ奥様にも、お喜びでござりませう。

爲時　ちつとも早う、裲襠なりと。

和泉　アイ〱。

ト矢張り管絃にて、兩人手傳ひ、和泉式部、裲襠を着る。

平太　すりや、その兩人はお側にて、貴公が使はるゝ小姓どもとな。

保昌　なか〱左樣。

平太　正しく兩人の其うちに、いづれ一人は十太丸。

保昌　ヤ。

平太　詮議したなら

ト立ちかゝるを、保昌へだて

保昌　アイヤ、平太どの、お頼みゆゑに妻の離縁は、貴公に免じ、其まゝ差置きまするが、して、この上にて某に

平太　サ、御夫婦一對揃はねば、ならぬ今宵の儀式ゆゑ、さてこそ拙者が先へ仲人。

保昌　ヤ、夫婦一對揃はねば

和泉　今宵の儀式と仰しやるは

爲時　して、その今宵の

和泉　儀式とはえ。

平太　周防の内侍のお輿入れ

保昌　ヤ、アノ、俄に今宵

平太　伴なひ申せし高位の姫君。

ト、向うへ向ひ

お乘り物、これへ。

ト向うにて

大勢　ハア〳〵。

ト管絃になり、麻上下の侍ひ二人先に立ち、鋲打ちの女乗り物を擔ぎ、同じく麻上下の侍ひ一人跡に附き、ツカ〳〵と來り、下の方に屯ろする。

保昌　すりや押しかけて今日今宵、周防の内侍の俄の輿入れ。

和泉　それゆゑこそは夫婦一對

ト乘り物に差寄り

平太　揃ふ今宵の待女郎。これと申すも先刻より、伴ふ周防の内侍さま、御輿の内にてさぞや御氣鬱。即ちこれが頼信公の御殿。イザ〳〵、これへ。

せん　そんならそこへ、出ようわいなう。

ト合ひ方になり、駕籠の内より三日月お仙、十二單衣、緋の袴にて、扇を持ち、ツカ〳〵と出て通らうとする。平太、袴の裾を扣へ、思ひ入れあつて

平太　コリヤ〳〵、侍ひ中には、溜りへ參つて扣へて居やれ。

侍ひ　ハツ。

ト供廻り殘らず乘り物を舁かせ、引返して向うへ入る。

保昌　こは存じがけなきお輿入れ。この保昌、當惑仕つてござります。

和泉　妻のわたしも、思ひがけないこのお目見得。

爲時　卽ち式部は拙者の娘。身は敦賀の郡司爲時、好い折柄に居合せ申した。

保昌　源家の執權、平井の保昌、この上ともにお見知り下さりませうなれば、有り難う存じ奉ります。

　ト平伏する。お仙、モヂ／＼とする。平太、思ひ入れあつて

平太　内侍さま、お詞を遣はされませう。

せん　エ。

　トそこらをキヨロ／＼見廻す。

平太　イヤサ、内侍さま、如何いたした儀でござる。先刻も申しまする通り、お詞をナ、ソレ、保昌夫婦へお詞を、ナ、遣はされませうぞ。コレナ、お近附きの爲め、お詞を下されませうぞ。

　トいろ／＼に思ひ入れ。お仙、こなしあつて

せん　アヽモシ、お屋敷さん、初めて逢ひやしたね。お近附きの爲。

　ト懷中より紙を出して投げてやる。保昌、合點のゆかぬ思ひ入れ。平太、心遣ひあつて

平太　これはしたり、その儀ではござりませぬ。ハヽヽヽヽ、こりや大方お乘り物の内にて、上氣遊ば

されたと見えまする。左樣でがなござりませう。サア〱、あれへ入らせられませう。お小姓方
お褥の御用意。

兩人　心得ました。

ト上の方へ褥を敷く。左門之助、結構なる莨盆を直す。

和泉　イザ、まづあれへ。

ト思ひ入れ。お仙、ズッと行つて、褥の脇へ坐る。平太、これを見兼ねて

平太　これはしたり、咋夜あれほど敎へて置いたに

トうか〱と云つて

アイヤ、常々御存じでありながら、今日に限りて、なぜお褥の上へは……………ナ、ソレ、お褥と
はナ、蒲團の事、ナ。アイヤ、お褥の上へ、早うお坐りなされませい。

せん　エヽ、蒲團かえ。立派な裂れだなう。カウ、枕が二つ無えよ。

平太　エヘン〱。

ト咳にて紛らす。

保昌　アヽ、誠に繼仲公の御息女ほどあつて、初々しう思ひ召すは御尤も。御館より外、御歩行とても輿

車。

ト お仙へ目を附ける。

和泉 成る程、お心の結ぼれたも、こりや御尤もでござりまする。何事に依らず私しへ、萬事お心置きなう。

ト側へ差寄る。此うちお仙、莨を吸ひつけ

せん お慮外ながら、サア

ト長煙管を和泉式部へ出す。平太、思ひ入れあつて心遣ひのこなし。

三十二は、のめねえなう。さう云つても、酒むしは氣障だよ。

平太 エヘン／＼／＼。

ト思ひ入れ。

和泉 有り難う存じ奉りまする。

せん コレ。のんで見ねえ、いつそ舌に當るよ。

和泉 ナニ保昌どの、内侍さまのお輿入れの由、賴信公へ申し上げ、御祝言の御儀式を、御用意申しませうか。

保昌　いかにも、我が君へは保昌、直々に申し上ぐる間、爲時どのと式部兩人は、平太どのを一間へお伴ひ申し、よきに饗應いたされよ。内侍さまのお側には、保昌附添ひ罷りあれば、氣遣はずとも其方は奥へ。

和泉　畏まりました、イザ、平太さま、御同道仕りませう。

平大　すりや拙者を、周防の内侍の、お側には置かぬぢやまで。味にひねつた…………ようござる。別間へ同道おしやるなれば、さしづめ兩人の小忰を

ト兩人にかゝる。和泉式部へだて

和泉　ハテ、お側仕への小姓どもを

主水　御用とあらば何時でも

左門　お手鳴らされい

兩人　お客人。

平太　ハテサテ立派な。いづれ一人は十太丸。

保昌　ヤ。

平太　アイヤ、内祝言まで暫く休息…………内侍さま、拙者お側に無きうちは、必らずともに、お含み

でござりませうな。
せん　オット、承知之助。
平太　アヽコレ、そこを物事尋常に
せん　エヽ、しつこいぞヨウ。
保昌　有風どの
平太　保昌どの
爲時　御同道いたさう。
平太　正しく一人は
　　ト寄るを、和泉式部へだて、子役へ
和泉　お供申しや。
兩人　ハツ。
　　ト唄になり、平太、爲時、主水、左門之助、和泉式部附いて奥へ入る。あと合ひ方になり、保昌、お仙へ目を附け、思ひ入れあつて
保昌　アヽ、誠に今日はいかなる吉日やら、思ひがけなき周防の内侍のお輿入れ。俄の儀と申し、御用意

仕らず、不調法なる取まかなひ、さぞかし御待ち久しう思し召されませう。

せん アイ、待ち遠なら、一遍廻つて來ようかね。

保昌 アイヤ、最早頼信、これへ參るに間もございりますまい。サヽコレ、御氣欝なきやう、何なりとお慰みが…………何を申すも武骨の某…………イヤ、失念仕つた。この程は早咲きの梅ヶ枝、早速頼信へ送り下され、殊ない喜び、殊に内侍さまのお歌、頼信も感心仕つてござります。あのお歌は、何と申しましたな。

せん ナニ唄だえ。そゝり唄かえ。

保昌 アイヤ、あのお歌の心の儀でござる。

せん あの唄の心は、なにサ。「ちよつと〱に頼まれて、もう簪はこればかり」サ。

保昌 これは珍らしい歌を承りました、先つ頃頼信さまより、内侍さまへ送りましたる詠歌は、慥か斯樣でござりました。「我が袖の涙に宿る影とだに、知らで雲井の月や澄むらん」と記して送りました。その節、内侍さまのお返し歌は、慥か「さそふとも、我が袖にのみ」とやら、下の句は、とんと失念仕りました。

せん へエヽ、誘ふともとは、あやまるなう。大方それも小指が、水を向けたのであらうの。

保昌　如何ござりますやら。して、内侍さまには、主人頼信を

せん　オヤ、好かねえなう。

ト保昌、思ひ入れあつて

保昌　ハテ、何とやら内侍さまの詞の端、下樣の女に等しき振舞ひ。こりやどうでも

せん　エ。

保昌　愛な内侍の紛れ者めが。

せん　エヽ。

ト悔りする。この時、國平出かゝり、窺ふ。

保昌　心を附けて見るところ、合點のゆかぬ立振舞ひ。よもや誠の内侍ではあるまい。察するところ紛れ者、有やうに、素性を申せサ。

せん　アヽモシ、どうして。

保昌　御身ばかりが企みではあるまい。こりや頼み手がなくては叶はぬ。サ、有體に申すまいか。

せん　サ、それはな。

保昌　その頼み手を白狀せぬか。

せん　サア、それは。
保昌　サア〳〵。
せん　エヽコレ、いつそ氣が揉める。
　ト下の方へ逃げようとする。國平立ちふさがつて
國平　ドツコイ、爰は動かさぬ。内侍と僞り入込む女子、仔細ぞあらん。保昌さま、必ず御油斷なされまするな。
保昌　女ながらも高位のお方と、僞はる曲者、頼み手あらん、吟味いたせ。
國平　畏まりました……サア、頼み手を云ふまいか。
　ト立ちかゝる。
せん　アヽ、モシ〳〵、滅多な事をしなさんな。お屋敷さん、斯う手があがるからは、云つてしまふわな。成る程、わつちやア誠の内侍さんとやらぢやアねえわな。
保昌　さてこそ。して、其方は何者にて、何奴に頼まれた。
せん　アイ、聞かれて話すも、お里が知れてあやまるがネ、云はにやア道行が解りやすまい。わつちや
　ア、アノ、香堂前に苦界して

保昌　浮れ女、遊女の類なるか。

せん　アイ、マアそんなものサ。夜を晝にして忙しい勤め、情を賣つて世を渡る。

國平　して、われが名は何と云ふ。

せん　アイ、香堂前の長屋で、路地を入つて二軒目の、異名を取つた三日月お仙とは、わつちが事サ。

保昌　すりやアノ其方は。ハテナア……………して、お仙とやらは、何者に頼まれて、當館へは入込んだぞ。

せん　サア、その譯は、わつちを連れて來たお屋敷さんが、親方へ立て金して、内侍さんになつてくれろとの事。別してむづかしい話し合ひでもない上に、切りを叩かせさへしなさらずば、出鱈目にやつて見ようと、長屋の勤めを引くが嬉しさ、お先眞暗で來たといふものサ。

保昌　すりや、身請けされて參つたのか。

せん　アイ、身請けといふも氣が強いがネ。モシ、免しておくれ、わつちやア年が明いたら引取らうといふ、女房約束した、源さんといふ男のある身。アノマア勿體ない、頼信さまとやらを騙して、理屈の惡い一つ寢をする話しがあつては、第一源さんに立たねえわな。切りを叩いてその上に、野玉を稼ぐ法もあれ、源さんと三尺店でも持たねえぢやア、どうも達引の惡い事があるのサ。

保昌　こりや的切りと讒者の計らひ。頼信公には、傾城若松に御執心、殊に御身の越度へ附けこみ、似せ者の内侍を拵らへ、頼光公と不和になし、誠の内侍を正盛どのへ、送らんといふ、こりや、計略に極まつたわえ。

せん　何か外のいさくさは存じやせぬが、モシ、譯が解つたら、どうぞ歸しておくれな。

保昌　氣遣ひいたすな。その身の科にはせぬ。さし當つて掛り合ひの女、當館に暫らくとめおき、頼みたい仔細もあれば

せん　そりやマア、何の頼みだえ。

保昌　其方は存ぜぬ事ながら、我が君には、傾城若松といへるをお館へ召され、日夜の寵愛。彼れを遠ざくるには、幸ひの其方、矢張り内侍と僞はつて、頼信公へ差上げ置かば、佞人どもが企みの裏を掻く道理、矢張り一杯くつた振りにて、只今より保昌が、改めて其方を頼む。どうぞ暫らく内侍と僞つて

せん　エヽ、そんならわつちが、化の皮の現はれた事を、あのお屋敷さんへ沙汰なしに、今からお前が改めて、内侍さんになつてくれと云ひなさるのか。

保昌　いかにも左樣。

せん　ようござりやす。どなたにも斯うしてあげるが、わつちが商賣、もう少つとの事なら、内侍さんになつて居やせうが、聞けば輿入れとやらの晩には、是非殿樣と一つ寢をするものと聞きやしたが、なんぼ切りを叩いてゐるわつちでも、そいつはどうか、理屈の惡い話しさね。

保昌　氣遣ひ致すな。身が請合うて、賴信さまと寢させはせぬ。

國平　役目勤めたその跡では、おぬしが思ふ男にも

せん　世話をしてくんなさるか。

國平　そこは奴が請けこんで

せん　エヽ、有り難うござりやす。

保昌　猶この上は、役目が大切。必ずともに仕損じまいぞ。

せん　呑みこみやしたが、内侍とばかり云へばいゝかえ。

保昌　ハテ、我が君に逢うた時、内侍と云ふの忘れまいぞ。

せん　承知しやした。

保昌　然らば奧へ同道いたさう。内侍の御方。

せん　お屋敷さん、首尾よく行つたら

國平　思ふ男に

保昌　添ふ心か。

せん　添はいでどうせう。

保昌　刀にかけて。

せん　詞は

保昌　金鐵。

せん　必ずともに

保昌　其方は周防の

せん　内侍でござる。

ト管絃になり、お仙先に保昌附いて奥へ入る。國平思ひ入れ。

國平　ハテ、合點のゆかぬ。内侍を伴ふ平太有風、素性の詮議が

ト思ひ入れ。奥にて人音するゆゑ

ソレ。

ト管絃になり、下の萩垣を押分け、窺ひ〳〵入る。矢張り管絃にて、若松、駈けて出るを、光遠、追

ひ駈け出で、あちこち捨ぜりふにて追ひ廻し、キット捕へて

光遠　コレ〳〵、太夫。そりや酷いぞよ。これサ〳〵。

若松　エヽ、又しても光遠さん、わたしや今日爰へ召されたは、お前も知つて居やしやんす通り、頼信さんの

光遠　サア、主人の頼信の揚げといふ事は、存じて居る大宅太郎、ハテ、賣り物は買ひ物、そもじが主人の奥方ではあるまいし、野守の里の若松太夫、惚れて通うた大宅の光遠……アイヤ、大宅たといつて、家主ではないよ。矢張り侍ひ。コレ、二本差して居るぞ。主人も惚れて通ふなら、家來も惚れて通ふのだ。主が通へば家來が通ふ。家來が通へば主が通ふ。コレ、いつまで云つても同じ事だ。少しは情を知り給へ。

ト若松に抱きつく。

若松　エヽ、おかしやんせ。家來の身として主人の相方、この若松に阿房らしい、なんとマア、抱きついて

光遠　イヤ〳〵〳〵、若松太夫ぢやによつて抱きつくのぢや。ハテ、定紋は抱き若松、すりや、そもじの方から若松に抱きつけといふ、看板打つたぢやアござらぬか。そこで身共も、抱き若松〳〵。

若松　エヽ、放しなさんせいなア。

ト いろ／＼爭ふ。よき時分より平太、貢盆を提げ、出かゝり居て、これを見かね、光遠を引きのける。

光遠　コレ／＼、さう情なくはせぬものぢや。

ト平太を見て

ヤ、其許は平太有風。こりや、身共が戀の妨げを、なぜおしやる。コレサ、貴殿に於ては、身共には大恩ござるぞ。その某へ、なぜ妨げを

平太　イヤ、貴殿の戀の妨げは致さぬが、身共が今日この館へ發向なせしは、かねての內談、下々の女を內侍に仕立て

ト あたりへ思ひ入れ。若松、平太を見て、こなし。

あの賴信めに娶合せ、誠の內侍は、これを種に緣談を變替へ、かねて御心をかけられし、正盛どのへ差上げんとの、拙者が計らひ。

光遠　サ、その目論見は身共も承知。筋目賤しき女を引込み、放埒惰弱と云ひ立てゝ、賴信を押し片附けよと、賴親公よりお指圖……コレ／＼、花魁、賴信どのは內侍と、今宵夫婦の新枕、太夫も我

れらと新枕。コレ、氣は中村の太夫さん、ちよつと爰らで、抱き若松々々。

ト寄り添ふ。

若松　エヽ、おきなさんせいな。内侍さんはありや、表向きの奥様、眞實の女房といふは、この若松ぢやわいなア。

平太　コレ／＼、若松とやら、そりやア惡い合點。周防の内侍は身が同道して、頼信の北の方。腹を立ちやるな、其方は賤しき傾城の身で、武將の弟と、どうして連れそふ。

ト顏を見る。

若松　ヤ、其方は景道。

平太　アコレ、云うては惡いぞ。ナ、モシ、無念でござらう、サ、殘念でござらうが、そこが世の浮き沈みといふものだ。

若松　エヽ、マア、其方は、ようも／＼、わしを

光遠　これサ、太夫、大分氣を揉むな／＼。

若松　これがマア腹が立たいで

ト立ちかゝる。

平太　サ、尤もでござる〳〵。あなたの、イヤ其方のナ、その戀人の頼信へ、周防の內侍を伴ひ來りし身共ゆゑ、腹が立たう、こりや尤もぢやが、爰で云つては物が無い。必ず恨みを、ナ、コレ、云うては惡いぞ〳〵。

ト いろ〳〵に思ひ入れ。

若松　エヽマア、其方はなう。

ト 腹の立つ思ひ入れ。

平太　サア、尤もだ〳〵、腹が立たう〳〵。あの內侍は、今宵俄の輿入れ、こりや腹の立つは尤も至極。いつそもじは面當てに、あの光遠どのへ

若松　エヽ、知らぬわいなア。

光遠　成る程、こりや平太どのゝお云やるが尤も。とても叶はぬ賴信へ、心中を立てようより、我らへ河岸を變へるが、ナウ、有風どの。

平太　左やう〳〵、御執心なる傾城若松、身が執持つて進上いたさう。

光遠　それは重疊、何分身共へ色よい返事を

若松　なんの、いらざる執持ち顏。何は差をき、恨みの數々。

ト立ちかゝるを、キッと留め

平太　ハテ、その恨みは頼信どの、尤もなれども女の嗜み、殊に浮れ女遊女の若松、娘子供か何ぞのやうに、コレ、餘人の思惑、ナ、コレ、何かは身共が胸にある。

ト若松を心遣ひにて留める。若松ナッと思ひ入れ。光遠これを知らず

光遠　成る程、貴公の詞の通り、野暮に腹を立てぬがよい。ハテ、相手のない事か、そもじには身が首たけ、そもじの顔は身が立てる。オヽ、頼信への面當ては、身共が色になつてやらう。あまり力を落さぬがよい。ナウ、有風どの。

平太　左樣々々、この若松は身が預かり、口説き落して、貴公へ返事を

光遠　萬事よろしう頼み入る。然らば何分、貴公の執持ち。

平太　色よい返事を

光遠　相待つ、若松。

トしなだれる。若松振り切る。

抱いて寢松としたいなア。

ト唄になり、嫌らしき思ひ入れあつて奥へ入る。若松思ひ入れあつて、ずんと立つて平太を引附け、

顫慄はせ

若松　エヽ、おのれはなう。

平太　御尤もでござります。

若松　コレ、マア、誰れあらうぞ。父は九州にその威を振ふ、藤原の氏、朝敵なれども純友が娘の玉琴年端もゆかぬ自らを、九條の里へ連れゆきて、思ひがけなき勤め奉公、いま淺ましきこの姿、君傾城に沈めしも、みんな其方がなせる業。ようマア其方は自らを、浮川竹に沈めやつたなう。

平太　御尤も〳〵。主君の娘に勤めをさせるも、時世につるれば是非がない、なるたけ養育いたさんと心は逸れど浪々の、殊にあなたの弟君、御幼少の十太丸さま、お顏知らねば主君の片割れ、尋ね申さん其ために、路用にせんと勿體ない、お前を騙して廓の奉公。それを元手に所々方々、若君尋ぬる旅出立ち、京都にさまよふ其うちに、正盛どのへ取入つて、立身出世のこの景道、承れば玉琴さま、頼信どのと云ひ交しござる由、これ幸ひ、拙者とても、主人の敵は頼光一家、近寄らんには屈竟の、今日只今お目にかゝるは、主君の導きたまふところ、何卒御身頼信に近寄り、この景道を手引きさつしやい。父御の敵、頼信兄弟、首引ッ提げん、玉琴さま、手引きさつしやる心はないか。

云ひ交したる頼信さまを、どうしてマア

若松　すりや、頼信さまを討つ手引きを、アノわたしにせいと云やるか。さりながら、

平太　討たねば親御へ立ちますまい。あなたを賣つて金にしたも、斯ういふ手蔓にしようばかり。なんと忠義な御家來でござらうがな。

若松　そんならどうでも、手引きせにや

平太　ハテ、爰で逢うたが天道の、お引合せと思し召し

若松　お居間間近かう

平太　手引きさつしやい。さもないと、不孝者になりませうぞよ。

トきつと云ふ。若松、思ひ入れあつて

若松　そんなら其方の勸めに任せ、頼信さまの御寢所へ。

平太　必ず手引きを、玉琴さま。

若松　長尾新六景道。

平太　コレ。

ト思ひ入れにて、片頬にてニツコリと笑ふ。これをキツカケに唄になり、平太思ひ入れあつて奥へ

入ろ。

若松　思ひがけない今の頼み。殊に内侍の今宵の輿入れ。所詮叶はぬわたしが願ひ、父の仇とはいふものゝ、頼信さまをどうしてマア……アヽ、辛氣な事ではあるわいなア。

ト思ひ入れ。揚げ障子の内にて

頼信　「遠近の、梢かすめる曙は、いづくともなく梅の香ぞする」

若松　ヤア、ありや我が君樣。

頼信　誰れぢや、何者ぢや。

ト唄になり、揚げ障子あがる。内に頼信、褥を敷き、脇息にもたれ、後に腰元三人扣へ、銀の燭臺二つ立て並んであり。頼信、若松を見て

それに居やるは、太夫ぢやないか。

若松　アイ、さうでござんす。

頼信　これはしたり、この寒いに、何をして居やるのぢや。

若松　アイ、見なさんせいなア、あのお庭に咲いた紅梅の花、匂ひ盛りのあの景色。

頼信　それ〳〵、そこに居やつたか。幸ひ〳〵、頼信も最前よりの上使のもてなし、あまり氣鬱いたし

たゆゑ、眺めようと思ふ最中、予もそれへ參つて附合はうか。コリヤ、女子ども、あれへ褥を持て。

女三　畏まりました。

ト合ひ方にて、頼信、平舞臺へ來る。腰元三人、褥と脇息を好き所へ直す。

頼信　時に太夫、この間から其方を、この館へ引寄せての揚詰め、何なりと心に叶ふやうにとは思へども、廓と違うて不自由勝ち。殊にどうやら浮かぬ顏ぢやが、氣合ひでも惡いのか。

若松　アイ。イヽエ、わたしや何ともござんせぬわいなア。

頼信　アヽ、何ともないか。ハテ、どうやら浮かぬ顏の色。皆の者、さうではないか。

腰一　左樣でござります。見ましたところが浮かぬ顏。

腰二　定めてこの冷えまするので、御持病が起りましたといふやうな事でござりませう。

腰三　お藥なと用意いたして參りませうかいな。

若松　イエ〳〵、必ず構うて下さりまするな。わたしや何ともないわいなア。

頼信　コレ太夫、さう云つてもいつにない顏。なんぞ又外に、心の揉める事が。

若松　アイ、ござりまする。心の揉める、腹の立つ事があるわいなア。

頼信　これはしたり、腹の立つ事とは、どのやうな事ぢや。
若松　アイ、今宵輿入れしなさんした、内侍さまの事で
頼信　ヤヽ何と云ふ、この館へ、周防の内侍が、輿入れあつたと申すのか。
若松　エヽ、まざ〱しい、あの顔わいなア。
頼信　イヤ、眞以て内侍の輿入れ、予は存ぜぬ。コリヤ、女子ども、其方達は知らぬか。どうぢや。
腰三　ハイ、先程周防の内侍さまが、御内々にてお輿入れ、保昌の計らひにて、奥殿にお出で遊ばしまするわいなア。

トこのあたりに伏屋、お仙を伴ひ、二重舞臺に出かゝり、窺ひ居る。

頼信　ヤア〱、内侍の輿入れありし事、予に物語らぬ保昌の胸中、何とも以て心得ぬ。ドレ、直々參つて

ト行かうとする。若松支へて

若松　イエ〱、やり申す事はなりやんせぬ。さう云ふお前が惡性ぢやもの、どうしてマア、奥へうかうか。
頼信　ハテ、頼信は知らぬが定。内侍の入來を、保昌に逢うて

若松　イエ〳〵、其やうな事を云うて、内侍さんに逢ひに行かうと思うてかいなア。やる事はならぬわいなア。

頼信　ハテ、疑ひ深い。ちよつと爰を

ト行かうとする。若松、下の方へ引分けて入る。この爭ひを上にてお仙見て居て、同樣にあちこちと思ひ入れあり、平舞臺へ下りて來り、頼信が手を取り、奥の方へ連れて行かうとする。若松、捨ぜりふにて、下の方へ連れ行かうとする。この仕組み二三遍、あちこち引ッ張る。伏屋はじめ腰元三人、同じやうに、この跡に附いて廻る事よき程あつて、ト頼信、お仙を見て

頼信　ヤ、この女子は

伏屋　我が君樣とお云ひ號けのありし、繼仲卿の御息女。

せん　内侍でござる。

頼信　ヤ、なんと。

伏屋　思ひがけなう俄のお輿入れ。その附き人は物部平太有風どの、あなたが即ち大内より、勅命下りし

頼信　すりや、繼仲卿の息女たる、いよ〳〵周防の

せん　内侍でござる。

伏屋　我が君、日頃九條の傾城、若松どのにお通ひなさると、上への聞え。それゆゑにこそ推しての輿入れ。

若松　そんなら、わたしが事を、お上にて聞かしやんして、それゆゑ俄に御婚禮なさるのかえ。エヽ、アタ阿房らしい。コレ、女中さん。いよ／＼賴信さんと云ひ號けの、お前が周防の

せん　內侍でござる。

若松　エヽ、阿房らしい。

賴信　コリヤ、太夫、扣へて居や。何を云うても大内よりのお指圖。無禮ないやう……イヤ、內侍どのには、不思議にもこの緣談。この上とても

せん　ほんに、初めてお目にかゝりやした。いつそモウ、わつちやァ何にも知らねえ。さう思つておくれよ。

賴信　ハテ、內侍どのには、聞き慣れぬ詞使ひ。アヽ、誠に殿上人ぢやなァ。

せん　ナニ、天井を見せつけるえ。

伏屋　アモシ、左樣な御挨拶では

せん　いつそ自烈てえヨウ。

頼信　ハテ、見ると聞くとはきつい相違、さりながら、一旦宣命下りし上は、祝言のまねび、何かの儀式、伏屋は用意仕れ。

伏屋　畏まりました。女中方は、わたしと一緒に……内侍さま。

三人　後程お目見得仕りませう。

ト管絃になり。伏屋に腰元三人附き、奥へ入る。若松、跡見送り

若松　これいなア。祝言の用意ぢやの何のと、阿房らしい。そんな世話して下さんすな。

頼信　ハテ、祝言のまねび、島臺長柄の用意いたさにやならぬわいなう。

せん　長柄とはえ。

頼信　内侍どのと某が、杯ごとの銚子土器。

せん　ヘエヽ、酒かえ。モシ、酒なら砂こしを一升取りにやりなよ。

頼信　これはしたり、内侍どのには、はしたない

ト思ひ入れ。

誠に、今宵内祝言でも致すからは、打くつろいで心置きなう。客心あつては睦まじうならぬもの。さう思うてくりやれ。

せん　なにサ、客心の何もかもいらねえわな。ハテ客人は四つ限りサ。わつちやア泊りは取らねえよ、
頼信　ハテ、珍らしき事を云はるゝが、それが彼の大内にての、大和調でござるよな。
せん　ナニ、大和屋は杜若の家名サ。
若松　エヽ、何ぢややら、お公卿さんの娘御にしては、ほんにきついお轉婆者。それでもお前は、アノ
　周防の
せん　内侍でござる。
若松　エヽ、呆れるわいな。わたしが前で遠慮もなう、主の奥さんにならうといふ、いよ／＼お前は、
　アノ周防の
せん　内侍でござる。
頼信　ハテ、夥しい内侍ぢやの。コレ、太夫、どうでも雲井に近き高家の姫君、また格別のものぢやわ
　いの。
若松　おかしやんせ。たとへ内侍さんでも、わたしを退けて、頼信さんの奥さんには、アイ、わたしが
　ならぬわいなア。
せん　イヽエ、よしてもおくれ、わつちが來ては、さうはならないよ。

若松　ならうが、なるまいが、わたしも廓で勤めの身。お公卿さんの娘御ぢやというて、自由にさせぬが傾城の意氣地。主はわたしが貰うたぞえ。

せん　イヽエ、やる事はならねえよ。貰ふの貰はぬのと、四六屋體の若い衆ぢやアあるまいし、いつそ面倒。殿さん、斯うしねえ、あの子とわつちを、廻しにしねえな。

若松　イエ〳〵、お前に見替へられては、わたしや廓中へ立たぬわいな。

せん　エヽ、お前は廓中へ立つまいが、わつちは長屋中へ立たねえわな。廓々と御大層な。好かねえナウ。

若松　そりやモウ、御所方と違うて、上品ではござんせぬわいなア。

せん　なんだ、上品だの茶瓶だのと、嫌味を云ひなさんな。エヽ、あんまり安くしねえものだよ。

若松　なんであらうと、主の側へ置く事はならぬわいな。

せん　イヽエ、わつちやア内侍だによつて、退かれねえよ。

若松　退きなさんせ〳〵。

ト若松は煙管、お仙は檜扇を叩き立て、爭ふ。頼信、兩方を留めて廻る事あつて、爭ふはずみに、お仙の衣裳脱げて、切り見世女郎の形になる。頼信見て

頼信　ヤヽ、内侍どのゝこの姿。

せん　エ。

ト思ひ入れ。

若松　さもしい形は。

頼信　ハテナア。

ト思ひ入れ。お仙、俯向く。この時、向うにて

侍ひ　下がれ〳〵。

トてんつゝになり、向うより源六、前幕の形にて出て來り、跡より菖蒲革の侍ひ三人、棒を突き、附いて出て來り、花道にて

侍ひ　下がれ〳〵、下がらぬか。

源六　やかましいわな。わしやァ魚屋だから、下がれ〳〵は禁物だよ。ついに下がつた魚に賣らねえよ。ほんの事だが小口もきいて、はした喧嘩の濟み濟ましもする、三田の源さんだよ。呆れた手合ひだ。

侍ひ　慮外者め。下がらぬか〳〵。

ト　てんつゝにて本舞臺へ來り、源六、お仙を見て

源六　オヽ、そこに居るのは、お仙ぢやァねえか。

せん　オヽ、源さんか、よく來てくんなすつたの。

源六　聞きやれな。おぬしを昨夜、この屋敷へ寄越した事を、あの小振めらが宿六に同じやうに、ぴりな事を吐かすから、彼の金で道行を附けても、まだ強情を吐かすから、そんならいゝワ、お仙を連れてくべいと、剛敵に空を云つて來た。サ、川が仕舞つたら早く來や。

侍ひ　ヤイ／＼、我が君の御前とも憚らず、素町人め

三人　下がらぬか／＼。

源六　ハテ、やかましい手合ひだ。靜かにしねえな。そして、野暮な聲だぞ。したが、なんと云ひなさる、我が君樣だえ。そりやァ殿さんの事かえ。イヤ、そいつは、とんだ話しだ。

ト肩の手拭を腰に挾み、揉み手をして

ハイ／＼、御免なされませ。お前樣が、このお屋敷の殿樣でござりまするか。私しがこれへ上がりました仔細は、なんでござります、お話し申せば、惡い理屈でござります。ハイ、御免なされませ……おきやァがれ。白癡が錢湯へ入るやうだ。

ト頼信、思ひ入れあつて

頼信　イカサマ、樣子のありさうな町人。予が一通り聞いてとらさう。下部ども、苦しうない、其方達は、罷り立て〳〵。

侍ひ　ハア、。

ト下手へ入る。

頼信　時に町人、どういふ譯で其方は、この館へは參つたぞ。サ、、どうぢや〳〵。

源六　ハイ〳〵、御免なされませ。左樣なればその仔細を、お話し申せば、高か斯うでござりやす。その女はお前、三日月お仙と云つて、香堂前で切りを叩いて居りやした。私しはお前、魚屋の源六と申して、ほんの事だが、若い手合ひにも立てられやすし、有り難い事には、御近所の衆にも、あんまり憎まれた事のねえ生れでござります。こりやハヤ不思議な御緣で、お近附きになりやす。モシエ、我が君樣とやらえ。お前さん、芝居へでもお出でなすつて、ネモシ、喧嘩でもしなすつたら、わつちが所へ人を寄越しなさいやし、そこは又、源六でござりやす。まんざらあなたの凹むやうな話しもござりやすめえ。モシ、ちつとお遊びにお出でなさりまし。

頼信　イカサマ、人品骨柄、イヤモウ、勇ましい男に見ゆるわえ。

源六　イヤモウ、ぞんざい者でござりやす。お頼み申しやす。へゝゝゝゝ。時にモシ、我が君さまとやらえ。お聞きなさいやし。あの香堂前の長屋へ、アノお侍ひがネ、モシ
　　ト小判の仕形をして
これこを持つて來てネ、雇つて行かれました。
せん　その行く先を何處と聞けば、頼信さまのお館へ、わつちを周防の内侍になれと、立派な襠褂を着させた上、お聞きな、ついぞねえ替へ玉に雇はれて來やしたよ。
若松　そんなら、アノ、内侍さんといふは嘘かいなア、殿さん
頼信　成る程、それで樣子が皆知れた。その女こそ、雇はれ者の内侍の似せ者。
若松　それでわたしも落ちついた。とはいへ、あなたが、ほんまの内侍さんなれば、お前はしつぽり帶紐解いて
頼信　なんの、其方を側に置いて
若松　嘘ばつかり。
頼信　弓矢八幡、刀にかけて
若松　そんなら眞實。

頼信　僞り云はうか。

若松　我が君さま。

頼信　太夫。

若松　オヽ嬉し。

ト頼信に寄りそふ。源六、お仙と顔見合せ、思ひ入れあつて

源六　お仙ぼうや。

せん　源さん

源六　とんだお長屋へ越して來た。成る程、大將といふものは氣紛れなものだ。お屋敷内へ女郎衆を引込んで、朝も晩も引附けて置きなさるは、モシ、お殿樣え、憚りながら少つとお身のお爲めになりやすめえよ。マア第一、町人の息子手合ひでさへ、女郎買ひが好きぢやア、親兄弟に勘當され、揚句の果は友達の居候ふ。まして大將のお前樣が、氣紛れで御覽じろ、ざつと天下が治まらねえといふものだ。お慮外な申し分だが、魂ひを臍の下へ、しつかりと落ちつけて、御思案が肝腎でござりますねえ。

頼信　これは、初めて逢うた町人の源とやら、頼信への意見、惡うは聞かぬ。誠に深切の段、過分に思

ふぞ。

源六　そのお禮で痛み入るやつサ。ハヽヽヽ。

せん　コレ、源さん、ぬし達の事は、お前の出る幕ぢやアねえわな。人さんの事ばつかり、お前、あんまり情がねえよ。

源六　古道具屋の長持ぢやアあるめえし。

せん　エヽ、無駄どころぢやアねえわな。なぜ今朝早く來てくれねえ。

源六　ハテ、おれだといつて、隙人ぢやアねえワ。商賣が魚屋といふものだから、朝がいつち忙がしい。

せん　なんだな、お前も解らねえものだよ。

源六　何が解らねえ。

せん　お前の仕打が。

源六　おきやアがれ。打つちやつて置きやな。

せん　イヽエ、置きやすめえ。人さんの事に構はずと、なぜわつちが渡り引きを附けて、引取つてくんなさらねえ。

源六　ハテ、てめえも、しちくどい者だ。おらア知る通り、嬶アは無し、親仁も阿母もない獨り身だワ。

渡り引きさへ濟めば、おれが内へ連れて行つて、ソレ、大家さんも承知だワ。清八が嚊アを賴んで、長屋を一遍廻らせる分の事だワ。引越し女房同然と思やア、いさくもねえわな。

せん　それに違ひねえのか。コレ、眞面目だよ。

源六　よし〳〵サ。

せん　近所へ顏を出すにやア、あの結城縞の半襟を、掛け直すがいゝなう。

源六　よしサ。

せん　そんなら、忘れねえうちに、斜子の半襟を買つて掛け直すから、早く買つて來てくんねえ。

源六　よしサ。

せん　カウ、騙すとお前、取りつくによ。

ト寄りそふ。

源六　怖いなう、コレ、くされはねえわな。

ト賴信、これを見て

賴信　イヨ〳〵、大和屋に大和屋、くされはねえ。

源六　モシ〳〵、我が君さまとやら、無駄を云ひなさるな。

頼信　イヤ〳〵、これは、くされはないと見えるわえ。どうでも商賣が魚屋、くされはねえのサ。憚りながら、ちつとお身のお爲めになるまい。ハテ、女郎買ひが好きぢやア、親兄弟に勘當され、揚句の果には居候ふ。お慮外な申し分だが、魂ひを臍の下へ据ゑて、よくしつかりと落ちつけて、御思案が肝腎でござりやすにえ。

源六　モシ〳〵、旦那、そりやア惡い。無駄だ〳〵。

頼信　イヤ〳〵、今も今とて某へ意見、きつと承知仕つた。

源六　こいつはあやまるね。併し、大將樣に、意見ぜりふを云はれるだけ、ほんの事だが、わつちだと云つて、まんざら腹からの町人ではござりませぬ。

頼信　して、其方が素性といふ、侍ひの證據があるか。

源六　ハイ、親仁の書いた遺言狀がござりやす。

　ト懐より守り袋を出し、見せる。

頼信　その品、これへ。

　ト書き物を取つて、よく見て

さてこそ、滿仲公に仕へたる、三田の仕と云ひし者、殘し置くこの遺狀。かね〴〵兄君頼光公の

御物語り。聊かの誤まりにて、勘當受けて漂泊なし、武藏の國にて歿りしと聞きつるが、さては其方は、三田の仕が悴よな。

源六　ヘヽヽ、左樣なら私しが親仁は、あなたの御父、滿仲さまの御家來。左樣なれば私しが爲めには、賴信さまは旦那筋、私しは家來でござりますか。

賴信　いかにも。

源六　そいつは、とんだ話しだワ。

賴信　さるにても、心得難きはそれなる女、何ゆゑあつて、內侍と僞はり參りしぞ。

せんサ、それは、お話し申せば長い事。これへ參つた一通り

ト この時、奧にて

保昌　それなる內侍が身の上は、保昌參つて、申し上ぐるでござりませう。

ト管絃になり、保昌、上下に改め、臺に掛けたる刀掛けを持ち、出て來る。

賴信　其方は平井の保昌、內侍が身の上語らんとは。

保昌　先刻俄に內侍の輿入れ、合點ゆかずと存ずるゆゑ、身許の詮議いたせしところ、案に違はぬ讒者の計らひ。附添ひ來りし平太有風、彼奴髭黑の廻し者、事荒立てなば、奧には上使の入來と申し

何氣なう平太を留め置き、下々の女を内侍と申し、あなたへわざと差上げしも、若松どのと君の御仲、裂かん爲の拙者が胸中。君にもそれなる傾城を、身請けなされてお館に置き給ふも、殘黨詮議のよき人質。

若松　エ。すりやアノ、わたしを

頼信　さとくも察せし其方が詞。予が放埒のその起り、推察なして滿足せり。して、携へし一腰は。

保昌　ハッ、あれにて樣子承れば、その町人こそは、源家譜代の仕が悴、お目見得いたせしこそ幸ひ、世になき仕が勘氣御赦免遊ばされ、その悴たる町人を、君の臣下となし給はゞ、草葉の陰の仕が喜び。只管御推擧仕りまする。

頼信　其方が申す一條、兎角は好きに計らへ保昌。

保昌　ハッ…………コレ、聞きやつたか町人、この保昌が推擧なし、武士に取立て得させんが、親の家名を引起す、忠義が第一。侍ひになる所存があるか、どうぢや。

源六　ハイ〳〵、こりやア有り難いあなたのお世話、何しにいさくさを申しやせう。一生お前、魚屋をするよりは、男と生れて、二本づゝも差すといふのは、誠に名聞でござりやす。コレ、嗅ア、聞いたか。今からおらア、あの旦那のお世話で、侍ひになるワ。とんだ話しだの。

せん　オヤ、そんならお前は、お屋敷さんになるのかえ。その時はわつちやア、侍ひの下歯であらうね。したが、内侍さんだといつて、あなたがたを騙した科で、どんな鞍替へに出やうも知れねえ。お前主さんに、いゝやうに渡りを附けてくんねえ。

保昌　氣遣ひ致すな。其方を頼みし平太有風、當館に留め置けば、殊更其方に科は無い。

せん　エヽ、そいつは有り難いね。わつちやア又、とんだ事を頼まれて、しまひには、どう道行が附くかと思つたら、お祟りも來ねえで、こんな嬉しい事はねえよ。コレ、源さん、年明けの時は、こんなに嬉しからうな。

源六　それ／＼、嬉しい次手に、内へ歸ると、直にてめえはおれが下歯よ。時に、その侍ひには、いつ成りますね。モシ、ちつとも早いが勝手でござりやす。併し、今日は日が好いか知らぬ。

保昌　イヤ、後とも申さずこの所で、武士に取立て遣はす印し。この兩腰を、イザ立寄つて、帶刀いたせ。

ト大小を差出す。源六見て

源六　こいつは有り難い。嗅アや、おらア大小を二本貰つたよ。

保昌　帶刀いたせば今よりは、某が傍輩、家名も改め、アヽ、何とやら。

源六　成る程ねえ。侍ひがお前、魚屋の源六でも濟まねえ話しさね。カウ、マア、この大小を差して見せやせう。
せん　折角ぬしのくんなすつたに、差して見せねえな。
源六　見や、おつりきなものだ。どうだ、似合つたか。棒手振りが大小差すとは、大笑ひだ。
保昌　帶刀いたす上からは、親の家名を其まゝに、三田の源太廣綱と名乘り、源家へ忠勤盡されよ。頼信公、天晴れの臣下、おめでたう存じます。
頼信　天晴れ勇士の人品骨柄。ハテ、勇ましい武士ぢや。武士ぢやなア。
源六　左樣なら私しは、三田の源太廣綱と申しやすね。よく覺えて居にやアならぬ。ひよつと尋ねて來てくれた時、知らねえと云つちやア濟まない。コレ、どうだ、立派な侍ひと見えるか。カウツ。
せん　ほんに、立派な侍ひさん、どうか見たやうだによ。
源六　これサ、もうそんな下卑を云ふな。てめえも今から奥樣だワ。おらア侍ひだから、馬に乘るワ。おぬしは乘り物でもあるまい。斯うしべい。玉の輿に乘せべい。おれが馬で、てめえが玉の輿に乘つて、この頃に堀の内へ行くべい。コレエ、、大小を見て物を云や。
せん　オヤ、大小の差しやうが、まんざらでもねえなう。

源六　さう云つても、親仁が昔取つた杵柄だ。てめえもコレ、武士の嗅ァの氣取りでやッつけろえ。コレ、差し鹽梅を見たか。侍ひだから、二本差したワ。何の事はねえ、野郎の燒豆腐だワ。三田の源太廣綱といふ、二本差しの武士が、侍ひだぞ。コレ、下卑のない屋敷者だぞ。

せん　アイ、わつちも屋敷者の女房、三日月お仙……イエ〳〵、その名は跡で附けやせう。なんでも主の、わつちやァ女房でござりやす。

保昌　めでたい〳〵。この上は奉公初めに、申し附くる一條あり。先年亡び失せたる、將門純友の殘黨丹州大江山に會合して、人民を惱ます訴へ。丹波丹後は保昌が領地。この上は彼の地に赴き、高名手柄を現はされよ。幸ひ飾りし御着長。

頼信　門出を祝ふ頼信が、與ふる着替への物の具。

ト二重舞臺に飾りつけある鎧を取つて

源家の武士になつたる印し。

ト差出す。

源六　アヽモシ、何かえ。大小貰つたその上に、鎧兜もくれるのかえ。

せん　ハテ、くんなさるなら貰ひねえな。質草にもならうわな。

源六　これサ、下卑を云ふな。併し、侍ひが鎧を持たぬは、醫者が藥箱を持たねえと一つだわえ。

せん　源さん、お前、着やうを知つてゐるか。

源六　馬鹿を云へ。刺ッ子の絆纏は着たが、鎧を着る仕草は今度が初めてだ。

せん　お前マア、その兜をかぶりねえな。

源六　やらかして見べいか。旦那、御免なさいやし。

ト重たさうに兜を着て、首をいろ〳〵にして

こいつは、とんだ龜の子醫者だ。イヤ、剛敵に重い。革頭巾よりやア剛敵に重いワ。

せん　よく似合つた。お前、その形で、淺草の市に出て、火打ち鎌でも賣るがいゝ。

源六　イヤ、剛敵に重いワ。これでよく戰に働らかれるぞ。一番やつて見ようか。嗅アや、戰の相手になれえ。

せん　おきねえな。人を馬鹿にした。

源六　それでも、戰の稽古だワ。向うから掛つてくると、此方へ飛びのいて、後から切ると、兜で斯う受けて、向うの奴を取ッ捕まへて、斯う投げて、ヤ、よいやサ。

ト一人立廻りをして、後の後見を捕へ、見事に投げる。

オヽ、堪忍しねえ。イヤ、剛敵に肩が張るワ。戦は按摩と首ッ引きだわえ。

せん　コレナ、もう好い加減に歸りねえな。

源六　てめえ、その鎧を提げて來や。

せん　これを持つのかえ。

ト鎧を提げて見て

こいつは、滅相に重いなう。

源六　御大層な。井戸端から一手桶下げると思やア、きつい事はねえワ。

せん　それもさうだよ。

源六　そんならお暇申さう。

せん　さうしねえ。

源六　ハイ〳〵、私しはもうお暇申しやせう。旦那、こりやア大きに御造作になりました。

頼信　然らば直さま丹州へ立越え

保昌　分捕り功名いたされよ。三田の源太廣綱どの。

源六　ハイ〳〵、この上よろしう、お大將様へ。保昌さま

せん　アイ、又お近いうちに。

源六　ハテ、また下卑を云ふな。

せん　こちの御亭主さん

源六　突ッ張りかへつて

保昌　御兩所、おさらば。

せん　ハイ、突ッ張りかへつて

源六　お暇申しやせう。

ト三重になり、源六、兜を着て、大小を差し、不自由なる思ひ入れ。お仙、鎧を重たさうに提げ、捨ぜりふにて向うへ入る。若松、跡を見送り

若松　所詮この身に、疑ひ受けし上からは、頼信さまには添はれぬわたし。保昌さま、覺悟極めて

ト保昌が刀を取つて死なうとする。

保昌　ヤレ待て、何ゆゑ

若松　イヽエ、放して

ト立廻りながら三人、二重舞臺へ上がり、よろしくあつて

頼信　こりや頼信への面當てに、自殺なすのか。

若松　保昌さまのお詞に、身請けありしは人質と、仰せありしはこの身の素性察せしなれども女童の、命にかゝはる事あらんや。卽ち君の側室の其方、身請けなしたる年季證文。

ト懷中より書き物を出し、若松へ渡す。この時、下の方緣の下へ、平太、左門之助を抱へ、忍び頭巾をかむり、窺ふ。若松、書き物を開く。伊賀壽の人相書ゆゑ、驚く思ひ入れ。上の方、萩垣より、光遠窺ふ。

若松　こりやコレ伊賀壽が人相書。

保昌　覺えがござるか。

若松　アイ、父に仕へし

頼信　さては主君の

保昌　娘玉琴。

頼信　知らぬ事とて

若松　エ。

ト思ひ入れ。平太、下家にてこなし。

主水　さては姉上。

ト奥より主水、走り出て取りつく。

若松　ヤ、、そんなら其方は

保昌　見知らぬ弟。

平太　すりや、違うたか。

ト左門之助の顔を見る。

頼信　今のは床下。

保昌　コレ。

ト主水を手早く鎧櫃へ打込み、しやんと蓋をする。この時、上の障子屋體より時純、窺ふ。途端に向うにて

呼び　勅使。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れあつて

頼信　ヤ、、思ひ設けぬこの館へ

保昌　上使入來の今日只今

時純　又ぞろ勅使と沙汰するは、何とも以て。

光遠　時純どのか。慥かに爰に

ト鎧櫃へかゝる、頼信見事に立廻りあつて、光遠を當てる。保昌振りかへり、時純を見る。時純、障子をシヤンと閉す。若松、床の下へ思ひ入れ。平太、下より小石を取つて打ちつける。燭臺にあたり、灯消えて倒れる。光遠きつと坐る。保昌、鎧櫃を押へる。この途端、一度に木の頭。皆々思ひ入れ。

向うにて

呼び　勅使っ

ト呼ぶ。キザミにて拍子引附けると、ツナギにて下り葉になり、引返す。

幕

本舞臺三間の間、結構なる本御簾を掛けたる高足の屋體、左右に照り蔦からみし萩垣、爰に和泉式部、裲襠衣裳にて、手燭を持ち、伏屋初め腰元三人、めい／＼手燭を持ち、舞臺並よく棹に並び、出迎へゐる。下り葉にて鷹揚に幕明く。

ト また向うにて

呼び　勅使」

ト呼ぶ。三味線入りの下り葉になり、バタ／＼にて向うより平太、左門之助を引ッ抱へ、出てくる。これを行長、冠り装束、公卿の形にて、平太を押し戻して出てくる。仕丁四人、勝色帽子、沓臺、參内傘を持ち出てくる。平太、思ひ入れあつて

平太　見奉れば高位の御方、夜陰に及んで勅使の訴へ。さてはあなたは當館へ。

行長　暮れに及んで俄の勅諚、歩行の路次に怪しき武士、小兒を同道いたす樣子、仔細ぞあらん、何とぢや。

平太　サ、この小倅を連れたる仔細は

行長　包むは曲事。そこ下がれ。

ト また鳴り物になり、ぢり／＼と跡退りに來る。皆々舞臺へ來る。和泉式部、平太を見て

和泉　ヤ、お前は平太有風どの、左門之助を

ト かゝる。ちよつと立廻りあつて、行長、二重舞臺の二疊臺へ上がる。

伏屋　勅使の御前

女皆　式部さま。
和泉　ハツ。
ト平太を留めながら平伏する。
私しは保昌が妻
行長　和泉式部とは、おことが事か。して又おのれは何者なるぞ。
平太　拙者は繼仲の館より、周防の内侍を警固の武士、物部の平太有風と申す者。
和泉　下々の女を内侍に仕立て、當家に入りこむ有風どの、企みの一々有やうに。
平太　それも平の正盛と、謀し合せし内侍の似せ者、手の上がつたる歸りがけ、即ち土産かこの小忰、
正しく隱まふ純友が
左門　我れこそ一子の十太丸。
和泉　アヽコレ、その名を滅多に
ト駈け寄る。
平太　さてこそ實名。
ト思ひ入れ。

行長　こりや無禮なる勅使の目通り、式部物部の兩人は、皆私しの爭ひにて、勅使の趣き取次ぐべき、館の附き人保昌は、出合はざるか、ナ、なんと。

ト御簾の内にて

保昌　即ちお請けは平井の保昌、つぶさに承知仕つてござります。

ト小鼓の合ひ方になり、御簾上がる。保昌、ツカ〱と下りて來り、平伏する。

行長　すりや、其方が源家の忠臣

保昌　數なりませねど平井の保昌、お請け申すは拙者が役目。勅使の趣き一通り、仰せ聞けられ下さりませう。

行長　いかにも。今宵俄に發向せし、勅使は即ち櫻町中納言行長、禁庭よりの勅諚。

保昌　ハツ。

行長　勅諚の趣き外ならず、先達て賴信へ、預け置かれし太政官の御正印紛失、詮議の日延べ願ひのうち、祈念に用ゆる源家の重寶、蜘蛛切丸も石山にて、奪ひ取られしと巷の取り沙汰。かゝる大切の重寶を、取失ひし賴信、酒宴に長じ、傾城遊女を館へ引入れ、上を恐れぬ身持ち放埒。何は兎もあれ太政官の御正印、詮議の日延べも今日限りに、いま在所の知れざる時は、賴信に生害す、

め、首級を持參し、奏聞とげよと、仰せの趣き右の通り。よきにお請け致してよからう。

和泉　すりや、失せ給ふ御正印、今日今宵手に入らねば、我が君樣の御首、討ち奉れと勅使の趣き。

保昌　所詮今日只今まで、在所知れざる御正印、差上げますお請けの儀は

行長　出來ぬと申すか。

保昌　なか／＼左樣。

平太　在所知れねば賴信の寂滅。保昌どの、ア、、近頃以て。

ト思ひ入れにて笑ふ。

保昌　貴殿は平太有風どの、內侍の似せ者同道なせし、こなたも詮議が殘つてあるぞ。

平太　イヤサ、內侍と僞はり、下々の女を連れ參りしは、この家を詮議のおとりにもと、乘りこむ手蔓の一手段。純友が悴十太丸、隱まひ置くと聞いたゆゑ、ツイ横道から附け込んで、手蔓を書いたこの狂言。悴十太丸であらうがの。

和泉　どうしてその子が……そりや我が君の側仕へで。

左門　イヤ、某は純友の

ト云はうとする。

和泉　アヽコレ、滅多な事を云ふまいぞ。
平太　又云ふ我れと我が身の素性。
　　　ト立ちかゝるを、行長、思ひ入れあつて
行長　扣へい物部。
平太　アイヤ、朝敵純友の血筋の者、この家に隠まひ置くゆゑに、拙者が詮議の
　　　ト又かゝる。
行長　默れ有風、よし朝敵の忰たりとも、寛仁大度の上の政道。殊に名智の保昌が、誤まりある事なし置かんや。いらぬ助言聞き苦しい。但し其方、純友にゆかりの者か。
平太　アイヤ、全く以て。
行長　然らば其まゝ差置き召されい。
　　　ト思ひ入れ。
平太　仰せの趣き、恐れ入りましてござります。
保昌　行長卿へ保昌が、密々申し上げたき一條あり、式部を初め女ばら、席に叶はぬ、次へ立て。
和泉　左樣ござらば妾は次へ。左門之助も、自らと一緒に。

ト手を取る。

平太　アイヤ、その小倅には詮議があるぞ。

保昌　イヽヤ、詮議は、おてまへにもかゝりますぞ。

平太　ナニ小ざかしき詮議呼はり。身が詮議より、手廻りに使ふ、小倅の十太丸、身共が詮議しぬいて見せうワ。

保昌　然らばそれまで、有風どの。

平太　平井の保昌。

保昌　式部、よしなに馳走しやれ。

和泉　畏まりました。女子ども、あなたのお側を、ナ、心得たか。

女三　奥の一間へ。

平太　その馳走には。

ト立廻り、ちよつと思ひ入れ。管絃になり、平太先に、こなしあつて、和泉式部、左門之助の手を取り、伏屋その外腰元附いて奥へ入る。あと合ひ方になる。

行長　他聞を憚り行長へ、申すべきその一儀は。

保昌　勅の趣き、承知いたしてござれども、今日までも在所知れざる御正印、差上げませぬその時には
賴信公の

行長　首打ち落して、渡し召さるか。

保昌　お痛はしくは候へども、源家の榮えを存ずる某、主君ながらも御首討つて

行長　麿に渡すか。

保昌　イヽヤ、上使へお渡し申さう。

ト管絃になる。

行長　ヤヽ、なんと。

保昌　はや先達て關白より、當家へ内意の上使の入來。それに又ぞろ賴信の、首討ち渡せと勅下り、いづれへ返答仕らん。この儀、保昌は、何とも會得仕りませぬ。

行長　すりや、麿より最早先に、上使の者來りしとや。彼奴心得ぬ曲者ならん。行長、勅使に相違なきしるしにはこれを見よ。

ト三建目に拾ひし扇を出し

越度これある賴信は、身持ち放埒惰弱の振舞ひ。任に下りし賴光も、關東下向と僞はり、桂姫

と不義密通、證據は卽ちこの扇。

保昌　すりやアノこの扇は、粧姬の御所持ありしを、行長卿の御手に入り、賴光不義の證據とな。戀歌と共に繪は松ヶ枝。

行長　操正しき松の繪は、疑ひもなき不義の證據、さすれば武將賴光にも、疑ひかゝらにやならぬ道理されども事を穩便に、見逅しくれんは大の蟲、助けて殺す小の蟲。弟賴信に科を負はせて腹切らせ、首を磨へ、渡すか保昌。

保昌　サ、その儀は何とも、この場のお請けに。

行長　云はぬに於ては賴光諸とも、不義の刑罪、奏聞遂げうか。

保昌　サ、その儀は。

兩人　サア〳〵〳〵。

行長　保昌、返答は何と。

トこのあたり、正面の御簾を上げ、時純窺ふ。

保昌　お渡し申さう。

行長　寶を渡すか、但しは首級か。

保昌　頼信どのゝ首を討つて
行長　麿へ渡すか。
保昌　後夜の時計の鳴るを合圖に
行長　すりや、頼信の首を討つて
保昌　お渡し申さう。
時純　しかと首討て、平井の保昌。
保昌　ヤ、貴殿は上使の
時純　室津時純。
行長　ア、其方が
トきつとなる。また管絃になり、時純下りて來り
時純　上使の拙者が入來の後、又も勅使の行長卿、云ひ譯立たぬ頼信の、首討ち御持參なさるゝとは、心得がたきその勅諚。この時純が受取り歸るは、上使の役目、貴公のお手は借りませぬ。
行長　イヽヤ、其方は關白職よりの内意の上使、麿は朝家の役目を崇むるこの行長、勅命うけてこの家に來れば、頼信が首持參なすが、麿が役目。

時純　イヽヤ、拙者が改めて、受取る役目。青公卿ばらの指圖は受けぬ。
行長　立ちや〳〵、時純。中納言行長に向ひ、詞を返すは奇ッ怪千萬。
　　ト時純へ打つてかゝる。保昌へだて、立廻り。行長、懷中より繋ぎ馬の旗を落す。保昌取つて
保昌　御懷中より繋ぎ馬の
行長　ヤ。
　　ト手早く懷中するとて、持つたる扇を落す。
時純　旗を所持する
　　ト寄らうとするを、以前の扇にて、さん〴〵に打つ。時純、この手を取つて
ヤア、緩怠至極の行長卿、上使の室津時純を、笏の笞と思ひの外、大内官女の手に觸れし、戀歌の書ある扇面にて。
　　ト立廻り。扇をもぎ取り、よき所へ捨てる。保昌取上げ、開き見て
保昌　大江に名立たる一木の松に、近江の湖水を描ける扇面、しるせし歌は「我が戀は、あらはに見ゆるものならば
時純　都の不二と云はれなましを」。

保昌　都の不二は比叡の山。
時純　湖水を眼下に我が立つ杣、都鎭護の比叡の山より
保昌　はるかに見下ろす
時純　平安城。

ト保昌、開きし扇を好き所に置く。

行長　ヤ、なんと。

トきつとなる。これより誂らへの鳴り物。

保昌　過ぎし承平二年の事、伊豫の國にて藤原の純友、及ばぬ謀叛の企てありしに
時純　その頃威勢を振ひたる、下總の國猿島郡に、内裏を建て、新都を築き、おのれとのぼる平親王。
行長　その將門も情なや、藤代川の一戰に、秀郷が矢表に、あへなく落命。

ト無念のこなし。

保昌　六十餘州を併呑せんと、東西企みし謀略も、事成る時は純友は、關白職と約束なし。
時純　將門、頭に金冠戴き、身には羅綾の衣をまとひ
行長　一天四海を一まねき。

時保　ヤ。
　　ト思ひ入れ。行長こなしあつて、落ちたる扇を取つてキツとなる。
行長　君子の德は風なり、小人の德は草なり、草に風を加ふる時は、草木も伏して一天下に、望みをかけるこの扇を以てさし招がば、その望み叶はざらんや。
保昌　して、お勅使には、さほどの大義を
行長　アイヤ、いま兩人の詞についての戲れも、時にとつての一興々々。
時純　後夜を今宵に賴信が、首受取るは上使の役目。
行長　イヽヤ、勅使が受取らう。
保昌　イヤ、お勅使へは保昌が、お渡し申す首級がござる。
行長　麿に渡す首級とは。
保昌　この席にて沙汰ありし、將門が忰なる、將軍太郎良門が、首級をお渡し申しませう。
行長　ナニ行長に、良門の首渡さんとは。
保昌　只今お渡し申す良門へ、繩をかけて御覽に入れん。方々、計らひ申されい。
彌三　ハツ。

ト奥より彌三、里平、捕り手四人を隨へ、小手脚搦、十手を持ち、出て來り

彌三　將軍太郎、腕廻せ。

里平　尋常に腕廻せ。

皆々　捕つた。

ト行長を取卷く。時純、これに構はず悠々と二重舞臺へ上がり、莨のみ居る。行長、思ひ入れあつて、

行長　ヤア、心得ぬ保昌が振舞ひ。この行長を良門なりとは、何を證據に。

保昌　默れ、勅使の紛れ者。誠の上使の入來も知らず、うか〳〵來るは籠の鳥。おのれら如きに賴信公の、首級をやす〳〵騙らるべきか。嘴青き小童めが。

行長　すりや、其方は行長を

彌三　將軍太郎良門と、保昌どのが目角に違はぬ紛れ者。

里平　勅使の似せ者、腕廻せ。

行長　慮外緩怠、下郎の分にて。

ト彌三里平を左右へ引退け、むらがる捕り手を見事に投げる。立廻りのうち、前の旗を落す。この時

奥より國平、上下衣裳に改め、走り出で、素早く旗を取る。

彌三　常陸之助、お來やつたか。

國平　さてこそ勅使の懐中に、繋ぎ馬の旗を隱し持つたるは、只者ならぬ行長卿、實名包まず白狀あれよ。

行長　イヽヤ、この身に覺えなき、良門呼はり、無禮であらうぞ。

保昌　たつて云はねば常陸之助、その旗、引裂き捨てさつしやれ。

國平　心得ました……サア、有やうに白狀なさねば、繋ぎ馬のこの旗、これにて引裂き捨てようか。

皆々　サア〳〵〳〵、返答は、どうだ。

行長　サア、それは。

保昌　白狀するか。

行長　サア。

國平　旗を裂かうか。

行長　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

保昌　良門なりと、名乘つてしまへサ。

行長　エヽ殘念な。戰場ならでは名乘るまじと思ひしに、保昌が眼力に、見顯はされし上からは、今こそ名乘るぞ、よつく聞け、桓武天皇の皇子、葛城の親王より四代の後胤、常陸の大掾國秀が弟、平親王將門が一子、將軍太郎良門が御面相を、よつく拜み奉れ。

皆々　さてこそな。

行長　勅使となつて入りこみしも、賴信の首討つて、あはよくば蜘蛛切丸を、我が手に入れんと思ひしに、斯く見顯はされし上からは、保昌、觀念。

ト打つてかゝる。立廻り。組子を切りちらし、國平が持つたる旗を奪ひ取り、手水鉢を踏臺にして、網代垣を飛び越え、落ちゆく。

彌三　ヤア、良門を取逃がしたか。

保昌　四方を圍んで、組みとめ召され。

皆々　ハツ……捕つた〳〵。

トどん〳〵になり、皆々奥へ駈けゆく。時純、矢張り眞のみゐる。

時純　保昌どの、折も折とて

保昌　いかにも貴殿の御挨拶、搗て〻加へて折惡しき、只今の仕儀。お上使への手前、氣の毒千萬に存じまする。

　　ト二重舞臺へ上がる。

時純　イヤモウ、推察いたしてござる〳〵。

　　トこの時奥にて、時計の五つを打つ思ひ入れ。

保昌　ありやモウ初夜の時計。

時純　後夜と云つても僅か一時。いよ〳〵頼信の

保昌　すりや御首を

時純　打とめ召さるか。

保昌　サアそれは。

時純　但し失せたる御正印、差上げ召さるか。

保昌　サア、その儀は何とも。

時純　然らば後夜の鐘までに

保昌　主君ながらも

時純　首を討ちやれサ。
保昌　承知いたした。
時純　それも古手の身代りは
保昌　ヤ。
時純　決して御無用。
保昌　正眞正銘
時純　頼信の
保昌　お首をしかと
時純　受取り申さう。

トこの時、早めたる貝太鼓。

呼び　エヽ〳〵オヽ。

ト鬨を上げる。保昌、思ひ入れあつて

保昌　良門召捕る組子の手配り。
時純　あの聲が。

保昌　いかにも。

時純　ハテ、仰々しい。

ト煙管にて灰吹を打つ。チヤン、と唄になる。兩人見得。バラ〳〵と御簾下りる。ト鷹揚に道具ぶん廻す。程よくドン〳〵になる。

本舞臺、正面、伊豫簾を掛けたる草葺き丸太柱の東屋、所々に植込み、石燈籠、うしろ黑幕、庭先の疊。こゝに行長、以前の形。衞士四人、白張烏帽子の形にて、突棒、刺叉にて取卷きゐる見得にて、道具とまる。

四人　良門、動くな。

行長　小癪な匹夫等、將軍太郎が立歸る、路次を支へる無禮緩怠、おのれ等一々睨み殺すぞ。

衞一　小癪な大言ほざくとも、保昌どのゝ指圖を受け、取圍んだる上からは

衞二　朝敵相馬の將門が、叛逆うけつぐ太郎良門。

衞三　尋常に腕廻せ。

四人　サア〳〵。

行長　おろかな事を吐かす奴等、うぬらに捕らるゝ良門ならず、ならば手柄に搦めて見ろ。

衞一　召捕る良門。ソリヤ。

三人　やらぬワ。

ト行長にかゝる。立廻りあつて、よき所にてキッカケ、皆々白張を脱ぐ。四人一樣の形になり、キッと見得。これより夕方の鳴り物になり、遠寄せなりの鳴り物にて、行長、四人相手に立廻りあつて、皆々逃げて入る。良門、追ひかけんとする。時純、庭下駄、手燭を持ち出て、とゞめ

時純　良門待て。

行長　なんと。

時純　汝この家に某ありとも知らずして、迂濶に入りくるうつけ者、名も無き官人糺式の、下郎に縛しめ捕られんより、今日の上使の室津時純、身が繩かける、腕廻せ。

行長　ヤア、云はれざる京家の武士、公卿侍ひの汝等に、組みとめられんや、そこ立去れ。さなきに於ては

ト摑みかゝる。時純、手裏劍を打つと、行長が腕に立ち、タヂ／＼となり、立廻りにて小柄を抜き

事をかしき小柄のあしらひ。将軍太郎良門に、生くら刃金が立たうと思うか。たわけた事を。

ト小柄を拔く。

時純 ハテ勇ましき汝が生立ち。さはいへ、助かり難き朝敵良門、縛しめ捕るぞ。

行長 小癪な………覺悟。

ト切りつける。時純立廻つて、行長を引附け

時純 サア、動かれるなら動いて見よ。

行長 エヽ、殘念な。僅かなれども急所の痛手、自由ならざる故にこそ、汝等如きに叶はぬか。エヽ、口惜しい。されども宗津權の頭、我れを縛しめ高名なし、恩賞うけよ。サヽ、ちつとも早く、縄かけいサ。

時純 ナニこれしきの高名手柄。さはいへ朝敵將門が

行長 血脈うけつぐ太郎良門。

時純 似せ良門の紛れ者めが。

行長 ヤ、なんと。

時純 將軍太郎の似せ者めが。

行長 ヤア、默れ時純。桓武天皇の正統、平親王將門が一子、將軍太郎を似せ者とは、

時純　吐かすなおのれ。似せ者なりと見極めしは、この身の打ちし手裏劒の、腕に立ちしが慥かな證據將軍太郎は將門が、血筋を受けて不死身の五體、刃物の立つべきいはれあらんや。うつけ者めがさりながら、良門なりと僞つて入りこみしは、相馬の身内に極まつたり、サヽ、包まずその名を吐かすまいか。

行長　流石は室津權の頭、腕に立ちし小柄より、似せ者なりと見極めし上からは、何をか包まん、相馬の身内に於て、御厨が一子。或る時は野に伏し、山に生ひ立ちしゆゑに、鬼同丸と名を呼んで、浮世を狹く人となり、斯くまで巧みし今日只今、見顯はされし絶體絶命。これぞお家の重寶たる繋ぎ馬の旗。

ト以前の旗を出す。

時純　さてこそ一族。まこと將門が家に傳はる、繋ぎ馬とや。

行長　相馬内裡の滅亡の砌り、行くへ知れざる良門公。ほのかに聞けば關西にて、義兵の企て、これ幸ひと、紛れ入りこむこの館。もし天運に叶ひ、賴信が首を取らば、直さま主君の在所を求め、また運盡きて顯はれなば、良門と名乘つて生害なし、源家を計る愚臣が寸忠。その間に主君良門公、軍勢兵糧手番へなく、用意をさせん我が計略。さてこそ勅使と僞はつて、上使のおことがあ

るとも知らず、頼信が首を取らんと入りこみしに、貴殿に斯くまで見顯はされ、大望忽ち水の泡。
エヽ、口惜しやなア。

トきつとなる。時純思ひ入れあつて

時純　若者ながらも天晴れの武士。すりや其方は良門と名乘り、討死なすべき心底か。
行長　おんでもない事。主君の身替り、腹かき切つて、

ト刀を腹へ突き立てんとする。時純、その手を捕へて

時純　コリヤ、うろたへ者めが。
行長　生害なすを、うろたへ者とは。
時純　將軍太郎が、なんで腹切るのだ。
行長　ヤ。
時純　將軍太郎は不死身の血筋、其方爰にて生害なすとも、無名の劍に命を落さば、似せ者なりと直ちに取り沙汰。そこに心が附かざるか。うろたへ者めが。
行長　實に誤まつたり。貴殿の詞。無名の劍で腹切らば、いかさま不死身とよも云ふまじ、そこに心が

ホイ。

時純　これにて腹切れ。

ト一刀を差出す。

行長　これで切れとは。して、この刀は。

時純　源家の重寶、蜘蛛切丸。

行長　すりや、この劍が、紛失なせし

時純　頼信武運祈りの爲、その形代の一刀、石山寺にて不思議にも、我が手に入つたる蜘蛛切丸、これにて生害なすなれば、不死身の五體を損なふ道理。良門なりと云はんや治定。生害なさばこの劍汝に渡さん。とく受取れ。

行長　ドレ。

ト取つて拔きかける。薄ドロ〳〵にて、蜘蛛現はれる。

さてこそ燒刃に蜘蛛の形、あり〳〵と見ゆるは、蜘蛛切丸の一刀に、違ひはあらじ、喜ばしや。然らばこれにて生害なさん。さはさりながら貴殿の胸中、劍を所持する御身は、源家に、恨みのきざしあつての事か。

時純　いかにも、上使と云ひ立て入り來りしも、後夜の時計に頼信の首、取つて歸れば其方が、願ひも

行長　少しは叶ふの道理。我れも名乘れば九州にて源家の爲に亡びたる、もしや伊豫の

時純　コリヤ………我が姓名は

ト思ひ入れあり。前の砂へ書いて見せる。

行長　さてはおことが

時純　コレ、祕すべし〳〵。

行長　エヽ、嬉しや、喜ばしや、我が片腕の貴殿の家名、いま生害いたすとも、敵へ渡さぬこの御旗、何卒主君の在所を求め、手渡しあつて、この場のあらまし。

ト肌を脱ぐ。

時純　氣遣ひ致すな、やがてめでたくめぐり逢ひ、旗を渡して其方が存念晴らさせん。最期を清う

ト旗を卷いて懷手する。

行長　云ふにや及ぶ。

トこの時、國平窺ひ出て

國平　良門、捕つた。

ト十手にてにてかゝる。行長、立廻りにてキット留める。時純、氣を替へ

時純　身が手に及ばぬ、これなる良門、怪我せぬうち

ト東屋の内へわざと退く。

國平　この國春が召捕つて。

ト立廻り。この時、奥にて四つの時計聞える。

時純　後夜の時計が頼信の、知死期の刻限。

國平　ナニ我が君のお身の上。

ト思ひ入れ。時純キツとなる。チヨンと知らせ、簾バラ〳〵と下りる。行長、勢ひこんで

行長　イデ、切り拔けて。

國平　良門、捕つた。

トどん〳〵烈しく、立廻りあつて、兩人キツと見得。この時、四つの時の太鼓にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の御簾屋體に戻る。平太、若松と主水を引附けてゐる見得にて道具とまる。直ぐに管絃になる。

平太　サア、玉琴どの、最前身共があれ程まで、牒し合せし合ひ圖の手番へ、こなたは戀にほだされて
よくも賴信其まゝに、見遁したる上からは、この小丁稚こそこなたの弟、十太丸と白狀させ、又
も出世の種にする。いよ〳〵こなたの弟か。

若松　サ、藁の上より別れしこの子、見覺えはなけれども、情ある保昌どのゝ計らひにて

主水　その朝敵の純友が、實の悴と常からわしに、保昌どのゝ教へ事。

平太　すりや目移つて最前の、稚兒と思つた十太丸、こなたが誠の者なれば、正盛どのへ連れて行く。

若松　アヽモシ、妾は格別、どうもその子は。

平太　エヽ面倒な。退かつしやい。

ト若松を突きのけ、主水を抱いて行かうとする。この時、左門之助走り出て平太に縋り

左門　聊爾なさるな、お尋ねの十太丸は、この左門之助。

平太　ナニ、われが誠の十太丸。

左門　イエ〳〵、この主水は十太丸。

左門　イエ〳〵わしが。

兩人　十太丸に違ひござらぬ。

平太　イヤハヤ、呆れたこの餓鬼めら。二人が二人十太丸。いづれ一人は替へ玉か。これを知つたは玉琴どの。サ、何方がこなたの弟だ。キリ〳〵云つてしまはつしやい。

若松　どうして妾は知らぬが眞實。どちらが實の十太丸やら、逢うたは今日が初めての事。

平太　イヽヤ、知らぬとは云はせない。云はねば主人の娘でも、賣女に賣つたおのれなれば、ナニそれなりにして置かうか。餓鬼めら、キリ〳〵吐かせ。

若松　イヤ、どうあつても二人の素性

兩人　イエ〳〵、わたしは十太丸。

平太　ナニ僞はりを吐かしやアがるな。玉琴どの、こなたが知らぬといふ事はない。キリ〳〵吐かせ。斯うして云はせる。これでも云はぬか。カウ〳〵〳〵。

ト眞盆にて、したゝかに打ち据ゑる。

若松　こりや其方は、主人を手籠めに。

平太　主人でも何でも、世になきこなた、云はねばうぬ等も

ト三人を打ち据ゑ、二重舞臺より若松を引下ろし、入れかはつて平太、階段に踏みかけ、キツトとなる。この時、御簾の内より白刃出で、平太を突く。「ウン」と苦しみ、落ちる。若松驚くこなしにて、

立ちかゝるを、管絃になり、白刃を引くと、御簾上がる。内に時純、抜き身にて立ち身。若松見て

若松　ヤ、お前は上使の

平太　ナニ、上使が某を

ト時純を見て

上使といふは

ト立ちかゝるを、また切りつける。平太苦しむを、引伏せ

時純　現在主人の姫君に勤め奉公、その上かゝる無法の打擲。天命思ひ知り居つたか。

ト立ちかゝる。平太、無念の思ひ入れ。

平太　エヽ、口惜しい。純友が小伜十太丸を尋ね出し、正盛どのゝ手柄となし、この上出世の蔓にもと古主の娘玉琴を、最前から苛なんだ、その天罰が身にかゝり、深手を負ひしもおのれゆゑ。うぬが素性も有やうに、白状なして。

トむしや振りつくを時純、したゝかに抉る。若松、二人をかばひ、恐れる思ひ入れ。

若松　妾が素性を御存じの、上使のお詞、もしや、お前も

時純　コレ。

ト思ひ入れあつて

つらく當りし長尾景道。まツこの通り。

ト とゞめを刺す。平太落入る。時純有合ふ平太の刀を取つて

幸ひ彼奴がこの刀。

ト脇挾む。光遠出かゝり、窺ひ居て

光遠　朋友なれども玉琴どのに、敵たふ景道、手にかけられしも尤も至極。

若松　ヤ、お前は太郎光遠さん。

光遠　あなたに戀慕と云つたのも、賴信が仲を裂かん爲。某とても時純と同腹中。されども敏き保昌が預かり育てる十太丸、いづれ一人は似せ者ならん。

時純　十太丸をこの家に殘さば、人質同然。何卒以て、玉琴どのと諸ともに、片時も早く。

光遠　心得ました。

ト呼子を吹く。菖蒲革の侍ひ二人、以前の長持を擔ぎ、ツカ〳〵と出る。

時純　三人ともに、身が隱れ家へ。

光遠　心得ました。玉琴どの。

ト長持へ入れる。

若松　アヽコレ、なんでわたしを。コレ、頼信さまを

ト行かうとするを時純、二人の子役を若松もろとも長持へ打込み、蓋をして

時純　門の出入りは

光遠　身共がよしなに

時純　ござれ。

光遠　合點だ。

ト捨て鐘になり、長持を先に光遠附いて、一散に向うへ入る。時純見送り

時純　最早刻限來りしか。して、頼信は。

ト思ひ入れ。御簾の内にて

保昌　イザ我が君には潔う

頼信　保昌、介錯。

時純　ヤア、あの聲は。

ト管絃になり、御簾上がると、頼信、白無垢、水上下の形、三方に腹切り刀を載せて持ち、保昌、首

柄を持ち、立ちかゝりゐるを、和泉式部、縋り居る見得。

和泉　アヽモシ、我が君様。

ト立寄るを、保昌引退け

保昌　未練な式部、妨げなすな。

ト採みあふうち、頼信、三方を持ち、ツカ〱と下り來て時純の前へ座す。保昌、和泉式部も續いて平舞臺へ來り、保昌は和泉式部をキッと留める。頼信、時純の顔を見上げ

頼信　太政官の御正印を失ひし頼信、日限のうちに手に入らねば、斯く成り果つるは兼ねての覺悟、生害いたす某が、末期の願ひ。

時純　この場に及んで願ひとは。

頼信　某切腹仕らば、時純どの。武士の情に御介錯。

時純　ヤ。

ト刀に思ひ入れあつて

某に介錯を

頼信　いかにも。

時純　ハテナア。
ト思ひ入れ。奥パタ／＼にて、伊與助走り出で來り、手をつかへ
伊與　ハツ、君御寵愛の若松どの、お行くへ知れぬと聞いたるゆゑ、早速主君へ御知らせ。
賴信　ナニ、傾城の若松が
和泉　行くへの知れぬは、もしもその身の
保昌　程は行くまい。伊與助、詮議を。
伊與　心得ました。イデ、拙者が。
ト一散に向うへ入る。時純思ひ入れあつて
時純　行くへ知れざる傾城に、追手をかけなば
ト思はず向うへ行きかける。賴信、時純の裾を押へる。保昌キツとなつて
保昌　御上使には、こりやいづれへ。
時純　サ、拙者は
トつかへる。
賴信　其許樣のお帶しなされし、その一刀にて賴信が、あの世に赴くものなれば、武士の本懷、身の冥

伽。上使の御手を下ろされて、首討ち下さる身の幸ひ。

保昌　上使のあなたが、お手下ろされて

時純　致してくれう。

保昌　それで主君の願ひも叶ひ

頼信　知らぬ事とて姫君と、不義の云ひ譯。

時純　ヤ。

　　　トきつと咎めるを、思ひ入れあつて

　　姫君と不義とは、何か仔細の……して、その姫君とは。

　　　ト立ちかゝる。頼信、思ひ入れ。

頼信　アイヤ、祕め置きたりし御正印、失ひし申し譯。

　　　ト腹へ突き立てる。和泉式部駈け寄り、保昌もこなし。

　　イザ、御介錯頼み入る。

時純　心得申した。

　　　ト刀を抜き、頼信の目先へ差出す。頼信、白刃を見て

頼信　最前見たる上使の刀、その劍にあらずして、拔群相違のこの刀。

保昌　殊さら蜘蛛の不思議の無きは、さては劍よ

頼信　首尾よくお手に入つたるか。

ト思ひ入れ。

大願成就。

トにつこりとする。時純、思ひ入れあつて「エイ」と切ると、首落ちて、ドンと遠寄せの頭を打込む。

和泉式部、泣き落す。時純、キッとなり、思ひ入れ。

時純　云ひ譯立たざる頼信が、首討ち落せば俄の貝鐘。身は關白の上使でござるぞ。無禮があると源家は滅亡。古手な合圖は、ハヽヽヽヽ、よしにさつしやれ。

ト身拵らへする。保昌、此うち首桶を時純に渡す。

保昌　アイヤ、驚き召されな御上使樣。あの貝鐘は奥庭にて、良門召捕る組子の人音。

トこれにて時純、思ひ入れ。

時純　それにて拙者も安堵の思ひ。

保昌　アヽ、疵持つ足の

時純　ヤ。

　　　ト顏見合せ、思ひ入れ。

保昌　賴信の首級。よきに奏聞。

時純　心得た。

　　　ト首桶を抱へる。ドン〳〵烈しく、向うより國平、首桶を抱へ、一散に來り

國平　保昌どのに火急の訴へ。

　　　トどん〳〵打上げる。

保昌　して、組みとめしか。様子はいかに。

國平　組子を惱ます良門ゆゑ、生捕るには多くの手負ひ。彼奴もしれ者、一方を切り拔け、我れと我が手に生害なす。卽ち所持の刀にて、首討ち落し、持參仕つた。イザ、良門の首實檢。

　　　ト時純、保昌が間、よき所へ差出す。

保昌　出かされた常陸之助。すりや良門には生害とや。不死身の良門、切腹の刀は業物ならん。

時純　ヤ。

　　　ト思ひ入れ。

保昌　御上使樣、とても次手に良門が首。

時純　役目ならねど朝敵たる、將軍太郎の

ト差寄つて、心のうちにて無念の思ひ入れ。唱名念ずるこなしあつて、蓋を明ける。中に以前の繪姿入れある。時純、不思議さうに取上げ見て、

「伊豫の國の住人、伊賀壽太郎成信の人相書」

ト讀み終り、思ひ入れあつて

お暇いたさう。

ト首桶を抱へ立つ。

保昌　御上使御苦勞。

時純　イケ馬鹿々々しい。

ト有りあふ火鉢へ、繪姿をくべると、煙硝火パッと立つ。直ぐに天王立になり、時純、花道へかゝると、揚幕より賴信（前の場の行長の鬼同丸）壺折り衣裳、庭下駄。彌三、錦の袋に入りたる蜘蛛切丸の刀を持ち、里平、白張、粕烏帽子の形にて、朱塗りの長柄をさしかけ、伏屋、腰元三人、小結ひ烏帽子、素袍の上を着て、弓矢を持ち、出て來る。時純、此うち一人づゝ、入れかはり〱、揚げ幕の方

へ行く。この人數舞臺へ皆々並ぶ。

保昌　伊賀壽太郎成信待て。

ト時純、思ひ入れあつて行きかゝる。

伊豫の國の住人、純友が殘黨。

トこの時、揚げ幕の方より窺ひたる侍ひ二人。

侍ひ　捕つた。

ト立ちかゝる。時純、兩人を相手に立廻りあつて、キツトなる。

時純　上使たる宗津時純を、怪しき家名に呼びとめしは、歸宅の路次に慮外の振舞ひ。保昌、おことの指圖なるか。何ゆゑかゝる妨げなすぞ。返答おしやれ、平井保昌。

保昌　口かしこき咎め立て。定めしその身に覺えあらん。

時純　なんと。

頼信　過ぎし天慶の砌り、伊豫の國高島の落城より、命を助かり、爰かしこに徘徊なし、山賊強盜と姿をやつし、帝都を窺ふ伊賀壽太郎成信、包むは卑怯未練の至り。當家を遁れ出でたればとて

和泉　四門を堅めて出入りをとゞめ

彌三　召捕る手配りあるからは
里平　降參なすか。但し又
國平　我れ〳〵踏みつけ繩かけるか。
伏屋　有無の返答、生死の境。
腰元　用意の矢衾。
保昌　太郎成信速やかに、姓名を、名乘つた〳〵。
時純　ヤア、心得ぬいづれもの一言。さるにても怪しきは、先へ進みし其許の、家名は何と。
賴信　尋ねの上は云ひ聞かせん。源家の重寶、蜘蛛切丸を取返さん爲、姿をやつす我れこそは、武將賴光が弟、源の賴信なるワ。
時純　ヤア、紛らはしきその一言。その賴信はたつた今、身が手にかけて、まツこの如く。首級はこれに持參なしたワ。
保昌　それぞ汝を見出さんための、似せ首なりと知らざるか。
時純　して又、さいふ賴信は。
賴信　最前汝に對面とげし、似せ良門の鬼同丸。

時純　すりや、劍を渡せし若者こそ
　　ト切り首を抱へ、すつくと立上がる。兩人組みつく。立廻りにて、股立ち取つて、着込みの形。ツカツカと本舞臺へ行き、支ゆる兩人の侍ひを左右へ投げのけ、頼信が前に寄つて、キッと見上げ

頼信　其方が所持せる蜘蛛切丸、やす〳〵頼信取返し、卽ちこれに守護なし居るワ。
誠や、其方こそ、最前逢うたる鬼同丸。

保昌　いつぞや我が君預かり給ふ、太政官の御正印、紛失のその日より、頼信公には館を立退き、民家に便つて寶の詮議。

頼信　その節召捕る純友が郎黨、保昌ひそかに養育なす。

和泉　十太丸の命乞ひ、主人の爲に一命捨てる。忠義の心底に免じ、頼信公と拵らへ置きしも、夫の計らひ。

時純　して、この首級の家名はいかに。

頼信　それこそ純友無二の忠臣、今張六郎蔭行といふ者、我れに面體似たるを幸ひ、命を捨てゝ純友が娘の玉琴、まつた十太丸を助けくれよと、兼ねての願ひ。

時純　すりや、この首は味方の武士。して、某に渡したる、相馬の家のあの旗は。

頼信　それぞいつぞや櫟の森にて、手に入りし繋ぎ馬の旗、有つて益なき敵の旗。相馬の餘類に渡せしは、この頼信が寛仁大度、良門にめぐり逢ひなば、その品を手渡しなせ。只取り得んは御正印。速やかに

皆々　渡したく〳〵。

時純　エヽ、殘念な。計る〳〵と思ひしに、頼信めと保昌が、あざとき手立に落ち入つたか。エヽ、口惜しい。斯くなる上は云ひ聞かせん。伊豫の國に威を振ひ、鬼神と呼ばれたる、伊賀壽太郎成信とは、我が事なるワ。

皆々　さてこそなア。

時純　はや先達て主人の娘玉琴、殊に二人の小姓のうち、いづれ一人は十太丸、素性をとくと糺さんと大宅の太郎に申しつけ、我が隱れ家へ同道させたワ。

保昌　さこそあらんと存ぜしゆゑ、間者と見せし太郎光遠、十太丸もろとも對面させん。ヤア〳〵、これへ誘ひ參れ。

トどん〳〵、ツツカケになり、正面の御簾上がる。光遠、若松の胸ぐらを取り、白刃を差つけ居る。向うより伊與助、肌脱ぎ、大童の形。左門之助、主水、凜々しき形にて、拔き身、十手の形にて、立

廻りながら出て來り、キッとなる。若松首級を見て

若松　ヤア、すりや頼信さまには、御最期ありしか。

光遠　伊賀壽へ味方と見せたるも、保昌さまの皆計らひ。玉琴預り、庭傳ひ、取つて歸せし、この光遠
汝が所持する御正印、渡さぬ時は今目前、玉琴の命を取らうか。ナヽなんと。

左門　氏も素性もなき身にて、二人が二人純友の

主水　忘れ形見の十太丸、誰れの彼れのと爭ひしも

兩人　みな御主君の御指圖。

伊與　平井の家に育てられ、成長なしたるこの十太丸。今日只今縄打つとは、合點のゆかぬ二人の衆。
まづ差あたる姉上へ、初見參。

ト行かうとする。

兩人　取逃がさうか。

伊與　小癪な事を。

ト鳴り物になり、立廻りながら舞臺へ來る。若松、光遠、ツカ〳〵と平舞臺へ來て、若松、首級に取りつき

若松　變り果てたる此お姿。
　　　ト思ひ入れ。
時純　すりや、この君が主君の片割れ。
保昌　十太丸に對面せよ。
伊與　これも養育下されし、保昌どのゝ情ぞや。
頼信　切腹とげし蔭行も、主人の姫と露知らず、枕交せし身を悔み、姫十太丸兩人は、この頼信が刀に
　　請けて。
　　　ト刀を拔く。時純見兼ねるを、國平里平とめる。頼信は若松と伊與助の髻を拂ふ。
若伊　これは。
頼信　姉は尼、弟は出家、首になりたる頼信の、未來を助けて、あと懇ろに。
若伊　エヽ、忝い。
時純　エヽ、敵ながらも頼信が、仁心に感じ入り、隱し持つたる御正印、破却なさんと思ひしが、仁義
　　に刃向ふ刃はない。同胞兩人の命の恩、謝するは即ちこの一品、返し與へん、受取られよ。イ
　　ザ。

ト御正印を出す。

賴信　イザ

時純　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト賴信受取る。

賴信　エヽ、嬉しや喜ばしや。太政官の御正印、再び戻らせ給ふ上は

保昌　御武運開く賴信公、祝うて勝鬨。

皆々　エイ〳〵オウ。

ト鉢卷、股立の侍ひ六人、篠龍膽の弓張を持ち、後に並ぶ。

成信　然らば此まゝ。賴信、保昌。

賴信　伊賀壽成信。

保昌　方々

皆々　さらば。

成信　これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

ト皆々並よく居ならび、アリヤ〳〵の聲。打込みにて、めでたく
幕

第二番目序幕

攝州福島旅籠屋の場
鋪津浦一里塚の場

役名――二の瀬源六近忠。渡邊源次綱。旅籠屋の主、血煙りお熊實ハ良門乳人七瀬。源六姉、早枝。膃肭臍賣り、淸八實ハ淡路守賴親。源六女房、お峯。門附け、丸太夫。願人坊主、善好。馬士、皮肉の仁藏。金毘羅參り、鬼熊坊。栗の木又次。將軍太郎良門。

本舞臺、三間の間、藁葺き世話場の屋體、のれん口鼠壁。上の方、反古貼りの障子。上の方、二階、これも反古貼りの障子をたて、萩垣、手水鉢、藁葺きの門口、下手に藪疊。門口に月參りの札、ない、ら藥の看板。すべて攝州福島旅籠屋の體。一面に雪の降りつもりたる景色よろしく、爰に丸太夫、淨瑠璃の太夫にて、何なりと三味線を浚つてゐる。善好、いがぐりの頭の坊主にて、寒垢離の稽古してゐる。門の外にお熊、誂らへの婆の形。袖なし羽織、雪搔にて雪を搔いて居る。頻りに雪降る。在郷唄にて幕明く。

善好　四谷赤坂麹町、たら〳〵落ちるがお茶の水。とう來りやとう。

ト手桶を抛り、受けそくなつて丸太夫の頭へぶッつける。

丸太　オヽ、痛い〳〵。コレ善好、おぬしも寒垢離の稽古なら、おれも門附けを渡つて居るに、なぜ手桶をぶッつけた。

善好　これサ、丸太夫どの、おれも明日から寒垢離の走りに出ようと、手桶の曲投げ、怪我なら、何もさう腹を立つ事はないではないか。

丸太　イヤ、怪我といへば、人に疵を附けてもいゝのか。

善好　イヤ、それでも、ぶッつけたら、せう事がないわな。

丸太　そりやア、ぶッつけ千萬といふものだ。

善好　小むづかしい。どうでも勝手にしやな。

丸太　オヽ、勝手にしようワ。

ト捨ぜりふにて立ちかゝる。これにてお熊、雪搔を持ち、内へ入り

くま　コレ、こなさん方は、何を其やうにいぢり合ふのだ。

丸太　阿母、聞いて下さい。おれが頭へ、あの坊主めが

善好　ナニ坊主だ。

トまた立ちかゝる。

くま　これサ、いま雪を掻きながら、道行は聞いて知つて居る。何も根葉のある事ではなし、たつて喧嘩がしたくば、喧嘩賃を出して置かつしやい。

丸太　アノ、そんなら、喧嘩をするにも錢が出るのか。

くま　こなさん方は、爰をマアどこだと思ふ。三星屋といふ商人宿の、表はしてゐれど、駈落ちござれ護摩の灰ござれ、惡いを承知で引摺り込む、ぐれ宿の女主、血煙のお熊が内だ。餘所と違つて旅籠は高い代り、何にも食はせぬ。麥飯に香の物ばかりでも合はぬこなさん方。コレ、百十六文宛の旅籠が、二日溜つて居るよ。

善好　これサ、阿母、それは承知だわな。わつちもまんが惡いから、兵庫や尼ケ崎の方を稼がうと、昨日までは、今朝ほめの判じ物や、寒行まかしよも無用の札が出てからは、思はしくもないゆゑに明日から寒垢離と思ひ附いてゐますよ。

丸太　それ〳〵、この丸太夫も、一昨日までも金毘羅參りと、順禮を拔けにやつて見たが、浮氣な方が錢にならうと、昨日からこの笠へ、操りの床の細工。これで門附けに出たら、今の間に旅籠の借

りは濟ませませう。

ト誂らへの菅笠を出す。

くま　こりやアほんに面白い笠。二人ながらその氣なら、旅籠の貸しも濟むだらうが、踏み散らした疊の損料、サア、錢を出して喧嘩をせぬか。

丸太　ア丶、コレサ、塒についてゐるこの雪。

善好　錢の出る喧嘩ならよしにしよう。

くま　そんなら仲直りに酒買うたがよい。

善好　そんならおいらが仲直りの

丸太　酒を買ふのかえ。

くま　酒買はにやア、喧嘩して錢出すとも、只は濟ませぬぞや。

善好　こりやアとんだ目にあふものだ。錢を出して喧嘩をするも、馬鹿な理屈サ。

丸太　と云つて酒を買はにやア、仲直りも出來ず……こりやア阿母、斯うしやせう。マア、こなさんも仲人といふものだから、なんでも三人が斯うしやせう。虎拳をするワ。よしか。勝つた者が酒を買ふのサ。

善好　成る程、こりやア好い思ひ附き。サア／＼阿母。

くま　不請ながら、酒の一杯にもなるこつちや。そんなら勝つた者が酒を買ふのぢや。

兩人　さうサ。サア／＼

　　ト三人並んで

三人　ヨン／＼／＼。

　　ト手を打つ。

丸太　オツト、手を打つたら、コレ、仲直りは濟んだぞや。

くま　ヤ、そんなら虎拳と云つたのは。

善好　三人手を打つて、仲直りを酒無しにするつもりサ。

くま　いま／＼しい。おれ程の者を、一杯やつたな／＼。

善好　これがほんに、やツつけ婆アを茶にしたのだ。

兩人　ハヽヽヽヽ。

くま　イヤ、どうで一文なしのこなた衆、いつそ貸しに附けて置かう。時に、附けると云へば、昨日から來てゐる、膃肭臍の山賣りどの、今日は何しに出られたのだなう。

善好　イエ、池田の市へ行きましたが

丸太　この雪では、さぞ困りやせうよ。

まく　オヽ、人の困るが宿屋の附け目。おれは雪にあつて困る旅人を引いて來る程に、こなさん達、留守を預けるぞよ。

善好　アイ〳〵、合點でごんす。

丸太　思ふさま引摺つてござらつしやい。

くま　コレ、留守を預ける代りに、座敷も片附け、飯も仕掛け、汁も摺つて、次手に薪も割つてもらはう。働らいてもらふ代りに、夕飯は一杯ぎりぢや。ドレ、旅人を引いて來ようか。

ト門口へ出て八文笠をかむり

ト在郷唄になり、お熊、向うへかゝる。花道より早枝、手甲脚絆、草鞋、一腰を差し、菅笠をかざし、出て來る。花道にて

モシ〳〵、お女中樣、お泊りではござりませぬか。

早枝　ハイ、尼ケ崎まで參りたう存じますが、俄に雪が降り出しまして、きつう難儀を致しますゆゑ、

好い宿があらば、泊りたうござります。

くま　それは明いた口へお旅人樣。私しはツイ福島の取附き、三星屋というては、間口が十六間、奥行が二十八間、留め女が十五人、膳部は七五三、夜具は絹布、お湯は丁子風呂へ入れますわいな

早枝　それは好い宿屋のお方にお目にかゝりました。それなれば、どうぞお願ひ申します。

くま　サア、此方へござらつしやりませ。

ト舞臺へ戻り、門へ入る。

善丸　阿母、もう歸らつしやりましたか。

くま　好い旅人を引いて來たよ。

ト丸太夫、門より覗いて見て

丸太　うまい盛りの、ころ〳〵。

善好　ナニ柿ぢやアあるまいし……モシ、旅人さん、此方へお入りなされませ。

ト早枝、内の樣子を見て

早枝　モシ〳〵、お婆樣、いま仰しやつたには、間口が十六間、奥行が二十八間。お前の内は、その大きな

くま　イヤ、その内の側の小さい内。サア、爰まで引いて來たからは、否應云はずと、サア／＼、此方へ入りなさい。

早枝　イエモウ、この雪に難儀しようより、どんな内でも、お泊めなされて下さりませ。

ト草鞋を脱ぎ、内へ入る。

くま　なんと、どうだえ、ちつと年は丈けたれど、隱居の妾、但しは、たそやの代物。おれが又ぶつくりかけて、しつかり金。

ト善好、丸太夫へ思ひ入れ。

早枝　エ。

ト氣味の惡き思ひ入れ。

くま　イヤ、金の出る事ぢやない。旅籠ならお定まりの二百五十、その代りには風呂は無し、夕飯は御延引。なんと、好い旅籠であらうがの。

早枝　イヤモウ、泊めてさへもらへば、大事ござりません。

善好　時に、お女中は、どこからどこへ行かつしやるえ。

早枝　サア、私しは近江路から、西國方へと申すは表向き、誠は向ひ町からはる／＼と、參りました初

旅、初々しうて、申す事さへ

くま　そりやアその筈の事。島がくれ宿の有り難さは、いろ〳〵な人の入りこむわしが內。これを緣にお賴み申して進ぜうよ。

丸太　それはさうと、女中は、脇差を差してござるの。

早枝　サア、爰へ來る道すがら、承れば播州多田、播州三石などには、戰があると物騷がしい事ゆゑ女ながらも

善好　成る程、どんちやんエイ〳〵。オヽ、落武者が拾ひ首で、侍ひにでもなりたいわい。

丸太　おきやアがれ。坊主の侍ひ、締まりのない。それより近道はこの丸太夫、なんでも落武者なら、引組んで勝たうと思ふには……イヤ、かたうといへば、この瓦燈を見れば、兜に似てゐるではないか。

トそこにある瓦燈をかむる。

善好　こいつは好いわえ。おぬしがその兜を着たら、おれはこの、拂つてくれの納め太刀で、斯う打つてかゝる。

ト納め太刀で打つてかゝる。丸太夫、受けて、ちよつとをかしみの立廻り。

くま　アヽ、コレ〳〵、瓦燈でもぶち割つては、六十四文の損ぢや。

ト瓦燈を引ッたくる。丸太夫の顔、眞黒になる。

早枝　お前の顔は

くま　油煙で眞黒。

善好　丹波の國から生捕つた、評判々々。

トそこらを振り廻す。

丸太　おきやアがれ。イヤ、評判といへば、雪もちつと小止みになつた。思ひ附きの彼の笠から、門附けにでも出て、莨の錢でも取つて來よう。

善好　貴樣は、その面で出るか。

丸太　サア、この黑顔を、隱すはこの笠。

ト床の附いてゐる菅笠をかむる。

善好　こいつは奇妙だ。

ト丸太夫、三味線を彈きながら出る。

くま　コレ、精出して、早く宿錢を片附けたがよい。

丸太　サア、錢を貯めて、早く片付けるよ。

くま　きつと錢を貯めて

丸太　錢貯め早々左樣に。（その爲口上左樣）

ト幕の内を彈きながら、丸太夫向うへ入る。

くま　なんの、無駄ばかり吐かして……それはさうと、あの山賣りどのは、もう歸りさうなものだが。

ト向うにて

清八　又次どの、用がある。待たつしやい〳〵。

トてんつゝになり、雪チラ〳〵降る。向うより又次、やつし脚袢、一本差し、菅笠、絲立てを着て出る。跡より清八、やつし臑あて、脚絆草鞋、菅笠にて、桐油を着、臘肭臍の明荷を兩掛けに擔ぎ、出てくる。花道にて

又次　なんと、因果とよく降るぢやアないか。この雪に、よく精出す男だわえ。

清八　サア、わしも遠國から、去年向ひ町へ歸つて、今年は又歸り新參、にた山の臘肭臍も、どうぞ御贔屓に賣れよかしと、雨にも雪にも精出す程に、貴樣、また好いやうに。

又次　それはおれが云はずとも、いづれも樣がお馴染だから、御如才ないワ。

清八　それでわしも落ちついた。
又次　時に、おれに用があると云つたは、何ぞ面白い事か。
清八　面白くなくつて、この雪に呼びかけるものか。天から貢ぎが降るわな。貴様とおれとに、金の降る事だ。
又次　金が降るとは、そりやアとんだ事だ。
清八　サア、その譯は貴樣、女房を持たないか。
又次　馬鹿を云はつしやい。この雪に吹ぬき一枚。潮來ぢやアないが、女房どころか居所にも困るワ。
清八　サア、その女房持つたら、身ぐるみも内も出來まいものでもない、といふ譯は、池田の市で逢つた、風來者の女、持參を持つて嫁に行きたいといふ事ゆゑ、好い口があると、闇雲に請合つて來たが、なんとこなた、聟になつて、その持參金を山割りにする氣はないか。
又次　そりやア錢金づくなら、百から拜んでかゝるこの又次。が、おれでも先が納まらうか。
清八　ハテ、納まらうが納まるまいが、仲人口に褒めそやして置いたから、祝言して、持參さへぶツたくれば
又次　おれもよし、貴樣もよし

清八　そんなら承知か。
又次　ザッと極まつた。
清八　そんなら一つ
又次　イヤ、まだ手は打たれぬ……肝腎の内が無い。
清八　ハテ、正直な。さういふ時のぐれ宿、百十六文出して内の面。
又次　そんならアノ旅籠屋の婆アの所に
清八　引越し女房までも行かぬ
又次　通り一遍の祝言。
清八　ナニ巡禮ぢやアあるまいし。
又次　そんなら清八。
清八　又公。
又次　アヽ、金が降るなア。

トてんつゝの切れに兩人舞臺へ來り、内へ入る。

善好　オヽ、こりやア膃肭臍の先生、お歸りか。

くま　栗の木又次どの、あの人と一緒にござつたは、また香具師にでもなる氣かいなう。

又次　イヤ、香具師か黄楊の櫛か、何ぞ引張りのものでもあるならばして見ようと、因果ものゝお定まり、丹波へ買ひ出しに行つたところが、彼方も戰でそこどころではなし、歸らうと思つたところが、内は無し、泊めてもらはうと、こなさんの所を目當に

ト叺莨入れより錢を出し

ソレ、旅籠は前錢だよ。

くま　イヤ、こりやアいつもと違うて、きついものぢやの。

清八　イヤ、きついはそればかりぢやアない。まだズッシリと金になる事があるが、半口乘らつしやらぬか。

くま　金になる事なら、白髮頭を坊主にといふ事でも

又次　イヤ、それ程の事でもない。内を何と貸してくれまいか。

清八　手短かに云へば、この清八が仲人で、嫁の相談が極まり、ずつしりと金を持つて來る花嫁があるが、肝腎の

くま　オット皆まで云ふまい。それならわしの内を、又次どのゝ内にして、祝言させてくれろと云ふの

かえ。

又次　さうサ。ハテ、祝言さへすれば持參は着服。

くま　座敷代さへずつしりなれば、爰もマア又次どのゝ內よ。

清八　先づこれも極まつたといふものだ。

善好　モシ、お詞の中だが、嫁入りに阿母が居ては、姑だと思つて、相談が澁りやアしねえかえ。

くま　成る程、そんならおれは又次どのゝ、妹にでもならうか。

早枝　滅相な。其やうに年のよつた妹御が

くま　そんなら娘か。

早枝　まだいなア。

又次　いつそ雇ひ婆ア。

くま　それぢやア値が張るぞえ。

又次　なんでも、持參を取るうちだから、無性に大風をきめ飾らにやアならない。

早枝　左樣なら、わたしや下女になとなりませうかえ。

善好　それ〳〵、合ひ宿のお女中は內の女。おれも何ぞになりたいが、頭役に小僧にならう。

清八　とんだ大きな小僧だわえ。

善好　伯母さん、薩摩芋を買つてくんねえ。

ト小僧の身振り。

清八　おきやアがれ。そんならおれは、ちよつと行つて、嫁を案じて來ようか。マア、何も飾りをいふ事だから、祝言の一道具、上下を工面せざアなるめえ。

くま　その上下は斯うしやせう。コレ、善好、横町の質屋へ行つて、損料で借りて來るがよい。

又次　次手に酒も買つて來てもらはう。

ト莨入れより錢を出してやる。

善好　オイ／＼、呑みこんだ。

清八　そんなら、雇ひ婆アも飯炊き女も、よく手筈を合せやうぞ。

ト明荷を障子の内へしまふ。

善好　そんならわしは上下を借りて、酒を買つて來よう。

清八　ドレ、嫁を連れて來ようか。

ト在郷唄になり、清八、傘をさし、善好、絲立てを着て、向うへ入る。

又次　これで上下と酒はよいワ。こんな事と知つたら、髮月代もして置けばよかつた。

早枝　わたしはマア、何を致しませうぞいなア。

くま　こなさんは、奥の膳棚に、日光膳がある程に、吸ひ物椀と、杯や、ちろりを見附けて下さんせ。わしは其うち、圍爐裏の下でも焚きつけませう。

又次　おれもヂッとしても居られまい。吸ひ物の味噌でも摺つて置かうか。

早枝　左樣なら、お勝手は知れずと、何か用意に、ドレ、奥へ參りませう。

ト唄になり、一腰を持ち、早枝、奥へ入る。お熊は圍爐裏へさしくべる。又次、摺鉢を足に挾み、摺りにかゝる。此うち、てんつゝになり、向うよりお峯、やつしの上へ坊主合羽を着、源六、上下、一本差し、葛籠を脊負ひ、下駄がけ、お峯と相合傘にて出る。跡より清八出て來り、花道にて

清八　いま迎ひに行くところ。聟も待ちかね。早く行かつしやるがようござる。

みね　ハイ〳〵、行きは行きますが、今さら恥かしいやうで、どうぞ首尾よくゆけばよいと、案じ過しがされますわいなア、こちの

源六　アヽコレ……此方は持參を持つて行けば、一世一度の嫁入りだもの、恥かしくなくつてサ。併し、側にはこの兒といふ、歷とした小舅が附いて居る程に、必ず嫁入りをぶまにしやんな。

清八　それ〳〵、何だか知らぬが、今日池田の宿の市場で、おれを見掛けての頼み。向うは先刻話した通り、れこ持ちの聟どの、仲よくさつしやい。

源六　イヤモウ、見ず知らずのこなさんが、身に引請けての世話、忝うござります。

清八　なんの禮に及ばう。時に、先刻の約束の、持參金はよいかえ。

みね　そりや兄さんが、呑みこんで居られますわいなア。

清八　それさへよけりやア、定めし待つて居やう……サア〳〵、早く行かつしやい。

ト唄の切れになり、三人舞臺へ來り、門口より

エヘン……ものもう。

又次　通らつしやい。

ト矢張り味噌を擂る。

清八　アヽ、通れも、どうれも同じ事だ。嫁御のお入り。

又次　ヤア、もう來たか。

トうろたへ、擂粉木を腰に差し

ソレ、小僧は居ぬか。下女は居らぬが。婆ア〳〵。

くま　ハイ、婆アは爰に居ります。

ト大さうに辭儀をする。

清八　オヽ、よい手番ひ。嫁御のお入り。直さま通ろ。

又次　お入りなさい。

清八　サア〳〵、入らつしやれ〳〵。

ト此うちお峯、綿を着て内へ入る。又次見て、よい器量だと呆れ、うろ〳〵見ながら、源六に行きあたり、兩人顔見合せ、苦笑ひ。お峯、源六、上へ通り、包みを下ろす。又次、お熊が袖を引く。

又次　ヤイ〳〵。

くま　何ぢや〳〵。

又次　りかの下上が間に合はぬ。

くま　なんぢや。千賀の鹽釜ぢや。

又次　エヽ、鈍な奴ぢや。七ツ屋からりかの下上が、まだ來ねえわえ。

源六　ハヽア、質屋へ上下を借りにやつたな。

又次　イヤサ、質屋の流れも他生の緣……ようこそござりましたな。

源六　これは〳〵、さてはこなたが聟どのがござりましたか。拙者はこの嫁の兄。其許の爲には小舅でござります。

又次　へイ〳〵。これは〳〵。

ト云ふうち清八、又次の袖を引く。

清八　聟どの、冷酒はどうだの。

又次　ハテ、亭主はおれだわな。

清八　エヽ、合點の惡い。コレ、いゝけさの事サ。

又次　袈裟衣は法衣屋にあるわな。

清八　エヽ鈍な。

ト酒を飲む眞似をして

このいゝけさの事サ。

又次　アヽ、酒か。四文一合、まだ持つてうせぬ。

ト清八、氣の毒なるこなし。向うより質屋の男、上下を持ち、出で來り

質屋　ハイ、質屋から上下を持つて

ト云はうとするを又次、ちよつと門口へ走り出て

又次　ナニしち……エヽ、七右衛門どのから貸し金の利息か。大事ない事に。

ト質屋、解せぬ思ひ入れ。ウロ〳〵する。お熊、思ひ入れあつて

くま　コレ〳〵、今はお客がある。旦那が受取らしやつた。早く歸つた〳〵。

トいろ〳〵云うて、仕方をして見せる。

質屋　なんの事だ。

ト取つて返して入る。又次、上下を懐へ捻ぢこみ

又次　雇ひ婆ア、上下はどこにある。

くま　アイ、奥の簞笥の、十三番目の抽出しに。

又次　ドレ、上下を着て來よう。

トのれん口へ入る。此うち善好、徳利を提げ、出て來り

善好　サア〳〵、御用めがうせぬから、引ッ提げて來やした。

清八　オヽ、小僧、歸つたか。お客も見えられた。雇ひ婆アと二人して

善好　アイ〳〵、いかいこと家來のある内だ。

ト膳部などする。又次、今の上下を着て、奥より出る。お熊、徳利と茶碗を丸盆へ載せ、そこへ出さうとして徳利を落す。

又次　コレ婆ア、ソレ、酒がこぼれてしまつたワ。エヽコレ、奥の樽の口を明けて、早く持つて來い。

くま　奥には糠味噌の樽ばかり。外には

又次　無い事があるものか。又しても麁相ばかり。暇をくれる、出てうせう。

源六　アヽコレ、聟どの、今夜めでたい祝言の晩に

みね　それ〳〵、堪忍してやらしやんせいなア。

又次　イヤ〳〵、料簡ならない。出てうせう。

ト お熊ムツとして

くま　出て行けなら、おぬし出て行きやれサ。

又次　どうして。

くま　なんの事だな。これも錢だと先刻から、雇ひ婆アになつて居りやア。コレサ、爰はおれが内だよ。

ト云はんとする。

清八　これサ、何も云ふまいぞ。

善好　口をきいては、惡い〳〵。
源六　聟どの、こりやアどうやら味な
又次　イヤサ、この婆アは酒の匂ひを嗅ぐと、氣が狂ひます。
くま　ナニ氣狂ひだ。途方もない。
清八　これサ、云つちやア惡いよ。
くま　イヤ、否だ〳〵。
善好　ハテマア、爰に居ては惡い。
清八　マア〳〵奥へ。

ト捨ぜりふにてお熊を無理に押しやり、三人奥へ入る。

源六　ハテ、とんだ氣狂ひもあるものだ。
又次　アヽ、コレ〳〵、仲人が行つては濟まない。コレ、清八どの〳〵……アヽまゝよ。酒も無いか。出しに行くも世話。ほんの學びさへすれば濟む。嫁御から飲む眞似をしてさゝつしやい。
みね　ハイ〳〵〳〵、祝言の杯は、女房の方からさしますげな。わたしが飲んで上げます。夫婦の固め必ず見捨てゝ下さんすな。

又次　勿體ない、ナニ見捨てるどころか。とんだ事を云はつしやいな。
みね　それ聞いて落ちつきました。わたしや又、氣に入るまいかと、いかう案じて來たわいな。
又次　イヤモウ、氣に入り過ぎて居る。したが、合點のゆかぬは、見ず知らずのこの又次、持參まで持つて美しい嫁入り。牡丹餅で叩かれると云はうか、砂糖醬油で煮染めると云はうか、とんと合點がいかぬ。
（つてめぬ。）
みね　成る程、さう思はしやんすも無理ではなけれど、わたしやお前を知つてゐるぞえ。
又次　そりやア嘘々。どこで逢つて知つてゐる。
みね　サア、それはな……それ〳〵、いつぞや阿彌陀ヶ池へ詣らしやんしたであらうがな。
又次　されば、そんな事もあつたか。
みね　あつた段かいなア。その時參つてナ、池の側で、お前に摺れちがうて、男らしい、苦味走つた、あんな男と添ひたいと、念が屆いて、今日仲人さんが世話して下さんして、思はずお前の所へ嫁入りとは、深い緣でござんすなナ。
又次　ムツ。そりやマア夢のやうな話しだの。
みね　夫婦になつたら未來まで、見捨てゝ下さんすなえ。

又次　それほど云ふ事なら、ナニおれだと云つて二世かけて
みね　女房に持つて下さんすか。
又次　知れた事よ。
みね　エヽ、嬉しうござんす。
　　ト又次の側へ寄りそふ。源六、ムツとして
源六　エヽ、舌たるい。おきやアがれ。
又次　兄御、何を云ふのだ。
源六　サア、こりやア夫婦仲が睦まじいから云ふのではない、氣が置かれないといふ事サ。
又次　そんなら、サア〳〵、夫婦の杯。まだ半分位は殘つてゐる。
みね　わたしが方から上げるぞえ。
　　ト茶碗でちよつと飲み、又次へやらうとする。
源六　コレ、待ちやアがれ。
みね　モシ、何で留めなさんす。
源六　何でとは、小胸が惡い。

ト茶碗を取つて打ちつけ、お峯の胸ぐらを取り、振り廻す。

又次　これはしたり、兄貴、これはどうだ。

源六　どうもしないが、祝言はおれがさせない。

みね　これいなア。祝言する約束して來たのぢやないかいなア。

源六　約束はしたが、祝言の仕樣が氣にくはねえ。

みね　さうして、どうするのでござんすえ。

源六　どうすると云つて、うぬがナ、仕樣が、ほんまのやうだア。

みね　ほんまでなうて、大事のお前……ナ、大事のお前。

ト又次へ思ひ入れ。

その男の爲ぢやと思へばこそ、爰の内へアタ好かぬ……サア、こんな不束な女子でも、女房ぢやないかいな。

又次　オヽ、女房々々。

みね　その女房の心を知らぬが何ぞのやうに、嗜なんだがよいわいなア。……こちの人。

源六　ソレ、そのこちの人が氣にくはぬ。うぬア本當に惚れやアがつたな。小胸の悪い。

ト茶碗を打ちつける。又次、悄りする。

みね　そんな事は知らぬわいなア。

ト徳利を投げる。又次驚き、手早く片附ける。

エヽ、腹が立つわいなア。

ト丸盆を投げる。又次、また片附ける。

源六　いつそ、うぬを。

ト擂粉木を振り廻す。

又次　アヽ、コレサ、尤もだく。

トとめる。源六、突きのけ、かゝらうとする。

これサ、待たつしやい。犬の喰はない夫婦喧嘩、第一世帯の毒。マアく、待つがよいく。

ト両方をなだめて

よい仲の戀いさかい、こりやァおれが貰はう。女房は謝まることだ。こなたから折れて出にやァ濟まぬワ。

みね　さうでござんすが、面々の心に引くらべて、惡性しさうな者と思はるゝが、腹が立つわいなア。

又次　オヽ、尤もだ〳〵。

源六　モシ、聞いて下さい。何ぞといふと、泣いてかゝる狼女め。どうしてくれうな。

又次　ハテサ、内儀が泣いて落すも、ほんの心安立て。何事もわしに下さい。女の方は折れ安い。男は當つて碎けろた。機嫌を直して下さい。

源六　サア……コレエヽ、あのやうに仰しやるによつて、おれはどうともする氣だが、おのれはどうする。

みね　ハテ、お前さへ機嫌が直りや、わたしやどうなりとようござんす。

又次　オツトよし〳〵。それで雨降つて地固まる。機嫌が直つて、めでたい〳〵。祝うて一つ打たつしやい。

源峰　左樣なれば。

ト手を打つ。

又次　三國一ぢや。聟になり濟ました、しやん〳〵のしやん……めでたい〳〵。

ト三人顏見合せ

ヤア、こりやア夫婦が間違つたぞ。

源峰　エ。

又次　いま〳〵しいぞ。腹の底の底まで洗ひ拔いて……それより先へ、持參の金を

ト源六の懷へ手をさしこむ。此うち後よりお熊出かゝり

くま　イヤ、その金は、おれが取る。

ト中を押へる。

又源　すりや、こなたが。

くま　知れた事。亭主も嘘なら嫁も嘘、嘘で固めるこの祝言。

源六　さては夫婦と云つたのは

くま　風來者の栗の木又次。

又次　嫁や兄だとやつて來たは

くま　云ひ合せの夫婦であらうが。

源峰　サ、それは。

くま　おれが内で、さま〴〵の目論見したによつて、持參の金

源六　一文もごんせぬ。

又熊　なんと。
源六　持參の金がありやア、こんな事はしませぬ。わしらは女夫でごんす。なまけた報いで店を追はれ、せう事なさに
みね　仲人さんを頼み、敷金で嫁入りと云うたも
源六　にぢり込んで凌がう爲サ。
又次　イヤ、呆れたものだ。此方の仕事を其方にされた。エヽ、小腹の立つ。したが、爰は宿屋、一文無しでは居られまい。夫婦ながら出て行きやれ。
くま　イヽヤ、その夫婦、おれが泊めよう。
源峰　エ。
くま　サ、詰まらぬものを引摺りこむが、ぐれ宿の商賣。女中が目當、幾日なりと。
みね　お泊めなされて下さんすか。
源六　まづ有り難い。雪を見ながら。旅籠屋の一つ夜着。
又次　詰まらぬ者はこの又次。
みね　ハテ、お前は合ひ宿。

源六　今宵は夜とともに
又次　イヽヤ、癡話を聞かうより
くま　奥の小座敷、その次か。
みね　わたしらが臥床なら
源六　次手に勝手を見て來やれ。
又次　エヽ、無駄骨折つて
　　ト源六へ思ひ入れ。
みね　ハテマア一緒に
又次　まんまとお先になる奴サ。
　　ト唄になり、又次、お峯、奥へ入る。この唄のうち仁藏、雲助の形にて出來り、門口に窺ひ居る。
くま　いま聞けばこなさん、女夫でござるさうなが、ぶつくりかけて置いた女、爰へ呼び出すほどに、
　　こなたも共々、勸めて下され……コレ〳〵、最前の女中さん、ちよつとござんせ。
　　ト合ひ方になり、奥より早枝出で來り
早枝　阿母さん、何の御用でござんすえ。

くま　サア、奥で聞けばこなさんは、尋ねる人があるとやら。人を尋ねるには、廓の奉公なぞもよから
うと思ふゆゑ

早枝　サア、尋ねる人にさへ逢はれる事なら、どのやうな奉公でも

ト此うち窺ひゐる仁藏、スツと入り

仁藏　關破りの女、見附けたぞ。

早枝　ヤア、お前は昨夜の

ト逃げようとするを引ツ捕へ

仁藏　イケ太い女ちやアないか。おれを誰れだと思ふ。道中筋の蟲と云はれる、皮肉の仁藏だぞ。コレ
望むほど駄賃をやらうと、山崎の關所を山越えの案内させ、よく金も寄越さずにツン逃げたな。

早枝　サア〳〵、御尤もでござります〳〵。これには段々

仁藏　譯も絲瓜もいるものか。望みの駄賃と云つたからは、三里の山越え三十兩、たつた今寄越しやア
がれ。

早枝　サア、それは。

仁藏　無いと云ふのか……無けりやア金づく。今度大江山の戰について、新たに立つた山崎の新關、こ

の女が山越えをして、關を破りましたと、代官所へ訴人しようか。

早枝　サア、それは。

仁藏　金を寄越すか。

早枝　サア

仁藏　サア／＼／＼。二つに一つの返答おしやれ。

早枝　ハイ……成る程、人を尋ぬる其ために、この津の國へ心ざせど、女子の叶はぬ山崎の新關、越さうばかりに、女子のあるまい大それた、山越えの案内。元より雇ふ金なければ、人ごみに紛れ逃げ隱れたは、腹が立たうがコレ、是非に及ばぬ。寶は身のさし合せ、金拵へてやりませう。

仁藏　取らないでどうせう。四の五と云へば逆磔刑。木の空が戀しさうな面つきぢや。

ト早枝、思ひ入れあつて、差してゐる一腰をお熊の前へ持つて行き

早枝　主人の御老女、ちよつとお目にかゝりたうございます。

ト合ひ方。

故あつて所持の道具、御覽の通りのこの場の仕儀。三十兩の質物に、お取りなされて下さるまいか。

くま　ムウ、成る程、聞いたところが御難儀の様子。生爪を剝がして、少々の貯へはあるなれど、それほどの物であるかないか、女子のわたし。なんとお若いの、目利きして下さるまいか。
源六　成る程、わしも少つとは心がけもあれば、そんならちよつと。
　　ト一腰を抜き、よく〳〵見ることあつて
ヤヽ、こりやコレかねて聞き及ぶ、亂れ燒の鐵味、銘は慥かに
早枝　筑前の左文字。
源六　頭は色繪の花橘。
早枝　鍔は南蠻。
源六　目貫は松の高彫りにて
早枝　三羽鶴の物好きは
源六　噂に聞いた親の差し料。
早枝　ヤヽ、この主を、親と云ふは。
源六　箕田の刑部充が一子
早枝　さては源次綱であつたか。

源六　さう云ふこなたは
早枝　コリヤ、渡邊の伯母ぢやわやい。
源六　さては伯母御か。
早枝　甥の殿。
源六　思ひもよらぬ
早枝　この刀にて
源六　不思議に
早枝　名乘り
兩人　逢ひましたなう。

ト兩人、手を取りかはし、思ひ入れ。お熊、中を割つて

くま　すりや、こなたは渡邊の綱。こなたは伯母御か。
源早　いかにも。
くま　こゝな大騙りめ。
源早　なんと。

くま　騙りも騙り、眞赤な僞はり。

仁藏　そんなら騙りと闕破り。この由を代官所へ。

ト行きにかゝるを源六早枝、留めようとする。お熊隔てるうちに、仁藏、門口へ來る。お熊、門口を

ピッシャリ。

くま　動くまいぞ。

ト此うち仁藏、行く振りをして、下の方、藪蔭に窺ふ。

サア、渡邊の伯母、綱と名乘つたは、どういふ騙りぢや、仔細を吐かしや。

源六　アイヤ、全く我れ〳〵

早枝　騙りの覺えは

くま　無いとは云はさぬ。コレ、この攝州渡邊に住居してゐる、綱が誠の伯母といふは、このお熊ぢや

わいなう。

早枝　すりや、こなたが誠の渡邊の伯母君か。

源六　首尾よくそれと名乘らせたか。忝い。

くま　ヤア〳〵、すりや樣子があつて、いろ〳〵隱せしこの身を、それと名乘らせん拵らへ事であつた

か。して、其方達二人は。

源六　即ち渡邊の下郎、二の瀬の源六。この女儀とても拙者が身寄り。

くま　して、隠す妾を名乗らせた

源六　その仔細と申すは。

ト此うち後へ又次出かゝりゐて

又次　イヤ、其方の譯より、綱が伯母なら、又次が問ふべき仔細がある。

くま　すりやアノ、こなたがわしに。

又次　いかにも。平親王の御冠り、老女が隠し置かうがの。

くま　なんと。

源六　主人綱が申し置かれし、十柄の寶劍、あれもこなたの仕業であらうが。

くま　ヤ。

源六　播州三ツ石に砦を構へ、良門討手を蒙むりながら、寶劍紛失申し譯なく、日蔭者の主人綱。劍紛失のその場所に、落ち散りありし、この一腰の割り笄。

ト出す。

早枝　幼少の砌り、源次さまの證據に殘せしこの割り笄。なんと慥かな證據であらうがの。

くま　ムウ。

ト思ひ入れ。

又次　祈念の冠りあらざるゆゑ、良門どのゝ都責めの發向も相叶はず、いたづらに時日を移す。石場に殘し置いたる香包みに……上見れば及ばぬ事の多かりき……この上の向が慥かな證據。

ト思ひ入れ。

源六　寶劍といひ

又次　冠りといひ

兩人　こなたが隱して置かうがの。

くま　イヽヤ、知らぬ。

源又　なんと。

くま　水子のうちは育てたる綱なれど、成人の後尋ね逢はぬは、侮らるゝが否さ。また良門とやらは何しに知らう。役にも立たぬ、笄と香包み。

ト兩方より取つて懷へ入れようとする。又次、源六、やるまいと、ちよつと立廻り。この二品を上の

障子屋體へ打込む。

源六　ヤア、大切な

又次　證據の品を。

トかゝらうとする。障子の内にて

清八　兩人騷ぐな。この二品、身が預かつたぞ。

源又　なんと。

ト鼓の合ひ方にて、障子引拔く。内に清八、上下大小に改め、二品を持ち、ツカ〳〵と出てくる。

早枝　ヤア、賤しい商人と思ひしこなさんくま　その姿は。

清八　聊か望みあるゆゑに、匹夫下郎と姿をやつし、入りこんで樣子を聞けば、綱が家來の二の瀬の源六。又次といふも良門へ、正しく心を通はす樣子。その良門は叛逆人、三ツ石の砦は、六人の影武者を殘し置き、その身は都を窺ふとの風聞。綱は元より寶劍を、失ふ罪より人前へ、面出しならぬ日陰者。ゆかりの兩人、綱良門がその行くへ、明白に白狀せいサ。

源六　仰せではござれども、主人の行くへ且以て。

又次　私しとてもその通り、叛逆人に心を寄せねば

兒人　お尋ねなさるゝ、その行くへは。

清八　たつて知らぬと陳じるか。

くま　こりや、さうありさうなもの。さしも名主たる良門どのへ、心を運ぶ程の者が、詮議されたらッ
　イそれと、卑怯未練に云はれまい。

清八　ヤア。

　　　ト又次に目を附ける。

くま　元よりゆかりの無い身なら、知らぬも尤も、ナウ、又次どの。

早枝　それ〳〵、こなさんもあの通り、現在主人の訴人、滅多に口外しやるまいぞ。

源又　イヽヤ、訴人する。

熊早　なんと。

又次　世にうとまるゝ叛逆人の良門。

源六　世にない主人、背に腹は代へられぬ。知つてゐるなら云ひませうが

又次　知らぬが誠。

清八 ヤア、たつて陳じりやア、兩人ともに。

ト拔きかける。又次、突き廻す。淸八、源六を切らうとする。そこにある雪搔にてとゞめる。

源六 イヽヤ、柔く、手向ひは仕らぬが、この雪搔が拙者が心中。

こりや、手向ひか。

清八 なんと。

源七 サア、雪にすゝぐの文字あれば、たとへ行くへは知らずとも、世になき主人を尋ね出し、お疑ひは雪ぐ所存。

清八 ムウ。しテ、又次、其方は。

ト合ひ方になり、又次、そこにある硯箱を持つて來て前へ出す。

この硯は。

又次 湯起請、鐵火も今間に合はぬ。早速の硯。良門と見るならば、きつと訴人。神文書いて差上げませう。

清八 ムウ。兩人がその詞、誓紙も同然。綱、良門が在所知れなば

熊早 罪をお糺しなされまするか。

清八　イヽヤ、某が味方に附ける。
熊早　エヽ。
清八　頼光が天下を奪はん我が結構。良門綱にめぐりあひ、この由さとして味方に附けい。
源六　ムウ。して又あなたの
又次　御家名は。
清八　鎮守府將軍頼光が弟、淡路守頼親なるワ。
又次　さてはあなたが。
ト驚く。此うち、バタ〳〵にて、向うより侍ひ中間四人、笹龍膽の箱提灯を二張り持ち、走り出て
四人　お迎ひ。
ト門口に平伏する。
くま　そんなら、いよ〳〵
清八　斯くいふ頼親、次男と生れし身の奇ッ怪、家臣外戚同様に、膝を屈するその無念。兄頼光を亡きものにし、天下を望む我が大望。一味同心、違背の輩は。
ト有りあふ硯にて、雪掻の裏へ禁札と記し

まツこの通り。
又次　禁札と記されしは。
源六　委くいましめて、威を示さるゝ札なるか。
清八　隨ふ者に褒美の金札。
くま　善惡二つの
早枝　道を立て札。
清八　身動きさせぬ、女は人質。
源六　すりや、是非とも拙者が
清八　心變ぜぬ身が計らひ、姉の早枝と見て虜。
早枝　エヽ。
清八　この二品は身が預かる。老女又次も身の決斷。
くま　すりや、我れ〳〵も
清八　違背に及べば、コレ
四人　種ケ島。

ト供の四人、合羽の中に隱し持つたる、種ヶ島の筒先を向ける。

源又 これは。

清八 違背いたさば、五體に風穴。人質取つて歸る上、申し渡せしこの場の一々。

ト早枝を外へ突き出し、清八、下駄、傘にて門口へ出ながら

明朝未明に返事を致せ。

又次 すりや、今宵のうちに

清八 吉左右なければ

源六 姉の身の上。

早枝 アヽコレ、この身は今降る雪の

清八 消ゆるか、つもるか。

又次 風に任せて

源六 この場の納まり。

清八 寐刃合せて、待つて居るぞよ。

ト唄になり、雪降りくる。提灯先へ照らさせ、清八、傘をさし、家來、早枝を圍うて、悠々と向うへ入

る。源六、雪搔に目をつけ、思ひ入れあつて奥へ入る。お熊、又次殘る。合ひ方。又次、雪搔を取つて

又次 賴親どのが書いて行かれたこの雪搔。禁札といふ文字の心は。ムウ。
ト思ひ入れ。お熊、こなしあつて

くま イヤ、その文字はこの婆が、筆を加へてこなさんへ。コレ。
ト筆を取つて札といふ字へ加筆し、楓と直し

それ、この文字に心を附けて。
ト渡す。

又次 札といふ字へ加筆して、直した心は、楓といふ字。ムウ。
ト思ひ入れして

禁の字を唱へ直せば金の楓、黃金の楓と讀む心は。

くま この禁札を楓と直せば、コレ、禁中の紅葉と讀む。

又次 その禁中にて失せたる十柄の寶劍、將門の冠り、その二品は紅葉のあたり。もしや彼の地の

くま コレ……判斷さんせ。

ト唄になり、お熊思ひ入れあつて奥へ入る。又次、雪掻を取つて

又次　この雪掻と楓の文字。すりや禁中にて失せたまふ、劍は雪の紅葉のあたり。

ト思ひ入れ。この時、門口の藪より仁藏出て窺ふ。又次こなしあつて

心憎きは鋪津の浦、一里塚こそ紅葉の大樹。目の附けどころは、オヽそれよ。

ト門口にある鍬を取つて、門口へ出かゝり、仁藏と顔見合せる。仁藏、ちよつと隱れる。又次、しやんと門の戸をさす。合ひ方、時の鐘、又次思ひ入れあつて、脚絆をはき、そこにある源六の三度笠と、お峰が着て來りし丸合羽を取つて身拵へしてゐる。向うより丸太夫、醉つたる體にて戻りくる。跡より若黨一人、菅笠をかざし、附いて來り、花道にて

若黨　すりや、あれなる小家が老女の隱れ家。

丸太　おてまへ樣は立歸り、委細は拙者が跡より御返事。持參の御狀を

若黨　貴公にしかとお渡し申す。必ず共に。

ト懐より油紙に包みし狀を出し、丸太夫に渡す。

丸太　しかと拙者が受取りました。

若黨　然らば後程。

ト合ひ方になり、引返して入る。丸太夫、門口へ來て

丸太　ア、、寒い〳〵。イヤ、うるさい雪だぞ。

ト内へ入らうとする。又次恟りして

又次　エ、、なんだ。とんだ化け物だ。

丸太　なにサ、化け物ぢやアねえ。門附けの丸太夫だ。

トかむりし笠を取つて

ア、、爰の内では見ぬ顔だが、こなたは誰れだ。

又次　わしかえ。わしやア今夜、爰の内へ、養子分に入つて、嫁を取つた

ト云はうとする。丸太夫、又次が着て居る、丸合羽の裾と、書附け持つたる三度笠を見て

丸太　助太郎どのは、こなたか。

又次　なにサ、わしやア決してそんな。

丸太　イヤ〳〵、隱さつしやるな。併し、その名を包んでこの家へ入込み、老母が身許を詮議の役目。こりやアさうなけりやア叶ふまい。

又次　これサ、わしは。

丸太　イヽヤ、隱すは尤もだが、わしも渡邊さまの譜代の御家來。こなたの顏は知らねども、慥かに二の瀨の源六どの。

又次　アノわしが。

ト悄りする。

丸太　ハテ、頭隱して尻隱さず。ソレ、こなたの着てゐる合羽の裾、その菅笠にも書いてある、ソレ、丹州いくの浦、助太郎と書いたのは、矢ッ張り二の瀨の源六どの、當時の變名。少しは醉つて居るものゝ、そこらにぬかりのない生れ。馬鹿八郎面長といふ者。こなたも、おらがお旦那渡邊さまへ有りついたが、互ひに顏を知らぬ同士。コレ、この上ともに、必ず心置かるゝな。

ト一人で管を卷く。又次、思ひ入れあつて

又次　成る程、こなたの云はれる通り、身共は二の瀨の源六でござるが、して、用事でもござるかな。

丸太　サア、ある段かく〳〵、拙者が斯樣に姿を變へ、人立ち多き辻々を徘徊いたすも、良門が詮議の隱し目附。お旦那の仰せには、仔細あつて二の瀨の源六こと、この福島の老女の許へ、便り來るに相違なし、其方入りこみ、めぐり逢へと、面體知らねど大事の御用。この程より逗留なし、入りこむ旅人を窺へど、今日までも源六どのに

又次　逢はぬも道理、今日只今、初めて參つたこの二の瀨。して、渡邊さまより私しへの

丸太　サ、今も今とて其許へ、屆けに參りし、主人より急ぎの使ひ、道筋にて出ッ會し、拙者に渡してたつた今。その狀は、コレ爰に。

ト狀を懷より出す。

又次　すりやアノこれが、御主人より二の瀨へ。

丸太　いかにも。

又次　然らば早速

ト思ひ入れあつて行燈を引寄せ、狀の封を切り

「かねぐ其方へ申し渡し置き候ふ、津の國福島に獨り住みの老女、これ正しく、我れ幼少の砌り別れ候ふ一人の伯母人、先年關東にあつて相馬の身寄り、權の頭興世の妻となりしが、當時當國へ來り、忍び暮らすと承る、これ正に先達て失せ給ひし十柄の御劍と、將門滅亡の砌り所持なして遁れ出し、金冠も彼の老女が、祕め置くに相違なし、良門この程、播州三つ石に砦をかまへ、屯ろなすとの風聞、我れ賴信公の下知を請け、當國に向ふといへども、寶劍の在所知れざる時は、一天下の大事と、一戰にも及ばず、空しく月日を送るところ、申し談ずる仔細あつて、今

二の瀨近忠へ、日今宵鋪津の浦にて、面會をとげんず間、早々彼の地へ罷り越すべきものなり。源次綱……」。

ト思ひ入れあり

丸太　さてこそ綱は、今宵密かに。

又次　コレ、內意の御狀、必ず他聞を

丸太　この家の老女は、すりや、綱が一人の伯母。されども御主人良門公のお乳の人。助太郞めは二の瀨近忠。この由早速狀に認め、今宵密かに良門公へ。

ト狀を懷中する。

又次　ヤヽ、今のこなたの五音では、すりや二の瀨さまではないと見える。顏を知らないばつかりに、もしやは、ひよつと。

ト思ひ入れして

サア〳〵、イヤとんだ話しになつた。アヽ、これといふも、一杯機嫌で。今はどうやら醉醒め心に。マア何よりは、渡した狀を。

ト又次にかゝるを、見事に蹴りのける。丸太夫、又かゝるを引ツ捕へ、グツと締める。丸太夫、血な

吐いて倒るゝ。又次、丸太夫の死骸を門口へ蹴込み、一通を出し、思ひ入れあつて

又次　すりやアノ助太郎めは、二の瀬の源六。殊に綱めは鋪津の浦へ。

トよき時分より仁藏窺ひ出て

仁藏　渡邊さまより内意の御狀。殊には爰にて人殺し。マアその狀を

ト狀を奪ひ取る。又次、やらじと立廻り。仁藏、狀を奪つて又次を當て、捨て鐘にて一散に向うへ入る。又次心づき

又次　南無三方。野郎め、遠くは行くまい。

トごん〳〵にて、仁藏が跡を追うて又次、向うへ入る。あと合ひ方、捨て鐘。奥より源六、木綿蒲團をかたげ、お峯、木枕二つ持ち出て來り、あたりを窺ひ

みね　こちの人。すりやアノ婆樣が、いよ〳〵御主人樣の

源六　サ、伯母樣ながら良門が、乳母の人七瀬どの、敵と思へば主人の身寄り。アヽコレ、これには

トあたりへ思ひ入れ。丸合羽取りちらしあるを見て

こりやアどうだ。おれが笠も、この合羽も、どいつがマア此やうに引散らして

ト集めんとして、雪掻きを見附け、取上げ見て

こりやコレ先刻頼親どのが、書いて行かれし禁札へ、筆を加へて楓の文字、直してあるは、もしや老女の

みね　あの婆さんは相馬の身寄り。お前の尋ねる寶劍の

源六　在所の合ひ圖、合紋に、加筆なしたる禁札なれば、文字を楓と直せしか。こりや判じ物だわえ。

ト思ひ入れ。この時、奥にて

善好　又次どの〳〵。かみさんもござらないか。

ト呼び立てる。これにてお峯、源六へすつぽりと蒲團を着せ、素知らぬ顔にて居る。善好、出て來る。

アヽ、そこにござるは又次どのか。かみさんぢやァないか。

みね　アイ、さうでござんす。

善好　して、又次どのは、どこへ行かれました。

みね　アイ、ぬしは今まで爰にござんしたが、今どこへやら。

トもぢ〳〵する。源六、蒲團の内にて隠れうとする。善好チラリと見て、思ひ入れあつて

善好　コレ〳〵、かみさん、隠すまい〳〵。御亭主の又次どのは、蒲團をかぶつてゐるぢやァないか。

それ〳〵、そこに寢てゐるものを

ト寄らうとする。お峯うろたへ

みね　アヽコレ、どうして爰に。

ト押へる。善好思ひ入れあつて

善好　成る程、それも尤もかえ。今日逢つて今日初めて、亭主に持つた事だもの、側離れぬも尤もかえ併し火急な大事の用。ちよつと起して、逢はせて下され。コレ、又次どの。

ト剝がうとする。お峯引留めて

みね　アヽモシ、ぬしは起したというて、一向他愛はないわいなう。

善好　そりやア、なぜ〳〵。

みね　ハテ、祝言の酒が過ぎて

善好　成る程、めでた酒に酔つたら尤も。併し届けにやならぬ大事の御状。なんぼこなたが女房でも、どうも心の知れないこなたに。

ト思ひ入れ。蒲團の下より源六、お峯を突き、いろ〳〵と思ひ入れ。お峯、ムッと顔にて

みね　ハイ、左様ならようござります。栗の木又次の女房でも、心が知れねばお前、疑ひなさるも尤もサ。左様ならばわたしどもは、存じませぬ事〳〵。

トつんとする。善好、氣の毒なる思ひ入れ。

善好　アヽ、コレ〱、かみさん、何も腹を立てる事はねえ。そんなら斯うしよう。いゝわな〱。又次どのが起きたら、直ぐにわしに逢はせて下さい。爰に持つて居るのはコレ

トつ小聲になり、懐ろの狀を出し

何を隱さう、良門さまから、火急の御狀。これをこなたに渡すほどに、又次どのが目覺めたら、きつと屆けて下さいよ。

みね　イエ〱、醉うて一向他愛のない、ぬしに渡して行きなんせ。

善好　ハテ、これサ、さう腹を立てる事はない。醉つて他愛のない人に、どう渡して行かれるものか。アヽ、こりやアかみさんはこの狀を、女の所から來た嫌味な文だと心得てか。コレ〱、決してそんな狀ぢやアない。ぬしに渡して行くほどに、目が覺めたなら返事を……コレ、きつと渡して下さいよ。

みね　わたしでよくば、預かつて置きやせう。

善好　ハテ、惡いとは云はねえわな。

ト狀をお峯へ渡す。合ひ方、時の鐘になり、向うより鬼熊坊、白股引、手甲、金毘羅參りの形にて箱

を擔ぎ、三度笠にて出て來り

鬼熊　上福島の旅人宿。アヽ、向うの內だな。

ト門口へ來り、內を窺ひ、善好を見て

善好　ハイ、年籠りの行者、草鞋錢のお願ひ。

鬼熊　コレ、善好々々。

善好　エヽ、通つた〳〵。

トこれにて善好、思ひ入れあつて

善好　アヽコレ、密かに〳〵。

ト門口へ來り

して、我が君には

鬼熊　良門公には今宵密かに、鋪津の浦までお出であれば、深更に及び、忍んで來れと貴公へ知らせ。直さま同道仕れと、かゝる姿で尋ねて參つた。

善好　すりやアノ、我が君には

鬼熊　かねての場所まで御入來あり、拙者と共に

善好　同道いたさう。コレお内儀、聞かる、通り火急の御用、引返して御狀の返事を
みね　左樣な事なら大事の御用、きつとわたしが
善好　必ずともに
みね　心得ました。
善好　ドレ、一走り……ござれ。

ト捨て鐘、合ひ方。兩人向うへ入る。源六ソツと顏を上げ

源六　今の密書は
みね　手に入りました。ソレ

ト渡す。源六、封を切り、思ひ入れあつて

源六　「栗の木又次へ、良門より」……女房、灯を。
みね　アイ。

ト行燈を差出す。源六、狀を持ちゆき

源六　「先達て其方に申しつけ、老女の隱れ家へ入込ませ候ふも、彼れは正しく良門が乳母の人、興世が妻の七瀨ならんと存ずる折柄、鋪津の浦なる紅葉の大樹、夜な〳〵怪しみあるゆゑに、今宵密

かに某、彼の地へ發向なし、實否を糺す上は、今宵深更に及んで其方、時刻を違へず、參會なすべき段、きつと心得べきものなり、栗の木又次どのへ、良門」。

みね　すりや、良門は鋪津の浦へ。

源六　これにて思ひ當つたる、密書のうちに紅葉の大樹、不思議ありとのこの文言。老女が加筆のこの雪掻き。コレ

ト取上げ見て

割符を合す密書の文言。さては又次は良門が手の者。油斷のならぬ彼奴が胸中。女房、其方は。

トお峯に囁く。

みね　そんならこの家の、老女の身許を

源六　いよ〳〵良門育てたる、七瀬なれば、窺ひ寄つて

ト思ひ入れ。

みね　心得ました。近忠どの

源六　コリヤ。

ト思ひ入れ。唄になり、お峯、奥へ入る。

かゝる密書の手に入る上は、渡邊どのへ知らせの一通。ソレ
ト合ひ方になり、捨て鐺にて、硯箱を出し、行燈の蔭にて密書を書かんとする。この時向うより又次
以前の狀を持ち走り出て來り、門口にて

又次　エヽ、役にも立たぬ馬追ひめに、この狀を奪ひ取られ、やう〳〵追ひかけ、取戻して來たもの。
かゝる企みのある事を、良門公へお知らせ申すは。

ト思ひ入れあつて内へ入り、そこらを尋れ、荷の中より紙を取出し、密書を書かんと、硯箱を尋れ、
行燈の方を見て、ツカ〳〵と行き、行燈と硯箱を引ツたくり、下の方へ來る。源六、膽をつぶし、立
つてくる。又次、書かうとするを、行燈を引ツたくる。又次、悧りして

又次　こりやア、どうするのだ〳〵。

源六　ハテ、おれが持つてゐる行燈、それ〳〵、その硯箱も、斷わりなしに、なぜ取つたのだ。

又次　サア、こりやア

源六　どうした。

又次　イヤ、取つてもよい。

源六　なぜ。

又次　おれが物だ。

源六　なんでわれが物だ。

又次　ハテ、おらア爰の聟様だワ。てめえは居候ふ。こりやアおれが行燈だワ。

源六　イヽヤ、おらアてめえの女房の兄だから、小舅だワ。そんなら親も同然、おれが物だ、寄越しやアがれ。

又次　イヤ〳〵、貸す事はならない。

源六　どうしたと。

又次　エヽ、寄越しやアがれ。

ト捨ぜりふにて兩方へ行燈を引合ふ。油こぼれて灯消えたる思ひ入れ。兩人うろたへ

兩人　サア〳〵、とんだ事だ。

又次　たうとう種無しにしやアがつた。

源六　おれには筆ばかり持たせて、コレ、硯箱を寄越せ。どこにある。

又次　爰にあるが、貸す事はならねえワ。

源六　わりやアこの暗いのに、何の灯で書き物をする。

又次　サア、行燈が消えては、少つと書くのに

ト門口明いてあるゆゑ、表を見て思ひ入れ。

よし／＼、行燈が消えても門口は、雪あかりで間に合ふわえ。

ト硯箱を持ち、外へ出る。

源六　そんなら、おれも

ト行かうとする。又次、外よりシャンと戸をさす。源六、思ひ入れあつて

エヽ、小意地の悪い。硯も灯も貸さずとも

トふつと二階を見附け、思ひ入れあつて、ツカ／＼と行かうとして、瓦燈に爪づき、探り寄つて取上げ見て

こりやコレ瓦燈の

ト思ひ入れあり、筆を咬へ、瓦燈を持つて、ツカ／＼と二階へ上がり、障子を明けて顔を出し

燈火よりも雪あかり。瓦燈の油煙で。

又次　ヤ。

トそつと明け、内を見て、シャンと戸を締める。これをキッカケに獨吟になり、兩人、雪あかりにて

狀を書く。源六は油煙を取つて書く。雪しきりに降る。又次、内へ入り、外へ手を出し、書く思ひ入れ。唄切れる。捨て鐘になり、又次、以前の狀を懐中し、認めし狀を持ち、内へ入り、そこらを尋ね手にあたる鍬を取つて思ひ入れ。源六も、手に入りし狀を懐中し、いま書いたるを口に咬へ、そろ〳〵と來り、そこらを尋ね、脚絆を取つて、手早く穿き、一腰を差し、手にあたる雪掻を取る。此うち向うより仁藏戻り來る。善好、この跡をつけ、窺ひ來て、仁藏は門口、善好は花道際に窺ふ。この時、奥よりお峰、手燭を持ち、窺ひ出る。跡よりお熊附いて出る。

源六　爰から直ぐに飾津の浦、

又次　目ざすは紅葉のあの大樹。

　トこの聲を聞き

仁藏　又次め、先刻の

　ト又次にかゝり、間違つて又次が今書いたる書き物を取り、立廻つてよろしく内へ入る。又次、續いて内へ入る。家内は闇の仕組み。よき時分に忍び三重、捨て鐘。探り〳〵又次、上の方の萩垣をのけて、外へ出て思ひ入れ。源六は雪掻を持ち、門口より外へ出る。善好、窺ひ見て

善好　又次どのか。先刻の狀の返事を聞きに。

又次　先刻の狀の返事とは。

ト振りかへる。源六、善好を内へ投げこむ。この物音にお峰、手燭を出す。これにて皆々顏見合せ

みね　近忠どのか。

源六　コリヤ、渡邊さまへ。

トいま書いたる書き物を投げる。お峰取つて

みね　心得ました。

善好　そんならそれが

仁藏　これも怪しい。

ト書き物を出す。お熊、お峰より引ツたくる。仁藏「これを」とかゝるを、取つて押へる。善好、お峰へかゝるを、立廻つて、お峰、蒲團をかむせる。又次、この物音に振りかへり、顏を見合せる。お峰灯を吹き消す。これを木の頭にて、兩人兩花道へツカ〳〵と行き、思ひ入れ。この途端、仕組みよろしく、拍子

幕

幕の外、捨て鐘にて、又次は、一本差し、鍬を肩へ、源六も一本差し、雪搔をかいこみ、兩人一散に入る。ト直ぐに雪おろし、捨て鐘にてツナギ。引返し。

本舞臺、正面高さ六尺の一里塚の上に紅葉の大樹、尤もこの塚、辷り落ちる事あり、一面の雪、上の方茅葺きの宮、戸帳を掛け、筋かひに見せ、下の方、藪疊、これも落ち際より斜に見えたる飾り附け、うしろ張り物、雪の山、すべて攝州鋪津の浦、夜の景色、大雪のつもりし體。舞臺前、花道も雪板。捨て鐘、雪おろしにて幕明く。

ト日覆より雲頻りに降る。向うバタ／＼にて、東の口より又次、花道より源六、以前の形にて走り出て來り

又次　降りつむ雪に道さへも、定かならねど慥かに爰が、鋪津の浦の一里塚。

源六　心ざすのは社のほとり、雪つもつたる楓の下、尋ぬる品は慥かに土中に。

又次　雲搔き分けて、片時も早く。

源六　往來の途絶えを幸ひに

又次　根許を穿つて

源六　彼の一品を

兩人　さうだ。

ト捨て鐘、ツカ／＼と本舞臺へ來り、兩人、塚へキツト目を附け、思ひ入れあつて又次、持つたる鍬

を抱へ、塚を發かうとする。源六これを見附け、持つたる雪掻にて又次を支へる。ちよつと立廻りあつて

又次　ヤア、邪魔するわれは、二の瀬の源六。

源六　動きやァがるな。うぬが來やうと思つたゆゑ、うせぬうちにと思ひの外、先へ廻つた栗の木又次

さてはこの樹のあたりなる

又次　土中に埋めある事を、嗅ぎ出して來たこの又次。先刻思はず間違つた、コレ

ト懷中より以前の狀を出し

この文言に違ひなく、綱も大方このあたりへ、うせるは必定。寶と共に綱が首、良門さまへ差上げるワ。

源六　イヤ、われよりは近忠が、コレ

ト同じく狀を出し

われが所へ良門から、送り越したるこの密書、殊に老女が加筆のコレ、この雪掻の金札へ、文字に直せば黄金の楓、雪に埋まる錦津の浦、紅葉の大樹が詮議の一つ。その上今宵良門が、この地へ來ると密書の文言。これ幸ひと出ッ會せ、太郎が首取り、綱どのへ、初奉公の土産にする。

邪魔ひろいだら栗の木の、又次が枝葉も粉微塵。野郎め、爰を退くまいか。

又次　ハヽヽヽヽ、いはれぬうぬがほざき立て。支へ立てする小二才め。心をかける塚の下、うぬに容易く見せやうか。改め立てひろいだら、綱を討取るその前方、うぬから先に。

ト鍬にて打つてかゝる。源六、雪掻にてシヤンととめる。

源六　邪魔ひろげば、うぬもこの世の

ト雪掻にて打つて行く。これより立廻りよろしく、又次、源六を當て、タヂ／＼とするうち、鍬をかいこみ、塚の上へ上がる。源六心づき、同じく駈け上がつて、兩人上にて立廻り。又次を塚の上より突き落し、兩人上下にて見合つて、キツト見得。二通の狀、よき所へ落ちる。これより跳らへの鳴り物になり、兩人上がりかゝるを、足を持つて引下ろし、やう／＼上がれば蹴落す。そのうち辷り落ちの模様よろしく、トヾ鍬と雪掻にて楓の下を穿ち、白木の四方箱と、同じく寶劍を入れたる箱を掘り出し、奪ひ合ふはずみに箱は碎け、中より金冠と、赤地錦の袋に入れたる寶劍を取出し、兩人取つて

又次　こりやコレ正しく十柄の御劍。

源六　この冠りこそ將門の

又次　それを。

ト奪ひ合ひ、二品を塚の上へ投げ、これより又次、白刃を拔いて切る。源六も又次を、したゝかに切る仕組みよろしく、兩人タテ、血だらけになり、塚の上へ這ひ上がる。雪は血に染み、手の紅つく誂らへ。雪は頻りに降る。兩人塚の上にて奪ひ合ふはずみに、兩方の白刃は塚の下へ落ちる。源六は寶劍を咬へ、又次は右の手に金冠を持ち、兩人よろしく、手を負ひたる仕組み、キットなる。宮の内より手を出して源六を引込む。又次驚くを、藪の中より手を出して又次を引込む。兩方一度に打つ太刀音。「エイ」と聲する。宮の内より首の無き源六の死骸、藪の中より右の腕なき又次の死骸、吹替へにてよろしく出て、よき所へ倒れる。薄ドロ／＼になり、正面の紅葉の梢より、仕掛けにてパッと煙硝火立つて、雪消える。照葉の紅葉、一面に現はれると、雪かゝりし紅葉の身木、仕掛けにて引拔き、雪解けして皮目を現はす。この途端に白氣、塚の下より忽然と立のぼり、日覆のよき所へ引きめぐるトばつたり音して鳴り物變り、舞臺へ雪大分に降り來る。鳴り物の中へ捨て鐘の頭を打込み、宮の内より良門（又次と早替り）白衣、着込み、大口、誂らへの形にて、拔き身、左に寶劍を咬へし源六の切り首を持ち、藪の中より渡邊綱（源六と早替り）甲冑の上へ藁蓑をかけ、垂れ草鞋、拔刀、左に金冠を摑みし又次の切り腕を持ち、兩人一度に左右より出で、立ちのぼりし白氣に目を附け、キッと

なる。

良門　ハテ、審かしき白氣の有樣、今宵密かに良門が、心憎きは此あたり、祕め置く寶の詮議ぞと、夜に紛れて鋪津の浦、社に忍んで窺ふところ。

綱　若者二人が爭ひに、尋ね出せし一品を、さとくも奪ひ立退く曲者、只一刀に摑みたる、腕を其まま打ち落せば

良門　我れも手負ひし若者の、首打ち落せば俄の動搖、さては首級に咬へ居るは、天下に名立たる神寶名劍名器の類なるか。

綱　殊に雪中、野も山も、みな白妙に埋もれしに、一樹の紅葉紅ゐして、木枯さそふ冬枯れに、秋の照葉の如くにて、雪にも負けぬこの場の不思議。

ト良門、前の雪搔に目を附け

良門　この雪搔に書いたる文字、金の楓とあるからは、日頃尋ぬる我が父の、形見の冠は楓の下、地中に隱しありしよな。

綱　內裏に於て失せ給ふ、彼の十柄の御劍こそ、紅葉の根許に隱しありしか。

良門　さてこそ俄の雪解に、紅ゐ浮ぶこの紅葉。

綱　いま立ちのぼる白氣の不思議。

良門　あれといひ、これといひ、奇異なる事を

兩人　見る事ぢやなア。

ト見得。ドロ〳〵打上げ、白氣消える。兩人見合つて、キッと見得。

綱　威あつて猛きその氣高さ。

良門　物具凛々しき武者振りは。

綱　我れこそ御身を討手の大將、渡邊の源次綱。

良門　さては討手の源氏の武將。

綱　して又御身は渡邊が、推量に違ひなく

良門　平親王將門が悴、將軍太郎

綱　良門どのか。

良門　渡邊の綱。

綱　折も折よき

兩人　見參ぢやなア。

良門　家に傳はる繋ぎ馬の旗は、伊賀壽太郎が持參なせしが、父が最期の折までも、召されし冠の在所知れねば

綱　我れも戰を止めしは、寶劍失せさせ給ふゆゑ。正しくおことが手にかけし、首級の咬へし劍こそ十柄の御劍。

良門　其方が切つたる腕に殘るは、金巾子の冠ならずや。いで速やかに、良門に渡せ。

綱　イヽヤ御身がその首、申し請けたるその跡にて、渡さん事はよも知らず。息あるうちは、いつかな〳〵。

良門　然らば手に入る寶劍は、この場で破却。

綱　さすれば冠は。

ト兩人一度に寶劍と冠をもぎ取り、既にかうよと見えたる時、よき時分より後にお熊窺ひ居て、この時、ツカ〳〵と出て、落ちある二通の狀を取上げ

くま　待つた。和子樣、甥の殿。

ト兩人へ差出す。兩人キツと見得。思ひ入れあつて

良門　麿を和子とは。

綱　甥の殿とは。

兩人　呼びとめしは。

　ト近寄る。お熊、件の狀を兩方へ差つけ

くま　姿に免じて

　ト兩人、雪あかりに狀を透かし見て

良門　そちや良門が乳母の七瀨。

綱　さのたまふは、綱が伯母上。

くま　どうぞ双方。

　ト手を合す。

兩人　すりや、引替へに。

くま　モシ。

　ト落ちてある二人の白刃を兩方に持つて

禮はこの身を

　ト二腰を腹へ突き立てる。兩人見て

兩人　ア、女に稀れなる
　　ト思ひ入れ。
くま　互ひにその品
兩人　願ひに任せて。
　　ト寶劍と冠を取替へる。お熊見て
くま　嬉しやそれにて、未來成佛。
　　ト刀を引廻す。後に若黨二人窺ひゐて
若一　朝敵良門。
若二　渡邊、うぬな。
　　ト兩方へかゝるを、見事に切る。兩人見事にかへる。お熊、バッタリと落ち入る。この途端一度に木の頭。良門、綱、死骸へ思ひ入れ。思はず寄りそひ、顏合せ、キツトなつて、顏を外ける。これをキツカケに、チョンチョンチョン、ひやうし

幕

第二番目大切

三島明神の場
足柄山の場

役名｜｜源の頼光公。足柄山の山姥。女馬士、小芳 實ハ頼忠息女、糚姫。奴、凧平 實ハト部六郞季武。茨木太郎鬼門。猪熊入道雷雲。足柄山の怪童丸 後ニ坂田公時。頼忠息女、糚姫 實ハ簑山基娘桝花女。山樵、斧藏 實ハ碓氷の貞光。

有則戀重荷　常磐津連中

ト淨瑠璃、役人觸れ、幕外にてあつて入る。

本舞臺、三間の間、向う小高き土手、この上に紅白の梅の立ち樹、石燈籠、上の方に注連を張り、神木の榎、下の方草土手の上に太夫連中居並び、日覆より梅の吊り枝、すべて東海道三島明神の體。よき所に源頼光膳所といふ開札建てあり、宮神樂にて幕明く。

ト鳴り物打上げ、直ぐに前彈きにかゝる。

〽東の任も頼光公、都のぼりに初下り、仕合せよしの女馬士、供の奴も重年に、變らず願ふ

花の顔見世。

ト面白き鳴り物になり、頼光、羽織衣裳、つゞら馬に乗り、長き煙管を持ち。小芳、振り袖、抱へ帯紫の頬かむりにて、手綱を持ち、火繩を附けし竹を持ち、季武、誂らへの奴にて、五升樽に腰をかけ、三人よろしき見得にて、舞臺眞中へセリ上げる。ト鳴り物打ちあげる。

〽文武の外に色事も、ならぶ方なき御大將、又めづらかな振り袖に、うつり心の御有様。〽ぞつとするほど身にこたへ、關の御地藏は親よりもましや、祈るしるしも有り難や、お目見得叶ふ冥加さは、ほんに船にも車にも〽つめぬお江戸の御贔屓に、引上げられた奴凧親の御免とふざけたら、それこそ旦那に叱られべい、べい〳〵詞がやんべいなら、輕くも三升五升樽、お箱の代りに引ッかつぎ、長途の憂を慰めに、しやんと召させて口取つて、戀の關札三島なる、本陣さして歩みよる。

トよろしくあつて

季武　モシ、旦那え、當宿がお晝の御膳所。まだお早くもござりませうが、この明神の鳥居先にて、海道を御覧ながら、一つ召上がつてはどうでござります。

頼光　イカサマ、それもよからう。そんならそこへ。

季武　サア〳〵、これへ。

ト よき所へ、樽と一緒に擔ぎし毛氈を敷き、頼光、下へ下りる。小芳、手を取る。

頼光　誠に、七道のその中に、東海道の賑ひは、引きも切らざる旅客の往來。驛路の鈴の聲は、晝夜の分ちなう……驛路といへば、コリヤ〳〵、女、其方は東の者か。

小芳　イエ〳〵、私しは都の者、今度都より、東へ下りましたも、日頃から思ひ思うた…………サア、思ひもよらずあなた様が、お馬に召され此やうに、嬉しい事はござりませぬわいなア。

頼光　なんぢや、この頼光を馬に乘せたが嬉しいとか…………こりや、話せるわい〳〵。サア〳〵免す。近う〳〵。

小芳　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

ト 頼光が側へ來る。

早速ながら少とあなたに

季武　願ひといふは、お引合せか。

小芳　サア、どうぞそれを、いづれも樣へ。

頼光　コレ〳〵、そりや改めて申し上げいでも、最前から山下々々と、有り難いお聲。すりや、八尾藏

といふ事も、未熟な事も、不調法も、あなた方がようお察しなさるワ。これからどうぞ御贔屓、お取立てにあづかつて、いつまでも御當地を離れませぬやうに、いづれも樣、隅から隅までヅイと…………朝夕神を拜むがよいぞや。

小芳　イエモウ、そりやあなた方を、拜む段ではござんせぬわいなア。

ト方々へ辭儀する。

季武　イヤ〳〵、拜むばかりぢやア濟まない。マアお目見得に、なんぞ一つ。幸ひ旦那も御酒のお肴に酒雀か馬士唄が相應。サア爰で、踊れ〳〵。

小芳　これはしたり、どうしてわたしが

季武　それがならずば何なりと。

小芳　サア、それ程までに仰しやる事。そんなら振りも不束な。

賴光　その不束も一興。サア〳〵早う。

季武　見たい〳〵。

〽名にしおふ、浪速の浦の芦の葉を、いざ刈りて參らせん〽蜑小舟、片葉の芦に棹さして水勢はやき八幡山、ならで逢うたる山崎の、わたしや戀には人目さへ、長柄堤を廻り氣の、

淀の川瀬にかはしたる、その言の葉も水車、なりやせまいかと案じられ、腹を辰巳の里ぢやと笑ふ、千鳥の聲の憎てらし へ難波女の〳〵、かつぐ袖笠、ちらと鵲の、はしにも霜の月笠、衣笠捨てゝ乙女子の、形も美くし花笠や。

季武　やんや〳〵。

頼光　女子の馬子には珍らしい今の振り事。やんや〳〵の聲であつたわえ。

ト この時、花大分降る。

季武　モシ〳〵、旦那、珍らしいといへば、アレ〳〵、珍らしい雪が降つて参りました。

小芳　なんのいなア、こりや風が誘ふ花吹雪ぢやわいなア。

頼光　誠に、梅花を折つて冠に差せば、二月の雪衣に落つると、唐詩の心を其まゝ、この早咲きの梅の花、ハテ、景色ある眺めぢやなア。

季武　サア〳〵、これを肴に、もう一つ上がりまし。

頼光　こりや飲まずばなるまいわえ。

ト 矢張り花頻りに降る。

へ雪ならば、幾度袖を拂はまし、その櫻にはあらねども、梅も吹雪と振り袖に。

ト合ひ方にかぶせ、音樂になり、粧姬、廣振り袖、裲襠衣裳の上へ肩蓑を着て、銀張りの杖を突き、市女笠をかざして、振りよき梅の木の下に立ち、この見得にて花道へセリ上がる。

〽つもる思ひの解けやらで、粧姬はあこがれし、君が歸りを人づてに、聞いてあるにもあられない、藤の衣のそれならで、よそ目を覆ふ蓑笠に、杖つきの名は乃の字より、外には知らぬ旅の空、心ばかりが急がれて、やう／＼たどり來りける。

ト粧姬、舞臺へ來る。季武見て

季武　待て／＼。御上洛について賴光公、當社の御膳所間近く、扣へぬか／＼。

粧姬　ナニ、あの賴光さまには、もう爰へお出でぢやと云やるかいなう。

季武　オヽ、疾くにこれへお出で遊ばし、アレ、あそこにお出でだワ。

粧姬　ヤア、ほんにあそこに。

ト賴光の方へ行かうとする。季武とめて

季武　どつこい／＼。我が君樣はあれにと聞いて、無性矢鱈にツカ／＼と。ハヽア、聞えた。わりや女の拔け參り、お荷物を擔いでなりと、伊勢まで連れて行つてくれろといふのか。それなればこの奴に賴め。取次いでやらう。馬鹿な奴ではないか……………ハツ、我が君樣へ申し上げます。御上

洛を見込んで、女の伊勢參りめが、お供を願ひまする。幸ひと、この雨掛けでも擔がせて、召連れませうか、如何仕りませうな。

賴光　女子の身にて參宮とは、奇特な奴ぢや。どうなとして遣はせ〳〵。

季武　畏まりました……………サア〳〵、女、喜べ。我が君樣が、連れてやるとの御意が出た。この雨掛けを擔いで、一緒に來い〳〵。

ト雨掛けを粧姬へ突きつける。粧姬思ひ入れ。

粧姬　どうしてわたしが其やうな。

季武　ハテ、何も重い物ではない。こりやァ手箱とお鼻紙臺。われには相應なお荷物だ。長持ち唄で、やらかせ〳〵。

粧姬　それぢやというて、お供にそれを

季武　否だと云へばお供は叶はぬ。伊勢參りに御報謝と、柄杓を振つてうしやァがれ。

粧姬　そんならァノそれを持つて、道々聞いた、鄙びた唄を諷はねば

季武　召連れる事はならない。擔いだ事がなくば、おれが敎へてやるべいほどに、この手拭で鉢卷でもして、そこでマァやつて見ろ。

粧姫　すりや、どうでもこれを。

季武　キリ〳〵と、やらかせ〳〵。

ト季武、粧姫に鉢巻をしてやる。

〽竹になりたやナア箱根の竹にナア、様が文書くナアエ筆の軸にヨナアエ。

なんの性だア。

〽ア丶まゝならぬ戀の重荷ぞいとおしき、姿恥かし、つがもなや。

ト季武この文句のうち、側より指圖する事あり、ト粧姫、荷を捨て丶、肩の痛き思ひ入れ。この時懐ろより三建目の袱紗を落す。

エ丶、お道具がたまるものかえ。

ト云ひながら袱紗を取上げ

ヤ、この袱紗は、我が君様の

ト　粧姫思ひ入れ。

頼光　何と申す。

ト季武より取つて

こりやコレ某が所持の袱紗。あの女が、如何いたして。

粧姫　成る程、お見知りないは御尤も。いつぞや心の願事に、神へ祈りの櫟の森、月さへまだな宵闇に。

頼光　ムウ。すりやアノ任のうちながら、都の樣子氣遣はしく、忍び登りし都の空、かくれ近江の石山にて

小芳　そんならあなたは、あの女中を

季武　御存じでござりまするか。

頼光　サア、知つたでもなし、知らぬでもなし

粧姫　泣いて焦れし頼光さま、袱紗にそれと云ひ號けの

頼光　すりやアノそもじは頼忠公の

季武　箱入り娘と聞き及びし

粧姫　粧姫でござりまする。おなかつかしうござりましたわいなう。

小芳　アヽモシ、そりや、アノお前、何を仰しやる。ついしたこれまでお目見得せねど、云ひ號けの頼忠が娘、粧姫は自らが事。モシ、頼光さま。おなつかしうござりまするわいなう。

ト取りすがる。頼光、季武、思ひ入れ。

賴光　ヤヽ、なんと。
季武　とんだ茶釜が藥罐と化け、お姫樣が二人とは、けうけれつな事だわえ。
粧姫　イヤ〳〵、なんぼあなたが、あのやうに仰しやつても、自らこそお目もじして、直々一緒に願うたを
賴光　東國の任にある賴光、旅館へ女子を同道せば、他聞の聞え如何ぞと、其まゝ別れし粧姫。それに其方も粧ひと、名乘るその身に似げもなく、賤の姿は合點がゆかぬ。
小芳　サア、アノ、これはナ。
〽問はれてなんといつしかに、垣間見えねどあこがれて、慕うて來ても東路に、寄るべなければせめてその、云ひ寄る端となりふりも、戀にはやつす賤の業、女子の念が屆いてや、身近うよるのお伽にも、どうぞとばかり打ちつけて〽自らとても云へばえに、云はねばこゝろ須磨の巻、源氏の君と名のみにて、お顔見てよりいやましに、伊勢をの蜑にあらねども、猶袖濡らす思ひ草、結ぶ縁を待ちわびて、これまで參り候ふと、縋りかゝてば〽いや〳〵〳〵自らこそはと御側へ、より光公の手を取るにぞ〽いや〳〵さうはと押しわけて、色香爭ふ花と花〽見かねて奴がこりやどうだ、引張り凧の戀ならば、我れらでこそはあらうのに、旦那

一人を二人して、初松魚ではあるまいし、小田原町と新場では、名前で賣れるこの奴、せめて一人は色事に、成田の親分頼んでも、とは思へども生得が、手のなき生れ奴凧、絲目はなれてわしや便りなや、ヤレコレ、こりや又なんとせう。

季武　ハヽヽヽ。

頼光　二人が二人頼光を、慕ふ心は切なれど、これとさしたる證據あれば、其方が誠の粧姫。

小芳　すりや、これといふ證據のしるし無き時は

頼光　粧姫は只一人。

小芳　ハアヽ。

ト泣き落す。

粧姫　そんならこれより自らを、とも〴〵都へ。

頼光　イヽヤ叶はぬ。心を無下にするにはあらねど、この頼光はいやしくも弓矢の家に生れ出で、經典の道も尋ねしかば、代々の武將と事かはり、ちつとつまみし鬚もなく、また引かけし得手もなし、胸ぐら取つてこれ申し、そりやマアなんの事かいなアと、云はるゝ身にはあらねども、父母許さゞれば娶らずと、恨みておはせ給ひそと、誠しやかの

御嘘は、軍慮の外と見えにける、

粧姫　すりや、それゆゑに御一緒には

賴光　知れし御事〳〵。

粧姫　コレ　凧平とやら、わしや其方が羨やましいわいなう。

季武　ナニお姫様がこの奴を、羨やましいと仰しやるは。

粧姫　サア、賤しい業をしてなりと、直ぐにあなたと御一緒に。

季武　そりやナニ造作もない事ながら、ちつとは稽古なさらにやア

粧姫　サヽ、そんならどうぞ稽古してたも。賴むわいの〳〵。

季武　ようござります。そんならマア私しがする通りに、一緒にやつて御覽じませ。

粧姫　そんなら其方がしやる通りに

季武　左樣々々。ドレ、さらば稽古にかゝるべいか。

〽そも〳〵奴の奉公は、雪の朝も日の照る中も、槍振る手を振るおいど振る、雨の降るとき

や傘でも行くが、樣がふる夜は行かれうものか、いつそ一杯引つかけて、腰の胴亂抱いて寢

よ〽眞似ても流石粧姫、にぶきほど猶心根を、不便と思へど賴光公。

賴光　誓しの猶豫も一時の遲れ。帝へ猶も恐れあり。

〽爾平來れと立ちたまふ、裾に取りつく、こなたの粧ひ、振り切る賴光たぢ〳〵、あなたにとゞむる粧姫、忽ち靈女の有樣は、不思議にも又いぶかしき。

ト賴光行くな、ドロ〳〵になり、粧姫、連理引きのやうにこれを留め、引拔きにて唐女の形になり、弓矢をかいこむ。皆々見て

ヤア、今まで誠の粧姫と

季武　思ひし姫君忽然と、稀有なる姿を現はせしは

小芳　いかなる方にて

三人　ましますぞや。

粧姫　よきかな賴光、我れは楚の養由基が娘、桝花女といふ者なり。いま唐土に父が弓矢を、請けつぐべき良將なし。御身日の本に走せゆきて、賴光色に溺るゝや、否やを試し見し上にて、この冥弦の弓もろとも、水破兵破の鏑矢を、譲り得させよと詞につき、粧姫の姿となり、心を引きしに流石は武士、色を愛でざる健氣さに、いま譲り與ふこの二品。イザ立寄つて受取られよ。

ト賴光、ツカ〳〵と寄つて弓矢を取る。

頼光　ハヽア、有り難や忝や。數ならぬ頼光に、この弓矢を授け與へん爲、粧姫と姿をやつし、我が行跡を試されしとや。

粧姫　まだそれのみか御身の危難、救はん爲にこの所へ。

季武　ナニ我が君の危ふき御難

頼光　救はん爲に

兩人　來りしとは。

粧姫　おことを覘ふ怪しき者、この所に徘徊なせば、心をつけて危難を遁れよ。又それなる粧姫、おことを慕ふの便なければ、はや云ひ號けの上からは、誰れに憚かる事もあらん、急ぎ妹背の結びをなし、共に召連れ得さすべし。

頼光　ハヽア、何がさて靈女のしめし、いなみ申さんやうはなし。然らばこれよりこの粧姫、同道なして上洛せん。

小芳　アノ自らを……エヽ、有り難い。

ト伏し拜む。

粧姫　我れはこれより故郷の、唐土へ急ぎ立歸らん。

頼光　すりや此まゝに。

粧姫　皆々、さらば。

〽さらばと微妙の御聲は、跡に殘りしその姿、風に乗じて。

トどろ／＼にて、桝花女の姿、上の石碑の田樂にて消える。

頼光　さてこそ疑ひもなき靈女の樣、かゝる奇瑞を見る上は。

小芳　すりやアノ、お聞濟み遊ばして

頼光　共に都へ同道せん。

季武　然らば御夫婦固めの杯、この明神の神主方にて。

頼光　イカサマ、我れは粧姫の、これまで慕ふ心ざし、せめての事に慰めん。汝はこれにてしめされし怪しき者に心を附けよ。

季武　畏まつてござりまする。お二方には氣遣ひなく、まづ／＼あれにてしつぽりと。

〽濡れさせ給へ頼光公、弓矢携へ姫君の、御手を直ぐに鳥居のうち、神もいまさば忽ちに、御心あしくなりぬらん。

と頼光は小芳の手を引き、下座へ入る。季武殘つて思ひ入れ。

季武　こりやマアどうであらう。誠と思つた粧姫は、唐人の娘、思ひもよらぬ馬士の女が、頼忠公の御息女とは、ヘちやアない、狂言のやうな事だわえ。

ト思ひ入れ。この時、明神の神木の後より、小鳥大分羽音して飛び立つ。季武思ひ入れ。土拍子入り、眞の神樂になり、洞の中より茨木太郎鬼門、凜々しき形にて出て來り、思ひ入れあつて

鬼門　正盛どのに頼まれて、この神木に身をひそめ、樣子窺ふ折に幸ひ、あの神主が小座敷で、三々九度のうまい最中。此方も幸ひ頼光めを、殺らしてしまへばこの身の出世。それよ。

ト思ひ入れあつて頷き、下座の方へ行かうとする。季武、ツカ／＼と出て、これを支へ、兩人キツと思ひ入れ。

こりやア奴め、何とするのだ。

季武　何とするとは野太い奴の。靈女の教へに幸ひと、奴出たちに氣をゆるさせ、窺ふ我れを誰れとか思ふ。頼光が四天王のその一人、卜部の六郎季武だワ。お二方の御座ある方へ、うそ／＼うせる厄病神。成田の子分が居るからは、覺悟極めて繩にかゝれ。

鬼門　ハヽヽヽ、吐かしたり腹の皮。頼光めをぶッ放し、いま桝花女より授かつた、弓矢もろとも粧姫、盜んで歸る茨木太郎だ。邪魔をひろぎやア眞二つ。キリ／＼爰を退くまいか。

季武　イヽヤならねえ、茨木ならばさしづめ綱と、いふ所をば季武が、出合ひも新板新入りの、馳走に
うぬが腕の風呂吹。覺悟きはめて賞翫しろ。

鬼門　ヤア、無益な癡事。その舌の根を

季武　何を小癪な。

ト鬼門拔きかける。季武、神木の高札を取つて立廻り。下座の謠になる。

ウタヒ
〽物すさまじき雨の音／＼、俄に吹きくる風の音に、駒も進まず高いなゝき、身ぶるひしてぞ立つたりけれ。

トこれにてよろしくあつて、兩人「ドッコイ」と見得。

〽その時綱にあらねども、茨木太郎が季武が、手取りにせんと高札にて、あしらふさそく、こなたもしれ者、だんぴら物の拜み討、ところを開いて附入れば、其まゝかはして又切りこみ、鋭き刃金冴え渡る、月の都の羅生門、爰は三島の神垣に、梅も武術も早咲きの、花を散らしてはやり男の、勇ましかりける。

トこれにてチョンと黑幕にて太夫連中を消す。あとタテの鳴り物になり、兩人いろ／＼面白きタテあつて、トヾ廻りの上へ兩人「ドッコイ」と見得。これにて片シャギリ。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の岩組み、所々に松紅葉の立ち樹、梅の吊り枝、松紅葉の葉落ちてあり。この道具納まる。

ト鳴り物打上げる。黒幕切つて落す。太夫連中居並び、大薩摩がゝりの淨瑠璃になる。

〽玄冬素雪の剛敵も、恐れぬ松の大丈夫、これ萬木に勝れたる、英雄とこそいふならん。

ト大小入り、人寄せに山おろしを冠せたる鳴り物になり、斧藏、柿の頭巾、廣袖、やつし袖なし羽織にて、側に束ねし柴を置き、斧を突き、眠りゐる見得にて、舞臺眞中へセリ上げる。鳴り物打上げる。

〽君命うけて山樵も、形も氣まゝの肱まくら、結びし夢の中空に。

トどろ〳〵になり、日覆より赤色の雲氣下りる。斧藏、目の覺めし思ひ入れあつて、この雲氣を見上げ、キツと見得。谺のやうなる大小の合ひ方。

斧藏　ハテ、怪しや。すべて雲に種々あつて、その色により善惡を分つ。或ひは五色の色備へて、しかも雨降らざるは、必ず聖人の隱れ家あり。されば漢の高祖が妻は、その雲を尋ねて、芒碭の山中に、再度高祖に逢ひしといふ。それは彩雲、これは正しく赤色、さすれば一定人傑の、この山中にありといふ、天の知らせか、何にもせよ、奇異なる事を見るものぢやなア。

ト思ひ入れ。ドロ〳〵打上げる。雲氣を引いて取る。

ハア、これで讀めた。先年主君の下向の折柄、この足柄に、力量勝れし者ありと仰せあつて、この頃急に思ひ出したやうに、この貞光に嚴命あり、此やうに姿を變へ、似た山樵となつて心を附くれど、此奴と思ふ者とては、女の連れるいつもの小僧。もしや彼奴が今の雲氣の……よし／＼眠氣ざましに、一服のんで待ち合せて、二人の身の上……オヽ、それがよい／＼。

ト摺り火を打つて莨を吸ひつける。

〽遠近の、たつきも知らぬ山中に、我れもや友と呼子鳥。

ト本行の次第になり、花道より山姥、いろ／＼の手遊びを附けたる柴を擔ぎ、誂らへの杖を突いて出て來り、花道にとまる。

〽よし足曳の深山木に、咲くてふものや霧の花、穂風亂せば自ら、白髪と人の夕月に、軒の瓦の鬼ならで、山姥たまの黒髪を、結び捨てたる蔦かつら、錦もいつかそれなりに、拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の床に濡れてぬる、昔の浮氣しのばじと、獨りこちしてたどりくる。

トよろしくあつて舞臺へ來る。斧藏立ちかゝつて

斧藏　オヽ、怪童が阿母、今日はまだ逢ひませせぬな。

山姥　ほんに斧藏どのかいな。

斧藏 今日は小僧が見えませぬが、どうしましたな。

山姥 サア、今まで連れ立つて來ましたが、また後へ下がつて、猪猿を相手に、角力をとつてゐると見えますわいなう。

斧藏 そりやア危ないく。マア早く、呼ばつしやいく。

山姥 アヽ、おとましい事ではある……コレく怪童……怪童丸ヤアイ。

ト向う揚げ幕にて

怪童 オヽイ。

ト大太鼓の鳴り物になり、怪童丸、金太郎の拵らへ、枇杷の花の枝を擔ぎ、走り出て來り、花道にて

〽神樂月とて片山里も、笛や太鼓で面白や、足冷たさに草履貰うてたもれ、子を取ろく、どの子が目つき、跡の子が目つき、籠目々々、籠の中の鳥は、いつく出やる、夜明けの晩に、つるくつツぱひつた、木の根笹原くぐりくくぐつて、ひよいと來たみどり子、母を慕うて山道を、尋ね生咲きの梅の色、わやく盛りは愛らしき。

斧藏 オヽ、怪童、歸つたかく。

山姥 サアく、ちやつとお辭儀しやく。

ト山姥、怪童の頭を捕へて辭儀をさせる。

斧藏　ヤレ／＼、よくお辭儀が出來たな。

山姥　なんの、山家育ちでとんとモウ。育つといへば斧藏どの、いつやらから爰へござつてなが、こなさんの生れは、マアどこぢやえ。

斧藏　わしかえ。わしやア炭賣りのづう國で、信濃者サ。なにか輕井澤のおじやれにくらひこんで、所に居られず、この山家、成る程、川立ちは川とは、よく云つたものサ。

山姥　そんならなんと慰みに、その輕井澤の話しを爰で

斧藏　おれにしろか。話さう／＼。そんならマア、こなたは、そのお女郎に。

山姥　なんのマア、わつけもない。

斧藏　ハテ、わつけがあらうがあるまいが、獨り話しがなるものが。コレ、聞かつしやいよ。

〽村の日待のなぐれ足、お稻荷どのにつまゝれて、氣もうか／＼と輕井澤、手織り木綿の手拭も、取替へながら緣となり、上へ掛けたる蒲團さへ、ふは／＼玉子で飲みかけて、醉うた醉うた昨夜の酒に、越後同者の頰がまち、毆つたもにしから起つたこと。

ト斧藏、山姥の胸ぐらを取り、手を振りあげる。これにて怪童丸、ツカ／＼と斧藏を突きのけ、くら

はせる。

アイタヽヽヽヽ。

ト山姥驚き、怪童丸をこちらへ退ける。

山姥　これはしたり。

斧藏　こいつはよい。今のを本だと思つたか。ハヽヽヽヽ。

山姥　ありや伯父さんが冗談ぢや。堪忍しやく。

怪童　そんなら母樣、何ぞ下され。

山姥　オヽ、遣らうともく。其方に遣りたさ着せたさに、夜々毎にこの母が、五百機立てる窓のうち。

〽枝の鶯、糸繰り綿繰り、織りて着せたる母のほんぞ子、里へ下れば里の土産に、でんく太鼓にふり鼓、打つや空蟬から衣、千聲萬聲の砧に合はす、鼓の拍子面白や。

斧藏　ウム。温なしく遊ぶな。コレ、お爺が好い物を貸してやらう。

ト鉞の柄へ三尺帶を結びつけ

コレく、これを馬にして、どうだく。

山姥　こりやよからう。サアく怪童、お馬が參る。

怪童　ハイ〳〵〳〵。

〽月毛にあらぬ斧の駒、取るや手綱の凛々しげに。

先退け〳〵、先退けろ。

〽お月様はいくつ、十三七つ、まだ年や若いな、お供のお爺が、振り出す大太刀大烏毛、轡の音もりん〳〵がらく〳〵、りんがら〴〵、母の胎内蹴破つて、産所も産宿も山なれば、取上げお婆がないゆゑに、産湯の代りに瀧水を、洗せられたかどこもかも、眞赤くなつてきた嵯峨の、踊り口說きは何と云うた〽おらが在所は奥山の、爺打のてんぐり〳〵、栗の木の根を枕にござれ、抱いてまろび寢、こゝに女郎が戀する山家の品もので、帶解いてござれ、抱いてまろび寢。

怪童　母様、乳のまう。

ト取りつく。

山姥　この子わいの。又しても乳々と、そんな事云やると、抓め〳〵しますぞ。

トこれにて怪童泣き出す。

斧藏　オヽ、泣くな〳〵……可哀さうに、そんな事せずと、騙さつしやいよ〳〵。

山姥　ほんにモウ、わやくでどうも……コレ〳〵、母さんがいつものやうに、山めぐりして遊ばせうほ

どに、サア〱、機嫌を直しや〱。

斧藏 山めぐりとは面白い。おれも一緒に。

山姥 アヽコレ。

ト手にて、嘘だといふ思ひ入れ。

斧藏 そんなら何ぞ、話しなりと。

山姥 ほんにマア、滅多な口も。

斧藏 ハテ、さう云はずと、話さつしやい〱。ドレ、吸ひつけて聞くべいか。

〽浮世語りも恥かしや、愛に引かれて山遊び 〽春は梢に色香もまして、柳は緑、花はくれなゐ三重八重七重、霞の眉を引きはへて、谺うつなるふり鼓、梅ケ枝諷ふ佐保姫の、早蕨に手を持ちそへて、暮るゝを惜しむ親子草、浮れて笑ふ山めぐり 〽秋はさやけき二度の月 〽待つ宵は、三味線彈いてしんき節、泣いて別れのきぬ〲に、袖よ袂よ恨みわび 〽末はどうなる事ぢややら、よいやさ〱、此方もさはりはない操、只一筋に絲巻きの、しめくゝりせし今の手を、彈いて夜すがら山めぐり 〽冬は取分け祝ひ月、いとし我が子を肩車に乘せて、連れて行くのゝさまへ、禰宜が鈴ふる千早ふる、巫女も昔は十七娘、今は婆樣、どんつ

くどんな色事も、齒に合ひませぬというて、斷わり云はれた〳〵我れは子ゆゑに老を忘れて雪をさそうて山めぐり、又ある時は花の影、休む重荷に肩を貸し、里まで送る折々は、親とや人の見るやらん。

斧藏　成る程、親の丹精は有り難いもの。併し話しの其うちに、人を助くる善行をなすは、察するところ先帝の北面、坂田の藏人時行は、柔弱非力の身を悔み、無念の最期をとげたるゆゑ、その妻これを深く嘆き、何卒勇士を產まんものと、懷妊の身にてこの伊豆の深山に籠り、山神に誓ひを立てしと聞きつるが、もしや二人は時行の、妻子の衆ではござらぬか。

山姥　成る程、察しの上からは、何をか包まん。人を助くる行をなし、坂田の家を起さんと、山神に祈願をかけ、產み落せしはこの怪童。

斧藏　さてこそ〳〵。然らば主君賴光公へ、この貞光が推擧なさんが、怪童を差上ぐる、心はなきや、いかに〳〵。

山姥　初めて聞きし、斧藏どのゝ御本名。何がさて、怪童丸を賴光公へ、お宮仕へは母の喜び。この上よしなに。

斧藏　得心あつて先づは重疊。何はさて置き某が、相手となつて怪童の、力の程を試しくれん。

山姥 コレ〳〵、怪童。大事のところぢや。負けまいぞ。

怪童 おもちれえ〳〵。

斧藏 サア來い怪童。

怪童 合點だ。

〽神變不思議の怪童丸、こなたはあしらふ勇力士、怪童いらつて傍へなる、松を根こぎに引き拔いて、につこと笑うて立つたるは、人も恐るゝばかりなり。

斧藏 松の根こぎは面白い。サア、ぶつかけて來い。

怪童 合點だ。

〽勝負々々と打ちかゝるを、すかさぬ强氣の力瘤、幹より腕の節くれて、しつかと摑めば、めり〳〵〳〵。

ト流しになり、斧藏怪童松の樹を引拔き、これを持つて花道へ行き、引き臺の上へ上がり、吉例の通り、よろしくあつて、兩人キッと見得。これにて舞臺へ引いてくる。鳴り物打ちあげる。

〽えいや〳〵と捻ぢ切つて、左右へ別れて立ちたりしは、目覺ましかりけるその姿、又いさぎよく。

斧藏　オヽ、力の程は見えた〳〵。名將の眼力違はぬ。勇士にめぐり逢ひし時、公に仕へる時を得し心を以て、坂田の公時と、名乘られよ怪童丸。

山姥　エヽ、嬉しや、忝や、幸ひありあふ手遊びの、コレ。

ト柴に附けたる大小を出して、怪童丸にやり

今日からしては、公時といふ侍ひぢやほどに、温なしうしませうぞ。

怪童　そんならおれは、今から侍ひになるのかや。嬉しい〳〵。

ト怪童丸、手を叩いて喜ぶ。山姥、思ひ入れ。

山姥　オヽ、嬉しい筈〳〵。併し、いま別るゝ上からは、もう母には逢はれぬぞよ……コレ、怪童丸、爰へ來や。

〽夫の形見と見るにつけ、其方の大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母獨り寢の閨のうち、さぞ俤のなつかしからう、賴光公へ御奉公、勤むる隙の明暮れに、武術を勵み奉公せよ、必ず〳〵人様に、山姥の子と笑はれな、今別るゝともこの母が、其方の影身に附添うて、武運長久守るべし、とはいふものゝこれがマア、名殘惜しやいとをしやと、抱きあげ抱きつき、思はずわつと一聲は、梢に響きいぢらしき。

斯くては果てじ、怪童丸を、お頼み申すは貞光さま。名殘は盡きじ、早おさらば。

へ暇申して歸る山、尋ねし花の春過ぎて、姿は夏の雪の峰、山又山に山めぐりして、行くへも知れず失せにける。

ト上の方へ砧の霞にて山姥消える。

怪童　母樣イなう〳〵。

ト尋れる。

斧藏　コリヤ〳〵怪童、幼なけれども勇士の胤。泣きをとゞめてお目見得の用意。早く〳〵。

トこの時向うにて

雷雲　ヤレ來いやい。

トどん〳〵になり、花道より雷雲、鯰坊主、裸身へ鎧を附け、鐵の棒をかいこみ、跡より軍兵十五人附きそひ、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

斧藏　ヤア、正盛どのゝ上意をうけ、怪童丸を召捕りに、猪熊入道雷雲が向つた。異議に及べば者どもに云ひつけ、ぶッちめるが、怪童、返事は。

斧藏　ヤア、小ざかしいづく入め。怪童丸は賴光公へ、貞光が推擧した。手柄はじめに正盛が、くらひ

潰しを怪童丸、合點か。

怪童　合點だ。

斧藏　刃物いらずに、獸めらを。

　ト傍の松を拔いて怪童丸に渡す。

怪童　一疋づゝは面倒だ。みんな一緒に、來い〳〵。

雷雲　ソレ、者ども。

軍兵　やらぬワ。

　トこれより誂らへ太鼓入りの鳴り物になり、雷雲かゝるを斧藏引附け、上の方の岩組みに腰をかけて見物してゐる。怪童、皆々を相手に花々しきタテあつて、ト〃皆々「ドッコイ」ととまると、岩組みの内にて

山姥　やみなん〳〵。

　ト大ドロ〳〵になり、岩組みを左右に開く。向う一面に遠見の山。霞の上に大いなる絹張りの月。爰に山姥、白髪の形にて、岩臺に立ち身。この見得にて、よき所へ押し出す。皆々見て

皆々　これは。

〽今はありつる山姥の、鬼女の姿を現はせしは、これ人界を離れししるし、榮ふる源氏と我が子の武運、行く末長く守るべし、夢々疑ふ事なかれ。

斧藏　エヽ、有り難い。

雷雲　山姥ぐるめに打つて取れ。

軍兵　やらぬワ。

怪童　なにを。

〽勝色見する公時が、眞さきかける冬至梅、今ぞ盛りの源氏の御代、ゆるがぬ芝居ぞめでたけれ。

ト此うち斧藏、雷雲と立廻つて、上の方にキッと見得。怪童丸、皆々を積み重ね、その上に跨がり、金の字を書いたる小さき扇を使ひ、よろしく見得。

皆々　どつこい。

斧藏　まづ今日はこれぎり。

めでたく　　打出し

豎話水滸傳

じだいせわすいこでん

臍話水滸傳

遠州阿波ヶ嶽の場

役名‖‖應塔の宮の神靈。日本駄右衛門實ハ石見太郎景純。堀江彌惣次。手下、鬼殺し官八。同、鷲摑み。同、よたん坊。同、小猿。判人、蟲除喜兵衛。

本舞臺、三間の間、一面の松並木、うしろ黑幕。爰に鷲摑み、よたん坊、小猿、いづれも盜人の形にて、旅人の喜兵衛を捕へゐる。喜兵衛は木綿やつし、三度笠、一本差しにて、柳行李と包みを兩掛けにして擔ぎ、ぶる〳〵慄へてゐる。木魚の音にて幕明く。

三人 サア、キリ〳〵と置いて行け。

喜兵 ア丶、モシ〳〵、斯うなつてはナニお前方に、嘘を云ふものでござりませう。雜物といつたら、着替へが一つと紙合羽。折角物のありさうな、旅人と見られたが嬉しさに、これを置いて參りま

せうほどに、どうぞそれで御料簡を。
鷲摑　べら坊め、三人かゝつて、布子一つに丸合羽。
小猿　そんな事で盗人が、飯を食つてゐられるものか。
よた　懐の財布にはズッシリあんべい。
三人　サア、そこへ出しやァがれ。
喜兵　イエ〳〵、懐にありやァ他人の金、なんのわしが惜しみませう。有やうは大阪から、この遠州まで旅がけに、女郎の身代三百兩、取りに來た者。受取り次第歸りには、めでたく取られて進ぜうほどに、どうぞマア今夜のところは
ト行かうとする。
よた　待ちやァがれ。それがさうとて此まゝにやつちやァ、盗人の冥利に盡きるワ。
鷲摑　金が無いなら無いなりに、その着てうせる褞袍も
小猿　雜物ぐるめに
三人　置いて行け。
喜兵　成る程、商賣がらとはいひながら、非道な手合ひだ。……エヽ、どうするものだ。六ツを七ツと

聞き違へて、夜深に立つたがおれが不請だ。

ト云ひながら、帯を解き、股引ばかりになり

サア、お取りなさい〳〵。

よた　なか〳〵未練のない奴だ。

喜兵　ハテ、未練があつて堪るものか。わしも商賣は判人だ。ソレ、一つにひん丸めて、渡します〳〵

ト布子で皆くるむ。

小猿　成る程、珍らしい剝がれ手だ。

喜兵　珍らしいといへば、アレ〳〵

ト空へ指さす。

三人　なんだ〳〵。

ト仰ぐうち、喜兵衛、雑物を引ッ抱へ

喜兵　泥坊々々〳〵。

ト一散に下座へ逃げて入る。

鷲掴　おきやアがれ。おいらを一杯

ト追ひかけようとする。

小猿　これサ、あれしきの半下仕事。追はずとも、捨てゝ置けく〳〵。

ト ばたく〳〵になり、向うより官八、同じく盗人の拵へにて、走り出て來り

官八　三人ながら、爰に居たか。

よた　鬼殺しか。

三人　どうしたく〳〵。

鷲摑　手強い奴にでも出會つたか。

官八　イヤく〳〵、そんな事ぢやアない。今宵、好い鳥が見えたゆゑ、おぬし達と云ひ合せて

鷲摑　そいつは耳寄り。

小猿　して、その仕事は。

官八　濱名の用金四千兩、侍ひめがぼつ立てゝ、あれく〳〵あそこへ。

よた　面白い。一度にズッシリ四千兩。

官八　爰へうせたら

三人　合點だ。

ト四人思ひ入れ。禪のツトメになり、馬士、千兩箱を四ツ附けたる駄賃馬を曳き、馬士唄を唄ひながら出る。跡より中間、放提灯を持ち、彌惣次、旅形の侍ひにて、三度笠を持ち、出てくる。

馬士　モシ、旦那、この頃この遠州に、途方もなく盗人が流行りますに、それを知りながら、なぜ夜深にお立ちなされました。

彌惣　さればサ、當國の身共ゆゑ、ヤレあそこへは押込んだ、爰へ入つたと、噂によつて存じ居れど、宿々のおじやれに戯れ、日がこんだゆゑ七ツ立ち。わいらも道に心を附けい。

皆々　畏まりました。

彌惣　サヽ、急いでやれ〳〵。

ト皆々舞臺へ來る。四人跡先を支へる。皆々「ワツ」と驚く。

官八　待ちやァがれ、旅人、この海道を通るなら

鷲摑　馬に附けた四千兩で

よた　道を買うて通つて行きやれ。

馬士　モシ旦那、えて吉でござります〳〵。

ト慄へる。

彌惣　よいワ〳〵……ヤア、おのれらは憎くい盗賊ども。先達てより御領内を、騒がすさへ横道なるに
領主の御舍弟、主税之助どのゝ御用金を奪はんとは、鳶の卿へた油揚げを、犬の覘ふに等しい奴
等。たつてと申さば、目に物見せるぞ。
官八　やかましいわえ。領主であらうが、獵師であらうが
鷲摑　盗人にその見境があるものか。
小猿　錠鍵おろした金でさへ、引ツたくるが盗人の商賣。
よた　その金さへ渡したら、うぬが命は助けてやるべい。
四人　應と云つて渡して行け。
彌惣　ヤア、存外なる盗人めら、片寄つて通し居らう。
官八　エヽ、面倒な。殺らしてくれべい。
彌惣　慮外な奴等。
　ト刀の柄へ手をかける。四人一度に拔きはなす。皆々驚き、馬を捨てゝ下座へ逃げて入る。禪のツト
メになり、官八、よたん坊、馬を曳いて下座へ入る。彌惣次「南無三」と追ひかけ行かうとする。小
猿、鷲摑み、支へて打つてかゝる。彌惣次、ちよつとあつて同じく逃げ出す。兩人これを追つて下座へ

入る。ト風の音になり、松並木を引いて取る。黒幕切つて落す。

向う一面の岩山、誂らへ洞、所々に松杉生ひ茂り、日覆より吊り枝。舞臺、雨落よりも松杉の梢。すべて遠州阿波ケ嶽半腹の景色。殘月を下ろし、物凄き體。爰に駄右衛門、誂らへの形にて、落葉枯枝を焚き、松の枝へ眞鍮の大きなる香爐を吊し、これにて茶を煎じゐる。この道具、舞臺よき所まで押出す。矢張り風の音、かすめし時の鐘。

駄右　爰は遠州阿波ケ嶽。イカサマ、麓と違つて、山風のこの烈しさ。世界は櫻の眞盛りに、たま／＼夜寐ようとすれば、寒さにろく／＼目も合はず。こりやア明日は譬への通り、盗人の晝寐とせずばなるまい……ホウ、もう茶も出來た。ドレ一杯。

ト柄杓を取り、茶碗へ茶を汲まうとして

慥か明日はその昔、鎌倉で失はれた、應塔の宮の御命日。南朝榮えてあるなれば、香華佛事もあらうもの。吉野の内裡は荒れ果てゝ、今は一遍一雫の、回向茶湯も誰れ一人、手向くる者もなき人へ、せめて出花を手向けて進ぜう。併し器が

トあたりを見廻し

よいワ。柄杓のまゝで

ト汲んで

ハテ、時節だなア。

ト思ひ入れ。大薩摩浄瑠璃になる。

〽龍門玄上の土に屍は埋めども、魂は殘りていま爰に、昔の姿髣髴と、應塔の君現はれたり。

ト大ドロ〳〵になり、柄杓に焔硝火パツと立つと、誂らへの杉の幹より、應塔の君の靈、白き裝束、異形なる拵へにて、手に一卷を持ち、茂りし葉の中へホツと現はれる。駄右衞門これを知らず、回向の思ひ入れ。寢鳥になる。

應塔　けに星霜は積れども、深き恨みの消えやらで、おことが回向の名に引かれ、爰に姿を現はしたりいかにや石見、いかに景純。

トこれにて駄右衞門思ひ入れ。

駄右　誰れだ〳〵。駄右衞門といふ名は呼びもせず、ヤレ石見の景純のと、包み隱す名を呼んだは。

ト應塔の君の靈を見附け、思ひ入れあって

仲間の奴等より外には、誰れも知らない寄合ひ場所。エヽ、聞えた。駄右衛門一人し侮つて、狐狸の化かしにうせたか。そんな事で落ちるやうな、おれだと思ふか。早く消えてなくなれ。

應塔　いやとよ景純、さ思ふは理りなり。我れこそ建武のその初め、この世を空しく鎌倉にて、淵邊が爲に落命せし、應塔の宮が亡靈なり。

駄右　ヤヽ。ナニ應塔の宮にてましますとや……して又、いかなる事にて駄右衛門に。

ト谺。寢鳥。

應塔　過ぎつる建武二年の秋、逆臣の起りしより、南朝方の勢ひ薄く、その時赤松主稅、討死の砌り、九死を出でゝ、石見太郎といふ名を包み、白浪の世渡りに、一生その身を果さんこと、これ武士の本意に非ず。さるによつて守義が、其方に告げんず一條あり。南朝の勢ひ薄しといへど、いま吉野の胎藏坊に、密かに忍び給ふ若君。何卒汝守り立てゝ、旗擧げなして南朝の、威勢を再び輝やかせよ。この事示さんその爲に、假に姿を見えしぞや。

駄右　ハヽッ、有り難き君のお詞。我れも生涯盗賊にて、朽ち果てん事無念さに、少したりとも據り所あらば、赤松の名を立てんず爲、便りとなるべき足利の重寶、當國濱名が預かりの、秦山府君の尊像を、盗み取つて所持なせど、これを崇むる主なければ、いたづらに世を送るところ、南朝方

の御若君、吉野に忍び給ふ上は、何か差おきこれよりして、味方を集め一揉みに、尊氏が九代の武將、義尙が首引ッ提げて、過ぎし建武の昔より、いま長祿まで百余年、恨み晴れざる應塔の君へ、石見太郎が手向け申さん。

應塔 ホヽオ、勇ましゝ〳〵。さばかり心決せし上は、汝に與ふる一品あり、……これこそそのかみ守義が、木津十津川の八庄司、熊野を初め味方を招き、一度勝利を得たりし連判。今もその末そこ爰に、殘りとゞまる者共へ、我が舊情の告げ知らせ、この連判にて一味を集め、吉野に再び花咲かせ、應塔の宮守義が、修羅の苦患を免からせよ。

駄右 仰せにや及ぶべき。然らば君のその連判、申し預かり、一味を集めん。

應塔 イザ。

ト仕掛けにて一卷、駄右衛門の手に入る。

味方の催促軍用金、集めん手段は幸ひと、今假の名の駄右衛門が、所行にまさる事あらじ。

應塔 暫しも胸に怠慢なきやう、苗字も二木駄右衛門と呼ぶ習はし、急いで事を計れよ景純。

駄右 有り難き君のお詞、背くこそ恐れあり。然らばこれより大望成就の、事成るまでは今のなりはひ名も其まゝに二本駄右衛門。やがて天下に名を揚げん。ハテ、快やな。

發端



武逢同



應塔　ホヽウヽ天晴れ勇猛頼もしゝ。猶また其方が一方の、助けとなさん者こそあれ、汝が誠の素性を尋ね、これと牒して事を發せよ。

駄右　いかにも、我が素性は、もと參州吉田の驛に、刀を添へて捨てありしを、石見景俊拾ひ取つて、水子より養育とは聞きたれども、いかなる者の胤かは知らず。そを君の業通にて、御存じあらば何卒詳しく。

應塔　素性告けんも忙しなや、閻王宮より使ひの獄卒。

駄右　すりや、教へ給はる暇もなく

應塔　最早此まゝ。

駄右　すりや、君には

應塔　おことが旗擧げの時を待つぞよ。

駄右　それは時日はよも過さじ。草葉の蔭より照覽あれ。

應塔　嬉しや。さあらば、二本駄右衛門。

駄右　應塔の君樣。

應塔　さらば〳〵。

〽云ふかと見れば山風に、散りて形はうせ給ふ。

ト煙硝火立つて應塔の宮消える。ドロ〱打上げる。

駄右　ハテ、思ひがけなき君の御告げ。吉野にまします若君守り立て、事を起せとこの連判、賜はつたるも我が手をかり、怒りを散ぜん思し召し。この上は先達て、奪ひ置いたる泰山府君の

ト懐より誂らへの厨子を出し

この尊像を便りとなし、徒黨を結んで義兵の旗擧げ。肉を刻まれ骨碎かれ、罪にあふともそれからそれ、室町どのゝに一泡吹かせで置くべきか。南朝方の神靈たち、修羅の苦患を免かれ給へ。南無阿彌陀佛々々〱〱々。

ト思ひ入れ。この時、ゴンと時の鐘。此うち上と下より以前の四人、千兩箱を各自抱へ、出て來り

四人　お頭。

駄右　コレ。

ト所々にて鷄の聲。駄右衛門、空を眺め

もう夜が明けるか。

官八　今夜の仕事は四千兩。

鷲擲　軍用金の積みはじめ。

駄右　ヤレ……靜かにせぬかえ。

ト思ひ入れ。よろしく、拍子幕の内、踊り地にてツナギ、引返す。

幕

濱名屋敷の場

役名——濱名左門之頭。濱名主税之助。中川隼人。荒井玄蕃。同養女、八重町。堀江彌惣次。判人、蟲除喜兵衛。傾城、東路。仲居、お篠。同、おさが。奥女中、竹川。家臣、關野貢。同、鹽見當馬。若黨、瀬平。

本舞臺、三間の間、向う一面の綟子障子、上の方、圍ひ。下の方、桃の立ち樹、柴垣、手水鉢なぞ飾りつけ、すべて濱名下館の體。爰に玄蕃、老けたる拵へ、麻上下にて駒鳥の鬼。主税之助、羽織着流し。東路、傾城。竹川、お篠、おさが、赤前垂れの仲居。息才、茶道。みな／＼駒鳥なしてゐる。銚子、杯、肴なぞ取散らし、駒鳥の合ひ方にて幕明く。

主税　どの子が目ずき。
玄蕃　後の子が目ずき。
皆々　サア取つて見やれ。
　　　トよろしくあつて玄蕃、東路を捕へ
玄蕃　サア〳〵、捕まへた〳〵。
皆々　東路さんが鬼ぢやわいな。
主税　東路が鬼とは、面白い〳〵。サア〳〵、早く捕まや〳〵。
東路　モシ、殿さん、わたしやどうぞ堪忍して下さんせいな。
竹川　イエ〳〵、そりやならぬぞえ。殿さんが堪忍なさんしても、わたしが堪忍ならぬわいな。
しの　それ〳〵、わたしらも、鬼になつた事ぢやによつて
さが　なんでも東路さんを、鬼にせにやならぬわいな。
玄蕃　さうだ〳〵。年よつたこの玄蕃さへ、極めなればせう事なく、鬼になつたではござらぬか。
息才　それはその筈。只さい怖い玄蕃さま、鬼どころではござりませぬ。本名の荒井閻魔さますサ。
玄蕃　何を吐かし居る。

ト睨めつける。息才しよげる。

主税　イヤ〳〵、こりや息才めが云ふ通りぢや。併し、顔に似合はぬ粋な玄蕃、いつぞや浪花で馴染んだ東路、歸國しても露忘れぬこの主税之助が心を汲んで、わざ〳〵遠い遠州まで、呼び下して逢はせてくれる彼れが忠心。東路、其方もよう禮云うたがよいぞや。

東路　そりやモウ、禮の段かいな。否な客衆と枕も交さず、好いたあなたと此やうに、お側を離れず居るのぢやもの、大抵嬉しい事ぢやござんせぬが、重なる夢の度毎に、思ひが増して今にでも、あの浪花へ戻るのが、一しほわたしや

主税　オツト、もうどこへもやりやせぬ、といふ譯は、あの玄蕃、濱名左門之頭といふ大名の弟が、一旦屋敷の敷居を跨いだその女郎を、去なしたと噂があつては、武門の恥辱、家の名折れ、身請けして誰れ憚らず、奥にせいとて、上方の藏屋敷へ、用金を云うてやつてくれたゆゑ、今にも金の着き次第、直に身請けをするわいなう。

東路　エヽ、そんならアノ、もうわたしや此まゝ

ト喜ぶ。

玄蕃　それ〳〵、直ぐに濱名主税之助さまの御簾中。金子を取りに遣はす次手に、新町の親方へも、證

文持つて参るやうに云つてやつたれば、これもよし、金子も最早着く時分。なんと東路どの、よい手番ひでござらうがの。

東路　ほんに、そんな事とは露知らず、今にも別れにやなるまいかと、幾瀬の思ひでござんしたわいな

主税　まだ膽を潰す事がある。其方の身請けとどんぐるめ、一緒に呼んだ仲居の二人も、次手に立金してやるワ。

しの　そんならアノわたしらも、東路さんと共々に、このお屋敷に居るのかいなア。

さが　それではこれからむづかしい、お客の機嫌を取らぬのみか、否な杯助ける事もなう

兩人　こんな嬉しい事はないわいなア。

竹川　イヤ申し、憚りながら、承りますれば、東路どのを身請けとやら。左樣な事が物堅い、殿樣のお耳に入らば、もしもあなたのお身の上に。この儀を、思し召しかへられまして、よろしからうと

主税　アヽ、コレ〳〵、默りや。手廻りの女ながらも、お篠おさがと同じやうに、赤前垂れの仲居ぢやないか。それに身請けを兎や角云ふは、商賣にも似合はぬぞや。

竹川　サア、この衆達と同じ姿も、あなたの御意ゆゑよからぬ風俗。マアこれ以て殿樣の


松本幸四郎
豊国画

玄番　これサ〳〵、竹川、いはれざる出過ぎ事。申してよければこの玄番が、お止め申すに、何を小癪な。扣へてお居やれ……時に、仕掛けた駒鳥の、鬼は慥かに東路どの。
東路　もう、そりや流して下さんせいなア。
主税　それ〳〵。ちと滅入つて來た。酒にせい〳〵。
しの　イカサマ、酒がよからうわいな。
息才　ちとお菓子もようござりませう。
主税　たわけ者め……サア、そこで、踊れ〳〵。
ト太鼓地の唄になり、息才、出鱈目に踊つてゐる。此うち向うより瀬平、足輕の形にて、六尺棒を持ち、跡より町人百姓二三人、旅形の八重町を捕へ、捨ぜりふにて出て來り
瀬平　ヤイ〳〵、默らぬか〳〵。
皆々　でも、この女が、行くまいとジヤ〳〵ばるゆゑ。
八重　それぢやというて、身に覺えもない事云うて。
町人　行かぬとて、連れずに置かうか。
皆々　うしやアがれ〳〵。

瀬平　ヤレ〳〵、騷々しい奴等でござる。

ト皆々舞臺へ來る。

立番　コリヤ〳〵、見れば女子を捕へて聲高に、何事ぢや〳〵。

瀬平　ハツ、この者どもは御城下の町人ども。あの女を引ッ捕へ、お訴への事ござると申して、參りましたのでござりまする。

立番　女を捕へて訴へとは、何事だ。町人ども、早く申せ〳〵。

瀬平　その儀は只今承りしところ、近頃御城下にて殊の外盗賊はびこり、押込み、がんどう、家尻切り。それゆゑ皆々家職を捨て、日夜用心いたすところ、見馴れぬ女のウロ〳〵と、御領内を徘徊いたすは、全く所々の案内を見置き、盗賊どもを手引きの女と、それゆゑ召連れのお訴へでござりまする。

立番　町人ども、今の通りに相違ないか。

町一　左樣でござりまする。昨日は村方、今日は御城下。

町人　毎日々々うろつき歩き、今朝も今朝とて棒鼻の

百一　地藏堂に寢て居つたは、盗人の手引きに相違ござりませぬ。

皆々　とくとお吟味下さりませう。

八重　イエ〳〵、わたしや尋ねる者があつて、いづくの國と當途もなく、めぐる月日の其うちには、獨り旅とて宿貸さず、外に寢た夜は幾夜かさ。殊に此方の御城下では、胡亂な女ぢや泊めるなと、つれない詞に詮方なく、見れば町はづれの地藏堂、何卒便りよき方へ、導き給へと一夜を明かしそろ〳〵と下る心。その所へこの衆達が見えまして、ヤレ盜人の手引きであらうと、云ひ譯するも聞分けず、お屋敷へ連れられました。モシ、嘘ぢやござりませぬ。眞實でござりまする。どうぞ此まゝ、モシ、其方のお殿樣、どうぞお願ひ申しまする。

主稅　なんぢや、其方のお殿樣。

ト八重町を見て

ヤア〳〵、ても美しい……イヤ、憎くい女め、歸す事罷りならぬ。主稅之助が直々に、とくと詮議をせねばならぬ。

玄蕃　其方達はこの女を、差置いて罷り立てサ。

皆々　へイ〳〵、有り難うござりまする。

町一　どうぞ其奴に白狀さして

町二　盗人狩りをなされまして
百一　御領内の者どもが
瀬平　ハテ、やかましい。口数きかずと、早く立て〳〵。
皆々　へイ〳〵。サア、行きませう〳〵。
トてんつゝになり、町人百姓皆々向うへ入る。此うち主税之助、酒盛りしてゐる。
主税　町人どもが皆行たら、女をちやつと、爰へ〳〵。
玄蕃　すりや、輕々しう、あなたが女の
瀬平　御詮議を遊ばしまするか。
主税　なんの詮議。あの女を爰へ呼んで、相をさすのぢや。
ト玄蕃、瀬平思ひ入れ。東路ムツとして
東路　これいなア殿さん、女子さへ見りや、びろ〳〵と。
竹川　殊に何やら譯ある女。
しの　ほんにマア、氣の多いのにも
さが　程がござりますわいなア。

東路　この相をあのお方にさす事は、マアわたしがならぬわいな。

息才　ハテ、吝い事を云つたものだ。

主税　さう云へば身共も武士。云ひ出したこの相を、あの女にさせいで置かうか。

東路　イエ〳〵、相ばかりならよけれども、ひよんな事でもさしやんしてはと、それでならぬといふ事ぢやわいな。

主税　何をしやうと、捨てゝ置きやいの。

東路　イヽエ、捨てゝは置かれぬわいの。

主税　捨てられずば、どうなとしやいの。

ト持つたる杯を抛る。

東路　どうなとせいでは。

ト銚子を投げる。玄蕃、瀬平、思ひ入れ。八重町、氣の毒なるこなし。

主税　イヤ此奴が。

東路　イヤお前が

ト有りあふ物を投げる。皆々見かね、中へ分け入り

竹川　これはしたり、はしたない。どうしたものでござりまする。
しの　モシ、廓とは違ふわいな。
玄蕃　そんならこれが、口舌とやら申すのか。
瀬平　ひよんな所へ女が來たゆゑ、女夫喧嘩のお稽古と見えます。
八重　サア、それぢやによつて私しは、直ぐにお免しなされて
主税　イヤ〳〵、その女歸す事は、ならぬぞ〳〵。
東路　アレ、矢ツ張りあのやうな
玄蕃　ハテサテ、これはいかな事。マア〳〵奥へお二人を
皆々　それ〳〵、マア、お出でなされませい。
ト太鼓地の唄、皆々捨ぜりふにて、兩人を奥へ連れて入る。玄蕃、瀬平、八重町殘る。
玄蕃　ヤレ〳〵、埒もない事ではある。
瀬平　あのお身持ちが、殿樣のお耳へ入らば、もしひよつと重きお咎め……イヤ、科の次第も疑はしきこれなる女は。
玄蕃　身共が手ひどき責苦をかけ、その同類を白狀さす。

八重　エヽ。すりや覺えもなき、わたしが身を
瀨平　糺明あらば責め道具、廣庭へ廻しませうかな。
玄蕃　ナニこれしきの女を拷問。搆はずと其方は、次へ行つて休息せい。
瀨平　左樣なれば玄蕃さま……ドレ、一服やらかすべいか。
ト合ひ方。瀨平、下座へ入る。
玄蕃　女、ズツとそれへ出い。
八重　ハイ。
トおづ〳〵出る。
玄蕃　すりや、其方は盜賊の、手引き致す者ではないか。
八重　なんのマア、恐ろしい、左樣な者でござりませう。人を尋ねて步きまする者に、違ひはござりませぬ。
玄蕃　イヤ、その詞呑みこめぬ。若き女の連れもなく、當途定めぬ一人旅、その大膽な心では、盜人の手引きしかねもせまい。サア、有やうに白狀せい。
八重　イヽエ、どのやうに仰しやつても、左樣な覺えはござりませぬ。

玄蕃　ないとて云はさで置くべきか。實正云はねば引ッ縛つて

　　ト立ちかゝる。八重町を引附ける。

八重　そりや又あんまり御無體な。

　　ト立廻り。玄蕃、尻居に撞となる。八重町、下に飛んでキッとなる。

玄蕃　なか／＼機轉のきいたる女。して又何ゆゑ一人旅。

八重　ヤア、一人の母に死別れ、行くへ知れざる兄さんの、在所を尋ね方々と。

玄蕃　すりや、便りなき女の一人旅。

八重　ほんに儚いわたしが行く末。

玄蕃　しかと左樣か。

八重　なんの僞り申しませうぞ。

玄蕃　容儀といひ、取りまはし……イヤナニ女、それが定なら他生の縁、改めて玄蕃が便りにならう。

八重　何と仰しやる。

玄蕃　親子になつて遣はさう。

八重　アノ、素性も知れぬわたしが身を

玄蕃　ハテ、たとへ素性は何であらうと、そこが女は氏無うて、玉の輿に乘るまいとも。

八重　いはれぬあなたの御深切は、有り難けれど

玄蕃　不承知なれば、便りないと云ふも僞り。矢ツ張り盜人、手引きの女か。

八重　イヽエどうして、さら〳〵そんな

玄蕃　さうでないなら親子となるか。サア〳〵、女、心を定めて返事をせいサ。

ト八重町、思ひ入れあつて

八重　それ程までに仰しやる事。

玄蕃　得心いたすか。

八重　サア、否ともどうやら。

玄蕃　そんなら、娘。

八重　マア、父さん。

ト思ひ入れ。

玄蕃　これを奬めて

ト思ひ入れ。

八重　エ。

立番　孝行にしてくりやれよ。

ト唄になり、向うより隼人、老けたる拵へ、麻上下の形。草履取り附き、喜兵衛、以前の形にて附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

隼人　町人、それに扣へて居れ。

喜兵　へイ〳〵、よろしうお賴み申しまする。

ト喜兵衛、下に扣へる。草履取り、下座へ入る。

隼人　イヤ、荒井氏には、いつもながら

ト八重町へ目を附け、上へ通る。

立番　拙者は格別、隼人どのには、日々の御出勤、御苦勞に存じまする。

隼人　なんの〳〵。御舍弟主税之助さま事は、御幼年より乳人役の某。膝の上にてお育て申し、お馴染の深いゆゑか、勤めまするが結句樂しみ。ハヽヽヽ。馴染といへば、あれに見馴れぬ女が居りまするが。

立番　イヤ、ほんに隼人どの、あの者は拙者が娘でござる。

隼人 ナニ其許の。ハテ、貴殿に娘は

玄蕃 成る程、御存じはござるまいが、面目ないが手廻りの、女めが懐妊いたし、在所にて産み落し、最早成人いたしたゆゑ、手許へ今日呼び寄せました。ずんど不調法なる娘。コリヤ、隼人どのへ御挨拶を申せ〳〵。

ト八重町、思ひ入れあつて

八重 ハイ〳〵、不束な者にござりまする、お目かけられて下さりませ。

隼人 ヘエヽ。さてはさうか。ハテ、好い生れ立ち。名は何と申さるゝな。

玄蕃 サ、その名はな……なにサ、ソレ、三月でござるによつて、お櫻……イヤナニ、お八重とナ。

ト八重町に呑みこませ

お八重〳〵、お八重と申しまする。

隼人 フウ、お八重どのとな。さて〳〵、玄蕃どのには好いお樂しみ。イヤモウ、悴よりは娘の子。拙者が悴多膳なぞも、京都の屋敷へ差置いて、一度もお國へ參らぬゆゑ、貴殿などにも御存じござるまいが、不所存ゆゑにこの程勘當。あのやうな悴を持たうより、娘の方がはるかまし。隨分と玄蕃どのを、孝行にしませうぞ。

八重　有り難う存じまする。

ト この時、喜兵衛、話しを聞いて

喜兵　左様ならあなたが、荒井玄蕃さまでござりまするか。私しは大阪新町、即ち東路太夫の親方が名代、判人の蟲除喜兵衛と申しまする。先達てより當お屋敷へ、お呼び下しなされましたる、太夫が身代、受取り參るやうにと、この間の御狀ゆゑ、早速下りましてござりまする。

玄蕃　ヤイ〳〵〳〵、町人。身共がその東路太夫とやらが身代の事、どうして知らう。身共ではあるまいな……ソレ、身共ではあるまい。

ト 隼人へ思ひ入れにて呑みこませる。

喜兵　イエ〳〵、しつかり荒井玄蕃さまと

玄蕃　これはしたり、それは大方人違ひ。コレ〳〵、お八重。

ト 八重町、心附かぬ思ひ入れ。

コレ、お八重。あの町人を奥へ召連れ、人違ひなら、その者を尋ねてやりやれ。

八重　あなたもマア。まだ私しは御勝手を

玄蕃　これはならぬぞ。

トもがく。

隼人　玄蕃どの、貴殿、あの主税之助さまのお側仕へ、東路ことは、御城下の醫師の娘とやら申されたが。

玄蕃　左樣でござる。拙者もしかとは存ぜぬが、口入れ致した奴めが慥か

隼人　すりや、御推擧は召されても、貴殿、身許はしつかりと

玄蕃　存じませぬて。

隼人　ハテ、御年配にも似合はぬ粗忽。もしも遊女を身近う置かれ、殿樣のお耳へ入らば、申し譯も立ち難い儀。町人、しかと東路太夫を屋敷へ

喜兵　イエ、太夫ばかりではござりませぬ。御贔屓の仲居も二人まで、日限極めて先達て、玄蕃さまより

玄蕃　イヤ〳〵、身共はかつふつ知らぬ事。さてはあの主税さまが、玄蕃が名で、もしや書狀を以ての外の御行跡。事を糺して傾城めを

隼人　ト立ちかゝる。

玄蕃　アヽ、イヤ〳〵、貴殿が事をお糺しあつては、主税さまも御迷惑。拙者がとくと諌言申し、御合

點させて穩便に。

ト隼人、思ひ入れあつて

隼人　イカサマ、然らば貴殿、隼人に代つて。

玄蕃　承知いたした。

八重　何か知らねど、この場の樣子。

喜兵　味になつて參りましたが、旅がけに身請けの相談。モシ、どの道、ばれぬやうになされて下さりませ。

玄蕃　シツ〳〵……ドレ、主税さまへ御諫言……娘、其方も奥へ參つて、その髪形も……隼人どの。

隼人　玄蕃どの、隨分ともに主税さまへ、貴殿、御合點參るやうに。

玄蕃　承知いたした。サ、町人、一緒に。

喜兵　畏まりました。

八重　あなた、後程お目にかゝりませう。

玄蕃　ドレ、御諫言申しあげうか。

ト唄になり、玄蕃先に八重町、奥へ、喜兵衞は下座へ入る。隼人殘つて

隼人　いつぞやより、主稅さまのお身持ち放埓。それをお側から取りはやす、荒井玄番が胸中には……その虛に乘じ何者か、奪ひ取つたるお預かりの尊像。今にも御沙汰ある時は、主稅さまのお身の上。どういふ事で殿樣へも

トこの時、障子の內、バタ〳〵。隼人、思ひ入れあつて

ハテ、心苦しき事どもぢやなア。

ト唄になり、隼人奧へ入る。中の舞になり、向うより彌惣次、以前の形にて、スタ〳〵と出て來る。と、バタ〳〵にて奧より東路、腹立つて出てくる。これを主稅之助、竹川、お篠、おさが、なだめながら出て來り

皆々　東路さん、もうよいぢやないかいなア。

主稅　コレ〳〵、先刻の事は、ありや座興ぢや。堪忍しや〳〵。

東路　イエ〳〵、もう構うて下さんすな。

ト此せりふのうち、彌惣次舞臺へ來り

彌惣　主稅さま、それにでござりまするか。

主稅　ヤア、彌惣次、戾つたか〳〵。サア〳〵、身請けの金が來たぞ〳〵。

東路　エヽ、そんならアノほんかいな。
皆々　そりや、顏が直つたわいな。
主税　これが又直らいでならうか。時に彌惣次、金を取つて戻つたか。どうぢや〳〵。
彌惣　イエ、取つて來た段ぢやござりませぬ。藏屋敷の役人中を、殿の御用とうまくやつて、四千兩の金をズッシリと
主税　身請けの金には、そりや大分多からうがの。
彌惣　ハテ、多いとて、すたる物ではござりませぬ。受取ると直ぐに出立。
主税　それ〳〵、善い事には寸善尺魔。
皆々　早いが勝でござんしたわいな。
彌惣　早い段ぢやアござらぬて。道を急いて夜晝なし
東路　そりや御苦勞でござんしたなア。
彌惣　なんの苦勞もいとはゞこそ。首尾よく昨夜、當國まで
竹川　マア〳〵、それでめでたいわいな。
主税　祝うて一つ〆めてくれ。

ト皆々手を打つ。

彌惣　してして、どうぢや。

主税　それから今朝は七ッ立ち。あの日坂の松原まで別條なう來たであらう。彼處まで來れば此方の物ぢや。

彌惣　此方も大金、油斷なく、心を附けて參つたところ、仁王の如き大男、凡そ三百四五十人、道を塞いでその金を、奪ひ取らんと致すゆゑ、ものものしやとこの彌惣次、日頃手練の神影流、だんびら物をひらめかし、てうてうはつしと渡り合ひ、なんの苦もなくその所を

主税　流石は彌惣次、出來たでかした。

女皆　どうでもお侍ひさんぢやわいな。

主税　して、金子は。

彌惣　サア、まんまと金子は

竹川　恙なう

彌惣　取られました。

皆々　ヤア、。

東路　さうして、恙ないと云はしやんしたは
彌惣　なにサ、身共が命の事サ。
皆々　何の事ぢやぞいなア。

ト主稅之助急き立ち

主稅　たわけ面め、主人の金を奪はれながら、おめ〱命助かつて、逃げ帰る卑怯者。よくも我が目通りへ、どの面下げて罷り出た。
彌惣　でも、歸らねば天竺浪人。
主稅　まだ吐かすか。大腰拔けめが。
東路　先刻の話しに引きかへて、身請けされねば殿さんに、別れて辛い廓の勤め。しの折角出來た身代も
さが取られさんした事なれば
竹川　詮ない事とは云ひながら、御用金を失うて、戻られた彌惣次どの。
主稅　見るもなか〱腹が立つ。それへ引出せ。手討にする。
彌惣　エヽ。

ト慄へる。

竹川　そこへ出さんせ。

ト皆々引出さうとする。

彌惣　こりや又あんまり

ト振り拂つて逃げ出す。竹川、捕へる。

主税　未練者めが。

ト刀を拔く。彌惣次「ワツ」と驚き、皆々を突きのけ、圍ひの内へ逃げこむ。主税之助、追ひかける この時、障子の内、バタ／＼にて引拔くと、内に左門之頭、袴の形、彌惣次を引敷き、見得。貢、當馬、麻上下、近習の形、刀を持ち居る。主税之助見て

ヤア、あなたは兄上。

ト思ひ入れ。

皆々　いつの間に。

ト此うち玄蕃、喜兵衛、下座より出てくる

玄蕃　ヤア、彌惣次か。

左門　憎い奴め。
ト締めあげる。喜兵衛、東路を見て
喜兵　ヤ、東路か……コレ、殿様、身請けの金を。
貢　素町人め
當馬　御前ぢや
兩人　下がれ。
喜兵　ヘエイ。
玄蕃　如何の事にて殿には密かに。
左門　我が來りしは管領より、仰せ越されし一條ありて。それは格別、まづ差當つて用金と僞り、四千兩の金を掠めし彌惣次。何者の云ひつけにて、左樣の儀はなしたるぞ。關野、鹽見、あれにて篤と吟味せい。
兩人　ハツ……彌惣次、お立ちやれ。
ト兩人、彌惣次へ繩を掛け、舞臺へ下りる。左門之頭、眞中へ來る。
玄蕃　すりや、あの金子の仔細殘らず

左門　京都の金役人どもより、彼れが振舞ひ合點ゆかずと、飛脚を以て早速注進。
ト玄番、ギヨツと思ひ入れ。
貢　コレ、貴殿一人の計らひではござるまい。
當馬　荷擔人あらば速かに、御前に於て
兩人　白狀おしやれ。
彌惣　ハテ、致さないでどうするものだ。鹽を賣つても手を嘗めろ。ちつとはお庇もあらうと思つた、四千兩は盗人に、引ッたくられたその揚句、縛られたものだもの、ナニ云はずに居るものか。
喜兵　ハア、そんなら身請けのその金は。
玄番　コリヤ。
兩人　サア、指圖は何者、それ云やれ。
彌惣　その云ひつけた人といふは
ト玄番が顏を見る。玄番、主税之助を顏にて敎へる。
外でもござらぬ、御兄弟の主税之助さまでござりまする。
主税　コレ〳〵、わしは初手から知らぬ事。斯う〳〵せいと云ひつけたは、一體これなる荒井玄番。

玄蕃　イヤ〳〵、身共は存じませぬ。決して左樣な事

東路　イエ〳〵、あの大阪へも下るやうにと、人を下さんしたは玄蕃さま。

しの　身請けの事も何もかも。

東路　お前の指圖ぢやござんせぬかいな。

主税　それに今更知らぬとは、卑怯ぢや〳〵。

玄蕃　これは迷惑、かつふつ拙者は……こりやアあなたの體が熱いゆゑ、罪を被れかな。イヤ、寢耳に
水とはこの事であらう。

主税　そんならおのれは

玄蕃　存ぜぬ事サ。

女皆　エヽ、あのマザ〳〵しい顔わいなア。

竹川　コレ、彌惣次どの、主税さまへのお身の御難儀。サア、有やうにその人を

彌惣　ハテ、有やうは主税さま、外の者には頼まれませぬ。

ト玄蕃「さうだ〳〵」といふ思ひ入れ。女形皆々口惜しがる。

主税　さうぢや。兄上への申し譯。

ト刀へ手を掛ける。

左門　ソレ、留めい。

貢　殿の御意でござりまするぞ。

女皆　マア〳〵、お急きなされまするな。

左門　罪の疑はしきは罰せずと申すではないか。殊さら未だそれぞとも、決し難きその科に、生害いたして放埒の、汚名を殘して果る所存か。

主税　サ、それは。

玄蕃　イヤ、御連枝ゆゑお庇ひあつても、主税さまには放埒の、目前證據はあれなる東路、引摺りこんで、お下館は、夜晝なしの揚屋同然。

左門　すりや、あの女が

ト喜兵衛、前へ出て

喜兵　へイ〳〵、大阪新町遠州屋の、東路と申す太夫、卽ち私しはその判人、蟲除喜兵衛と申します者遠路のところを身請け金、お貰ひ申しに下りましてござりまする。お大名の弟御樣が、根曳きの御祝儀、しつかりと、この判人へもお祝ひなされて。

立番　よいワ〳〵。御前、只今お聞き遊ばす通り、これでもお身持ち放埒では
左門　在番と違ひ、在國には、これしきの事咎めもあるまい。賢を賢として色遊び、少しの事は苦しう
　ないわえ。
立番　然らばお家に預かりある、大切な品、失せましては。
左門　ヤ。
立番　將軍家より御代々、預かり申す七星の兜の、立て物は上屋敷に、守護なさるれば別條なけれど、
　主税さまへ預けられたる、泰山府君の尊像は
主税　アヽコレ。
立番　ハテ、申すなでも是非がない。紛失いたしてござりまする。
左門　さてこそ聞きしに違ひなく
頁　御大切なる。
當馬　尊像が
　　ト左門之頭、主税之助、顏を見やり、左門之頭「ホイ」と思ひ入れ。主税之助そのまゝ、「南無」と腹
　　を切らうとする。此うち奥より隼人、ツカ〳〵と出て、主税之助が刀をもぎとり、扇にて打擲する。

皆々思ひ入れ。

玄蕃　すりや尊像の

皆々　紛失ゆゑ。

隼人　その尊像は紛失いたさぬ。

玄蕃　でも、あれほど紛失

隼人　イヤ、紛失したのはありや似せ物。

左門　何と申す。

隼人　この程、國にはびこる盗賊、自然さやうな事もあらんと、人に知らさず隼人めが、拵へ置いたるありや似せ物、まこと泰山府君の尊像、某めが取り置きました。

主税　アノ、尊像を

玄蕃　ハテナア。

左門　それ聞いて安堵いたした。紛失と聞きつるゆゑ、心を痛めあるところ、この度武將義尚公、濱名し家へ預け置かるゝ、七星の兜の立て物、まつた泰山府君の尊像、二品のうち泰山府君は、花を守るの神とあつて、室町の庭へ勸請せん、急ぎ尊像差上げよと、管領よりの仰せ、某密かに來

りしも、右の實否を窺はん爲。その尊像に別條なくば、させる科なき弟主稅、家來の身として其方が

女皆　なんでマア

貢　只今のやうに。

隼人　打擲しだは隼人でござらぬ。先殿濱名將監さま。

左門　ナニ亡父たる

主稅　將監さまとは。

ト合ひ方。

隼人　この扇こそ先殿、御臨終の御枕許　重きお筆に制禁の、禁といふ文字を遊ばし、これを汝に預くる間、主稅之助が成長し、たとへ身持ちは放蕩たりとも、生さぬ仲ゆゑ左門之頭、其まゝにも捨て置かん。さすればいよ／＼增長し、家に疵をも附くるなら、先祖へ不孝のこれ第一、その時我れに成り代り、この扇面に記せし如く、戒めよとの御遺言。肌身離さず所持なして、どうぞ扇を無駄事と、思ひしものを情ない、その身の放埒惰弱ゆゑ、隼人が手をかり父の折檻。主稅之助、勘當ぢや。

同　幕　二



同　幕　三



左門 すりや、弟を。
女皆 御勘當とえ。
ト左門之頭「ハテナア」といふ思ひ入れ。
喜兵 サア、身請けの脈はあがつたり。
隼人 瀬平、參れ。
瀬平 ハア、。
ト下座より瀬平、割り竹を持ち出る。
御用でござりまするか。
隼人 主稅之助どのを追ひ拂やれ。
瀬平 エ。あなた樣が御主人を。
隼人 身は勘當せぬ。扇の御主人。
瀬平 主稅さまには乳人のあなた、常の心と事かはり、現在お主を勘當とは、どうも下郎は。
隼人 ハテ、身持ち不埒の人ぢやによつて。
彌惣 そんなら罪は一荷にして、主稅さま同樣、この彌惣次の科は御赦免。

左門　イヤ、其方は拷問なし、主税へ放埓勸めし輩、一々に白狀さす。
喜兵　斯うなりましては東路や、仲居どもが納まりは。
貢　ハテ知れた事、元の古巢へ。
喜兵　せめて路銀のお金なりとも。
貢　附けあがつたる町人め。主税さまの御流浪も
當馬　皆おのれ等が致す事。長居したら
兩人　爲にならぬぞ。
喜兵　でも、爰まで來て萬一にも
瀨平　ヤア、無難に歸るを、有り難いとは思はいで、さま〴〵のねだり事。路銀の代りに割り竹を、望みな數ほど背中へくれうか。
喜兵　イエ〳〵、もうそれならお貰ひ申した同然……サア〳〵、早く步びやれ〳〵。
ト東路が手を取つて引ッ張る。東路、此うち泣いてゐて
東路　わたしは浪花へ歸るのも、そりやせう事はござんせぬが、嘆いて歸らぬ殿さんのお身の上。モシわたしやそればつかりが

ト寄らうとする。竹川隔てる。主税之助「コリヤ」と左門之頭へ思ひ入れ。
必ず尋ねて下さんせえ。
しの　モシ、喜兵衛さん、さうして東路さんは、あの形で行くのかいな。
さが　わたしらも前垂れがけで、駒下駄で道中もなるまいぞえ。
喜兵　ハテ、そりやァ旅籠屋で、支度をしにやァならないよ。
しの　そんなら此まゝ、東路さん。
東路　ならう事なら殿さんも、どうぞ一緒に連れまして
喜兵　とんだ事を云つたものだ。身請けは破れる、自腹は切らされる。これで昨夜の盗人に、剝がれり
やァ云ひ分なしだ。
彌惣　コレ〳〵、そんならおぬしも松並木で
喜兵　そんならあなたも松並木で
彌惣　こんな事とは夢にも知らず
喜兵　汗水垂らして逃げたのも
彌惣　だりむく

喜兵　知らせで
兩人　あつたのか。
當馬　何をたはけた。
瀬平　キリ〳〵立たずば、割り竹にて
喜兵　アヽ、參ります〳〵……サア〳〵、早く行つたり〳〵。
東路　それではどうも殿さんに
喜兵　ハテ。どうするもんだな。
ト合ひ方になり、心を殘す東路を、喜兵衞せり立て、お篠おさが附いて向うへ入る。
主税　この身一つの不所存ゆゑ、多くの者に嘆きをかけ、憂き恥かくも兄の罰。
左門　親の形見の扇の答『禁』といふ勘當を、支へてやらぬ心のうち。
隼人　内輪であらうと武士の表、泣いては濟まぬ身の越度、時節あるまでお館を
玄蕃　隼人どの、執成すべき其許が、先殿樣に成り代り、お主を勘當。この玄蕃は、一圓その意を得申さぬ。
左門　わざと邪慳に老人の、この場の仕儀は矢張り尊像。

主税　エ。
左門　急ぎ武將へ差上ぐる、泰山府君の尊像、しかと隼人が。
隼人　なか〳〵左樣。
左門　然らば後方歸館なす折、身共へ尊像渡すぢやまで。
隼人　アノ、後方までに。
玄蕃　有る尊像なら殿樣へ
隼人　差上げいで何と致さう。
主税　サア、それが何とも
隼人　ハテ、勘當の身にいらざる氣遣ひ。サヽ、ちつとも早う御門外へ。
左門　我れも後まで奥の間にて。
竹川　御鬱散には御酒一献。
貢　して、この堀江彌惣次は。
當馬　如何計らひませうな。
左門　歸館なすまで獄屋に繋げ。

彌惣　イヤ、とんだ目にあふものだ。

隼人　瀬平、キリ〳〵追ひ立てませい。

玄蕃　ハテ、お痛はしいお身の上だ。

ト扇で笑ふ。

瀬平　サヽ、お立ちなされませい。

主税　お別れ申して又いつか……隨分ともに。

ト主税之助、左門之頭と顏見合せ、ホロリと思ひ入れ。

左門　堅固で居やれ。

ト唄になり、左門之頭ツイと奥へ入る。玄蕃、竹川、隼人へ心を殘して奥へ入る。貢と當馬は彌惣次を引ッ立て、下座へ入る。主税之助、悄々と思ひ入れあつて、向うへかゝる。瀬平、割り竹を持ちて跡より附き、兩人囁き合ひ、頷いて取つて返し、下の方へ入る。合ひ方になり、隼人、そろ〳〵立つて前後を窺ひ、下座へ向ひ

隼人　息才々々。

ト呼ぶ。息才出て來り、隼人の前へ手を突き、

息才　お呼びなされましたか。

ト隼人囁く。

畏まりました。

ト下座へ入る。

隼人　今年で二十九年あと、多膳が先に出生の男子、ヤレと喜ぶ甲斐もなく、庚申の夜の誕生は、必ず賊の心ありと、下世話の譬へに聞えを憚り、せめて倅が氏素性、乞食にもあらざる事、知らさんも又親の慈悲と、家重代の雌雄の二腰、差し表に忠孝の、文字を分けたる一腰に、水に遊べる鴛鴦の、割り笄の片々を添へ、隣國吉田の驛に捨てしが、何者に取上げられ、いま息才でゐる事やら。但し死んだか知らねども、生きて居るなら只一目、逢うて冥土……銘は吉光、孝といふ字の殘りしを、片々の笄もろともに、この頃委細を認めて、多膳が方へ送りしが、これも何を尋ね迷ふか。さりとは知らいでもし跡へ、取戻して來をつたら。

ト思ひ入れあつて、料紙硯を取り來り、さら〳〵と書きあげ、封じをする。此うち下座より息才、謠本の箱を持ち、跡先を窺ひながら出で來り、隼人が側にて、本の箱より厨子の外覆ひを出し

息才　只今仰せ附けられましたは、この儀でござりまするかな。

隼人　オヽ、これぢや〳〵。大儀であつた。行きやれ〳〵。

息才　ハツ。

　ト直ぐに下座へ行かうとする。

隼人　アヽ、コリヤ〳〵……この儀は決して口外いたすな。

息才　畏まりました。

　ト下座へ入る。此うち始終合ひ方。隼人、厨子の中へ今の書き物を入れて

隼人　心を盡せしこの尊像、殿へ差上げ潔う

　ト思ひ入れあつて、厨子を抱へ立上がると、早舞ひになり、この道具ぶん廻す。

　本舞臺、三間の間、金襖の御殿。上の方、松の立ち樹、下に柴垣、爰に彌惣次、逃げようとして居るを、竹川支へて居る見得。早舞ひにて道具納まる。

　トちよつと立廻りあつて

竹川　こりやこなさんは縛め解いて、どこへござんす。

彌惣　ハテ、どこへ行かうと女の分際で、いらぬお世話をしようより、道を明けて通しておくれ。

竹川　イヽヤならぬ。こなさんを逃がしては、いよ〳〵以て主税さまの、曇りも晴れぬ御用金、その荷擔人を白狀までは、滅多に逃がしてよいものかいな。

彌惣　さう吐かしやア、身共が斯うして。

ト引退ける。

竹川　イヽヤならぬ。

ト序の舞になり、兩人ちよつと立廻りあつて、彌惣次、竹川を當て、ちよつと小隱れする。竹川心附き

あの彌惣次を逃がしては…………さうぢや。

ト三重になり、向うへ走り入る。彌惣次出て

彌惣　大べら坊め。柴垣に隱れてゐるのも知らず、ハヽヽヽ。これが燈臺元暗しだ。

ト此うち合ひ方になり、奥より玄番出で來り

玄番　そこに居るのは堀江彌惣次。

彌惣　玄番どの、ヤレ、最前はひやいな目に。

玄番　身請けに事よせ四千兩、我が物にしてその科を、主税之助にと思つた金。

彌惣　無駄骨折つてもこなたには、高見で見物するばかり。身共は既にこの首を

玄蕃　その骨折りが出世の基。コリヤ。

ト囁く。

彌惣　そんなら身共が、折を窺ひ左門之頭を

玄蕃　どの道遁さぬ我が手立。早く忍んで

彌惣　合點だ…………ソレ。

ト上の松ケ枝へ忍ぶ。

玄蕃　これから此方の一手段。

ト思ひ入れ。奥へ行かうとする。合ひ方。途端に襖を開き、左門之頭ズツと出る。玄蕃、ギヨツとする。

左門　玄蕃、そちやこれに何して居つた。

玄蕃　サ、拙者めは……それ〳〵、あまり蜘蛛めが松ケ枝へ。

左門　イカサマ、蜘蛛といふ奴が、その木に棲んで巣をまとひ、いろ〳〵企みの網を張れど、遂には風に吹き破られ、いたづら事に精魂つくす。思へば愚な蟲ではないか。ナア、玄蕃。

玄蕃　ヘイ。

左門　コリヤ〳〵。誰ぞ茶を一つくれいよ。

　　　ト下座にて

ト合ひ方。八重町、衣裳を改め、茶を持つて出て、左門之頭へ出す。左門之頭、茶を取りながら、不思議さうに見て

八重　畏りました。

左門　つひに見た事もない女ぢやが、其方は。

玄蕃　それ〳〵、まだ殿様へお目見得も願ひませぬが、この女は玄蕃めが、幼少より預け置きましたる實の娘、八重と申す不束者、お目かけられて下さりませう。

左門　すりや、其方が娘の……ハテ、知らなんだ。コリヤ、八重、面を上げい。

八重　ハイ。

左門　ても見事。常屋敷には、この頃まで居つた小萬の外、其方がやうな美なる者は、無いと思うて左門之頭、他家へ對して客來の節なぞは、甚だ氣の毒に存じた。小萬は親が病氣というて、兄が參り、無理に暇をもらうて行た、その跡へ丁度八重。成る程、出船あれば入り船とは、よう云うた

もの。許すほどに、これへ來い〳〵。〳〵
　　ト此うち玄番、思ひ入れあつて
玄番　これは〳〵、有り難い殿樣の御意、お心に叶ひましてもござらうなら、御不便をかけさせられ、何卒彼れめが腹からなりと、お世繼早う出來させらるれば、家中の大慶この上は。
左門　何と申す。八重を身が妾にせいと申すのか。
玄番　女子の道を嫌はせられ、まだ奧方の御沙汰なく、お召仕へもござらねば、お胤の絕えん歎かはしさ。御意に叶ひし娘なら
八重　アヽ、モシ、父さん、そんな
玄番　ハテ、お胤を宿すはお家の爲。賤しい其方も……イヤサ、其方も女に生れし冥加。コリヤ、ナ、サア、惡い事なら勸めはせぬわえ。
　　ト呑みこます思ひ入れ。
左門　子なきを不孝の第一と、大聖孔子ものたまへば、いかにも其方が勸めに隨ひ、八重を側女に使はんが、其方は又、身に給仕いすたか。
玄番　これは又、御念には及ばぬ事。主命と申し、殊には玄番づれが娘、濱名左門之頭さまといふ、大

八重　濱名のお家は今ときめき、肩を並ぶる者もなき、そのお方へ身を任さば、心に願ひの綱手にも
名のお部屋となる儀、ナニ否がござりませう。ナア娘、さうであらう。
ト左門之頭と顔見合せ、思ひ入れ。
左門　身近う奉公いたすか。
不束な私しでも、殿樣の御不便に、思し召して下さりまするなら
ト八重町辭儀する。
八重　有り難うござります。
それは過分、左樣申さば今日からは、八重といふ名を其まゝに、八重町と呼ぶであらう。
左門　併し、さう三ッ指では、打解けて話しもならぬ。サヽ、ずつと爰へ來い〳〵。
立番　ソレ、殿のお召しではないか。ナニ恥かしい事がある。ずつと〳〵。
左門　ハヽア、親の前ゆゑ斟酌か。そんなら身が手を取らう。
トずつと側へ行き、手を取る。
八重　それではあまり
左門　サア、爰へ〳〵。

ト連れて來て

八重　見れば見るほど美しい。これまで左門之頭、色を愛さねど向後は、枕の塵を拂はすは其方一人。今そのやうに御意遊ばせど、うつろひやすき殿御の心。おしつけ外に増す花が

左門　イヤ〳〵、その氣遣ひはせぬがよい。決して外へは執心せぬ。

八重　そりや御眞實でござりまするかえ。

左門　ナニ僞りを云ふものぢや。

八重　そんなら御前。

左門　寄りかけい〳〵。

ト手を取つて引寄せる。八重町、ちよつと抱きつく、玄蕃、咳をする。七ツの時計鳴る。バタ〳〵にて下座より貢、當馬、走り出てくる。これにて八重町、下へ下がる。

貢　ハツ、繫ぎ置きましたる堀江彌惣次、縛めを切り、逃げうせしゆゑ

當馬　最前より手分けを致し、所々方々探しますれど

兩人　相知れませぬ。

左門　ナニ彌惣次が出奔せしとや。彼れを拷問なしたなら、用金ばかりの企みでなく、外に構へし謀計

が

玄蕃　それは格別、いま打つたるは七ツのお時計。御前、隼人は尊像を

ト玄蕃を見る。玄蕃こなしあつて

ト下座にて

隼人　只今それにて中川隼人、差上げまするでござりませう。

ト合ひ方になり、隼人、以前の厨子を三方に載せ、持つて出て來り

殿、これに居らせられましたか。卽ち泰山府君の尊像、とくとそれにて。

左門　すりやアノ、これが

玄蕃　イヤ／＼、何とも呑みこめませぬ。拵へ置いたに似せ物にて、誠はこれとその尊像、矢ッ張り似せかも。ドレ、拙者が

ト立ちかゝる。

左門　玄蕃、扣へい。其方が役目にあらざる尊像、差出た事を。扣へ居らう。

玄蕃　でもその中が

八重　モシ、父さん、何か樣子は存じませねど、殿樣の御意、マア／＼お扣へなされませいな。

玄蕃　イヤ〳〵、さうでない。もしあの品が似せ物なれば、主税さまがござらぬゆゑ、おのづと殿のお身の上に

左門　フム。すりや、なんと申す。この尊像が似せ物なれば、某が身にかゝらうかと

玄蕃　お案じ申すも主人が大切。

左門　イカサマ、玄蕃は忠臣ぢやなア。

隼人　イヤ、そのお氣遣ひ、必ず御無用。それこそ誠の尊像に

玄蕃　サア、それが矢ツ張り氣遣はしい。殿には御身にかゝる事ゆゑ、似せを誠と濟まされうが、それぢやア武將へ

隼人　扣へ召されい。似せを誠と差上げて、殿へお咎めござつても、貴殿の外はいとはぬと、云はねばかりのその一言。中川隼人、武士でござるぞ。

玄蕃　イヽヤ、全くさうではござらねど、もしや異變もあるなればと、念を押すが身共の氣質。それゆゑちよつと

ト厨子へかゝる。隼人隔てる。立廻り。中より一通出る。左門之頭手早く書き物を取つて讀む。隼人玄蕃を引留めて

同幕口



同幕大



隼人　御前、誠の泰山府君。玄蕃もとつくり、見て置き召されい。

ト玄蕃を突き廻し、もろ肌脱いで白刃を突き立てる。皆々驚く。

貢當　隼人どのゝこの體は。

ト左門之頭、書き物を讀みしまひ

左門　天晴れ中川、とくと尊像。

隼人　すりや、殿には隼人めが、心盡しを推察あつて

ト苦しむ。

左門　しかと某、受取つたぞ。

玄蕃　イヤ／＼、内輪同士はそれでも濟まうが、お上はそれでは。

左門　いはれぬ差配。室町御所へは尊像を、紛失なせしその夜の當番、中川隼人切腹の趣き、仔細具さに言上なし、百日の日延べを願はゞ、よもや御許容なき事あらん。

隼人　但し其許紛失の、主人の越度を言上めさるか。いかに忠義の貴殿でも、よも左様には相成るまい

玄蕃　ムウ。それぢやア殿にも、主税さまにも

隼人　隼人が越度は御主人の、御身にかゝはるやうあるべきや。

ト玄蕃思ひ入れ。此うち八重町、隼人を介抱して

八重　お主の御身に恙のないは、父さん、あなたもお喜び…………モシ、お嬉しうござりませうがな。

ト側よりあせる。

貢　それと申すも隼人どの

當馬　切腹ありし忠義ゆゑ。

左門　我れもこの事氣遣はしく、もし紛失に極まらば、隔る仲の弟が越度、身に引請けて濱名の家名、主税に相續させんずと、思ひこみしを放埒に、寄せて亡父に成り代り、勘當なして命を捨て、我れ我れ二人が身に代る、其方が心底、滿足なるぞよ。

隼人　こは勿體なきそのお詞。行く先近き拙者めが、命で御恩の御主人に、代るは上なきこの身の仕合せ。

左門　實に忠臣は國の寶。多膳が行くへ相知れなば、跡目はよきに

隼人　エヽ、有り難い。

ト此うち柴垣より主税之助出かゝりゐて

主税　すりや、某を勘當も、また餘所に見し兄上も、我れを助けん爲なるか。

ト思ひ入れ。

八重　さういふお聲は主税さま。

　トこの時、松ヶ枝に彌惣次出て窺ふ。

玄蕃　尊像なくした越度はこなた。

　ト主税之助へかゝらうとする。八重町支へる。左門之頭、尊像の厨子へ、彌惣次の影うつるゆゑ、思ひ入れあつて

左門　あの松ヶ枝に人影は

　ト玄蕃思ひ入れ。八重町「エイ」ト有あふ煙管を打ちつける。これにて彌惣次落ちて、直ぐに左門之頭へ切つてかゝる。左門之頭、居ながら扇にて白刃を打ち落す。彌惣次「南無三」と取りかゝるを、隼人、落せし白刃を取上げ、彌惣次を見事に切り下げる。

玄蕃　ヤア、お金の盗賊、詮議濟まざる彌惣次を、殺した隼人は正しく荷擔人。

主税　イヤ、其方こそは

八重　アヽモシ。

　ト隔てる。

左門　今こそ隼人が尊像ゆゑに、切腹と云ふには及ばぬ。この場の闘爭、血汐にあやせし尊像を、忌み清むるは百日と、管領方へ云ひ送らん。併し相手を殺害せし、隼人は直ぐに身が手にかけ、少しも早く苦痛を助けん。

隼人　アヽ、嬉しや今ぞ先殿へ、扇の奉公勤めし某…………憚りながら

ト合掌して覺悟の思ひ入れ。主税之助「コレ」と寄らうとするを、八重町支へる。玄蕃、「ウム」と思ひ入れ。貢、當馬隔てる。

左門　持つべきものは

ト ぽんと首を討ち、血ぶるひする。木の頭

忠臣ぢやなア。

ト皆々よろしく、ひやうし

幕

生玉の場

役名――玉島庄兵衛。子安婆ァお虎。神崎屋嘉七。研屋善助。牛車大七。若い者、左吉。書嶌仁太。鬼殺し官八。下男、與助實ハ濱名主税之助。淡路法印。倉野屋小萬。仲居、お山。傾城、東

路。下女、お瀧。櫻屋娘、お米。

本舞臺、正面、葭簀張りの占ひの小屋、上の方、建仁寺垣、屋根附きの栗丸太の門、塗り骨の障子を閉てたる二階家を見せ、植込みよろしく、軒に神崎屋と記したる提灯。門口に同じく掛け行燈。見切り、生垣の脇へ金燈籠。下の方に土弓の圍ひ。うしろ淺黄幕。すべて八幡の境内の模樣。爰にお虎、やつし、婆アの形にて、與助へかゝらうとしてゐる。これを善助、羽織、町人の形にて三味線箱を持つたまゝ留めて居る。與助、やつし、若者の形にて、お虎へ思ひ入れ。嘉七、やつし、着流しの形にて、與助をなだめ居る。仕出し大勢、この爭ひを見てゐる。大七、仁太、晝鳶の形にて、仕出しの袂や懷を探る思ひ入れ。辻打ちにて幕明く。

善助　これサ〳〵、ほんの間違ひといふものだ。料簡するがよい〳〵。

嘉七　一體この起りは、どのやうな事やら、とんと合點がゆかぬ。マア、何であらうと、こちの若者の麁相と思はれまする。御料簡なされませ〳〵。

とら　なんぢや、麁相と思はれるとは、なんの事ぢや。今日わしが爰の内へ來て案内したれば、こちの内に取揚げ婆アは用は無いと吐かすゆゑ。わしぢやというて、爰の内へ來ぬものかいなア。それ

に彼奴が出過ぎた事を、めつきしやつきするのぢや。サア、野郎め、爰へうせをれ。どうするか
おのれ

ト立ちかゝる。嘉七、中へ入り

嘉七　マア〳〵、お待ちなされませ。成る程、それでは重々こちの男が不調法でござります。コレ與助
われが惡いぞ。重ねて屹度愼しみませうぞ。マア〳〵、今日のところは、御料簡なされませ〳〵

とら　して、こなたは、爰の内の

嘉七　ハイ、神崎屋の亭主でござりますが、これへござりました、その用といふは。

與助　モシ〳〵、その用といふも、なんでござりまする、何か私しに云ひ分あつて、參つたのでござり
ませう。何もかも、旦那の御存じの事ぢやござりませぬ。お構ひなされますな。

とら　ハヽヽヽ、こりやをかしいわえ。脛に疵持ちや笹原走ると、さう吐かしやア、成る程われにも
云ひ分がある。大事のかゝり娘、あの新町の東路と、色ぢやの深間ぢやのといふ噂。それも吹け
ば飛ぶやうなおのれには構はぬ。そんな甘口な婆ぢやと思ふか。大べら坊め。

善助　して又、阿母が今日爰へ來られたには。

とら　アイ、わしが來たは、外の事でもない、あの本町の倉野屋仁右衛門どのゝ娘御、小萬どのが、何

か内々で逢ひたいほどに、神崎屋へ行つて待つて居てくれいとの事ゆゑ、それでわざ／＼、あの鼬堀から來ましたわいの。

嘉七　ハア、そんなら小萬さまからのお使ひで、こちの内へござつたのでござりまするか。ヤレ／＼、そんならさうと、つい仰しやれば解る事。

善助　わしも今日爰へ來たのは、かねて小萬さまが誂らへで出來た三味線、内へ持つて來ては物堅いゆゑ、矢ッ張りこの神崎屋へ來て、待つて居てくれいとの頼み。

ト與助こなしあつて

與助　そんならお二人ともに、小萬どのが頼みゆゑ、この神崎屋へ

とら　オヽ、おのれが事もあれど、今は云はぬ。今日の用は、小萬どのゝ用で來たのぢやわやい。

與助　ハテナア。

ト心得ぬこなし。此うち大七、向うへ入る。

わしは又、的切りこりや難儀な事であらうと思うたに、小萬さまの用と聞いて、ちつとは落ちつきましたが、どうも合點が行かぬは

とら　エ。

仕出　コレ〳〵、この喧嘩を見てゐたうち、袂の錢をしてやられたわえ。

同　オヽ、わしも紙入れを盗られました。

同　わしも腰提げを切られました。これは油斷のならぬ事ぢや。

ト辻打ちになり、仕出し皆々向うへ入る。仁太、ちよつと小隠れる。此うち向うより東路、着流しの形、跡より沖山、仲居の形。淡路法印、附いて出て來り

淡路　これサ〳〵、成る程早い足だぞ。折角連れになつても、ねッから追ひつかれるものぢやアない。其やうに足の早いも、あんまり色氣が無いぞえ。

東路　ハテ、さう云はしやんすけれど、廓と違うて他所へ出て、うか〳〵行くのも、あんまり外珍らしいやうで、却つて恥かしいやうなものぢやわいな。

やま　さうでござんすとも。又、しんねり〳〵と、お練り見るやうに歩きなさんすも、難儀なものでござんすわいな。

淡路　時に、なんでも此やうに附いて行くからは、的切り爲になる客か、又は思ひ合つた色客か。

東路　奥床しう見えるかえ。

淡路　見える段か。アヽ、その男になつて見たいなア。

東路　オヽ辛氣。
やま　サア、お出でんかいなア。
　　ト三人、舞臺へ來る。お虎、東路を見て
とら　オヽ、娘か。ようマアおぢやつたの。そしてマア、今日爰へ來たのは、大方お客でがなあらうな。
東路　イエ〳〵、今日わたしが爰へ來たのはな……オヽ、それ〳〵、この中よりお客の事を、願籠めしたゆゑ、今日はそのお願はどき、八幡樣へ來たのでござんす。それはさうと、思ひがけない所で母さんに逢うて
　　ト與助にこなしあつて
此やうな、ほんに嬉しい事はないわいな。
淡路　成る程、勤めをする身でも、大事にするといふは、脇目にも惡くない事だ。
とら　イヤモウ、何から何まで、孝行にしてくれるあの娘ゆゑ、わしも又ちつとやそつと、聞き憎い事があつても、若い者の事ぢやと、見ぬ顔してゐますわいの。ホヽヽヽヽ。
やま　イヤモウ、東路さんの親御さんほどあつて、粋なお人でござんすわいなア。

淡路　時に又、今日爰へは何しに來たのだ。

とら　サア、わたしが爰へ來てゐるのは、斯うぢや。

　　　トちよつと囁く。淡路法印こなしあつて

淡路　そんなら小萬が內證で、貴樣に逢ひたいとか。ハテ、何の用であらうか。コレ、有やうは、おれもあの小萬に迷つて、たうとう遠國からこの大阪まで、附けつ廻しつするが、どうも色にも手強い奴よ。

善助　ハヽア、そんなら法印どのにも、あの小萬さまにほの字か。

淡路　ハテ、戀に上下の隔ては無しだワ。

善助　イヤ、呆れたものだ。イヤ、呆れるといへば、小萬さんの居る所は、今宮の別莊だが、聞きなさい。秋にもならぬに、庭の桐の花が咲いたが、大阪中の評判。なんと呆れたものぢやアござりませぬか。

嘉七　成る程、今時分桐の花が咲くとは、珍らしい事ぢやござらぬか。

與助　イヤ、先刻から、別でもない事にかゝつて、大きに隙取りました。ドレ、座敷掃除にでもかゝりませうか。

嘉七　それがよい〳〵。今日は又、天滿屋の久四郎さまもお出でなさる筈ぢや。川又から返事が來たか。

與助　ハイ、先程、しつかりとした返事が參りました。

嘉七　サア〳〵、そんなら早く料理番へも云ひつけて、支度をしやいの。

與助　畏まりました。

ト東路へこなし。

東路　サア、わたしも八幡樣へ、お詣り申さうかいな。

やま　それがようござんすわいな。

與助　どなたも、これにお出でなされませ。

ト與助、門の內へ入る。東路こなしあつて

東路　サア、お山さん、行かうわいな。

ト立上がる。この時、仁太、後より東路が簪を拔いて駈け出し、一散に向うへ入る。東路、恟りする。舞臺の皆々思ひ入れ。

淡路　エヽ、晝中に太い奴だ。

嘉七　ドレ、わたしが一走り。

ト向うへ行かうとする。仁太、ツカ〳〵と出て見事にかへる。これにて嘉七、ためらふ。向う幕の内にて

小萬　もうようござんす。堪忍してやらしやんせいなア。

ト誂らへの出唄になり、鬼殺し官八、腰に尺八を差したる男達の形にて、日和下駄、簪を持つて大七の手を捻ぢあげ、出てくる。跡より小萬、振り袖の形にて出てくる。跡よりお米、着流し、振り袖、お瀧、下女の形にて出てくる。市助、甲斐絹の風呂敷包みを持ち出てくる。この人數、直ぐに舞臺へくる。小萬、こなしあつて

ほんに、危ふい所へ、好いお方が見えて、此やうな嬉しい事はござんせぬ。簪さへ戻したなればもう堪忍しておやりなさんせ。

ト官八思ひ入れあつて

官八　ようごんす〳〵。ヤイ、野郎めら、このおれ樣を知らないか。花の浪花に隱れなき、男達の惣本地、橋詰めの出入りでも、持つて來なさい山櫻。

ト淡路法印、官八の袖を曳き

淡路　これサ、その男達のせりふは、みんなが知つてゐます。わしも、こなさんと近附きでもないに、差出がましい事ぢやが、挨拶します。マア、免してやらつしやい／＼。

官八　成る程、法印どのゝ挨拶、聞捨てにもなるまい。二人ともに、引ッ浚つた簪を目の前へ出して、三度禮拜しろ。さうなけりやァ以後の見せしめ、カウ／＼／＼。

ト腰の尺八を取つて、大七仁太を打つ。兩人、こなしあつて

兩人　オヽ痛い／＼。ソレ、簪よ。

ト官八の懐へ差出し、逃げこむ。

仕出　泥坊々々。

ト追ひかけて下座へ入る。此うち淡路法印、フト官八の尺八に目を附け

淡路　この尺八は

ト思ひ入れ。官八、直ぐに取り直し、腰へ差す。淡路法印、合點のゆかぬこなし。此うち官八、二本の簪を取つて

官八　サア、二本ともに取返しましたが、どちがどうとも解らぬほどに、サア、見分けて持つてござりませ。

たき ハイ、これは有り難うござりまする。この京形の丸琴柱が、小萬さまのでござります。

やま ハイ〳〵。これは〳〵、ほんに、よい所へあなたが見えたばかりで、手も濡らさずに戻りました忝うござります。サア〳〵、東路さん、ちやつとお禮を。

東路 どうしてこのお禮が、ちやつきりと云はれるものか。新町へござんしたならば、その時ゆつくりお禮申しませうわいな。

小萬 わたしも爰へ來る道筋、思はず拔かれたと思ふ間もなう、捕へなんしたその時の怖さ。今にこの胸が、ドキ〳〵致しまするわいな。

よね ほんに、わたし等ばかりなら、どうならうやら知れぬけれど、強いお方がござんして、小萬さんに怪我も無うて、此やうな嬉しい事はないわいなア。

嘉七 その上に、今の奴等を苛なんだ鹽梅。

やま 誠に男達の生粹。

官八 ハヽヽヽ、なんのこれしきに禮どころか、痛み入りますて。

とら ヤレ〳〵、聞けば、ひやいな目にお逢ひなされましたな。モシ〳〵、小萬さま、先刻にから、お待ち申して居りました。

善助　それ〳〵、私しも、彼のナ、ソレ、お誂らへの三味線が出來たゆゑ、これに持つて參りました。

小萬　ほんに婆さんも、待ちかねでござんしたであらう。その三味線も、今爰では、ナ……サア、途中でも見られまいほどに、何かの事は、あの神崎屋で

善助　ハイ〳〵、畏まりました。

やま　時に、嘉七さん、何なりと爰でちよつと、ぬしへ御酒なと上げて下さんせ。

嘉七　合點でござりまする。呑みこみました。

ト内へ入る。

淡路　成る程、未來と思つた簪が返つたなら、こんな嬉しい事はあるまいてな。

ト小萬、フツと淡路法印を見て

小萬　オヽ、ほんに、どうやらお前は

淡路　コレ。どうやらとは情ない。遠州濱名の屋敷に居た時からナ、ソレ、附けつ廻しつ

小萬　オヽ、それ〳〵、所は中山寺の道すがら、五十兩の金を

淡路　エヘン〳〵。

ト咳にて紛らし

これサ、その舊惡を云ふ時は、其方もその身に覺えある、ナ、ソレ、母の病氣と僞つて、無理隙を取つた事も、云へば互ひに暗闇の恥をナ、ソレ、恥を捨てゝも、たうとうこの大阪まで來て、ウロ〳〵してゐるも、有やうはみんな小萬、おぬしゆゑだぜ。

ト側へ寄らうとするを、お米隔て

よね　アヽモシ、何ぢやぞいな。嫌らしい、法印さんの癖に、馴れ〳〵しい物の云ひやう。そしてマア滅多に小萬さんの側へ寄らしやんすな。小萬さんは、きつい男嫌ひでござんすわいな。

淡路　ハヽア、此奴もお茶ッぴいの前立ちだな。小萬が男嫌ひ〳〵と云ふも、アヽ、油斷のならぬ。

ト小萬こなしあつて

小萬　油斷のならぬとわえ。

淡路　油斷のならぬとは、それ〳〵、油斷のならぬ物騷なといふは、今のやうに、晝中に人の簪を拔くやうなもので、この頃は近國に盜人どもがはびこりゐるげな。又その張本といふは、コレ

ト繪姿を二枚出す。この時、官八思ひ入れ。

この通りの人相書。一人は二本駄右衛門、いま一人は玉島庄兵衛、なんでも此奴等が住居を尋ねて、訴人をすれば褒美の金にあづかるが、なんと油斷のならぬ事ぢやァないか。

とら　ドレ〳〵、ちよつとわしに見せて下さんせ……わたしが讀むから。

ト取つて開き

成る程、盗賊の頭ともいふべき人品。よし〳〵、褒美の金になる事なら、似寄りの者があらば、早速訴人して、褒美の金に有りつきたいものぢやなア。

ト此うち嘉七、廣蓋へ鉢肴丼、銚子杯を持ち、出て來り

嘉七　サア、お山さん、お誂らへの酒肴、出來ましたぞえ。

やま　サア〳〵、あそこへ上げて下さんせいな。コレ申し。

嘉七　よし〳〵。サア、今のお禮に東路さんから、上げてくれいとの事。一つあがりませ。

官八　ヤ、これは新町の。よしにさんせいで、痛み入りますて。

東路　なんの阿房らしい。又なんぞ仕樣がござんせうわいな。

淡路　コレ〳〵、神崎屋の御亭主、此方なぞは、分けて大勢客の入込む所だによつて、勝手へなりと貼つて置くがよい。

嘉七　成る程、この間中から噂に承つた、盗賊の繪姿でござりまするか。イカサマ、心掛けの爲、臺所へ貼つて置きませう。

ト取つて懷中する。

よね　サア、小萬さん、八幡樣へお詣り申さうかいなア。

小萬　それいなア、斯うして下さんせ。わたしはちよつと、この神崎屋へ寄つて、あのお方へ今のお禮をせねばならず、外にちつと用もござんすゆゑ、お前は瀧を連れて、八幡樣へ詣つて、この神崎屋へ寄つて下さんせ。さうして又、お前と連れ立つて歸らうわいな。

東路　そんなら、わたしと一緒にござんせいなア。

小萬　ほんに、こりや好いお連れが出來たわいなア。そんならお賴み申したぞえ。

東路　しつかりとお預かり申しました。必ずお案じなされまするな。

とら　そんなら、わしも一緒に爰の內へ。

善助　わしも、一つたべて參りませう。

小萬　それがようござんす。

淡路　おれもこれからしけ込んで、自棄酒でも引ッかけべいかなう。

小萬　モシ、お前も跡からお出でなさんせ。

官八　マア〳〵、先へござりませ。

嘉七　こりやア、段々お客が殖えて有り難いわえ。
淡路　成る程、慾氣は微塵もないな。
嘉七　ハヽヽヽ。
東路　そんなら、どなたもお先へ。
やま　サア、お出でなされませ。
ト三味線入りの大拍子になり、小萬、お虎、嘉七、善助、淡路法印は門の内へ入る。東路、お山、お瀧、お米に下男附いて正面へ入る。官八殘る。よき程に大七仁太出で來り
兩人　官八どの。
官八　コレ。
ト思ひ入れ。
大七　これサ、折角おいらが新米の働きを、一番見せようと思つて、仕負うせたところを、思ひの外ひどい目におはしたは、どういふ事でごんす。
仁太　まだその上に、折角ひッたくつた代物まで、向うへ返してやつた心は、合點がゆきませぬ。
兩人　こりやアどういふ理屈でござる。

官八　これサ、大きな聲をするな。男達といふ風體で、喧嘩仕掛けで人寄せの、一働らきはわいらが仕事。

大七　サア、それだによつてこの首を、元手にしての小働き。これから取上げ一かどの

官八　アヽ、まだ素人だ。コレ

トあたりへ礫を打つ。捨て鐘になり、所々の蔭より町人、出家、侍ひ、三人の手下窺ひ出て

三人　官八どの、指圖の仕事は。

大七　ヤ、道通りだと思つたら、そんなら矢ツ張り

官八　わいらに仕事をさせた上、わいらを捕へて向うの代物、元手にしての立役は、往來の奴の足をとめ、尋ねる品が。

侍ひ　醫者の懐、これにも藥が

町人　この紙入れにも切り疵の

出家　藥の入つたこの包み。

トめい〳〵紙入れ、袱紗包み、藥包みを出す。官八取つて

官八　とつくり改め、そでない時は

大七　アヽ、働かせるのは、そんなら薬を

官八　金目な品に代へても、尋ねる一薬。コレ。

　ト囁く。

大七　すりや、金瘡の

官八　シイ。

　ト思ひ入れ。二階にて

とら　モシ〱、お案じなさる事はないぞえ。

仁太　ありや神崎屋の

官八　コレ。所を變へて

兩人　合點だ。

　ト大拍子になり、大七は向うへ、官八は下座へ、仁太其他は囁き合ひ、所々へ入る。合ひ方にて、中二階の障子を開く。小萬、お虎、出かゝりゐて

とら　モシ、小萬さん、ナニお前、恥かしい事はござんせん。併し、いま申したこと、忘れなさんすなえ。

小萬　アイ〳〵、そりや合點ぢやわいな。併し、この事は、沙汰無しにして下さんせえ。
とら　ハテ、わしに如才があらうかいなア。また其うち、爰まで參りませう。その節お前も來て
小萬　どうぞさうして下さんせ。
　ト此うち庄兵衞、油つぎを持ち、編笠をかむり、易者の拵らへ。跡より若い者出て來り
若者　私しは盜られた物がござりますが、戻りませうか、御覽じて下さりませ。
庄兵　見て進ぜませう。サヽ、此方へござれ。
　ト兩人、小屋の內へ入る。奧より善助、三味線箱を持ち、出て來て、二階の小萬を見て
善助　モシ〳〵、小萬さま、そこへ參りませうかえ。
小萬　アヽ、爰へは遠慮。わたしがそこへ行く程に、ちつと待つて下さんせ。
善助　畏まりました。
小萬　そんなら婆さん、又この頃に。
とら　それまでお出でよ……アヽモシ、お危ないよ。お轉びでない事よ。
　ト障子をたてる。合ひ方。小萬下りて、切り戶より出て來て、長床几にかゝる。
小萬　善助さん、誂への物は出來てかえ。

善助　アヽ、出來ましたから、早速持つて參りましたが、モシ、御覽じませ、私しが商賣不相應な、この箱、人より聞かれる度に、さて困りますね。どうかわしやア、松風でも賣るやうサ。ハヽヽヽ。

トせりふのうち、三味線箱の蓋を取り、風呂敷に包みし刀を出し

ハイ、貼替へのお三味線。

小萬　御苦勞でござんした。人が見ては惡い。元のやうに仕舞うて下さんせ。

善助　畏まりました。モシ、小萬さん、どこからのお賴みかは知らぬが、このお刀には、奇妙な所に、文字が彫つてござります。

小萬　どうぢややら、わたしや知らぬわいな。

善助　エヽ、御存じないかえ。どこからのお前へお賴みだえ。

小萬　サ、こりや據ないお方からのお賴み。母さんへ知れては、ちつと惡いゆゑ、別してもない事ぢやが、女子のわたしが此のやうな事を。コレお前、母さんが聞いたなら、必ずともに

善助　ハテ、研屋の善助が、三味線の貼替へのお世話をしたといふ顏サ。併し、珍らしいはそのお刀、燒刃に文字を彫るとは、いさみの腕ではあるまいし。ハヽヽヽ。左樣ならお前、渡しましたぞえ。

小萬　お世話でござんした。モシ、お前、神崎屋へござんすなら、下女の瀧を、爰へ寄越して下さんせえ。

善助　畏まりました。ドレ、呼んであげませうか。

ト合ひ方にて、茶屋の內へ入る。小萬、三味線箱を長床几の上へ置き、心遣ひあつて

小萬　アヽコレ、誰れぞに持たせて行きたいに、あのマア瀧も、市助も、何をしてゐるやら。エヽモウ辛氣な。

トいろ〳〵心遣ひ。よき時分、淡路法印出かゝりゐて、小萬に後より抱きつき

淡路　案じなさんな、用があるなら、わつちが聞いてあげるよ。

小萬　エヽ、惡い事を。誰れさんぢや。放さんせぬか〳〵。

ト淡路法印の手を抓る。

淡路　アイタヽヽヽ。エヽ、ひどく抓つたの。併し、小萬ばうが抓つた痕が、これ爰に。有り難いな

ト痕を嘗めるこなし。

小萬　誰れぢやと思うたら、お前は法印樣。又してもく、アタ無遠慮な。わたしも町人の娘でこそあれ、少しの間もお武家方の御奉公。惡てんがうしなさんすと、聞く事ぢやないぞえ。

淡路　ナニ聞く事ぢやない。コレ、小萬、何も其やうに腹を立てる事は無い。おぬしの器量が好いから惚れたのだ。コレ、さう云はずとも

ト又しなだれるを、小萬振り切つて

小萬　エヽ、おきなさんせ〳〵。悪洒落も程があるわいなア。

淡路　ナニ悪洒落ではない。いま聞けば、下女や丁稚に用がある様子。わしでも濟む事なら、サヽ、わしに云ひなさい。おれが用を足してやらう。

小萬　イエ〳〵、何もお前へ頼む用はござんせぬが……エヽマア、これにつけても、瀧は何をしてゐやる事やら。この三味線を、ちよつとマア座敷まで

トいろ〳〵思ひ入れ。

淡路　アヽ、なにか、三味線箱を持たせたいのか。コレ、小萬ばう、おぬしはマア、いつ藝者になつたおれで濟む事なら、法印が箱持ちになつてやらう。ドレ、これか。

ト箱へ手をかける。

小萬　アヽコレ、それはナ、三味線ぢやさかえ。

トつかへる。

淡路　ハテ、三味線サ。山伏がこの箱を持つて、祈つてやらうよ。
小萬　アヽコレ、その箱はナ。
淡路　サア、持つて行つてやるよ。
ト捨ぜりふにて、箱をあちこちするはずみに紐解けて、中より刀バツタリ落ちる。淡路法印悔りして
ヤ、三味線箱から刀が出たよ。
小萬　サ、これは。
ト寄るを押へて
淡路　ドツコイ、こいつ合點がゆかぬ。見れば小萬が苦勞にする、三味線箱にこの刀。次手に中心を
小萬　アヽコレ。
トいろ〳〵する。淡路法印、刀を拔く。小萬、恐るゝ思ひ入れ。
淡路　なんだか、ハテよく光る刃物だわえ……ヤヽ、コレ〳〵、燒刃に慥か彫つたは文字。ドレ……こ
りやコレ、忠といふ字を一字。
トこの時、占ひの小屋より、庄兵衞、編笠のまゝ窺ふ。
小萬　アヽコレ、そりや他人さんより預かりし、大事の刀。

淡路 忠といふ字の彫つたのが。

小萬 アイ。

淡路 なんだか、こいつも詮議したら

ト鞘へ納める。庄兵衞、顏を引く。官八、出かゝる。

小萬 コレ、この事必ず人さんに

淡路 沙汰してくれなといふ事か。それぢやァ猶々胡亂な刀。こいつを囮に附け込んで、小萬、おぬしを抱いて寢る。

小萬 エヽ、なんでお前に

淡路 否ならなんで刀を娘が

小萬 サ、それは。

淡路 われが母樣に云ふべいか。

小萬 それではどうも

淡路 否ならこれを

ト三味線箱へ手をかける。官八、突きのけ

官八　イヽヤ、さうはならぬワ。
小萬　ヤ、官八さんか。
淡路　コレ鬼殺し、なぜわりやァ邪魔をする。
官八　これサ法印、大人氣ない。小萬どのを捕へて、なんでおぬしは、苛めるのだ。
淡路　苛めはせぬ、惚れた小萬、親へ渡つて女房にもらふワ。
官八　アノ、おぬしが
淡路　女房にもらふ手蔓といふは、忠といふ字の彫つた刀。
官八　ヤ、その刀は、慥かに頭が
小萬　アヽコレ。それを見附けて法印さんが
官八　ようごんす。この官八が呑みこんだ。コレ法印、この箱はおれが預かつた。さう思ふやれ。
淡路　イヽヤ、思ふまい。われが知つた事ではない。小萬に足をつけるのだ。退いて居ろ。
官八　イヽヤ退かない。たつてと云へば、この尺八で貰つて見せう。
淡路　ハヽヽヽ、この尺八も凄まじい。どうして貰ふ。
官八　斯うするわえ。

ト尺八で淡路法印へ打つてかゝる。その手を捕へ

淡路　緑と銘の彫つたる尺八。いつぞや遠州濱名浦。詮議の手がゝり。

官八　なにを。

トかゝる。踊り地になり、淡路法印よろしく立廻つて、官八を當て

淡路　大べら坊め。

ト尺八を引ツたくり、ツイと下座へ入る。

小萬　コレ、官八さん、お前の尺八を、持つて行つたぞえ〳〵。

ト官八心づき、そこらを見て

官八　ナニ法印が尺八を。あの竹は頭から、預かつた大事の品、もしや彼奴が手先から。うぬ、山伏め待ちやァがれ。

ト踊り地になり、追ひかけて下座へ入る。この鳴り物にて向うより左吉、手代の形、手紙を持ち、出て來り、小萬を見て

左吉　ヤ、あなたは小萬さまでござりますか。

小萬　其方は本家の左吉ぢやないか。こりや又わしを迎ひに來やつたのか。

左吉　イエ〳〵、左様ではござりませぬ。後家御様から、この神崎屋の御亭主へお手紙が參りました。

小萬　ナニ母さんから、あの嘉七どのへ手紙が來たとは、ドレ、その手紙、ちよつとわしに。

左吉　イエ〳〵、お前樣には、決して沙汰いたすなと、仰しやつてゞござりましたが、出合ひ頭にお目にかゝり、ツイ斯樣な事を申しました。へイ〳〵、お先へ參ります。御免なされませ。

ト足早に門口へ入る。小萬跡を見送り

小萬　この小萬には沙汰なしと、何やら云うて遣はされたあの手紙。譯を聞かぬ其うちは、ア丶、心がかりな。

ト思ひ入れ。この時、下座にて

東路　サア、來なさんせいな。

トこれにて大拍子になり、小萬、三味線箱を重さうに持つて庭の口へ入る。引達へて下座より東路、與助の手を引ッ張つて出る。跡よりお山附いて出て來り

與助　コレ東路、そりやわがみ、無理といふものぢや。

東路　殿さん、なんでわたしが無理でござんす。

やま　これはしたり、その殿さんといふ事は、他聞の聞え、モシ、決して云はしやんすないな。

與助　それ〳〵、以前は濱名主税之助、今では腰元小萬が世話で、神崎屋の下男。本地へ歸參のそれまでは、下男奉公のわしを捕へて、廓へ尋ねて來ぬというて
東路　サ、わたしがこれほど思うてゐる、その十分の一思はんすりや、せめて一夜さ尋ねて來てやま　ハテ、自由になつては、お屋敷の手前といひ、積る話しに今日爰へ、來なんしたのぢやござんせぬか。モシ、月に叢雲かゝらぬうち
東路　あの離れ座敷へ來て下さんせ。
與助　これはしたり、性急なはずみやう。併し、内の勝手は覺えの與助、久しぶりでのおやま狂ひ。
やま　迎ひの來ぬうち、サヽ、ちやつと行きなさんせいな。
ト突きやる。與助、東路を連れ、庭の口へ入らうとする。好き時分、お虎出かゝりゐて
とら　コレ、神崎屋の若い人。こなさん、その東路が客人か。
與助　サ、それは。
東路　お前は母さん
やま　惡い所へ
とら　よう來たといふ事か。コレ娘、道理こそ好い客を麁末にする、元の起りは、この男めから。

東路　アヽモシ、どうしてわたしが

とら　イヽヤ吐かすな。好い客を麁末にせぬ者が、水仕男とどれ合ふ様子。おれが目にかゝつた、この上の證據はあるまい。それを側から見ぬ振りの、仲居どのゝ氣が知れぬ、なんの餘得で此やうな、けちな男に東路を、執持ち顏しなさんすのぢや。

やま　サ、お前のやうに云はしやんすりや、みな尤ものやうなれど、ぬしも以前は大金を、遣ひ捨てたるお客の果。

とら　サ、そりやア錢金のある時は、お客さんとも大盡とも、敬はいでなんとせう。今では爰の居候ふ逆さに振へば鼻血こそ出やうが、きなかも出さうな身分の男ぢやない。

東路　そりや浮き沈みはある習ひ。今落ちぶれたぬしさんを、見ぬ顏するは本意ではござんせぬ。いかに勤めの身ぢやというて、其やうな情の無い事

とら　ハテ、情が無うても大事ない。人は知らぬが、わしが娘ばかりは、それでも濟む。

東路　イヽエ、わたしやお前の詞は用ひぬわいな。

とら　用ひぬと吐かしやア、ぶち直しても、婆が云ひ條立てにやならぬ。親に向つてその應。うぬ、頰桁を

六幕目





ト あたり見廻し、有合ふ大鉢を取つて打つてかゝるを、與助お山、留めて

やま　これはしたり、お前マア、東路さんをどうしなさんす。

與助　投打ちして怪我でもあつては、わしが迷惑。腹が立つなら、わしなと打つて料簡して

とら　イエ、構はんすな。今の痴言、誰れに云ふのぢや。

ト大鉢を振りあげ、東路へかゝる。捨ぜりふにて兩人留める。奥より善助出で來り

善助　これはしたり、阿母、放さつしやれ〳〵。

とら　イヤ〳〵、放さんせ。うぬ、女め。

ト大鉢を振り廻す。皆々留める。鉢は割れて、與助が目尻へ疵附く。

善助　イヤア、それ〳〵、あの人の顏へ、疵が附いた〳〵。

東路　アレ、お顏へ疵が出來たわいな。

やま　お前、藥は無いかえ。

與助　ハテ、大事ない。騒がぬがよい〳〵。

とら　オヽ、人の娘をちよろまかすその罰で、面に疵が附いたものだ。盗みすれば、その位な事は有ウちぢや。

やま　イエ、そりやお前料簡違ひ。娘と云はしやんすは、そりや誰れの事ぢやえ。
とら　ハテ知れた事、その東路。
やま　イヽエ、東路さんは此方の抱へ。お前の實の娘御でも、親方がゝりの年の內。女郞さん方の顏に
　マア疵が附いては濟まぬぞえ。
とら　サ、それは。
やま　疵附けるならあの子の身代、立て金してからお前の存分。此方に係りのあるうちは、見て居られ
　ぬ仲居の役。
とら　サ、それは。
兩人　サア〳〵〳〵。
やま　婆さん、せりふがござんすかえ。
とら　エヽ、仲居に逢うて凹むのも、みんなうぬゆゑ。
　ト東路へかゝる。善助留めて
善助　これサ阿母、もうよいわな〳〵。
とら　イエ〳〵、凹んぢや居られませぬ。わたしや爰でせりふする。

善助　ハテ、年寄りの冷水同然。爰に居ては、惡いぞ〳〵。
とら　惡いと云つても親の威光ぢや。サア、仲居どの、相手にならう。
善助　マア〳〵、いゝよ〳〵。歸らつしやい〳〵。あの男に疵が附いたよ。
とら　イヤ、歸りやすまい。わしやァあの男に疵は附けない。ありやァ怪我ぢや。
善助　ハテ、歸らつしやいと云ふに。
ト踊り地になり、善助、お虎を引ッ張り、捨ぜりふにて向うへ入る。東路、與助を介抱して
東路　モシ、きつう痛みはしませぬかえ。
與助　イヤ〳〵、痛みはさのみに覺えねど、面へ疵が附いたと云うては
ト思ひ入れ。
やま　アヽ、折惡う藥も無し。こりや、どう致しませうぞ、
ト好き時分に占ひの小屋より庄兵衞、笠のまゝ出かゝりゐて
庄兵　お女中、持合せし藥、進ぜませう。お使ひなされて、跡を身共へ。
やま　ハイ〳〵、それは有り難う存じまする。
ト小屋へ駈けゆき、藥包みを受取る。此うち小萬、出かゝり、窺ふ。

サア〳〵、あなたがお藥を下さりました。

東路　ちやつとお附けなされませ。

與助　どなたか知らぬが。忝う存じまする。

ト捨ぜりふのうち與助、疵口へ附ける事。

やま　モシ、どうでござります。よろしうござりますかえ。

ト與助、思ひ入れあつて

與助　ハテ、結構なこの一藥。面へ附けると其まゝに

東路　どうやら見てゐる其うちに、疵口が段々と癒える樣子。

與助　世にも稀れなるこの藥。どなた樣から

やま　ハイ、あの算置きの御浪人。

與助　殘りを早う。

やま　アイ。

ト庄兵衛に返し

ハイ、有り難うござりまする。

庄兵　残らず進上いたしたいが、此方も主人より拜領の良藥。主君と存じて、大切に所持いたさねば

與助　もしや館に傳はりし

ト見ようとする。

庄兵　御養生なされませ。

ト唄になり、庄兵衞、顏を引く。小萬入る。三人思ひ入れ。奥より嘉七、手紙を持ち、左吉附き出る

下座より駕籠舁き、駕籠を擔ぎ出る。

嘉七　お前方は、これにござりまするか……ヤヽ、見ますれば、お前の顏に

與助　アイヤ、ついした怪我で。

嘉七　ハテ、危ない事でござりましたな……コレ、倉野屋のお若いの。御返事は、此方から。御状は慥かに受取りました。

左吉　ハイ／＼、左樣ならお暇申しませう。

駕籠　サア／＼、お山さん。日の暮れぬうちに、お連れ申さうぞえ。

やま　アイ／＼、合點でござんす。サ、東路さん、今日は此まゝ。又この頃に。

東路　もう歸るのかいな。

與助　其うちに……ハテ、首尾を見合せ

嘉七　預かり人のこの與助。入用あれば何時でも。

やま　そんなら爰から、ぬしを一緒に

嘉七　アノ、この與助を

與助　そりやマアなんで。

やま　ハテ、女子ばかりの歸り道、ちよつと送つて。

與助　アノ、わしを廓へ

東路　エヽ、嬉しうござんす。

ト駕籠へ乘る。

嘉七　お易い御用、同道さんせ。

與助　でも、面の疵では。

やま　ハテ、頃も黄昏。

東路　お山どの

やま　駕籠やらんせ。

ト踊り地になり、東路、駕籠に乗り、お山、左吉、與助附いて向うへ入る。嘉七残り

嘉七　後家御樣からこのお手紙。幸ひ爰で小萬さまに

官八　サア、わたしが持つて行きますよ。

ト合ひ方になり、官八、以前の三味線箱を持ち、小萬附いて出てくる。

嘉七　これは小萬さま、今日は取込みまして、お麁末な御亭主振り。それにつきましても、後家御樣から此やうな、お手紙が參りました。

小萬　母さんからお前の所へ。ドレ。

ト開き見て

ヤ、そんならわたしは小さい時から、お武家方へ云ひ號け。

嘉七　サ、親御仁右衞門さま、お極めなされたまゝに御病死。その聟さんに娶合すと、今さら急にその相談。

小萬　こんな事があらう端か、わたしや願うて今宮の別莊。そんなら留守のその間、聟穿索が

ト思ひ入れ。

これぢやによつて本家へは、もう〳〵歸る事ぢやないわいな。

嘉七　モシ、そりやァあなた、御料簡違ひでござりまするぞえ。
官八　ハテ、この人は、きつい苦勞性な。モシ、小萬さま、この三味線は、お前の別莊へ持つて行つてあけう。サア、ござりませ。
小萬　イエ〳〵、わたしや殘つて、ちつと外に用もあり、お前は先へ歸つて下さんせ。
官七　そんなら官八は、この箱を預かつて
小萬　必ず外のお方へ
官八　ハテ、呑みこんで居りますわな……イヤ、それにつけても先刻の法印。あの尺八を
小萬　まだお前、逢はずかえ。
官八　歸りがけには見附けませう。爰へうせたら先刻の尺八、賴みますぞえ。
小萬　合點でござんすわいな。
嘉七　エヽ、法印とは、胸の惡い淡路であらう。わしも尋ねて……小萬さま、モシ、御思案なされませえ。
官八　エヽ、役にも立たぬ……ドリヤ、行て來ようか。
ト踊り地。嘉七は奥へ、官八は三味線箱を持つて向うへ入る。小萬、手紙を見て

小萬　斯ういふ聟の沙汰あつては、猶更本家へうか〳〵と、こりや滅多には、歸られぬわいな。

ト思ひ入れ。奥よりお米、お瀧、二枚の繪姿を爭ひながら出て來り

よね　これいなアお瀧どの、そりやわたしが貰うた繪ぢやわいな。

たき　イヽエ、わたしや爰の若い衆に貰うたわいな。

よね　なんの、わたしが貰うて置いたわいな。

ト爭ふ。小萬見て

小萬　これはしたり、お米さんを相手に、何をマア其やうに。して、持つて居やる繪は、何ぢやぞいな

よね　アイ、こりや役者繪さうにござんすゆゑ、わたしが貰うたを、お瀧どのが

小萬　ドレ、見せなさんせ。

ト取つて、よく〳〵見て

この子わいな。こりや役者繪ぢやござんせぬ。人相書というてナ、お尋ね者を描いた繪姿ぢやわいな。

よね　エヽ氣味の惡い。わたしや役者繪ぢやと思うて居たわいな。

たき　ソレ見なさんせ。わたしやほんまの役者繪を、あの袋戸へ隱して置きました。ドレ、取つて參り

ませう。

よね　アヽコレ、それをわたしに下さんせ。

たき　イエ／＼、ありや宿入りのお土産に致しまするわいな。

ト切り戸へ入る。

よね　ハテマア、見せなさんせいな。

ト合ひ方にて、追ひかけ入る。小萬、總姿を持ち、思ひ入れあつて

小萬　手紙の上に此やうな……無心云うたら、よもや否とも。

ト八卦小屋の方へ目を附ける。入相の鐘。小屋の内にて

庄兵　こりやモウ暗うなつたわえ。

トこの聲にて小萬、上の方に窺ふ。庄兵衞出て來り

ドリヤ、灯の支度にかゝりませう。

ト思ひ入れ。

いつぞや口の岡にて、殿より拜領仕りし、金瘡を癒やすこのお藥。今も今とて疵口の、即座に癒ゆる希代の藥。申さば御主君同然と、なか／＼身にも命にも、代へ難きは

トこの時小萬、そろ〳〵と側へ寄つて、フツト顔見合せ、庄兵衞ちやつと懷中する。小萬、モヂ〳〵して

小萬　わたしや少とあなたに

庄兵　何ぞ御用かな。

小萬　ハイ、少と御無心がござりまして。

庄兵　無心とは、何でござるな。

小萬　ハイ……そりや

ト思ひ入れあつて

わたしやあなたに身の上の事が、見ておもらひ申したうござりまする。

庄兵　アヽ、考へてくれいとか。商賣づくぢや。隨分見て進ぜう。併し、暗うなつた。ドレ〳〵、爰へ道具を持つて來て

ト合ひ方、入相の鐘。笠のまゝ、庄兵衞、八卦道具を本とも持ち出し來り、二人、長床几へかゝる。この時小萬、卷きかけし今の手紙、膝の方に、ほら〳〵とほどけかゝりある。楊弓の合ひ方。

サ、娘御、考へまするは、何でござるな。

小萬　ハイ、わたしや相性が見ておもらひ申したうござりまする。
庄兵　アヽ、男女の相性とな。して、女中の年は。
小萬　アイ、十八でござりまする。
庄兵　アヽ、女十八、甲寅。アヽ、水性でござるな。して、男の年は。
小萬　アイ、その殿御の年は、慥か
　トうぢ／＼して、本の上にある天眼鏡を取つて
　モシ、こりや何でござりまするえ。
庄兵　そりや、天眼鏡と申す物ぢや。
小萬　目鏡でござりまするかえ。
庄兵　左樣々々。
　ト小萬、天眼鏡を持ち、モヂ／＼して居る。
　サ、男の年は幾つでござる。
　ト云はれ、小萬、モヂ／＼して居るうち、持つたる天眼鏡へ庄兵衞の顏うつる思ひ入れ。小萬、これを見詰める。庄兵衞は、卷きほどけたる文の文言を、笠の中より讀む思ひ入れ。小萬、心附き、帶に

挾みし繪姿を二枚出し、鏡にうつる庄兵衞の顔と、繪姿を見比べる思ひ入れにて

小萬　殿御の年は、慥かこの繪に似寄りのお年。

ト兩人思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり

庄兵　そりや玉鳥が人相書。その繪ぐらゐの年配か。

小萬　アイ。

庄兵　イヽヤ、その姿の男より、ソレ、其方の繪圖の二本駄右衞門、その年配の男がよからう。

小萬　アノ、この繪に似寄りの

ト取上げ見て

此方の殿御と違うて、怖ろしさうなこの繪の相性。わたしは否で

トすた〳〵に破り捨て

ござんすわいな。

庄兵　その繪はお前の氣に入らぬか。

小萬　アイ、わたしが好いたは、この繪のお方。

ト庄兵衞に、その繪姿を見せる。

庄兵　ハテ、物好きなお娘御。お前の内は

小萬　本町筋にて、倉野屋の小萬と申して。

庄兵　聞き及びし小萬どの、慥か今では

小萬　アイ、今宮邊の別莊に。

庄兵　その今宮の別莊は、節ならずして花咲く桐の

小拾　アイ、卽ちそれがわたしの住居。

庄兵　すりや、お前の庭に……ハテナア。

小萬　モシ、わたしの願ふ相性が、叶ひませうか。

庄兵　サ、それも佛神天道を、祈られたなら叶はいで。

小萬　嬉しうござんす。とてもの事に手の筋を

庄兵　手相を考へろか。ドレ〳〵、右の手を見せさつせい。

ト小萬、恥かしさうに右の手を出す。庄兵衞、この手を取る。小萬思ひ入れ。

アヽ、これは善い手の相でござる……コレ〳〵、この中指の間へ通つた筋を、順紋というて俗に升掛け筋。コレ、この親指と手の平の間に、經數といふ筋が……コレ〳〵、この三筋が女の手へ

表はれる時は、男について、至つて苦勞があるぢや。

小萬　エ。

ト手の平を隱すとて、庄兵衞の手を握り

添はれませうかえ。

庄兵　イヽヤ、添はれまい。

小萬　そりや、なぜにえ。

庄兵　そこにある手紙の文で。

小萬　エ。

ト庄兵衞、ほどけし手紙を取つて

庄兵　その文言では武家方に、云ひ號けせし男があると、書いてあつては主あるこなた。外に男は持たれまい。

小萬　たとへ幼ない時よりも、云ひ號けせし男があるとて、それを嫌ふはまゝある事。是非とも、あなたに。

ト寄りそふ。

庄兵　品によつたら此方も、願ひある身の素浪人、殊には庭に花咲く桐の……サ、互ひの交はり睦まじう、話し合つたら、話す心か。

小萬　サ、女子の口から此やうな、恥かしい事云ふからは、たとへわたしの母さんが、男を持てと仰しやつても

庄兵　男は持たぬ心になるか。

小萬　アイ。

庄兵　すりや親達の氣に違ひ、我まゝ者と人毎に

小萬　疎まれるのが、却つてわたしの

庄兵　身の仕合せは浪人の、獨身者のアノ身共へ。

小萬　アイ。して、御家名は。

庄兵　そりや眞實を見た上で

小萬　そんなら必ず

庄兵　花を目當てに

小萬　忍んでお出でを。

淡路　そりや又あんまり。

ト寄りそふ。淡路法印出かゝりゐて、この體を見て

ト庄兵衛を退けて、小萬に抱きつく。庄兵衛、突きのける。淡路法印、尺八にて打つてかゝる。その手を捕へ

庄兵　綠と記せしこの竹は。

小萬　そりやソレ先刻に

淡路　なにを。

ト振りほどいて打つてかゝる。庄兵衛、身をかはし、尺八を引ッたくり、淡路法印を當て

庄兵　覺えがあらば

ト尺八を小萬へ渡す。

小萬　嬉しうござんす。

淡路　ムウ。

ト心づき、又かゝる。床几を刎れのける拍子に、淡路法印、撞となる。この途端に庄兵衛、懷中より藥包みを落す。小萬、拾ひ取るを、庄兵衛、ちやつと取つて懷中する。木の頭。小萬、庄兵衛に抱き

つく〲下の方に淡路法印こなし。よろしく、

拍子　幕

今宮別莊の場

役名＝二本駄右衛門實ハ石見太郎景純。玉島庄兵衛實ハ中川多膳。若黨、五郎八。濱名左門之頭。仲衆、仁藏。下女、お鍋。宇都谷團五。鬼殺し官八。關野貢。鹽見當馬。長井丹藏。横須賀源五郎。濱松軍藏。淡路法印。倉野屋小萬。後家、お幸。下女、お瀧。櫻屋お米。吉野の若宮。

本舞臺、三間の間、大和葺き、丸太柱の屋體、向う茶壁、納戸口更紗の暖簾。上の方に雛棚、よき所に雛道具入りと書きし札貼りたる箱。正面に懸け時計。上に井筒、四ツ目垣、山吹。下に桐の立ち樹花盛りの體。誂らへの門口。すべて今宮の別莊。爰にお米、前幕の形にて、雛の膳を揃へてゐる。お瀧、お鍋、前垂れ、下女の形にて、吹き竹と物指しで竹刀打ちの稽古して居る。仁藏、小揚げの形にて指圖してゐる。山姥の唄にて幕明く。

瀧鍋　ヤツ〲。

ト不器用に立廻つて、お鍋、物指しを打落され、お米の方へこける。

よね　アヽコレ、お鍋どの、滅相な、どうなさんすぞいなア。
仁藏　それ〳〵、お鍋が負けた〳〵。今度はお瀧どのと、仁藏が立合つて見ようか。
たき　どうマア女子のわたしが、アノお前に。
なべ　左やう〳〵。殿御にどうして勝たれませう。
仁藏　ハテ、柔術の劍術のといふものは、女同士ばかりで立合ふものでもない。こちの小萬さまが、なんだか急に稽古したいとあつて、天満堂島あたりを尋ねたところが、師匠も無いものよ。そこでその先生の出來るまで、この仁藏が、覺えた通りを指圖するのよ。
なべ　何ぢややら小萬さまも、怪しからぬ事を稽古なさんすわいの。併し、ぶたれた返報。コレ、もう一勝負せうわいの。
仁藏　これサ、さう急き込む事はない。併し、お鍋の負け腹がいゝワ。もう一勝負やつて見ろ。
なべ　合點でござんす。サア、お瀧どの、立合はんせ。
たき　ハテ、もうよいぢやないかえ。
なべ　イエ〳〵、立合はんせ〳〵。
ト手を取つて引立てる。

仁藏　こいつは好い慰みだ。サ、お鍋お瀧が、勝負が見たい〳〵。
たき　エヽ、惡い事を。
なべ　サア、立たんせいな〳〵。
　　ト唄になり、お鍋、捨ぜりふにてお瀧をせがむ。この時、向うより市助、小箱の提灯をともし、お幸
　　後家の拵へ。五郎八、さんすいなる形にて出で來り、花道にて
かう　コレ、市助、どうしても娘は、戻らぬと云ふかいの。
市助　左樣でござりまする。雛樣のあるうちは、戻らぬと仰しやります。
五郎　ムウ。節句が濟んでも、矢張り雛を立てゝ置くが、當地の習ひでござるかな。
かう　イヽエイナア、立つて置きまするも、娘が我まゝからでござります。
　　ト此せりふを云ひながら、門口へ來り
市助　ハイ、阿母樣のお出でゞござります。
仁藏　ヤ、御本家の後家御樣がお出でだ。ソレ、お鍋、叱られるな〳〵。
なべ　イエ〳〵、わたしや今の勝負を
　　ト吹き竹を持ち、お幸と顔見合せる。

かう　こりや、何をマア其やうに
なべ　ハイ、これは何でござりまする。オヽ、それ〳〵、私しは尺八の稽古を。
かう　何をマア阿房らしい。
よね　阿母樣、夜に入りましてマア
たき　ようお出でなされました。
かう　これはお米さん、遊んでか。まだ雛棚も其まゝに。して、娘小萬は。
たき　ハイ、奥に雛樣のお膳、拵らへてゞござりまする。
かう　コレ、仁藏、其方は此方の內へ、去年から抱へた召使ひ。生國は遠州產れ。達者なゆゑに小揚げの奉公。知りやる通り、この間から、娘が俄の我まゝ。本家を嫌うて、この別莊へばかり來てるるといひ、聞けば、柔術とやら、竹刀とやらの、稽古すると聞きましたが、こりや、其方も來てから、同じやうに。
仁藏　モシ、阿母樣え。あなたは女子の、いらぬ事と思し召しませうが、柔術の稽古をするのも、外を步いて、毒づく奴や、惡てんがうをする奴等を捕まへて、ひどい目にあはせて御覽じませ。倉野屋の娘御は剛敵者と、いさみめらにギウの音もあげさせないやうになりなさつたら、お前樣、さ

ぞお喜びでござりませう。

かう　なんのそれをわしが喜び。女子はどこまでも女子らしう……コレ、して、娘は何をして居やるぞいなう。

仁藏　モシ、小萬さまえ、お母樣がお出でなされましたよ。

小萬　アイ、今そこへ參ります。

ト合ひ方になり、小萬、障子の内より出て來り

母さん、なんでマア夜に入つて、お出でなされましたえ。

かう　この母が夜に入つて、わざ〳〵來たのは

ト門口を見て

これはしたり、まだ表にかいの。サア〳〵、お入りなされませ。

ト五郎八、最前より、桐の花を、よく〳〵見て居て

五郎　成る程、奇妙。時來らぬに桐の花。ハテ、見事にも、よう咲いたワ。

仁藏　ア丶、お客ださうなが、その桐の花の咲いたが、それほど奇妙に思はつしやるか。

ト五郎八の形を見て

ヤ、なんだ。こなた、お客だと思つたら、ハテ、さんすいな形をして

かう　アヽコレ、不調法な。あなたは娘が云ひ號けの聟さまぢや。

小萬　エ、アノ、云ひ號けの、わたしが聟さん。

仁藏　アノ、寒さうなおさぶさんが

かう　エヽ、又かいの。聟に向つて不作法な挨拶。其方は爰に用は無い。コレ、お客のお出で。邪魔な長持、片附けて置きや。

仁藏　エ、この長持を。

かう　片脇へ寄せて置きや。

仁藏　どうして、これにやア

小萬　アヽコレ、お雛様のその長持、片寄せるには及ばぬ。今日雛さんも、めでたう立つて、道具も爰の長持へ、ナ。其方は後に手傳うてたも。

仁藏　ハイ、お手傳ひ申しませう。小萬さま、それまでは、勝手で白酒でもおねだり申して

小萬　待つて居さんせ。

仁藏　ヘイ。

ト思ひ入れ。

小萬　女子どもは、お膳の拵らへ。

瀧鍋　畏まりました。

仁藏　ハイ、お客樣、これにござりませ。

ト唄になり、仁藏、五郎八に目を附け、思ひ入れ。お米お瀧お鍋附いて下座へ入る。

小萬　モシ、母さん、すりや、あのお方が

かう連合ひ存生のうち、云ひ號け致し置きし、其方の聟どの

五郎　中川多膳は身共でござる。

小萬　エヽ。

五郎　親ども云ひ號け致したまゝ、これまで知る人にも相成りませぬ某。この度、わざ〳〵參つたは、見らるゝ通り當時浪人。歸參の叶ふそれまでは、便る方なき拙者ゆゑ、活計に困り、恥かしながら、云ひ號けの緣ござれば、養ひに與からうと、倉野屋へ參つたところ、小萬はこれなる別莊にと、聞いて母御と同道いたしました。小萬どの、相應の有附きまで、多膳が身の上、頼み申した。

ト思ひ入れ。小萬、こなしあつて

小萬 ほんにマア、思ひがけないあなたのお賴み。かけず構はぬお方でも、落目は救うてあげたいもの。ましてわたしが小さいより、云ひ號けの多膳さま、女夫になりたいものゝ、云ふに云はれぬ、アノわたしは

かう ヤ。

小萬 サア、アノ、わたしや殿御を一生持たいで、氣儘にどうぞいつまでも、この別莊も末は庵室、身はそぎ尼ともなりたい願ひ。お氣の毒ぢやがあなたへ斷り。云ひ號けの御緣もさつぱり。

かう そりやモウ、結納の取交し、あつたといふ事でもなし

五郎 イヽヤ、今更變替へござつては、多膳の武士が立ちませぬ。結納の印は兎も角、刀の手前、是非とも御息女小萬どのは

かう サ、さう仰しやつでも肝腎の

五郎 娘が何を申さうとも、親の高下で

小萬 なんの、わたしは氣隨者。母さんはじめ親類の、どなたが意見さんせうが、わたしが屹度お斷り。アイ、否でござんす。これまでついぞ一言も、音信さへした事もなう、その身の流浪に云ひ號けの、緣を便つてお出でとは、おんまりな得手勝手。母さんさうぢやござんせぬか。

かう　サ、さうは思へど向うはお武家。もしや其方の身の上に
小萬　サ、それ案じてはいつまでも、まつはる縁と思ふから。
五郎　すりや、小萬には不承知とな。然らば是非もない、離縁いたして進ぜうが、それでは約束いたされし、夫や親の位牌へ立つまい。
小萬　エ。
五郎　但しは過行き召されたる、仁右衛門どのゝ遺言に、もし離縁の事、書き殘されたか。
かう　サ、その儀は。
五郎　よもやさうでもござるまい。さすれば切れぬ云ひ號け。多膳が今の身の上を、外目に見ては居られまい。
かう　サ、仰しやる通り、先祖の血筋を思ふから、コレ、娘、御流浪なされてござつても、今にも歸參の叶ふ時は、以前の侍ひ、恥かしからぬ夫婦仲。初孫見るのが母の樂しみ。ハテ、下々の胤ではなし、多膳さまといふお侍ひ、恥かしい事はない。コレ、わしも世間へ肩身が廣う。サ、爰の所を聞き分けて
　　ト此うち小萬、胎内のことを思ひ出し、思ひ入れあつて

小萬　わたしや男と肌觸れて、嬰兒を產むのか、きつい嫌ひでござりまする。

かう　サ、それぢやというて、變替へすれば父御へ不孝。わしへの不孝は詫びもならうが、佛へ詫びはならぬと思ひ、あの云ひ號けの多膳どのと

小萬　エヽ、お前までが同じやうに。ハイ、否でござりまする。

五郎　後家御、小萬はあの如く

かう　サ、思うて見れば殿御の前で、喜ぶ顏のならぬも尤も。この上とくとこの母が、云ひ聞かすまで母家にゆるりと。

五郎　お世話とござらば本家より、この別莊に直ぐにこれから。

かう　イヽエ、娘も本町で。

五郎　その美しい女房小萬。本家へ今から參らうより、見事に咲いた桐を眺めて

小萬　ヒ

五郎　拙者はこれが望みでござる。

小萬　すりや、あの桐を、お前は眺めて。

五郎　ハテ、亭主の好きな赤烏帽子。心遣ひは決して無用。

小萬　エヽ、どうなと勝手になされませい。
ト思ひ入れ。この時、五ツの時計を三つ打つ。五郎ハ聞いて
五郎　ハテ、初夜を打つべき時計の數、三つ打つたは、何か仔細が
ト立ちかゝる。小萬驚ろき、手早く時計の分銅をキッと結び
小萬　イヽエ、こりやアノ、狂ひが出たのでござんす。
ト思ひ入れ。
五郎　時計も女子と同じ事、得て狂ひの出たがるもの。其方も心の狂はぬやうに。
小萬　なんの、わたしが心に狂ひの
五郎　狂はぬなれば、身共と祝言。
ト立ちかゝる。小萬思ひ入れあつて
小萬　ハテ、いま云ふ通り、わたしや男は
ト障子屋體へ。
五郎　ヤ。
ト寄る。

小萬　ハイ、嫌ひでござりまする。

ト障子を閉てきる。唄になる。兩人思ひ入れ。この唄をかり、向うより淡路法印、ウソ〳〵出て來り
門口へ來て

淡路　爰だ〳〵……小萬、内にか。

トずつと入る。

かう　誰れぢや、どなたぢや。さうしてマア

淡路　イヤ、わしやァ淡路法印といつて、祭文ぢやァ名の賣れた、法印樣でごんすが

ト此うちお幸、淡路法印をつく〴〵見て

かう　成る程、さう云やこなさんは、いつぞやァノ遠州で

ト此うち淡路法印もお幸を見て

淡路　アヽ、それ〳〵、イカサマ、その時の阿母。併しあの折の事を云ふと、其方の方にも、ナ

トお幸、思ひ入れあつて

かう　ムウ。さうして、こなさん又爰で、小萬に用とは。

淡路　阿母、こなたは知るまいが、小萬におれが取られた代物、緑といふ銘のある、尺八を取返しに、

かう　アノ、娘がこなたの尺八を

淡路　オヽサ、しかもそりやア遠州で、この法印がとつくりと、見極めて置いた大泥坊、二本駄右衛門が所持の尺八。

かう　エ。

ト驚ろく。

淡路　どういふ理屈で爰の小萬が、巻きあげたその筋道。そればつかりではない、女の癖に三味線箱へ押ツ隠した、忠の一字を彫つた一腰。

五郎　ナニ、忠といふ字を彫つた一腰、あの小萬が所持いたすと。

淡路　それサ、拵らへの結構。差し裏に忠といふ字を彫つた刀も、まんざら筋の無い刀とは思はれないどういふ譯で女の身で、そんな物を持つてゐるやら、それもせごして見ようと思つて。

五郎　ムウ。差し裏に忠といふ字は、この多膳が兄、水子の折、添へて捨てしと親人が、孝の文字を彫りつけし、刀を我れへ送られし、その折柄に具さの御狀。それをどうして、アノ小萬が

淡路　持つてゐる譯、出所も、あの尺八とどんぐゐるめか。ドレマア小萬に

ト立ちかゝる。お幸これを留めて

かう　アヽコレ、何か様子は知らねども、聞けばどうやら恐ろしい、その尺八や刀の譯、母がとつくり尋ねた上、ひよんな事ならこなさんの、心一つでどうぞして。

淡路　そりやハヤ、首を取らうより、此方もそれが勝手づく。おやの抜けないを承知なら、惚れ込んでゐる法印に、阿母、小萬を下さるか。

ト お幸、五郎八へ氣兼ねして

かう　サア、そりやア、どうも。

淡路　ならずば矢ッ張り詮議して

ト 奥へ行かうとする。五郎八とめて

五郎　イヤ、その詮議、御身に頼まぬ。身共が直々詮議する。

淡路　して、こなさんは詮議の役か。

五郎　イヤ、役目といふではござらぬが、其方もいらざる詮議立て。たつてと云はゞ、第一其方の首が飛ぶ。

淡路　ヤイ〱〱、なんでおれの首が飛ぶ。

五郎　主ある女に不義の科で。

淡路　イヤ〳〵、ついぞ一言冗談にも。

かう　さうは云はさぬ。證據はこの母。

五郎　それでも不義は仕掛けぬか。

淡路　サア、そりやア。

兩人　サア〳〵〳〵。

五郎　いらざる事にほでさして、但し命を失ひたいか。

淡路　どうして命を

五郎　惜しくば高見で見物いたせ。

淡路　ムウ。いま〳〵しい。

かう　さうして小萬が詮議をば

五郎　多膳がきつと詮議を遂げ、その尺八の入譯も、また忠といふ字の刀の出所、同じく一本駄右衞門なら、それこそ身共が

淡路　ヤ。

五郎　サ、見遁しならぬ、小萬も同類。

七幕目





かう　もしもさうなら
淡路　訴人をする氣で
　　ト立ちかゝる。五郎八、きつと留めて
五郎　いらぬおのおれ差配立て。こま言云はずと
　　ト淡路法印を下手へ突出し、戸をしめる。
　立歸れ。
　　ト思ひ入れ。
淡路　オヽ、歸るは歸るが、何か奥齒に物のある、この別莊の體たらく。阿母、おさぶ、馳走にあうた
　禮はゆるりと。
五郎　ヤ。
淡路　待つてるやれ。
　　ト合ひ方へ捨て鐘。淡路法印、歸らうとして、あたりを窺ひ、門口の木部屋へ入る。
五郎　物ありげなるあの法印。
かう　アヽ、これにつけても氣強い娘。お前へどうも

五郎　ハテ、まだ年若なる小萬どの、心の定まる年でもなし、とくと教訓いたしなば

かう　心も直つてお前と祝言。

五郎　マアそれまでは本家が大切。夜更けぬうちにお宅まで、同道いたさう。

かう　娘が體裁を腹立ちも、なされぬ上にお優しい。そんなら今宵は、あなたと共に

五郎　後家御樣。

かう　アヽ、憎いは娘

五郎　ハテ、夜が更けまするわえ。

ト唄に時の鐘。市助、提灯を持ち、兩人向うへ入る。木部屋より淡路法印、ソツと出て内を窺ひ

淡路　この間に小萬を引ッかたけ、何かの詮議も

ト内へソツと入る。奥にて

仁藏　モウ〳〵、白酒は御免だよ〳〵。

トこの聲に思ひ入れして、鍵棚の下へ隱るゝ。捨て鐘、合ひ方。奥より仁藏、尺八を後へ差し、出て來り

エヽ、あのお鍋めが白酒の惡強ひに、困じ果てた。

トあたりを見廻し、尺八を出し

こりやア頭が祕藏の尺八、綠と印しのある竹を、あの法印めが嗅ぎつけたからは、爰へ出しちやア置かれぬわえ。

ト四ツの鐘。合ひ方。向うより官八、頰かむり、四ツの拍子木を打つて出て來り、門口へ來て拍子木を打つ。仁藏、表へこなしあつて、雛棚の花立てへ尺八を隱し、門口へ出る。

官八 仁藏か。

仁藏 官八。

官八 づきが來さうだ。

仁藏 ヤ。

官八 コレ。

ト囁く。

仁藏 そんなら夜のうち高ふけり。併し頭に

官八 逢つての上で

仁藏 コレ。

ト捨て鐘、合ひ方。兩人、木部屋の蔭へ入る。お瀧、お鍋、絹の夜着蒲團を持ち出す。

なべ　サア〳〵、お瀧どの、夜の短かいに、早うお床を延べて、わしらも寐ようぢやあるまいか。

たき　さうしようわいな。

ト好き所へ床を敷き

門の締りはよいかえ。

なべ　それ〳〵、締りが肝腎ぢや。

ト門口の掛け金をキッとかけ

サア〳〵、行つて寐ようわいな……イヤ、ほんにわたしや、夕化粧して寐ようか。

ト鏡臺を取つて好き所へ置く。

たき　これはしたり、マア、來て寐さんせいな。

ト無理に引ッ張り、奥へ入る。これより誂らへの合ひ方。向うより庄兵衞、黑頭巾、好みの形、誂らへの道具袋、龕燈を照らし、出て來り、花道にて

庄兵　世の人口に違はず、この家に咲きたる桐の一樹、節を違へて開きしは。もしや尋ねる

ト龕燈を照らし、向うを窺ふ。時の鐘、忍び三重に變り、庄兵衞、門口へ來り、袋より望みの道具を

出し、門口をこぢろ。此うち向うより五郎八、頰かむりにて、以前の風呂敷包みを抱へ、窺ひ〳〵出で來り、花道にて舞臺をためらふ。奥より小萬、鑵の膳を持ち、出て來り、そろ〳〵と長持へ差寄り帶に挾みし鍵を出し、錠を明け、既に蓋を明けんとする時、門の戶締り、強く物音する。小萬驚ろき錠を明けたまゝ、門口へ思ひ入れ。この時、戶はソッと明く、庄兵衞、ズットト入る。五郎八思ひ入れあつて、木部屋の蔭へ入る。庄兵衞、奥の方を窺ふ。

小萬 オヽ、怖。

ト逃げようとする小萬を、庄兵衞ズッと捕へる。立廻りよろしく、持つたる龕燈にて、小萬が顏を見て

庄兵 小萬どのか。

小萬 さう仰しやるは、この程の

庄兵 身は筭置きの素浪人

小萬 すりや、その時の詞を違へず

庄兵 花咲く桐の庵を目當てに

小萬 爰へ忍んで

庄兵 其方と知らず
小萬 驚ろくわたしを
庄兵 既に危ふく
小萬 エ。
庄兵 ハテ、危ない事で
小萬 ようマア尋ねて

ト兩人床の上にて

ござんしたなア。

ト嬉しきこなし。

すりや、給姿に違ひなう、いよ〳〵お前は。
庄兵 いかにも小萬が目水晶、晝は算盤き、夜に入ると、武家方寺屋の嫌ひなく、富家の財寶我が物と目がけて歩く烏羽玉の、闇を便りの夜働らき、それとはよもや白浪の、この身の素性を聞いたなら、小萬は愛想が盡きようがな。
小萬 すりやアノお前は、恐ろしい

庄兵　盗みする身を、小萬はよもや。

小萬　サ、お尋ね者の繪姿に、どうやら似寄りの笠の内。

庄兵　面を包む日蔭者、身共が家名は玉島庄兵衞。

小萬　サア、その盗賊の繪姿に、似寄りのお前、悪い世渡りなさるゝと、思うて見ても忘られぬ、女心のいたづらから

庄兵　身共に惚れたか。

小萬　どうした事やら、悪魂お前に、心迷うて云ひ號けの、そのお方をも袖にして。

庄兵　して又、其方が云ひ號けの、男の家名は。

小萬　今では浪人なされども、濱名の御家中、中川多膳さまといふ

庄兵　すりや、その多膳が、小萬が爲の。

ト思ひ入れ。

小萬　サ、その主ある身を以て、どういふ事にか、お前には

庄兵　心底明かして女房になるか。

小萬　アイ、不束者でも大事ない、お心なればなんのマア、たとへ夫は盗みする、泥坊さんの女房ぢや

と、笑はれ、人に譏られても、なんの厭はう。モシ、慈悲ぢや。どうぞこの上、お見捨てなう。

庄兵　鬼の女房の、鬼神となるか。

小萬　それがわたしの願ひぢやもの、コレ

トずんと立つて雛棚より、銚子杯を取り來り

幸ひ彌生の桃の酒、未來をかけて女夫の杯。

庄兵　すりや、どうあつても盜人の、小萬は女房になるぢやまで。

小萬　ならいでかいな。惚れた殿御と祝言の、二世の杯、誓ひの固め、女子の方から

ト手酌にて飲んで、庄兵衞へ献す。この時、淡路法印、雛棚の毛氈をあげ、顏を出して思ひ入れ。庄兵衞、前なる鏡臺へ、淡路法印が顏のうつるを見て

庄兵　ヤ。アレ、あの鏡へ人影が

トこれにて淡路法印、ちやつと隱れる。小萬は、長持の内と心得違ひにて

小萬　オヽ怖。

ト庄兵衞へ抱きつく。庄兵衞思ひ入れ。

庄兵　怖いといふは其方より、この盜人の玉島も、怖い心の……女ばかりのこの別莊。こりやこの家に

は、隠し男が忍ぶと見える。

小萬　エヽ、なんでマア、忍び男が

庄兵　サ、外に浮氣もあるまいが、疑ひ深いが盗人の、晝寢の外はなか／＼に、夜の枕はたまさかに。その玉島が女房に、なる心なら

ト懐より前幕の人相書を出し

コレ、小萬、この繪姿へ、誓紙をしやれ。

ト小萬見て

小萬　こりやこの開生玉で、お前を見染めたその時の、その執持ちは即ちこの繪、人相書が戀の執持

庄兵　サ、その執持ちの繪姿へ、其方の誓紙据ゑた上、心ほぐるゝこの玉島、六十餘州の神々を、書くに及ばぬ庄兵衛が、人相書とあるのが幸ひ、爰へ其方の誓ひの誓紙、ならねば外に男があらう。僞りなくば、サヽ、この場で誓紙。

小萬　文言書かねどお前の面體、よくも似寄りし繪姿へ、血を注ぐのが即ち誓紙、僞りならぬ、わたしが誓ひは。

ト鏡臺の剃刀を取つて、繪姿の上にて、バツタリと指を切り、苦痛の思ひ入れ。庄兵衛、介抱して

庄兵　出かした小萬、眞實見えた。

小萬　これで疑ひ晴れましたか。

庄兵　これ見てからは、いよ〳〵女房、疵口癒やすはこの藥。

ト包みの藥を小萬に渡す。

小萬　アノ、この包みは。

庄兵　身が所持いたす、祕方の妙藥。

小萬　すりやアノこれが

ト思ひ入れ。

庄兵　指まで切つた上からは、いよ〳〵小萬は。

小萬　お前の女房。

庄兵　女房なれば、夫が頼み。

小萬　なにアノわたしに。

庄兵　密かに尋ぬる仔細があつて。

小萬　そりやマアなんのお尋ねが。

庄兵　庭に花咲くあの桐の、節を違へし珍事こそ、樣子なければ叶はぬ事。正しくこの家に尊像の、隱しあらんと思ふから、サヽ、女房となれば夫が爲、包み隱さず有やうに。
小萬　すりやアノ桐の、花咲く珍事を
庄兵　其方が知らぬといふ事あるまい。女房なれば夫の爲、包まず爰で。
小萬　サア、そればつかりは。
庄兵　云はぬは身共へ戀慕と見せ、僞り表裏の女よな。
小萬　アヽモシ、なんでお前を
庄兵　然らば有體、物語るか。
小萬　サア、それは。
庄兵　戀路は噓か。
小萬　サア
庄兵　僞り云うたか。
小萬　サア
兩人　サア〳〵〳〵。

庄兵 どうぢや。

ト小萬思ひ入れあつて

小萬 わたしが願ひの叶うた一藥。御恩返しはあの桐の、花咲く不思議は。

ト云はうとする。この時、後の長持ちの蓋を明け、駄右衞門半身出して、小萬を突く。小萬「アッ」と
苦しむ。庄兵衞駈けより

庄兵 ヤヽ、小萬を害せし曲者は……ヤ、駄右衞門か。爰に忍んで

駄右 玉島庄兵衞、存命なるか。

ト出る。

庄兵 日の岡峠で其方が、切りつけたりし刀疵、妙藥あつて直さま全快。

駄右 其方が切りこむ切尖が、臑にかゝつて、今以て

小萬 サ、その金瘡の妙藥が、欲しさのまゝに

駄右 女めは身共を僞つて、よくも眼前不義密通。

小萬 サア、それゆゑにこそ、手に入る良藥。

ト差出す。これを取つて

駄右　すりや、この藥を取り得ん爲に
小萬　思はぬおじやらも男の爲と
庄兵　身を僞りし、憎き小萬。
ト立ちかゝる、
小萬　モシ。
ト苦痛の思ひ入れにて手を合す。
庄兵　されども苦痛を
駄右　助くる介錯。
庄兵　刀の焼刃に
小萬　忠といふ字の
庄兵　もしや別れし
駄右　ヤ、なんと。
ト立ちよる。小萬、縋つて
小萬　モシ、お前の胤を、お前の手にかけ。

駄右　すりやアノ、船にて一度の情が

小萬　はや五月の

駄右　ア、知らぬ事とて

ト思ひ入れあつて庄兵衛と顔見合せ、キッと氣を替へ、拔打ちに小萬の首を打ちおとす。この時、五郎八、菖蒲革、羽織袴に着替へ、小蔭に出て窺ふ。

庄兵　小萬は身共が云ひ號け、それに不義ある駄右衛門は女敵。いで、玉島が。

ト拔いて切りかける。駄右衛門、持つたる刀にて立廻り。外より五郎七、この體を見て、ツカ／＼と内に入り、この中へ入り、有合ふ蒲團にて白刃を押へ、きつとなつて

五郎　盗賊捕つた。

兩人　ヤ、なんと。

五郎　兩人ともに日蔭のその身、貞女の小萬が志し、命を捨てたる操に愛でゝ

兩人　ヤ。

五郎　コレ。

ト小萬の首を見せる。兩人思ひ入れ。

女房一人に二人の夫、しかも兄弟お二人の●

駄右　ナニ、兄弟とは

庄兵　孝の一字が

　　ト白刃を突出す。駄右衛門見て

駄右　誠に刃に孝といふ字の

庄兵　所持の刀は忠といふ文字。

駄右　いかにも焼刃に

庄兵　それぞ忠孝二振りの、雌雄と名けし形見の刀。

駄右　して、持ち主は、何者にて。

五郎　拙者が御主人濱名の老臣、お旦那中川隼人さま、御男子一人、庚申のその夜に誕生、盗賊の憂ひあらんを嘆かはしく、忠の文字の刀を添へ、

駄右　所は三州吉田の驛、捨て子の汝と後の親、我れへ詳しく物語り、さては我れこそ隼人の忰。

庄兵　身が現在の兄者人、然るに隼人の預かりある、泰山府君の尊像紛失、それを詮議の其ために、世上を窺ふ盗賊玉島、詮議日延べの願ひの爲、隼人どのには御切腹。

駄右　すりや實の親隼人どの、尊像ゆゑに御切腹。ホヽホイ。
五郎　寶の詮議に旦那は盗賊、家來はその名を僞つて、小萬どのと云ひ號け、中川氏と申せしは、この別莊に花咲く桐の、合點ゆかずと、入りこみし、拙者は即ち若黨五郎八。
駄右　孝の文字の刀の持ち主。すりや、玉島と變名せしは
庄兵　即ち次男の中川多膳。
駄右　すりや、其方が身共の弟。
庄兵　駄右衛門こそは實の兄。
五郎　小萬は二人の女房とも、又お二人は不義者とも、もつれもつれし兄弟夫婦。
庄兵　互ひに盗賊。
駄右　非道の世渡り。
庄兵　サ、それも尋ぬる尊像ゆゑ、正しくこの家に
駄右　隱し置いたは
庄兵　花咲く桐の
駄右　實の親御の御切腹、弟が流浪も我が爲す業。尊像得させんものなるが、後の親たる石見の遺言、

庄兵　存念晴らさす大義の企て。盗みし品を玉島が、奪ひて行かば是非もなし。未來の石見へ云ひ譯が

その云ひ譯には日の岡にて、手に入りし一卷。益なきこの品。

ト駄右衞門へ一卷を渡す。

駄右　こりや失ひし一味の一卷。與へし上はこの返報、隱せし尊像、盗んで行けサ。

庄兵　祕し置く場所は。

五郎　狂ふ時計に正しく尊像。

駄右　敏き若者。即ち爰に。

ト手裏劍を打つ。時計の前碎けて、中に尊像の厨子隱しある。五郎八駈けよつて取り、庄兵衞へ渡す。

庄兵　アラ忝や、喜ばしや。これにて身共が願ひも叶うて

五郎　めでたく本地へ。

ト有りあふ龕燈を取つて、門口より向うへ見せる。時の太鼓になり、奴四人、箱提灯を持ち、ツカ〳〵と出て來り

四人　お迎ひ。

ト扣へる。

駄右　すりや、其方は。

庄兵　今より歸參の中川多膳。

駄右　小萬が首は、せめて邊の

庄兵　御寺へ密かに、其方は殘つて

五郎　佛事の學びも

駄右　敵と敵なる兄弟も

庄兵　忠義の爲の盜賊に

五郎　命を捨てし貞女の鑑。

ト首を見せる。兩人思ひ入れ。

庄兵　ア、切なるものは

ト ほろりと思ひ入れ。氣を替へ

忠孝二字

駄右　劍の名乘り。

五郎　血筋は同じ
庄兵　二本駄右衛門
駄右　中川多膳。
庄兵　重ねて面會。
駄右　すりや、此まゝに
庄兵　歸宅いたさう。
ト早三重になり、家來、提灯にて前後を照らし、庄兵衛、尊像を持ち、足早に向うへ入る。
五郎　旦那の御歸宅ある上は、下郎は陪臣、見て見ぬ振り。一先づ爰を
ト駄右衛門へ思ひ入れ。
駄右　イヽヤ卑怯に駄右衛門が、逃げ隱れんは
ト思ひ入れ。
五郎　サ、娘心の、あれ程までに
駄右　この良薬を取り得ん爲の
ト薬と首へ思ひ入れ。淡路法印窺ひ寄つて

淡路　心づくしの小萬が追善、囘向の尺八、正しく爰に。

ト花手桶へ手をかける。

五郎　わりや最前の

淡路　訴人の證據。

ト花手桶の尺八を取つて行かうとする。五郎八、立廻り、駄右衛門、後より尺八を奪ひ取り

駄右　緣のこの竹。

淡路　あの世の門火。

ト駄右衛門は尺八を草井戸へ打込む。淡路法印は持つたる法螺貝を桐の梢へ打ちつける。仕込みし合圖の煙硝上がる。これにて辻太鼓、早めて打切る。この時、下より仁藏、內を窺ふ。上の草井戸より官八、半身出かゝり窺ふ。五郎八、淡路法印を引留める。駄右衛門、キッとなつて

駄右　すりや、法印が圍ます合圖か。

淡路　濱名浦での意趣晴らし、お尋ね者の

ト振りほどいて行かうとする。五郎八留めて

五郎　イヽヤ、盜賊駄右衛門は、下郎が召捕る。

淡路　すりやアノ、われが
五郎　おんでもない事。
　　　トちよつと立廻り。
仁藏　お頭、づきが
官八　廻つて來ました。
駄右　コリヤ。
　　　ト思ひ入れ。これにて官八、草井戸へ隱れる。仁藏、外より門の戸を閉てきる。ドンと遠寄せの頭を
　　　打つ。駄右衞門、キツとなつて
　　すりや、駄右衞門を
淡路　ムウ。
　　　ト行くを、五郎八立廻つて、兩人組み合つて、キツとなる。駄右衞門ニツタリと思ひ入れあつて
駄右　小癪な奴等が。
　　　トこの途端、一度の仕組みよろしく、早拍子木を所々にて打つ。これにならつて、ひやうし　幕
　　　幕の内、ドン〳〵のツナギ、引返し。

本舞臺、三間の間、一面の黒の板塀、忍び返し、内より樹木の茂りたる體。すべて今宮裏田圃の景色。爰に仁藏、大わらはになり、拔刀。捕り手四人取りまきゐる見得。ドン〳〵早め、ツツカケにて幕明く。

捕手　動くな。

仁藏　こりやア下郎のこの仁藏、何故あつて。

捕一　吐かすな。二本駄右衛門が手下の者に極まつた。尋常に腕

四人　廻せ。

仁藏　なんと。

捕手　そりや。

四人　捕つた。

トどん〳〵にて、立廻りあつて、仁藏、四人を追ひ散らし、一散に揚げ幕へ入る。矢張り、どん〳〵にて、正面の板塀をぶち破り、駄右衛門、着込みの形。跡より貢、當馬、黒四天、十手を持ち、窺ひ〳〵出て來り、立廻りあつて、兩人を切り伏せ、花道へかゝる。向うより丹藏、源五郎、黒四天の形、突棒、刺又にて駄右衛門を押し、舞臺へくる。下座より軍藏、同じ形にて出て來り、とり圍む。これよ

り駄右衛門、烈しき立廻りあつて、三人を切り伏せる。ドン〳〵になり、仁藏、手を負ひ、大わらはになつて出て來り

仁藏　お頭〳〵、駄右衛門どの。

駄右　そちや仁藏か。手を負つたな。

仁藏　あなたの指圖に南朝の、若君の御事氣遣はしく、吉野へ迎ひと思ひの外

三人　駄右衛門、捕つた。

トかゝるを、駄右衛門立廻りあつて引附け

駄右　君の大事か。なんと〳〵。

仁藏　されば、當所の出口々々は、組み子の大勢。殊に濱名の太守と見え、吉野の若君、虜の樣子。

駄右　ヤヽ、なんと。

三人　捕つた。

ト又かゝる。駄右衛門投げる。仁藏、下にてこれを引附ける。

駄右　すりや、若君を虜とや。さある時には實の親、隼人どのゝ主君とて、容赦いたせば後の主君へ、不忠の武士。

仁藏　直ぐに此まゝ

駄右　君の御先途。

三人　ところを。

ト立廻り、行かうとする仁藏に組みつく。この時、筒音して、煙硝立つ。仁藏、軍藏、鐵砲にあたり苦しんで倒れる。駄右衞門見て

駄右　飛び道具とは卑怯な奴め。

ト向う揚げ幕にて

左門　ヤア〳〵、石見太郎景純へ、濱名俊次、見參、見參。

駄右　ヤヽ、なんと。

トどん〳〵、ツッカケになり、左門之頭、烏帽子素袍、着込みの形、鐵砲を脇ばさみ、金の采を持ち、跡より軍兵六人、弓張提灯を持ち、この中の一人、鎧櫃を脊負ひ出て來り皆々「ドッコイ」ととまる

左門　珍らしや左門之頭どの。この駄右衞門を召捕らんと、わざ〳〵太守の向はれしな。

左門　强盜の張本、二本駄右衞門こそ、誠は播州白旗の城主、赤松の一族、石見太郎景純、主君の家名を興さんと、南朝の若君を、吉野に隱し置きしとの訴人。某ひそかに守り奉り、守護なした

れば氣遣ひなし、安堵せよ、太郎景純。

駄右　こは有り難き御恵み、申さば中川隼人こそ、實の親ぞと聞くからは、拙者が爲にも御主人同然。尊像暫らく隱し置く、科は遁れぬこの駄右衛門、イザ〳〵刑に行はれよ。

左門　イヽヤ、忠義の其方を、刑罪いたす要やあらん。泰山府君の尊像も、中川多膳が働らきにて、守り奉る上からは、忠臣無二の石見太郎。この上若君守り立てゝ、亡びし主君赤松の、旗揚げなすが武士の本意。さは思はずや、石見景純。

駄右　仰せにや及ぶべき。望み達せず其まゝに、落命なすとも後の親。石見が最期の詞を立て、足利どのへ景純が、鏑矢一筋射かけもせず、空しく果てんや、この上も、利あらず討死なすとても、武將に刃向ひ奉らん。

左門　天晴れ忠臣、勇ましゝ。いま一戰に及ぶなら、物の具なうては叶ふまじ。着古したれとも予が物好き、鎧一領贈りたし。されども敵の物の具は、よもや受けまじ。

駄右　イヽヤ、太守の詞なれども、實の親たる隼人どの、大恩蒙むる主君の賜物、なに違背仕らん。

左門　その心底にてあるなれば、持參いたせし、物の具これへ。

軍兵　ハツ。

ト鎧櫃を駄右衛門の前に直す。

駄右　すりや、この中こそ御着長、慥かに落手。

ト蓋を取る。中より若君、着流し、刺貫、にて出る。

ヤヽ、若君にて渡らせ給ふか。

若君　珍らしや景純、其方が計らひにて、吉野に忍びありしかど、佞人あつて捕はれとなりしを、俊次が情にて、これまで麿を供奉せしぞや。

駄右　返す〴〵も情の程、いつの世にかは謝し申さん。さはいへ互ひに敵同士。

左門　面會とげんは戰場にて。

駄右　その時、頭は御身へ進上。

左門　ハテ、討ち討たるゝはその時の、運に任せて。

駄右　然らば君を供奉なして

左門　一先づこの場を、太郎景純

駄右　俊次公。

兩人　さらば。

駄右　まづ今日はこれぎり。

めでたく

打出し

大正十五年七月十日印刷
大正十五年七月十三日發行

『大南北全集第五巻』 非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂

